福島県文化財調査報告書第463集

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２

荻平遺跡（２次調査）

小　豆　畑　遺　跡

２００９年

福　島　県　教　育　委　員　会
財団法人 福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２

荻平（おぎだいら）遺跡（２次調査）

小豆畑（あずきばたけ）遺跡

口絵１　遺跡遠景（南東から）

口絵２　遺跡遠景（北西から）

表

裏

石帯（72図２）石質：透閃石岩

紐とじ孔の様子

くぐり孔の工具痕と研磨の様子

Ｅ５－Ｇ６　ＬＩＩａ層出土
長：3.5㎝　幅3.9㎝
厚：0.75㎝　重さ28.5ｇ

表

裏

石帯（72図１）石質：サヌカイト

紐とじ孔の様子

加工時の工具痕

Ｅ５－Ｇ９　ＬＩＩａ層出土
長：3.4㎝　幅3.6㎝
厚：0.6㎝　重さ17.8ｇ

口絵３　荻平遺跡出土の石帯

序　　文

文化財は，それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に，我が国の歴史や文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

相馬市山上から東玉野を結ぶ延長10．7kmの高規格幹線道路である阿武隈東道路は，平成19年度から国土交通省の直轄事業として建設工事が着手されました。この計画路線上にも先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，多くの遺跡の所在が確認されています。

福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所はこれら埋蔵文化財保護のための協議を重ね，現状での保存が困難なものについては記録として保存することとして，発掘調査を実施することとしました。

本報告書は，平成20年度に発掘調査を行った，相馬市山上に所在する荻平遺跡の第２次調査成果と小豆畑遺跡の調査成果をまとめたものです。

小豆畑遺跡の調査では，生産に関係したと考えられる大型の木炭焼成土坑が確認され，当遺跡が生産遺跡であったことをうかがわせます。

また，荻平遺跡の調査では，縄文時代前期に営まれた大型住居跡を含む小規模な集落跡を確認できたとともに，平安時代に生活していた人々の様々な品々が出土し，中でも石製銙帯の出土は，山間部の当遺跡の性格を考える上で極めて重要です。

今後，この報告書が，浜通り地方北部における山間部の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査の実施にあたり，御協力いただいた相馬市教育委員会，国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団を始めとする関係機関及び関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

平成21年11月

福島県教育委員会
教育長　遠　藤　俊　博

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。阿武隈東道路にかかる埋蔵文化財の調査については，平成15年度に表面調査を，平成18年度から試掘調査を実施し，平成19年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は平成20年度に発掘調査を行った相馬市山上地区に所在する荻平遺跡と小豆畑遺跡の調査成果をまとめたものです。

荻平遺跡からは，縄文時代から平安時代までの出土遺物が確認されました。なかでも西地区では縄文時代前期の大型竪穴住居跡が見つかり，小規模ながら集落が営まれていたことが確認されました。東地区では平安時代を中心に豊富な鉄製品や，灰釉陶器などの出土が認められたほか，古代官人が着用していた腰帯の石製銙帯の出土が特筆されます。石製銙帯の出土は当地域では初見であり，山間部に所在する遺跡での出土という点でも貴重であることから，当遺跡の性格を語るうえで非常に特筆されるものであります。

その他に小豆畑遺跡では，大型の木炭焼成土坑が見つかり，相馬地区の山間部地域に営まれた生産遺跡と考えられます。

今後，この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として，広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました相馬市並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年11月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成20年度に実施した阿武隈東道路関連の遺跡発掘調査報告書である。

2　本書は，福島県相馬市に所在する以下の遺跡の調査成果を収録した。

荻平遺跡　　福島県相馬市山上字荻平　　遺跡番号　20900202

小豆畑遺跡　福島県相馬市山上字小豆畑　遺跡番号　20900203

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省磐城国道事務所の委託を受けて実施し，調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査グループ（現遺跡調査課）の下記の職員を配置して調査にあたった。

副　主　幹　高橋　信一（平成20年５月まで）

副　主　幹　吉田　　功（平成20年６月から）

専門文化財主査　香川　愼一　　文化財主査　宮田　安志

文化財主査　福田　秀生　　文化財副主査　稲村　圭一

嘱　　託　管野　和博　　嘱　　託　大野　淳史

嘱　　託　小向　　良（平成20年６月から現職）

なお，臨時的に次の職員を配置して対応した。

文化財主査　青山　博樹　　嘱　　託　関根　昌毅

6　本書の執筆にあたっては，平成20年度に調査を担当した調査員が分担して行い，文責は章・節末または文末に明記した。

第３編 第１節の執筆にあたっては，文化財主事　小林　啓が担当した。

7　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院発行の５万分の１地形図を複製し使用したものである。

8　本書に掲載した空中写真撮影は株式会社日本特殊撮影と株式会社シン技術コンサルが行った。

9　本書掲載の自然科学分析は次の諸機関に依頼し，放射性炭素年代測定と製鉄遺物の分析の結果については第３編に掲載した。また，石質鑑定の結果を参考にし，実測図脇に示した。

放射性炭素年代（AMS測定）	株式会社 加速器分析研究所
製鉄遺物の化学分析	株式会社 ＪＦＥテクノリサーチ
石質鑑定	株式会社 古環境研究所

10　本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

11　発掘調査および報告書作成にあたり，次の諸氏・諸機関から御助言・御協力をいただいた。
斎藤　博　　佐藤一郎　　相馬市教育委員会　　東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター
福島県立博物館　　（順不同・敬称略）

用　　例

1　本書における遺構図の用例は，以下のとおりである。

（1）方　　位　　遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。
方位記号のないものは，本書の天を北とする。

（2）傾斜表示　　遺構内の傾斜面はａ，緩斜面はｂで表現した。人為的な削平・撹乱範囲などの傾斜面はｃで示している。

（3）土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ，遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。

（4）標　　高　　海抜標高を示す。

（5）縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

（6）網　　点　　遺構図で使用した網点については，挿図中に示した。

（7）破　　線　　遺構平面図では，短破線「---」は推定線・抉り込み線を表している。それ以外の破線は，各層図中に用例を示した。

（8）そ　の　他　　重複する遺構の新旧関係については，原則的に挿図の主となる遺構よりも所属時期の新しい遺構の上端のみを表現した。ただし，重複関係が複雑な場合はこの限りではなく，適宜両者を表現して文章中で説明する。また撹乱やトレンチは挿図中に「カクラン」「トレンチ」と片仮名表記し，上端線のみで表現している。

2　本書における遺物実測図の用例は，以下のとおりである。

（1）縮　　尺　　縮小率は遺物の大きさと性格により適宜決定し，スケールの右に示した。

（2）土器断面　　縄文土器・土師器は断面を白ヌキで表示し，須恵器は断面を黒く塗りつぶした。特に縄文土器の胎土中に繊維混和痕が確認できたものは，土器断面図中に▲で表した。粘土紐の積み上げ痕は一点鎖線で表記した。

（3）網　　点　　遺物実測図で使用した網点については，各挿図中に用例を示した。

（4）遺物番号　　挿図ごとに通し番号を付した。遺物番号の次のアルファベット・数字は出土位置・層位を示した。

（5）法　　量　　遺物の法量については，挿図番号の下位に付記した。また，推定値は（　），残存値は［　］内に示した。

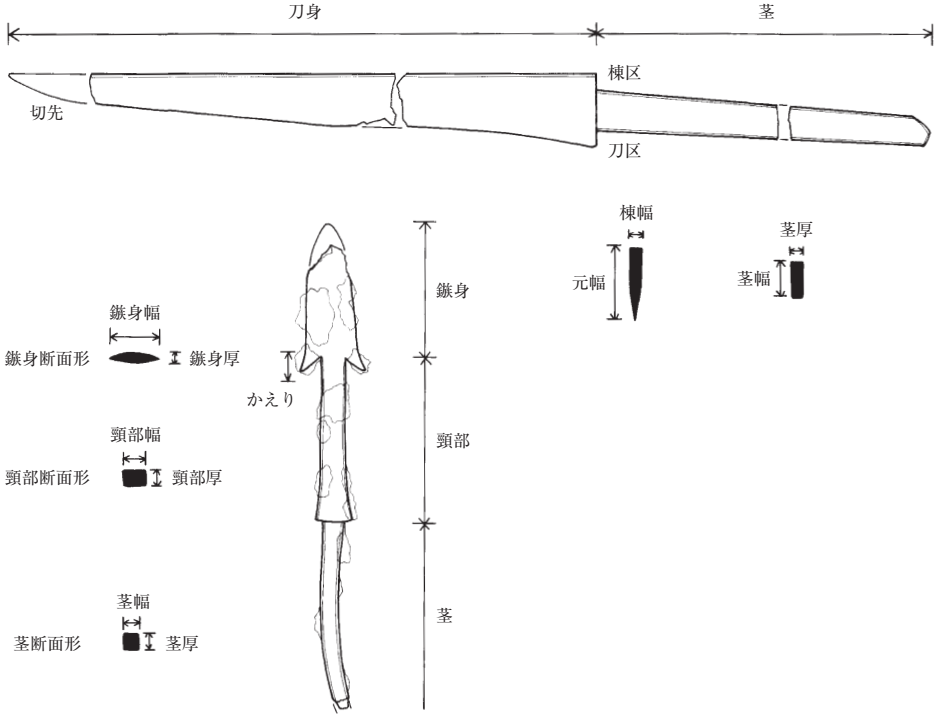
３　本書における写真図版中の番号は，挿図番号と対照できるように，遺物写真図版中に「図」を略して記した。　　（例）図１－１　→　１－１

４　本書で使用した略号は，次のとおりである。

相 馬 市…ＳＭ	荻平遺跡…ＯＧＤ	小豆畑遺跡…ＡＺＢ	遺構外堆積土…Ｌ
遺構内堆積土…ℓ	グリッド…Ｇ	トレンチ…Ｔ	竪穴住居跡…ＳＩ
掘立柱建物跡…ＳＢ	土　　坑…ＳＫ	焼土遺構…ＳＧ	小穴・ピット…Ｐ

５　参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し，各章末にまとめて収めた。

鉄製品の部位名称



目　　次

序　　章

第１節　事業の概要…… 1

第２節　調査に至る経緯…… 1

第３節　遺跡周辺の環境…… 2

地理的環境（２）　歴史的環境（４）

第１編　荻 平 遺 跡（２次調査）

第１章　調 査 経 過 …… 11

第１節　遺跡の位置と地形…… 11

第２節　調 査 経 過…… 11

第３節　調査の方法…… 13

第２章　東地区の遺構と遺物…… 18

第１節　遺構の分布と基本土層…… 18

第２節　竪穴住居跡…… 24

17号住居跡（24）　18号住居跡（26）　19号住居跡（31）　20号住居跡（33）
26号住居跡（36）　31号住居跡（38）　32号住居跡（40）　33号住居跡（43）
34号住居跡（45）　35号住居跡（47）　36号住居跡（48）　37号住居跡（50）
38号住居跡（53）　39号住居跡（55）　41号住居跡（57）　42号住居跡（59）
47号住居跡（62）　48号住居跡（66）　50号住居跡（68）　51号住居跡（70）
52号住居跡（71）　53号住居跡（73）　54号住居跡（78）

第３節　掘立柱建物跡…… 81

１号建物跡（81）

第４節　土　　坑…… 83

27号土坑（83）　28号土坑（84）　29号土坑（84）　30号土坑（84）　31号土坑（85）　32号土坑（85）
33号土坑（85）　34号土坑（86）　35号土坑（86）　36号土坑（87）　37号土坑（87）　38号土坑（87）
39号土坑（88）　40号土坑（88）　41号土坑（89）　42号土坑（89）　43号土坑（90）　44号土坑（90）
45号土坑（91）　46号土坑（91）　47号土坑（92）　48号土坑（92）　49号土坑（92）　50号土坑（93）
52号土坑（93）　55号土坑（94）　57号土坑（99）　58号土坑（100）　59号土坑（100）　62号土坑（102）
63号土坑（102）　64号土坑（102）　65号土坑（104）　66号土坑（105）　66号土坑（105）　66号土坑（105）

第５節　その他の遺構 …… 105
11号焼土遺構（105）　12号焼土遺構（107）　13号焼土遺構（107）　14号焼土遺構（113）
15号焼土遺構（113）　16号焼土遺構（113）　ピット（114）
第６節　遺構外出土遺物 …… 114

第３章　西地区の遺構と遺物 …… 141
第１節　遺構の分布と基本土層 …… 141
第２節　竪穴住居跡 …… 145
12号住居跡（145）　13号住居跡（147）　14号住居跡（149）　15号住居跡（152）
16号住居跡（154）　21号住居跡（164）　22号住居跡（166）　23号住居跡（168）
24号住居跡（170）　25号住居跡（172）　27号住居跡（174）　28号住居跡（176）
29号住居跡（177）　30号住居跡（179）　43号住居跡（181）　44号住居跡（182）
45号住居跡（183）　46号住居跡（184）
第３節　土　　坑 …… 186
13号土坑（186）　14号土坑（186）　15号土坑（187）　16号土坑（187）　17号土坑（188）
18号土坑（188）　19号土坑（189）　20号土坑（189）　21号土坑（190）　22号土坑（190）
23号土坑（191）　24号土坑（191）　25号土坑（191）　26号土坑（192）　51号土坑（192）
53号土坑（193）　54号土坑（193）　56号土坑（194）　60号土坑（194）　61号土坑（194）
第４節　焼土遺構 …… 201
１号焼土遺構～10号焼土遺構（201・202）
第５節　遺構外出土遺物 …… 203

第４章　総　　括 …… 223
第１節　東地区の総括 …… 223
１　縄文時代・弥生時代について …… 223
２　平安時代について …… 228
３　荻平遺跡の平安時代集落について …… 238
第２節　西地区の総括 …… 245
１　縄文時代の遺構について …… 245
２　縄文時代の遺物について …… 248

第２編　小 豆 畑 遺 跡

第１章　調 査 経 過 …… 353
第１節　遺跡の位置と地形 …… 353
第２節　調 査 経 過 …… 353
第３節　調査の方法 …… 355

第２章　遺構と遺物 …… 357
第１節　遺構の分布と基本土層 …… 357
第２節　土　　坑 …… 358
１号土坑（358）　２号土坑（360）
第３節　溝　　跡 …… 361
１号溝跡（362）
第４節　遺構外出土遺物 …… 362

第３章　総　　括 …… 363

第３編　自然科学分析

第１節　荻平遺跡出土赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線分析 …… 371
第２節　小豆畑遺跡・荻平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）…… 377
第３節　荻平遺跡鉄製品及び製鉄遺物化学分析調査 …… 385

挿図・表・写真目次

序　　章

〔挿　図〕

図１　阿武隈東道路位置図 ……（１）
図２　遺跡周辺の表層地質図 ……（３）
図３　荻平遺跡・小豆畑遺跡と周辺の遺跡 ……（６）

〔　表　〕

表１　周辺遺跡一覧 ……（７）

第１編　荻　平　遺　跡（第２次調査）

〔挿　図〕

図４　調査範囲とグリッド配置図 ……(13)
図５　遺構配置図（東地区全体図）……(19)
図６　遺構配置図（東地区中央）……(20)
図７　遺構配置図（東地区西側）……(21)
図８　基本土層図 ……(22)
図９　17号住居跡・出土遺物 ……(25)
図10　18号住居跡 ……(27)
図11　18号住居跡，カマド ……(28)
図12　18号住居跡出土遺物 ……(30)
図13　19号住居跡 ……(32)
図14　19号住居跡出土遺物 ……(33)
図15　20号住居跡 ……(34)
図16　20号住居跡出土遺物 ……(35)
図17　26号住居跡・出土遺物 ……(37)
図18　31号住居跡・出土遺物 ……(39)
図19　32号住居跡・出土遺物 ……(41)
図20　33号住居跡・出土遺物 ……(44)
図21　34号住居跡 ……(46)
図22　35号住居跡・出土遺物 ……(47)
図23　36号住居跡・出土遺物 ……(49)
図24　37号住居跡・出土遺物 ……(51)
図25　38号住居跡・出土遺物 ……(53)
図26　39号住居跡・出土遺物 ……(56)
図27　41号住居跡・出土遺物 ……(58)
図28　42号住居跡，炉跡 ……(60)
図29　42号住居跡出土遺物 ……(61)
図30　47号住居跡，炉跡・出土遺物（１）……(63)
図31　47号住居跡出土遺物（２）……(64)
図32　48号住居跡・出土遺物 ……(67)
図33　50号住居跡・出土遺物 ……(69)
図34　51号住居跡 ……(70)
図35　52号住居跡・出土遺物 ……(72)
図36　53号住居跡 ……(74)
図37　53号住居跡，炉跡 ……(75)
図38　53号住居跡出土遺物（１）……(76)
図39　53号住居跡出土遺物（２）……(77)
図40　54号住居跡 ……(79)
図41　54号住居跡，カマド・出土遺物 ……(80)
図42　１号建物跡 ……(82)
図43　27～32号土坑 ……(95)
図44　33～38号土坑 ……(96)
図45　39～44号土坑 ……(97)
図46　45～50号土坑 ……(98)
図47　52・55・57・58号土坑 ……(99)
図48　59号土坑・出土遺物 ……(101)
図49　62～66号土坑 ……(103)
図50　土坑出土遺物 ……(104)
図51　11・12・14～16号焼土遺構 ……(106)
図52　13号焼土遺構 ……(108)

図53　13号焼土遺構掘形,
遺物出土位置図 …… (109)
図54　13号焼土遺構出土遺物（１）…… (110)
図55　13号焼土遺構出土遺物（２）…… (111)
図56　遺構外出土遺物（１）…… (116)
図57　遺構外出土遺物（２）…… (117)
図58　遺構外出土遺物（３）…… (119)
図59　遺構外出土遺物（４）…… (120)
図60　遺構外出土遺物（５）…… (123)
図61　遺構外出土遺物（６）…… (124)
図62　遺構外出土遺物（７）…… (125)
図63　遺構外出土遺物（８）…… (126)
図64　遺構外出土遺物（９）…… (127)
図65　遺構外出土遺物（10）…… (128)
図66　遺構外出土遺物（11）…… (130)
図67　遺構外出土遺物（12）…… (132)
図68　遺構外出土遺物（13）…… (133)
図69　遺構外出土遺物（14）…… (134)
図70　遺構外出土遺物（15）…… (135)
図71　遺構外出土遺物（16）…… (137)
図72　遺構外出土遺物（17）…… (139)
図73　グリッド配置図・基本土層図 …… (142)
図74　遺構配置図（１）…… (143)
図75　遺構配置図（２）…… (144)
図76　12号住居跡 …… (145)
図77　12号住居跡出土遺物 …… (147)
図78　13号住居跡・出土遺物 …… (148)
図79　14号住居跡 …… (150)
図80　14号住居跡出土遺物 …… (151)
図81　15号住居跡・出土遺物 …… (153)
図82　16号住居跡（１）…… (155)
図83　16号住居跡（２）…… (156)
図84　16号住居跡出土遺物（１）…… (158)
図85　16号住居跡出土遺物（２）…… (159)
図86　16号住居跡出土遺物（３）…… (160)
図87　16号住居跡出土遺物（４）…… (161)
図88　16号住居跡出土遺物（５）…… (162)
図89　16号住居跡出土遺物（６）…… (163)
図90　16号住居跡出土遺物（７）…… (164)
図91　21号住居跡 …… (165)
図92　21号住居跡出土遺物 …… (166)
図93　22号住居跡・出土遺物 …… (167)
図94　23号住居跡 …… (168)
図95　23号住居跡出土遺物 …… (169)
図96　24号住居跡・出土遺物 …… (171)
図97　25号住居跡 …… (172)
図98　25号住居跡出土遺物 …… (173)
図99　27号住居跡 …… (174)
図100　27号住居跡出土遺物 …… (175)
図101　28号住居跡・出土遺物 …… (176)
図102　29号住居跡・出土遺物 …… (178)
図103　30号住居跡 …… (179)
図104　30号住居跡出土遺物 …… (180)
図105　43号住居跡 …… (181)
図106　44号住居跡・出土遺物 …… (182)
図107　45号住居跡 …… (184)
図108　46号住居跡 …… (185)
図109　13～17号土坑 …… (195)
図110　18～21・23号土 …… (196)
図111　22・24～26号土坑 …… (197)
図112　51・53・54・56・60・61号土坑 …… (198)
図113　土坑出土遺物（１）…… (199)
図114　土坑出土遺物（２）…… (200)
図115　1～10号焼土遺構 …… (202)
図116　西地区縄文土器出土状況（ＬⅡ）
…… (203)
図117　西地区縄文土器出土状況（ＬⅢ）
…… (204)
図118　遺構外出土遺物（１）…… (206)
図119　遺構外出土遺物（２）…… (207)
図120　遺構外出土遺物（３）…… (208)
図121　遺構外出土遺物（４）…… (209)
図122　遺構外出土遺物（５）…… (210)
図123　遺構外出土遺物（６）…… (211)
図124　遺構外出土遺物（７）…… (212)
図125　遺構外出土遺物（８）…… (214)

図126　遺構外出土遺物（９）……（215）
図127　遺構外出土遺物（10）……（216）
図128　遺構外出土遺物（11）……（217）
図129　遺構外出土遺物（12）……（218）
図130　遺構外出土遺物（13）……（220）
図131　遺構外出土遺物（14）……（221）
図132　遺構外出土遺物（15）……（222）
図133　荻平遺跡出土の縄文時代晩期後葉～
　　弥生時代の土器 ……（224）
図134－1　福島県出土の鈴帯具集成（１）
　　……（240）
図134－2　福島県出土の鈴帯具集成（２）
　　……（241）
図135　竪穴住居跡分類図 ……（245）
図136　福島県の大型住居跡 ……（247）

〔　表　〕

表２　住居跡一覧 ……（15）
表３　土坑一覧（１）……（16）
表４　土坑一覧（２）……（17）
表５　焼土遺構一覧 ……　17）
表６　１号建物跡柱穴計測表 ……（81）
表７　東地区ピット計測表 ……（114）
表８　東地区出土遺物点数表 ……（114）
表９　東地区グリッド別出土遺物点数表‥（115）
表10　焼土遺構観察表 ……（201）
表11　福島県内の縄文時代晩期後葉
　　竪穴住居跡一覧 ……（227）
表12　荻平遺跡出土
　　平安時代土器頻度表 ……（231）
表13　相馬地域における平安時代
　　土器の法量（１）……（233）
表14　相馬地域における平安時代
　　土器の法量（２）……（234）
表15　相馬地域の平安時代土器変遷 ‥‥（235）
表16　福島県内の鈴帯具出土遺跡一覧‥（241）
表17－1　西地区竪穴住居跡観察表 ‥‥‥（246）
表17－2　西地区竪穴住居跡観察表 ‥‥‥（247）

〔写　真〕

１－１　調査区全景（１）……（257）
１－２　東地区全景（１）……（257）
１－３　東地区全景（２）……（258）
１－４　東地区基本土層 ……（258）
１－５　17号住居跡 ……（259）
１－６　17号住居跡細部 ……（259）
１－７　18号住居跡 ……（260）
１－８　18号住居跡細部 ……（260）
１－９　19号住居跡 ……（261）
１－10　19号住居跡細部 ……（261）
１－11　20号住居跡 ……（262）
１－12　20号住居跡細部 ……（262）
１－13　26号住居跡 ……（263）
１－14　26号住居跡細部 ……（263）
１－15　31号住居跡 ……（264）
１－16　31号住居跡細部 ……（264）
１－17　32号住居跡 ……（265）
１－18　32号住居跡細部 ……（265）
１－19　33号住居跡 ……（266）
１－20　33号住居跡細部 ……（266）
１－21　34号住居跡 ……（267）
１－22　34号住居跡細部 ……（267）
１－23　35号住居跡 ……（268）
１－24　35号住居跡細部 ……（268）
１－25　36号住居跡 ……（269）
１－26　36号住居跡細部 ……（269）
１－27　37号住居跡 ……（270）
１－28　37号住居跡細部 ……（270）
１－29　38号住居跡 ……（271）
１－30　38号住居跡細部 ……（271）
１－31　39号住居跡 ……（272）
１－32　39号住居跡細部 ……（272）

1－33　41号住居跡 ……（273）
1－34　41号住居跡細部 ……（273）
1－35　42号住居跡 ……（274）
1－36　42号住居跡細部 ……（274）
1－37　47号住居跡 ……（275）
1－38　47号住居跡細部 ……（275）
1－39　48号住居跡 ……（276）
1－40　48号住居跡細部 ……（276）
1－41　50号住居跡 ……（277）
1－42　50号住居跡細部 ……（277）
1－43　51号住居跡 ……（278）
1－44　51号住居跡細部 ……（278）
1－45　52号住居跡 ……（279）
1－46　52号住居跡細部 ……（279）
1－47　53号住居跡 ……（280）
1－48　53号住居跡細部 ……（280）
1－49　54号住居跡 ……（281）
1－50　54号住居跡細部 ……（281）
1－51　１号建物跡 ……（282）
1－52　27～30号土坑 ……（282）
1－53　31～33・35～39号土坑 ……（283）
1－54　40～46号土坑 ……（284）
1－55　47～50・52・55号土坑 ……（285）
1－56　58・59・62～66号土坑 ……（286）
1－57　13号焼土遺構 ……（287）
1－58　13号焼土遺構細部 ……（287）
1－59　17号住居跡
　・18号住居跡出土遺物（１）…（288）
1－60　18号住居跡出土遺物（２）……（288）
1－61　19・20号住居跡出土遺物 ……（289）
1－62　26・31号住居跡出土遺物 ……（289）
1－63　32・33号住居跡出土遺物 ……（290）
1－64　35・36号住居跡出土遺物 ……（290）
1－65　37・39号住居跡,
　42号住居跡出土遺物（１）……（291）
1－66　42号住居跡出土遺物（２）……（291）
1－67　47号住居跡出土遺物 ……（292）
1－68　48・50・52号住居跡出土遺物‥（292）
1－69　53号住居跡出土遺物 ……（293）
1－70　54号住居跡・59号土坑出土遺物
　……（293）
1－71　土坑出土遺物 ……（294）
1－72　13号焼土遺構出土遺物（１）‥（294）
1－73　13号焼土遺構出土遺物（２）‥（295）
1－74　遺構外出土遺物（１）……（295）
1－75　遺構外出土遺物（２）……（296）
1－76　遺構外出土遺物（３）……（296）
1－77　遺構外出土遺物（４）……（297）
1－78　遺構外出土遺物（５）……（297）
1－79　遺構外出土遺物（６）……（298）
1－80　遺構外出土遺物（７）……（298）
1－81　遺構外出土遺物（８）……（299）
1－82　遺構外出土遺物（９）……（299）
1－83　遺構外出土遺物（10）……（300）
1－84　遺構外出土遺物（11）……（301）
1－85　遺構外出土遺物（12）……（301）
1－86　調査区全景（１）……（302）
1－87　西地区全景 ……（302）
1－88　西地区遺構集中地点 ……（303）
1－89　西地区基本土層 ……（303）
1－90　12号住居跡 ……（304）
1－91　12号住居跡細部 ……（304）
1－92　13号住居跡 ……（305）
1－93　13号住居跡細部 ……（305）
1－94　14号住居跡 ……（306）
1－95　14号住居跡細部 ……（306）
1－96　15号住居跡 ……（307）
1－97　15号住居跡細部 ……（307）
1－98　16号住居跡 ……（308）
1－99　16号住居跡細部（１）……（308）
1－100　16号住居跡細部（２）……（309）
1－101　16号住居跡細部（３）……（309）
1－102　21号住居跡 ……（310）
1－103　22号住居跡 ……（310）
1－104　23号住居跡 ……（311）
1－105　23号住居跡細部 ……（311）

1－106　24号住居跡 ……（312）
1－107　25号住居跡 ……（312）
1－108　27号住居跡 ……（313）
1－109　27号住居跡細部 ……（313）
1－110　28・45号住居跡全景 ……（314）
1－111　29号住居跡 ……（314）
1－112　30号住居跡 ……（315）
1－113　30号住居跡細部 ……（315）
1－114　44号住居跡 ……（316）
1－115　46号住居跡 ……（316）
1－116　13～15・17号土坑 ……（317）
1－117　16・18～20号土坑 ……（317）
1－118　21～24号土坑 ……（318）
1－119　25・26・51・53号土坑 ……（318）
1－120　54・56・60・61号土坑 ……（319）
1－121　１～４号焼土遺構 ……（319）
1－122　５～７号焼土遺構 ……（320）
1－123　８～10号焼土遺構 ……（320）
1－124　12号住居跡出土遺物 ……（321）
1－125　12・13号住居跡出土遺物 ……（321）
1－126　14号住居跡出土遺物（１）……（322）
1－127　14号住居跡出土遺物（２）……（322）
1－128　15号住居跡出土遺物 ……（323）
1－129　16号住居跡出土遺物（１）……（323）
1－130　16号住居跡出土遺物（２）……（323）
1－131　16号住居跡出土遺物（３）……（324）
1－132　16号住居跡出土遺物（４）……（325）
1－133　16号住居跡出土遺物（５）……（326）
1－134　16号住居跡出土遺物（６）……（326）
1－135　16号住居跡出土遺物（７）……（327）
1－136　16号住居跡出土遺物（８）……（327）
1－137　16号住居跡出土遺物（９）……（328）
1－138　16号住居跡出土遺物（10）……（328）
1－139　16号住居跡出土遺物（11）……（329）
1－140　21号住居跡出土遺物 ……（329）
1－141　22～24・
28号住居跡出土遺物 ……（330）
1－142　23号住居跡出土遺物 ……（330）
1－143　25号住居跡出土遺物 ……（331）
1－144　27号住居跡出土土器 ……（331）
1－145　23・27号住居跡出土石器 ……（331）
1－146　29・30・44号住居跡出土遺物 ……（332）
1－147　30号住居跡出土石器 ……（332）
1－148　土坑出土遺物（１）……（332）
1－149　土坑出土遺物（２）……（333）
1－150　土坑出土遺物（３）……（333）
1－151　土坑出土遺物（４）……（334）
1－152　土坑出土遺物（５）……（334）
1－153　土坑出土遺物（６）……（335）
1－154　遺構外出土遺物（１）……（335）
1－155　遺構外出土遺物（２）……（336）
1－156　遺構外出土遺物（３）……（336）
1－157　遺構外出土遺物（４）……（337）
1－158　遺構外出土遺物（５）……（337）
1－159　遺構外出土遺物（６）……（338）
1－160　遺構外出土遺物（７）……（338）
1－161　遺構外出土遺物（８）……（339）
1－162　遺構外出土遺物（９）……（339）
1－163　遺構外出土遺物（10）……（340）
1－164　遺構外出土遺物（11）……（340）
1－165　遺構外出土遺物（12）……（341）
1－166　遺構外出土遺物（13）……（337）
1－167　遺構外出土遺物（14）……（338）
1－168　遺構外出土遺物（15）……（338）
1－169　遺構外出土遺物（16）……（339）
1－170　遺構外出土遺物（17）……（339）
1－171　遺構外出土遺物（18）……（340）
1－172　遺構外出土遺物（19）……（340）
1－173　遺構外出土遺物（20）……（341）
1－174　遺構外出土遺物（21）……（341）
1－175　遺構外出土遺物（22）……（342）

１－176　遺構外出土遺物（23）……（342）
１－177　遺構外出土遺物（24）……（343）
１－178　遺構外出土遺物（25）……（343）
１－179　遺構外出土遺物（26）……（344）
１－180　遺構外出土遺物（27）……（345）

第２編　小 豆 畑 遺 跡

〔挿　図〕

図137　小豆畑遺跡調査区位置図……（354）
図138　遺構配置図・基本土層……（356）
図139　１号土坑……（359）
図140　２号土坑……（360）
図141　１号溝跡……（361）
図142　遺構外出土遺物……（362）

〔　表　〕

表18　グリッド別出土遺物点数表……（362）

〔写　真〕

２－１　調査区全景……（367）
２－２　調査細部……（367）
２－３　１・２号土坑……（368）
２－４　１号溝跡，作業風景……（368）

第３編　自 然 科 学 分 析

第１節　荻平遺跡出土赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線分析……（371）

〔挿　図〕

図１　赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線スペクトル①……（372）
図２　赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線スペクトル②……（373）
図３　弥生期の赤彩土器出土遺跡……（374）
図４　岩下Ａ遺跡出土赤彩土器……（375）
図５　柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群出土赤彩土器……（375）
図６　鱸沼遺跡赤彩土器……（376）

〔　表　〕

表１　赤彩土器出土遺跡（福島・宮城・山形）……（374）

第２節　小豆畑遺跡・荻平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）……（377）

〔挿　図〕

図１　暦年較正結果（１）……（382）
図２　暦年較正結果（２）……（383）
図３　暦年較正結果（３）……（384）

〔　表　〕

表１　測定試料及び処理，結果……（380）
表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果（１）……（381）
表３　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果（２）……（382）

第３節　荻平遺跡鉄製品及び製鉄遺物化学分析調査 …… (385)
〔挿　図〕
図１　鉄－炭素系平衡状態図 …… (397)
図２　FeOn-Fe_2O_3-SiO_2系鉄滓の平衡状態図 …… (401)
図３　FeOn-SiO_2-TiO_2系鉄滓の平衡状態図 …… (401)
図４　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図 …… (402)
図５　製錬滓と鍛冶滓の分類 …… (402)
図６　鍛錬鍛冶滓と精錬鍛冶滓の分類 …… (403)
図７　鉄滓におけるMnO/T.FeとTiO_2/T.Feの関係 …… (403)
図８　鉄滓におけるV/T.FeとTiO_2/T.Feの関係 …… (403)
図９　ポイント分析チャート図① …… (408)
図10　ポイント分析チャート図② …… (409)
図11　ポイント分析チャート図③ …… (410)
図12　Ｘ線回析チャート図① …… (410)
図13　Ｘ線回析チャート図② …… (411)
図14　Ｘ線回析チャート図③ …… (412)
図15　Ｘ線回析チャート図④ …… (413)
〔写　真〕
１　外観写真１ …… (404)
２　外観写真２ …… (405)
３　外観写真３ …… (406)
４　外観写真４ …… (407)
５　外観写真５ …… (408)
〔　表　〕
表１　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況 …… (397)
表２　ゼーゲルコーン溶倒温度比較表 …… (398)
表３　調査試料と調査項目 …… (398)
表４　鉄滓の化学成分分析結果 …… (399)
表５　鉄滓の化学成分分析結果（つづき） …… (399)
表６　鉄製品の化学成分分析結果 …… (399)
表７　羽口の化学成分分析結果 …… (399)
表８　羽口の化学成分分析結果（つづき） …… (400)
表９　耐火度試験結果 …… (400)
表10　Ｘ線回析結果 …… (400)

序　　章

第１節　事業の概要

阿武隈東道路は，広域交流の促進を図るとともに，一般国道115号の交通隘路区間の解消，緊急災害時の輸送路の確保を目的とした高規格道路(自動車専用道路)である。その路線は，福島県相馬市山上地区を基点とし，途中宮城県伊具郡丸森町を通過し，相馬市東玉野地区を結ぶ総延長10.7kmの２車線道路として計画されている。

阿武隈東道路は，福島県と山形県を結ぶ東北中央道建設に関連して，福島県内の高規格道路整備事業のひとつに位置づけられている。将来的には，福島県伊達市に建設が計画されている霊山道路とともに，東北自動車道福島ＪＣと常磐自動車道相馬ＩＣを結ぶ道路となる計画である。

第２節　調査に至る経緯

阿武隈東道路建設予定地内の埋蔵文化財については，福島県教育委員会の委託を受けた財団法人福島県文化振興事業団によって平成15年度に表面調査が実施されている。この表面調査では，計画路線の大部分が急峻な山間部を通過するトンネル区間となることから，確認できた遺跡・遺跡推定地は少なく，わずかに宇多川や玉野川に面した河岸段丘上に立地する周知の遺跡２箇所，遺跡推定地５箇所を確認した（『福島県内遺跡分布調査報告９』)。

試掘調査は平成18年度から実施された。同年10～11月に用地等の条件が整ったＳＭ－Ｂ⑤（荻

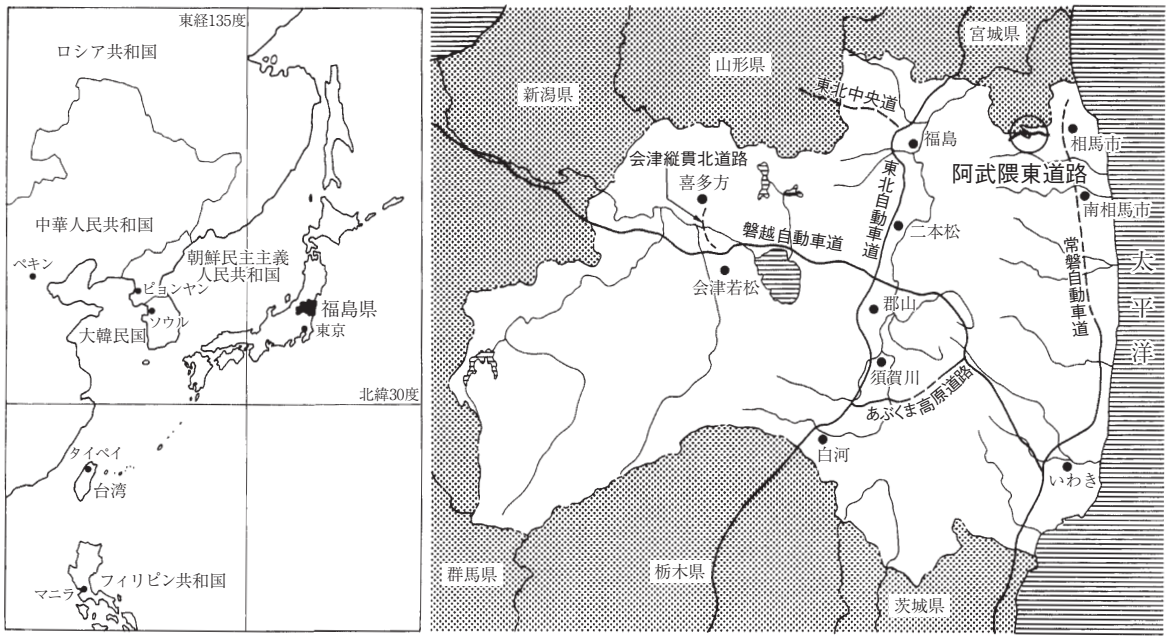


図１　阿武隈東道路位置図

平遺跡）の試掘調査（第１次調査）を実施した。調査の結果，縄文時代早期から晩期にかけての遺構・遺物が確認でき，荻平遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録した。第１次調査の保存範囲は5,000㎡である。さらに遺跡範囲が北側に広がることが確認されたことから，国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所と福島県教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団の３者で協議し，試掘対象範囲として15,000㎡を追加し，平成19年度に試掘調査を実施することが決められた（『福島県内遺跡分布調査報告13』）。

平成19年度は，前年度に引き続き荻平遺跡の試掘調査及び発掘調査が実施されることとなった。また用地等の条件が整った小田原地区のＳＭ－Ｂ①の試掘調査に着手することが決められた。荻平遺跡の第２次試掘調査では，これまで確認されていた縄文時代の遺構・遺物に加えて，平安時代の竪穴住居跡を確認するなどの所見も得られた。さらに遺跡南側では，厚さ２ｍに及ぶ土砂崩落土を間層として，縄文時代早期末葉～前期初頭と縄文時代後晩期の大きく２時期の文化面を確認できた。10月に実施した第３次試掘調査では，未調査であった宅地部分の調査を実施し，荻平遺跡の試掘調査はすべて完了した。第３次までの試掘調査の結果，保存範囲は総計27,900㎡である。また，ＳＭ－Ｂ①では，大型の木炭焼成土坑と土師器等の遺物を確認した。要保存面積800㎡が確定し，小豆畑遺跡として登録した（『福島県内遺跡分布調査報告14』）。

平成19年度の発掘調査は，試掘調査の結果と工事用道路等の工事計画の優先順位から，荻平遺跡の最北端部3,300㎡の発掘調査を実施することとなった（第１次発掘調査）。調査の結果，竪穴住居跡11軒，土坑12基が確認された。竪穴住居跡は，縄文時代前期前葉から中葉，中期初頭，平安時代に属するもので，遺物は縄文土器が大半を占め，縄文時代早期中葉から晩期まで，各時期ともに少量ながら遺物が確認された（『阿武隈東道路関連遺跡発掘調査報告１』）。

平成20年度は，荻平遺跡の２次発掘調査，および小豆畑遺跡の発掘調査，山上字小田原地区に位置するＳＭ－Ｂ⑥，ＳＭ－Ｂ⑦と玉野地区に位置するＳＭ－Ｂ③の試掘調査を実施した。このうちＳＭ－Ｂ⑦は，縄文時代晩期の集落跡，および古代の製鉄関連遺構を確認した。要保存面積5,300㎡が確定し，隣接する小田原遺跡に包括することとした。また，ＳＭ－Ｂ⑦の北側に位置する丘陵地では，古代の製鉄炉を新たに確認し，小田原Ｂ遺跡として登録することとした。

ＳＭ－Ｂ③では縄文時代の落とし穴を確認したが，未調査区があるため，次年度以降の試掘調査により，保存面積を確定することにしている（『福島県内遺跡分布調査報告15』）。

なお，荻平遺跡と小豆畑遺跡の発掘調査の経過の詳細は，第１編から第２編に譲り，割愛することにする。

第３節　遺跡周辺の環境

１　地理的環境（図２）

福島県は東北地方の南端に位置する。南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた

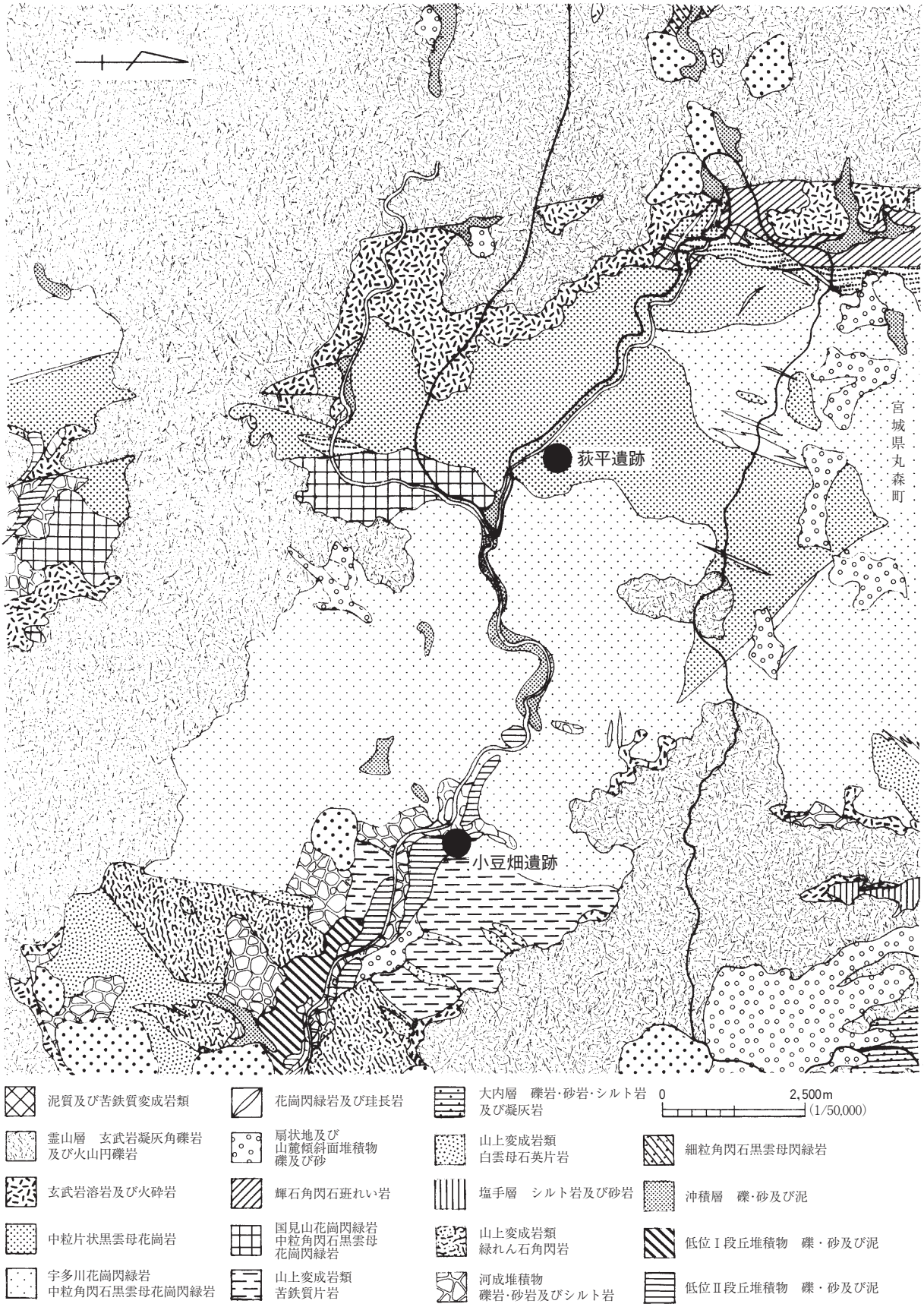


図２　遺跡周辺の表層地質図（1990『相馬中村』より作図）

浜通り地方・中通り地方・会津地方の３地域に区分される。荻平遺跡が所在する相馬市は，浜通り地方の北部に位置する。北は相馬郡新地町・宮城県伊具郡丸森町，西は伊達市霊山町，南は相馬郡飯舘村・南相馬市鹿島区に接し，東は太平洋に面している。

相馬市の地形を概観すると，市域の西部を南北に縦断する双葉断層を境に，阿武隈山地東縁部と低地帯，海岸部の大きく３つに分けられる。阿武隈山地東縁部は霊山（標高804m），古霊山（標高783m），手倉山（標高672m），彦四郎山（標高635m），天明山（標高488m）の山々が連なり，標高500m前後のなだらかな地形を形成している。低地帯は山麓丘陵部と沖積平野部に分けられる。丘陵地は，東流する宇多川・小泉川・地蔵川・日下石川などの影響で東西方向に発達し，海岸部に向い標高200～20mと標高を減じながら段丘面を形成している。これらの段丘面は，Ⅰ～Ⅴ面に相当する高位段丘から最低位段丘までが確認されている。沖積平野は丘陵間を流れる河川流域に面して河岸段丘・扇状地が形成される。海岸部は松川浦・新沼浦などの潟湖がみられる。

相馬市の地質については，双葉断層とほぼ一致して分布する割山地塁・相馬中生層群を境にして大きく東西に分かれる。西が新生代新第三紀中新統起源の丘陵，東を新第三紀鮮新統起源の丘陵地に分けられる。双葉断層以西の地質構造は，玄武岩質集塊岩・カンラン石玄武溶岩からなる天明山集塊岩（霊山層）が大部分を占め，河川流域付近に礫岩・凝灰岩を特徴とする塩手層・富沢層・山上変成岩などが分布している。双葉断層以東は，砂岩・頁岩などからなる北沢層・粟津層・山上層・栃窪層・中ノ沢層が不整合に分布する。丘陵地は第三紀鮮新世の半固結堆積物からなる久保間層・山下層で構成される。低地は海岸平野堆積物･段丘堆積物などの未固結堆積物が広く分布している。

相馬市は太平洋岸気候区に属し，「夏は涼しく冬が暖かい」浜通り地方特有の気候である。年間を通して晴天の日が多く，降水量が少ない。年間の平均気温12℃，平均降水量が1,300㎜と観測されている。一方，梅雨時期には「やませ」と呼ばれる北東風が吹き込むことがあり，日照不足・低温気候が続き農作物に影響することもある。

2　歴史的環境（図３，表１）

阿武隈東道路建設予定地となる相馬市山上地区から同市東玉野地区にかけては，相馬市の西部に位置する。そのほとんどが険しい山地で，宇多川・玉野川流域以外に平坦地は少ない。図３に示す通り，遺跡の数は極端に少ない。相馬市を含む浜通り地方の北部では，相馬地域開発に伴う発掘調査，常磐自動車道，一般国道６号バイパス，113号バイパス建設工事などの道路工事に伴う発掘調査などが実施されている。これら開発行為が相馬市中心部から海岸部にかけての地域が中心で，相馬市西部の山間部の開発行為が少なく，埋蔵文化財についても詳細な調査が実施された遺跡は極めて少ないことも，その要因の一つになっている。荻平遺跡の周辺地域で実施された発掘調査例は，松ヶ房ダム建設に伴い宮城県教育委員会が発掘調査を実施した下南山遺跡（３図６），福島県文化センター(現福島県文化振興事業団)が調査機関として，県営かんがい排水事業相馬第二地区の発掘調査が行われた小田原遺跡（３図５）がある。また平成19～20年度の阿武隈東道路に関わる試掘調

査において，新たに小豆畑遺跡（３図２）とＳＭ－Ｂ⑦（３図３）が確認されただけである。現在までのところ，相馬市西部の歴史的環境について不明な点が多い。本節では相馬郡域の遺跡を中心として，本遺跡の主体となる縄文時代から平安時代にかけての時期を中心に歴史的環境を概観する。

相馬郡域で旧石器時代を代表する遺跡として，新地町に所在する三貫地遺跡が挙げられる。ナイフ形石器など約１万点に及ぶ石器が出土している。石核と石片が接合する資料があり，石器製作の痕跡が確認された。年代は後期旧石器時代（約２万年前）と推定されている。その他に相馬市北原遺跡・段ノ原Ａ遺跡・段ノ原Ｂ遺跡が知られている。北原遺跡と段ノ原Ａ遺跡ではナイフ形石器，段ノ原Ｂ遺跡では細石刃核が出土している。本遺跡では旧石器時代の遺物は確認していない。

縄文時代の遺跡は，阿武隈山地から延びる丘陵地や段丘上に立地する遺跡が増加する。調査事例も多く，相馬開発に伴う段ノ原Ｂ遺跡・山田Ｂ遺跡・猪倉Ｂ遺跡の調査では，縄文時代早期末葉から前期前葉にかけての大集落が確認されている。その他代表的な遺跡として，大森Ａ遺跡や双子遺跡は低湿地に立地する縄文時代後期・晩期の遺跡で，丸木舟・丸木弓など木質遺物が豊富に出土している。また新地町には三貫地貝塚，新地貝塚など学史的に著名な遺跡が所在している。本遺跡の主体となる縄文時代前期前葉から中期初頭の時期では，飯舘村羽白Ｃ遺跡・上ノ台Ｂ遺跡など真野ダム建設に伴い発掘調査が実施された遺跡群，新地町山中Ｂ遺跡などの調査事例がある。本遺跡周辺の調査事例では，小田原遺跡から縄文時代早期中葉・中期末葉から後期初頭の遺物が出土している。明神遺跡では縄文時代前期後半・中期末葉～後期後葉の土器が出土している。下南山遺跡からは，縄文時代前期前葉・前期後葉から中期初頭の遺構群が検出されている。その他に縄文時代早期中葉・末葉の縄文土器，弥生土器，土師器がわずかに出土している。

弥生時代の遺物が出土した遺跡は多いが，明確な遺構を伴う調査事例は少ない。藤堂塚遺跡では弥生時代前期の再葬墓が確認されている。集落跡については，相馬市柴迫古墳群，新地町武井地区遺跡群において弥生時代中期の小規模集落跡が知られている。本遺跡周辺では下南山遺跡でわずかに弥生土器が出土し，山間部での生活痕跡が確認されている。

古墳時代の遺跡では，山中遺跡で古墳時代前期の土師器が確認されるなど，早い時期からの生活痕跡が確認されている。古墳の調査事例では，丸塚古墳から人物や馬の埴輪，円筒埴輪が出土し，高松１号墳からは人物埴輪や円筒埴輪の他に馬具・金銅製承盤付鋺・金銅製雲珠が出土している。さらに当該地区は横穴墓も多数確認されている。なかでも福迫横穴墓群では金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土している。近年，本笑和田横穴墓群の発掘調査が実施されている。墳墓の調査事例に対し，集落跡の調査事例は知られていない。大森Ａ遺跡では該期の水田跡が確認され，木製農具などが出土している。水田跡の発見により，水路の開削や用水の管理などある程度の人員を要する作業が伴うことは想像に難くない。古墳の分布状況と併せても，大規模な集落跡の存在が想定される。本遺跡周辺を含む相馬市西部では，古墳時代の遺構・遺物は確認されていない。

奈良・平安時代の代表的な遺跡として，古代宇多郡の郡家または寺院に比定される黒木田遺跡が挙げられる。生産遺跡では，黒木田遺跡から出土した瓦の供給源となった善光寺窯跡や山崎窯跡な

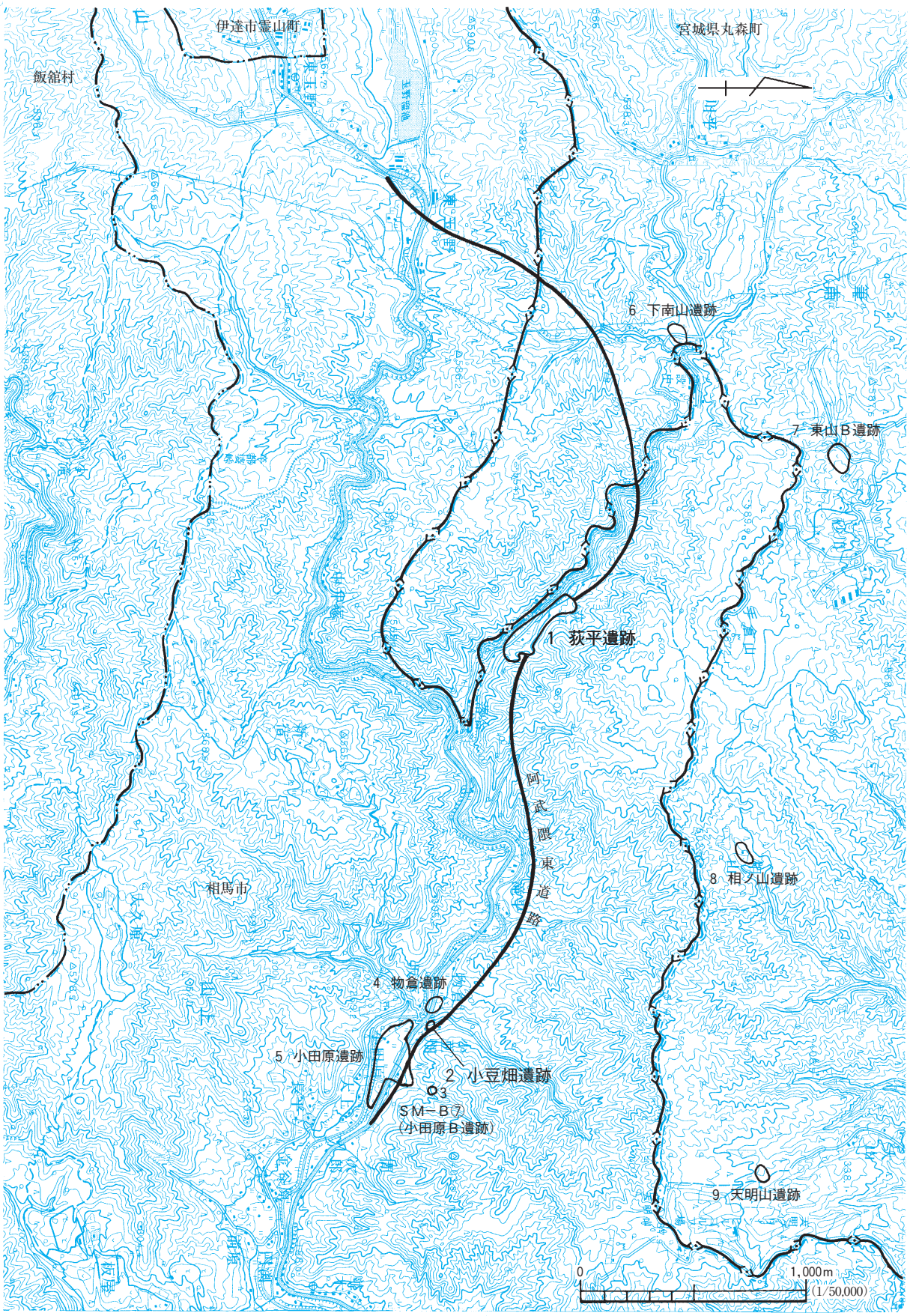


図３　荻平遺跡・小豆畑遺跡と周辺の遺跡

表１　周辺遺跡一覧

番号	遺 跡 名	所　在　地	種　別	時　代	遺跡番号	備　　考
1	**荻平遺跡**	福島県相馬市山上字荻平	集落跡	縄文・平安	20900202	『県分布13・14』
2	**小豆畑遺跡**	福島県相馬市山上字小豆畑	散布地	縄文・平安	20900203	『県分布14』
3	小田原Ｂ遺跡	福島県相馬市山上字小田原	製鉄	平安	20900204	『県分布15』
4	物倉遺跡	福島県相馬市山上字物倉	散布地	縄文	20900170	
5	小田原遺跡	福島県相馬市山上字小田原	散布地	縄文・平安	20900132	『相馬第Ⅱ地区１』
6	下南山遺跡	宮城県丸森町筆甫字下南山	集落跡	縄文・平安	10152	『宮城144・155集』
7	東山Ｂ遺跡	宮城県丸森町筆甫字東山	散布地	縄文	10112	
8	相ノ山遺跡	宮城県丸森町大内字青葉南	散布地	縄文・平安	10100	
9	天明山遺跡	宮城県丸森町大内字青葉南	散布地	縄文・古代	10099	

＊『県分布』：福島県内遺跡分布調査報告　　『宮城』：宮城県文化財調査報告書
＊『相馬第二地区』：県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告

どで須恵器生産が開始される。製鉄関連遺跡では新地町武井地区遺跡群の山田Ａ遺跡・猪倉Ｂ遺跡が挙げられ，製鉄炉だけでなく鋳造に関わる鋳型も出土している。本遺跡が所在する山上地区では，近年調査された明神遺跡からＬ字形に並ぶ掘立柱建物群で構成された集落跡が見つかっている。また鉄滓が採取できる遺跡が散見でき，山上地区でも小田原遺跡や小田原Ｂ遺跡で製鉄関連遺跡の存在が窺われる。平安時代になると，それまで人々の生活区域として利用されていなかった相馬市西部の山間部開発が開始される時期になるのであろう。

本遺跡の該期の集落跡の発見から，平安時代の小規模集落が山間部に存在することが分かる。調査成果からは，具体的な生業までは明らかにできなかったが，狩猟や木材の調達を始めとする様々な山間部開発に携わる人物と考えられる。

中世から近世にかけては，源頼朝の奥州征伐を契機に，下総国から入部したと伝えられる千葉氏（相馬氏）の支配に入る。相馬氏の支配は，南北朝から戦国時代までは不安定であったようで，数多くの城館が造られている。南北朝期の南朝方の拠点である霊山城に対して黒木城跡や熊野堂城跡など築城された。天文７（1538）年には「宇多之荘」として44村が出てくるが，このうち28村が現存する市域の大字・小字に比定できる。天文11年の伊達天文の乱の過程で，小高城相馬氏の支配が宇多郡全域から伊具・亘理・名取郡まで及ぶようになった。伊達氏も政宗の代になると果敢に巻き返し，天正18（1590）年までに相馬氏は「宇多之荘」28村の現在の市域相当分まで押し戻され，他は伊達領となり，ほぼ現在の新地町を構成することになる。

近世になると相馬氏は，宇多郡の支配を確立したことから中村城に居を移し，明治２年の藩籍奉還までその支配が続く。その他に近世の遺跡として，古川尻Ｂ遺跡や山中Ｂ遺跡の調査事例において，新沼浦で入浜式製塩技法を用いた製塩業が盛んであったことが判明している。さらに山上地区では，相馬藩の火薬庫である山岸硝庫跡の調査が実施された。

明治４（1871）年の廃藩置県で，中村藩は中村県となり，明治９年に福島県となって現在に至っている。

（福田・宮田）

参　考　文　献

鈴木敬治ほか　1987『土地分類基本調査』「保原」 福島県農地林務部農地計画課

鈴木敬治ほか　1989『土地分類基本調査』「相馬中村」 福島県農地林務部農地計画課

真山　悟ほか　1991「舘南囲遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第144集　宮城県教育委員会

宮城県教育委員会　1993「宮城県遺跡地図」 宮城県文化財調査報告書第152集

須田良平・天野順陽　1993「下南山遺跡」宮城県文化財調査報告書第155集　宮城県教育委員会

能登谷宣康ほか　1995「大森・鷲塚Ｂ・鷲塚Ｃ遺跡」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ』
福島県文化財調査報告書第311集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

柳沢幸夫ほか　1996『地域地質研究報告』「相馬中村地域の地質」 通商産業省工業技術院地質調査所

福島県教育委員会　1996「福島県遺跡地図　浜通り地方」 福島県文化財調査報告書第321-3集

小暮伸之　1998「小田原遺跡」『県営かんがい排水事業　相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅰ』
福島県文化財調査報告書第340集　福島県教育委員会

農林水産省農林水産技術会議事務局　2000『新版標準土色帖』2000年版　㈶日本色彩研究所

西　徹雄　監修　2000『図説　相馬・双葉の歴史』郷土出版社

稲村圭一ほか　2002「北迫Ａ遺跡」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』
福島県文化財調査報告書第393集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

稲村圭一ほか　2002「本笑和田横穴墓群」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』
福島県文化財調査報告書第396集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

稲村圭一ほか　2002「柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ』
福島県文化財調査報告書第403集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

菅原祥夫　2003「宿仙木遺跡」『県営かんがい排水事業　相馬第二地区遺跡発掘調査報告Ⅱほか』
福島県文化財調査報告書第411集　福島県教育委員会

大河原勉　2004「山田遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告38』
福島県文化財調査報告書第420集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

佐藤　啓・青山博樹　2006「明神遺跡」『常磐自動車道遺跡調査布告42』
福島県文化財調査報告書第432集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

香川愼一・今野　徹　2007「柴迫Ａ遺跡（２次調査）・山中Ｂ遺跡」『一般国道６号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅵ』
福島県文化財調査報告書第437集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

山岸英夫・三浦武司　2007「山岸硝庫跡」『常磐自動車道遺跡調査布告48』
福島県文化財調査報告書第443集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

福田秀生　2008「荻平遺跡（１次調査）」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告１』
福島県文化財調査報告書第455集　福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団

第１編　荻平（おぎだいら）遺跡（２次調査）

遺跡記号	ＳＭ－ＯＧＤ（２次）
所在地	相馬市山上字荻平
時代・種類	縄文・弥生・平安時代－集落
調査期間	平成20年４月７日～ 平成21年２月６日
調査員	香川愼一・宮田安志・福田秀生 稲村圭一・管野和博・大野淳史 小向　良

第１章　調　査　経　過

第１節　遺跡の位置と地形

荻平遺跡は，相馬市山上字荻平に所在し，北緯37度47分13秒，東経140度47分31秒の相馬市の北西端に位置している。遺跡の西側を流れる宇多川を挟んだ対岸は宮城県伊具郡丸森町筆甫となる。荻平遺跡の位置は，阿武隈山地と山麓丘陵部の境に相当し，手倉山の南側を東流する宇多川上流部の中では最も広い河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は265ｍ～320ｍを測る。

本遺跡の範囲は，宇多川左岸の低位段丘の緩斜面を中心とする69,000㎡で，平成19年度の１次調査は，遺跡の最北端部3,300㎡の発掘調査を実施している（『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告１』）。

平成20年度の２次調査は，遺跡中央付近の丘陵南斜面と（西地区），遺跡中央から南部にかけての緩斜面（東地区），合わせて23,600㎡の範囲について発掘調査を実施した。現況は，西地区は山林，東地区は山林・宅地・水田である。特に，東地区では山間から流出した表土層以下の土砂崩落層が厚く堆積している。

遺跡周辺の地質は，花崗岩を基盤とする地域で，宇多川の段丘上は山地の土砂崩れを起源とする堆積物が広く覆われている。現況でも土砂崩れ等で崖面に花崗岩が露出する箇所が数多く見られる。試掘調査の結果からも，特に遺跡中央から南部にかけての範囲は，宇多川に向かって開口する谷を起源とする崩落土が厚く堆積する地形となる。花崗岩の巨石を含む土砂崩落土層と表土化した黒色土層が縞状に重なった状態で，地表下数ｍにわたり堆積している状況が観察できた。

第２節　調 査 経 過

荻平遺跡は，平成15年度に実施した阿武隈東道路建設に伴う表面調査によって確認された遺跡である。平成18・19年度に試掘調査が実施され，縄文時代早期～晩期，平安時代にかけての複合遺跡として埋蔵文化財包蔵台帳に登録された（遺跡番号20900202）。遺跡の面積は，69,000㎡である。なお，平成19年度に試掘調査の結果と工事用道路等の工事計画の優先順位から，本遺跡の最北端部3,300㎡の範囲について発掘調査を実施しており（第１次発掘調査），調査の詳細については『阿武隈東道路関連遺跡発掘調査報告１』において報告されている。

平成20年度は２次調査として，発掘調査に先立ち国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所と磐城国道事務所，福島県教育委員会及び財団法人福島県文化振興事業団の四者で協議を行い，工事区内に当たる23,600㎡の範囲を対象として発掘調査を行うこととなった。このとき工事用道路建設の関連で，東・西地区の山裾部分の調査を優先で行い，８月末までにこの部分を終了させることが決められた。

発掘調査は調査員６名（定数８名）を配置して開始された。調査期間は平成20年４月７日から同年12月25日までの延べ156日である。なお，平成21年１月22日から２月６日にかけては，重機による崩落層掘削と補足調査を実施している。以下に，調査経過の概略を記す。

４月７日に重機による表土剥ぎを開始した。また，同時に発掘器材の搬入，プレハブ・トイレ設営など環境整備も行った。11日からは作業員を雇用し本格的に作業を開始し（１次雇用），西地区西側の斜面部から遺構検出作業を開始した。斜面であるため，安全な作業用通路を確保しながら，掘削作業や排土運搬作業に着手した。５月14日には，作業員送迎用のバス運行を開始し，それに伴い新たに作業員を増員した（２次雇用）。また，この時期に測量基準杭を打設している。４月下旬～５月にかけては雨天が続き，排土の崩落防止など安全面に配慮した措置を施した。

６月には山上地区の小豆畑遺跡の調査とＳＭ－Ｂ⑦の試掘調査の終了に伴い，調査員２名と作業員が加わり，９日から東地区の調査を本格的に開始した。また，新規に調査員を１名増員し，計７名体制となった。梅雨時期にも関わらず，調査は順調に進行し，西地区では縄文時代前期中葉の複数の炉を伴う大型住居跡（16号住居跡）を検出している。

７月になると東地区の遺構検出作業が順調に進行し，中央付近の土砂崩落層上には土師器等の遺物とともに多数の平安時代の竪穴住居跡が存在することが明らかになった。また，23日には新たに作業員を10名雇用し，送迎バスを１台追加している（３次雇用）。この時期，重機による表土剥ぎは東地区の崩落層の掘削を行っていたが，表土以下２～３ｍと厚く困難を極めた。26日には遺跡の案内人（ボランティア）事業の現地公開を実施し，発掘体験を開催した。あいにくの雨天であったが，20組の親子の参加者と約50名の来跡者があった。８月になると西地区では市道の下の調査を開始した（700㎡）。また，東地区では山裾の優先部分を中心に調査を行い，29日には調査優先箇所となっていた山裾部分（1,600㎡）の引渡しを完了している。９月には調査の成果を公表するため，13日に現地説明会を開催し，約50名の来跡者があった。この時期には，東地区では古代官人が着用していた腰帯の石製銙帯や多数の鉄製品の出土等，貴重な発見があり，山間地域における比較的規模の大きい平安時代の集落跡であることが判明する。また，９月下旬には，東地区の下層の範囲を確定するため試掘調査を実施している。下層からは縄文時代早期末から前期前葉の土器が多量に出土し，東地区の調査域の8,000㎡が来年度以降の調査範囲として確定した。また，24日からは新たに作業員を雇用している（４次雇用）。10月になると西地区の調査がようやく終了し，調査員，作業員とも東地区へ合流した。上旬にはラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を実施し，西地区の引渡しを行った。10月から11月にかけては好天に恵まれ，調査は順調に進行している。

12月には順調に調査終盤を迎える。遺構の基盤層を深く掘り下げるなど，基本土層の観察とともに遺構・遺物の最終的な確認作業を行い，12月19日までには現地調査を終了した。国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所と福島県教育委員会及び財団法人福島県文化振興事業団の３者で現地の調査終了を確認し，12月25日付で一部引き渡しを完了した。

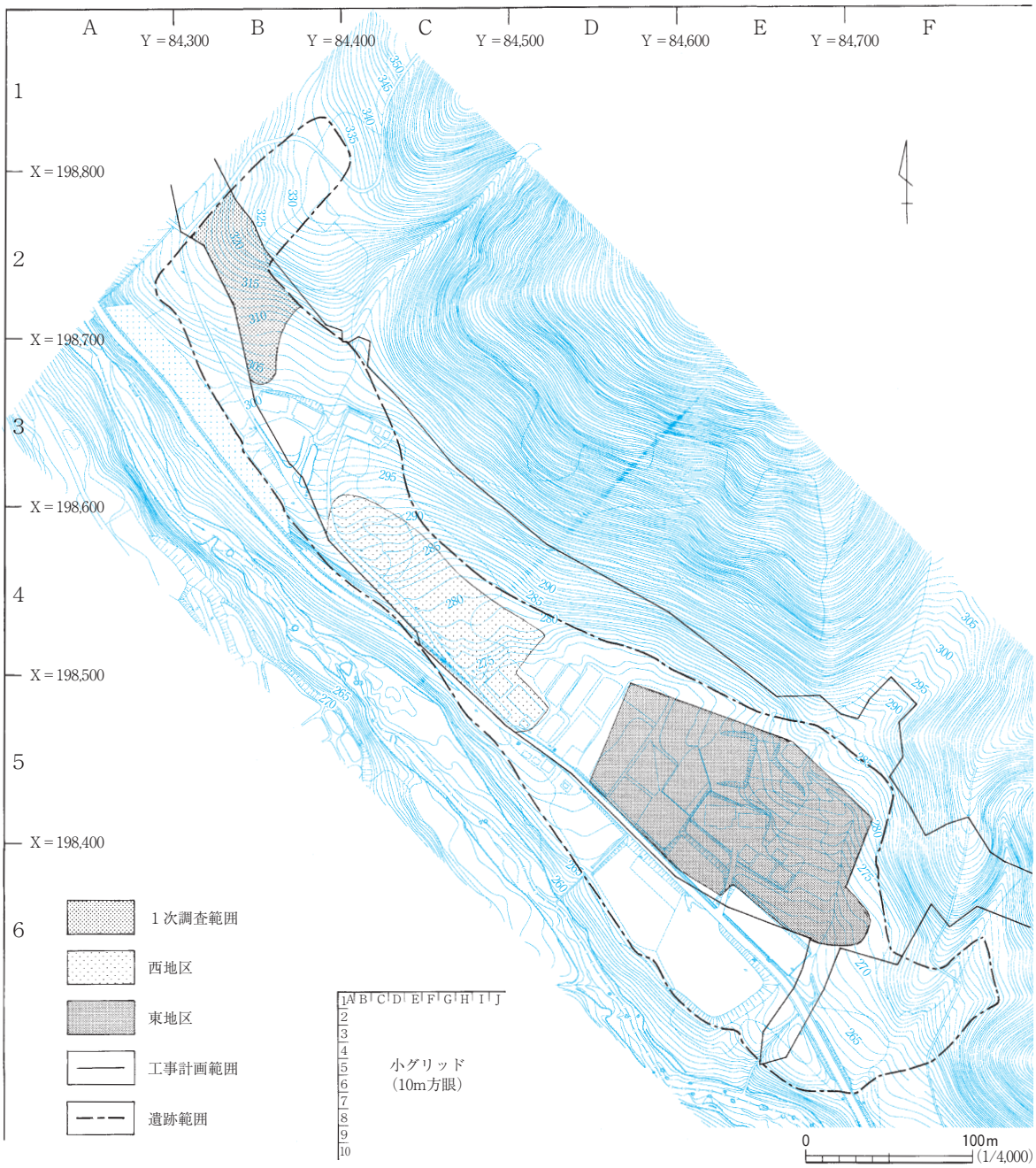


図４　調査範囲とグリッド配置図

第３節　調査の方法

荻平遺跡の調査にあたり，遺構の位置や遺物の出土位置を示すために世界測地系に基づく国土座標を用いた方眼を設定し，これをグリッドと称した。グリッドは，Ｘ：198,900，Ｙ：84,200を原点とし，100m四方の方眼（大グリッド）を設定した。大グリッドの呼称は，原点からＸ座標の南に向かって１・２・３・・，Ｙ座標の東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・・とし，これらを組み合せてＡ１・Ｂ１・・とした。さらに大グリッドを10m四方の方眼に細分した小グリッドを設定した。小グリッ

ドの呼称は，大グリッドと同様な方法で表記し，大グリッド－小グリッドを組み合せて，Ｂ２－Ｅ４などと表記した。遺跡内の標高は，遺跡に近接する三角点から移動して計測の基準とした。

調査区内の表土層は，重機を用いて除去作業を行った。表土層より下層の堆積土は，原則的に人力で掘り下げた。堆積土層ごとに掘り下げ，遺物の出土状態などに留意しながら掘り下げた。

遺構の調査にあたっては，その特性や遺存状態に応じて土層観察用の畦を設け，堆積状況や遺物の出土状態などに留意して精査を進めた。土坑などの小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内からの出土した遺物の取り上げに際しては，区画ごとに層位を確認した上で取り上げた。また，堆積土の表記については，基本土層など遺構外の堆積土はＬとローマ数字Ⅰ・Ⅱを組み合わせ，ＬⅠ・ＬⅡ・・とした。遺構内の堆積土は，ℓとアラビア数字を組み合わせ，ℓ１・ℓ２・・と表記した。なお堆積土の観察には，『新版標準土色帖（2000年判）』を参考にした。

遺構などの図化記録については，小グリッドを１ｍ四方の方眼にし，その交点を計測の基準とした。遺構の位置表示は，計測の基準となった交点の座標値をそのまま使用した。遺構の平面図・断面図などの図化は，縮尺１／20で記録した。なお，遺構の特徴にあわせて，１／10の縮尺で記録したものもある。調査区の地形図は１／200の縮尺で作成した。

写真記録は，調査の過程にあわせて随時撮影している。写真撮影は35㎜小型一眼レフカメラ，６×4.5判の中型一眼レフカメラ・デジタルカメラを併用し，同一カットで撮影した。またラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影も実施した。

発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し，閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管している。（福田・宮田）

荻平遺跡作業風景写真　（左：西地区　右：東地区）

※なお，荻平遺跡２次調査は，調査区域が東地区と西地区に分かれているため，遺構番号が順序不同となる。よって，１次調査と合わせて各遺構の一覧表（表２～５）を付加することにする。

表２　住居跡一覧

住居番号	挿図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
ＳＩ１	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ5)	隅丸長方形	410	(230)	30	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ２	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3･Ｄ3)	長方形	450	(420)	85	平安時代	土師器･須恵器･縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＩ３	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3･Ｅ3)	楕円形	480	310	50	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ４	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	長方形	480	330	30	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ５	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ3)	(楕円形)	(285)	(220)	40	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ６	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	(長方形)	(350)	(280)	18	縄文前期前葉	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＩ７	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	(長方形)	(340)	(210)	40	平安時代	土師器･縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ８	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	(長方形)	425	(105)	38	縄文前期～中期	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ９	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	楕円形	(330)	(280)	16	縄文前期前葉	－	『阿武隈東１』
ＳＩ10	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	(長方形)	(220)	(65)	15	縄文前期～中期	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＩ11	－	1次調査(Ｂ2－Ｇ･Ｈ9)	(楕円形)	(295)	(260)	36	縄文前期中葉	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＩ12	図76	西区(Ｃ4－Ｃ4)	(長方形)	(340)	350	37	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ13	図78	西区(Ｃ4－Ｃ2)	長方形	430	270	27	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＩ14	図79	西区(Ｃ4－Ｃ3)	楕円形	(670)	420	45	縄文前期後葉	縄文土器･石器	
ＳＩ15	図81	西区(Ｃ4－Ｅ5)	(楕円形)	390	(290)	14	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ16	図82･83	西区(Ｃ4－Ｄ5･Ｄ6)	楕円形	1080	520	55	縄文前期後葉	縄文土器･石器	
ＳＩ17	図9	東区(Ｅ5－Ｅ･Ｆ8･9)	(方形状)	(358)	(275)	27	平安時代	土師器･須恵器･縄文土器･石器	
ＳＩ18	図10･11	東区(Ｅ5－Ｅ･Ｆ7･8)	隅丸長方形	385	296	18	平安時代	土師器･弥生土器 土師器･須恵器･	
ＳＩ19	図13	東区(Ｅ5－Ｄ8)	隅丸長方形	443	347	15	平安時代	鉄製品･石器	37･39号土坑, Ｐ1より古
ＳＩ20	図15	東区(Ｅ5－Ｄ7)	長方形	340	(240)	15	平安時代	土師器･鉄製品	26号住居より新
ＳＩ21	図91	西区(Ｃ4－Ｅ6)	楕円形	365	270	13	縄文早期末～前期初頭	縄文土器･石器	20･22号土坑より新
ＳＩ22	図93	西区(Ｃ4－Ｅ6･Ｅ7)	(長方形)	320	(220)	36	縄文早期末～前期初頭	縄文土器･石器	
ＳＩ23	図94	西区(Ｃ4－Ｅ6･Ｆ6)	(長方形)	370	(250)	12	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ24	図96	西区(Ｃ4－Ｅ5)	長方形	360	220	12	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ25	図97	西区(Ｃ4－Ｄ5)	(楕円形)	(320)	(280)	35	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ26	図17	東区(Ｅ5－Ｄ7･Ｅ7)	隅丸長方形	(400)	(320)	15	平安時代	土師器	20号住居より古
ＳＩ27	図99	西区(Ｃ4－Ｂ4)	(楕円形)	(320)	250	12	縄文前期後葉	縄文土器･石器	
ＳＩ28	図101	西区(Ｃ4－Ｂ3)	(長方形)	(170)	(170)	24	縄文早期末葉	－	45号住居跡より新
ＳＩ29	図102	西区(Ｃ4－Ｄ6･Ｅ6)	(長方形)	360	260	25	縄文早期末葉	縄文土器･石器	
ＳＩ30	図103	西区(Ｃ4－Ａ3)	長方形	495	230	62	縄文前期後葉	縄文土器･石器	
ＳＩ31	図18	東区(Ｅ5－Ｂ3･4)	楕円形	465	350	18	縄文後期～晩期	縄文土器･石器	33号住居より古
ＳＩ32	図19	東区(Ｄ5－Ｊ2)	楕円形	400	315	15	縄文後期～晩期	縄文土器･石器	
ＳＩ33	図20	東区(Ｅ5－Ｂ3･4)	隅丸長方形	385	315	28	平安時代	土師器･須恵器･縄文土器	31号住居より新
ＳＩ34	図21	東区(Ｅ5－Ｅ8)	隅丸長方形	355	270	－	平安時代	土師器	34号土坑より古
ＳＩ35	図22	東区(Ｅ5－Ｃ8)	(隅丸長方形)	360	(300)	10	平安時代	土師器	
ＳＩ36	図23	東区(Ｅ5－Ｂ7･8, Ｃ7･8)	隅丸長方形	352	326	10	平安時代	土師器･弥生土器	
ＳＩ37	図24	東区(Ｅ5－Ｃ8･9)	隅丸長方形	385	334	20	平安時代	土師器	
ＳＩ38	図25	東区(Ｅ5－Ｃ9･10, Ｄ9･10)	長方形	371	287	8	平安時代	土師器	
ＳＩ39	図26	東区(Ｅ5－Ｃ4)	長方形	425	335	10	平安時代	土師器･鉄製品	41号住居より新
ＳＩ40	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ＳＩ41	図27	東区(Ｅ5－Ｃ4)	(方形)	(350)	(335)	12	平安時代	土師器･鉄製品	39号住居より古
ＳＩ42	図28	東区(Ｅ5－Ｇ5)	楕円形	350	250	12	縄文晩期末～弥生初頭	縄文土器･弥生土器･石器	大洞Ａ～Ａ′式期
ＳＩ43	図105	西区(Ｃ4－Ｃ3)	(長方形)	(380)	(200)	34	縄文早期末葉	縄文土器	14号住居より古
ＳＩ44	図106	西区(Ｃ4－Ｃ5)	(楕円形)	(320)	(240)	30	縄文前期後葉	縄文土器･石器	
ＳＩ45	図107	西区(Ｃ4－Ｂ3)	隅丸長方形	270	200	32	縄文早期末葉	－	28号住居跡より新
ＳＩ46	図108	西区(Ｃ4－Ｂ3)	(長方形)	(400)	(200)	8	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＩ47	図30	東区(Ｅ5－Ｇ7･8)	(楕円形)	365	(310)	12	弥生中期前葉	縄文土器･弥生土器･石器	
ＳＩ48	図32	東区(Ｅ5－Ｂ8･9)	(方形状)	335	(300)	－	平安時代	土師器･縄文土器	51号住居より新
ＳＩ49	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ＳＩ50	図33	東区(Ｅ5－Ｆ9)	(長方形)	375	(140)	60	平安時代	土師器	
ＳＩ51	図34	東区(Ｅ5－Ｂ8)	(方形状)	(300)	293	－	平安時代	土師器･須恵器	48号住居より古
ＳＩ52	図35	東区(Ｅ5－Ｆ7･8)	長方形	355	320	8	平安時代	土師器･須恵器	
ＳＩ53	図36･37	東区(Ｅ5－Ｇ8･9 Ｅ5－Ｈ8･9)	楕円形	530	420	35	縄文晩期後葉	縄文土器･弥生土器･石器	大洞Ａ式期
ＳＩ54	図40･41	東区(Ｅ5－Ｇ9･10)	(長方形)	405	(100)	6	平安時代	土師器	

＊平面形の（　）は推定形、規模の（　）内の数値は遺存値を表す

＊『阿武隈東１』平成20年刊行

表３　土坑一覧（１）

住居番号	挿図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
ＳＫ１	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	楕円形	120	87	52	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＫ２	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	不整円形	125	110	48	縄文後期	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＫ３	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3)	円形	85	83	15	－	－	『阿武隈東１』
ＳＫ４	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	(方形)	(80)	(55)	28	縄文前期	－	『阿武隈東１』
ＳＫ５	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ5･Ｆ5)	楕円形	150	140	60	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＫ６	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ5)	楕円形	110	(70)	16	縄文前期前葉	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＫ７	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ5･Ｆ5)	楕円形	145	(90)	55	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＫ８	－	1次調査(Ｂ2－Ｄ3･Ｆ3)	楕円形	122	85	34	縄文中期初頭	縄文土器･石器	『阿武隈東１』
ＳＫ９	－	1次調査(Ｂ2－Ｅ4)	(楕円形)	(160)	(112)	28	縄文中期初頭	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＫ10	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	不整円形	100	93	48	平安時代	土師器	『阿武隈東１』
ＳＫ11	－	1次調査(Ｂ2－Ｃ3)	楕円形	95	93	25	縄文中期初頭	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＫ12	－	1次調査(Ｂ2－Ｆ7)	楕円形	118	(92)	48	縄文前期中葉	縄文土器	『阿武隈東１』
ＳＫ13	図109	西区(Ｃ4－Ｃ2)	方形	220	200	20	縄文早期末	縄文土器	
ＳＫ14	図109	西区(Ｃ4－Ｅ5)	楕円形	145	130	72	縄文前期	縄文土器	17号土坑より新
ＳＫ15	図109	西区(Ｃ4－Ｄ4)	方形	120	110	20	縄文早期末～前期初頭	縄文土器･石器	
ＳＫ16	図109	西区(Ｃ4－Ｃ4)	円形	172	168	105	縄文早期～前期	縄文土器･石器	
ＳＫ17	図109	西区(Ｃ4－Ｅ5)	不整形	100	(70)	33	縄文前期	－	14号土坑より古
ＳＫ18	図110	西区(Ｃ4－Ｄ4)	楕円形	120	90	55	縄文早期末～前期初頭	縄文土器	
ＳＫ19	図110	西区(Ｃ4－Ｄ4)	不整楕円形	170	140	32	－	－	
ＳＫ20	図110	西区(Ｃ4－Ｅ5･Ｅ6)	(円形)	190	(120)	37	縄文早期末	－	21号住居より古
ＳＫ21	図110	西区(Ｃ4－Ｅ6)	不整楕円形	165	110	40	縄文早期末	縄文土器	21号住居より古
ＳＫ22	図110	西区(Ｃ4－Ｆ7)	不整円形	220	210	30	縄文前期前葉	縄文土器	
ＳＫ23	図110	西区(Ｃ4－Ｆ7)	楕円形	170	80	50	縄文早期末～前期初頭	縄文土器	
ＳＫ24	図111	西区(Ｃ4－Ｃ3)	円形	80	75	33	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ25	図111	西区(Ｃ4－Ｅ6)	楕円形	155	127	52	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ26	図111	西区(Ｃ4－Ｄ5)	楕円形	(240)	157	12	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ27	図43	東区(Ｅ5－Ｂ3)	楕円形	114	102	34	縄文後期～晩期		
ＳＫ28	図43	東区(Ｅ5－Ｂ2)	楕円形	132	110	55	縄文後期～晩期		
ＳＫ29	図43	東区(Ｅ5－Ｂ3)	楕円形	138	96	38	平安時代	土師器	
ＳＫ30	図43	東区(Ｅ5－Ａ2)	楕円形	92	84	50	縄文後期～晩期		
ＳＫ31	図43	東区(Ｅ5－Ａ3)	楕円形	118	92	33	縄文後期～晩期		
ＳＫ32	図43	東区(Ｅ5－Ａ3)	楕円形	108	88	53	縄文後期～晩期		
ＳＫ33	図44	東区(Ｄ5－Ｈ1･2 Ｄ5－Ｉ1･2)	楕円形	116	102	88	縄文後期～晩期		
ＳＫ34	図44	東区(Ｅ5－Ｅ8)	楕円形	120	102	21	平安時代	土師器	34号住居より新
ＳＫ35	図44	東区(Ｅ5－Ｅ7)	楕円形	98	54	21	平安時代	土師器	
ＳＫ36	図44	東区(Ｅ5－Ｅ8)	楕円形	177	129	14	平安時代		
ＳＫ37	図44	東区(Ｅ5－Ｄ8)	楕円形	95	65	14	平安時代		19号住居より古
ＳＫ38	図44	東区(Ｅ5－Ｃ7)	楕円形	159	79	64	縄文～弥生時代		
ＳＫ39	図45	東区(Ｅ5－Ｄ8)	楕円形	(120)	(78)	20	平安時代	土師器･須恵器･ 弥生土器･鉄製品	19号住居より古
ＳＫ40	図45	東区(Ｅ5－Ｃ8)	楕円形	181	140	36	平安時代	土師器	
ＳＫ41	図45	東区(Ｅ5－Ｂ5)	楕円形	126	102	53	平安時代	縄文土器･弥生土器･ 土師器	
ＳＫ42	図45	東区(Ｅ5－Ｃ5)	楕円形	134	118	28	平安時代		
ＳＫ43	図45	東区(Ｅ5－Ｃ4･5)	楕円形	145	112	60	平安時代		
ＳＫ44	図45	東区(Ｅ5－Ｃ5)	楕円形	214	164	28	平安時代	土師器	
ＳＫ45	図46	東区(Ｅ5－Ｃ9)	楕円形	210	191	43	平安時代	土師器	
ＳＫ46	図46	東区(Ｅ5－Ｃ9)	隅丸長方形	167	114	37	平安時代	土師器	木炭焼成土坑
ＳＫ47	図46	東区(Ｅ5－Ｃ8･9)	隅丸方形	95	91	34	平安時代	土師器	
ＳＫ48	図46	東区(Ｅ5－Ｃ6)	楕円形	150	75	40	平安時代	土師器･炭化木質遺物	
ＳＫ49	図46	東区(Ｅ5－Ｇ8)	楕円形	148	128	33	平安時代	縄文土器･弥生土器･ 土師器	
ＳＫ50	図46	東区(Ｅ5－Ｇ8･9)	楕円形	168	145	26	縄文晩期末～弥生	縄文土器･弥生土器	
ＳＫ51	図112	西区(Ｃ4－Ｂ3)	円形	80	80	65	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ52	図47	東区(Ｅ5－Ｄ9)	楕円形	231	183	36	平安時代	土師器･鉄製品	
ＳＫ53	図112	西区(Ｃ4－Ｂ3)	円形	93	87	27	縄文早期末葉		
ＳＫ54	図112	西区(Ｃ4－Ｂ3)	楕円形	96	75	62	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ55	図47	東区(Ｅ5－Ｇ9)	楕円形	146	120	32	平安時代	縄文土器･弥生土器･ 土師器	
ＳＫ56	図112	西区(Ｃ4－Ｂ3)	長方形	80	66	33	縄文早期～前期		
ＳＫ57	図47	東区(Ｅ5－Ｃ9)	楕円形	214	135	22	平安時代	土師器･鉄製品	
ＳＫ58	図47	東区(Ｅ5－Ｃ9･Ｄ9)	円形	131	109	58	不明		

＊（　）内の数値は遺存値を表す

＊『阿武隈東１』平成20年刊行

表４　土坑一覧（２）

住居番号	挿図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
ＳＫ59	図48	東区(Ｅ5－Ｂ4)	楕円形	180	90	20	平安時代	羽口･鉄滓	鍛冶炉の可能性
ＳＫ60	図112	西区(Ｃ4－B3)	長方形	90	55	49	縄文早期～前期		
ＳＫ61	図112	西区(Ｃ4－B3･4)	円形	165	165	64	縄文早期末葉	縄文土器	
ＳＫ62	図49	東区(Ｄ5－Ｊ9)	円形	135	135	64	縄文後期		
ＳＫ63	図49	東区(Ｄ5－Ｇ7)	楕円形	160	90	55	縄文後期～晩期		
ＳＫ64	図49	東区(D5－Ｉ8 D5－Ｊ8)	円形	150	150	56	縄文後期		
ＳＫ65	図49	東区(D5－Ｉ8 D5－Ｊ8)	円形	180	180	58	縄文後期		
ＳＫ66	図49	東区(D5－H8 D5－Ｉ8)	(円形)	(100)	―	68	縄文後期		

＊（　）内の数値は遺存値を表す

表５　焼土遺構一覧

住居番号	挿図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
ＳＧ１	図115	西区(C4－D5)	円形	78	68	7	縄文早期～前期		
ＳＧ２	図115	西区(C4－D6)	円形	62	56	5	縄文早期～前期		
ＳＧ３	図115	西区(C4－E6)	円形	57	34	8	縄文早期～前期		
ＳＧ４	図115	西区(C4－E6)	円形	78	56	5	縄文早期～前期		
ＳＧ５	図115	西区(C4－E5)	円形	40	35	3	縄文早期～前期		
ＳＧ６	図115	西区(C4－B3)	不整形	113	45	1	縄文早期～前期		
ＳＧ７	図115	西区(C4－B4)	楕円形	80	52	7	縄文早期～前期		
ＳＧ８	図115	西区(C4－B4)	楕円形	77	53	4	縄文早期～前期		
ＳＧ９	図115	西区(C4－D5)	円形	70	58	5	縄文早期～前期		
ＳＧ10	図115	西区(C4－B3)	円形	77	43	4	縄文早期～前期		
ＳＧ11	図51	東区(Ｅ5－Ｇ6)	楕円形	43	30	4	縄文晩期		屋外炉
ＳＧ12	図51	東区(Ｅ5－Ｆ8)	楕円形	28	20	3	平安時代		屋外炉
ＳＧ13	図52･53	東区(Ｅ5－Ｆ8･9 Ｅ5－Ｇ8･9)	―	(600)	280	50	平安時代	土師器･鉄製品･鉄滓･獣骨片･炭化堅果類･弥生土器	鍛冶関連遺構
ＳＧ14	図51	東区(Ｅ5－Ｃ4)	楕円形	53	43	5	平安時代		屋外炉
ＳＧ15	図51	東区(Ｄ5－Ｉ5)	楕円形	78	35	4	縄文後期～晩期		屋外炉
ＳＧ16	図51	東区(Ｄ5－Ｊ7)	楕円形	90	65	10	縄文後期～晩期		屋外炉

＊（　）内の数値は遺存値を表す

第２章　東地区の遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布　（図５～７，写真１～４）

荻平遺跡の東地区は，遺跡の北東部にあたる。調査区は東西方向に長く，南側の宇多川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈している。調査区東部には，宇多川に注ぐ支沢状の落ち込みが確認できる。検出された遺構は，北側の山間から流出した土砂崩落層が厚く堆積している調査区内の中央付近からやや西寄りにかけての，比較的標高が高い区域に集中している。検出された遺構は，竪穴住居跡23軒，掘立柱建物跡１棟，土坑34基，焼土遺構６箇所，小穴７個である。

確認できた竪穴住居跡の内訳は，縄文時代後期～晩期（４軒），弥生時代（１軒），平安時代（18軒）である。住居跡の分布をみると，縄文時代後期の住居跡は，調査区西側の標高の低い平坦地に散発的に認められるほかは，縄文時代晩期から古代にかけては，山間から流失した崩落層が堆積している調査区中央付近から西側にかけての，標高の高い南斜面に集中して検出された。また，巨石や礫層を避けて竪穴住居を構築するためか，調査区内でも花崗岩の露頭が少ない地点で重複して構築される例もみられる。また，調査区北側の山間から続く沢地が認められる調査区東側に限っては，土砂崩落層が特に厚く堆積しているためか遺構の分布は認められなかった。土坑は，竪穴住居と同様に，調査区の中央付近から西側にかけて多く検出され，生活域を構成する一連の遺構群と考えられる。出土遺物の特徴から，全て近似する住居跡と同時期のもので関連性が指摘できるが，用途・機能については不明なものが多い。また，６箇所確認できた焼土遺構のうち，13号焼土遺構は，作業場施設を付属し，鉄製品などが比較的多く出土したことから，生産遺構である可能性が高い。ほかに調査区内には小穴群も分布しており，掘立柱建物跡などの構築物の存在も充分に考慮できる。

出土遺物は，縄文土器・弥生土器4,231点，土師器8,733点，須恵器104点，陶器14点，石器・石製品154点，鉄製品86点である。遺物の分布については，遺構の分布と同様に，調査区内の中央付近から西寄りにかけて集中する傾向が見られ，調査区東側の沢が走る部分では極めて少ない。

出土遺物の約６割強が土師器で，その主体となるのは平安時代である。平安時代は土師器や須恵器を中心に，豊富な鉄製品（鉄鏃・刀子など）や，灰釉陶器などの出土が認められるほか，古代官人が着用していた石製腰帯の出土が特筆される。石製腰帯の出土は当地域では初見であり，山間遺跡での出土という点でも稀少であることから，当遺跡の性格を語るうえで非常に特筆されるものである。本地区は，土師器・須恵器の特徴から９世紀後半頃から10世紀前半を中心とした集落であるが，古墳・奈良時代の土師器や11世紀に下る土師器も出土していることから，遺跡内には該期の遺構が存在していた可能性が高い。

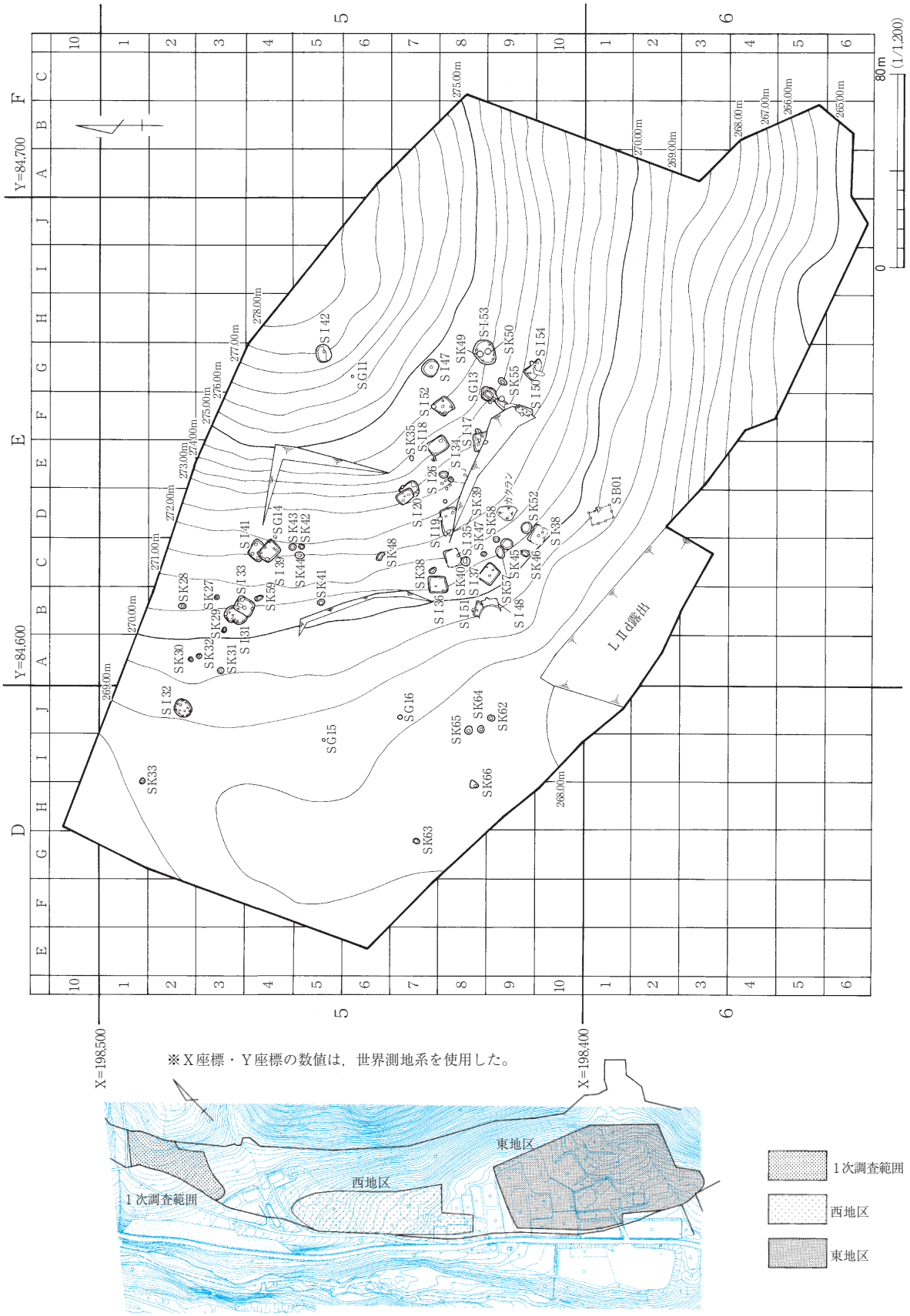


図５　遺構配置図（東地区全体図）

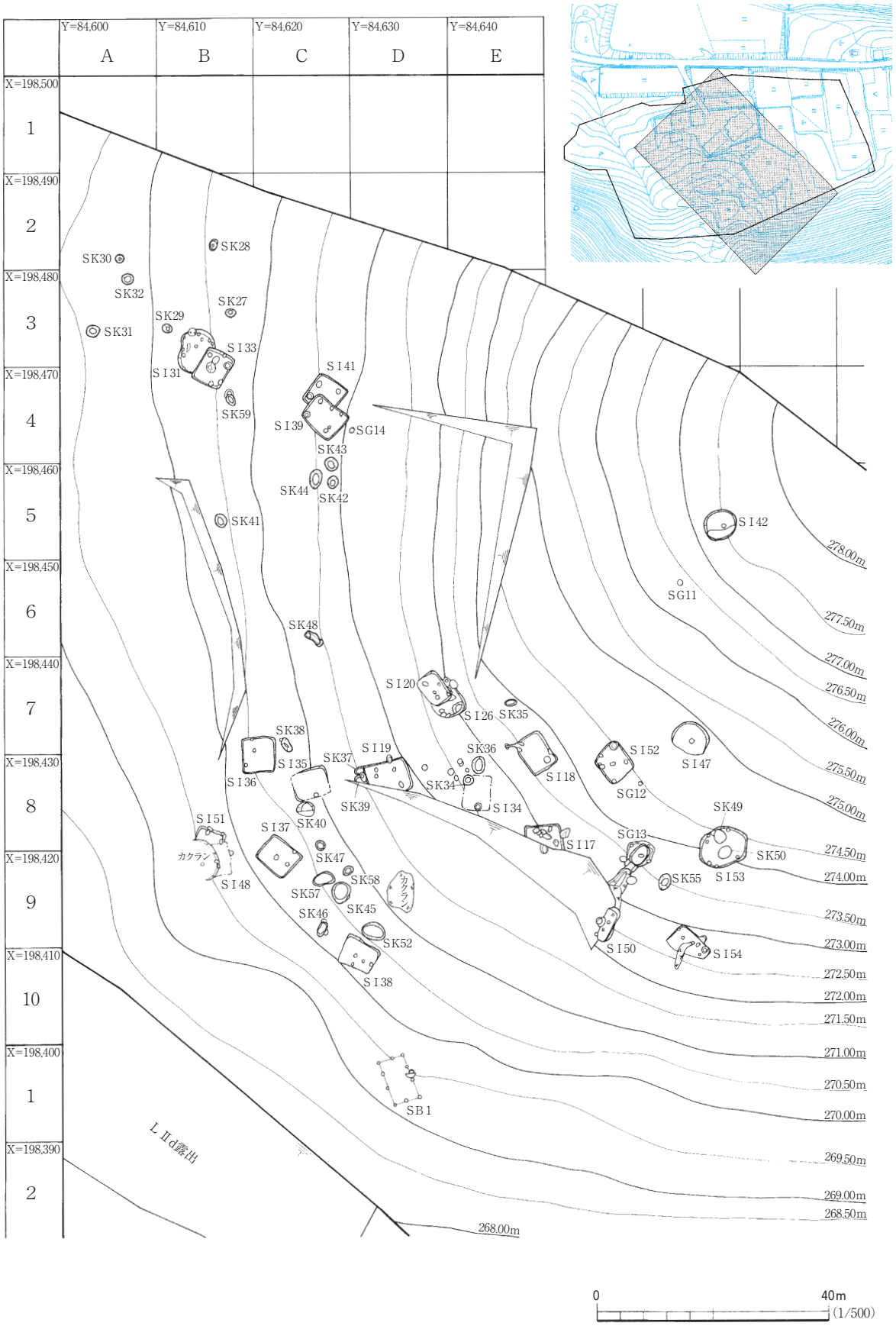


図６　遺構配置図（東地区中央）

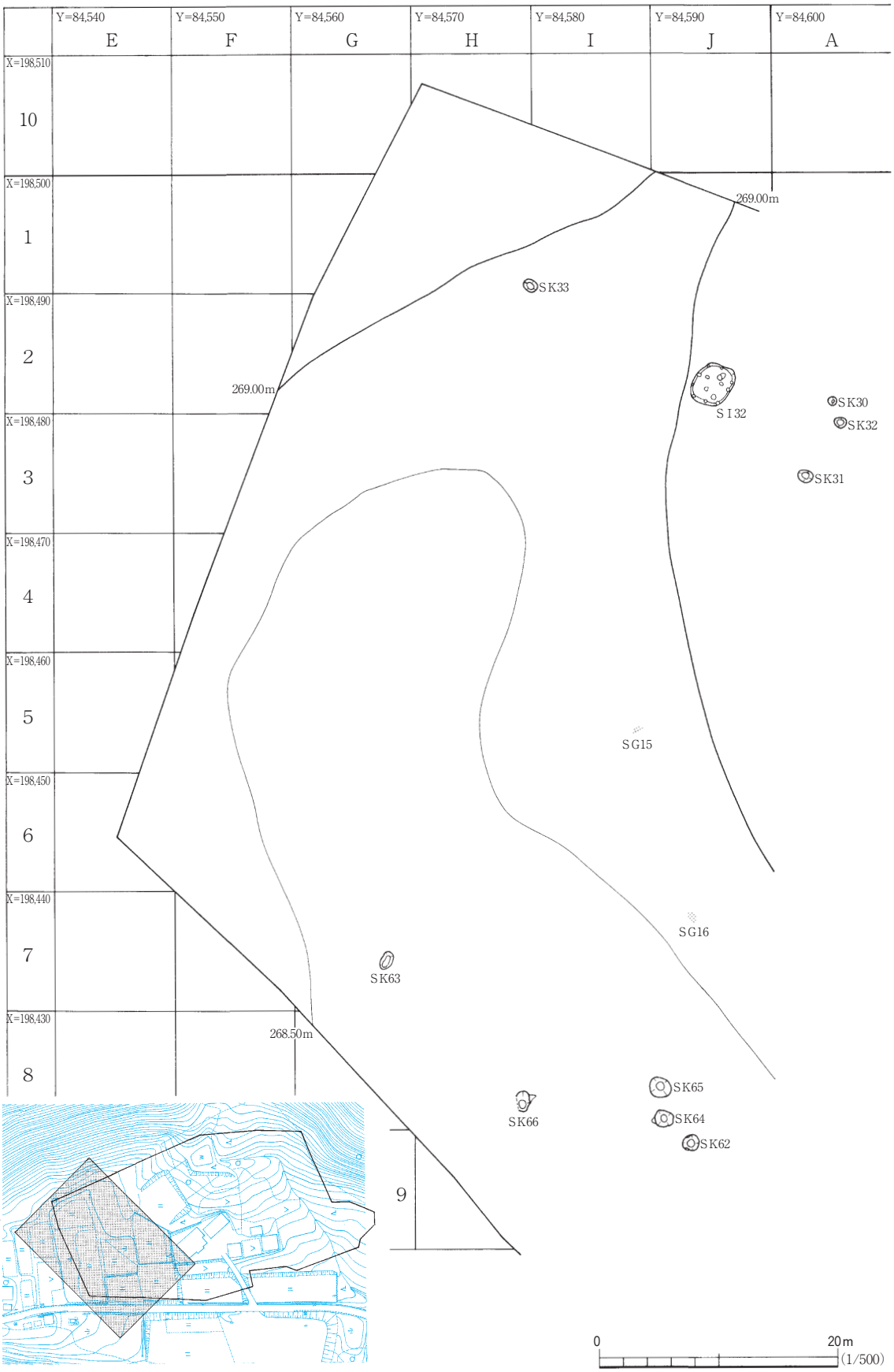


図７　遺構配置図（東地区西側）

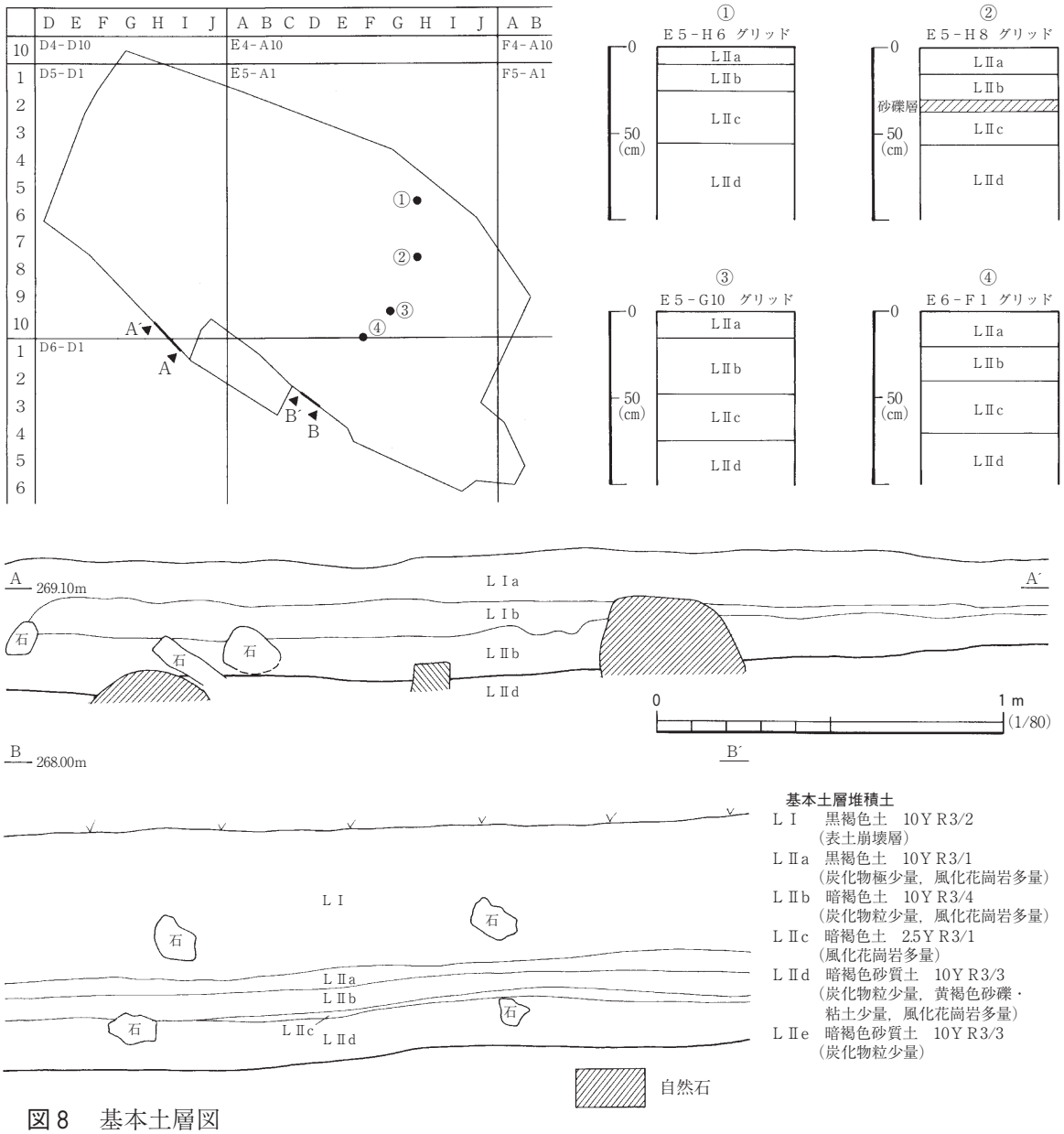


図８　基本土層図

また，土師器に次ぐ出土遺物の約３割が縄文・弥生土器で，その中で主体となる時期は，縄文時代晩期中葉から後葉にかけてのものである。縄文・弥生時代では翡翠の装飾品がある。弥生時代は中期前葉のものを中心とした土器が出土しており，真野ダム関連で発掘調査を実施した飯舘町岩下Ａ遺跡で出土した弥生土器と類似した特徴を有する。

これら遺構・遺物の分布から，本遺跡の東地区については，縄文時代から古代にかけての長期にわたる生活痕跡が見られた。各時期ともに遺物の出土量は，比較的多いことから，集落の規模は大規模とは言い難いが，山間地域の拠点的な集落跡として推察することができる。

また補足ではあるが，今回調査を行った東地区の下層には，縄文時代早期から前期初頭，および中期頃に属する集落跡が確認されている。これについては３次調査として，次年度以降調査を実施し，報告することとする。

基 本 土 層（図８）

荻平遺跡東地区の基本土層は，土質や含有物からＬＩ層～ＬⅡ層の大きく２層に分けた。さらに各層でも，地形ごとの堆積層の形成要因や含有物の違いなどから，ａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅを用いて細分している。なお，遺跡の立地する場所において欠落する層も認められる。土層観察は調査区境の壁面やグリッド杭を利用し，６地点で記録を行っている。

以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩ　：現在の表土層とその下位にある土砂崩落層をＬＩとして一括した。表土は有機質の多い黒褐色を呈している。土砂崩落層は北部の山間から流失したもので調査区中央から東側にかけて特に厚く堆積している。特に調査区東側では，ＬＩ層の厚さは５ｍ以上に及ぶことを確認した。層中は褐色を基調とするやや明るい土色で，風化した花崗岩礫を多量に含む特徴がある。調査に際しては重機による掘削を行った。層中に遺物は認められない。

ＬⅡ　：黒褐色を基調とする堆積土で，縄文時代早期から晩期，弥生時代・古代までの遺物を包含する堆積土を一括した。層中は風化した花崗岩礫を多量に含む特徴がある。また，地形的な分布や含有物などの特徴から，ＬⅡａ～ＬⅡｅに分けた。

ＬⅡａ：黒褐色土層で，調査区南西側を除くほぼ全域で確認できる遺物包含層である。斜面・平坦地に関係なくほぼ均一に堆積しており，その層厚は10～20㎝である。包含する遺物は，縄文時代晩期，弥生・古代の遺物を主体とし，それらが混在している。なお，本遺跡の多くの遺構内部に堆積している黒褐色土は，本層に起因するものである。

ＬⅡｂ：調査区全域で確認できる暗褐色土層である。層厚は15㎝～30㎝を測り，標高の低い西側へ行くほど厚く堆積している。今回検出した遺構は，ほぼ本層上面で検出したことから，少なくとも縄文時代晩期頃には，当時期の基盤層を構成していたと推察される。ＬⅡａと比べ遺物の包含量は極端に少ないが，縄文時代前期から後期の遺物を主体とし，それらが混在している。

ＬⅡｃ：調査区中央付近にのみ確認できた堆積層で，黒褐色を呈する。層厚は15～25㎝を測り，標高の低い南側へ行くほど厚く堆積している。遺物は包含していない。

ＬⅡｄ：黄褐色を基調とする堆積土で，下位にある土砂崩落層である。ＬＩと同様に北部の山間から流失したもので調査区中央から東側にかけて特に厚く堆積している。層厚は1.5ｍ以上を測り，北側に行くほど厚く堆積する。層中は巨大な花崗岩や土砂を多量に含む特徴がある。層中に遺物は認められない。

ＬⅡｅ：暗褐色砂質土で遺物包含層である。層中には炭化物を多く含み，特に調査区の南半部からは縄文時代早期から前期初頭に属する土器を包含する。次年度以降の３次調査は，本層からの調査を行う。

以上が，２次調査時に把握できた東地区の基本土層である。今回の調査では，大きく２段階の土

砂崩落層が認められ，重機を用いても掘削が困難であり，ＬⅡｅ層以下から基盤層に至るまでの層序は相当の掘削を要するため未確認であった。３次調査は，上述したＬⅡｅ層以下からの調査となるため，次回以降，下位層序を把握し記録・報告することにする。（稲　村）

第２節　竪穴住居跡

今回の調査では，竪穴住居跡が23軒検出された。内訳は，縄文時代後期～晩期（４軒），弥生時代（１軒），平安時代（18軒）である。山間から流失した崩落層が堆積する，標高の高い調査区中央から西側区域にかけて分布し，巨石や礫層を避けて竪穴住居を構築するためか，調査区内でも花崗岩の露頭が少ない地点で重複して構築される例もみられ，地利用が制限された結果と考えられる。また，平安時代の住居跡は，カマドを有する方形基調の竪穴住居跡が少なく，カマドを有せず床面に炉跡のみをともなう住居跡の形態が多い特徴が認められる。出土遺物の特徴から，平安時代前期～中期に属するものと思われる。

なお，竪穴住居の規模等は表２にまとめた。以下，遺構番号順に説明を行う。

17号住居跡　ＳＩ17

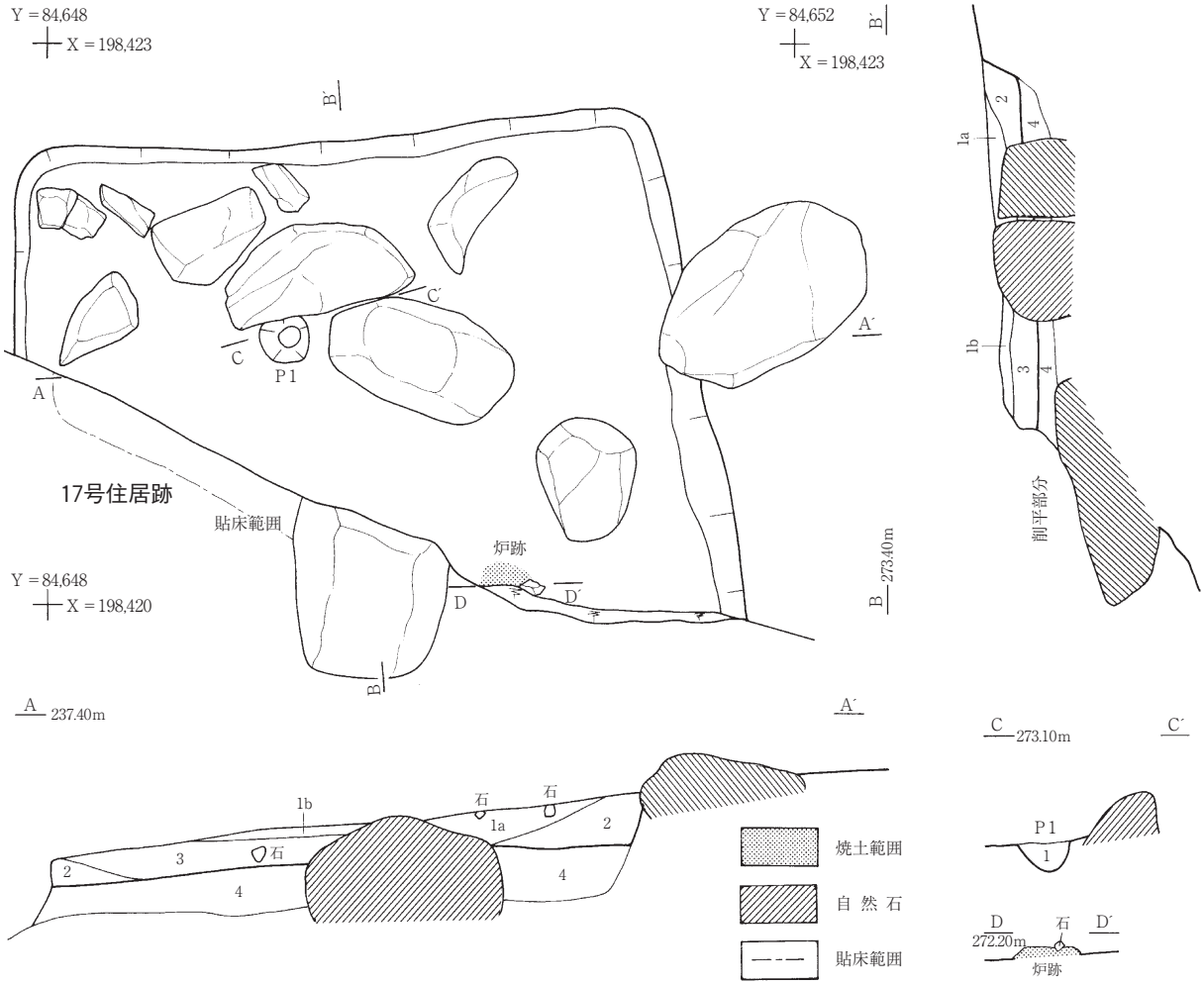
遺　　構（図９，写真５・６）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｅ・Ｆ８・９グリッドに位置する。南側は後世の宅地造成時に切り崩された削土となっており，このため南側の遺構は破壊されている。遺構はこの削土の壁面精査時に焼土や壁の立ち上がりなどを確認し，その後に平面形を検出した。これは検出時に遺構内の堆積土と基本層であるＬⅡａ層との認識が土の乾燥や土質の類似性などから困難であったためであり，各遺構とも遺構の検出には時間を費やす結果となった。重複する遺構はなく，遺構の北西側4.3ｍの地点に34号住居跡が，東側約６ｍの地点に13号焼土遺構が，北側5.3ｍの地点に18号住居跡がそれぞれ位置する。

平面形は後世の削土により北壁を除く各壁が破壊されているものの，隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は東西軸が3.58ｍ，南北軸が最大2.75ｍで，北辺の中点と遺存している東西辺の中点を結んだ主軸方位は西に４度偏する。

堆積土は４層からなる。１層は土質の違いからａ・ｂに細分した。床面中央に露出した花崗岩を境に異なっており，遺構の北側一帯が暗褐色土，南側一帯が黒褐色土となる。２層はにぶい黄褐色土で，壁面への流入土となる。３層の灰黄褐色土も廃絶後の堆積層である。１～３層はレンズ状の堆積を示すことから，自然堆積と考えられる。４層はＬⅡｂ塊を多く含むことから貼床の埋土で，粘土などは一切用いておらず，床面もそれほどは堅くない。炉跡はこの４層の上面で確認した。

床面は，南側に移行するにしたがって若干傾斜する。また，花崗岩の露出する箇所が10箇所ほど確認され，床面の土が露出している範囲が住居の北東隅と南側しか認められない。中央部には長軸



17号住居跡堆積土

1a　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3（しまりなし，炭化粒・焼土粒微量）
1b　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/1（しまりなし，炭化粒・焼土粒微量）
２　にぶい黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/3（しまりなし，礫多量）
３　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/2（しまりなし，礫多量）
４　灰黄褐色土　10Ｙ Ｒ4/2と黄褐色土10Ｙ Ｒ5/6の混土
（しまりあり，炭化物少量）

17号住居跡炉堆積土

１　明黄褐色土　5Ｙ Ｒ5/6（しまりあり）

Ｐ１堆積土

１　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/2（しまりなし，ＬⅡｃ・炭化粒少量）

0　2 m（1/40）

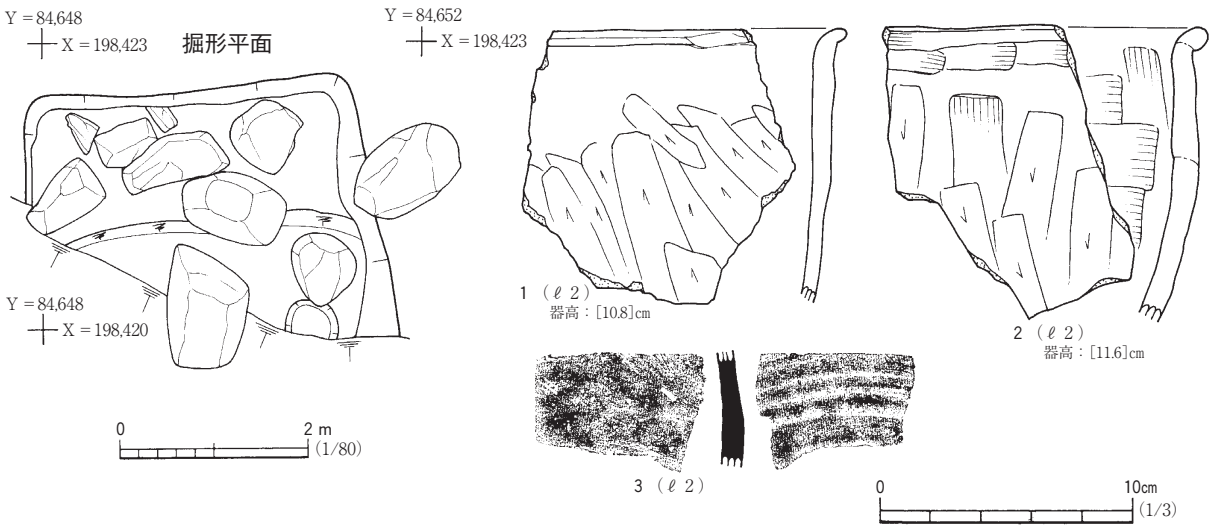


図９　17号住居跡・出土遺物

１ｍ弱の石が露出している。これは，住居構築時に石を除くことが困難であったために残したものと推測される。いずれにせよ，非常に居住性の悪い住居と言わざるを得ない。周壁は各壁とも60～70度前後で立ち上がり，各壁の床面からの遺存高は北壁で20㎝，東壁で27㎝，西壁で17㎝をそれぞれ測る。

床面からは，ピット１基と炉跡１基をそれぞれ検出した。ピットは，床面中央やや西側に位置する。北側に露出した花崗岩を壁面としている。平面形は不整円形を呈し，長軸27㎝，短軸24㎝，床面からの深さは14㎝と浅い。堆積土は黒褐色土の単層である。柱穴には浅いことから，その性格は判断しがたい。ピット内から遺物は出土していない。

炉跡は床面の南東に位置し，多くは後世の削土で破壊されていた。確認された焼土化の範囲は長軸27㎝，短軸14㎝以上である。炉の土色は明赤褐色土であったが，床面が砂質ゆえに堅くはなかった。赤色化は床面から深さ５㎝ほど及んでいた。また，その周囲からは鉄滓が出土している。このため周囲の堆積土も一部洗浄して微細遺物の確認に努めたが，鍛造剥片や粒状滓などの鍛冶関連遺物を見いだすことはできなかった。

貼床の除去後にピット１基を検出した。炉跡の下部に位置することから，本来は炉跡構築時の掘形であった可能性が高い。掘形底面からの深さは９㎝を測る。また，掘形は住居の中央に一段緩やかな段差が生じている。このため南側に移行するにしたがって標高が低くなる。北側との比高差が10㎝ほどである。

遺　　物（図９，写真59）

遺物はおもに堆積土の２層から出土し，床面からの遺物は20点にも満たない。出土遺物の破片数は縄文土器１点，土師器107点，須恵器１点，石器４点（剥片）となり，このうち３点を示した。このほかに，鉄滓が床面から８ｇ（１点）出土している。

９図１・２は土師器甕である。ともに非ロクロ成形の口縁部～胴部上半の資料で，短く外反する口縁部を有する。３は内面に絞りの痕跡が認められることから須恵器瓶類の胴部片と思われる。

ま　と　め

本遺構は，一辺４ｍに満たない小型の住居である。住居には炉とピットがあることから，一見すると住居に相応しいが，巨大な花崗岩が床面から多く露出しており，寝られるようなスペースは存在しない。ゆえに，常時ここに人が住んでいたかどうかは疑問である。また，鉄滓の出土などから鍛冶工房とも考えたが，それを証明するだけの資料は得られていない。ここでは，広義の作業小屋などの臨時的な施設と考えておきたい。出土した遺物から，９世紀後半以降の所産と考えられる。

（管　野）

18号住居跡　ＳＩ18

遺　　構（図10・11，写真７・８）

本遺構は，調査区中央部のＥ５－Ｅ・Ｆ７・８グリッドに位置する。遺構は，南西側に傾斜する

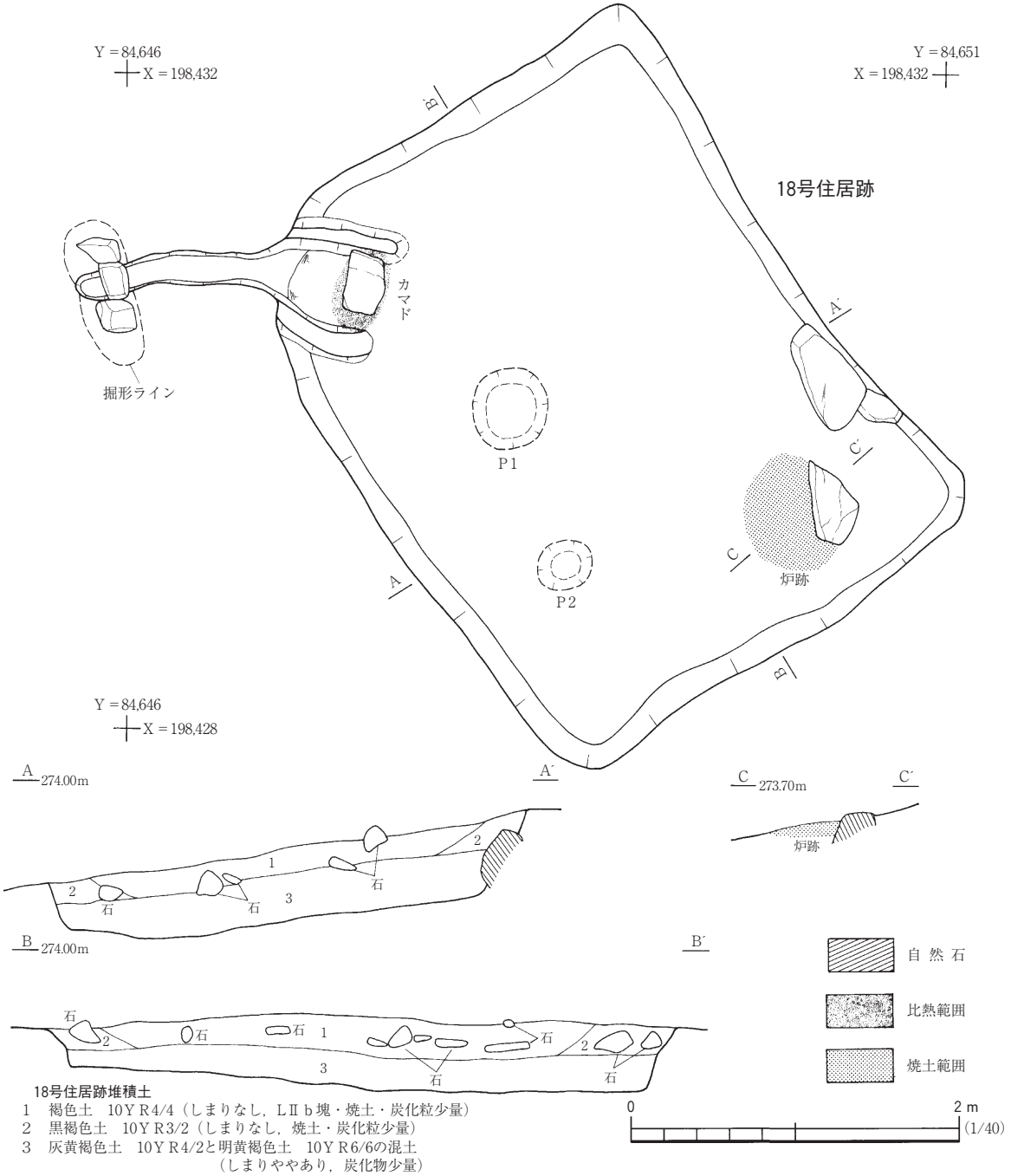


図10　18号住居跡

斜面に構築されており，等高線にほぼ平行して位置している。検出面はＬⅡｂ層上面となる。遺構の検出時に土師器甕が集中して出土し，精査の結果長方形のプランおよびカマドの煙道と思われる張り出しを検出した。重複する遺構はないが，北側3.5mの地点に35号土坑，西側４mの地点に36号土坑，南側5.3mの地点に17号住居跡，東側3.8mの地点に52号住居跡がそれぞれ位置する。

平面形は整った隅丸長方形を呈し，北西コーナーにカマドが取り付けられている。規模は南北軸で3.85m，東西軸で2.96mをそれぞれ測る。南北辺の中点を結んだ主軸方向は34度西に偏する。

堆積土は３層からなる。１層は黒褐色土を少量含む褐色土，２層は黒褐色土で，ともに焼土粒や

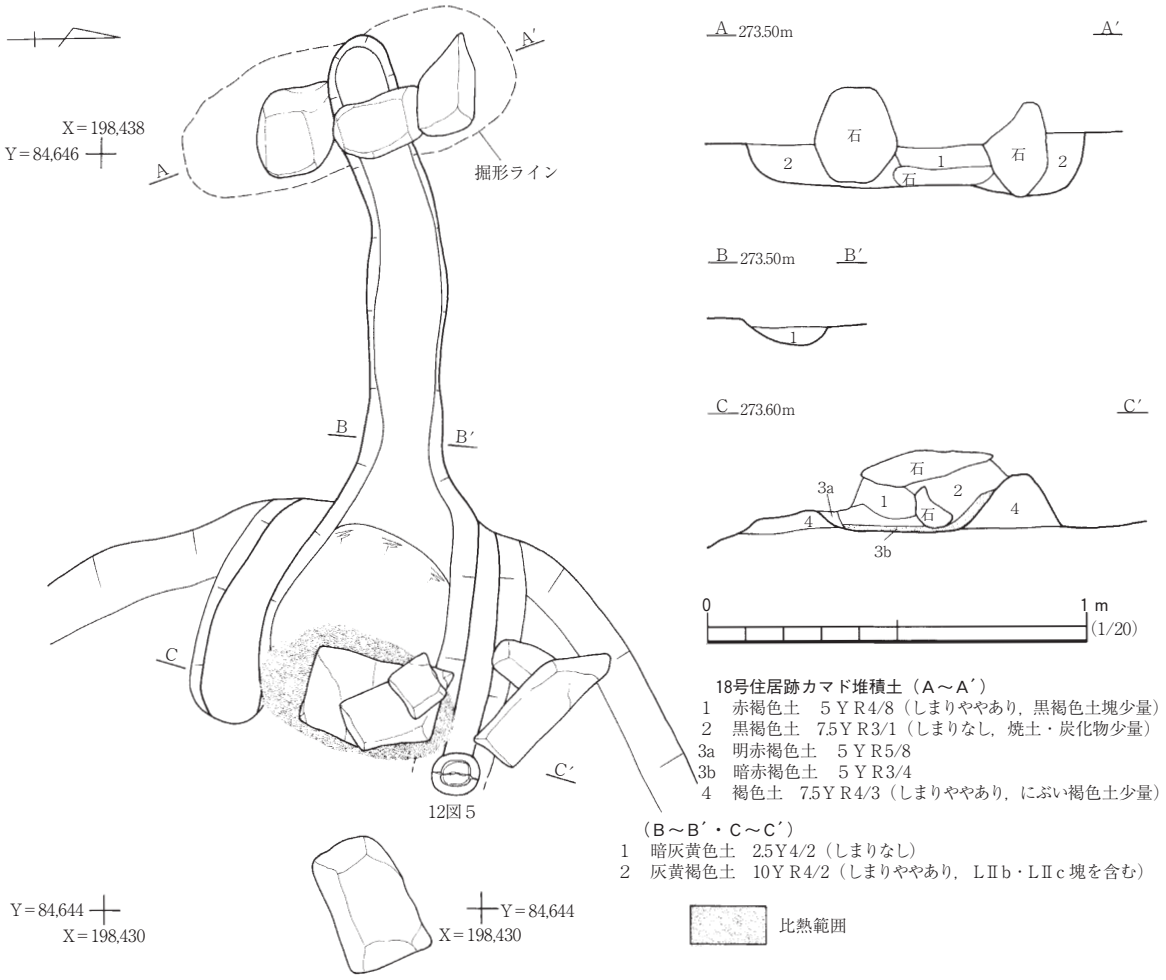


図11　18号住居跡，カマド

炭化物を含む。２層は堆積状況から壁流入土であり，１層も自然堆積と判断した。また，１・２層ともに花崗岩を多く含む。３層は貼床で，床面の全体に施されていた。灰黄褐色土と明黄褐色土の混土で砂質が強いものの，床面は堅くしまっていた。この貼床の上で，カマドや炉跡を検出した。

床面は，南に移行するにしたがって低くなり，東壁と西壁の標高差は34cmを示す。かなりの傾斜をもつ床面となり，調査時に若干掘りすぎてしまった箇所が存在する。また，床面には長軸20cm内外の礫が露出していたが，40cm以上の礫は炉跡と東壁の２箇所のみで確認された。周壁は各壁とも50度前後で立ち上がり，各壁の床面からの遺存高は北壁で17cm，西壁で14cm，東壁で18cm，南壁で13cmをそれぞれ測る。

床面からは，カマドと炉跡をそれぞれ１基検出した。なお，床面から掘り込まれたピットは確認されなかった。カマドは，住居の北西コーナーに位置する。遺存状態は比較的良好であったが，カマド構築土や煙道の掘り込みが不明瞭で，その精査に時間を費やす結果となった。また，検出時にはすでに，燃焼部から土師器甕が１点，右袖から高台坏１点がそれぞれ露出していた。

カマド燃焼部から煙出しの長さは1.9mを測り，煙道部から煙出しにかけて南側に屈曲する。両袖はＬⅡｂ層起源の褐色土とにぶい褐色系の混土で構築されていたが，袖内に粘土は一切用いられ

ていない。また，燃焼部の上面には長軸36cm，短軸23cm，厚９cmの平らな花崗岩が置かれていた。袖の長さは両袖とも60cm以上を測り，袖の床面からの高さは右袖で13cm，左袖で５cm程度の残存である。燃焼部の範囲は奥行き58cm，最大幅52cmで，手前のみが被熱により酸化していた。煙道部の長さ134cm，煙道部の幅18～25cm，深さ６cmをそれぞれ測り，煙出しの左右には長軸25cm，厚さ25cm内外の花崗岩，煙出しの底面には長軸23cm，短軸15cm，厚４cmの花崗岩が置かれていた。また，長軸92cm，短軸34cm，検出面からの深さ16cmの掘形が観察され，掘形を構築後に石を埋めて立てたものと判断した。この掘形や石の位置などから，この花崗岩は煙出しに水が入らないための造作で，本来は天井石があったものと推測される。

カマドの堆積土は，燃焼部が４層，煙道部が１層からなる。燃焼部の１・２層は黒褐色土塊を多く含み，カマドの天井崩落土ないし破壊時の堆積層，３ａ・３ｂ層は赤変した酸化面，４層は袖の構築土となる。また，煙道部は灰黄褐色土の単層のみとなる。

炉跡はカマドと反対側の，南東コーナーに位置する。東側は床面に花崗岩が露出しており，石には被熱が観察された。炉の長軸71cm，短軸42cmをそれぞれ測り，酸化面の厚さは５cm程度である。炉跡内から遺物の出土はなく，集石なども認められなかった。

貼床除去後にピット２基を検出した。ともに平面形はやや歪んだ円形を呈する。Ｐ１は床面中央やや西側に位置し，長軸48cm，短軸45cm，掘形底面からの深さ16cmを測る。Ｐ２は床面の南西側に位置し，長軸34cm，短軸29cm，掘形底面からの深さ17cmを測る。各々のピットから遺物はなく，堆積土も貼床と同様な埋土であった。

遺　　物（図12，写真59・60）

遺物は主に１層から出土しており，床面からの出土は非常に少ない。破片数は弥生土器が42点，土師器が178点となり，このうち11点を掲載した。

１は弥生土器で，甕と考えられる資料である。遺構外の個体と接合した個体で，内彎する胴部上半から「く」の字に外反する口縁部がとりつく。胴部のみ地文であるＬＲ縄文で，一部横方向の結節回転が観察され，他はナデとなる。弥生時代中期頃の所産と考えられよう。なお，示していない弥生土器の大半は地文などから同一個体である可能性が高い。２～11は土師器となる。２～４は杯で，いずれも内面に黒色処理がされている。しかし内面のミガキが粗い個体が多く，その結果光沢化はしていない。また，３は被熱を受けて黒色処理が消滅している箇所が観察される。底部切り離しは３が回転ヘラ切り，４が回転糸切りとなる。５はカマド上面から出土した高台杯である。底部および高台部は完存しているが，口縁部が欠損している。短い「ハ」の字状を呈する高台を有し，内面は３同様，黒色処理がほとんど消滅している。６は鉢である。口縁部～体部のみの残存であるが，いわゆる鉄鉢形を呈するものとなろう。調整は内外面ロクロ成形で，外面は被熱で剥離している地点が観察される。７～11は甕を掲載した。７は非ロクロ成形の甕で，口縁部から胴部までの破片である。短く直立気味の口縁部を有し，胴部内面はナデ，胴部外面は主に縦方向のケズリがみられる。胎土は石英などの夾雑物が多い粗雑なもので，この石英が多く器表面に露出している。８・

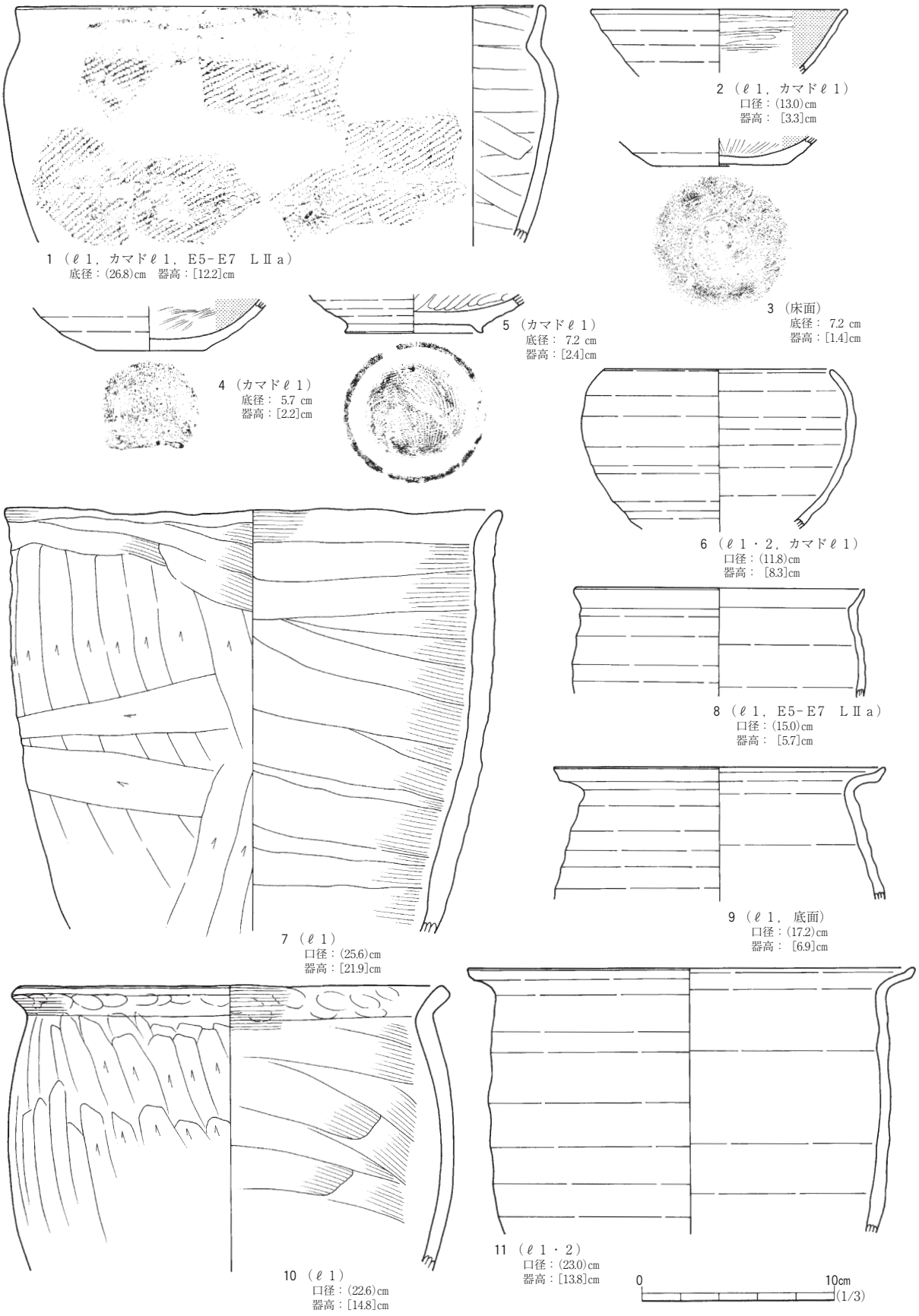


図12　18号住居跡出土遺物

９はロクロ成形の小型甕である。８は25％程度の残存率で，胴部下半は欠損している。「く」の字状に外反する口縁部を有し，端部は直立気味に引き上げている。９は床面南東部で出土した甕で，口縁部は強く屈曲して外反し，端部は面を有する。10は胴部下半を欠損するが，砲弾形を呈する胴部に「く」の字に外反する口縁部がとりつく非ロクロ成形の甕である。７同様，胎土は非常に粗く，口縁部には成形時の指頭痕が多く観察される。11はロクロ成形の甕で，屈曲度は異なるものの，口縁部は９と同様である。

ま　と　め

本遺構は，長軸４ｍ弱の竪穴住居である。北西コーナーに半地下式の煙道を有するカマド，北東部には炉跡がそれぞれ付属する。カマドと炉跡双方を有する住居は54号住居跡のみである。本遺跡の竪穴住居跡では希有な構造といえ，竪穴自体の性格が異なっていた可能性が高い。また，出土した鉄鉢模倣の土師器が特筆されよう。出土遺物から時期は９世紀後半を中心とする年代と考えたい。

（管　野）

19号住居跡　ＳＩ19

遺　　構（図13，写真９・10）

調査区中央やや南側のＥ５－Ｄ８グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。住居は17号住居跡と同様，南側は後世の宅地造成時に切り崩された削土となっており，このため住居の南辺と西辺の一部は破壊されている。37・39号土坑，ＧＰ１と重複関係を有し，いずれも本遺構が古い。

平面形は南西コーナーが消滅しているものの，隅丸長方形を呈すると考えられる。また，北東辺はやや北側に張り出している。規模は東西軸が4.43ｍ，南北軸が最大3.47ｍで，北辺の中点と遺存している東西辺の中点を結んだ主軸方位は西に14度偏する。

堆積土は４層からなる。１～３層は住居の堆積層，４層は貼床となる。１層は黒褐色土で，住居の西側一帯に堆積する。これに対して２層は住居の東側に堆積するが，その差は漸移的である。３層はその堆積状況から壁面からの流入土である。４層は灰黄褐色土と暗褐色土，にぶい黄褐色土の混土で，貼床の埋土である。ピットはこの４層上面で検出している。

床面は，東西方向に若干傾斜し，この東西の床面における比高差は約10㎝である。床面は石が多く露出しており，特に床面の中央には長軸90㎝，短軸50㎝内外の花崗岩が抜き取られることなく露出していた。周壁は各壁とも緩やかに立ち上がり，各壁の床面からの遺存高は北壁で５㎝，西壁で７㎝，東壁で15㎝をそれぞれ測る。

床面からはピットを４基検出した。住居の北西側のピットから時計回りにＰ１・Ｐ２と番号を付して調査を実施した。なお，炉跡は確認されなかったが，精査時にＰ３付近で焼土粒を多く確認している。このため，Ｐ３の西側付近にあった可能性が高いが，調査時には明確な酸化面が見いだせなかった。Ｐ１は床面の北西部に位置する。平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，西側の一部は段差が生じている。規模は長軸43㎝，短軸38㎝，床面からの深さ22㎝を測る。Ｐ２は床面の

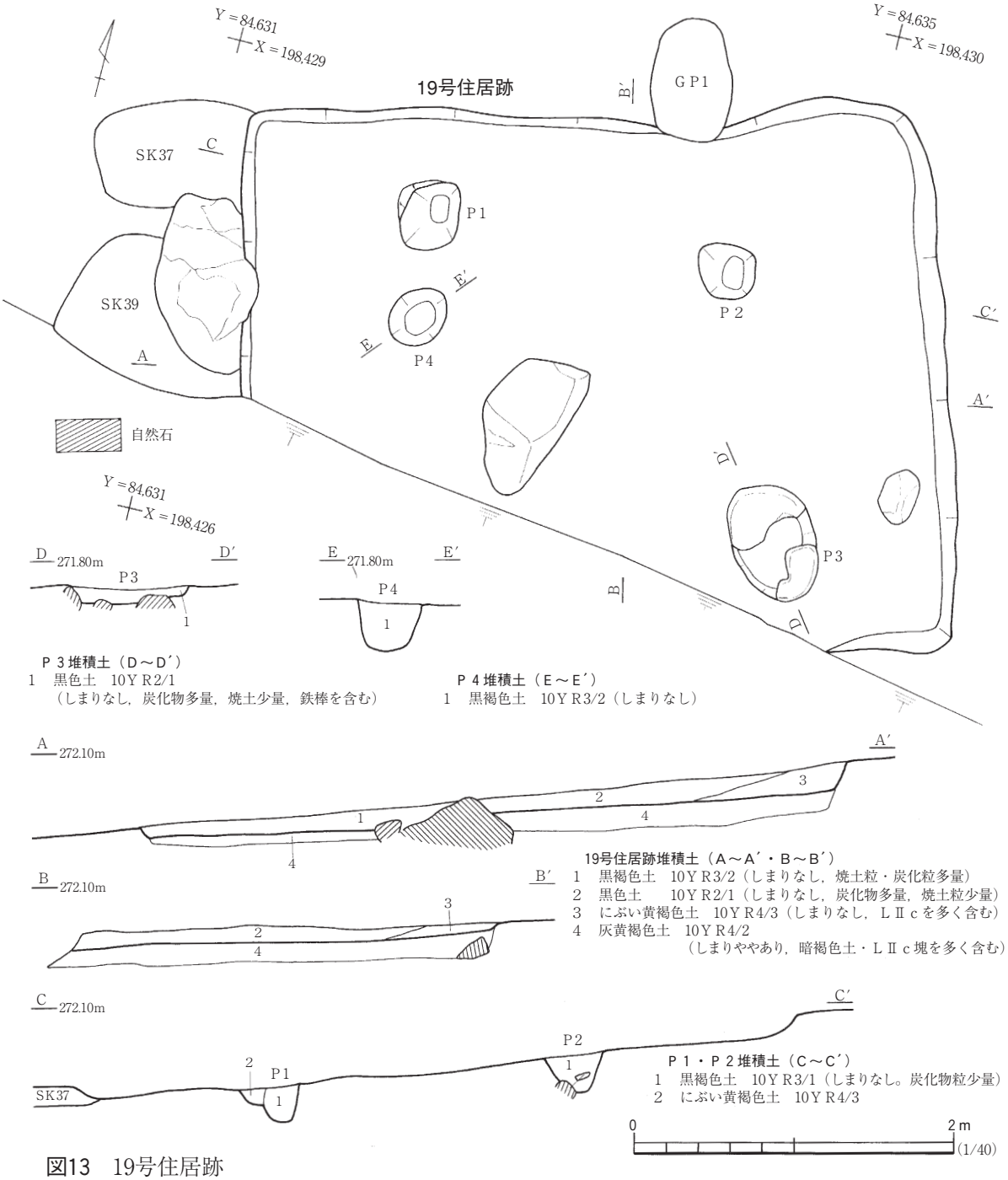


図13　19号住居跡

北東部に位置し，平面形は不整の隅丸方形を呈する。規模は南北軸で35cm，深さ24cmを測る。Ｐ３は床面の南東側に位置し，平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。規模は長軸76cm，短軸51cmと他のピットより大きい。また，深さも８cmと浅い。堆積土は黒色土の単層で，モモ属と思われる炭化した種子が多く含まれる。また，北側および南側は基盤層である花崗岩が露出しており，ピットはこれを底面ないし壁面としている。Ｐ４はＰ１の南側23cmの地点に位置し，平面形は楕円形を呈する。規模は長軸40cm，短軸33cm，床面からの深さ33cmをそれぞれ測る。

貼床除去後の掘形には，床下ピットなどの地下施設が確認されなかった。露出した基盤層の礫は

住居の南東部に集中しており，他の地点では少ない特徴を指摘できる。

遺　　物（図14，写真61）

遺物は土師器303点，須恵器１点，石器４点，鉄製品２点の合計310点が出土し，このうち図示可能な５点を示した。堆積土中のものが大半を占め，床面・床直の出土は41点のみとなる。なお，住居の南東側からモモ属と思われる炭化種子が約20ｇ出土した。１は床面の南端で出土した杯となる。残存度は底部のみの完存となる。底径は6.2cmを測り，内面は放射状のミガキののちに黒色処理が施されている。２は筒形土器の破片資料である。３は須恵器甕の胴部片で，外面は平行線状の叩き目，内面はそれに対応する円形の当て具痕ののちにナデが観察される。４・５は鉄製品である。４は鏃身部が二又に分岐したいわゆる雁又の鉄鏃となる。鏃身部と茎部が一部欠損しているものの，地金自体の残りは良好である。箆被の形態は台状関を呈する。

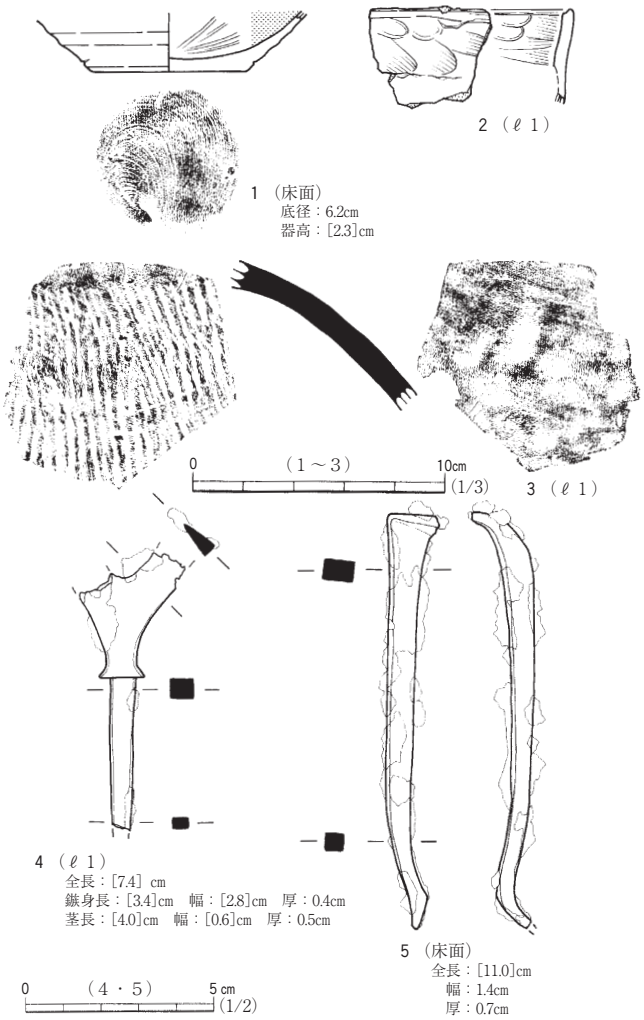


図14　19号住居跡出土遺物

５は床面から出土した鉄釘となり，先端部が欠損している。頭部は扁平につぶしたのちに折り返している。全長は11cm以上となり，規模的には大型の釘となろう。

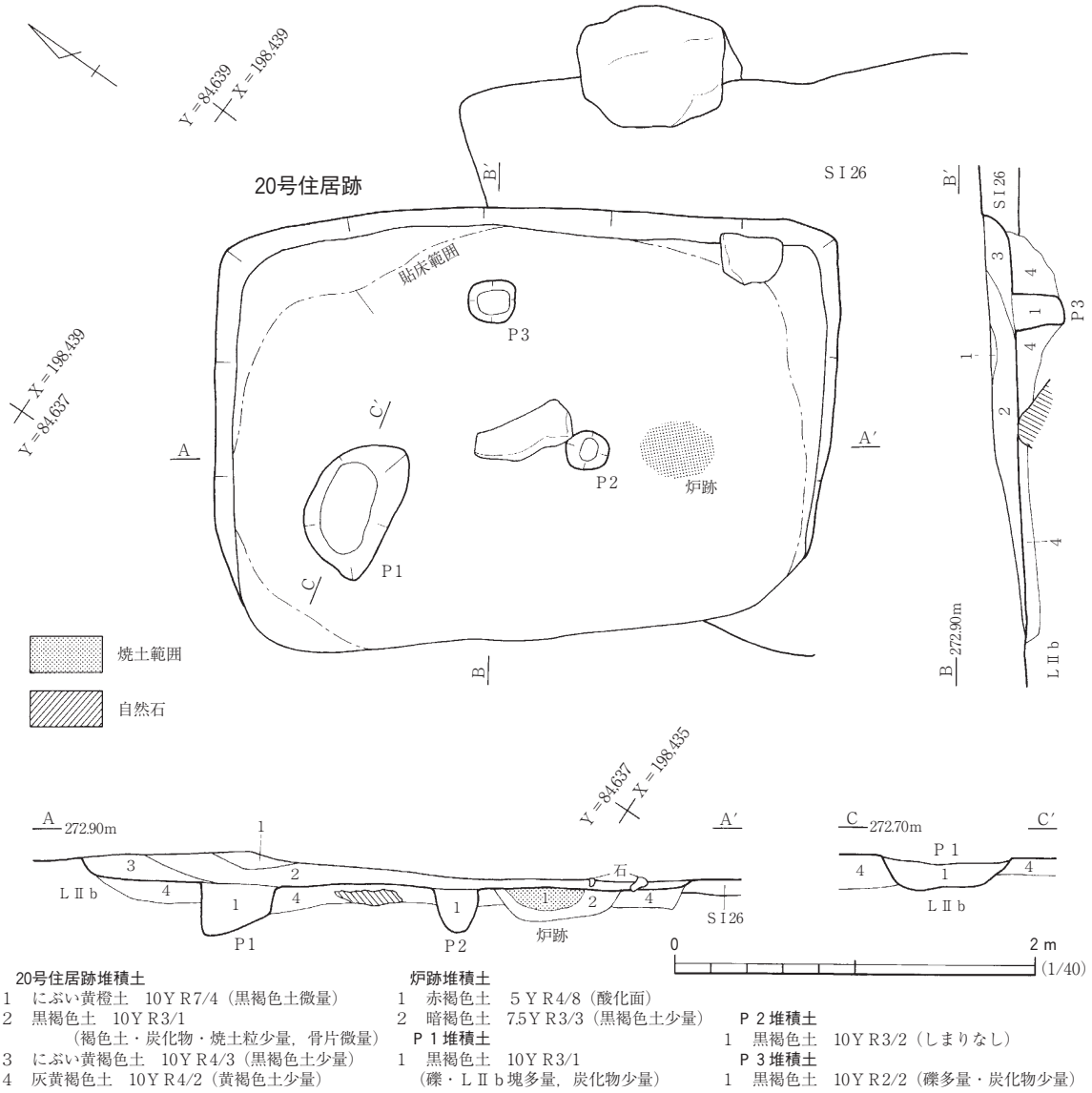
ま　と　め

本住居は，東西軸が4.5ｍを呈する本遺跡では規模の大きい部類に属する竪穴住居である。カマドや炉跡は発見されなかったが，堆積土に焼土粒が認められたことなどを勘案すると，削平された南西側にあった可能性が高いと推測可能である。出土遺物が少なく詳細な時期を限定できないが，９世紀後半～10世紀代の所産と考えている。（管　野）

20号住居跡　ＳＩ20

遺　　構（図15，写真11・12）

本遺構は調査東地区のＥ５－Ｄ７グリッドに位置する竪穴住居跡である。西向き緩斜面の中腹部に立地している。標高は272.0～273.0ｍである。遺構検出面はＬⅡｂ上面である。本遺構は26号住居跡の廃絶後に構築されることが確認できた。また本住居跡の北側は近年の田畑開削によって旧地形が



20号住居跡堆積土
1　にぶい黄橙土　10YR7/4（黒褐色土微量）
2　黒褐色土　10YR3/1
　（褐色土・炭化物・焼土粒少量，骨片微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒褐色土少量）
4　灰黄褐色土　10YR4/2（黄褐色土少量）

炉跡堆積土
1　赤褐色土　5YR4/8（酸化面）
2　暗褐色土　7.5YR3/3（黒褐色土少量）

P１堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
　（礫・LⅡb塊多量，炭化物少量）

P２堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（しまりなし）

P３堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（礫多量・炭化物少量）

図15　20号住居跡

大きく削平されているため，遺構や遺物は遺存していない。一方南側は，該期の竪穴住居跡が比較的集中して分布する。

本住居跡は長方形プランの小規模な住居跡で，住居内にカマドがなく，床面上に炉跡を伴う特徴がある。遺構内堆積土は４層に分けた。１～３層は床面を覆う流入土で，斜面上位からの流入土で埋没したものと考えている。４層は貼床土で，花崗岩が多数露出する住居の掘形を埋めて，平坦な床面を造っている。

規模は長軸の長さが3.4m，短軸の長さが2.4m，検出面から床面までの深さが0.15mを測る。住居跡の周壁は，斜面下位側となる南西壁は遺存していないが，その他の周壁では急峻な壁の立ち上がりが確認できた。床面は部分的に基盤土に含まれる花崗岩が露頭するが，ほぼ平坦である。床面上の施設として，炉跡とＰ１～Ｐ３とした小穴を確認した。炉跡は床面に中央からやや南東よりの位置にある。床面を掘り込む掘形を持つ構造で，その掘形を埋め戻した上面を炉の火床面として

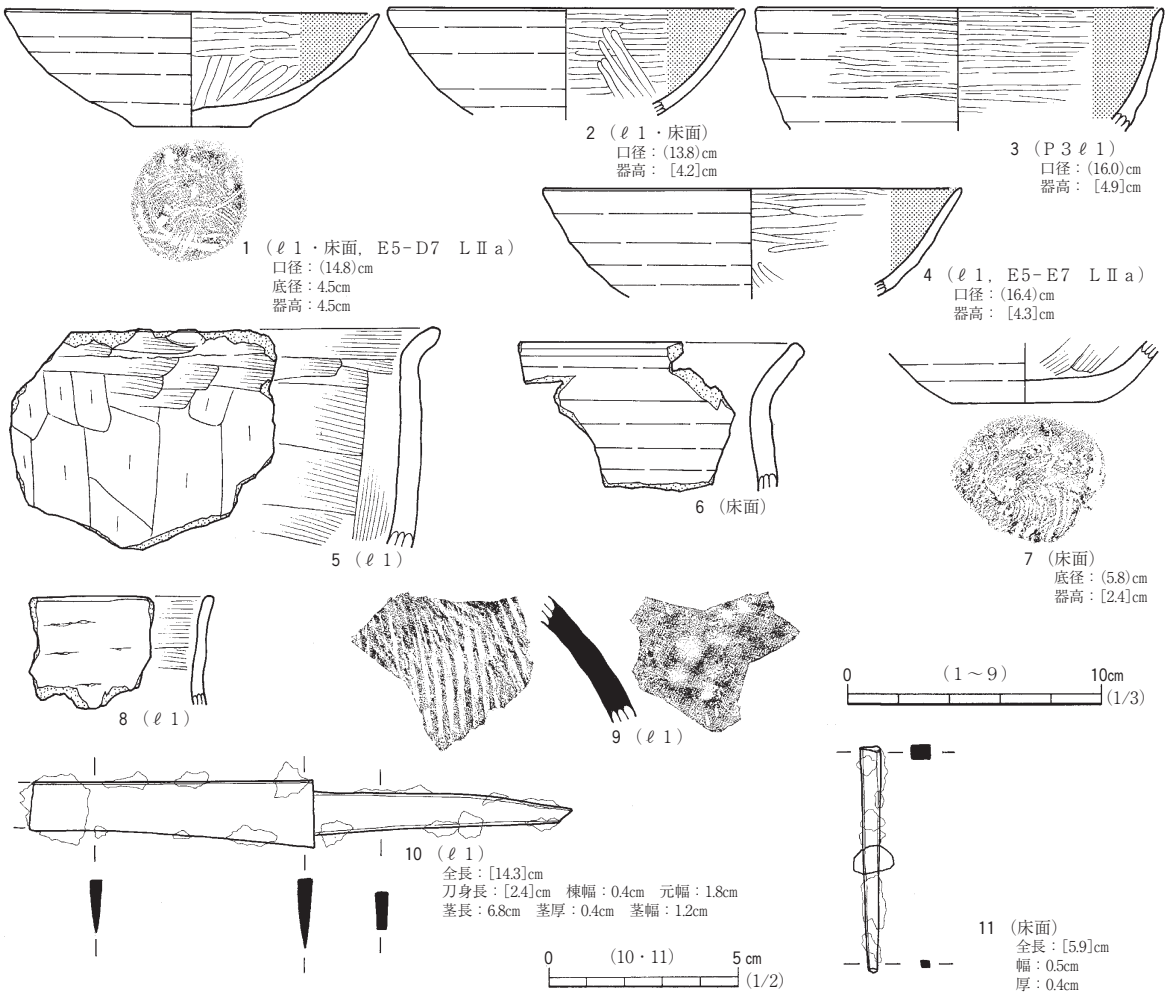


図16　20号住居跡出土遺物

いる。Ｐ１は床面の北東隅に位置する小穴である。平面形は不整な楕円形をなす。堆積土の観察から，住居の機能時には開口していたものと考えているが，その性格は不明である。Ｐ２・３は円筒形の小穴で，直径0.22mで，床面からの深さが0.3mを測る。柱穴の数や配置などが不明瞭でさらに検討を要するが，上屋を支える柱穴の一部となる可能性を指摘しておく。

遺　　物（図16，写真61）

20号住居跡からは，平安時代に属する土師器片が275点，須恵器片が１点，鉄製品が２点，鉄滓が２点出土した。その他に縄文時代と考えられる石器片が２点出土している。

１～４は土師器杯である。成形にロクロが用いられ，内面黒色処理される。１は体部がやや丸みを帯びる器形で，底径が小さい特徴がある。底部の切り離しは回転糸きりで，底部下半の再調整は施されない。内面は口縁部付近が横位ミガキ，体部下半から底面にかけての部位は放射状ミガキが施される。３は体部が直線的に立ち上がり，やや器高がある鉢形をなすのであろう。外面に横位ミガキが施される特徴がある。５・６は土師器甕の破片である。５は成形にロクロが用いられていない。直線的に立ち上がる胴部から，幅の狭い口縁部が開く器形である。外面の調整痕は，口縁部は横位ナデ，胴部は縦位のケズリによって整形される。胴部の内面はヘラナデを主体とし，口縁部は

横位ナデで丁寧に仕上げられる。６はロクロを用いて成形された甕である。口縁部が外傾して開く器形であろう。８は筒型土器の口縁部破片である。内外面とも摩滅が著しく，製作痕跡は不鮮明であるが，外面は粘土紐の積上げ痕が残る。内面は横位の指ナデが観察できる。９は須恵器甕の胴部破片である。外面にはタタキ目，内面には無文のアテ具痕が観察できる。

10は刀子である。切先が欠損するが，遺存状態は良好である。刀身と柄部の境に直角に切り落とされた棟関，刃関が観察できる。柄部は端部に向かって徐々に幅を減じ，その端部は斜めに切り落とされる。11は鉄鏃の茎部であろう。断面形は整った正方形をなす。

その他に堆積土中や炉跡周辺で骨片が十数点出土した。いずれも火熱を受けて，もろい小破片となっているため，骨の種類や部位は不明である。

ま　と　め

20号竪穴住居跡はカマドを持たず，床面に炉跡を伴う特徴がある。炉跡の性格として，鉄滓２点の他に，堆積土を水洗しても鍛冶関連遺物が確認できないことから，鍛冶炉とするには検討を要する。本住居跡の年代は，重複する26号住居跡よりも新しく，床面から出土した遺物の年代観から，９世紀後半から10世紀前半代と考えている。（福　田）

26号住居跡　ＳＩ26

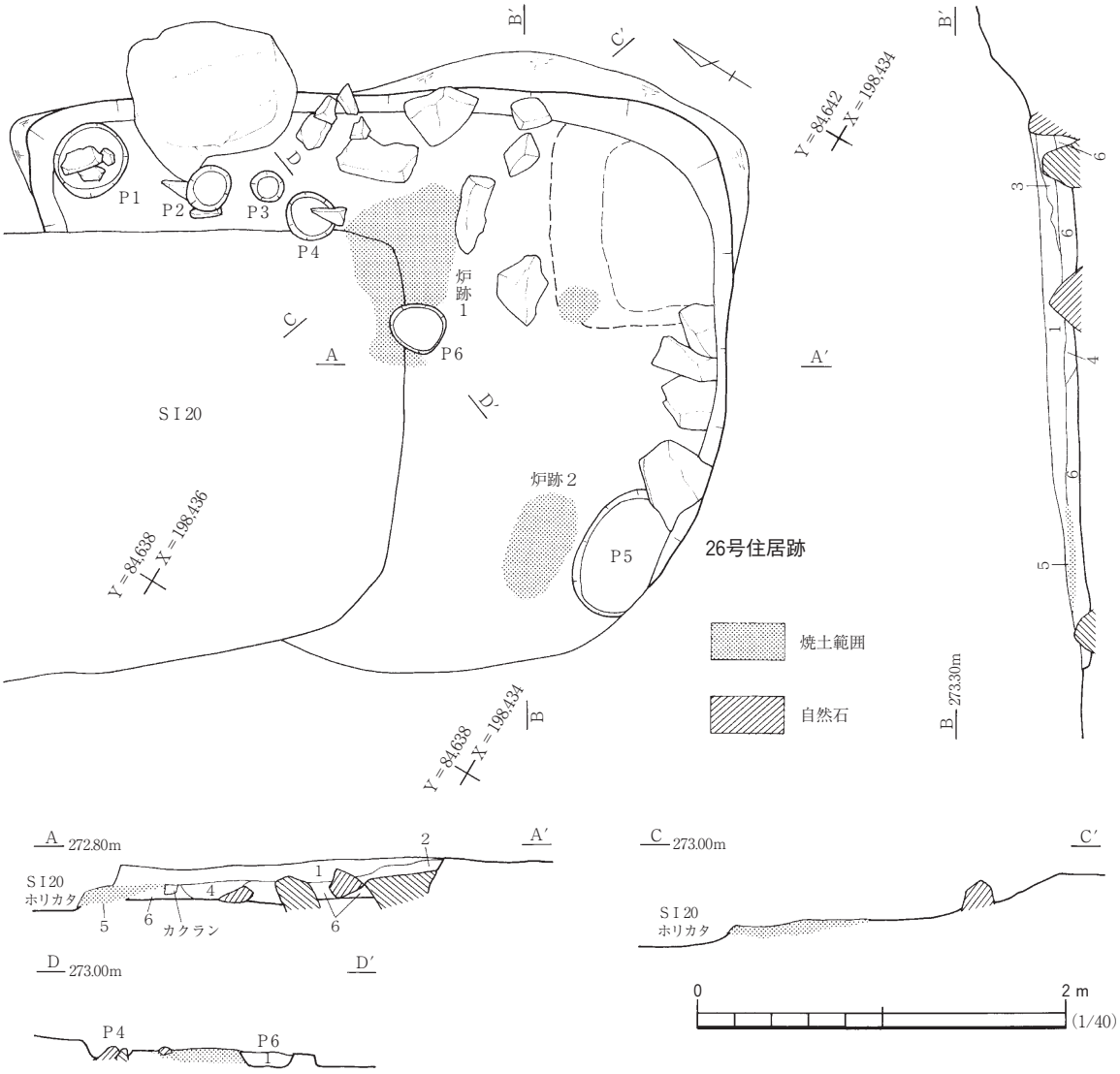
遺　　構（図17，写真13・14）

本遺構は調査東地区のＥ５－Ｄ７・Ｅ７グリッドの位置する竪穴住居跡である。西向き緩斜面の中腹部に立地する。20号住居跡と重複し，本遺構のほうが古い。本遺構の南側には，19号住居跡など比較的遺構が集中している。遺構検出面はＬⅡｂ上面である。

本住居跡は北西側を中腹する20号住居跡によって壊されるが，その平面形は長方形と推定される。その規模は長軸の長さが4.0m，短軸の長さが3.2mと推定される。検出面から床面までの深さは0.15mを測る。遺構内堆積土は６層に分けた。１～３層は住居内を覆う流入土である。黒褐色土を基調とする堆積土で，焼土や炭化物を含んである。５層は炉跡の焼土面である。４・６層は住居跡の掘形に充填された貼床土で，床面を平坦に造っている。斜面上位側の周壁は，比較的遺存状態が良く床面から急峻な立ち上がりとなる。床面は基盤土に含まれる花崗岩が露頭するが，ほぼ平坦面となる。

床面上で確認できた施設として，炉跡２ヶ所とＰ１～５を確認した。炉跡は床面の中央付近（炉跡１）と南西隅（炉跡２）で確認した。炉跡１は20号竪穴住居跡によって壊されているため，その全容は不明である。炉跡底面は深さ0.1mにまで強く焼土化する。一方炉跡に接する花崗岩には火熱を受けた痕跡は認められない。Ｐ６の内部も焼土化していない特徴もあり，炉跡を隔絶する何らかの設備があったのであろう。また炉跡１とその周辺では，骨片が集中して出土する特徴がある。炉跡２は床面上に弱い火熱範囲が認められた。周辺で骨片は出土していない。

Ｐ１～４・６は住居跡の北東隅に位置する直径0.2～0.4mの円筒形の小穴である。床面からの深



26号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物・焼土粒・花崗岩塊・骨片ごく少量）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（砂質，炭化物ごく少量）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物・焼土を含む）
4　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物・焼土ごく少量）
5　暗赤褐色土　５ＹＲ3/3
6　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物・焼土を含む）

Ｐ６堆積土

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物・焼土極少量）

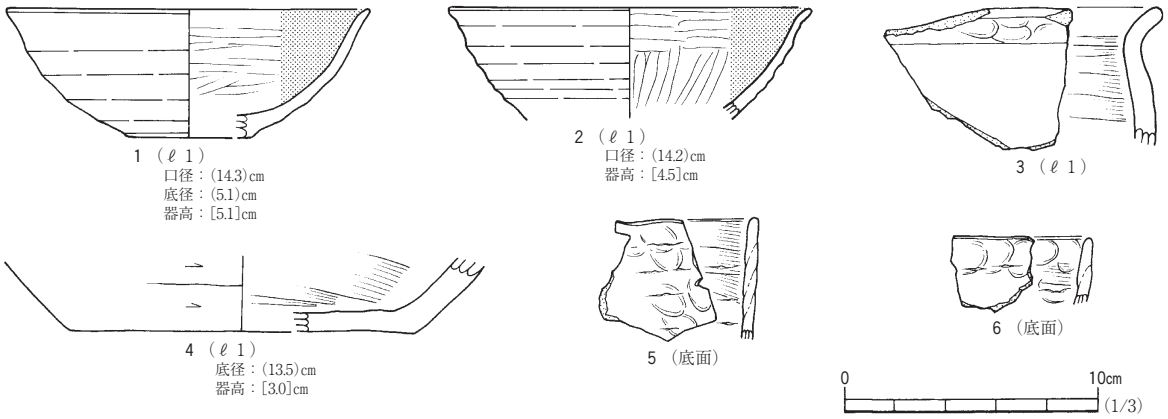


図17　26号住居跡・出土遺物

さが0.1m前後と浅い。これら小穴の配置や数などが不明瞭であるが，住居上屋を支える柱穴の一部になる可能性がある。Ｐ５は住居の南東隅で確認した。堆積土などの観察から，基盤土に含まれる花崗岩を抜き取った穴と推定している。床面の構築とともに埋め戻されたのであろう。

遺　　物（図17，写真62）

26号竪穴住居跡からは土師器片78点，縄文土器片49点が出土した。その他に炉跡周辺の堆積土中から骨片が十数点出土した。骨片は火熱を受けて，もろい小破片である。骨の種類や部位は不明である。

１・２は土師器杯で，成形にロクロを用いられ，内面は黒色処理される。体部がやや丸みを帯びて立ち上がる器形となる。底部の切り離しは回転糸きりで，体部下半の再調整は行われない。内面は口縁部付近は横位ミガキ，体部下半から底面にかけての部位は放射状ミガキが施される。３は土師器甕の破片である。成形にロクロは用いられていない甕である。摩滅して成形痕は不鮮明であるが，口縁部付近に指頭痕が観察できる。４は土師器甕の底部破片である。外面は横位のケズリ，内面は指ナデが観察できる。５・６は筒形土器の小破片である。いずれも粗雑なつくりで，外面に粘土紐積み上げ痕を残し，指頭痕が観察できる。内面は外面に比べれば丁寧なつくりで，横位の指ナデで器面が整えられる。

ま　と　め

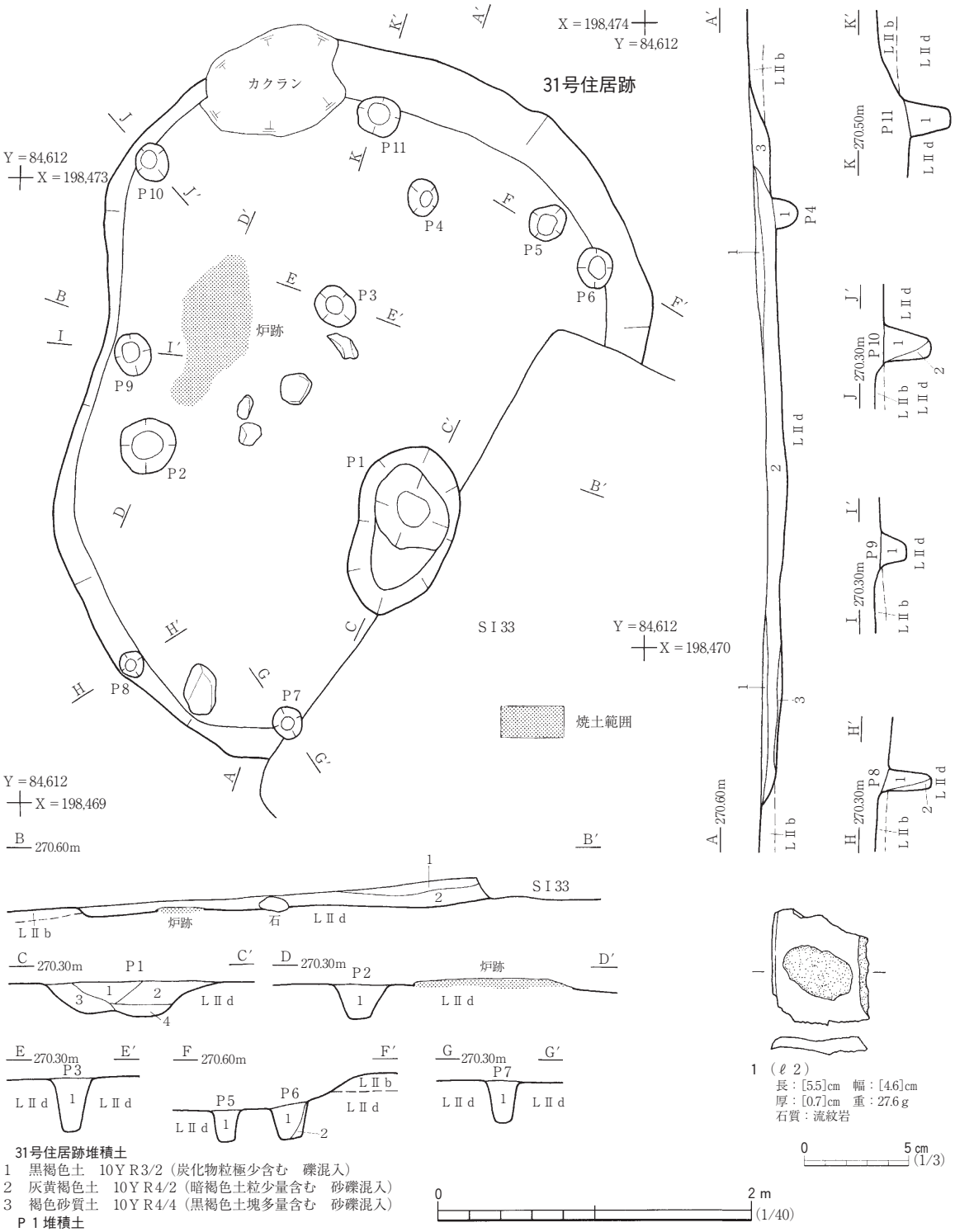
本遺構は床面に炉跡を伴う小型竪穴住居跡である。本住居跡の炉跡は，重複する20号住居跡と同様に，積極的に鍛冶炉とする出土遺物は得られていない。本遺構の年代は，重複する20号住居跡よりも古く，出土した遺物の特徴から９世紀後半頃に属すると考えている。（福　田）

31号住居跡　ＳＩ31

遺　　構（図18，写真15・16）

本住居跡は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ３・４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.3～270.5m程の西向き緩斜面である。周囲には27・29・59号土坑が近接している。33号住居跡と重複し，検出状況から本遺構の方が古い。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で炉跡の焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。１層は堆積土の上層部分を覆う黒褐色土である。２層は暗褐色土塊や粒を含む灰黄褐色土で，床面全体を広く覆っている。３層は床面の北半側や南側の一部の範囲で確認した。ＬⅡｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。堆積状況から，３層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で，その後ほとんど時間差なく２層で埋め戻された可能性が高い。１層は埋め戻されて窪みとなった部分に，風雨など自然的な要因で流入したと考えている。遺構の平面形は，南東側が33号住居跡の掘り込みを受けているため，全体形は不明であるが，遺存している形状から楕円形基調を呈し，長軸4.65m，短軸3.50mを測る。検出面からの深さは最大18cmを測り，西側へ向かうにつれて浅くなる。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，ほぼ平



31号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10Y R3/2（炭化物粒極少含む　礫混入）
2　灰黄褐色土　10Y R4/2（暗褐色土粒少量含む　砂礫混入）
3　褐色砂質土　10Y R4/4（黒褐色土塊多量含む　砂礫混入）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10Y R3/1（焼土粒・炭化物粒少量含む　礫混入）
2　黒褐色土　10Y R2/2（焼土粒・炭化物粒少量含む　礫混入）
3　灰黄褐色土　10Y R3/1（焼土粒・炭化物粒微量含む　礫混入）
4　褐灰色土　10Y R4/1（焼土粒・炭化物粒微量含む　礫混入）

Ｐ２・Ｐ11堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（黒褐色土粒少量・炭化物粒少量含む）

Ｐ３・Ｐ７・Ｐ９堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（炭化物粒少量含む）

Ｐ４堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（黒褐色土粒少量含む）

Ｐ５堆積土
1　灰黄褐色土　10Y R4/2（炭化物粒少量含む　砂粒混入）

Ｐ６堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（炭化物粒少量含む）
2　黄褐色土　10Y R4/4（砂粒混入）

Ｐ８・Ｐ10堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（黒褐色土粒少量含む　砂粒混入）
2　黄褐色土　10Y R4/4

図18　31号住居跡・出土遺物

坦であり，踏み締まりは認められなかった。周壁は，遺存状況の良好な北側付近では緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，炉跡１基，貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ11を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。炉跡は，床面の中央から西寄りの位置で確認した。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は長径100㎝，短径が46㎝を測る。底面は平坦で，ほぼ水平になる。床面から燃焼面までの深さは５㎝を測る。

Ｐ１は床面の中央から南寄りの位置で確認した。平面形は径112×65㎝程の楕円形状を呈し，深さは床面から35㎝を測る。Ｐ１内からは炭化物に混じって，縄文土器片が出土し，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。

Ｐ２～Ｐ４は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が25～35㎝，深さ17～40㎝を計測した。これらの小穴の埋没状況には相違が認められることから，いくつかの変遷や用途が想定される。形状・規模から考えて柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

Ｐ５～Ｐ11は周壁に沿って配された小穴である。平面形は円形を基調とする。規模は直径16～28㎝，深さ10～32㎝を測る。その形状から上屋を支える柱穴と判断した。

遺　　物（図18，写真62）

本住居跡からは，縄文土器片15点，石器片２点が出土している。縄文土器片は全て細片であるため図示できなかったが，全て体部に縄文を施しているが，摩滅が著しい。このうち石器片１点を図示した。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土２層（13点），Ｐ１ℓ１（４点）である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１は磨製石斧で刃部と基部を欠損する。片側部分も欠損し，遺存状況は非常に悪い。残存する部分の表面は比較的良く研磨されている。

ま　と　め

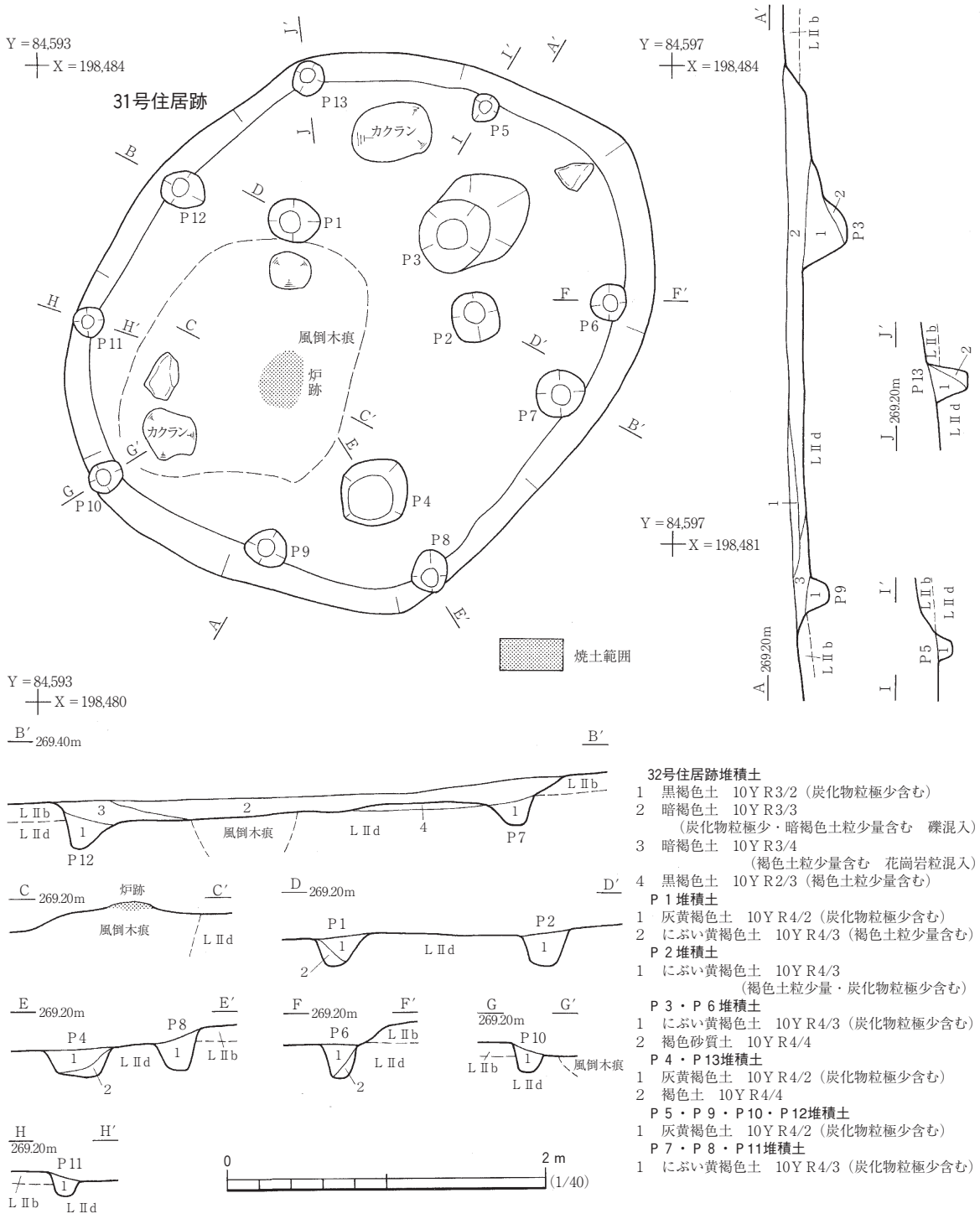
本遺構は，縄文時代の楕円形を呈する竪穴住居跡である。掘込み内からは，地床炉と貯蔵穴，柱穴が検出されている。時期は，床面出土遺物がなく断定はできない。周辺域と堆積土中には縄文時代後期から晩期の遺物が出土している。よって，縄文時代後期から晩期の時間幅で考えておく。

（稲　村）

32号住居跡　ＳＩ32

遺　　構（図19，写真17・18）

本住居跡は調査区西側北寄りのＤ５－Ｊ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.0～268.2ｍ程の西向き緩斜面である。周囲には30～32号土坑が近接している。重複する遺構はない。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で炉跡の焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。



32号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10Y R3/2（炭化物粒極少含む）
2　暗褐色土　10Y R3/3
　（炭化物粒極少・暗褐色土粒少量含む　礫混入）
3　暗褐色土　10Y R3/4
　（褐色土粒少量含む　花崗岩粒混入）
4　黒褐色土　10Y R2/3（褐色土粒少量含む）

Ｐ１堆積土

1　灰黄褐色土　10Y R4/2（炭化物粒極少含む）
2　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（褐色土粒少量含む）

Ｐ２堆積土

1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3
　（褐色土粒少量・炭化物粒極少含む）

Ｐ３・Ｐ６堆積土

1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（炭化物粒極少含む）
2　褐色砂質土　10Y R4/4

Ｐ４・Ｐ13堆積土

1　灰黄褐色土　10Y R4/2（炭化物粒極少含む）
2　褐色土　10Y R4/4

Ｐ５・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ12堆積土

1　灰黄褐色土　10Y R4/2（炭化物粒極少含む）

Ｐ７・Ｐ８・Ｐ11堆積土

1　にぶい黄褐色土　10Y R4/3（炭化物粒極少含む）

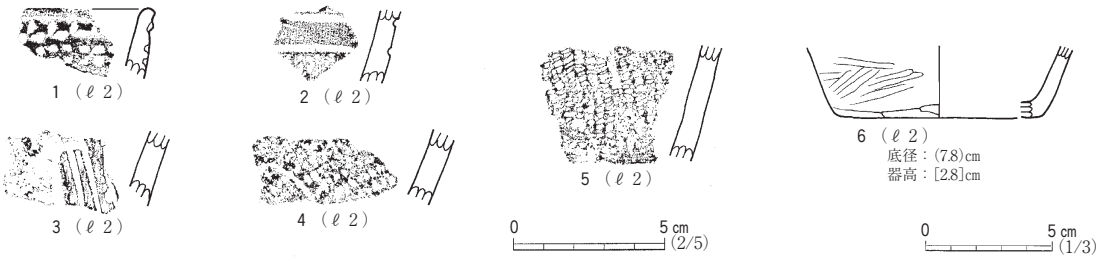


図19　32号住居跡・出土遺物

遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。１層は炭化物を含んだ黒褐色土で，その性状や堆積状況から自然堆積土である。２層は暗褐色土粒や炭化物を含む暗褐色土で，床面全体を広く覆っている。３層は床面の南側や西側の一部の範囲で確認した。ＬⅡｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。遺構の平面形は，楕円形基調を呈し，長軸4.0m，短軸3.15mを測る。検出面からの深さは最大15cmを測り，西側へ向かうにつれて浅くなる。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，ほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁は全体的に緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，炉跡１基，貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ13を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。炉跡は，床面の中央から西南寄りの位置で確認した。風倒木痕上に構築され，周囲の地形より若干盛り上がっている。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は長径38cm，短径が28cmを測る。底面は平坦で，ほぼ水平になる。床面から燃焼面までの深さは５cmを測る。

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が32～42cm，深さ18～20cmを計測した。形状・規模から考えて柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。Ｐ３は床面の北寄りの位置で確認した。平面形は径75×58cm程の楕円形状を呈し，深さは床面から28cmを測る。Ｐ３内からは炭化物に混じって，縄文土器片が出土し，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。

Ｐ５～Ｐ13は周壁に沿って配された小穴である。平面形は円形を基調とする。規模は直径12～30cm，深さ10～22cmを測る。その形状から上屋を支える柱穴と判断した。

遺　　物（図19，写真63）

本住居跡からは，縄文土器片53点，石器片３点が出土している。このうち，縄文土器６点を図示した。他の縄文土器片は細片であるため図示できなかったが，全て体部に縄文を施しているものが多く，摩滅が著しいため，時代を特定することはできない。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土２層（53点），Ｐ３ℓ１（２点），Ｐ５ℓ１（１点）である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１は口縁部資料で，円形竹管状の施文具による刺突で構成される文様である。２～５は体部資料で，２は横位の沈線が２条平行に巡り，３は半裁竹管状の施文具を用いた平行沈線が巡るものである。６は小型鉢の底部資料である。内外面ともに研磨されており，光沢がある。

ま　と　め

本遺構は，縄文時代の楕円形を呈する竪穴住居跡である。掘込み内からは，地床炉と柱穴が検出されている。柱穴は周壁に沿って配置されている。時期は，床面出土遺物がなく特定はできない。周辺域と堆積土中には縄文時代後期から晩期にあたる遺物が出土している。よって，縄文時代後期から晩期の時間幅で考えておく。（稲　村）

33号住居跡　ＳＩ33

遺　　構（図20，写真19・20）

本住居跡は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ３・４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.3～270.7ｍ程の西向き緩斜面である。周囲には27･29･59号土坑が近接している。31号住居跡と重複し，本遺構の方が新しい。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。本住居跡は重複する31号住居跡を先行して調査し，その精査段階で本住居が新しいことを確認したため，住居内北西側を削平した結果となった。

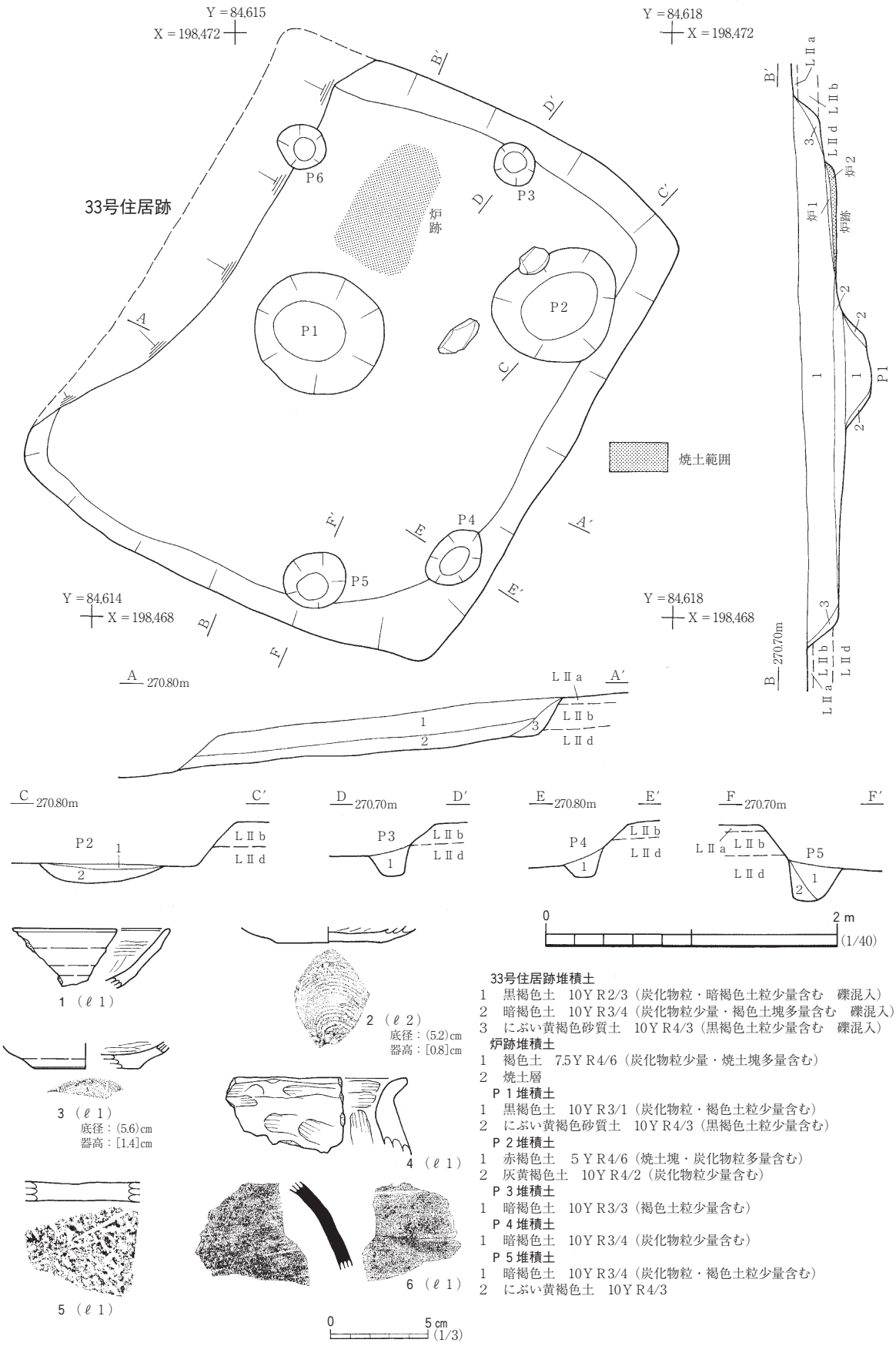
遺構内堆積土は，色調および混入物から３層に分層できた。１層は堆積土の上層部分を覆う黒褐色土である。２層は炭化物や褐色土塊を含む暗褐色土で，床面全体を広く覆っている。３層は周壁のほぼ全域で確認した。ＬⅡｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。堆積状況から，３層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で，その後ほとんど時間差なく２層で埋め戻された可能性が高い。３層は埋め戻されて窪みとなった部分に，風雨など自然的な要因で流入したと考えている。遺構の平面形は，北西側が31号住居跡の掘り込みを受けており，全体形は不明であるが，遺存している形状から隅丸長方形基調を呈し，軸長は北－南長3.85ｍ，東－西長3.15ｍを測り，検出面からの深さは最大28㎝を測る。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，ほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁は比較的急峻に立ち上がる。

本住居内の内部施設として，焼土跡１基，貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ６を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。焼土跡は，床面の中央から北寄りの位置で確認した。床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなり燃焼面を造っている。平面形は不整な楕円形状を呈する。規模は長径90㎝，短径が52㎝を測る。底面は平坦で，ほぼ水平になる。床面から燃焼面までの深さは７㎝を測る。堆積する焼土層の中には獣骨と想定される骨片が若干認められた。当初はカマドの燃焼部分とも考えたが，袖や煙道などは確認できず，またカマドの破壊痕なども見られなかったことから炉跡として機能していた可能性が高い。

Ｐ１は床面のほぼ中央付近で確認した。平面形は径85㎝程の円形状を呈し，深さは床面から18㎝を測る。Ｐ１内からは炭化物に混じって，土師器片が出土し，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。Ｐ２は住居内北東側付近で検出された。形状は不整形な楕円形状を呈し，検出した規模は径90×80㎝，深さ14㎝を測る。このピットは用途・機能不明であるが，形態が浅い皿状を呈することから，土器などを置くスペースと考えておきたい。Ｐ３～Ｐ６は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が30～46㎝，深さ12～25㎝を計測した。形状・規模から考えて上屋を支える柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

遺　　物（図20，写真63）

本住居跡からは，縄文土器片４点，土師器片81点，須恵器片１点が出土している。土師器片は



33号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10Ｙ R2/3（炭化物粒・暗褐色土粒少量含む　礫混入）
2　暗褐色土　10Ｙ R3/4（炭化物粒少量・褐色土塊多量含む　礫混入）
3　にぶい黄褐色砂質土　10Ｙ R4/3（黒褐色土粒少量含む　礫混入）

炉跡堆積土
1　褐色土　7.5Ｙ R4/6（炭化物粒少量・焼土塊多量含む）
2　焼土層

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10Ｙ R3/1（炭化物粒・褐色土粒少量含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10Ｙ R4/3（黒褐色土粒少量含む）

Ｐ２堆積土
1　赤褐色土　５Ｙ R4/6（焼土塊・炭化物粒多量含む）
2　灰黄褐色土　10Ｙ R4/2（炭化物粒少量含む）

Ｐ３堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ R3/3（褐色土粒少量含む）

Ｐ４堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ R3/4（炭化物粒少量含む）

Ｐ５堆積土
1　暗褐色土　10Ｙ R3/4（炭化物粒・褐色土粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10Ｙ R4/3

図20　33号住居跡・出土遺物

大半が甕で，杯は非常に少ない。このうち，縄文土器１点，土師器４点，須恵器１点を図示した。また，本住居内からは赤褐色硬質の土器片も多数出土している。従来「赤焼土器・須恵系土器」等の名称が用いられているものであるが，細片では種別が困難であるため，土師器片として計上している。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（64点），同堆積土２層（14点），Ｐ１ℓ２（８点）である。以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１は赤褐色硬質の土器のロクロ成型杯の口縁部付近の資料である。内面にはヘラミガキ調整が認められる。２・３は赤褐色硬質の土器で杯の底部資料である。３は底部の器厚は他に比して肥大である。ともに内外面はロクロナデ調整され，底部切り離しは回転糸切りである。

４は，非ロクロ整形で口縁部が「く」の字状に外反する土師器の甕である。器厚は肥大で，内外面ともにヘラナデの痕跡が観察できる。５は縄文土器の底部資料で網代痕が確認できる。この資料は重複する31号住居跡から流出したものと考えられる。６は須恵器で，長頸瓶の胴部と思われ，内外面ともにロクロナデ痕が明瞭に観察できる。

ま　と　め

本住居跡は，西向き緩斜面に造られた方形状の竪穴住居跡で，炉を伴う。近接する59号土坑は，鉄生産に関わる工房の可能性があり，本住居はそれに伴う鍛冶工房とも考えたが，それを証明するだけの資料は得られていない。ここでは，広義の作業小屋などの臨時的な施設と考えておきたい。遺構の機能年代については判断する材料に乏しいが，出土した土器の特徴，および周囲の遺構の年代観から９世紀後葉～10世紀前葉としておきたい。（稲　村）

34号住居跡　ＳＩ34

遺　　構（図21，写真21・22）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｅ８グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。遺構精査時に焼土や炭化物の散布が観察されたことから慎重に精査を実施したが，ＬⅡｂ層との区別が困難であることや，住居の中央部に小規模な沢が見られることなどから遺構の検出は非常に困難であった。検出時にはすでに床面が露出した状態で，貼床の範囲を住居の範囲と推測した。34号土坑と重複関係を有し，本遺構が古い。また，重複関係はないが，北側に36号土坑・ＧＰ２・ＧＰ６，西側にＧＰ３・ＧＰ４がそれぞれ近接する。

検出時には床面が露出していたが，平面形はほぼ南北方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は，東西軸2.70m，南北軸3.55mとなり，南北辺の中点を結んだ主軸方位は東に５度偏する。

堆積土は，貼床の１層のみの確認となる。黒褐色土主体であるが，ＬⅡｂ層由来のにぶい黄褐色土をブロック状に含む。Ｐ１は，この１層上面で検出している。

床面は，現状では南西方向にかけて傾斜している。しかしながら，これが本来の床面かどうかは遺存状態の悪さから判断できなかった。また，住居の中央部には30㎝大の花崗岩が溝状に存在する。これは住居構築以前の沢（流路）によるもので，ほとんど石を取り除くことなく住居を構築したも

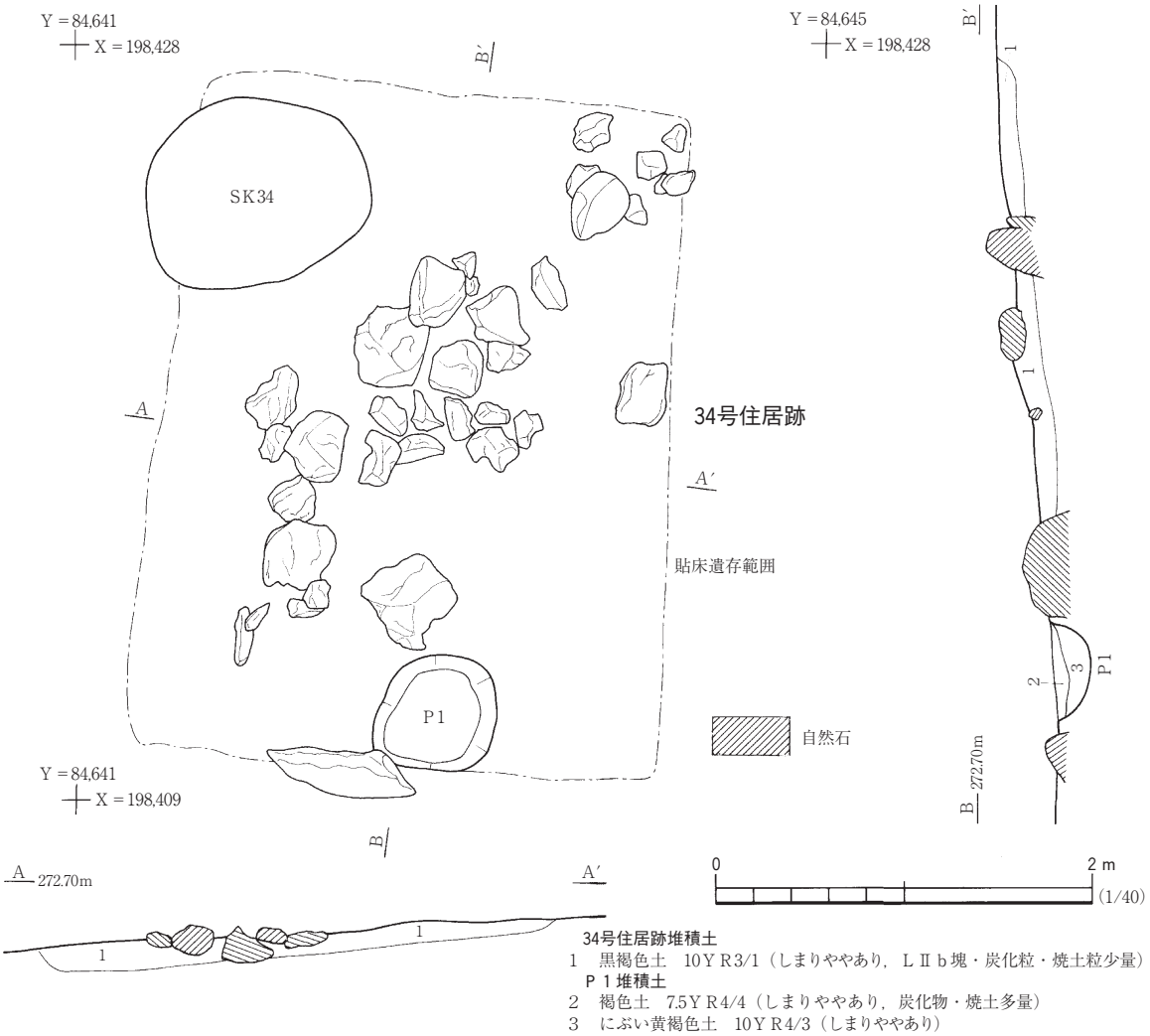


図21　34号住居跡

のと推測される。確認された床面には石が多く露出していることから，本来の貼床埋土は石が隠れる程度であった可能性が高いと考えている。

この床面からは，ピットを１基検出した。Ｐ１は住居の南辺中央に位置する。平面形は不整の円形を呈し，床面からの規模は長軸63cm，短軸60cm，深さ20cmをそれぞれ測る。堆積土は２層からなり，上層の褐色土には焼土や炭化物が含まれる。このことから，調査時はＰ１がカマドないし炉跡の痕跡と考えたが，明確な酸化面を見いだせなかった。

遺　　物

遺物は土師器が32点出土した。しかし，貼床内の出土ゆえに小破片となっており，図示可能な個体はなかった。ロクロ土師器の杯や甕の小破片で，筒形土器は含まれていない。

ま　と　め

本住居は床面のみの残存となるが，東西2.70m，南北3.5mの規模となる。炉は認められなかったが，削平された可能性が高いと考えられる。出土遺物も僅少で詳細な時期認定が困難であるが，おおよそ平安時代，９～10世紀の所産と推測される。（管　野）

35号住居跡　ＳＩ35

遺　　構（図22，写真23・24）

本遺構は，調査区中央やや西側のＥ５－Ｃ８グリッドに位置する。遺構は標高271ｍの南西方向にかけて緩やかに傾斜する地点に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面である。検出時点で北東辺および南西辺のみの残存となっており，遺存状態は悪い。遺構の重複関係はないが，南側に40号土坑が近接している。

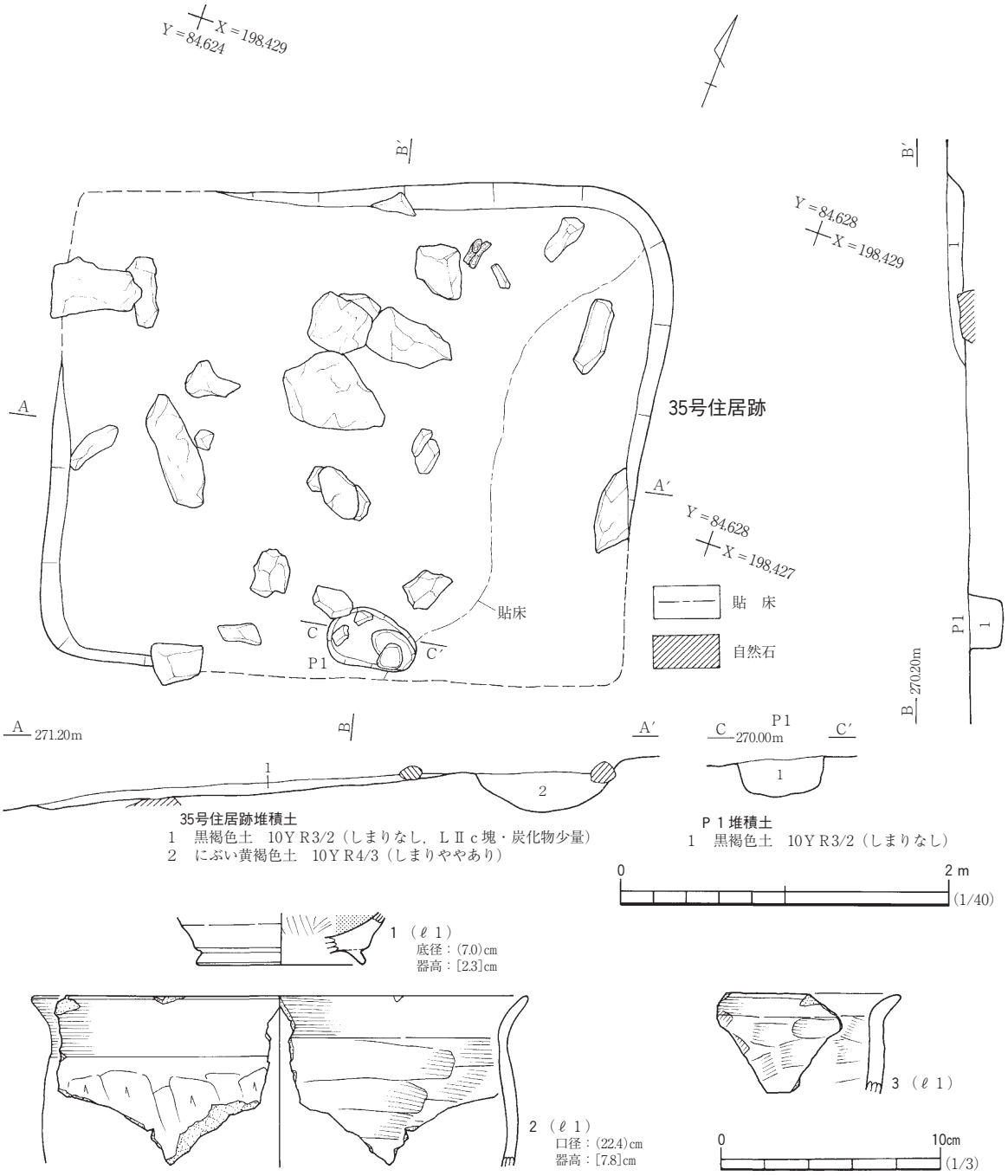


図22　35号住居跡・出土遺物

遺存状態が悪いが，平面形は東西方向に長い隅丸長方形を呈していたと考えられる。また，北東コーナー部は若干東側に張り出している。確認された規模は，東西軸で3.6m，南北軸で３m以上となり，残存している北東・南西コーナーから推測される主軸方位は西に15度偏する。

堆積土は，両コーナーともに黒褐色土の単層で，炭化物を少量含む自然堆積土と判断した。なお，住居の東側で確認された２層は，掘り込みが観察されたことや人為的な埋土であることなどから，貼床と判断した。貼床は住居の東側のみに施され，他の地点はＬⅡｂ層を用いていた。

床面は南北方向がほぼ水平であるが，東西方向は西側に移行するにしたがって緩やかに傾斜している。東西の床面における比高差は25cmほどを測る。また，床面には長軸50cm大の花崗岩が多く露出し，石が露出していない地点は住居のコーナー部のみに限定される。同時に，貼床やピットは確認されたが，炉は確認されなかった。このため，この住居が常時使用されていたかどうかは疑問である。本住居は構築途中か構築したものの，ほとんど使われなかった可能性が高い。

床面からはピット１基を確認した。Ｐ１は住居南壁際の中央に位置する。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し，長軸53cm，短軸35cm，床面からの深さ20cmをそれぞれ測る。堆積土は黒褐色土の単層で，ピットの東壁はＬⅡｂ層に含まれる礫が露出し，これを壁面として使用していた。ピット内から遺物は出土していない。

床面精査後に，掘形を検出した。掘形は住居の東側のみの確認で，平面形は南北に長い不整形を呈する。深さは25cm内外で，東西方向の断面形は深い皿状を呈する。

遺　　物（図22，写真64）

遺物はすべて１層からの出土となるが，破片数で24点と少ない。すべて土師器となり，このうち図示可能な３点を示した。22図１は高台杯である。短い高台部を有し，杯部の体部下端に稜をもつ。図示していないが，底部切り離しは回転糸切りとなる。２は住居の北東壁際で出土した甕である。口縁部は「く」の字状に外反し，内外面は布ないし革による横方向のナデが明瞭に観察される。３は小型甕の口縁部片となる。短く「く」の字に外反する口縁部となり，胴部の内外面は横方向の指によるナデが認められる。

ま　と　め

本遺構は北東側と南西側のみにしか壁面が残存していないものの，一辺3.6m弱の規模と考えられる。住居の付属施設はピットのみで，炉やカマドなどは確認されなかった。また，床面は顕著な使用痕が見いだせない。このため，常時住居として使用されたかどうかは疑問である。ただし，堆積土に焼土粒が含まれていたため，竪穴状遺構と考えて本節に採録した。遺構内から出土遺物は少ないが，概ね９世紀後半～10世紀初頭の年代観を示す。（管　野）

36号住居跡　ＳＩ36

遺　　構（図23，写真25・26）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｂ・Ｃ７・８グリッドにかけて位置する。検出面はＬⅡｂ層上面

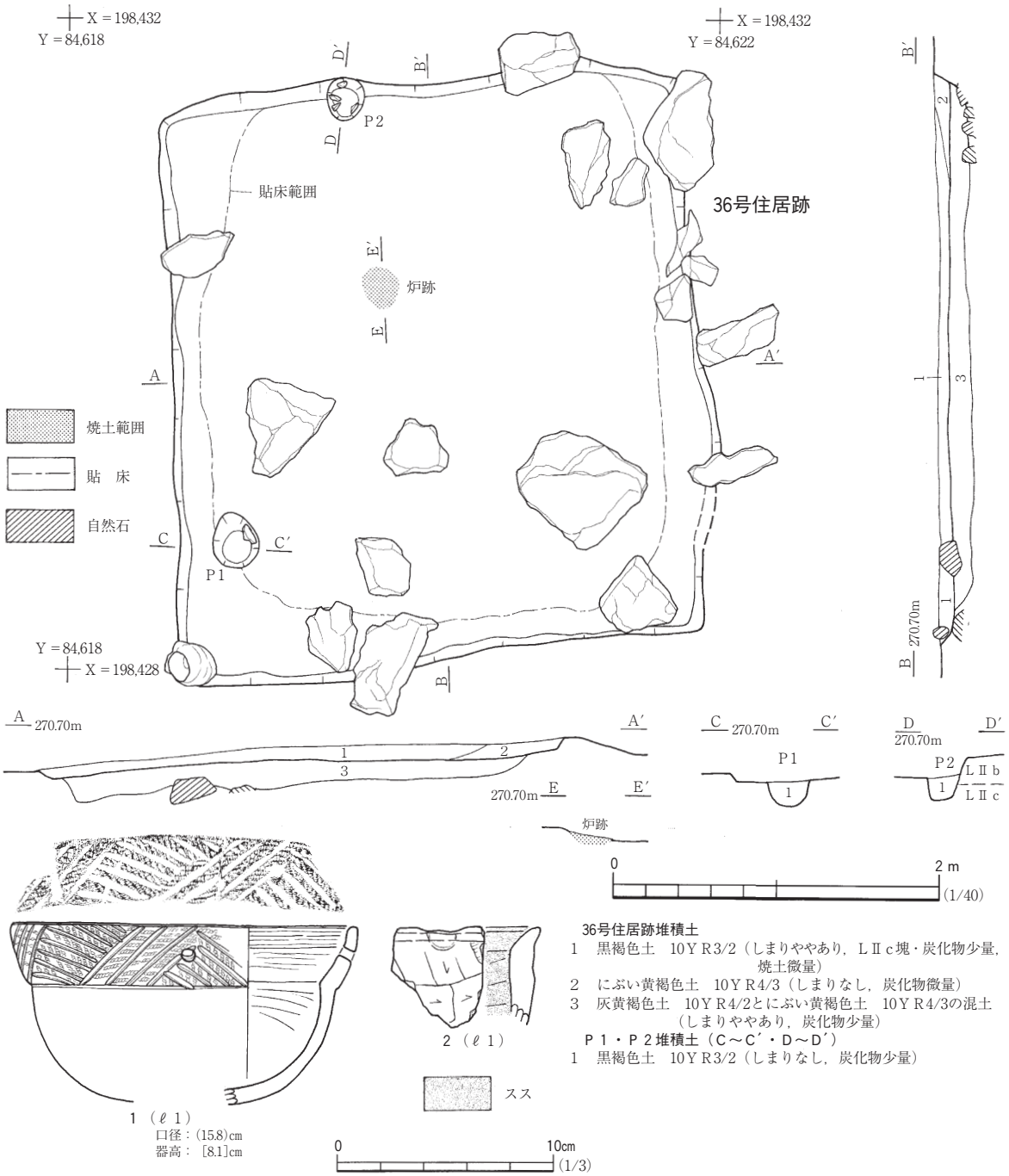


図23　36号住居跡・出土遺物

となる。遺構は南西にかけて緩やかに傾斜する地点に構築されており，標高270.5mの等高線と住居の東西辺がほぼ平行する。遺構検出時に焼土や炭化物を含む長方形の落ち込みが観察され，すでに焼土が集中する地点も存在した。重複する遺構はないが，南東側約1.8mの地点に35号住居跡が，東側約60cmの地点に38号土坑がそれぞれ位置する。

平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，南北軸3.52m，東西軸3.26mを測る。南北辺の中点を結んだ主軸方位は西に２度偏し，ほぼ真北方向を示す。

堆積土は３層からなる。このうち，上層の１・２層が住居廃絶後の堆積層，３層が住居構築時の

貼床と考えられる。１層は黒褐色土で，炭化物や焼土を含む。２層はにぶい黄褐色土で標高が高い北辺および東辺のみに確認される。特にこの２層は堆積状況などから自然堆積の様相を示し，１層も同様と考えられる。

床面はほぼ水平であるが，西側が若干低い。また，床面の南側には長軸30㎝以上の花崗岩が多く露出していた。この礫は炉が位置する住居の北側半分には少ない。各壁における床面からの遺存高は北・南壁で10㎝，西・東壁で５～７㎝をそれぞれ測る。貼床は床面のほぼ全域に施されていたが，北壁をのぞく各壁は壁面近くまでは施されていない。その範囲は東西3.2ｍ×南北2.8ｍを示す。また，床面には明確な踏みしまりなどは認められない。

床面からは炉跡１基とピット２基をそれぞれ検出した。炉跡は床面の中央やや北西に位置する。検出時にはすでに焼土の散布がみられ，床面から若干浮いた状況での検出となる。焼土化の範囲は南北軸で25㎝，東西軸22㎝，厚４㎝を測る。炉は床面が砂質であるがゆえに，しまりは顕著ではない。このため，炉跡でなく動いた焼土とも考えられたが，断ち割りの所見では混入物が全く認められないことから，移動した焼土ではないと判断した。

ピットは２基検出したが，いずれも貼床の上から掘り込められていた。Ｐ１は住居の南西コーナー付近に位置する。平面形は不整の円形を呈し，北側は若干張り出している。規模は長軸53㎝，短軸27㎝，床面からの深さ16㎝をそれぞれ測る。堆積土は黒褐色土の単層で，底面は礫なども少なく平坦である。Ｐ２は住居の北壁に接続している。平面形は円形を呈し，規模は長軸25㎝，短軸22㎝，床面からの深さ13㎝をそれぞれ測る。堆積土はＰ１同様の黒褐色土であった。ピット内から遺物は出土しなかったが，位置などから柱穴状のピットと考えられる。

遺　　物（図23，写真64）

遺物はすべて１層からの出土となるが，破片数で22点と少ない。このうち図示可能な２点を示した。１は弥生土器である。浅鉢形を呈する土器で，弥生時代中期頃の所産と考えられようか。２は土師器小型甕の口縁部片である。短く外反する口縁部の形態で，内面には炭化物が付着している。

ま　と　め

本住居は，南北軸3.5ｍの隅丸長方形を呈し，本遺跡では多く認められる規模の住居である。住居の中央やや北西側に炉が位置し，ピットは２基と少ないものの，いずれも壁面近くに存在していることから壁建ち式の住居であった可能性が高い。床面からの出土遺物が皆無であるため，時期については限定できないが，住居の構造や堆積土中の遺物などから，平安時代の所産と考えられよう。

（管　野）

37号住居跡　ＳＩ37

遺　　構（図24，写真27・28）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｃ８・９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。遺構は南西側へ緩やかに傾斜する地点に構築されており，検出時にはすでに焼土や土器の散布がみ

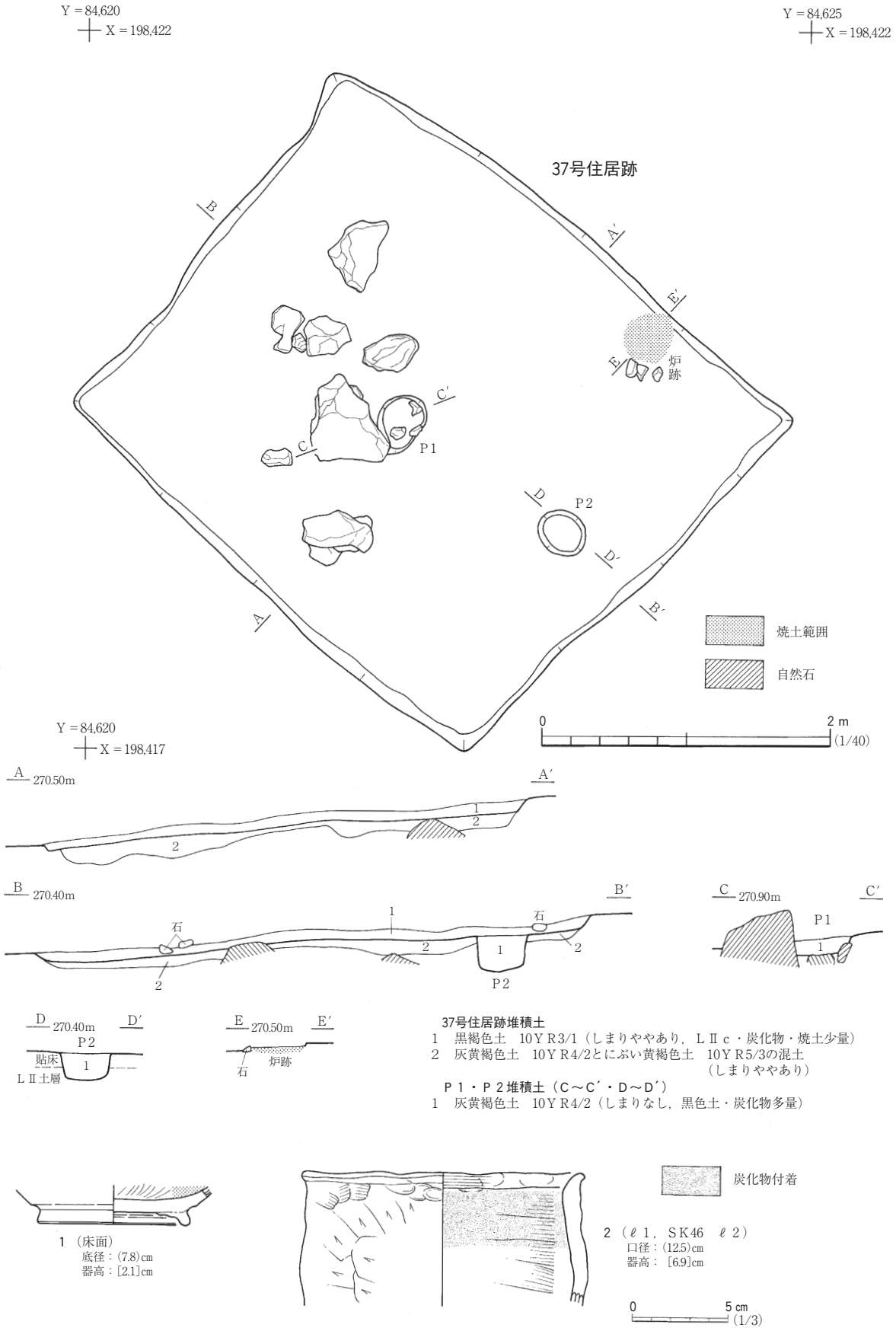


図24　37号住居跡・出土遺物

られた。このため精査時には慎重を期したが，ＬⅡｂ層との区別が非常に困難であった。重複する遺構はないが，北東側約1.5ｍの地点に47号土坑，西側2.6ｍに48号住居跡がそれぞれ位置する。

平面形は東西方向にやや長い長方形を呈し，その形は整っている。計測値は東西軸3.85ｍ，南北軸3.34ｍを測り，南北辺の中点を結んだ主軸方位は東に41度偏する。

堆積土は２層からなる。１層は黒褐色土で，炭化物や焼土を含む住居廃絶後の堆積層，２層はＬⅡｂ起源の灰黄褐色土やにぶい黄褐色土を塊状に含むことから貼床の埋土となる。ピットや焼土はこの２層上面で検出している。

床面は南西方向に傾斜しており，南北軸における床面の比高差は28㎝を測る。また，住居の西側から中央部にかけて長軸30㎝以上の花崗岩が多く露出していたが，住居の東側では巨大な礫は少ない。各壁の床面からの遺存高は，北・東壁で20㎝，南・西壁で10㎝内外を測る。

この床面からは，カマド１基とピット２基をそれぞれ検出した。カマドは，北壁のやや西側に位置する。検出時にはすでに焼土の散布がみられ，袖や煙道などは確認できなかった。調査時には炉とも考えたものの，住居の壁面に焼土がとりつくことから炉ではなく，カマドの燃焼部と判断した。規模は長軸37㎝，短軸31㎝で，酸化面の厚さはもっとも厚いところで３㎝と浅い。また，この酸化面の周囲には長軸10㎝内外の礫が４点ほど置かれていた。礫は若干の被熱を受けていることから意図的に置かれたものと考えられる。ただし，この酸化面はしまりや焼固などはなく，それほど焼かれた印象は持たなかった。

ピットは２基検出し，住居東西の中点を結んだ軸上に構築されていた。このうち，住居の中央にあるピットをＰ１，東側に位置するピットをＰ２と付した。ともに平面形は歪んだ楕円形を呈し，計測値はＰ１で長軸43㎝，短軸32㎝，床面からの深さ11㎝，Ｐ２で長軸36㎝，短軸30㎝，床面からの深さ17㎝をそれぞれ測る。堆積土はともに灰黄褐色土で，黒色土や炭化物を含む。明確な柱痕などは観察されなかったものの，その形状などから柱穴と考えている。

なお，貼床除去後に掘形を検出した。掘形の深さは最も浅いところで床面から５㎝，深いところで15㎝と一定しない。また，床面の中央部が浅く，壁面近くは深く掘られている。この貼床から出土遺物はなく，明確な床下ピットも確認されなかった。

遺　　物（図24，写真65）

遺物は，土師器が３点のみの出土で，このうち２点を示した。１は床面から出土した高台杯の底部片となる。底部は完存しているが，口縁部は欠損のためその器形は不明である。また，内面の黒色処理は施されているものの，ミガキがそれほど丁寧でないのに加えて，炭素の吸着が不十分であり，光沢化していない。２は小型甕である。１層出土の破片と，南東側約６ｍの地点に位置する46号土坑出土の破片と接合している。非ロクロ成形で，短く外反する口縁部を有し，端部は丸く肥厚する。また，内面には炭化物が多く付着している。

ま　と　め

本遺構は一辺４ｍ弱の長方形を呈し，本遺跡で多いタイプの住居となる。カマドはすでに壊され

ていたが，住居の北壁に位置していた。本住居もカマドの使用痕跡や床面の使用状況などから，常時使われた住居として認定するのは困難で，季節的・臨時的な施設と考えるのが妥当と考える。時期は，出土遺物が少ないものの，９世紀後半以降の所産と推測される。　（管　野）

38号住居跡　ＳＩ38

遺　　構（図25，写真29・30）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｃ・Ｄ９・10グリッドにかけて位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。遺構は南に向かって緩やかに傾斜する斜面に構築されており，この区域で検出した竪穴住居跡としては南限に相当する。検出は北壁付近のみが黒褐色土の堆積土であったが，南壁付近は貼床の灰黄褐色土と炉と思われる焼土が露出した状態での検出となる。ゆえに遺存状態は悪い。重複する遺構は無いが，北側に52号土坑，西側に46号土坑がそれぞれ位置する。特に，木炭焼成坑である46号土坑とはその主軸を同じくしている。

住居の南半分は床面が露出した状態での検出となるが，貼床の範囲などから平面形は東西方向に

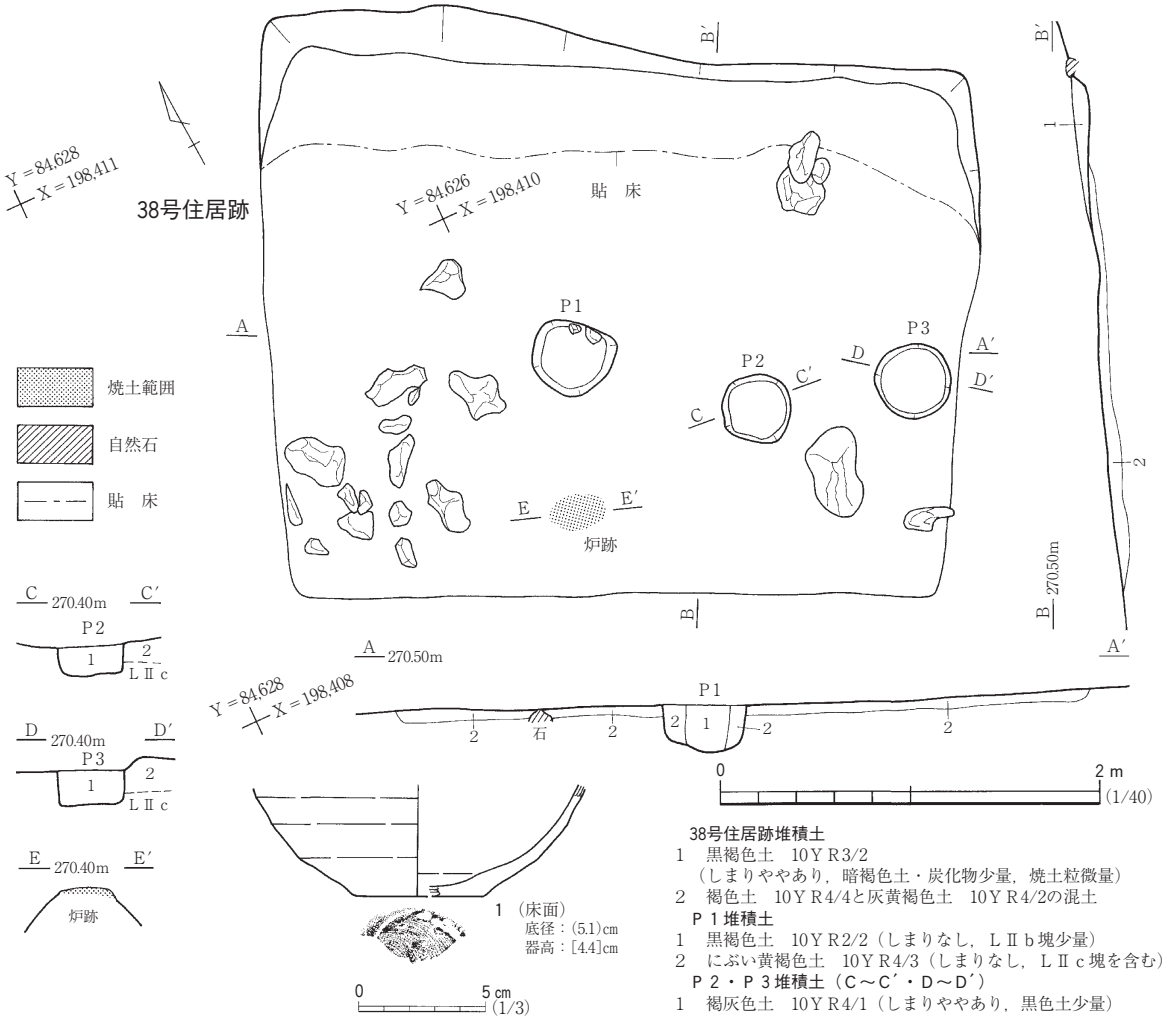


図25　38号住居跡・出土遺物

長い長方形を呈すると考えられる。規模は南北軸で2.87m，東西軸で3.71mを測り，南北辺の中点を結んだ主軸方位は東に25度偏する。

堆積土は２層からなる。１層は黒褐色土で，北壁付近のみの残存となる。本層は炭化物や焼土を含むことから住居廃絶後の堆積層となる。これに対して２層は，ＬⅡｂ層由来の褐色土がブロック状に含まれることに加えて，本層の上面で炉やピットが検出されたことから貼床の埋土と判断した。１層の層厚は８㎝程度と非常に浅い確認となる。

床面は東西方向がほぼ水平であるが，南北方向は比高差20㎝ほど南へ傾斜する。しかし，炉などがすでに浮いた状況での検出であることや，床面が露出した状態などを勘案すると本来はこれよりも傾斜がなかったと推測される。また，住居の北側には大きな礫が少ないのに対して，南側は礫が露出している地点が多く確認された。

床面からは炉跡１基とピット３基をそれぞれ検出した。炉跡は床面の南側中央に位置する。検出時にはすでに浮いた状態であったが，先述の通り床面が削られた状態であることから，本住居にともなうものと判断している。平面形は東西方向に長い楕円形で，規模は長軸30㎝，短軸19㎝，厚さ４㎝をそれぞれ測る。炉の酸化面の基底部と推測したが，床面の砂質土ゆえ酸化面はしまりや焼固などはなく，それほど焼かれた印象は持たなかった。

ピットは３基検出し，いずれも床面中央の東西軸上に位置する。Ｐ１は床面のほぼ中央に位置する。平面形は不整の隅丸方形を呈し，計測値は長軸43㎝，短軸38㎝，床面からの深さ25㎝をそれぞれ測る。堆積土は２層からなり，１層は黒褐色土，２層はにぶい黄褐色土となる。１層の混入物が少ないのに対して，２層はＬⅡｃ層をブロック状に含む。このことから，１層は柱穴の柱痕，２層は掘形埋土と考えられる。Ｐ２は床面の東側に位置する。平面形は直径36㎝ほどの歪んだ円形を呈し，床面からの深さは15㎝を測る。Ｐ３はＰ２の東側45㎝の地点に位置する。平面形は円形で，直径38㎝，床面からの深さ18㎝をそれぞれ測る。Ｐ２・Ｐ３とも堆積土は褐灰色土の単層となる。

遺　　物（図25）

遺物は，床面から１点が出土したのみである。１はロクロ土師器の杯で，いわゆる赤焼土器となろう。底部～体部上半のみの残存で，口縁部は欠損する。内外面ともロクロ成形であるが，内面はその後に軽いナデが加えられている。

ま　と　め

本遺構は，北壁のみが残存する住居で，その規模は貼床の遺存範囲から南北約３ｍ，東西約４ｍと考えられる。付属施設としては炉跡とピットが認められ，床面中央のＰ１からは掘形を有する柱穴が確認された。出土遺物も少ないが，床面出土の土器から９世紀後半以降の所産と推測される。

（管　野）

39号住居跡　ＳＩ39

遺　　構（図26，写真31・32）

本住居跡は，調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｃ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高271.4～272.0m程の西向き緩斜面である。周囲には42～44号土坑が近接している。遺構の北側で41号住居跡と重複し，検出状況から本遺構の方が新しい。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は単層で，炭化物粒やＬⅡｂ層に相当する暗褐色土粒を含む黒褐色土である。遺構自体が浅いこともあり，堆積状況は不明であるが，土質や含有物が均質になることから，自然堆積と推察している。また重複する竪穴住居跡の堆積土との比較からは，41号住居跡にみられる人為的に埋め戻された堆積土とは明らかに異なる。

遺構の平面形は，長方形基調を呈し，軸長は北西－南東長4.25m，北東－南西長3.35mを測り，検出面からの深さは最大10cmを測る。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁の状況は，遺構自体が浅いため不明である。

本住居内の内部施設として，貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ６を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。Ｐ１は床面の西側隅付近で確認した。平面形は径75cm程の円形状を呈し，深さは床面から12cmを測る。Ｐ１内からは炭化物に混じって，土師器片が出土し，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。Ｐ２～Ｐ６は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が28～38cm，深さ15～22cmを計測した。形状・規模から考えて上屋を支える柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

遺　　物（図26，写真65）

本住居跡からは，土師器片65点，鉄製品１点が出土している。土師器片は大半が甕で，杯は非常に少ない。このうち，土師器２点，鉄製品１点を図示した。また，本住居内からは赤褐色硬質の土器片も多数出土している。従来「赤焼土器･須恵系土器」等の名称が用いられているものであるが，細片では種別が困難であるため，土師器片として計上している。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（60点），Ｐ１ℓ１（６点）である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１は土師器甕の底部資料である。体部外面にはヘラケズリ，内面には横位のヘラナデの痕跡が観察できる。２は赤褐色硬質の土器で杯の底部資料である。内外面はロクロナデ調整され，底部切り離しは回転糸切りである。３は鉄製刀子である。切先部先端を欠損するがほぼ形状が把握できる。刀区の背部はほぼ直線的に対し，刃区は基部付近で緩やかに外反し，背・刃部両方にほぼ直角の関をもち，柄部と結合する。刀身はやや幅広で，その断面形は三角形である。柄部の断面形は長方形を呈し，先端に向かって緩やかに縮小する。柄部には木質や目釘等は確認できないことから，一本

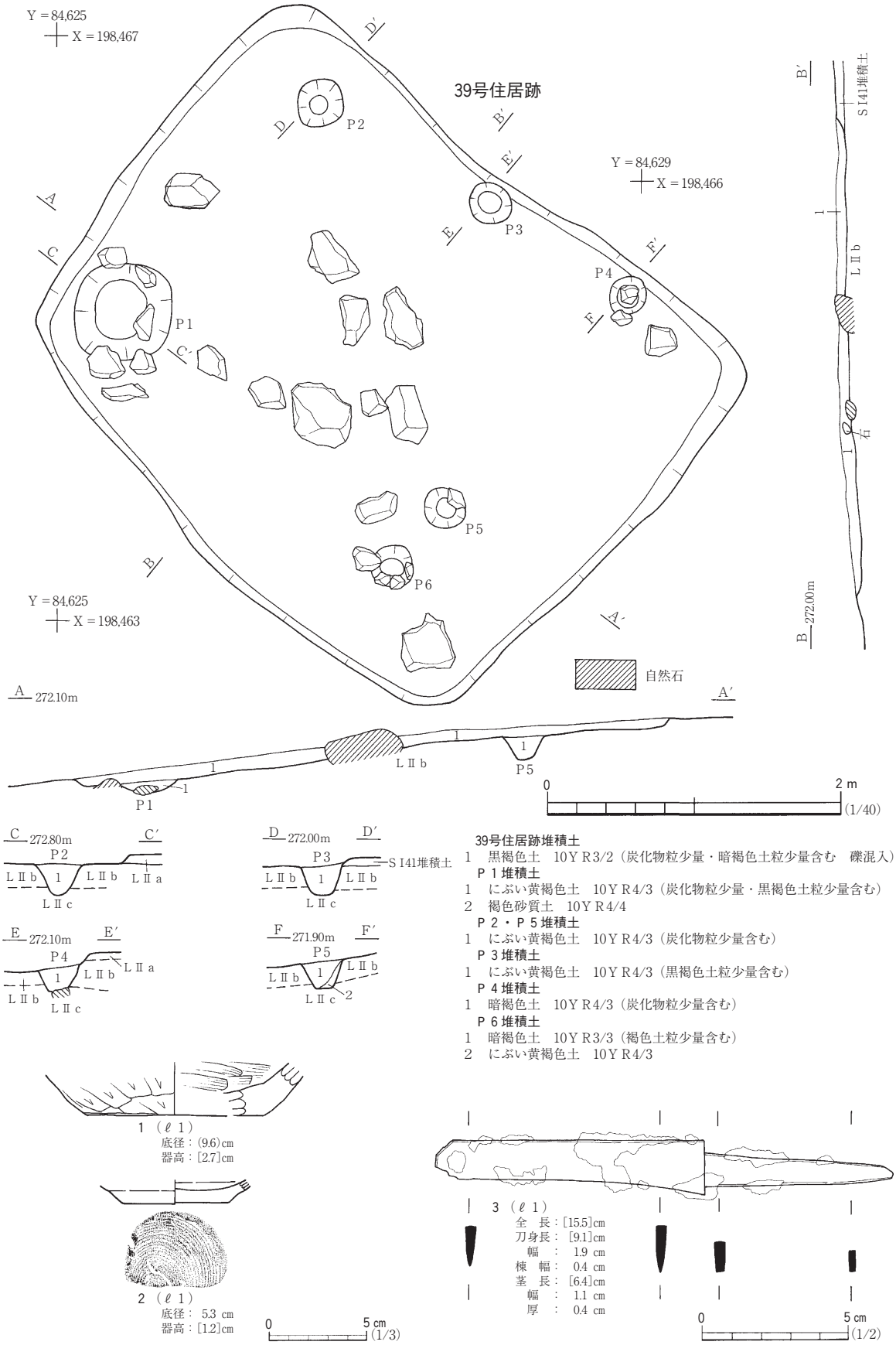


図26　39号住居跡・出土遺物

作りの柄に茎を落とし込んで取り付ける構造であったと推定される。

ま　と　め

本遺構は，カマドや炉跡などの施設が認められなかったが，貯蔵用の穴や柱穴のみ確認された。そのためここに人が実際に住んでいたかは不明といわざるを得ない。竪穴状遺構の一種と考えられる。床面からの出土遺物がないものの，堆積土出土遺物の年代は９世紀後半～10世紀代を示し，他時代のものは皆無である。このことから本遺構は平安時代の所産と考えられる。　（稲　村）

41号住居跡　ＳＩ41

遺　　構（図27，写真33・34）

本住居跡は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｃ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高271.4～271.8m程の西向き緩斜面である。周囲には42～44号土坑が近接している。遺構の南側で39号住居跡と重複し，検出状況から本遺構の方が古い。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は単層で，炭化物粒やＬⅡｂ層に相当する暗褐色や褐色土粒を含む暗褐色土である。遺構自体が浅いこともあり堆積状況は不明であるが，土質や含有物が均質ではなく，含有物などから人為的に埋め戻されたと推察している。

遺構の平面形は，南側が削平されているため全体形は不明であるが，遺存する部分から判断すると方形基調を呈し，軸長は北－南長3.5m，東－西長3.35mを測り，検出面からの深さは最大12cmを測り，西側へ行くにつれて浅くなる。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁の状況は，遺構自体が浅いため不明である。

本住居内の内部施設として，焼土跡１基と貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ６を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。焼土跡は，床面の中央から北西寄りの位置で確認した。焼土跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなり燃焼面を造っている。平面形は楕円形状を呈する。規模は長径62cm，短径が45cmを測る。底面は平坦で，ほぼ水平になる。床面から燃焼面までの深さは５cmを測る。カマド袖や煙道などは確認できなかったが，検出面から床面までの高低差をほとんど持たず，住居の壁面に焼土跡が寄っている様相から，カマドの燃焼部の可能性がある。

Ｐ１・２は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が42～45cm，深さ20～22cmを計測した。形状・規模から考えて上屋を支える柱穴と想定される。Ｐ３は床面の中央付近から西寄り付近で確認した。平面形は長径95cm程の楕円形状を呈し，深さは床面から15cmを測る。Ｐ４は床面の西側隅付近で確認した。平面形は径70cm程の円形状を呈し，深さは床面から18cmを測る。Ｐ３・４はともに，炭化物に混じって，土師器片が出土し，規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴や土器などを置くスペースなどの用途が想定される。

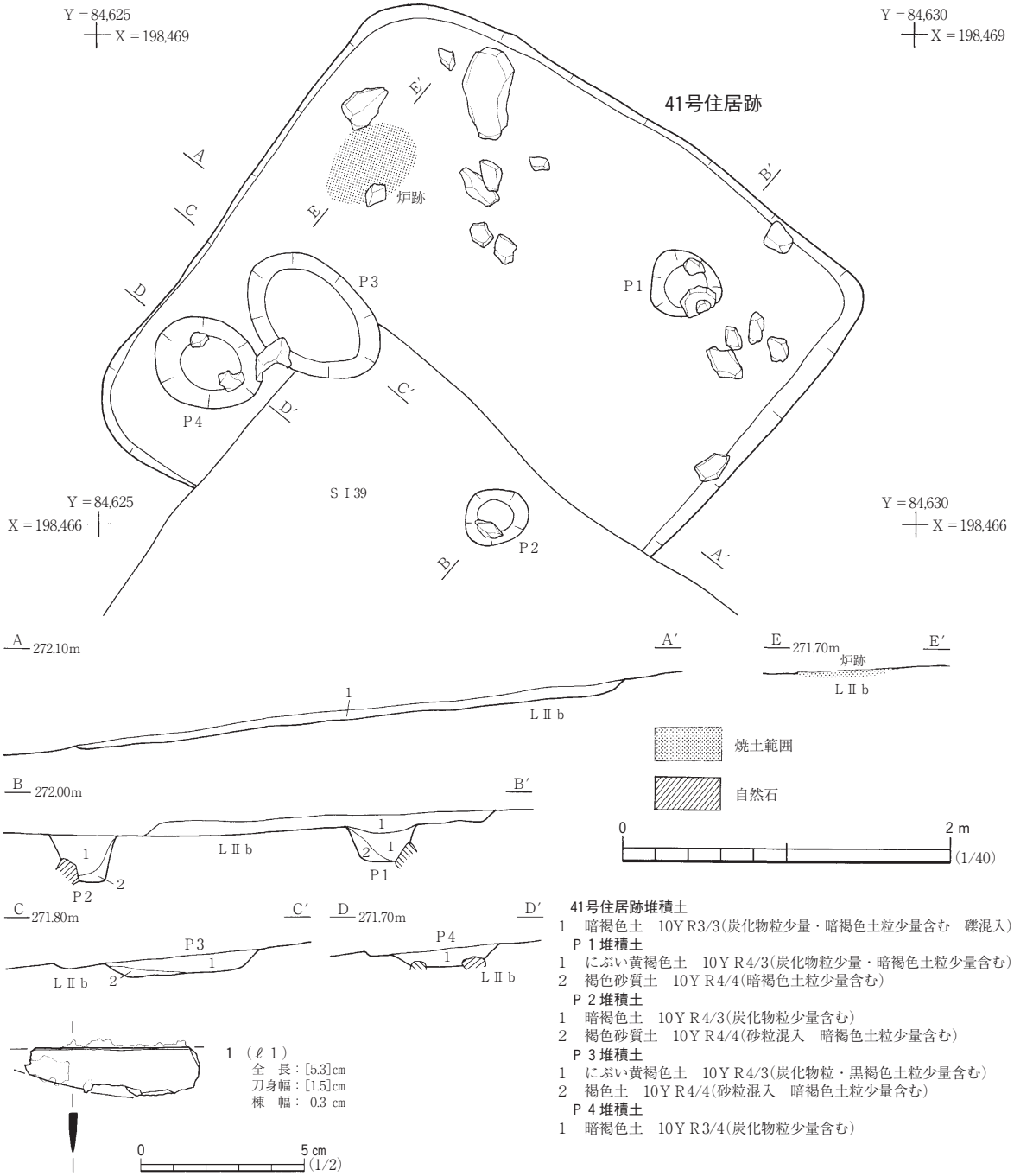


図27　41号住居跡・出土遺物

遺　　物（図27）

本住居跡からは，土師器片８点，鉄製品１点が出土している。土師器片は全て細片であるため図示できなかったが，大半が甕で，杯は非常に少ない。このうち鉄製品１点を図示した。また，本住居内からは赤褐色硬質の土器片も出土している。従来「赤焼土器・須恵系土器」等の名称が用いられているものであるが，細片では種別が困難であるため，土師器片として計上している。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（４点），Ｐ３ℓ１（３点），Ｐ４ℓ１（２点）である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１は鉄製刀子である。切先と柄部を欠損する。刀区は錆で不明瞭であるが，緩やかに屈曲し，刀身はやや幅広で，その断面形は三角形である。欠損品であるため詳細な形状は不明である。

ま　と　め

本遺構は，西向き緩斜面に造られた住居跡とした。残存部分の形状から，方形基調を呈していたと推測されるが，遺存状態は悪い。床面には貯蔵用の穴，柱穴が確認できた。焼土跡はカマドの痕跡の可能性がある。遺構の機能年代については判断する材料に乏しいが，出土した土器の特徴や重複関係，および周囲の遺構の年代観から９世紀としておきたい。（稲　村）

42号住居跡　ＳＩ42

遺　　構（図28，写真35・36）

本住居跡は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｇ５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高277.2～277.6m程の南西向き緩斜面で，今回確認した全遺構の中で最も標高が高い位置にある。周囲には11号焼土遺構が近接している。重複する遺構はない。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で炉跡となる焼土範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。１層は床面を覆う黒褐色土で炭化物粒や風化した花崗岩を含む。２層は褐色土粒や砂粒を含む暗褐色土で，北辺から西辺にかけて確認した。ＬⅡｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。

遺構の平面形は，楕円形基調を呈し，長軸3.50m，短軸2.90mを測る。検出面からの深さは最大12cmを測る。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，花崗岩が多く露出し，やや凹凸が見られる。また，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁は，遺存状況の良い北辺周辺は緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，炉跡１基を確認した。炉跡は，床面の中央付近の位置で確認した。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は，長軸48cm・短軸38cmの楕円形状を呈し，床面から燃焼面までの深さは５cmを測る。炉跡周辺からは比較的多くの遺物が出土している。

遺　　物（図29，写真65・66）

本住居跡からは，縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器片169点，石器片１点が出土している。このうち，土器23点を図示した。他のものについては細片であるが，今回図示した遺物と同一固体とみられる破片が大半で，条痕文を施した粗製深鉢の破片が多く，他に波状口縁の深鉢破片などが認められる。

これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土２層（140点），床面（30点）である。炉跡周辺から多く出土しているのが特徴である。以下，図示した遺物の特徴について概説する。

29図１・３は，同一個体で粗製深鉢形土器である。体部は屈曲を持たずに直線気味に立ち上がり，

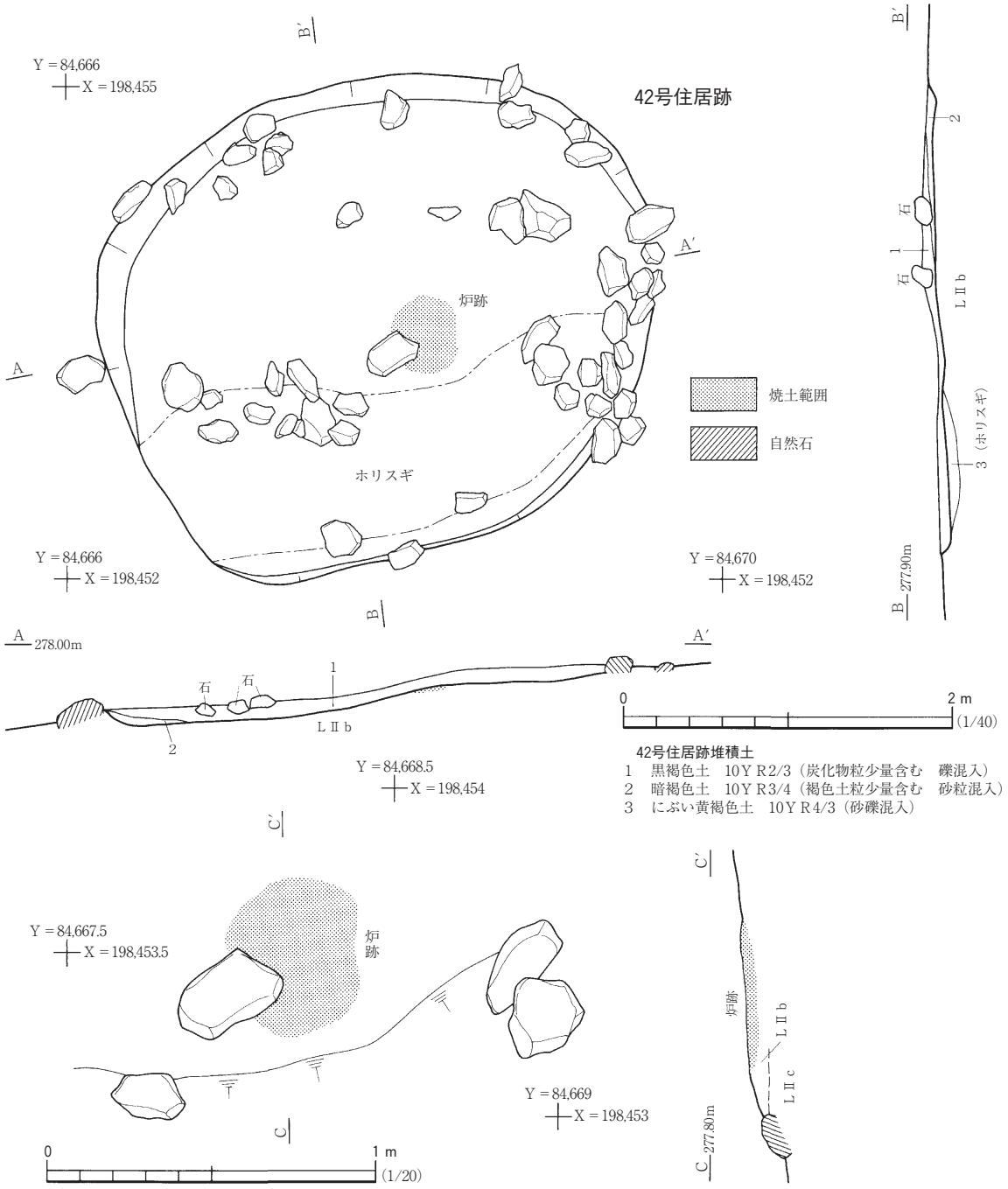


図28　42号住居跡，炉跡

口頸部が屈曲し，ほぼ垂直に立ち上がる。口縁は小波状を呈し，押捺を加えて小波状を表出しているため，押捺を加えた部分の口唇は肥大気味になる。また，最大径は体上部にあり，口縁は無文で横位の強いナデ痕が観察でき，体部には条痕文が施される。同図２・４～６も同一個体で粗製の深鉢形土器である。最大径は体上部にあり，口縁部が短く屈曲し内湾する。口唇はやや尖鋭となり，口内には強いケズリ痕がみられる。口縁部は横位の細かい条痕文，体部は縦位・斜位の細かいハケメ状の条痕文が施される。胎土は砂粒を多く含み，非常に脆い。同図７・８は粗製深鉢の口縁部資料である。ともに口縁付近で緩く内傾する形態で，口縁部はナデ，体部は撚糸文が施される。本遺

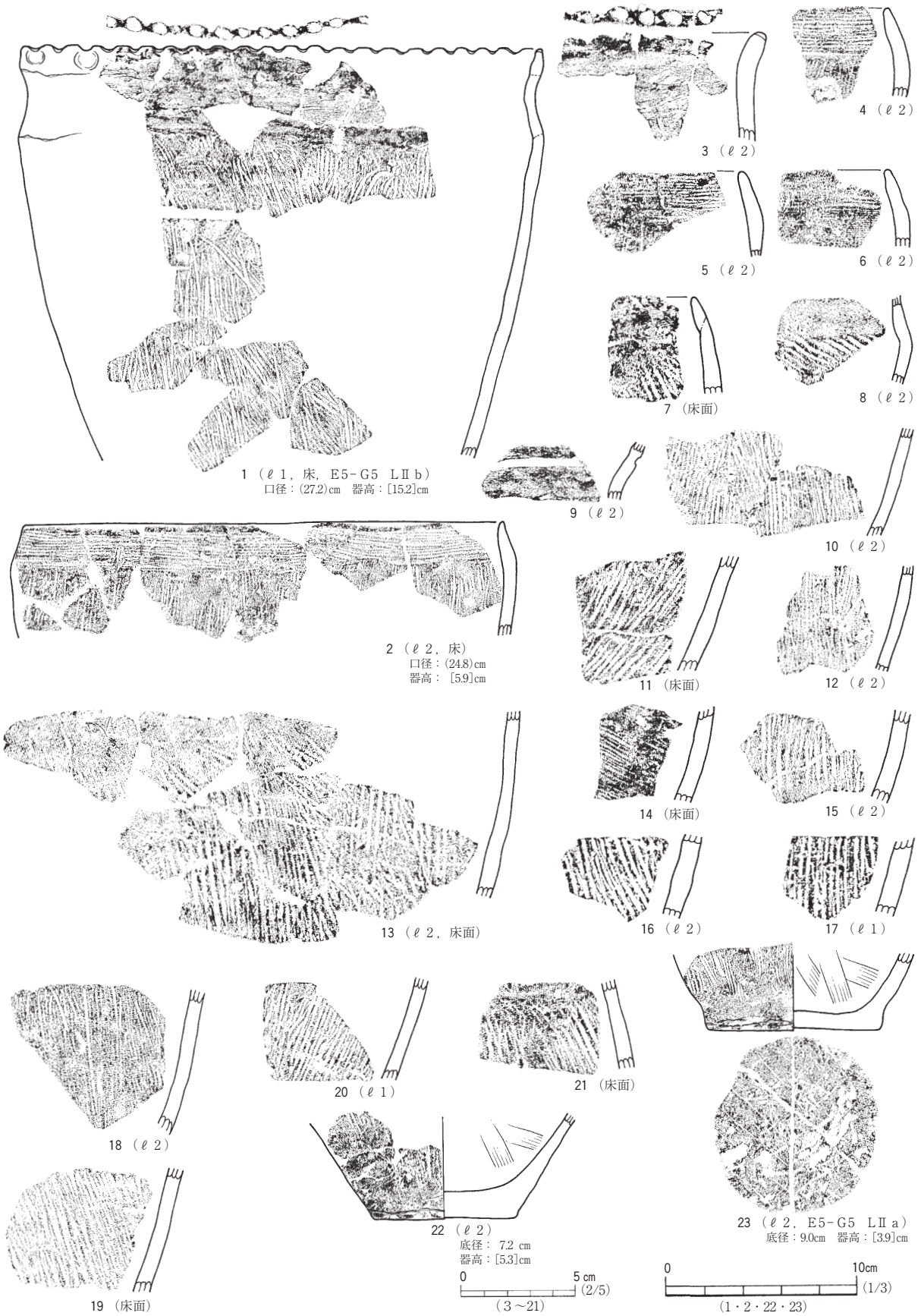


図29　42号住居跡出土遺物

構内で撚糸文が施された土器は，この２点のみである。同図９は鉢の体部であろうか。外面は無文で幅広な横位の沈線が巡る。

同図10～21は粗製深鉢形土器の体部資料を集めた。すべてハケメ状の条痕を施したもので，本遺構の出土遺物の主体を占めるものである。条痕は大きく，粗いもの（10・11・13・16・17・19～21）と条痕が細いもの（12・14・15・18）の２つに分けられるが，条痕の施文方向によって更に細分が可能である。同図22・23は底部資料である。ともに外面には条痕文，内面にはケズリ痕が認められ，胎土は砂粒を多く含み，非常に脆い。底面には，22は篦状工具で一定方向に削りが加えられ，23は木葉状の圧痕が認められる。

ま　と　め

本遺構は，楕円形状の竪穴住居跡で，今回確認できた遺構の中で最も標高の高い場所に位置する。床面には地床炉を有するが，花崗岩が多く露出しておりやや凹凸が見られるため，明確な柱穴は確認できない。堆積土中からは多くの遺物が出土したが，いずれも粗製土器である。遺構の時期は，時期を特定できる精製土器などの出土がないため，詳細な特定はできないが，おおよそ縄文時代晩期後葉～末葉，大洞Ａ～Ａ′式期に属するものと考えている。（稲　村）

47号住居跡　ＳＩ47

遺　　構（図30，写真37・38）

本住居跡は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｇ７・８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高274.8～275.0ｍ程の南向き緩斜面で，周囲には52・53号住居跡や12号焼土遺構が近接している。重複する遺構はない。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で，炉跡となる焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。１層は床面を覆う黒褐色土で炭化物粒や風化した花崗岩を含む。その性状と堆積状況から自然堆積と判断した。２層は炭化物を多量に含んだ黒褐色土で，床面に部分的に確認し，廃絶後の人為的な埋土の可能性がある。

遺構の平面形は，南側が削平されているため全体形は不明であるが，遺存する部分から判断すると楕円形基調を呈し，長軸3.65ｍ，短軸3.10ｍを測る。検出面からの深さは最大12㎝を測る。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，花崗岩が多く露出し，やや凹凸が見られる。また，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁は，遺存状況の良い北辺周辺は緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，炉跡１基を確認した。炉跡は，床面の中央付近の位置で確認した。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は，長軸50㎝・短軸38㎝の楕円形状を呈し，床面から燃焼面までの深さは３㎝を測る。炉跡周辺からは比較的多くの遺物が出土している。

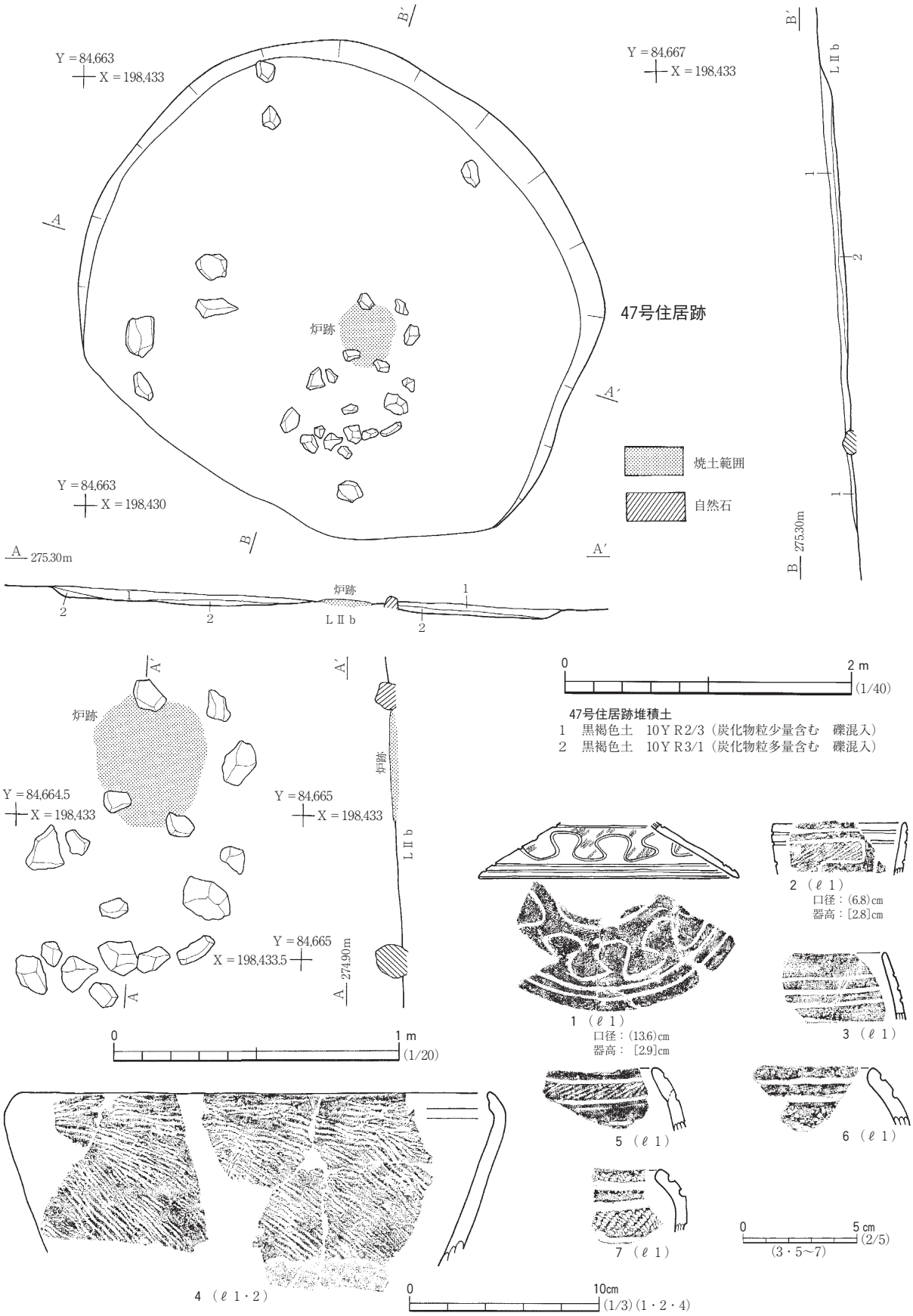


図30　47号住居跡，炉跡・出土遺物（１）

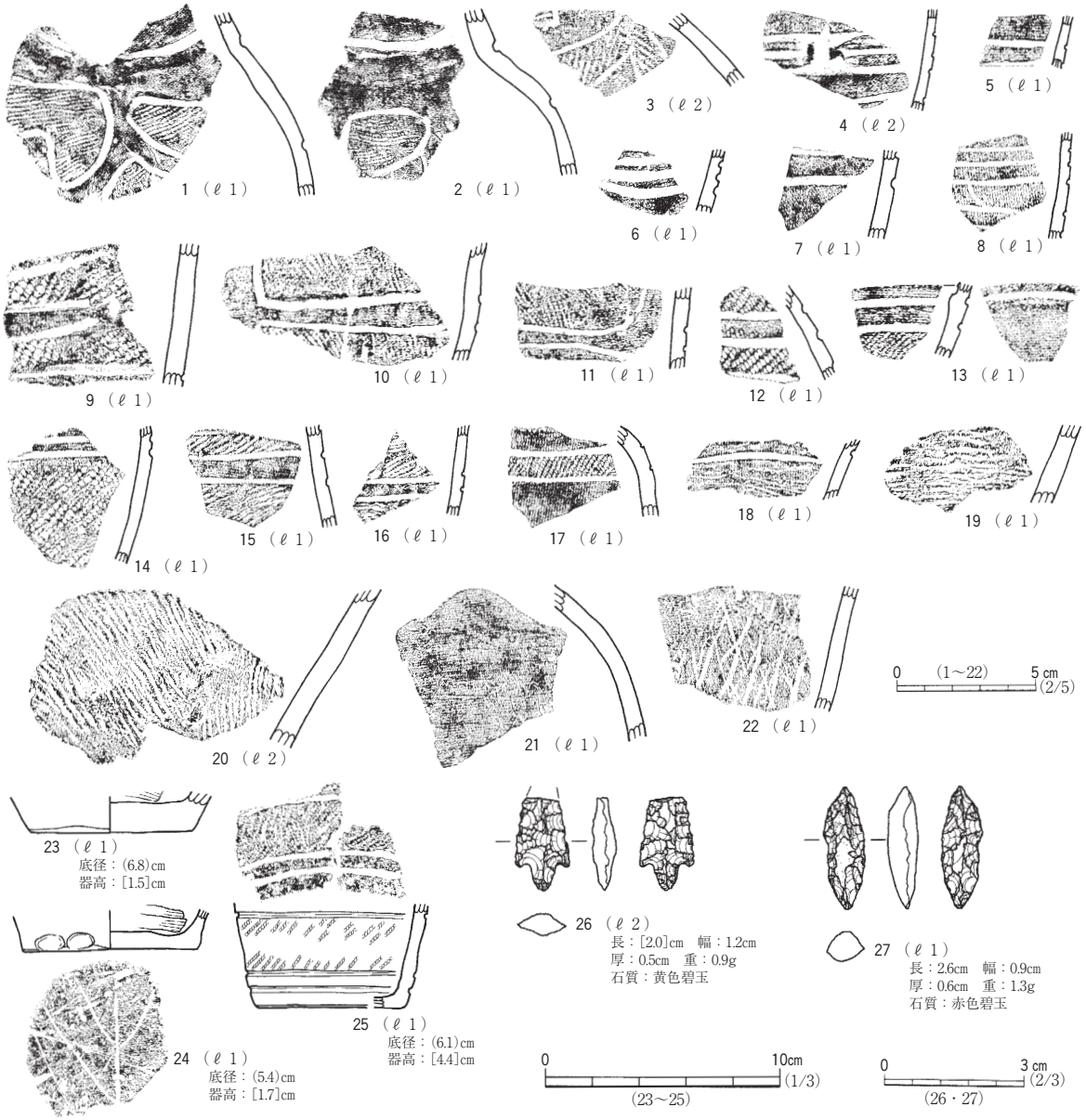


図31　47号住居跡出土遺物（２）

遺　　物（図30・31，写真67）

本住居跡からは，縄文・弥生土器片127点，石器片５点が出土している。このうち，土器32点，石器３点を図示した。他のものについては細片であるが，今回図示した遺物と同一固体とみられる破片が大半で，撚り糸や条痕文を施した粗製深鉢の破片が多く，他に磨り消しを施した弥生時代の精製土器片などが認められる。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（110点），同２層（32点）である。特に炉跡周辺から多く出土しているのが特徴である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

30図１は蓋形土器である。天井部を欠損し，「ハ」形に開く裾を有するもので，比較的薄手で，口唇は尖鋭である。体部と口縁部の間は横位の沈線に区画され，その間には変形工字文からの流れと考えられる三角形状の文様を上下２つを１単位として描出している。器面全体は磨消していると

思われ，一部縄文が消されずに残っている。内面は研磨されるが，器表はややざらつき，胎土は細砂粒を多く含み，脆い。２は小型の鉢形土器と判断した。口縁部は無文で，その直下に沈線が囲繞され，文様帯が形成される。文様は破片であるため判然としないが，沈線で方区画状に配され，区画内は縄文ＬＲが充填される。

30図３・５～７は鉢形土器の口縁部資料である。うち３は，比較的薄手で内傾する形態である。器面には３本の平行沈線が施されるが，文様構成は明瞭でない。器面は研磨され，光沢がみられる。

５～７の各資料は，口縁部に沿って平行沈線が囲繞され，比較的太い幅の沈線により文様を構成するものである。いずれも口縁部が内傾し，口唇は丸棒状を呈する。５は沈線間に縄文が充填されている。いずれも小破片で文様構成は不明である。４は粗製深鉢形土器である。体部は屈曲を持たずに立ち上がり，口縁付近で屈曲する。体部上半に最大径をもつものである。口唇はやや尖鋭となり，口内には弱い稜が形成される。外面には口縁部は横位，体部には斜位の撚糸文が施される。

31図１～３は壺形土器の破片資料である。２・３は色調・胎土から同一資料と思われ，頸部付近に太い幅の沈線が囲繞され，磨消縄文を構成するものである。小破片のため文様構成は不明であるが，曲線的で丸みのある文様帯である。３は，沈線で構成された区画内に縄文が充填されているが，文様構成は不明である。同図４～８は無文で，数条の平行沈線で文様が構成される鉢形土器の体部資料である。ほとんどは沈線のみで文様構成は明瞭ではないが，４は平行沈線間にπ字状の彫去が加えられ，器面は研磨されている。同図９～18は比較的太い幅の沈線により磨消縄文を構成するものである。いずれも鉢形か壺形土器の破片と推定され，沈線区画により磨消縄文手法で無文帯と縄文帯で構成されるが，破片であるため文様構成は不明である。また，10・11の器面には赤彩が施されている。なお，この赤彩の成分については，自然科学分析により赤鉄鉱（ベンガラ）という知見が得られた（第３編１節参照）。

同図19～22は体部資料を集めた。外面には19は横位の撚糸文，20は斜位の撚糸文，21は無文で研磨され，22は網目状の撚糸文が施される。42・53号住居跡でみられる条痕文が施される土器片は，本遺構内ではみられない。また，本遺構の付近からは，縄文時代晩期に属する土器片も多く出土していることから，22のような土器片は流入してきたものと推測される。

同図23～25には底部を集めた。いずれも精製土器の底部である。23・24は無文で器面は研磨されている。底部圧痕として24には木葉痕が観察される。25は体部が直線的に外傾し，３条の沈線が囲繞される。体部の沈線下には縄文帯が形成され，赤彩が施される。この赤彩の成分は，10・11と同様に赤鉄鉱（ベンガラ）という知見が得られた。器面はざらつき，胎土は細砂粒を多く含んでいる。同図26・27には石器を示した。26は有茎の石鏃で，尖頭部分を欠損する。27は石錘である。器体全体が細く錐部状に加工され，両端が錐になると思われる。

ま　と　め

本遺構は，南向き緩斜面に造られた楕円形状の竪穴住居跡である。床面には地床炉を有するが，花崗岩が露出しているため，明確な柱穴は確認できない。堆積土中からは多くの弥生土器が出土し

たが，いずれも磨消しを施した土器が主体を占める。遺構の時期は，出土遺物の特徴から弥生時代前期後葉～中期前葉に属するものと考えている。（稲　村）

48号住居跡　ＳＩ48

遺　　構（図32，写真39・40）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｂ８・９グリッドにかけて位置する。遺構は北東から南西にかけて緩やかに傾斜する地点に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面となる。西から東にかけてＬⅡａ層の除去作業中に焼土が検出されたことから遺構の精査を慎重に実施したが，西側は結果的に掘り過ぎてしまった。また，検出時点ではすでに床面と思われるにぶい黄褐色土と褐色土が露出しており，遺存状態は悪い。当初は北側にも住居と思われる落ち込みが観察されたことから１軒の住居として調査を実施したが，調査の結果，１軒と認識していた住居は床面の高さや主軸方向が異なることが判明した。そこで，新しい住居を48号，古い住居を51号住居跡と付して調査を実施した。

本住居は床面のみの遺存で，なおかつ西側はＬⅡｃ層まで掘削が及んでしまった。このため平面形は不明であるが，遺存していた炉跡まで含めると隅丸方形ないし長方形を呈すると考えられる。残存範囲での計測値は，東西軸で３ｍ以上，南北軸で3.35ｍを測る。東側の床面遺存範囲を基準とした主軸方位は西に10度ほど偏する。

堆積土は，にぶい黄褐色土と褐色土の混土で，各々は３～５㎝大のブロックとなる。このことから貼床と考えたが，しまりはそれほど強くない。また，明確な踏みしまりなどは観察されなかった。貼床の層厚はもっとも厚い地点で16㎝ほどである。床面の状況については遺存状態の悪さから多くは言及できない。しかし炉跡と確認された床面との比高差が20㎝以上存在していたことから，東側で確認した床面は本来もっと高かった可能性が高い。

この床面からは炉跡１基のみを確認した。床面上でのピットはない。炉跡は住居の西側に位置する。掘りすぎてしまったゆえに連続しないが，古い51号住居跡とは炉の標高が高いことや炉の下に本住居の東側で確認した１層と同様な埋土が観察されたことなどから，本遺構にともなうものと考えている。確認された範囲での規模は長軸26㎝，短軸21㎝を測り，酸化面の厚さは３㎝と非常に浅い。この酸化面は赤褐色を呈していたが，砂質ゆえに明確なしまりや焼固などはみられなかった。

貼床除去後の掘形および，床下ピットを１基検出した。掘形は壁面近くが浅く，中央に移行するにしたがって深くなっている。また，北東側は段差が生じている。これは掘形掘削時に西側から壁面へ掘削した痕跡と考えられる。床下ピット（Ｐ１）は住居の北壁付近に位置する。平面形は楕円形を呈し，東西それぞれに一段掘り込んだ窪みが観察される。また，東壁は露出した花崗岩をそのまま壁面としている。規模は長軸75㎝，短軸60㎝，掘形底面からの深さは最大で16㎝を測る。堆積土は暗褐色土と黒褐色土をブロック状に含む単一層で，人為的な埋土となる。本層から土師器片が数点出土している。

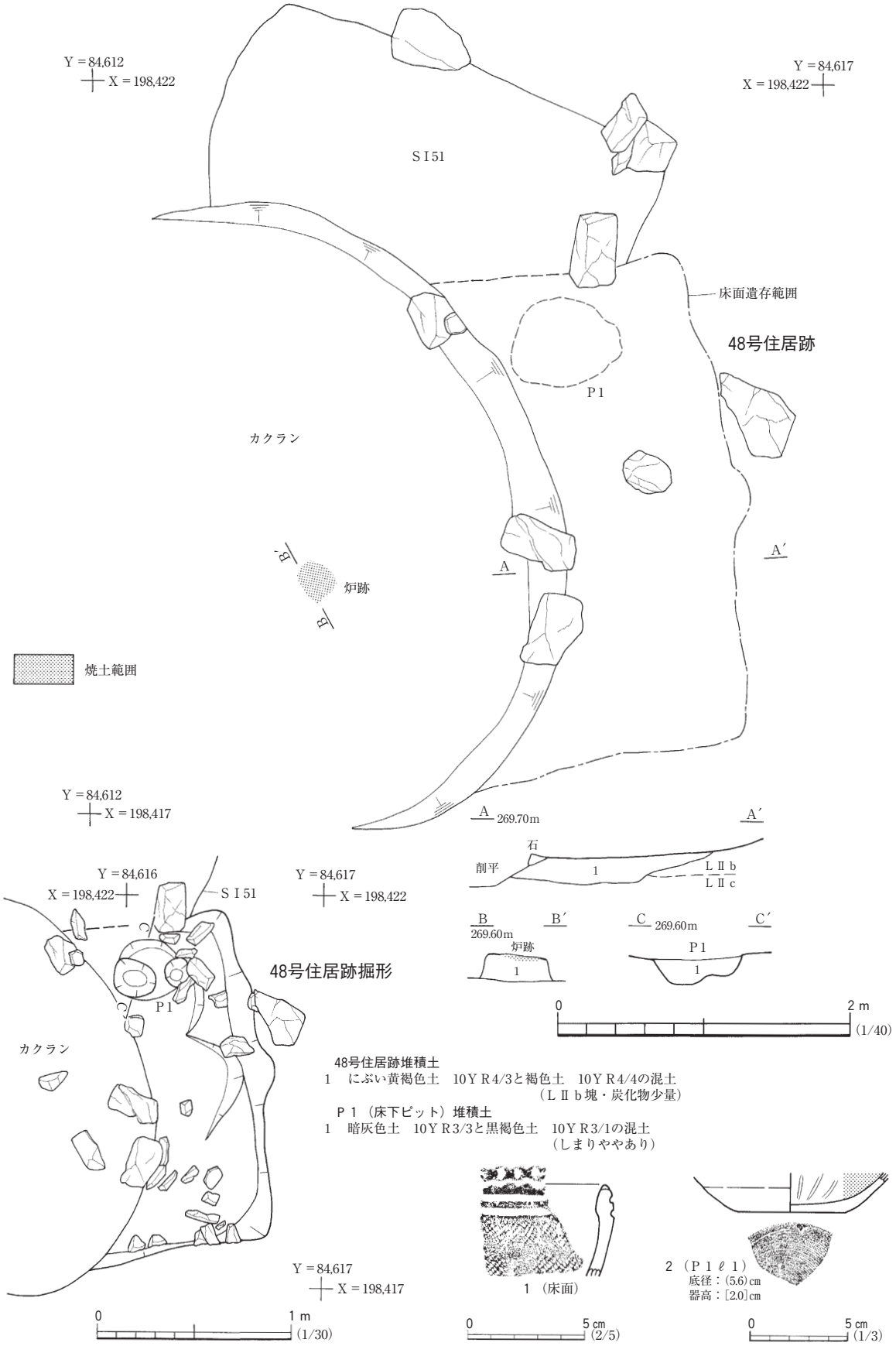


図32　48号住居跡・出土遺物

遺　　物（図32，写真68）

遺物は，縄文土器10点，土師器65点が出土し，このうち図示可能な２点を示した。１は縄文土器の口縁部片となる。口縁部は横方向の沈線，口縁端部は波状をなす。縄文時代晩期中葉の所産と考えられる。２は床下ピットのＰ１から出土したロクロ土師器の杯となる。底部切り離しは回転糸切りで，内面のミガキは非常に粗雑である。

ま　と　め

本遺構は西側一帯を掘りすぎてしまったが，一辺３ｍ以上の規模と考えられる住居である。また，床面のみの残存で，遺存状態は非常に悪い。出土遺物が少ないが，床下ピットから出土した土器から，９世紀後半以降の所産と考えられよう。（管　野）

50号住居跡　ＳＩ50

遺　　構（図33，写真41・42）

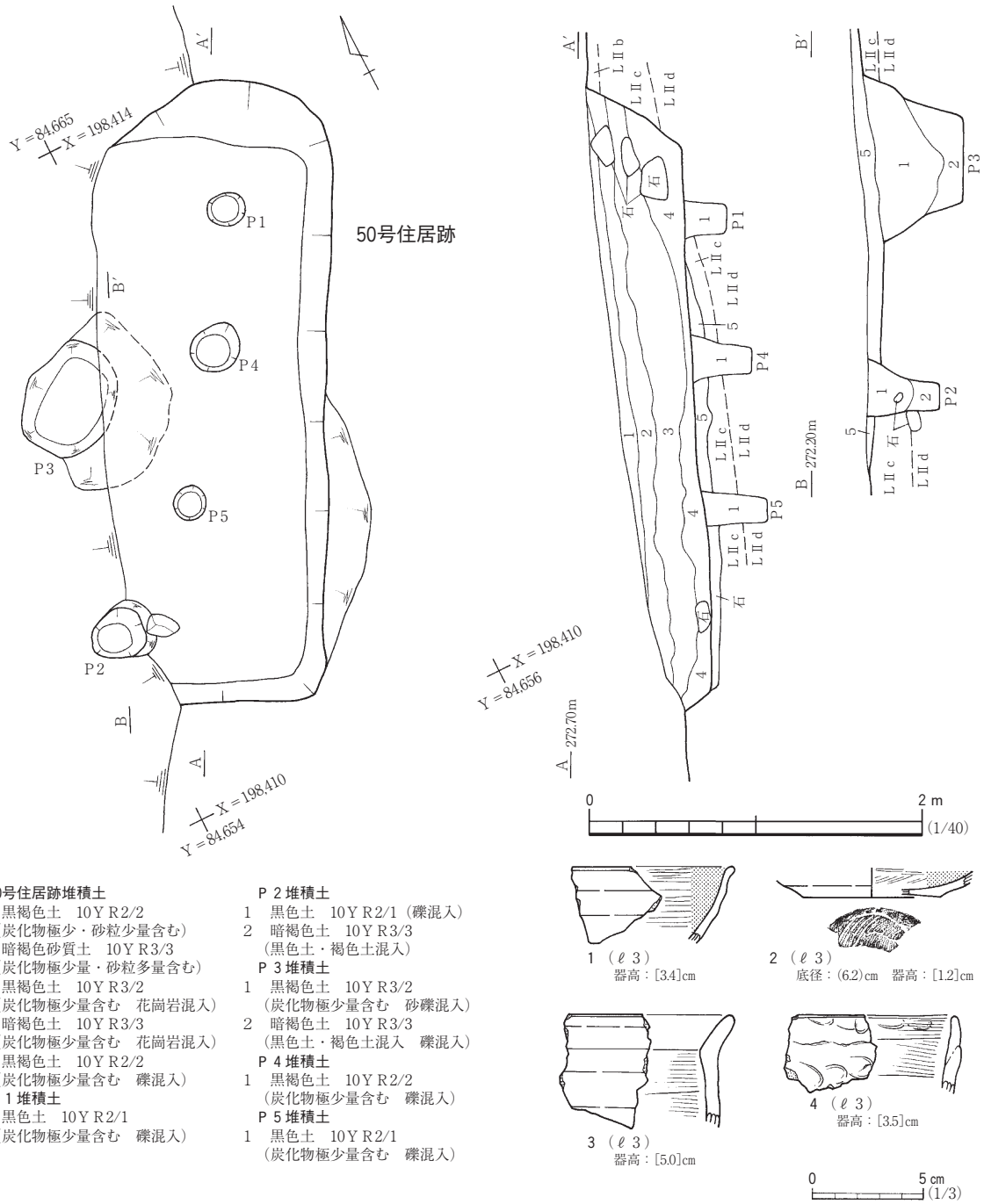
50号住居跡は調査東地区，Ｅ５－Ｆ９グリッドに位置する。南西向き緩斜面の中腹部に立地している。標高は272.0ｍ～272.5ｍである。遺構検出面はＬⅡｂとした黒褐色土の上面である。本遺構と重複する遺構はないが，北側には13号焼土遺構，東側には54号住居跡が分布している。

本遺構は近年の宅地造成により大きく削平されて，わずかに東壁の一部を確認しただけである。遺存する東壁の状態から，平面形は方形を基調とすると推定される。東壁は北に対して約30度東に傾き，その方向は斜面の等高線とほぼ直交する。東壁の規模は，検出面で長さ3.75ｍ，床面上で長さ3.18ｍを測る。検出面から床面までの深さは，最大で0.6ｍである。床面は平坦であるが，南西方向に向かってわずかに低く傾斜する。遺構内堆積土は５層に分けた。１～４層は遺構の埋没過程で自然に流入した堆積土で，黒褐色土を基調とする。５層は住居跡の掘形を埋める土で，貼床土と判断した。炭化物をわずかに含む黒色土で，床面の南側を中心に確認した。床面は部分的に貼床が施され，北側はＬⅡｄ層とした褐色砂礫層がそのまま床面となる。

住居跡内の施設としてＰ１～Ｐ５を確認した。Ｐ１・２・４・５は東壁に沿ってほぼ一列に配される小穴で，住居の上屋構造に関わる柱穴と考えている。平面形は円形を基調とし，その直径は0.18ｍ～0.35ｍである。床面からの深さは0.2ｍ～0.45ｍとなり，住居南側に向かって深くなる特徴がある。Ｐ３は床面の中央部付近に位置し，５層とした貼床土に覆われている。平面形は楕円形をなし，その直径が1.05ｍを測る。住居跡の掘形底面からの深さは0.53ｍである。住居の構築に際し，基盤土に含まれる花崗岩を抜き取った穴で，その後に埋め戻したものと考えている。

遺　　物（図33，写真68）

50号住居跡からは土師器片が65点出土した。いずれも住居跡を覆う自然流入土中から出土したものである。１は土師器杯の口縁部破片で，成形にロクロが用いられている。口唇部がわずかに外反する。内面は横方向のミガキが密に施され，黒色処理される。２は土師器杯の底部破片である。底部下半の再調整痕跡はなく，底部の切り離しは回転糸切りである。内面はやや不鮮明だが，底面



50号住居跡堆積土

1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/2
（炭化物極少・砂粒少量含む）
2　暗褐色砂質土　10Ｙ Ｒ3/3
（炭化物極少量・砂粒多量含む）
3　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/2
（炭化物極少量含む　花崗岩混入）
4　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（炭化物極少量含む　花崗岩混入）
5　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/2
（炭化物極少量含む　礫混入）

Ｐ１堆積土

1　黒色土　10Ｙ Ｒ2/1
（炭化物極少量含む　礫混入）

Ｐ２堆積土

1　黒色土　10Ｙ Ｒ2/1（礫混入）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（黒色土・褐色土混入）

Ｐ３堆積土

1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/2
（炭化物極少量含む　砂礫混入）
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3
（黒色土・褐色土混入　礫混入）

Ｐ４堆積土

1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/2
（炭化物極少量含む　礫混入）

Ｐ５堆積土

1　黒色土　10Ｙ Ｒ2/1
（炭化物極少量含む　礫混入）

図33　50号住居跡・出土遺物

は放射状のミガキ，体部は横位のミガキが施され，黒色処理される。３は土師器甕の口縁部破片である。成形にロクロが用いられる。直線的に立ち上がる胴部から，短く屈曲する口縁部となる。内面の調整痕として横方向のナデが観察できる。４は筒形土器の口縁部破片である。円筒形をなす器形であろう。外面は粘土紐の積上げ痕を明瞭に残す。口唇部には指オサエ痕が観察できる。内面の成形痕は，外面に比べればやや丁寧で，横位の指ナデによって器面が調整される。

ま　と　め

50号住居跡は近年の宅地造成により大部分が削平され，遺存は極めて悪い。そのため住居跡の詳

細な構造については不明な部分が多い。本住居跡の年代は，出土した土師器の年代観から，９世紀後半頃を中心とする時期と考えている。（福　田）

51号住居跡　ＳＩ51

遺　　構（図34，写真43・44）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｂ８グリッドに位置する。遺構は北東から南西にかけて緩やかに傾斜する地点に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面となる。48号住居跡の精査時に新たに確認した遺構で，この住居の精査時に住居の南半分を掘りすぎてしまっている。このため遺存状態は悪い。この48号住居跡と重複関係を有し，本遺構が層位的に古い。

遺構は北壁以外の三方の壁が破壊されているが，調査の結果，床面に踏みしまりの痕跡が確認されたことから床面まで掘削が及んでいないことが判明した。この踏みしまりの範囲を含めた平面形は長方形ないし方形を呈すると考えられる。また，規模は東西軸で2.93m，南北軸で３m以上を測る。東壁を基準とした場合の主軸方位は西に20度ほど偏する。

堆積土は２層からなる。いずれも黄褐色系の土層で，ともに自然堆積と考えられる。また，焼土粒は各層とも含まれていた。

床面はＬⅡｃ層を使用しており，貼床などは観察されない。また，住居の中央部に長軸2.2m，

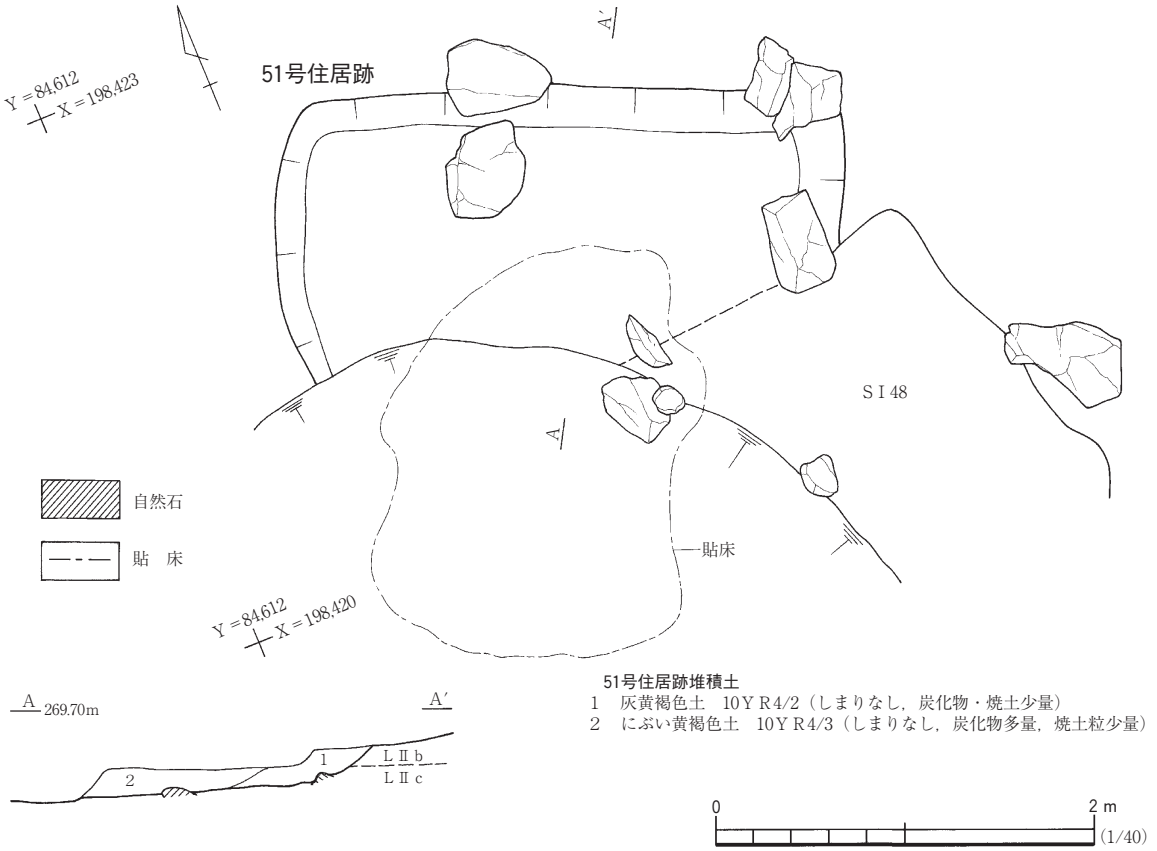


図34　51号住居跡

短軸1.6mほどの踏みしまり痕を確認した。堆積土がしまりのない土層に対して，床面はしまりが認められたことから，床面の認識は容易であった。この床面はほぼ水平を示すが，南西側は若干低い傾斜が認められる。北壁の床面からの遺存高は12cmである。

床面からはピットや炉跡などは確認されなかった。

遺　　物

遺物は，おもに２層から土師器および須恵器が３点ほど出土したが，小破片のため図示不可能な個体であった。土師器・須恵器ともに甕の胴部片で，土師器甕の表面は熱変を受けている。

ま　と　め

本遺構は，遺存状態が悪いものの一辺３mに満たない本遺跡では小型の住居に属する。カマドや炉跡，さらにはピットなど付属施設が認められなかったが，床面の踏みしまりのみ確認された。そのためここに人が実際に住んでいたかは不明といわざるを得ない。竪穴状遺構の一種と考えられる。床面からの出土遺物がないものの，堆積土出土遺物の年代は９ないし10世紀代を示し，他時代のものは皆無である。このことから本遺構は平安時代の所産と考えられる。　（管　野）

52号住居跡　ＳＩ52

遺　　構（図35，写真45・46）

本住居跡は調査区中央付近のＥ５－Ｆ７・８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高274.2～274.5m程の南向き緩斜面である。周囲には18・47号住居跡や12号焼土遺構が近接している。重複する遺構はない。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で炉跡の焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層は炭化物粒や流入した砂を含む黒褐色土である。遺構自体が浅いこともあり堆積状況は不明であるが，土質や含有物が均質であることから，自然堆積と推察している。２層は東壁付近で確認されたにぶい黄褐色土で，壁面の崩落土を含んでいる。

遺構の平面形は，長方形基調を呈し，軸長は北西－南東長3.55m，北東－南西長3.20mを測り，検出面からの深さは最大８cmを測り，西側へ行くにつれて浅くなる。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁の状況は，遺構自体が浅いため不明である。

本住居内の内部施設として，炉跡１基，貯蔵穴や柱穴と推定されるＰ１～Ｐ６を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。炉跡は，床面のほぼ中央付近で確認した。検出時にはすでに焼土の散布がみられ，床面から若干浮いた状況での検出となる。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は楕円形状を呈し，規模は長径52cm，短径が35cmを測る。底面は平坦で，ほぼ水平になる。炉は床面が砂質であるがゆえに，しまりは顕著ではない。このため，炉跡でなく動いた焼土とも考えられたが，断ち割りの

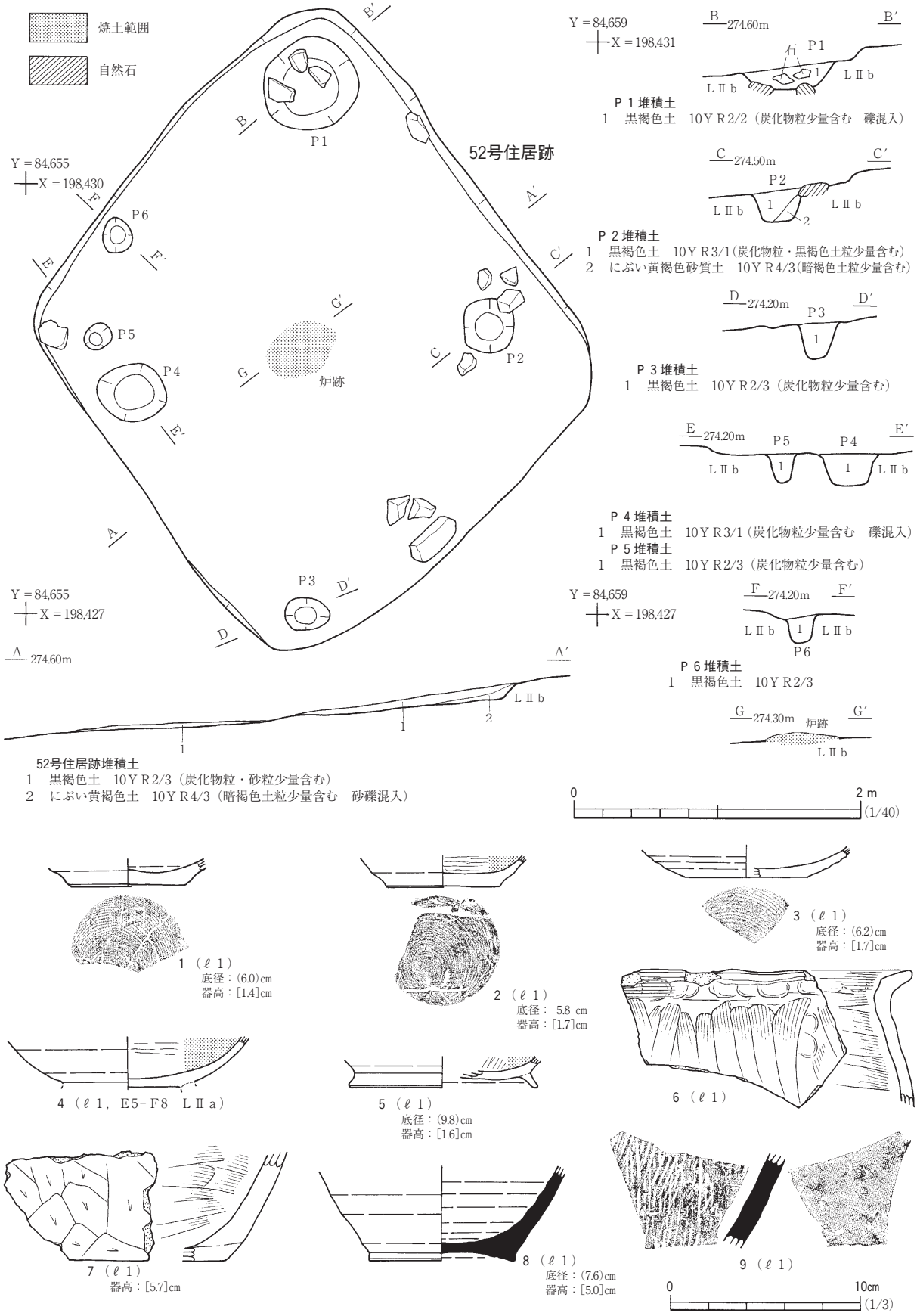


図35　52号住居跡・出土遺物

所見では混入物が全く認められないことから，移動した焼土ではないと判断した。床面から燃焼面までの深さは７㎝を測る。堆積する焼土層の中には獣骨と想定される骨片が若干認められた。

Ｐ１は床面の北東側隅付近で確認した。平面形は径65㎝程の円形状を呈し，深さは床面から16㎝を測る。規模が他の小穴と比べて大きいことから，貯蔵穴の用途が想定される。Ｐ２～Ｐ６は，平面形が円形・楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が20～50㎝，深さ18～25㎝を計測した。形状・規模から考えて上屋を支える柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

遺　　物（図35，写真68）

本住居跡からは，土師器片11点，須恵器片２点が出土している。このうち，土師器７点，須恵器２点を図示した。また，本住居内からは赤褐色硬質の土器片も多数出土している。従来「赤焼土器・須恵系土器」等の名称が用いられているものであるが，細片では種別が困難であるため，土師器片として計上している。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（12点），Ｐ１ℓ２（１点）である。以下，図示した遺物の特徴について概説する。

１～３はロクロ成型の土師器杯の底部資料である。すべて底部切り離しは回転糸切りである。１・３は赤褐色硬質の土器であり，ともに内外面はロクロナデ調整され，２は内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。４・５は，ロクロ成型の土師器高台杯である。４は高台部が欠損している。ともに内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。６は，非ロクロ整形で口縁部が「く」の字状に外反する土師器の甕である。口縁部はナデが施され口縁部と胴部の境には整形時の指圧痕が残る。また，胴部外面はヘラナデが施される。また，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。胎土には粗砂を含み非常に脆い。７は土師器甕の底部資料である。体部外面にはヘラケズリ，内面には横位のヘラナデの痕跡が観察できる。８は須恵器で，長頸瓶の底部資料である。高台部は底部との境に明瞭な段はなく，比較的丸みを帯びている。内外面ともにロクロナデ痕が明瞭に観察できる。９は器厚があり，外面にタタキ目が施されることから，須恵器甕の胴部と考えられる。

ま　と　め

本遺構は，南向き緩斜面に造られた方形状の竪穴住居跡である。床面には炉跡や貯蔵用の穴，柱穴が確認できたが，遺存状況は非常に悪い。また，床面は顕著な使用痕が見いだせないため，常時住居として使用されたかどうかは疑問である。遺構の機能年代については，出土した土器の特徴，および周囲の遺構の年代観から９世紀末葉～10世紀前葉としておきたい。（稲　村）

53号住居跡　ＳＩ53

遺　　構（図36・37，写真47・48）

本住居跡は調査区中央付近やや東寄りのＥ５－Ｇ８・９，およびＥ５－Ｈ８・９グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高273.8～274.5ｍ程の南向き緩斜面である。本遺構の内部で49・50号土坑と重複し，検出状況から，いずれも本遺構の方が古い。遺構は50号土坑の調査時に，その壁面に炉跡の焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。

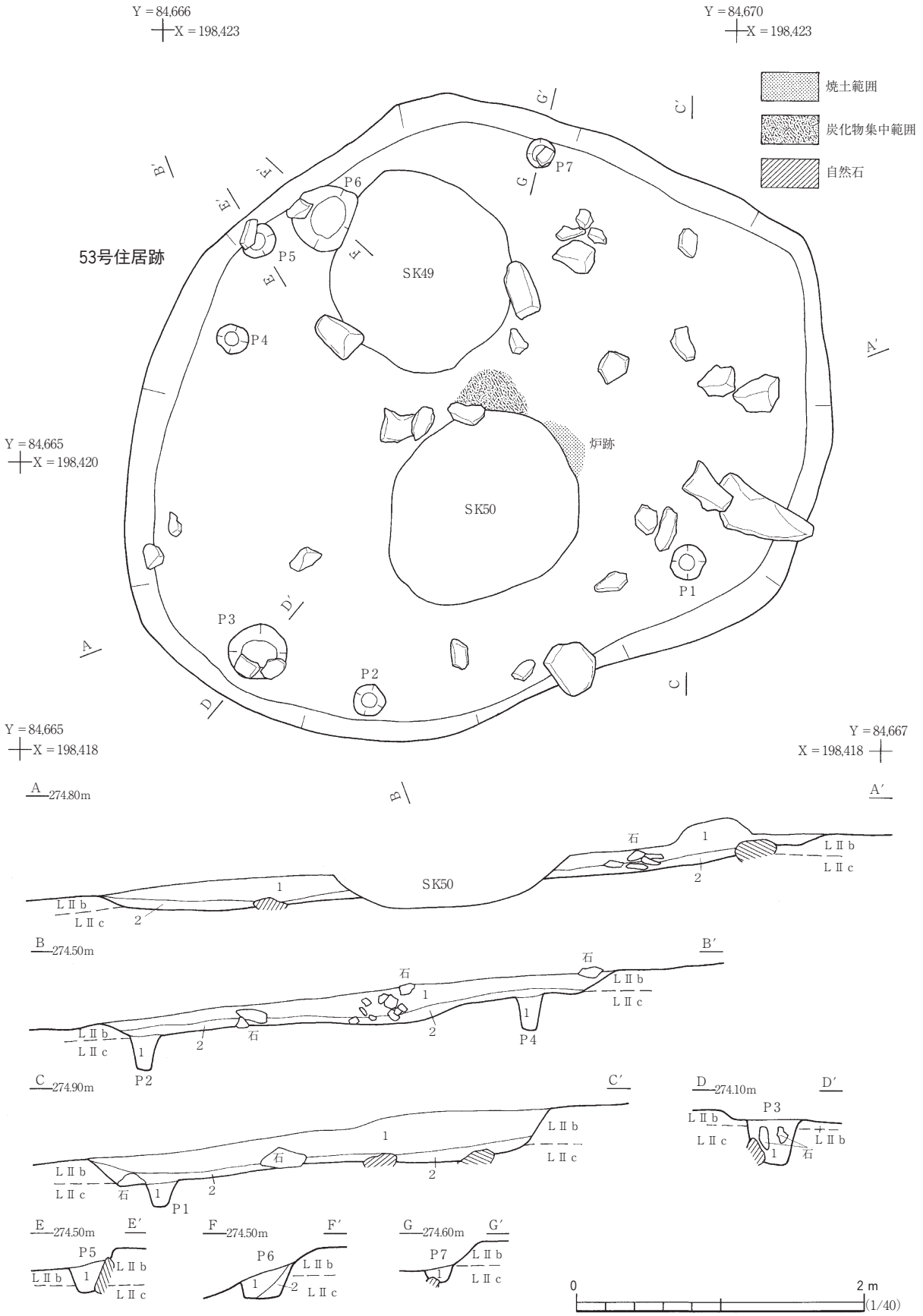

Y＝84,666
X＝198,423
Y＝84,670
X＝198,423
焼土範囲
炭化物集中範囲
自然石
53号住居跡
SK49
SK50
炉跡
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
Y＝84,665
X＝198,420
Y＝84,665
X＝198,418
Y＝84,667
X＝198,418
A 274.80m
A′
B 274.50m
B′
C 274.90m
C′
D 274.10m
D′
E 274.50m
E′
F 274.50m
F′
G 274.60m
G′
LⅡb
LⅡc
石
0
2 m
(1/40)

図36　53号住居跡

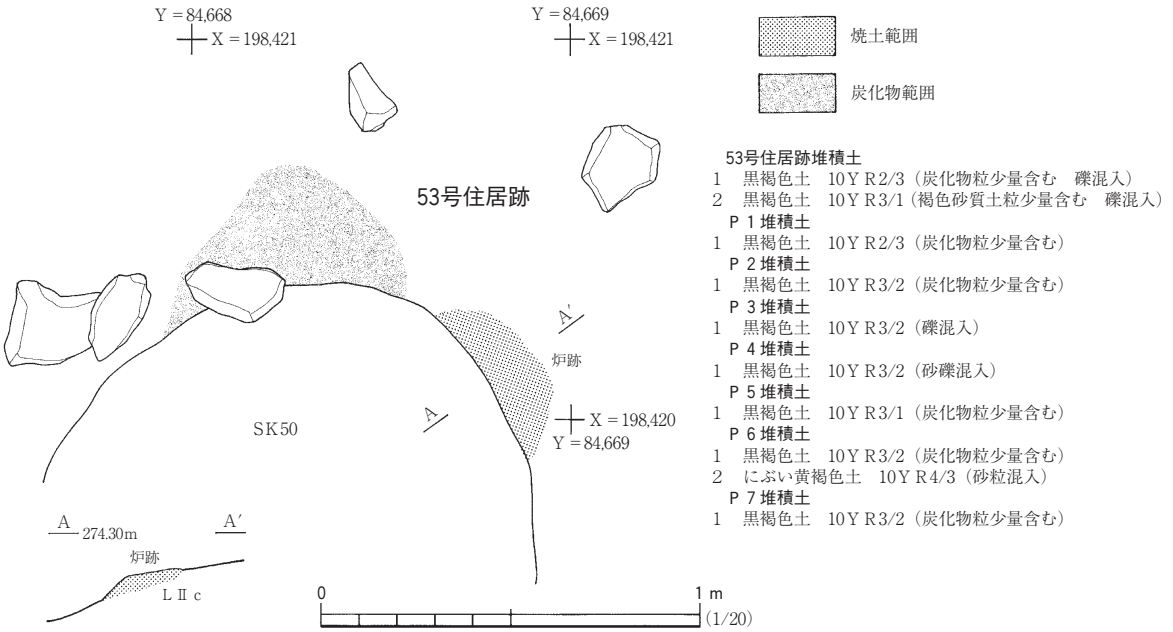


図37　53号住居跡，炉跡

遺構内堆積土は，色調および混入物から２層に分層できた。１・２層はともに床面を覆う黒褐色土で炭化物や流入した褐色砂質土を含む。堆積状況や含有物などの特徴から，自然堆積と判断した。

遺構の平面形は，楕円形基調を呈し，長軸5.30m，短軸4.20mを測る。検出面からの深さは最大35cmを測る。床面は，ＬⅡｂを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。また，踏み締まりや貼床等の痕跡は認められなかった。周壁は，全体的に緩やかに立ち上がる。

本住居内の内部施設として，炉跡１基，炭化物の集中範囲１箇所，および柱穴と推定されるＰ１～Ｐ７を確認した。Ｐは全て半載し，内部の堆積状況と断面の状況を確認した。炉跡は，床面の中央から南寄りの位置で確認した。炉跡の構造は床面を若干掘り込んで，浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡の平面形は，その大半を50号土坑に削平されているため不明である。床面から燃焼面までの深さは５cmを測る。また，炉跡に近接して床面のほぼ中央の位置で，炭化物が集中する範囲が認められた。炉跡と同様に，50号土坑にその大半を削平されているため，全体範囲は不明である。床面から２～４cmの厚さで堆積しており，その周囲からは特に縄文土器片が多く出土している。Ｐ１～Ｐ７は，平面形が円形･楕円形を呈する小穴である。規模は，直径や長径が20～46cm，深さ10～32cmを計測した。形状・規模から考えて周壁に沿って配された，上屋を支える柱穴と想定されるが，配置はきわめて不規則である。

遺　　物（図38・39，写真69）

本住居跡からは，縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器片189点が出土している。このうち，土器22点を図示した。他のものについては細片であるが，今回図示した遺物と同一固体とみられる破片が大半で，撚り糸や条痕文を施した粗製深鉢の破片が多く，他に波状口縁の壷破片などが認められる。これらの遺物の層位別出土点数は，住居内堆積土１層（82点），同２層（49点），床面（58

図38　53号住居跡出土遺物（１）

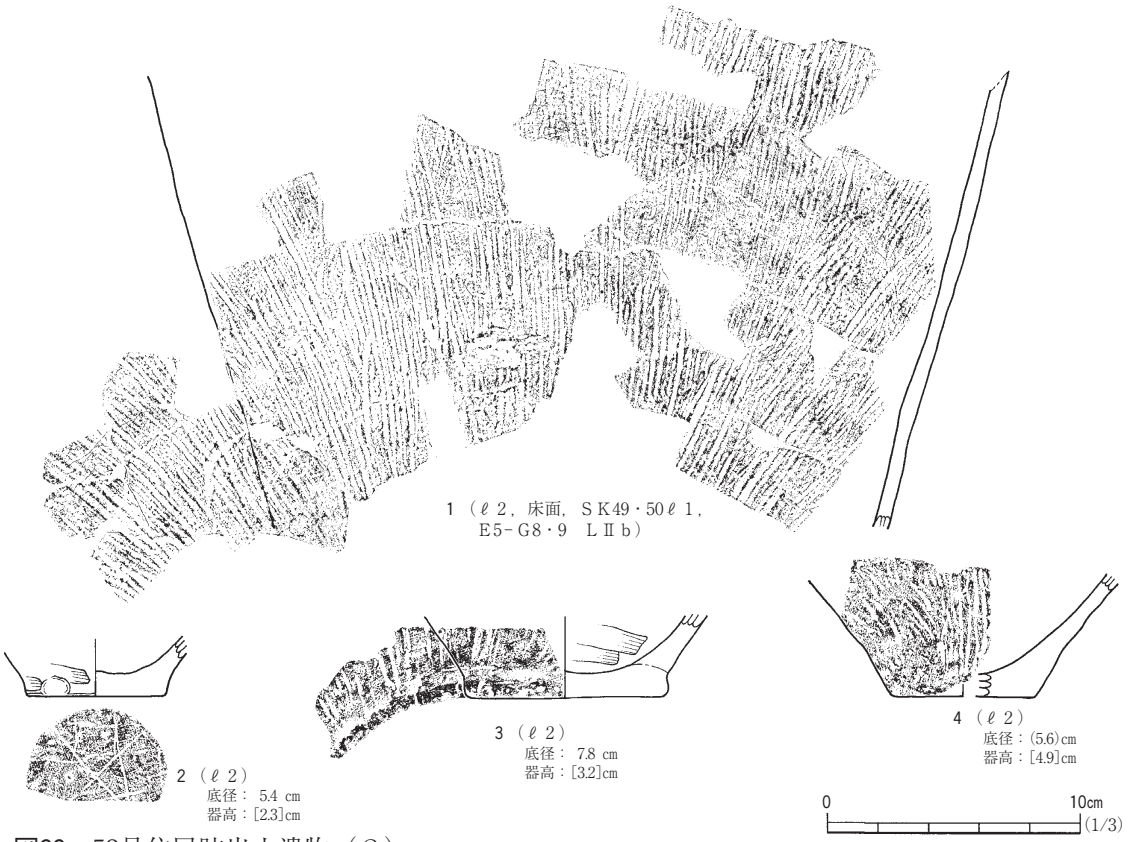


図39　53号住居跡出土遺物（２）

点）である。特に炉跡周辺から多く出土しているのが特徴である。

以下，図示した遺物の特徴について概説する。

38図１～３・５は，同一個体で台付鉢形土器の可能性がある。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり，口唇には浅い沈線が巡る。また，口内には稜が形成され，沈線が囲繞し，口縁にはＡ突起とＢ突起が交互に配される。文様は破片であるため全体文様や単位は不明だが，３㎜幅の明瞭な沈線で描出され，平行沈線が上・下段に匹字状の抉り出しを持つ工字文で構成され，上段の匹字文の両端が抉り出した粘土で多少高まる。器面は内外面とも丁寧に研磨されている。４は浅鉢形土器である。体部から口縁にかけては弱い内湾気味に立ち上がり，口唇はやや外傾する。口内には稜が形成され，沈線が囲繞し，口唇は薄く作出され丸棒状をなす。口縁部には連続した１条の鎖状隆帯文が巡り，その上下には数条の明瞭な平行沈線が施される。内面は研磨されるが，器表はざらつき，胎土は細砂粒・滑石を多く含んでいる。７は浅鉢形土器であるが，台付鉢形土器の可能性があり，上記の１とは別個体のものである。口唇には浅い沈線が巡る。また，口内には稜が形成され，沈線が囲繞し，口縁にはＢ突起が配される。文様は３㎜幅の明瞭な沈線で描出され，平行沈線が匹字状の抉り出しを持つ工字文で構成され，匹字文の両端が抉り出した粘土で多少高まる。器面は丁寧に研磨されている。８は，浅鉢の口縁部資料である。口内には，沈線を巡らし段と化し，口縁直下に文様帯が形成される。文様は，鎖状隆帯文の上下に沈線を施している。

38図６・９～14は粗製深鉢形土器の口縁部資料である。全て最大径は体上部にあり，口縁部が短

く屈曲し内湾する形態である。６・９・12～14は口唇がやや尖鋭となり，口内には強いケズリ痕が見られる。外面は撚糸文（６・９～11）とハケメ状の条痕文（12～14）と大きく２つに大別されるが，口縁部と体部の施文する方向が異なるものも見られる。また，12には補修孔と思われる穿孔が１箇所みられる。

38図15～18・39図１は体部資料を集めた。すべて粗製深鉢形土器である。外面には撚糸文を施すもの（38図15・16・18）と条痕文を施すもの（38図17・39図１）に大別されるが，図示できなかった土器については，撚糸文の土器の方が多い傾向を示す。

同図２～４は底部資料である。いずれも深鉢形土器の底部と思われる。２は器面の摩耗が顕著で，底面に木葉状の圧痕が確認される。３・４は，ともに底面は篦状工具で一定方向に削りが加えられる。３は側面がやや張り出し，弱い指頭圧痕がみられ，内面は凹凸しており雑な作りである。ともに外面には条痕文が縦位に施される。

ま　と　め

本遺構は，楕円形を呈する縄文時代の竪穴住居である。付帯施設として小穴を検出しているが，柱穴として機能しているか不明である。炉跡は50号土坑によって削平されているため，明確な構造は不明である。遺構の機能年代については，出土した土器の特徴，および周囲の遺構の年代観から縄文時代晩期後葉，大洞Ａ式期に属するものと考えている。（稲　村）

54号住居跡　ＳＩ54

遺　　構（図40・41，写真49・50）

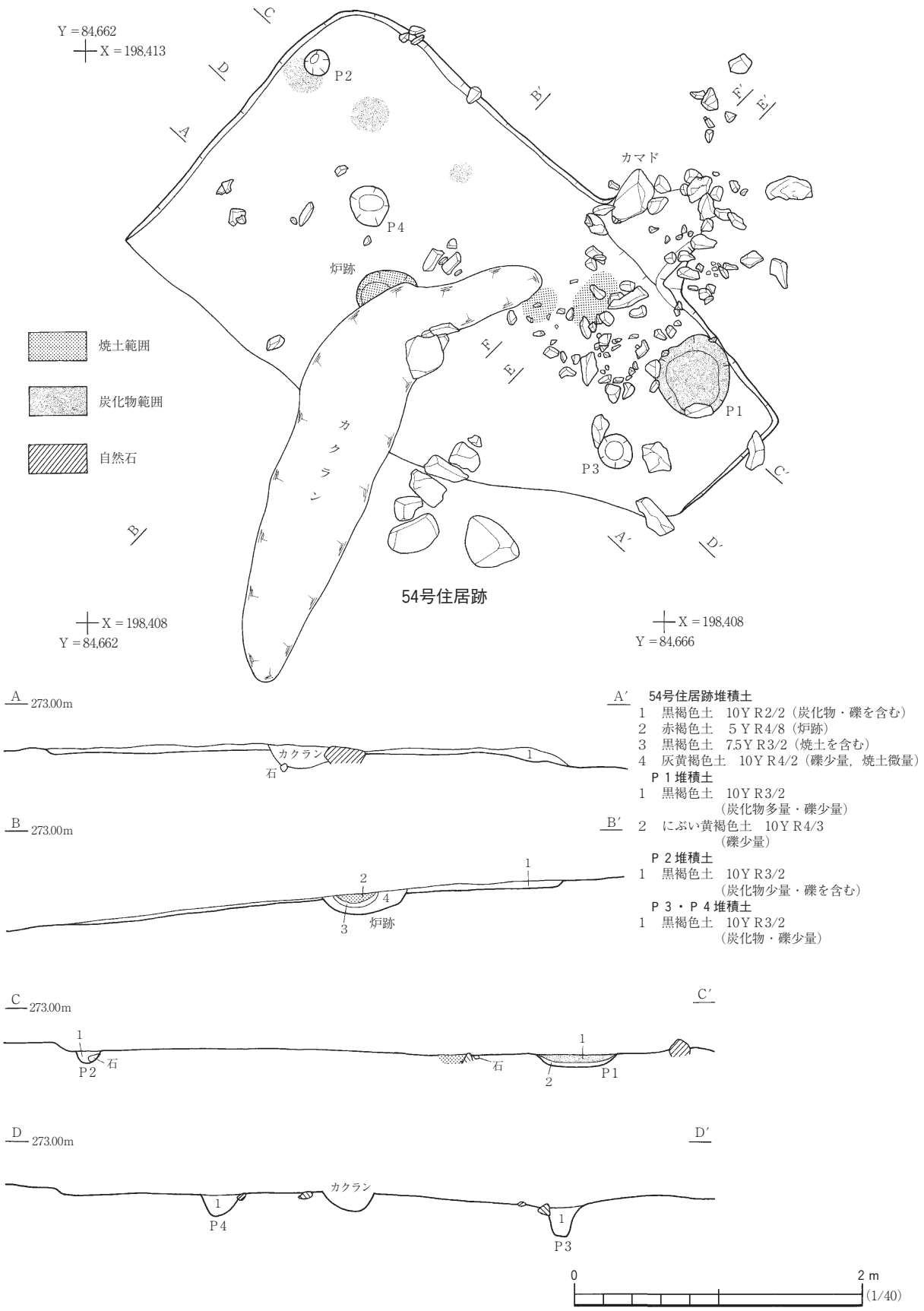
54号住居跡は調査区中央からやや南側，Ｅ５－Ｇ９・10グリッドに位置する。南向き緩斜面に立地している。標高は272.4～272.7ｍである。遺構はＬⅡｂ上面で検出した。

本遺構は斜面下位側の周壁や床面が遺存していないが，遺存する部分から平面形は長方形をなすと推定できる。遺存する北壁の長さは4.05m，床面までの深さは６㎝を測る。

遺構内堆積土は４層に分けた。１層は床面を覆う黒褐色土で，炭化物や礫を含んでいる。２層は炉跡内堆積土で，３層は炉の被熱による酸化面，４層は炉跡の掘形内に充填された埋土である。

北壁以外の周壁は遺存状態が悪いが，比較的緩く立ち上がる。床面はほぼ水平で，貼床は確認できない。

住居内施設としてカマド・炉跡・Ｐ１～４を確認した。カマドは斜面上位側，北壁の中央よりやや東側に造られる。遺存状態が悪く天井部や袖部の構造は確認できなかったが，焼土範囲が燃焼部で，その底面から煙道部へ向かって緩やかに立ち上がると推察される。炉は床面の中央やや西寄りに位置する。平面形は半分を失っているが，楕円形を呈す可能性が高い。掘形を伴っており、その平面形は楕円形を呈する。規模は長さ54㎝，床面から掘形底面までの深さは18㎝を測る。Ｐ１はカマドの東隣に位置し，北壁を抉るように掘り込まれている。平面形は円形を基調とし，規模は直径が54㎝，深さが９㎝を測る。遺構内堆積土１層の黒褐色土からは炭化物を多量に検出した。炭



A′　54号住居跡堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物・礫を含む）
2　赤褐色土　５ＹＲ4/8（炉跡）
3　黒褐色土　7.5ＹＲ3/2（焼土を含む）
4　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（礫少量，焼土微量）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（炭化物多量・礫少量）

B′
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3
（礫少量）

Ｐ２堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（炭化物少量・礫を含む）

Ｐ３・Ｐ４堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2
（炭化物・礫少量）

図40　54号住居跡

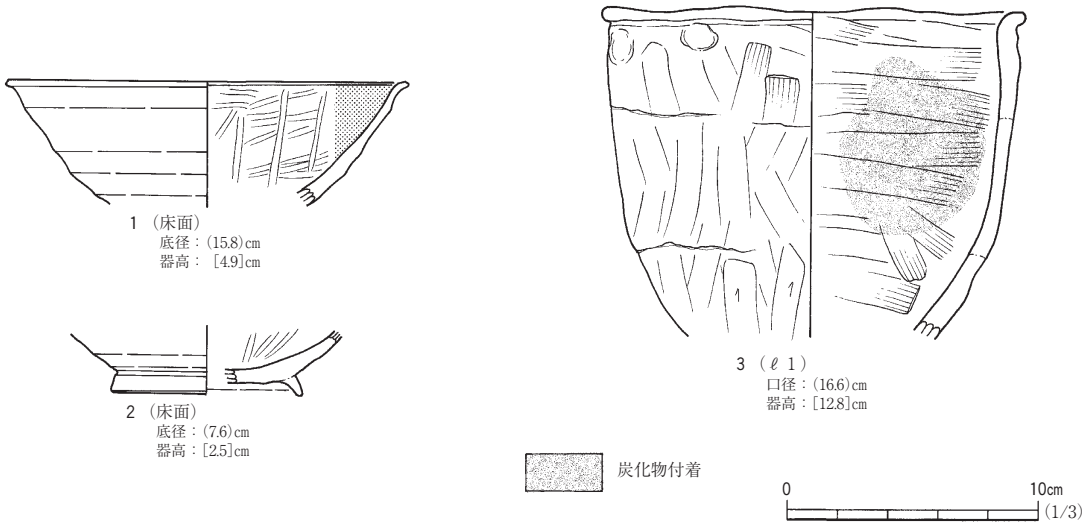


図41　54号住居跡，カマド・出土遺物

化物は長さが10㎝程度であり，不規則に重なっている状態である。Ｐ２～４は直径が18～28㎝，深さが９～20㎝を測る。形状からＰ２は柱穴と考えているが，Ｐ３は形状や炉跡との位置から柱穴であるかは不明である。

遺　　物（図41，写真70）

54号住居跡の出土遺物は，土師器28点である。遺物の出土状況は床面を覆う１層から15点，床面から13点であり，カマドの近辺から多く出土しているがそれらが使用状態を保っているかは確認できない。そのうち形状が把握できるものを図41に図示した。

１・２はロクロ整形の土師器杯である。１は体部から口縁部で，器形は体部から緩やかに内湾しながら立ち上がり，口縁部に至り外反する。内面は横位のミガキを施した後，放射状にミガキを加え、黒色処理が施されている。２は高台付杯の底部で，内面はミガキが施されている。３は非ロクロ整形の土師器甕である。胴部下半からゆるく内湾しながら立ち上がり，口縁部が強く外反する。外面は胴部上半にナデ，下半に縦位のケズリが施され、口縁部と胴部の境には指頭圧痕が認められる。内面は横位のナデが施される。

ま　と　め

本遺構は南向き斜面の中腹部に造られた，カマドと炉を伴う竪穴住居跡である。カマドと炉跡双方を有する住居は18号住居跡のみで，その主軸も同じである。本遺跡の竪穴住居跡では希有な構造といえる。遺存状態が悪く，住居跡の上屋構造については検討課題を残す。年代は出土した遺物から９世紀後葉～10世紀前葉頃に属すると考えている。（大　野）

第３節　掘立柱建物跡

今回の調査で，掘立柱建物跡を１棟確認した。調査区の南端部，小扇状地を呈する斜面の下位に立地し，竪穴住居よりも標高が低い地点に存在する。なお，Ｅ５－Ｄ・Ｅ８グリッドでピットが集中している地点もあることから，調査時に建物跡があるものと仮定して精査を慎重に実施したものの，建物とは認識するには至らなかった。それらは第５節ピットにて記載している。

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図42，写真51）

本遺構は，調査区中央南側のＥ６－Ｄ１グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面となる。遺構は谷から緩やかに傾斜する標高269.0～269.5ｍの地点に位置し，この等高線に対して若干西に傾いて位置する。検出は一部ＬⅡｃ層が露出した地点があり，そこでの柱穴の検出は

表６　１号建物跡柱穴計測表

柱穴番号	計測値（単位:cm）			柱穴番号	計測値（単位:cm）		
	長軸	短軸	深さ		長軸	短軸	深さ
Ｐ１	34	30	21	Ｐ６	43	43	28
Ｐ２	35	24	15	Ｐ７	36	33	20
Ｐ３	48	32	33	Ｐ８	29	27	14
Ｐ４	39	32	35	Ｐ９	31	28	25
Ｐ５	35	35	29	Ｐ10	43	37	20

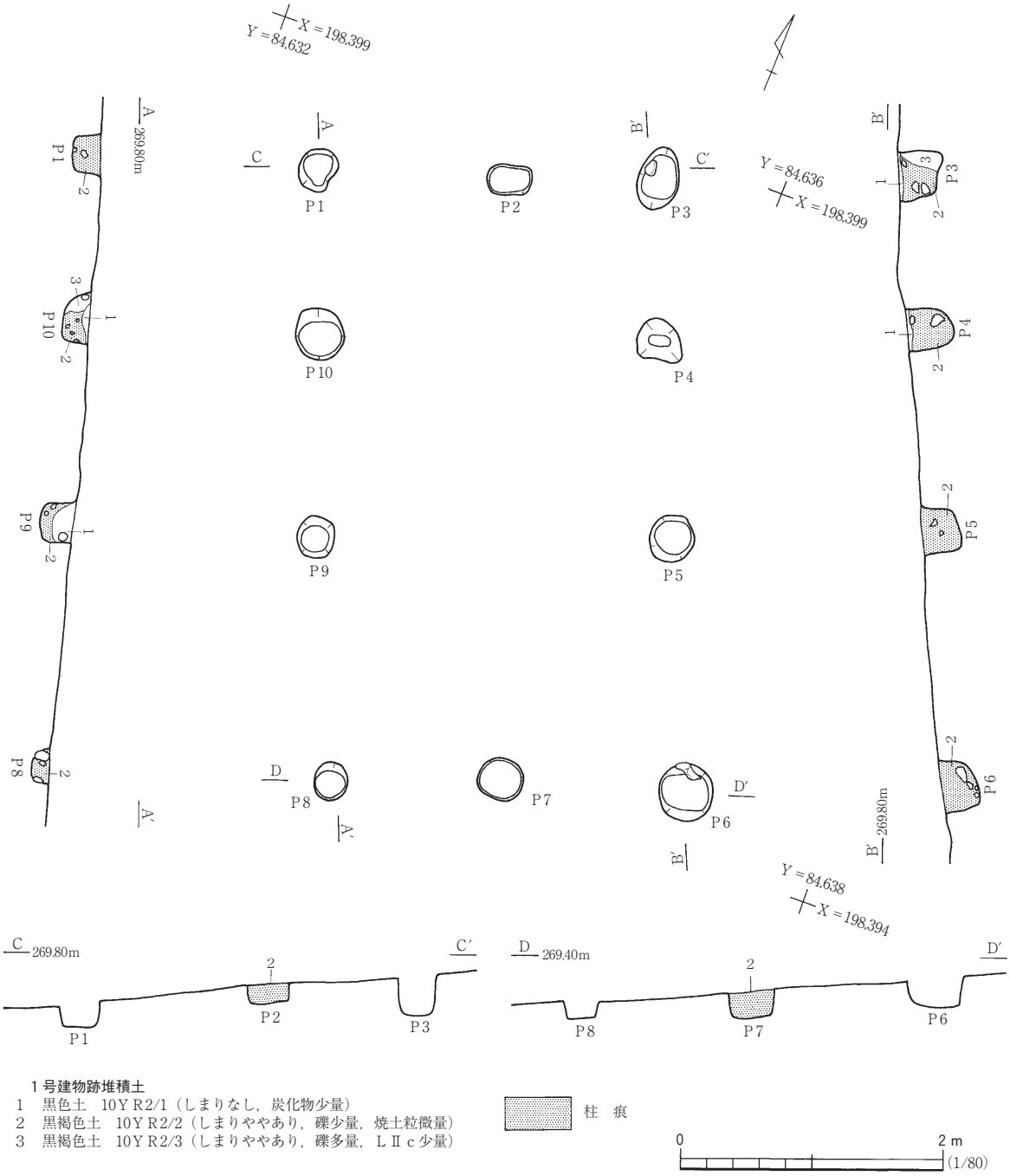


図42　１号建物跡

容易であったのに対して，ＬⅡｂ層での検出は非常に困難であった。また，周囲には遺構が希薄で，ＧＰ７が重複しているに過ぎない。ＧＰ７との新旧関係は，遺構同士の切り合いがないため不明である。

建物は，南北３間，東西２間の身舎を有する南北棟の建物で，東西２間の中点を結んだ軸線は真北から西に23度偏する。北側や西側では柱筋の通りの悪い柱穴が認められ，柱の通りはよくない。

各掘形の中心距離は西側柱列（Ｐ１・Ｐ10・Ｐ９・Ｐ８）で北から1.24m＋1.54m＋1.87m，東側柱列（Ｐ３～Ｐ６）で北から1.23m＋1.52m＋1.90m，北側柱列（Ｐ１～Ｐ３）で西から1.45m＋1.16

m，南側柱列（Ｐ６～Ｐ８）で西から1.28m＋1.43mをそれぞれ測る。柱間距離は一定しないものの，対応する反対側の柱列とはほぼ柱間が共通する。柱間の共通性や，周辺に柱穴が見あたらないことから１棟の建物と判断した。30cmを１尺と仮定すると，東西方向で3.8尺～4.8尺，南北方向で4.1尺～6.3尺の柱間寸法となり，面積は約12㎡を測る。

各柱穴の平面形は円形ないし楕円形を呈し，長軸29～48cm，短軸24～43cm，検出面からの深さ14～35cmをそれぞれ測る。柱穴の深さが斜面の上下でほぼ同じであることからすると，床面で水平をとっていたか，もしくは斜面のまま建てられていた可能性が高い。

柱穴の堆積土は３層からなる。最上層の１層は建物廃絶後の堆積層，２層は柱痕で柱は抜き取られていた。また，一部確認できた３層は掘形埋土となる。

遺　　物

遺物は，柱穴内から縄文土器片が３点ほど出土したが，小片のため図示可能なものはない。

ま　と　め

本遺構は，南北３間×東西２間の側柱建物跡である。小型の建物跡で，床束などの柱穴は存在しない。また，柱間の不統一や斜面に立地していることなどを勘案すると，一時的な施設と考えられようか。柱穴内の出土遺物はおろか，その周囲からも遺物は少なく，時期については言及できない。

（管　野）

第４節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は32基である。これらの土坑は，ほぼ竪穴住居跡と同様の分布傾向を示し，生活域を構成する一連の遺構群と考えられる。出土遺物の特徴から，全て近似する住居跡と同時期のもので関連性が指摘できるが，用途・機能については不明なものが多い。土坑の規模等は表３・４にまとめた。以下，遺構番号順に説明を行う。

27号土坑　ＳＫ27（図43，写真52）

本遺構は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.7m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，近接して31・33号住居跡，29号土坑が存在する。

遺構内堆積土は，炭化物や花崗岩を混入するＬⅡａに類似した黒褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.14m，短軸1.02mを測る。周壁は，西側は比較的急な立ち上がりとなるが，他は底面から段状に緩やかな立ち上りとなる。底面は北寄り付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは34cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。　（稲　村）

28号土坑　ＳＫ28（図43，写真52）

本遺構は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｂ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.6m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はなく，近接する遺構も認められない。

遺構内堆積土は，炭化物や花崗岩を混入するＬⅡａに類似した黒褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.32m，短軸1.10mを測る。周壁は，開口部付近はやや開くが，下位は比較的急な立ち上がりとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは55cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

29号土坑　ＳＫ29（図43・50，写真52・71）

本遺構は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.3m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，近接して31・33号住居跡，27号土坑が存在する。

遺構内堆積土は３層に分けた。１層は炭化物を含む黒色土，２・３層は黒褐色土や黄褐色土が混入した黒褐色を基調とする堆積土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.38m，短軸0.96mを測る。周壁は，北辺側は底面から段状に緩やかな立ち上りとなるが，他は比較的急な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは38cmを測る。

遺物は，堆積土中から土師器４点が出土している。そのうち１点を図示した。50図１は，非ロクロ整形で口縁部が「く」の字状に外反する土師器の甕である。器厚は肥大で，外面には斜位のヘラナデ，内面にも横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。他の３点については細片であるが，今回図示したものと同一個体とみられる破片であると思われる。本遺構は出土した土師器の特徴から，平安時代９世紀後半の年代観と考えている。周囲には該期の33号住居跡が位置することから，関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。（稲　村）

30号土坑　ＳＫ30（図43，写真52）

本遺構は調査区西側付近北寄りのＥ５－Ａ２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高269.8m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡａとした黒褐色土の下面である。重複する遺構はないが，近接して32号土坑が存在する。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層は炭化物や花崗岩を混入するＬⅡａに類似した黒褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。２層は黒褐色土粒を含むにぶい黄褐色土で，Ｌ

Ⅱｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。遺構の平面形は，不整な楕円形状を呈し，その規模は長軸0.92m，短軸0.84mを測る。周壁は比較的急峻な立ち上がりとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは50cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

31号土坑　ＳＫ31（図43，写真53）

本遺構は調査区西側付近やや北寄りのＥ５－Ａ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高269.6m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡａとした黒褐色土の下面である。重複する遺構はないが，近接して32号土坑が存在する。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層はＬⅡａに類似した黒褐色土を混入するにぶい黄褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。２層は暗褐色土粒を含む褐色土で，ＬⅡｂ層を起源とする壁面崩落土であろう。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.18m，短軸0.92mを測る。周壁は，北辺が比較的急峻な立ち上がりとなるが，他は緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であるが，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。検出面から最深部までの深さは33cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

32号土坑　ＳＫ32（図43，写真53）

本遺構は調査区西側付近北寄りのＥ５－Ａ３グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高269.8m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡａとした黒褐色土の下面である。重複する遺構はないが，近接して30号土坑が存在する。

遺構内堆積土は，黒褐色土や花崗岩を混入するにぶい黄褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.08m，短軸0.88mを測る。周壁は，開口部付近はやや開くが，下位は比較的急な立ち上がりとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは53cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

33号土坑　ＳＫ33（図44，写真53）

本遺構は調査区西側北寄りのＤ５－Ｈ１・２，Ｉ１・２グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高269.0m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土上面である。重複する遺構はなく，近接する遺構も認められない。

遺構内堆積土は３層に分けた。１層は炭化物を含む黒褐色土，２層は砂が混入したにぶい黄褐色土，３層は黒褐色土を混入した褐色土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.16m，短軸1.02mを測る。周壁は全体的に比較的急な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で，ＬⅡｄ層まで掘り込まれており，検出面から最深部までの深さは88cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

34号土坑　ＳＫ34（図44）

本遺構は，調査区中央部のＥ５－Ｅ８グリッドに位置する。標高272.5mの北東から南東方向に欠けて緩やかに傾斜する地点に構築されていた。検出面はＬⅡｂ層上面である。34号住居跡床面精査時に検出した遺構で，34号住居跡の壁面からはみ出す形で黒い落ち込みをもつ円形のプランを確認した。ゆえに，本土坑は34号住居跡より新しい。そのほかに重複関係を有する遺構はないが，北側に36号土坑・ＧＰ２・ＧＰ６，西側にＧＰ３・ＧＰ４がそれぞれ近接する。

平面形は東西方向に長い楕円形を呈し，長軸1.2m，短軸1.02m，検出面からの深さ21cmをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦であるが，一部花崗岩が露出した地点が認められる。周壁は各壁とも60度前後で立ち上がるが，北壁のみ緩やかに立ち上がる。断面形は逆台形を呈する。

堆積土は２層からなる。１層は炭化・焼土粒を含む黒褐色土，西壁付近で確認された２層は灰黄褐色土で，壁流入土と考えられる。ともに自然堆積と判断した。

遺物は，ロクロ成形の土師器３点が出土したが，小片のため図示不能である。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかしながら，性格については不明である。（管　野）

35号土坑　ＳＫ35（図44，写真53）

本遺構は，調査区中央部のＥ５－Ｅ７グリッドに位置する。標高274m付近の斜面に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面である。重複関係はないが，遺構の東側約４ｍの地点に26号住居跡，南東側約3.5mの地点に18号住居跡がそれぞれ位置する。

平面形は整った楕円形を呈し，東西方向に主軸を有する。この主軸方向はほぼ真北から180度と傾き，東西方向を示す。計測値は，長軸0.98m，短軸0.54m，検出面からの深さ21cmをそれぞれ測る。底面は花崗岩の露出などで凹凸が著しい。周壁はほぼ直角に近い角度で各壁とも立ち上がる。

堆積土は上層の黒褐色土，下層のにぶい黄褐色土の２層からなる。上層の黒褐色土からは炭化物や骨片（獣骨か）を含み，下層には全く含まれない。同時に，分層も明確であったことから，層の堆積に時間差があったものと考えられる。堆積状況は現地で明らかにできなかった。

遺物は，ロクロ土師器が22点出土したが，小片のため図示できうるものはない。ほとんどが内面

黒色の土師器杯となる。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかしながら，性格については不明である。（管　野）

36号土坑　ＳＫ36（図44，写真53）

本遺構は，調査区中央部のＥ５－Ｅ８グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面となる。重複関係はないものの，南側に34号住居跡・34号土坑，西側にＧＰ２・ＧＰ６がそれぞれ近接する。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し，長軸1.77m，短軸1.29m，検出面からの深さ14cmと浅い。底面はほぼ平坦であったが，北側は若干高くなる。周壁は30度前後と緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。堆積土は黒褐色土の単層で，遺存の悪さから堆積状況は不明である。

土坑から遺物は出土しなかった。このため年代は明らかにされないが，堆積土の特徴や周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。性格については不明である。（管　野）

37号土坑　ＳＫ37（図44，写真53）

本遺構は，調査区中央部のＥ５－Ｄ８グリッドに位置する。19号住居跡精査時に検出した遺構で，19号住居跡よりも黒みが強い黒褐色土が堆積していた。この黒褐色土が19号住居跡のプランに確認できなかったことから，本遺構は19号住居跡よりも古いと判断した。他に重複する遺構はないが，本遺構の南側に露出した花崗岩を隔てた南側に39号土坑が位置する。検出面はＬⅡｂ層上面である。

平面形は19号住居跡に東壁が破壊されているが，東西方向に長い楕円形を呈すると考えられる。また，南側は露出した花崗岩を壁として使用していた。現存する長軸は0.95m，短軸0.65m，検出面からの深さ14cmをそれぞれ測る。底面は石の露出もあって，凹凸が著しい。周壁は垂直に近い角度で立ち上がるが，北壁は若干緩やかに立ち上がる。

堆積土は炭化物粒を微量に含む黒褐色土の単層で，遺存の悪さから堆積状況は不明である。

土坑から遺物は出土しなかった。このため年代は不明であるが，堆積土の特徴や周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。性格については明らかにできなかった。（管　野）

38号土坑　ＳＫ38（図44，写真53）

本遺構は，調査区中央やや西側のＥ５－Ｃ７グリッドに位置する。谷が埋没した標高271m付近の南西側斜面に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面である。重複する遺構はないが，西側に36号住居跡が位置する。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し，北壁の一部は崩落していた地点が観察された。計測値は長軸1.59m，短軸0.79m，検出面からの深さ64cmをそれぞれ測る。各壁とも基盤層の花崗岩が露出しているが，底面から緩やかに立ち上がり，上面付近で直立する。断面形は擂鉢状を呈する。

堆積土は４層からなる。黒色土系と褐色土系の互層で，層厚は１～３層は10cm以下なのに対し

て，４層の暗褐色土のみ40cmと厚く堆積する。レンズ状に堆積することなどから，各層とも自然堆積と判断した。特に４層は一気に堆積していることから，土砂崩れなどの堆積層と考えられる。

土坑から遺物は出土しなかった。このため年代は不明であるが，堆積土の特徴などから，縄文時代～弥生時代の所産と考えられる。性格については明らかにできなかった。（管　野）

39号土坑　ＳＫ39（図45・50，写真53・71）

本遺構は調査区中央部のＥ５－Ｄ８グリッドに位置する。19号住居跡精査時に検出した遺構で，19号住居跡よりも黒みが強い黒褐色土が堆積していた。この黒褐色土が19号住居跡のプランに確認できなかったことから，本遺構は19号住居跡よりも古いと判断した。他に重複する遺構はないが，本遺構の北側に露出した花崗岩を隔てた北側に37号土坑が位置する。検出面はＬⅡｂ層上面である。

本遺構は，東側が19号住居跡，南側が後世の宅地造成による削土のため，残りは非常に悪い。確認された範囲での平面形は楕円形を呈し，長軸1.2m以上，短軸0.78m以上，検出面からの深さ20cmをそれぞれ測る。周壁は40度前後と緩やかに立ち上がるが，土坑の北東側は露出した花崗岩を壁として使用していた。堆積土は黒褐色土の単層で，遺存の悪さから堆積状況は不明である。

遺物は，弥生土器２点，土師器49点，須恵器１点，鉄製品１点の計53点が出土し，このうち図示可能な６点を掲載した。50図２～５は土師器である。２は小型の皿と思われる底部片で，底部外面は回転糸切り，内面はミガキののち黒色処理が施されている。３は高台杯となる。高台部が欠損するものの，低い高台を有する資料と考えられる。杯部底部外面は回転糸切りで，高台部は付け高台となる。４は両面黒色の杯である。底径5.6cmの小型の杯で，口縁部は欠損する。器形的に逆「ハ」の字状を呈するものとなろう。内外面とも粗雑なミガキが施されているが，外面は一部被熱で黒色処理が消滅している箇所が観察される。５は甕の底部片となる。非常に粗い胎土で，器面の調整も粗雑である。６は須恵器甕の胴部片である。胎土は砂質を帯び，石英などの内容物が目立つ。７は鉄釘と思われる鉄製品で，断面形は四角形をなす。

本遺構は，出土した遺物や堆積土の特徴から，平安時代の所産と考えられる。破片化した遺物が多く出土したことから，塵芥穴と推測される。（管　野）

40号土坑　ＳＫ40（図45，写真54）

本遺構は，調査区中央のＥ５－Ｃ８グリッドに位置する。遺構は谷が埋没した標高270.7m付近の南西側斜面に構築されており，検出面はＬⅡｂ層である。重複する遺構はないが，北側に35号住居跡が位置する。

精査時に掘りすぎてしまったものの，平面形は東西方向にやや長い楕円形を呈する。計測値は長軸1.81m，短軸1.4m，検出面からの深さ36cmをそれぞれ測る。周壁は東壁が60度で立ち上がるのに対して，西壁は10度前後と緩やかに立ち上がる。

堆積土は５層からなり，東側から西側にかけて土砂が流入したような堆積状況を示す。特に２・

５層は壁流入土で，他の層も明らかな埋土が観察されなかったことから自然堆積と判断している。

遺物の多くは１・２層から土師器が９点出土しているが，このうち１点を図示した（45図８）。高台杯の底部から高台部片の破片で，高台部は「ハ」の字状を呈する。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかしながら，性格については不明である。（管　野）

41号土坑　ＳＫ41（図45，写真54）

本遺構は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.4m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はなく，近接する遺構も認められない。

遺構内堆積土は３層に分けた。１層は砂礫を含む黒褐色土，２層は炭化物や黒褐色土が混入したにぶい黄褐色土，３層はＬⅡａやＬⅡｂに類似した黒褐色土や暗褐色土を混入した褐色砂質土である。その堆積状況と性状から，３層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で，その後ほとんど時間差なく２層で埋め戻された可能性が高い。１層は埋め戻されて窪みとなった部分に，風雨など自然的な要因で流入したと考えている。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.26m，短軸1.02mを測る。周壁は全体的に比較的急な立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で，ＬⅡｄ層まで掘り込まれており，検出面から最深部までの深さは53cmを測る。

遺物は，堆積土中から縄文・弥生土器３点・土師器８点が出土している。すべて細片であるため図示できなかったが，縄文・弥生土器は撚糸文を施した体部が１点，口唇に縄文を施文した弥生土器の甕と思われる口縁部が１点みられる。土師器片は杯４点，甕４点が判別できる。杯はいずれもロクロ成形で，内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものが２点，赤焼き土器の杯片が２点である。甕はすべて体部資料であり，外面にはヘラケズリ調整を施すものが認められる。本遺構は出土した土師器の特徴から，平安時代９世紀後半の年代観と考えている。周囲には該期の39・41号住居跡が位置することから，関連性が窺える。しかし，明確な性格等は不明である。（稲　村）

42号土坑　ＳＫ42（図45，写真54）

本遺構は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｃ５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高271.7m程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，39・41号住居跡，43・44号土坑，14号焼土遺構が近接する。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層は炭化物を含む黒褐色土，２層は黒褐色土が混入したにぶい黄褐色砂質土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.34m，短軸1.18mを測る。周壁は，東辺側は緩やかな立ち上りとなるが，他は比較的急な立ち上がりとなる。底面は，ＬⅡｄを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは28cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺に位置する遺構との関連から，平安時代の年代観と考えている。　（稲　村）

43号土坑　ＳＫ43（図45，写真54）

本遺構は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｃ４・５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高271.7ｍ程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，39・41号住居跡，42・44号土坑，14号焼土遺構が近接する。

遺構内堆積土は３層に分けた。１層は砂礫を含む黒褐色土，２層は炭化物や黒褐色土が混入した暗褐色土，３層はＬⅡａやＬⅡｂに類似した黒褐色土や暗褐色土を混入した褐色砂質土である。その堆積状況と性状から，３層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で，その後ほとんど時間差なく２層で埋め戻された可能性が高い。１層は埋め戻されて窪みとなった部分に，風雨など自然的な要因で流入したと考えている。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.45ｍ，短軸1.12ｍを測る。周壁は全体的に比較的急な立ち上がりとなる。底面は，ＬⅡｄを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。検出面から最深部までの深さは60㎝を測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺に位置する遺構との関連から，平安時代の年代観と考えている。　（稲　村）

44号土坑　ＳＫ44（図45，写真54）

本遺構は調査区中央付近やや北寄りのＥ５－Ｃ５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高271.5ｍ程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，39・41号住居跡，42・43号土坑，14号焼土遺構が近接する。

遺構内堆積土は花崗岩を多量に混入する黒褐色土である。特に角礫や円礫を含む10～50㎝程の礫や炭化物を含み，礫の堆積状況から，投棄行為による堆積層であると考えている。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸2.14ｍ，短軸1.64ｍを測る。周壁は全体的に比較的緩やかな立ち上がりとなる。底面はＬⅡｄを若干掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出していて凹凸があり，周囲の地形に合わせて西側に向かって緩やかに傾斜する。検出面から最深部までの深さは28㎝を測る。

遺物は，堆積土中から土師器９点が出土している。すべて細片であるため図示できなかったが，土師器片は杯４点，甕４点が判別できる。杯はいずれもロクロ成形で，内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものが２点，赤焼き土器の杯片が２点である。甕はすべて体部資料であり，外面にはヘラケズリ調整を施すものが認められる。本遺構は出土した土師器の特徴から，平安時代９世紀後半の年代観と考えている。周囲には該期の39・41号住居跡が位置することから，関連性が窺える。

しかし，明確な性格等は不明である。　（稲　村）

45号土坑　ＳＫ45（図46，写真54）

本遺構は，調査区中央やや南側のＥ５－Ｃ９グリッドに位置する。遺構は谷が埋没した標高270.6ｍ付近の南西側斜面に構築されており，検出面はＬⅡｂ層上面である。検出時に石が集中して確認され，精査の結果土坑と判明した。重複する遺構はないが，北側に57・58号土坑が近接する。

平面形は南北方向に長い楕円形を呈し，南東側は一部段差が観察される。計測値は長軸2.1ｍ，短軸1.91ｍ，検出面からの深さ43㎝をそれぞれ測る。底面は平坦であるが，底面の標高は東側が若干高くなる。周壁は各壁とも60度前後で立ち上がり，断面形は逆台形を呈する。

堆積土は２層からなり，１層は石を多量に含む黒褐色土，２層はにぶい黄褐色土と黒褐色土の混土で，いずれも人為堆積と判断した。１層の石は長軸50㎝の大きなものも存在したが，多くは20㎝前後の花崗岩であった。また，比熱痕跡はなく，そのまま置かれた可能性が高い。

遺物は，１層から土師器が３点ほど出土したが，小片のため図示可能な個体はなかった。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。その性格は，上面に置かれた石が基盤層に含まれる花崗岩であることから，住居掘り込み時に出た石を埋めた廃棄土坑と考えられる。（管　野）

46号土坑　ＳＫ46（図46・50，写真54・71）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｃ９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。遺構は，南西方向に緩やかに傾斜する斜面に立地しており，等高線に長軸がほぼ直交して検出された。重複する遺構は無いが，遺構の東側約２ｍの地点に38号住居跡が主軸をほぼ同じくして存在している。平面形は，南北方向に長い隅丸長方形を呈し，北側および東側は一部壁が崩落している地点が観察される。また，南側は調査時に掘りすぎてしまった。計測値は，長軸1.67ｍ，短軸1.14ｍ，検出面からの深さ37㎝をそれぞれ測る。周壁は，各壁とも垂直に近い角度で立ち上がるが，崩落している箇所は緩やかに立ち上がる。

堆積土は９層からなる。概ね上層の１・２ａ・２ｂ層の黒褐色土，中層の３・４ａ・４ｂ・５層の褐色土，下層の６・７層に大別される。上層は遺物などを多く含み，廃絶後の自然堆積層，中層はＬⅡｂ層や焼土・炭化物を塊状に含むことから，人為的な埋土，下層の６は炭化物の純層となり，７は焼土である。底面付近は比熱が観察されたが，基盤層である砂ゆえに，強いしまりや酸化は観察されなかった。同時に，壁面付近の明確な比熱も観察されないものの，西壁付近には若干の比熱によると思われる土色の差異が認められた。遺物は，堆積土中から土師器が21点出土し，このうち図示可能な１点を掲載した。50図９はロクロ土師器の小型甕底部片で，内面には指によるナデが観察される。また，二次的な被熱を受けて，器表面の荒れが目立つ。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。その性格は，底面や壁面近くで比熱が観察されたことや，炭化物の存在，さらには土坑の形態など

から，木炭焼成坑としての性格が考えられよう。今回の調査で検出した木炭焼成坑は本土坑１基のみであり，規模としては小規模であったと考えられる。（管　野）

47号土坑　ＳＫ47（図46，写真55）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｃ８・９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。南西側にかけて緩やかに傾斜する地点に構築されており，付近の標高は270.6m内外を測る。重複関係はないが，遺構の南西側1.6mの地点に37号住居跡が，北側2.6mの地点に40号土坑が，南側２mの地点に57号土坑がそれぞれ位置する。平面形は歪んだ隅丸方形を呈し，北東側は一部壁面が張り出した形態を示す。計測値は，長軸0.95m，短軸0.91m，検出面からの深さ34cmをそれぞれ測る。

底面は平坦で，ＬⅡｂ層のみでＬⅡｃ層まで掘られていない。周壁は，各壁とも60度前後で，やや急に立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単層で，炭化物や礫を少量含む。堆積状況は不明である。遺物は，土師器が14点ほど出土したが，小片のため図示不可能であった。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかしながら，性格については不明である。（管　野）

48号土坑　ＳＫ48（図46，写真55）

本遺構は調査東地区のＥ５－Ｃ６グリッドに位置する土坑である。西向き緩斜面の中腹に立地し，その標高は271.0m～271.5mである。遺構検出面はＬⅡｂ上面である。本遺構と重複する遺構はないが，約10m南側には平安時代の36号住居跡などが分布している。土坑の平面形は不整な楕円形をなす。規模は長径が1.50m，短径が0.75mであり，検出面からの深さは0.4mである。本土坑は長方形で箱型に掘り込まれた構造をなすが，周壁と底面は基盤土に含まれる花崗岩が多数露出して凹凸が顕著である。遺構内堆積土は３層に分けた。２層は砂層で，埋没過程において流水による堆積層と判断した。１・３層は黒褐色土を基調とする土層で，炭化物を含む特徴がある。

本土坑の性格については，それを特定するだけの所見は得られていない。本土坑からは土師器片９点，炭化した木質遺物１点が出土した。土師器は摩滅した小破片のため図示していないが，１層中から出土した甕の胴部破片が多い。おおむね平安時代に属する。炭化木質遺物は土坑検出面で確認した薄い板状をなす。遺存状態が極めて悪く遺物表面の加工痕などは不明瞭であるため，本遺物が製品か否かを含めて検討を要する。また第３編第２節に掲載した放射性炭素年代測定結果によれば，平安時代とする結果が得られている。（福　田）

49号土坑　ＳＫ49（図46・50，写真55・71）

本遺構は調査区中央付近やや東寄りのＥ５－Ｇ８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高274.5m程の南向き緩斜面である。53号住居跡と重複し，検出状況から本遺構の方が新しい。遺構検出面は，重複する53号住居跡の堆積土上面である。付近には，50号土坑が近接する。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層は炭化物を含む灰黄褐色土，２層は褐色土が多量に混入したにぶい黄褐色砂質土である。その堆積状況と性状から，２層は本遺構の廃絶直後の人為堆積土で，１層は埋め戻されて窪みとなった部分に，風雨など自然的な要因で流入したと考えている。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.48m，短軸1.28mを測る。周壁は全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面は，ＬⅡｃを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは33㎝を測る。

遺物は，堆積土中から縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器68点，土師器10点が出土している。53号住居跡と重複しているため出土遺物の大半は53号住居跡から流出したものである。そのうち２点を図示した。50図10は，体部に条痕を施した縄文時代晩期に属する深鉢の破片であると思われる。同図11は土師器甕の底部資料である。体部外面にはヘラケズリ，内面には横位のヘラナデの痕跡が観察できる。他のものについては細片であるが，撚り糸や条痕文を施した深鉢の破片や，波状口縁の壷破片などが認められる。本遺構は，出土した遺物の特徴から平安時代に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。（稲　村）

50号土坑　ＳＫ50（図46・50，写真55・71）

本遺構は調査区中央付近やや東寄りのＥ５－Ｇ８・９グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高274.0m程の南向き緩斜面である。53号住居跡と重複し，検出状況から本遺構の方が新しい。遺構検出面は，重複する53号住居跡の堆積土上面である。付近には，49号土坑が近接する。

遺構内堆積土は炭化物や花崗岩を含む灰黄褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.68m，短軸1.45mを測る。周壁は全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面は，ＬⅡｃを掘り込んで構築され，部分的に花崗岩が露出しているがほぼ平坦であり，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。検出面から最深部までの深さは26㎝を測る。遺物は，堆積土中から縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器48点が出土している。53号住居跡と重複しているため，49号土坑と同様に，53号住居跡から流出したものも考えられる。そのうち１点を図示した。50図12は，浅鉢の口縁部資料である。口内には，沈線を巡らし段と化し，口縁直下に文様帯が形成される。文様は，沈線を横位多条に施し，一部沈線間に縦の掘り込み・刻みを施してコブ状の突起を作り，工字文・π字文を描き出している。他のものについては細片であるが，撚り糸を施した口縁部が内湾する深鉢や条痕文を施した深鉢の破片などが認められる。

本遺構は，出土した遺物の特徴から縄文時代晩期後葉から末葉に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。（稲　村）

52号土坑　ＳＫ52（図47，写真55）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｄ９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。重複

する遺構はないが，南側に38号住居跡が近接する。

平面形は，東西方向にやや長い楕円形を呈し，長軸2.31m，短軸1.83m，検出面からの深さ36cmをそれぞれ測る。底面は平坦で，礫の露出は少ない。周壁は各壁とも40度前後で立ち上がる。

堆積土は４層からなり，１・２層の黒褐色土と３・４層の黄褐色土に大別される。このうち，上層の２層は黄褐色土塊を多量に含むことから人為堆積，３・４層は壁面のＬⅡｂ層由来の土質で，流れ込みによる自然堆積の様相を示す。

遺物は，土師器６点，鉄製品１点の７点が出土したが，いずれも小片であった。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかし，その性格については不明である。（管　野）

55号土坑　ＳＫ55（図47・50，写真55・71）

本遺構は調査区中央付近やや東寄りのＥ５－Ｇ９グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高273.5m程の南向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，近接して53号住居跡や13号焼土遺構が存在する。

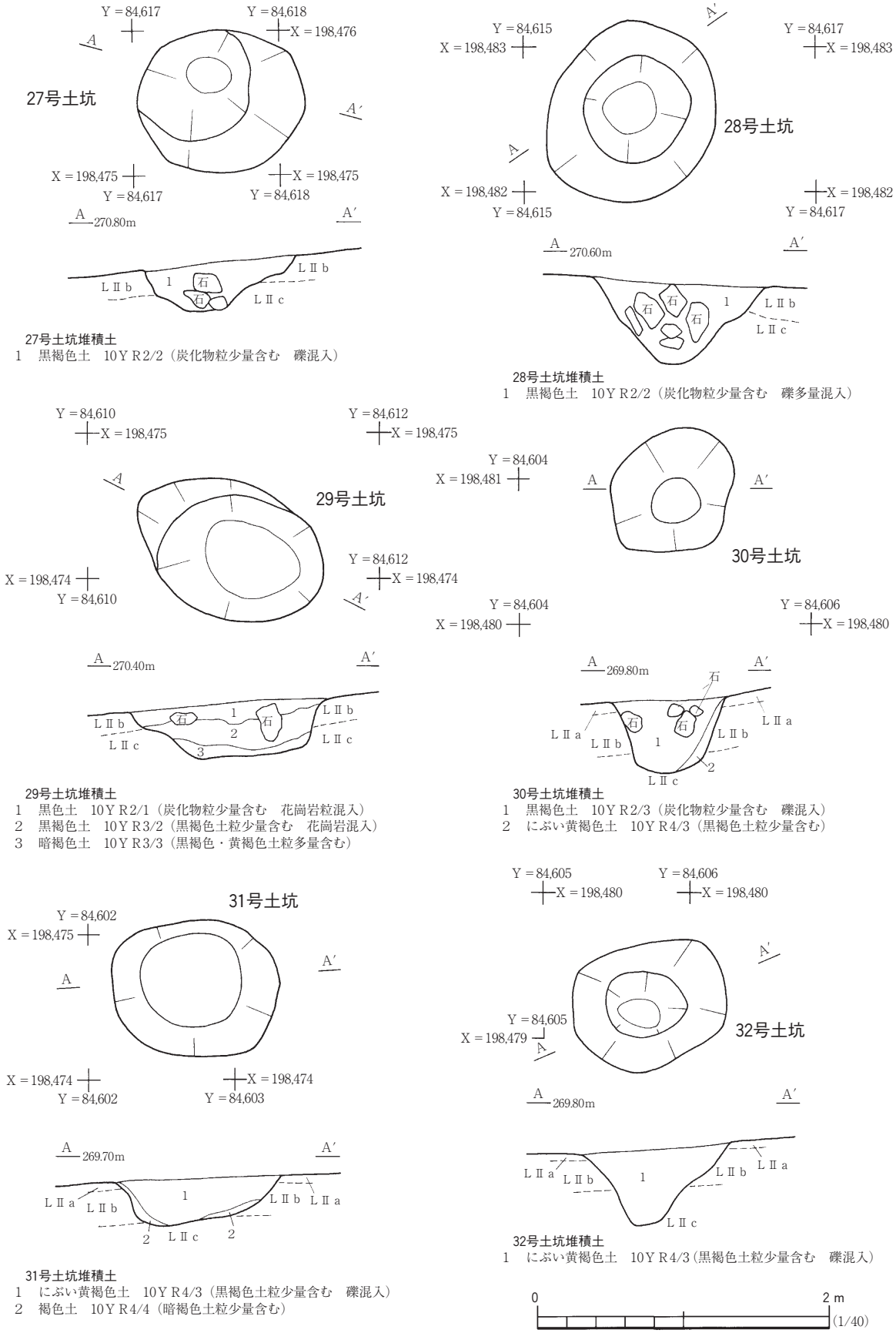
遺構内堆積土は２層に分けた。１層は炭化物を混入する黒褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。２層は砂粒を含む褐色土で，斜面上位から流入した壁面崩落土であろう。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.46m，短軸1.20mを測る。周壁は全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であるが，周囲の地形に合わせて南側に向かって緩やかに傾斜する。検出面から最深部までの深さは32cmを測る。

遺物は，堆積土中から縄文時代晩期から弥生時代にかけての土器９点，土師器４点が出土している。そのうち，弥生土器１点・土師器２点を図示した。

50図13は胴部と口縁部の境が「く」の字状に屈曲し，口縁部は短頸で外反・外傾する弥生時代前期末から中期にかけての甕の口縁部である。口縁部にはナデ調整が施され，胴部には単節縄文が施される。同図14はロクロ成形の土師器高台杯である。内面にはヘラミガキの後，黒色処理が施されている。高台部の断面形は，丸みを帯びている。同図15は非ロクロ整形の土師器甕で，口縁部が「く」の字形に外反する。胴部上半が若干膨らむ器形で，口縁部はナデ，胴部外面はヘラナデ・ヘラケズリが施される。また，内面には横位の強いヘラナデの痕跡が観察できる。胎土には粗砂を含み非常に脆い。

他のものについては細片であるが，土師器片は杯３点，甕４点が判別できる。杯はいずれもロクロ成形で，内面に黒色処理とヘラミガキを施しているものが２点，赤焼き土器の杯片が１点である。甕はすべて体部資料であり，外面にはヘラケズリ調整を施すものが認められる。

本遺構は，出土した遺物の特徴から平安時代に帰属するものと判断される。しかしながら，その用途・機能については不明である。（稲　村）



27号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒少量含む　礫混入）

28号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物粒少量含む　礫多量混入）

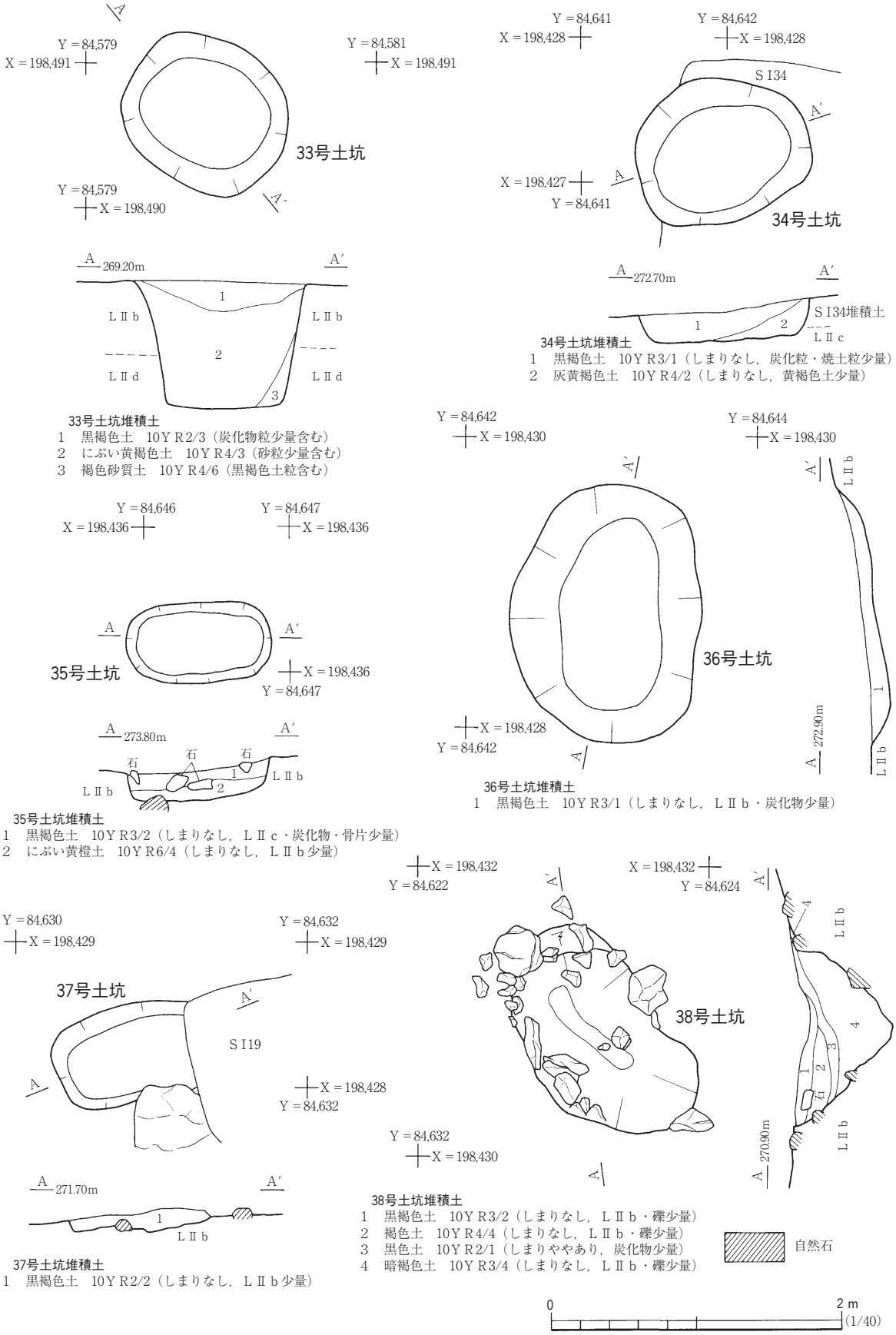
29号土坑堆積土
1　黒色土　10ＹＲ2/1（炭化物粒少量含む　花崗岩粒混入）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2（黒褐色土粒少量含む　花崗岩混入）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黒褐色・黄褐色土粒多量含む）

30号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量含む　礫混入）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（黒褐色土粒少量含む）

31号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（黒褐色土粒少量含む　礫混入）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土粒少量含む）

32号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（黒褐色土粒少量含む　礫混入）

図43　27～32号土坑



33号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（炭化物粒少量含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（砂粒少量含む）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（黒褐色土粒含む）

34号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりなし，炭化粒・焼土粒少量）
2　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（しまりなし，黄褐色土少量）

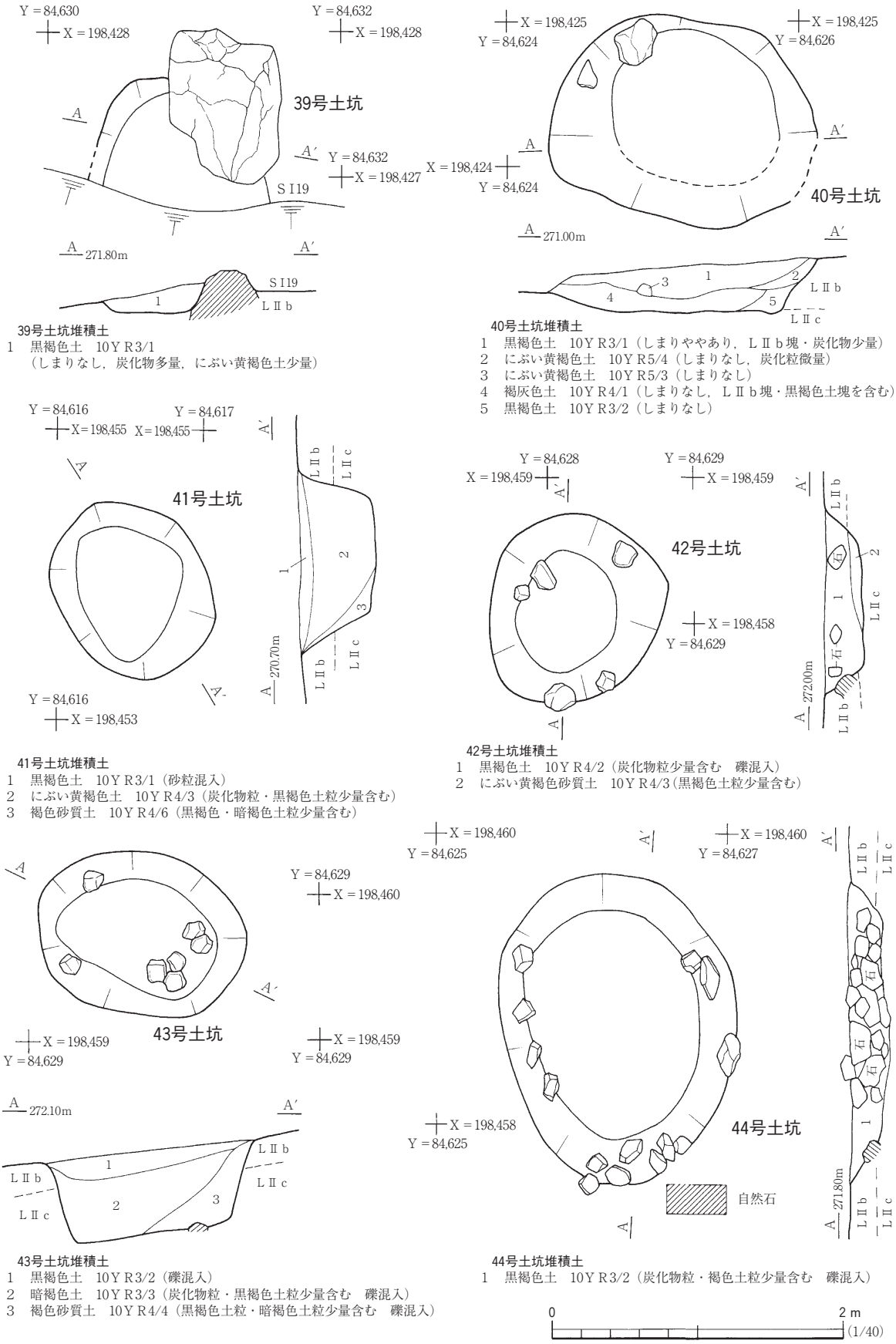
35号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし，ＬⅡｃ・炭化物・骨片少量）
2　にぶい黄橙土　10ＹＲ6/4（しまりなし，ＬⅡｂ少量）

36号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりなし，ＬⅡｂ・炭化物少量）

37号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりなし，ＬⅡｂ少量）

38号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし，ＬⅡｂ・礫少量）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（しまりなし，ＬⅡｂ・礫少量）
3　黒色土　10ＹＲ2/1（しまりややあり，炭化物少量）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（しまりなし，ＬⅡｂ・礫少量）

図44　33～38号土坑



39号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1
（しまりなし，炭化物多量，にぶい黄褐色土少量）

40号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりややあり，ＬⅡｂ塊・炭化物少量）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（しまりなし，炭化粒微量）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3（しまりなし）
4　褐灰色土　10ＹＲ4/1（しまりなし，ＬⅡｂ塊・黒褐色土塊を含む）
5　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし）

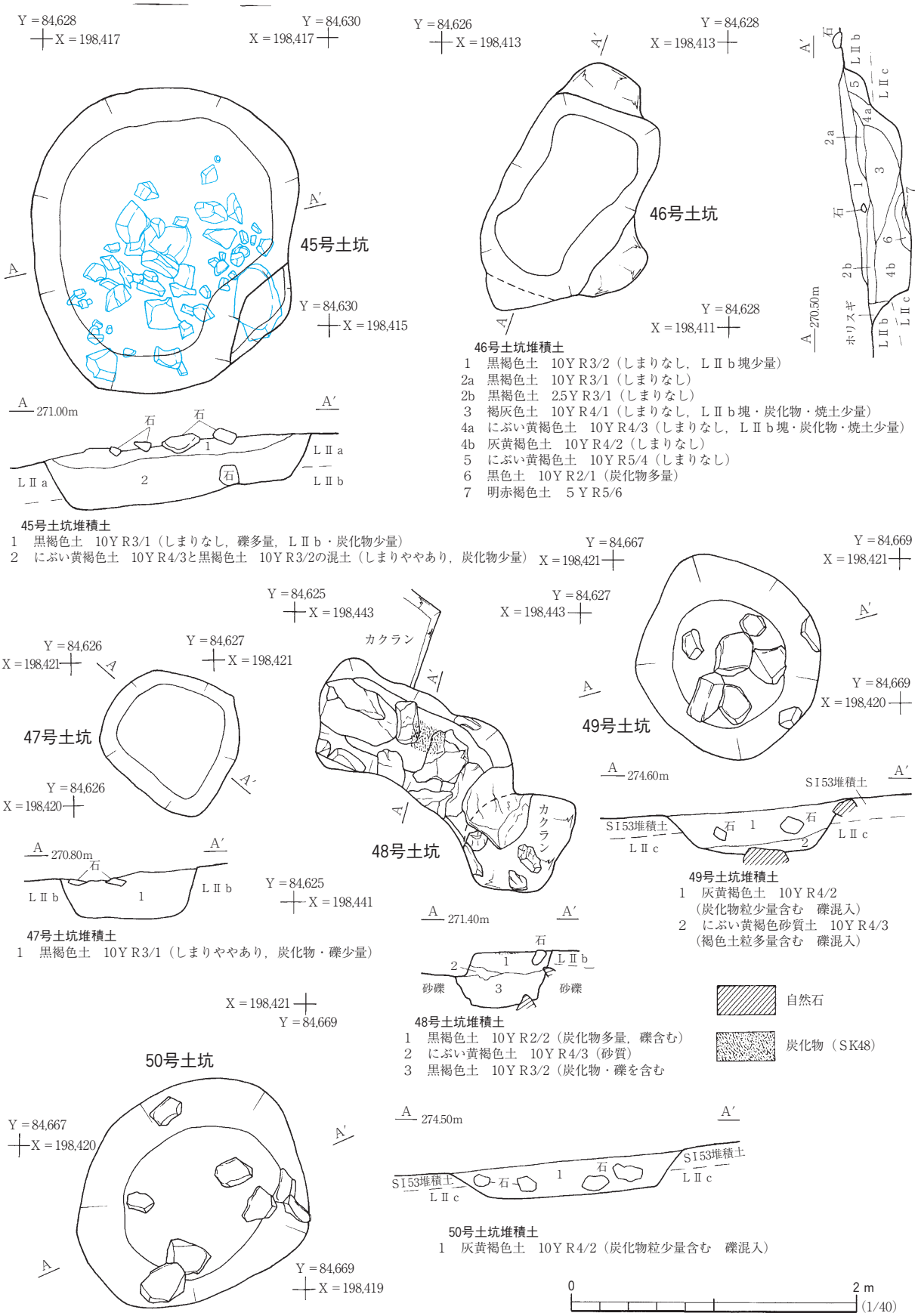
41号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（砂粒混入）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒・黒褐色土粒少量含む）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（黒褐色・暗褐色土粒少量含む）

42号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ4/2（炭化物粒少量含む　礫混入）
2　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（黒褐色土粒少量含む）

43号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（礫混入）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・黒褐色土粒少量含む　礫混入）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（黒褐色土粒・暗褐色土粒少量含む　礫混入）

44号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒・褐色土粒少量含む　礫混入）

図45　39～44号土坑



45号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりなし，礫多量，ＬⅡｂ・炭化物少量）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3と黒褐色土　10ＹＲ3/2の混土（しまりややあり，炭化物少量）

46号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし，ＬⅡｂ塊少量）
2a　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりなし）
2b　黒褐色土　2.5ＹＲ3/1（しまりなし）
3　褐灰色土　10ＹＲ4/1（しまりなし，ＬⅡｂ塊・炭化物・焼土少量）
4a　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（しまりなし，ＬⅡｂ塊・炭化物・焼土少量）
4b　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（しまりなし）
5　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（しまりなし）
6　黒色土　10ＹＲ2/1（炭化物多量）
7　明赤褐色土　５ＹＲ5/6

47号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ3/1（しまりややあり，炭化物・礫少量）

48号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化物多量，礫含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（砂質）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物・礫を含む

49号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2
（炭化物粒少量含む　礫混入）
2　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3
（褐色土粒多量含む　礫混入）

50号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10ＹＲ4/2（炭化物粒少量含む　礫混入）

図46　45～50号土坑

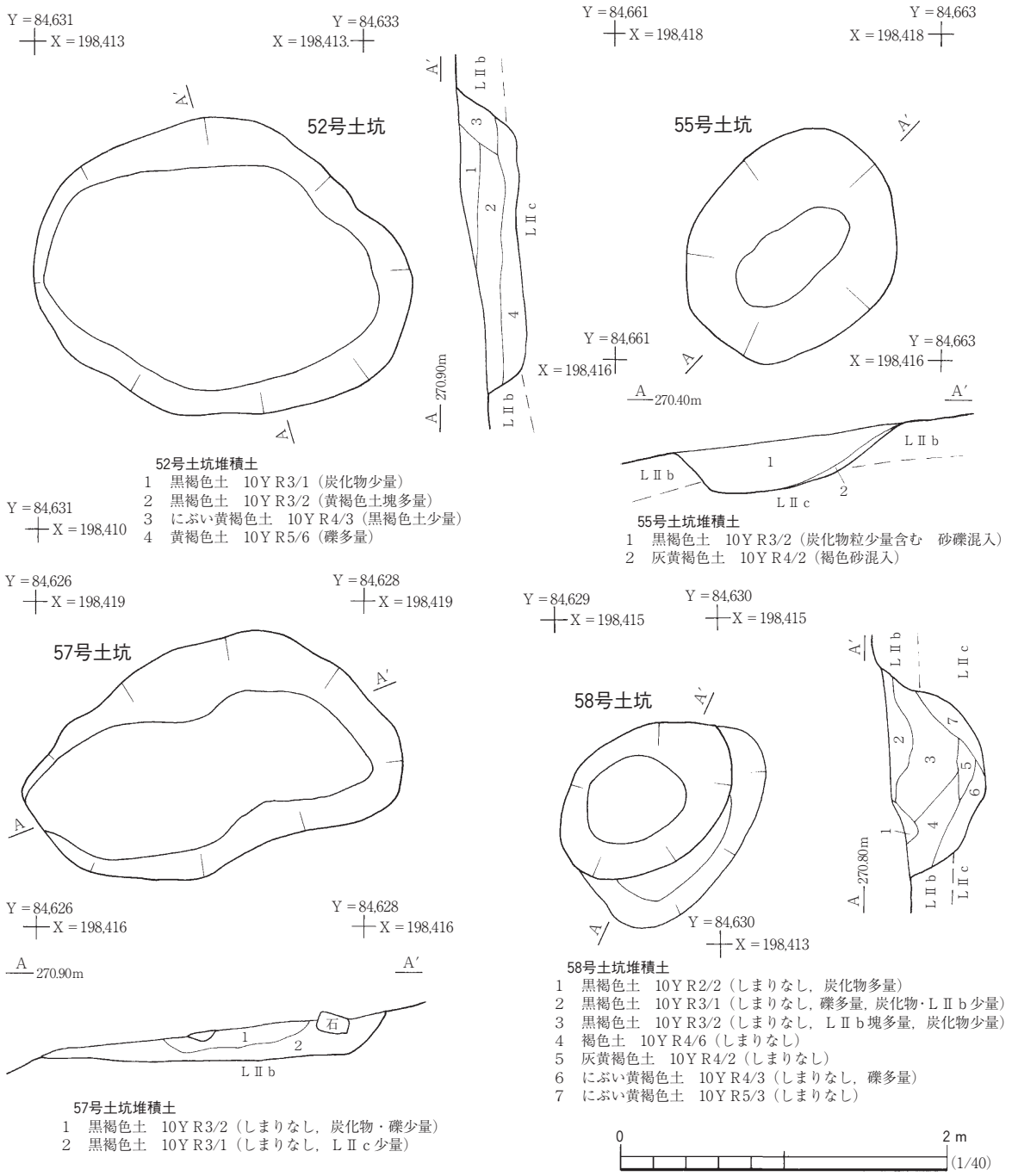


図47　52・55・57・58号土坑

57号土坑　ＳＫ57（図47）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｃ９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。南西方向に緩やかに傾斜する斜面に立地しており，長軸が等高線にほぼ直交して検出された。重複する遺構はないが，北東側に58号土坑，南東側に45号土坑がそれぞれ位置する。

平面形は不整楕円形を呈し，南側の壁は消失していた。現状での計測値は，長軸2.14m，短軸1.35m，検出面からの深さ22㎝をそれぞれ測る。底面は平坦であるが，北壁付近のみ若干の凹凸が観察

される。周壁は東壁・南壁が40度前後，北壁が60度前後で立ち上がる。

堆積土は，黒褐色土の２層からなり，レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

遺物は，土師器が27点，鉄製品が１点出土したが，小片のため図示できなかった。

本土坑は出土遺物や堆積土の特徴，さらには周辺の遺構などから，平安時代の所産と考えられる。しかし，その性格については不明である。（管　野）

58号土坑　ＳＫ58（図47，写真56）

本遺構は，調査区中央南側のＥ５－Ｃ・Ｄ９グリッドに位置し，検出面はＬⅡｂ層上面である。南西方向に緩やかに傾斜する斜面に立地しており，長軸が等高線にほぼ直交して検出された。重複する遺構はないが，南側に45号土坑，南西側に57号土坑がそれぞれ位置する。

平面形は歪んだ円形を呈し，東壁は崩落と思われる段差が観察された。計測値は長軸1.31ｍ，短軸1.09ｍ，検出面からの深さ58㎝をそれぞれ測る。底面は凹凸が著しく，断面形は半円形を呈する。周壁は，底面から30度前後で土坑の中位に至り，中位から上端にかけてはやや急に立ち上がる。

堆積土は，７層に分層できた。おおむね最上層の１層と，黒褐色土の２・３層，褐色土の４層，黄褐色土の５～７層の４層に大別される。ともにレンズ状の堆積状況で，自然堆積の様相を示す。特に４層以下の土層は，壁流入土と考えられよう。

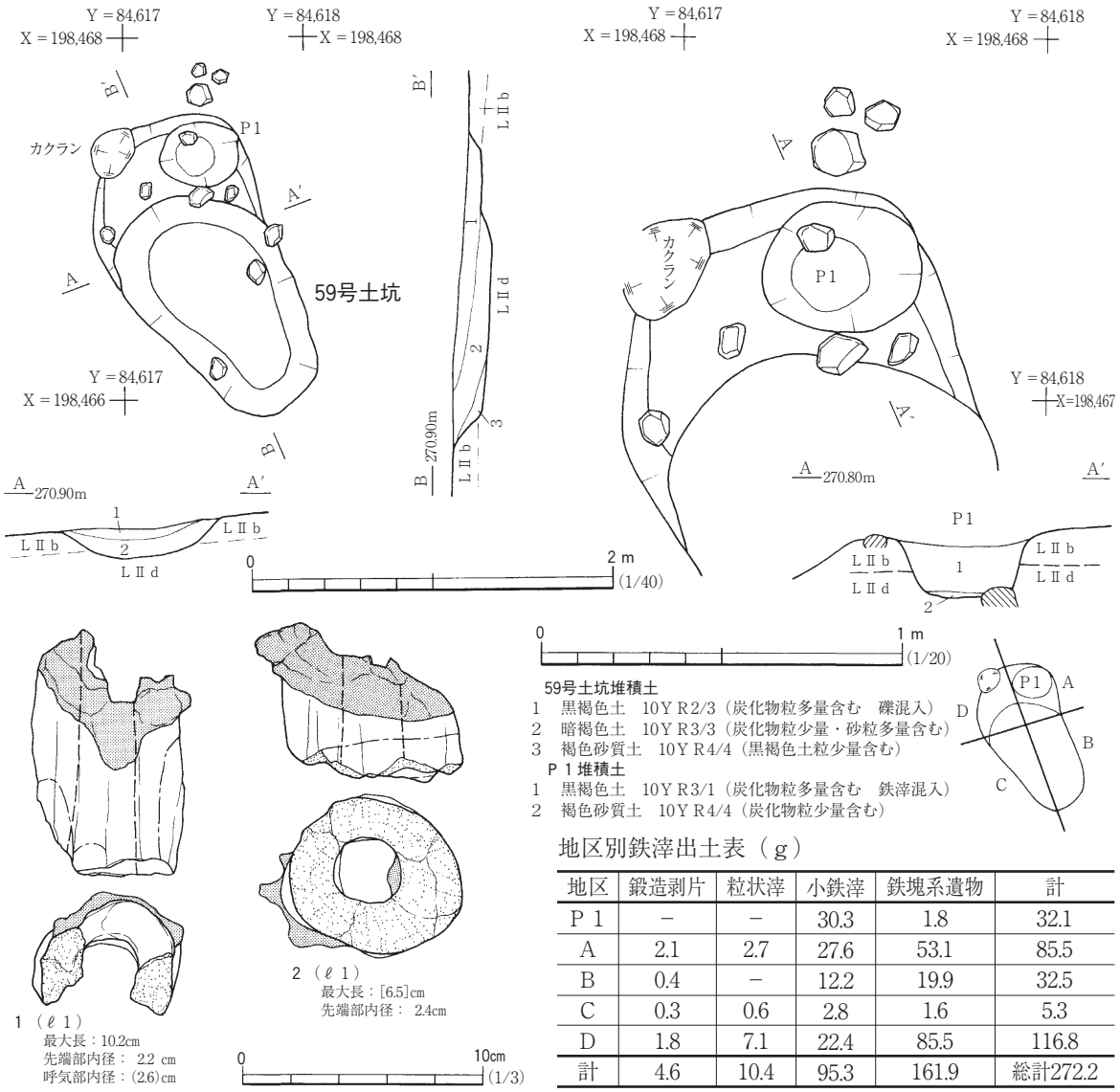
遺物は，全く出土していない。このため年代やその性格は不明である。（管　野）

59号土坑　ＳＫ59（図48，写真56・70）

本遺構は調査区中央付近やや北西寄りのＥ５－Ｂ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高270.7ｍ程の西向き緩斜面である。遺構検出面はＬⅡｂとした暗褐色土の上面である。重複する遺構はないが，近接して33号住居跡が存在する。

遺構内堆積土は３層に分けた。１層は炭化物を多量と鉄滓を含む黒褐色土，２層は炭化物や砂粒が混入した黒褐色土，３層はＬⅡａやＬⅡｂに類似した黒褐色土や暗褐色土を混入した褐色砂質土である。その堆積状況と性状から，３層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で，その後ほとんど時間差なく１層と２層で埋め戻された可能性が高い。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.80ｍ，短軸0.90ｍを測る。周壁は，北半側は底面から段状に緩やかな立ち上りとなるが，他は底面から緩やかな立ち上がりとなる。底面はほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは20㎝を測る。また，遺構内には小穴を１基確認した（Ｐ１）。底面の北東隅に位置し，平面形は径45～40㎝の楕円形状を呈する。周壁は全体的に急峻で，検出面から最深部までの深さは15㎝を測る。Ｐ１堆積土は２層に分層でき，特に１層は炭化物を多量に充填している黒褐色土で，その下位には小鉄滓・鉄塊系遺物が含まれていた。その性状と遺物から人為的要素が強く，鉄の生産に関わる施設である可能性が高い。

遺物は羽口２点，鉄滓類として鍛造剥片4.6ｇ，粒状滓10.4ｇ，小鉄滓95.3ｇ，鉄塊系遺物161.9ｇ



地区別鉄滓出土表（ｇ）

地区	鍛造剥片	粒状滓	小鉄滓	鉄塊系遺物	計
Ｐ１	－	－	30.3	1.8	32.1
A	2.1	2.7	27.6	53.1	85.5
B	0.4	－	12.2	19.9	32.5
C	0.3	0.6	2.8	1.6	5.3
D	1.8	7.1	22.4	85.5	116.8
計	4.6	10.4	95.3	161.9	総計272.2

図48　59号土坑・出土遺物

が出土した。このうち，羽口２点を図示した。この羽口はＰ１に接するような出土状態であることから，Ｐ１に伴う送風装置の一部と考えられる。48図１・２はともに先端部に溶着滓が付着することから，全て操業に使用されていたことが確認できる。吸気部が遺存する１は，ほぼ筒形の形状を呈し，外面はヘラ状の工具で形を整えている。２は吸気部を欠損するが１と同様に，外面はヘラ状の工具で形を整えている。ともに胎土には粗砂を多く含み，非常に脆い。

鉄滓類はその出土位置状況を48図中の表に示した。鉄滓類は，遺構内堆積土を全て採取して水洗い選別を実施して鉄滓を得，分類することができた。主に鉄滓は，Ｐ１周囲の遺構内北半側で多く出土している。鉄滓は炉内滓と流出滓で，炉内滓の大半は錆化が著しく，磁性を帯びている。

本遺構は，遺構内の施設的な要素と出土遺物から工房的な性格をもつものと推測される。しかしながら，上屋構造を示す柱穴が確認できず，また，一般的な精錬炉の炉本体に比べて規模が小さく，排滓量も僅少であることから，積極的な鉄生産・加工が実施されたとはいえない。よって，今回は

土坑（ＳＫ）として扱うこととした。時期については，出土遺物や周辺で確認された住居跡の年代観から９世紀末～10世紀初頭の所産と考えている。（稲　村）

62号土坑　ＳＫ62（図49，写真56）

本遺構は調査区南側やや西寄りのＤ５－Ｊ９グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｄとした暗褐色砂質土の上面である。重複する遺構はないが，近接して64・65号土坑が存在する。

遺構内堆積土は３層に分けた。いずれも砂粒や炭化物が混入した黒褐色を基調とする堆積土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の平面形は，径1.35m程の円形状を呈する。全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面はほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは64cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期の年代観と考えている。性格としては，その形状から「貯蔵穴」として機能していた可能性がある。（稲　村）

63号土坑　ＳＫ63（図49，写真56）

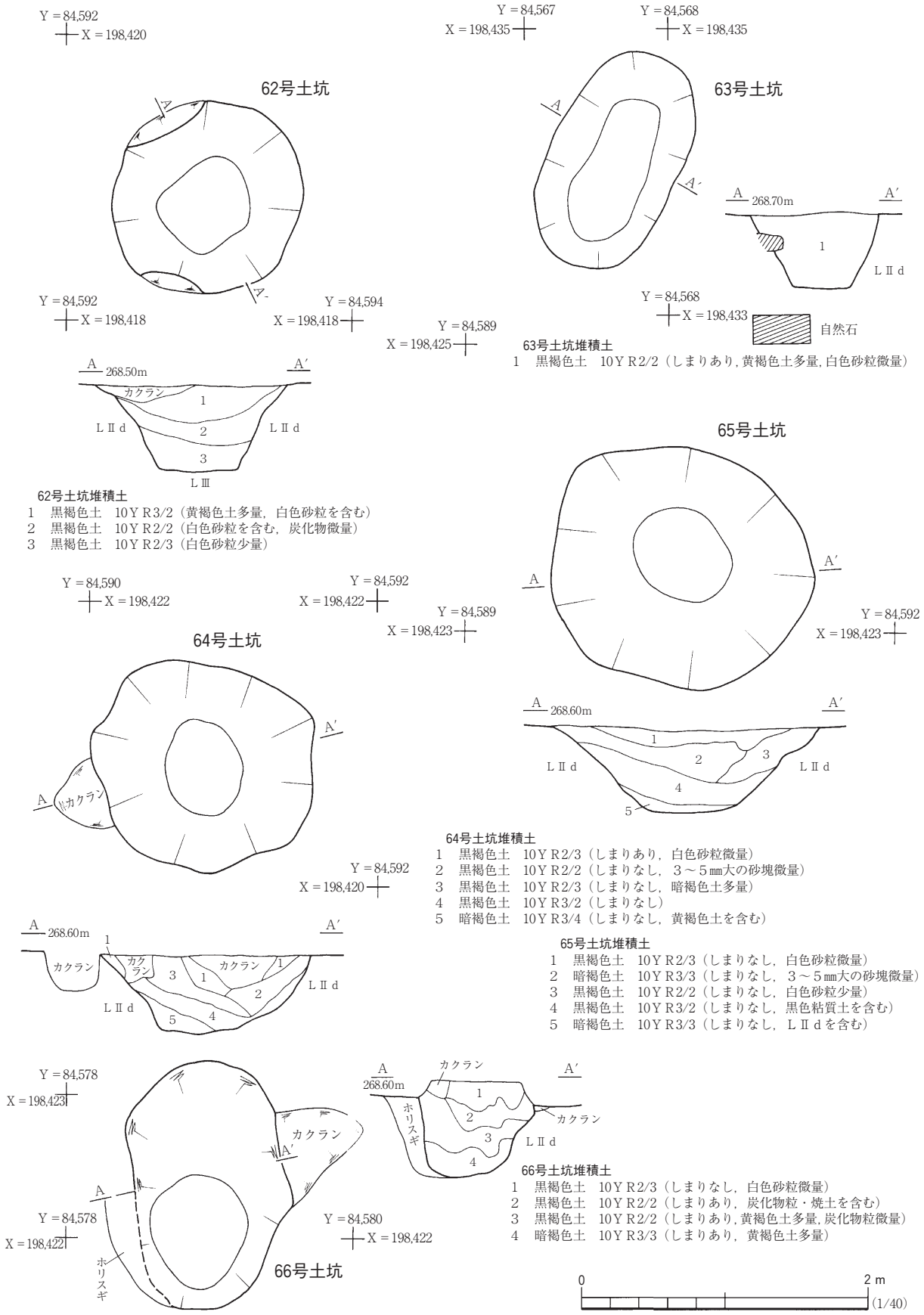
本遺構は調査区南側西寄りのＤ５－Ｇ７グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｄとした暗褐色砂質土の上面である。重複する遺構はなく，近接する遺構も認められない。

遺構内堆積土はしまりがあり，砂粒を少量と黄褐色土を多量に含む黒褐色土である。その堆積状況と性状から，人為堆積の可能性が高い。遺構の平面形は，楕円形状を呈し，その規模は長軸1.60m，短軸0.90mを測る。周壁は全体的に急峻な立ち上りとなる。底面はほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは55cmを測る。本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期～晩期の年代観と考えている。（稲　村）

64号土坑　ＳＫ64（図49，写真56）

本遺構は調査区南側やや西寄りのＤ５－Ｉ８・Ｊ８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｄとした暗褐色砂質土の上面である。重複する遺構はないが，近接して62・65号土坑が存在する。

遺構内堆積土は５層に分けた。いずれも砂粒や暗褐色土が混入した黒褐色や暗褐色を基調とする堆積土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の平面形は，径1.50m程の円形状を呈する。周壁は全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは56cmを測る。



62号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（黄褐色土多量，白色砂粒を含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（白色砂粒を含む，炭化物微量）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（白色砂粒少量）

63号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりあり，黄褐色土多量，白色砂粒微量）

64号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまりあり，白色砂粒微量）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりなし，３～５㎜大の砂塊微量）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまりなし，暗褐色土多量）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4（しまりなし，黄褐色土を含む）

65号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまりなし，白色砂粒微量）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（しまりなし，３～５㎜大の砂塊微量）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりなし，白色砂粒少量）
4　黒褐色土　10ＹＲ3/2（しまりなし，黒色粘質土を含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（しまりなし，ＬⅡｄを含む）

66号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまりなし，白色砂粒微量）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりあり，炭化物粒・焼土を含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2（しまりあり，黄褐色土多量，炭化物粒微量）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（しまりあり，黄褐色土多量）

図49　62～66号土坑

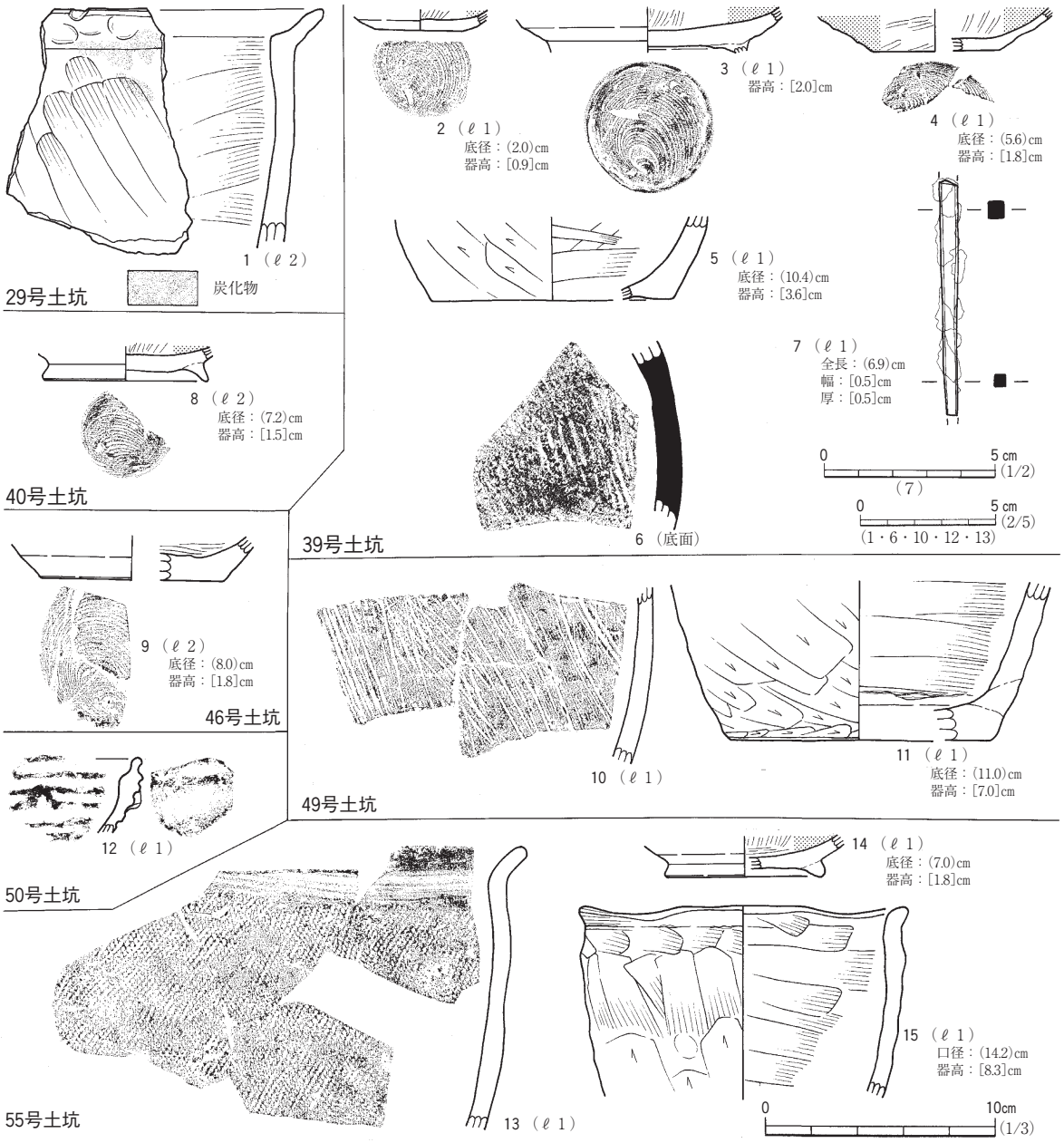


図50　土坑出土遺物

本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期の年代観と考えている。（稲　村）

65号土坑　ＳＫ65（図49，写真56）

本遺構は調査区南側やや西寄りのＤ５－Ｉ８・Ｊ８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｄとした暗褐色砂質土の上面である。重複する遺構はないが，近接して62・64号土坑が存在する。

遺構内堆積土は５層に分けた。いずれもしまりがなく砂粒や黒色粘土が混入した黒褐色や暗褐色を基調とする堆積土である。その堆積状況と性状から，いずれも自然堆積と判断している。遺構の

平面形は，径1.80m程の円形状を呈する。周壁は全体的に緩やかな立ち上りとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは58cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期の年代観と考えている。（稲　村）

66号土坑　ＳＫ66（図49，写真56）

本遺構は調査区南側西寄りのＤ５－Ｈ８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅡｄとした暗褐色砂質土の上面である。重複する遺構はなく，近接する遺構も認められない。構内堆積土は４層に分けた。１層は砂粒を微量に含む黒褐色土で，その堆積状況と性状から自然堆積と判断した。２～３層はいずれもしまりがあり，炭化物・焼土や黄褐色土が混入した黒褐色や暗褐色を基調とする堆積土である。その堆積状況と性状から，人為的に埋め戻した堆積土と判断している。遺構の平面形は撹乱を受けているため不明であるが，遺存している形状から円形状を呈していたと推測され，開口部径1.0m程を測る。周壁は全体的に急峻な立ち上りとなる。底面は中央付近が若干窪み，検出面から最深部までの深さは68cmを測る。

本遺構内からは出土遺物がなく，その用途・機能や明確な所属時期については不明である。しかし，検出面や周辺から出土する遺物等との関連から，縄文時代後期の年代観と考えている。（稲　村）

第５節　その他の遺構

今回上述した遺構のほかに，本調査区で検出された他遺構は，焼土遺構６基・小穴７基である。

６基確認できた焼土遺構のうち，13号焼土遺構は，作業場施設を付属し，土師器や鉄製品などが比較的多く出土したことから，古代の生産遺構である可能性が高い。

また，小穴は調査区中央付近に比較的集中しており，掘立柱建物跡などの構築物の存在も充分に考慮できる。焼土遺構の規模等は表５にまとめた。以下，遺構番号順に説明を行う。

11号焼土遺構　ＳＧ11（図51）

本遺構は調査区中央やや北寄りのＥ５－Ｇ６グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高276.3m程の南西向き緩斜面である。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。重複する遺構はないが，近接して42号住居跡が存在する。

焼土面の平面形は楕円形状を呈し，長軸0.43m，短軸0.3mを測る。焼土面の中央に向かい緩やかに高まり，検出面から２～４cmの厚さで焼土化している。焼土からの遺物は出土していない。

本遺構は周囲に関連する小穴等が検出されなかったことから，屋外炉と考えられる。出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周辺遺構などから判断して，縄文時代晩期から弥生時代の所産と考えている。（稲　村）

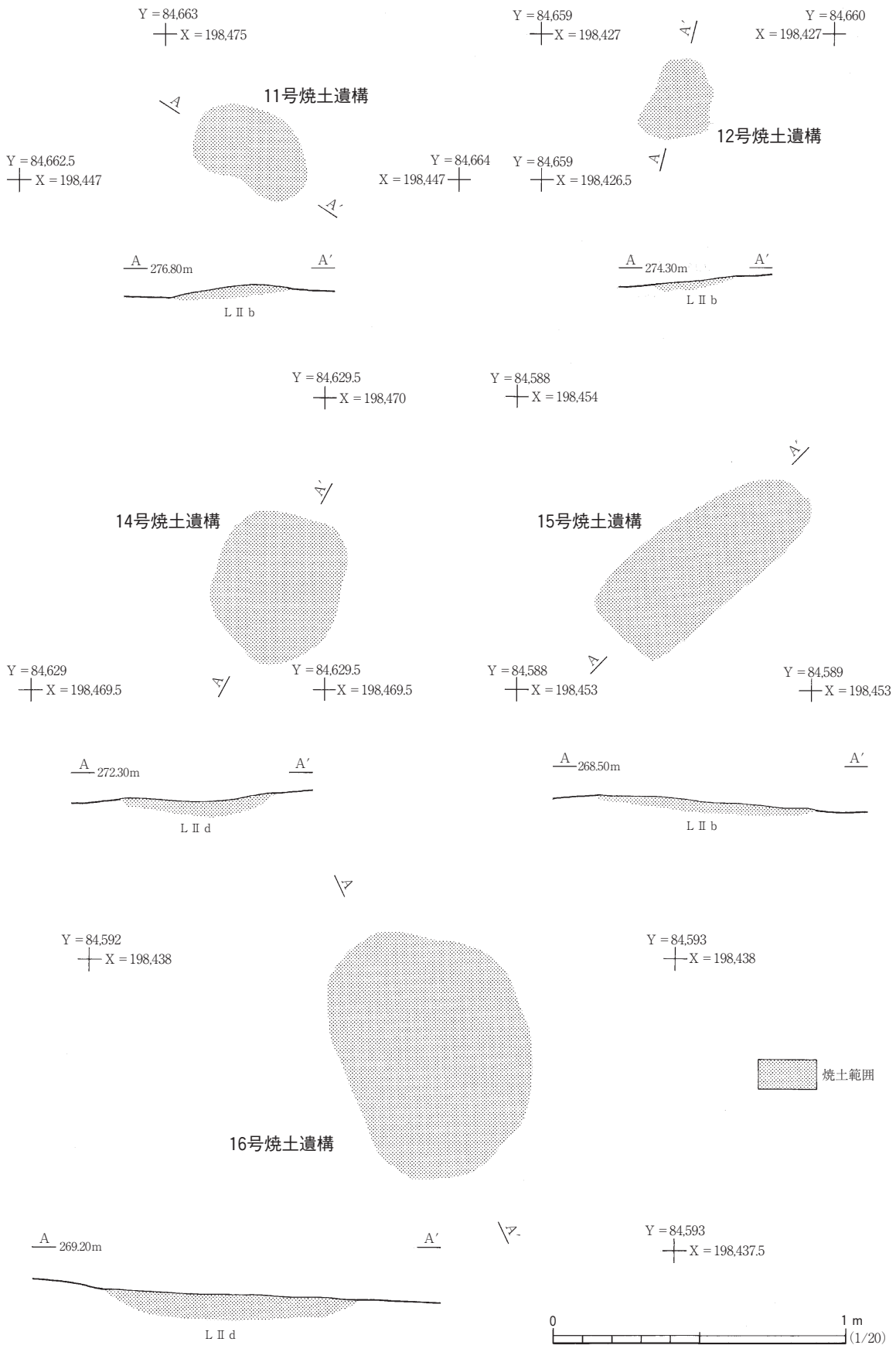


図51　11・12・14～16号焼土遺構

12号焼土遺構　ＳＧ12（図51）

本遺構は調査区中央やや東寄りのＥ５－Ｆ８グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高274.5m程の南向き緩斜面である。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。重複する遺構はないが，近接して52号住居跡が存在する。

焼土面の平面形は不整な楕円形状を呈し，長軸0.28m，短軸0.2mを測る。焼土面の中央に向かい緩やかに高まり，検出面から１～３cmの厚さで焼土化している。焼土からの遺物は出土していない。

本遺構は周囲に関連する小穴等が検出されなかったことから，屋外炉と考えられる。出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周辺遺構などから判断して，古代の所産と考えている。（稲　村）

13号焼土遺構　ＳＧ13

遺　　構（図52・53，写真57・58）

本遺構は調査東地区の中央部，Ｅ５－Ｆ８・Ｆ９・Ｇ８・Ｇ９グリッドに位置する鍛冶製鉄に関連する遺構である。南西方向に傾斜する緩斜面に立地し，遺構の長軸方向は斜面の等高線に対して直行する。炉跡の標高は273.0m付近である。遺構検出面はＬⅡｂ上面である。

本遺構の構造は炉跡を中心として，斜面上位側に位置する方形の掘り込みを持つ施設，炉跡の斜面下位に位置する溝状施設に大別できる。全長は6.0mを測る。遺構内堆積土は９層に分けた。１～４層は本遺構の機能後から埋没過程において堆積した流入土である。５層は炉跡上位に位置する方形施設の底面付近に認められた土層で，本以降の廃絶に最も近い時期に堆積したものと判断している。６～９層は炉跡上位の方形施設の底面より下層で確認した堆積土である。これらの土層を確認した範囲は，不整な長方形をなす深い穴であり，方形施設の構築にあたり，基盤層に含まれた花崗岩を抜き取り，その後に埋め戻した堆積土と判断した。

炉跡の平面形は不整な円形を呈し，その規模は直径0.5mを測る。炉跡の焼土面は，炉跡上位の方形施設底面よりも約0.15m高い特徴がある。炉跡の構造として，炭化物と焼土を含む土を充填された基礎構造を有し，その上面が炉跡の底面として構築されている。Ｐ４・５は炉跡構築後に掘り込まれたことが確認されている。

方形施設は炉跡の斜面上位に位置する。平面形は炉跡に向かってやや広がる台形状をなす。その規模は，長軸の長さが2.3m，短軸の幅が最大で1.5mを測る。検出面からの深さは0.5mである。底面はほぼ平坦面で，炉跡上面よりも0.15mほど低くなる特徴がある。

溝状施設は炉跡より斜面下位に位置する。周囲の傾斜に沿って，炉跡から斜面下位に向かって，その底面は深くなる。確認できた規模は，長さが2.8mを測る。溝状施設は炉跡から斜面下位に向かって幅を広がる形状をなし，その最大幅が1.65mである。検出面からの深さは最大で0.15mである。

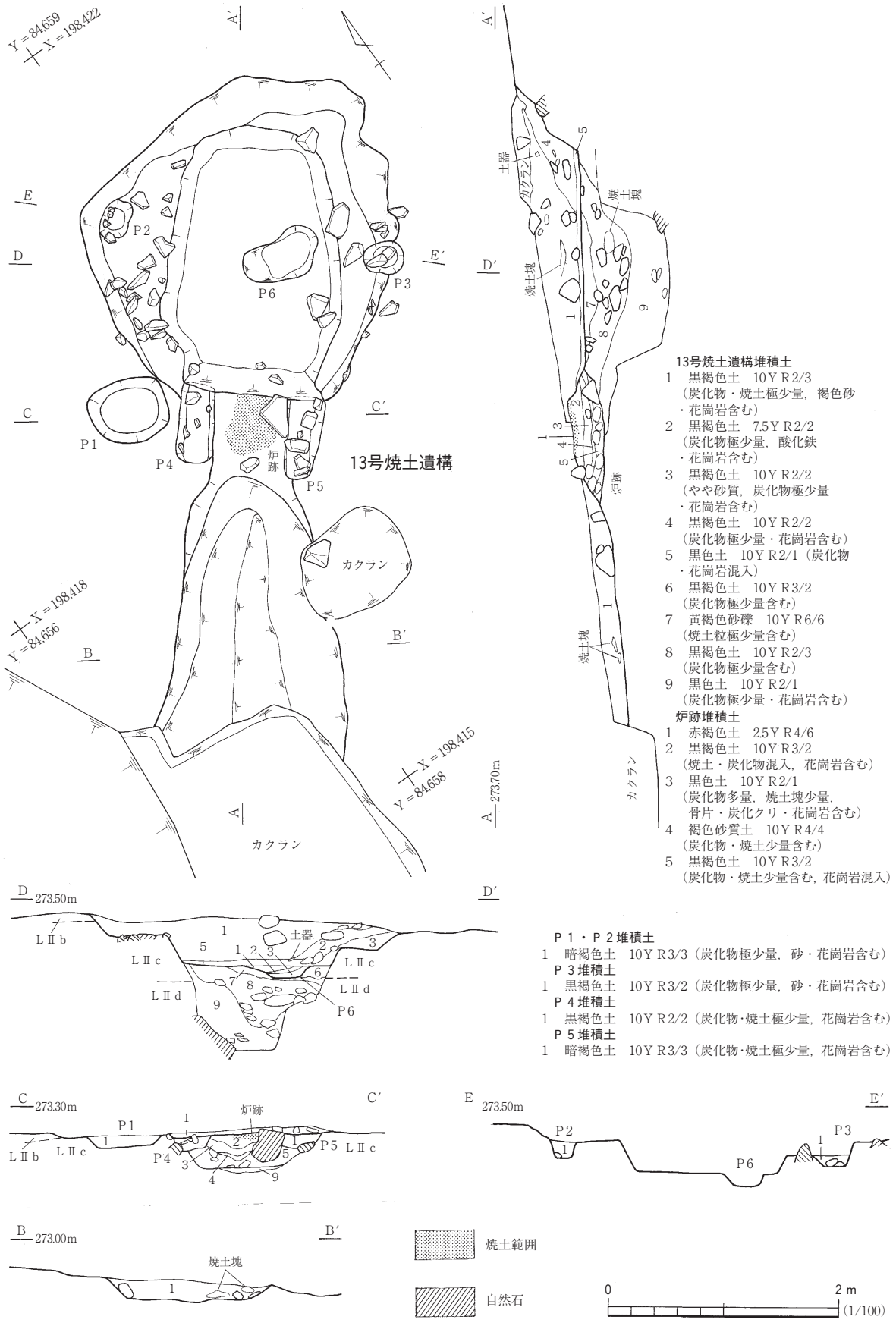

13号焼土遺構
Y＝84,659
X＝198,422
X＝198,418
Y＝84,656
X＝198,415
Y＝84,658
P1
P2
P3
P4
P5
P6
炉跡
カクラン
土器
焼土塊
273.70m
273.50m
273.30m
273.00m
LⅡb
LⅡc
LⅡd
13号焼土遺構堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/3
（炭化物・焼土極少量，褐色砂・花崗岩含む）
2　黒褐色土　7.5Y R2/2
（炭化物極少量，酸化鉄・花崗岩含む）
3　黒褐色土　10Y R2/2
（やや砂質，炭化物極少量・花崗岩含む）
4　黒褐色土　10Y R2/2
（炭化物極少量・花崗岩含む）
5　黒色土　10Y R2/1（炭化物・花崗岩混入）
6　黒褐色土　10Y R3/2
（炭化物極少量含む）
7　黄褐色砂礫　10Y R6/6
（焼土粒極少量含む）
8　黒褐色土　10Y R2/3
（炭化物極少量含む）
9　黒色土　10Y R2/1
（炭化物極少量・花崗岩含む）
炉跡堆積土
1　赤褐色土　2.5Y R4/6
2　黒褐色土　10Y R3/2
（焼土・炭化物混入，花崗岩含む）
3　黒色土　10Y R2/1
（炭化物多量，焼土塊少量，骨片・炭化クリ・花崗岩含む）
4　褐色砂質土　10Y R4/4
（炭化物・焼土少量含む）
5　黒褐色土　10Y R3/2
（炭化物・焼土少量含む，花崗岩混入）
P１・P２堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/3（炭化物極少量，砂・花崗岩含む）
P３堆積土
1　黒褐色土　10Y R3/2（炭化物極少量，砂・花崗岩含む）
P４堆積土
1　黒褐色土　10Y R2/2（炭化物･焼土極少量，花崗岩含む）
P５堆積土
1　暗褐色土　10Y R3/3（炭化物･焼土極少量，花崗岩含む）
焼土範囲
自然石
0
2 m
(1/100)

図52　13号焼土遺構

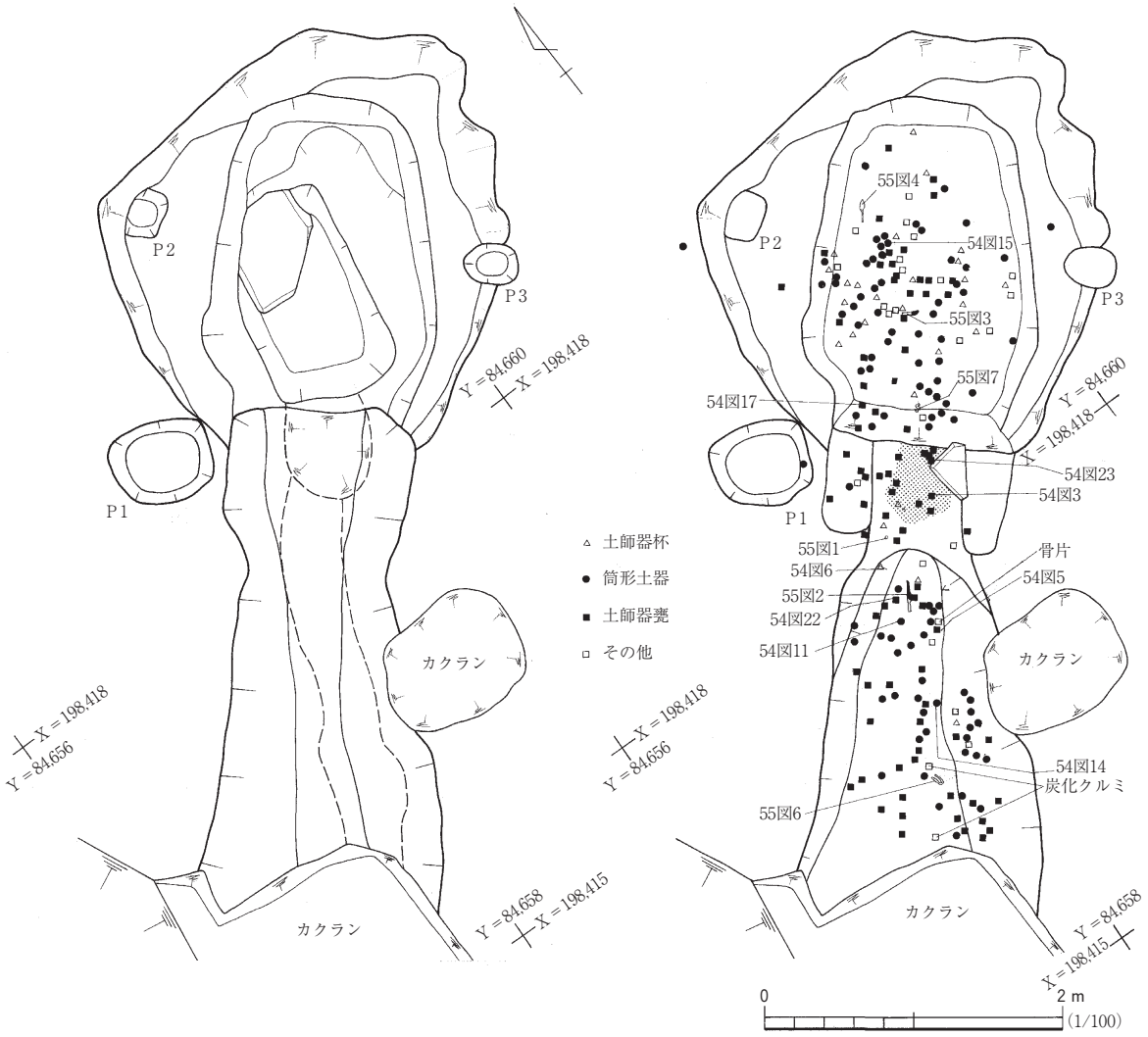


図53　13号焼土遺構掘形，遺物出土位置図

本遺構に関連する施設としてＰ１～Ｐ６を確認した。Ｐ１は炉跡の西側に位置し，炉跡中心からＰ１東端までの距離は0.7mを測る。Ｐ１の平面形は楕円形をなし，長径が0.7m，短径が0.58mである。検出面からの深さは0.1mと浅い。炉跡との位置からフイゴに関連する施設の可能性がある。Ｐ２・Ｐ３は円筒形状の小穴で，炉跡上位の方形施設に対して対称の位置に配されている。本遺構の上屋施設に関連する柱穴の可能性が高い。直径は0.35mで，深さは0.1～0.15mを測る。Ｐ４・Ｐ５は炉跡を中心として，その左右に位置する長楕円形を呈する浅いくぼみである。炉跡との位置関係，炉跡の構築後に掘り込まれる構造を評価すれば，炉壁の基礎構造と判断した。Ｐ６は炉跡上位に位置する方形施設の底面を掘り込む施設である。方形施設の中央からやや東よりの部分に位置する。平面形は不整形をなす浅いくぼみである。堆積土中に炭化した堅果類の外皮を多量に含む。

遺　　物（図54・55，写真72・73）

13号焼土遺構からは，縄文土器２点，弥生土器７点，石器７点，土師器392点，須恵器１点，鉄製品７点が出土した。その他に骨片や炭化した種子や堅果類の外皮などもわずかに確認している。

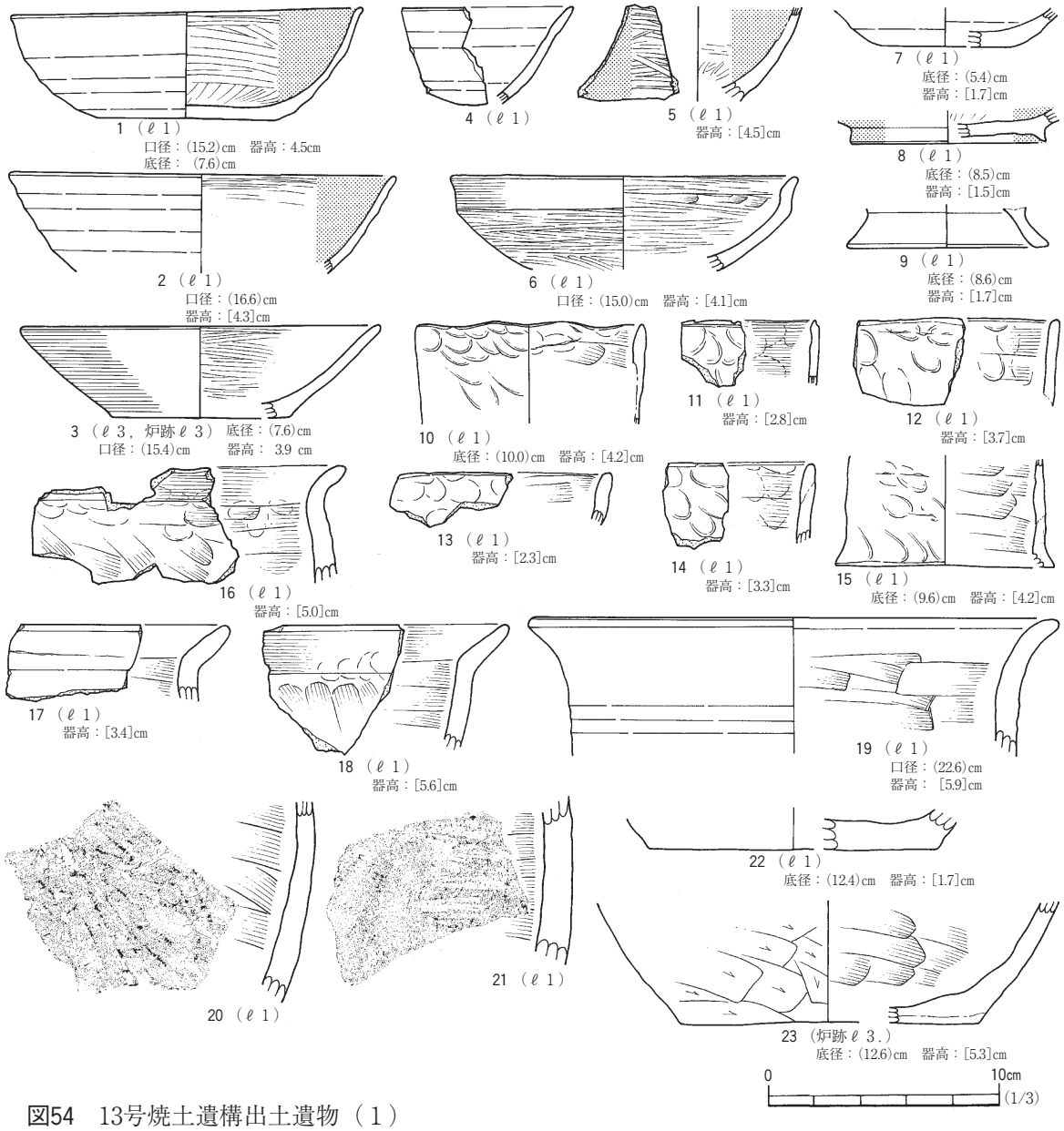


図54　13号焼土遺構出土遺物（１）

遺物の出土位置は図53に平面分布図を示したが，遺物の約９割は１層とした遺構全体を覆う流入土中から出土したもので，本遺構が機能当時に使用された状態で出土した遺物は極めて少ない。そのため炉跡を中心としてその上下に設けられた施設内から出土した遺物の器種組成と分布傾向についても，これら施設の性格を特定できる明瞭な出土状況の差異は見られない。出土した土師器の器種は杯・甕・筒型土器が見られる。いずれも小破片となって出土したもので，完形に復元できたものはない。筒形土器はいずれも小破片の状態で出土しているため，遺物点数の３割を占める。周辺の竪穴住居跡から出土した筒形土器の数量と比較しても，本遺構の出土点数が多い点も指摘しておく。54図１～９は土師器の杯である。１は約半分が遺存する杯である。体部が丸みを帯びて立ち上がる器形である。内面は黒色処理され，口縁部から体部下半までが横方向のミガキ，底面の見込み部分は放射状のミガキが施される。底部外面には回転糸切りによって切り離されている。２は体部から

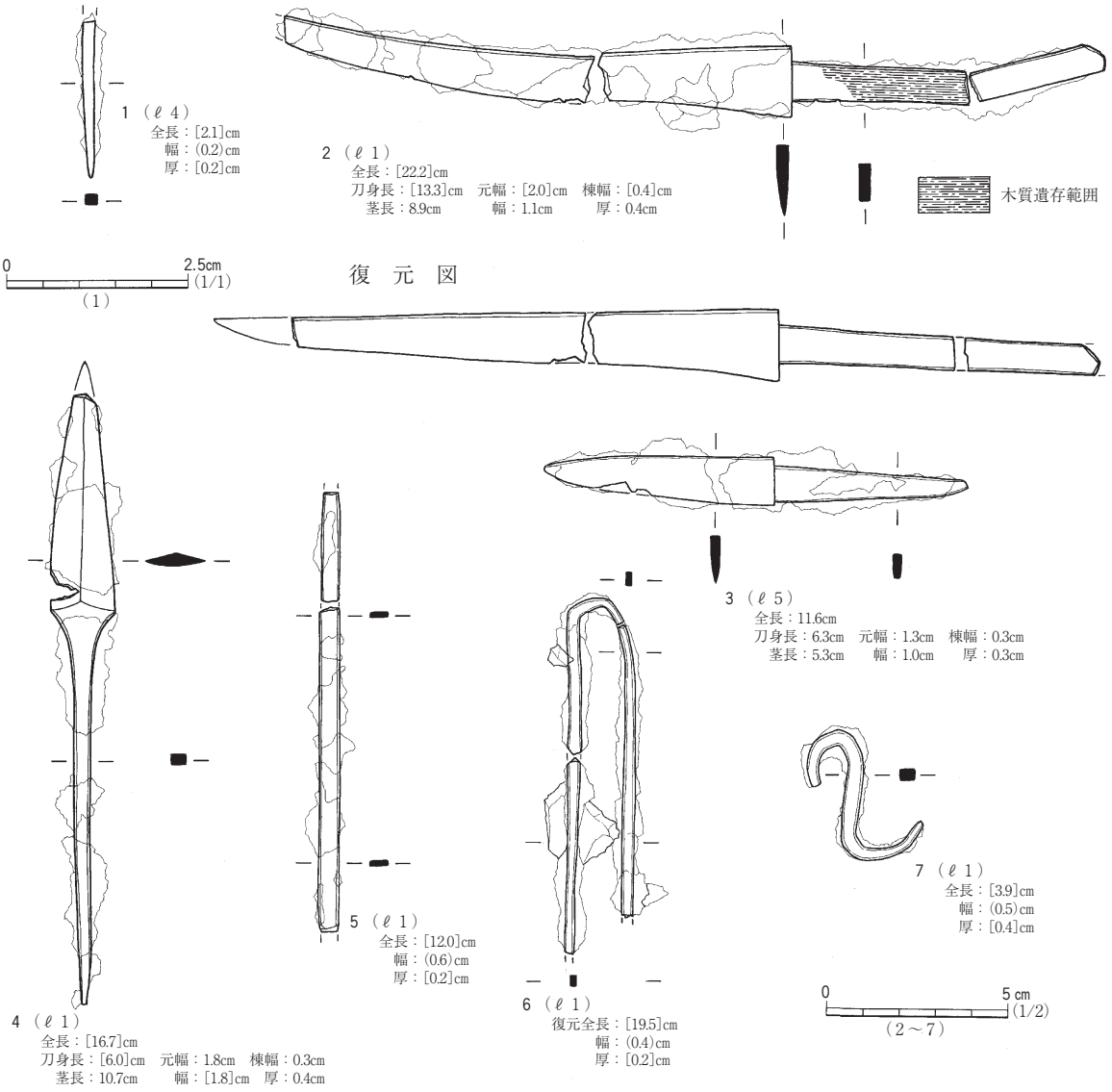


図55　13号焼土遺構出土遺物（2）

直線的に開く口縁部となる杯である。内面は摩滅して不鮮明であるが，横方向のミガキを施し，黒色処理される。３は体部から直線的に開く器形の杯である。外面はロクロを回転させながら，布を用いて整形した痕跡が明瞭に残る。内面は横方向のミガキが密に施される。４はいわゆる赤焼き土器の破片である。内外面ともロクロメが観察できる。５は杯の体部小破片で，内外面ともミガキを施した跡に黒色処理される。６は成形にロクロを用いていない杯で，器形などの特徴から古墳時代後期に属する。器形は丸みを帯びる体部から，口縁部で屈曲して直線的に立ち上がる口縁部となる。体部外面は横方向のミガキが密に施される。口縁部はヨコナデで仕上げられる。内面は口縁部直下の屈曲部に指ナデ痕を残すが，横方向のミガキを密に施している。７は高台付杯の底部破片で，内外面とも黒色処理が施される。内面には底部中心から放射状にミガキが施される。９は高台付杯の高台部の破片である。

10～15は筒型土器である。いずれも小破片であるため，口縁部の破片を中心に図示した。器形は

円筒形をなすものと推定されるが，15は底部からやや内傾して立ち上がるものも見られる。成形は極めて粗雑な作りで，外面には粘土紐の輪積み痕が明瞭に残り，口唇部を中心に指おさえの痕跡が観察される。内面は指ナデによって整えられるが，指オサエの痕跡を残し，器面に凹凸が見られる。

16～23は土師器甕である。成形にロクロを用いるものと用いないものが混在している。16はやや小ぶりの甕で，成形にロクロを用いていない。外面の成形痕として，頸部には指オサエ，体部上半は指ナデが観察できる。内面は横方向の指ナデが見られ，特に口縁部は丁寧にナデが施される。19は成形にロクロが用いられた甕である。直線的に立ち上がる胴部で，外反してひらく口縁部になる器形である。外面は摩滅しているがロクロメが残る。内面は横方向のヘラナデが観察できる。20・21は土師器甕の胴部拓影である。20は外面の成形痕として，縦方向のケズリを加えた後に，幅の狭い工具を用いたミガキが施される。21はロクロメを消す，縦方向のナデ痕が観察できる。

55図１は基部を欠損するため全体的な形状は不明であるが，錐状工具の先端部であろう。断面形は正方形をなす。２はやや刀身が長い刀子である。錆化が著しく遺存状態は極めて悪い。Ｘ線写真を観察すると刀身と茎部は折損しているため，復元図を示した。刀身は元幅が厚く，切先に向かって細くなる。茎部との境は棟側と刃側ともに直角に切り落とされた関が作られる。茎部は刀身に対し刃側に向かって斜めに取り付き，その端部は三角形状になる。また刀身や茎に木質痕跡が観察され，鞘および柄木の一部と推定される。３は刀子である。使用により刀身が研ぎ減っているため，刃関はわずかに確認できる程度である。棟関は直角に切り落ちて茎部と続く。茎部の形状は，棟側に比べ刃側が斜めになり，端部に向かって細く延びる。４はヤリカンナである。刃部先端をわずかに欠損するが，ほぼ完形である。錆化で歪んでいるため不明瞭であるが，先端が内傾する特徴がある。刃部の形状は長三角形をなす。断面形は三角形を呈し，上面は刃部中軸線上に鋭い稜を持ち，下面はやや丸みをおびる平坦面となる。茎部は刃部から次第に幅を減じて細長く延びる。茎部の断面形は正方形である。５～７はいずれも端部を欠損しているため，用途不明の棒状鉄製品とした。５は厚みの少ない棒状鉄製品である。断面形は下面が平坦になるのに比して，上面の端部がやや丸みを帯びる。６は中央部から折れ曲がった状態で出土した棒状鉄製品である。７は「Ｓ」字状に曲がる棒状鉄製品である。断面形はほぼ正方形をなす。

その他の遺物として，骨片，炭化した種子類，堅果類の外皮が少量ながら出土している。骨片は十数点出土したが，いずれも火熱を受けているため，もろい小破片である。骨の種類またはその部位までは復元できない。炉跡下位に位置する溝状施設内の１層中から出土したものが多い。種子類にはモモ・クルミが各１点で，炉跡下位の溝状施設の底面付近で確認した。堅果類の外皮はＰ６の内部から出土したもので，クリと推定される。細片となった外皮が重なった状態で出土することから，外皮のみが炭化したものと考えられる。焼き栗など食用としたものであろうか。

ま　と　め

13号焼土遺構の性格については，その構造や出土遺物の検討から，鍛冶に関連する遺構と考えている。しかし今回の調査成果では，本遺構の他に近似する遺構も確認されていない。さらに本遺跡

から出土した鉄滓の総量は極めて少ない点を評価すれば，操業規模は極めて小規模と言える。つまり鍛冶工人に特化した集落など，集落経営の主要産業として鉄製品の生産を想定するにはあまりに小規模であることを指摘しておく。また鉄滓の分析結果から，鉄素材を基にする二次的な精錬鍛冶の存在も示唆される。本遺構の調査結果では，具体的な操業方法までを明らかにできなかったが，集落内で使用される鉄製品の生産（二次的な精錬鍛冶），それら鉄製品の修繕・再生を行う鍛錬鍛冶に関わる遺構と想定している。本遺構の年代については，遺構全体を覆う１層の性状とその層中から出土した土師器の特徴から９世紀後半を上限と言える。炉跡の基礎構造内部から出土した最も新しい遺物として，54図３に示した土師器の年代観から，10世紀前半代を下限と考えている。（福　田）

14号焼土遺構　ＳＧ14（図51）

本遺構は調査区北側やや西寄りのＥ５－Ｃ４・Ｄ４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高272.2ｍ程の西向き緩斜面である。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。重複する遺構はないが，近接して39・41号住居跡が存在する。

焼土面の平面形は楕円形状を呈し，長軸0.53ｍ，短軸0.43ｍを測る。焼土面の中央に向かい緩やかに高まり，検出面から３～５㎝の厚さで焼土化している。焼土からの遺物は出土していない。

本遺構は周囲に関連する小穴等が検出されなかったことから，屋外炉と考えられる。出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周辺遺構などから判断して，古代の所産と考えている。（稲　村）

15号焼土遺構　ＳＧ15（図51）

本遺構は調査区西側付近のＤ５－Ｉ５グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.2ｍ程の平坦面である。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。重複する遺構はなく，付近に位置する遺構も認められない。

焼土面の平面形は楕円形状を呈し，長軸0.78ｍ，短軸0.35ｍを測る。焼土面の中央に向かい緩やかに高まり，検出面から２～４㎝の厚さで焼土化している。焼土からの遺物は出土していない。

本遺構は周囲に関連する小穴等が検出されなかったことから，屋外炉と考えられる。出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周辺から出土する遺物などから判断して，縄文時代後期から晩期頃の所産と考えている。（稲　村）

16号焼土遺構　ＳＧ16（図51）

本遺構は調査区西側やや南寄り付近のＤ５－Ｊ７グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高268.4ｍ程の平坦面である。遺構はＬⅡａ層の掘り下げ過程で焼土の集中範囲を確認し，ＬⅡｂ上面でその平面形を検出した。重複する遺構はなく，付近に位置する遺構も認められない。

焼土面の平面形は楕円形状を呈し，長軸0.9m，短軸0.65mを測る。焼土面の中央に向かい緩やかに高まり，検出面から10cmの厚さで焼土化している。焼土からの遺物は出土していない。

本遺構は周囲に関連する小穴等が検出されなかったことから，屋外炉と考えられる。出土遺物がないため正確な時期を特定することはできないが，検出層位や周辺から出土する遺物などから判断して，縄文時代後期から晩期頃の所産と考えている。（稲　村）

ピット　（図６）

ピット（小穴）は７基確認した。主にＥ５－Ｅ８グリッドに集中し，19号・34号住居跡の周辺に相当する。検出当初は建物跡が存在すると仮定して慎重に精査したが，ピットの位置に法則性が見いだされず，建物跡と認識するに至らなかった。重複関係を有するものはＧＰ１のみで，ＧＰ１は19号住居跡よりも新しい。検出層位はいずれもＬⅡｂ層上面である。平面形はいずれも歪んだ楕円形を呈し，ＧＰ２・ＧＰ６は一部壁面が崩落している地点が観察された。規模は長軸が56～79cm，短軸が45～65cm，深さは20～38cmをそれぞれ測る。堆積土はＧＰ４を除いてはしまりのない黒褐色土の単層で，柱抜き取り痕と考えられる。ＧＰ４は断面中央に黒褐色土，その周囲ににぶい褐色土が堆積しており，このにぶい褐色土は掘形埋土と考えられる。

表７　東地区ピット計測表

ピット番号	位置グリッド	計測値（単位:cm）			出土遺物
		長軸	短軸	深さ	
ＧＰ１	E5−D8	74	52	20	なし
ＧＰ２	E5−E8	57	45	38	なし
ＧＰ３	E5−E8	56	45	31	なし
ＧＰ４	E5−D8・E8	67	65	20	なし
ＧＰ５	E5−D8	64	57	34	なし
ＧＰ６	E5−E8	79	59	35	なし
ＧＰ７	E6−D1	52	48	30	なし

遺物は，いずれのピットからも出土しなかった。このため年代は不明であるが，検出層位や周辺の遺構などから，平安時代以降の所産と考えられよう。（管　野）

第６節　遺構外出土遺物

今回の２次調査東地区では，遺構外出土遺物として縄文土器1,950点，弥生土器1,693点，土師器6,560点，須恵器77点，陶磁器14点，石器・石製品125点，鉄製品42点が出土した（表８）。

遺物の出土位置は，表９で示すとおり調査区中央付近から西側付近にかけて集中する。遺物の年

表８　東地区出土遺物点数表

遺物名	総計	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	焼土遺構	遺構外
縄文土器	2,338（17.6%）	296	3	87	2	1,950
弥生土器	1,893（14.2%）	136	0	57	7	1,693
土師器	8,733（65.6%）	1,585	0	190	398	6,560
須恵器	104　（0.8%）	25	0	1	1	77
陶磁器	14　（0.1%）	0	0	0	0	14
石器・石製品	154　（1.1%）	22	0	0	7	125
鉄製品(鉄滓含む)	86　（0.6%）	6	0	31	7	42
計	13,322	2,070	3	366	422	10,461

表９　東地区グリッド別出土遺物点数表

10	D4-D10							E4-A10									F4-A10
1	D5-D1			縄11	縄148 陶2			E5-A1									F5-A1
2					縄5	縄7 土25 陶1 石1	縄34 石3										
3							縄19 土7 石1	弥1 土11	縄・弥9 土73			弥33 土73 須1					
4					土1	縄2 土4	縄29 土22	縄34 土10	弥5 土41 石2	弥4 土160 石2	土17		土47	土57			
5		土1	縄17 土4	縄7 土12	縄13 土28	弥1 土2	縄12 土11	縄117 土63 陶2	弥9 土9	弥3 土109 石4 鉄3	弥2 土9 石1	弥49 土17	弥7 土85	弥432 土56 石2	弥33 土74 須1		
6			縄32 土18	縄78 土39	縄1 土47	縄10 土6	縄61 土31	縄690 土315 石1	土7	縄4 土8		弥8 土42 石2 鉄4	弥22 土97 鉄2	縄・弥34 土9	縄・弥34 鉄1	縄・弥100 土31 石3	
7		土2	縄3 土6	縄73 土72 石2	縄42 土83 石1	縄5 土4	弥4	弥46 土8	土3 鉄3	土159 須1 石1	土283 鉄1	縄・弥7 土557須4 石1 鉄2	縄・弥17 土399 須1 石3	縄・弥94 土123 石4	縄・弥25 土57須2 陶1石2		
8			土6	縄16 土16	縄15 土9 石2	縄1 土6	弥1 土1	弥3 土1	弥11 土250須5 陶1 鉄1	弥5 土65 須53 石6 鉄2	土339 石1 鉄1	縄4 土216 石2	縄・弥41 土506須1 石9 鉄5	縄・弥477 土300 陶6石49	縄・弥58 土100 須1 石8		
9				縄1 土5	縄30 土24	縄6 土8	縄19 土3 須1		縄・弥80 土35 石1 鉄1	縄11 土237 須1	弥11 土92 陶1 石1		縄・弥5 土265須1 石4 鉄3	縄・弥147 土139 石1			
10					縄2	縄38 土13 石1 鉄2	縄1 土1 鉄4		土11	縄・弥6 土69 石1 鉄3	縄・弥90 土181 須1 石2		縄・弥28 土103 石1 鉄3	弥20 土37 鉄1			
1	D6-D1							E6-A1			縄・弥43 土61	縄・弥29 土26	弥8 須3	縄・弥39		縄1	F6-A1
2												縄3		土1			
3																	
4																	
5																	
6																	

＊縄：縄文土器　弥：弥生土器　土：土師器　須：須恵器　石：石器・　鉄：鉄製品

代は，縄文時代早期中葉から縄文時代晩期までの縄文土器，弥生時代中期前葉を主体とした弥生土器，平安時代を中心とした土師器・須恵器，鉄製品などの遺物が見られる。以下時期ごとに，遺物の分布傾向や出土状況などをまとめる。

１　縄文時代早期中葉～中期中葉の土器（図56，写真74）

縄文時代早期中葉から中期中葉の土器は，その出土量は極めて少なく，遺構も確認されない。しかし，今回の調査では，上層（ＬⅡａ・ｂ層）のみでの確認であり，その下層には縄文時代前期を主体とした該期の遺構が埋没していることは既に明らかであるから，３次調査で飛躍的に確認できるものと思われる。出土位置は，標高の低いＤ５地区に集中して分布する傾向が見られ，ＬⅡｂ層での出土が多い。

56図１・２は貝殻を沿わせた沈線文によって文様を描くもので，早期中葉の田戸下層式に比定できるものである。ともに単沈線に貝殻腹縁圧痕を沿わせ，１の口内には刻みが施される。同図３～６は，円形竹管状の施文具による刺突で構成される文様で，前期中葉に位置づけられる土器である。

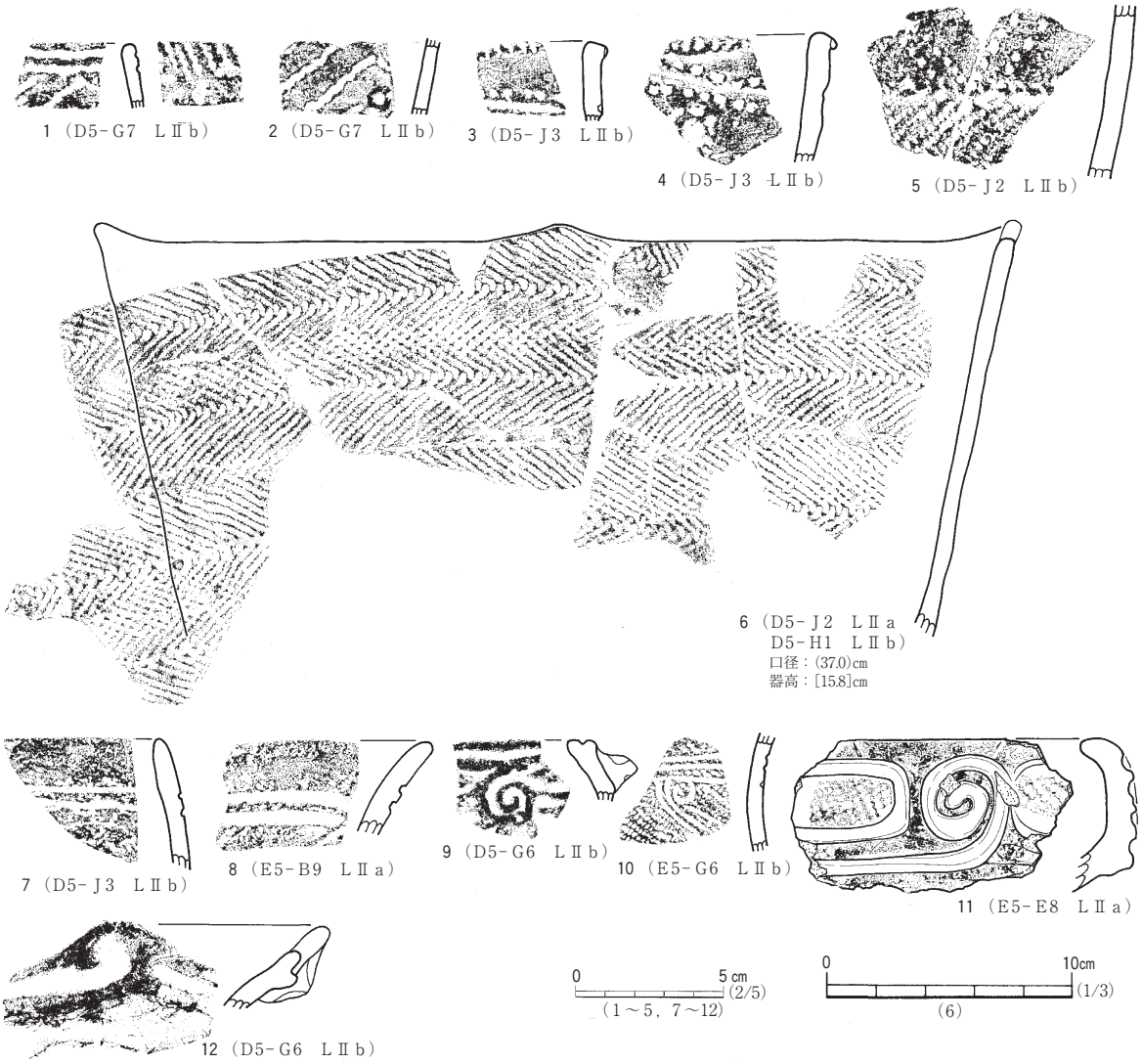


図56　遺構外出土遺物（１）　縄文早期～中期

全体的な器形を復元できるものはなく，その文様構成が分かるものも少ない。

３・４は口縁部資料で，口唇が外側に張り出し，刻みが加えられる。同図６は前期前葉から中葉に位置付けられるであろう地文縄文土器である。口縁部には三角状の突起が付き，ほぼ直線的に外傾する。器面には条の長さが2.5cm程度の結束羽状縄文が施される。同図７～12は中期前葉から中葉に位置づけられる。７・８は口縁部の無文帯が横位沈線で区画されるものである。９は口縁部の突起で渦巻状の文様が観察できる。10は深鉢形土器の体部で緩やかに外反する。横位の沈線直下に渦巻状の文様が配される。11は幅の広い凸帯で，渦巻文や楕円形の区画文を描いている。12は波状口縁を呈し，波頂部に横帯Ｓ字状突起が取り付き，それ以外は無文部となっている。

２　縄文時代後期の土器（図57，写真74）

縄文時代後期の土器は，２次調査で出土した縄文土器の約２割を占める。出土位置は調査区全域に散在しているが，特に調査区西側に集中する傾向が見られる。62・64～66号土坑位置するＤ５－Ｇ

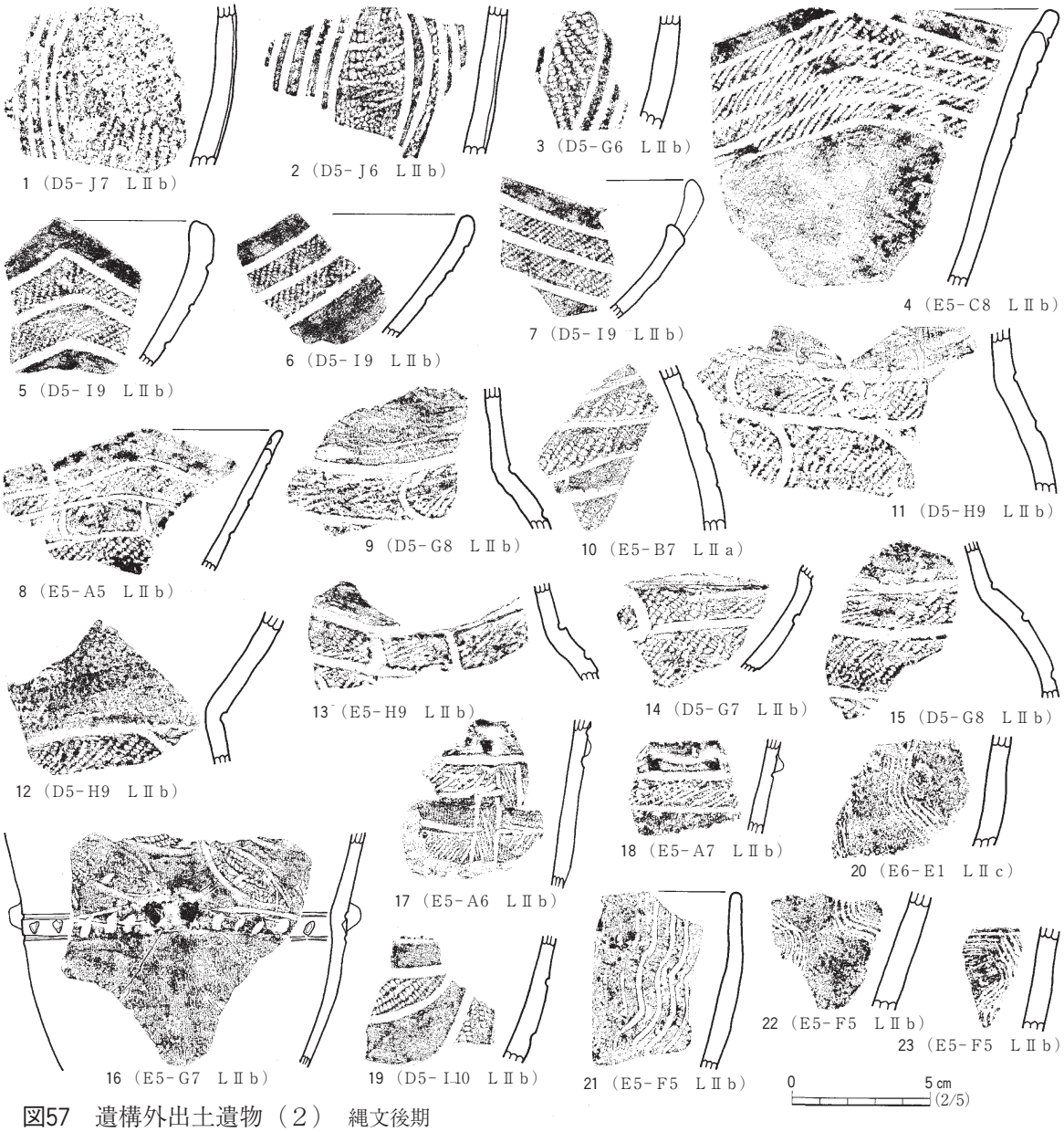


図57　遺構外出土遺物（２）　縄文後期

６・７・８，Ｈ７・８・９グリッドの周辺である。出土層位は，その殆どがＬⅡｂ層であり，時期を異にする遺物が混在する出土状況である。

57図１～３は多条の沈線により文様が施されるもので，出土点数は少ない。破片資料のみで，器形や文様を伺えるものは少ないが，縦楕円形状に沈線を配される。その様相から後期前葉の綱取Ⅱ式の後半段階に位置づけられる。同図４～15は数条の平行沈線間に縄文が施されるもので，後期中葉の加曽利Ｂ2式期に比定できるものである。４は山形口縁をもつ深鉢形土器で，ほぼ直線的に外傾する。口縁部に平行沈線で口縁に沿った曲線文を描き，その沈線間に縄文が施される。器面は研磨され光沢がある。５～７も同様であるが，５は４と比べると，山形口縁が肥厚する。８～15は平行沈線文の区切りに蛇行沈線文あるいは相対弧線文が施されるものである。いずれも深鉢形土器であり，８は口縁部で山形口縁を呈し，他は体部破片である。同図16～18は器面に貼瘤状の粘土粒が

観察されるもので，後期後葉の新地式期に比定できるものである。16は体部資料であるが展開することができた。２条の平行沈線が巡り，沈線間には刺突・刻目手法が施され，貼瘤状の粘土粒が付着される。器形は平行沈線を境に体上部が緩やかに屈曲し外傾する。体下半は無文で強いケズリ痕が観察され，体部上半は弧線文状の文様が施される。17・18は貼瘤状の粘土粒が認められる他は小破片のため，その文様構成は明瞭ではない。同図20～23は後期後葉の粗製土器である。いずれも櫛状工具により波状文が描かれるものである。22は他と比べると比較的幅広の工具で施文されている。

３　縄文時代晩期～弥生時代の土器（図58～59，写真75・76）

縄文時代晩期から弥生時代の土器は，２次調査で出土した縄文・弥生土器の約７割を占める。出土位置は調査区全域に散在しているが，特に調査区中央から西側に集中する傾向が見られる。特に42・47・53号住居跡が位置するＥ５－Ｇ５～８グリッドの周辺からは該期の土器の出土が主体を占める。出土層位は，ＬⅡａ・ＬⅡｂ層であり，時期を異にする遺物が混在する出土状況である。

50図１～４は晩期前葉の大洞ＢＣ式期の精製深鉢形土器である。いずれも直立ないし内湾する破片である。１は口唇が小波状を呈し，口縁部に文様が描出される。文様は連続した横Ｓ字状文を単独で表すものであろうか，文様帯下は単節縄文が施される。２・３は口縁部上端に刺突列を施し，その下段には縄文が施されるが，文様を浅く彫り込んである。４は口唇が尖鋭で刻目が加えられ，文様は明瞭な沈線で描出される。口縁部は平行沈線が匹字状の抉り出しを持つ工字文で構成され，匹字文の両端が抉り出した粘土で多少高まる。また，平行沈線の直下には下向きの弧線が連続して描出され，体部には縦位の単節縄文が施される。器面は丁寧に研磨されている。

50図５～25は晩期後葉の大洞Ａ式期を主体とし，一部Ａ´式期に比定される土器群である。今回の調査で出土した縄文土器の主体を占める。数条の沈線によって隆線効果を表出しているが，全体的に隆線部分よりもケズリ込みによる沈線部の幅の方が広いものが多い傾向がある。

５は台付鉢形土器の可能性がある。口唇には浅い沈線が巡り，口内には稜が形成され，沈線が囲繞し，口縁にはＢ突起が配される。文様は破片であるため全体の文様構成や単位は不明だが，明瞭な沈線で描出され，内外面とも丁寧に研磨されている。６・７は鉢形土器で，口縁部は平行沈線が匹字状の抉り出しを持つ工字文で構成され，匹字状の両端が抉り出した粘土で多少高まり突起状になり，突起には刻みが加えられる。いずれも口内には稜が形成され，沈線が囲繞する。６の口縁には二個一対の突起が配され，７の口唇には浅い沈線が巡る。８～10は浅鉢形土器であろうか。破片であるため文様を伺えるものは少ないが，いずれも口内には稜が形成され，沈線が囲繞する。８は口唇には浅い沈線が巡り，９は二個一対の突起が配され，口縁部には連続した１条の鎖状隆帯文が巡るものと思われ，その上下には数条の明瞭な平行沈線が施される。10は山形突起が配されるが文様構成は明瞭でない。11～13は鉢形土器である。いずれも口内には稜が形成され，沈線が囲繞するもので，口縁部には多条の明瞭な平行沈線が施され，匹字状の抉り出しを持つ工字文で構成される。11の体部は斜位の単節縄文が施文され，13の口唇には浅い沈線が巡る。いずれも器面は丁寧に研磨

図58　遺構外出土遺物（３）　縄文晩期～弥生①

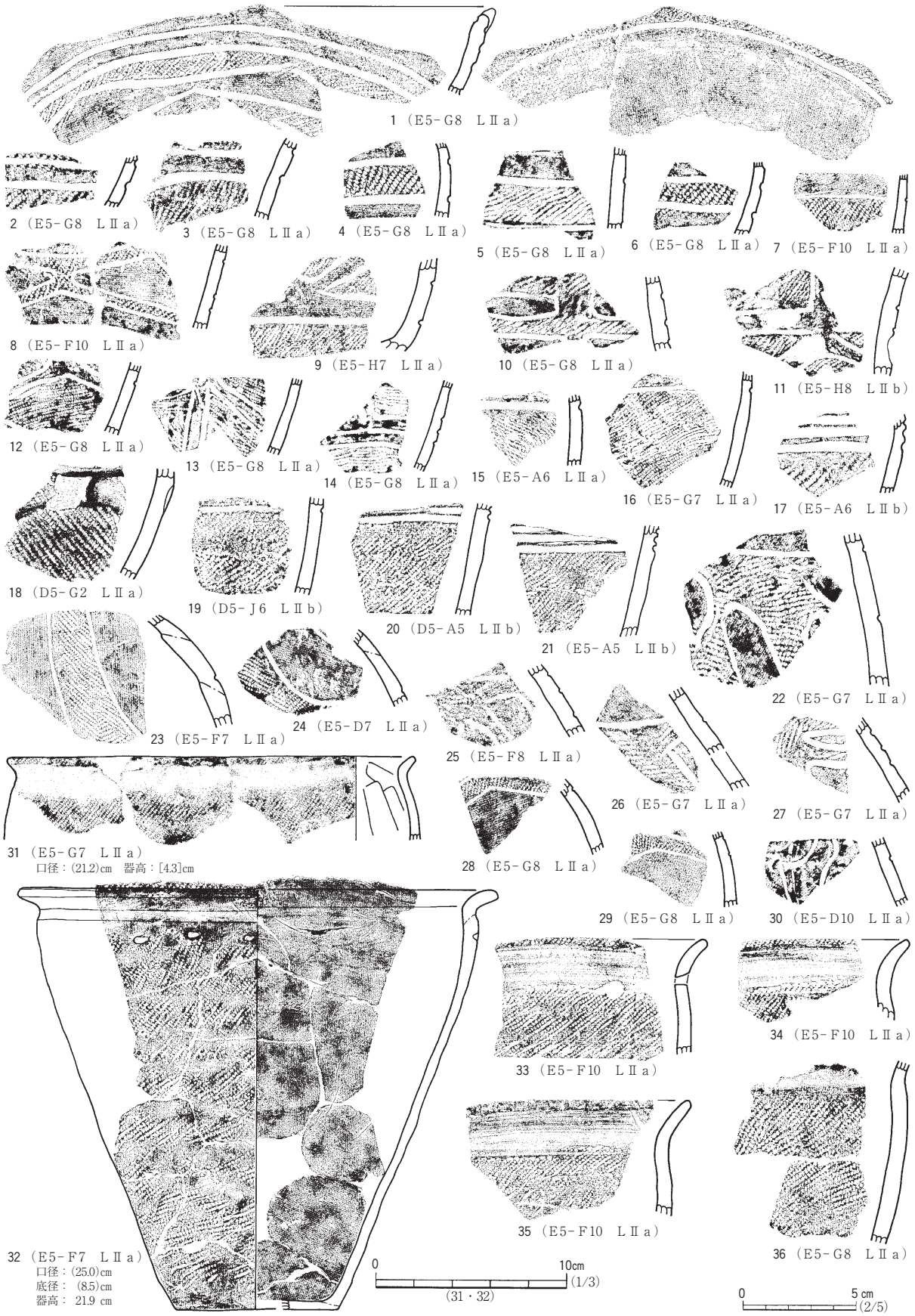


図59　遺構外出土遺物（４）　縄文晩期～弥生②

されている。14～17・19は浅鉢形土器と思われ，いずれも口唇が尖鋭に作出され外反する。15・19の口内には稜が形成される。15～17は口縁部には連続した１条の鎖状隆帯文が巡り，その上下には数条の明瞭な平行沈線が施される。内面は研磨されるが，器表はざらつき，胎土は細砂粒・滑石を多く含んでいる。18は器種は不明であるが，平行沈線が施され，匹字状の抉り出しを持つ横長扁平の変形工字文で構成されるものである。

21～23は壺形土器の口縁部資料である。いずれも無文で沈線により文様が描出されるので，内外面とも丁寧に研磨される。21は口唇部分が肥厚し，沈線が囲繞するもので，外反しながら立ち上がる。22は山形突起が配され，器面には三叉状の沈線が観察される。また口唇にも沈線が囲繞する。23もまた山形突起が配され，口縁部に平行沈線で口縁に沿った曲線文を描出する。

20・24・25は無文で，数条の平行沈線で文様が構成される鉢形土器の体部資料である。沈線のみで文様構成は明瞭ではないが，24・25は平行沈線間に匹字状の彫去が加えられる。いずれも薄手で，内外面とも丁寧に研磨されている。

同図26～30は数条の平行沈線のみで文様が構成される土器の口縁部資料で，同図31～38はその体部資料である。これらの沈線はいずれも幅が狭く，断面形は「Ｖ」字状を呈する。26～28はいずれも口唇が尖鋭気味となり，器面は研磨されている。口縁に沿って平行沈線が描出されるが，破片資料のみで器形や文様を伺えるものは少ない。26は口縁下位の沈線の向きの様相から，沈線文のみで変形工字文などの文様が構成されるものと思われる。29は頸部から口縁部がラッパ状に開く壺形土器である。31・32・34～38は無文で数条の平行沈線で文様が構成される体部資料である。沈線のみで文様構成は明瞭ではない。器種は，31は壺形土器と思われるが，他は鉢形土器である可能性が高い。33は壺形土器の体部資料である。頸部付近に４条の平行沈線が描出され，その下部には斜位の単節縄文が施文される。頸部付近は丁寧に研磨されている。以上，26～38の土器については，小破片であるため文様構成が不明瞭で，時期の判別が困難である。

同図39～44・46～48・59図１は磨消し縄文手法により，曲線的・幾何学的な文様図形が描出された土器の口縁部資料を集めた。いずれも断面形が「Ｕ」字状を呈する比較的太い幅の沈線により，文様が表出される。器種は，いずれも鉢形土器である可能性が高い。これらは弥生時代前期に比定される土器群である。39・41～43・47の口縁には横位に直線的な磨消し部を有する。また，41の口内には稜が形成され，沈線が囲繞する。破片資料のみで体部の文様を伺えるものは少ないが，39・47は，体部に斜位の沈線が描出され，幾何学的な文様図形を構成していたと推測される。40・44は口縁直下が無文帯で沈線間に縄文が充填されているものである。ともに口唇は尖鋭で，内湾する形態から鉢形土器である。無文帯は丁寧に研磨されており，44には２対の楕円状の無文帯が観察できる。46・48は口縁が極端に内傾する器形である。平縁の口縁に沿って多条の平行沈線が描出されるが，沈線間にはオオバコを原体とした植物茎回転文が施される。また，46には補修孔と思われる穿孔が２箇所みられる。59図１は口縁に山形突起が配される土器で高杯形土器の可能性がある。口内には稜が形成され，沈線が囲繞し，口唇は縄文が施文される。口縁に沿って２条平行沈線が巡り，

その直下に連孤文が描出され，間に縄文が充填される。器表は内外面ともに丁寧に研磨され，外面の縄文帯には赤彩が施される。なお，この赤彩の成分については，自然科学分析により赤鉄鉱（ベンガラ）という知見を得られた（第３編１節参照）。

58図49・50，および59図２～７は，平行沈線が囲繞され，比較的太い幅の沈線により磨消縄文を構成するものである。破片資料のみで全体の文様構成を伺えるものは少ない。

59図８～14は曲線的な縄文帯による文様が展開されるもので，区画する沈線は太く，彫りも深い。器形を知り得るものはほとんどないが，浅鉢形土器と深鉢形土器であると思われる。８は２条の平行沈線により層波文，10は四角文を描出されると思われ，沈線間には縄文が充填される。12～14は出土位置や色調・胎土から同一個体と思われる土器であるが，全体的な文様構成は不明瞭である。

59図15～21は他の部位の文様展開が不明なため明確でないが，平行沈線が横位に施されるものを集めた。沈線下の体部にはいずれも単節縄文が施文される。

59図22～27は壺形土器の破片資料である。22は頸部付近に太い幅の沈線が囲繞され，磨消縄文を構成するものである。小破片のため文様構成は不明であるが，曲線的で丸みのある文様帯である。23・24は沈線間に縄文が充填され，無文帯は丁寧に研磨されている。円文または渦巻文状の曲線的な文様で構成されるものである。23の内面には，成型時の粘土の輪積痕が明瞭に残る。

59図28～30は，出土位置と色調と胎土から同一個体と思われる土器で，無文帯は丁寧に研磨されている。鉢形か壺形土器であると思われ，沈線で構成された区画内に縄文が充填されているが，文様構成は不明である。

59図31～36は弥生時代に属する甕を集めた。胴部最大径は上部にあり，胴部上端でくびれ，口縁部が外反するものが甕の大部分を占める。31は胴部と口縁部の境が「く」の字状に屈曲し，口縁部は短頸で外反する。口縁部にはナデ調整が施され，口唇には縄文が施文される。胴部には単節縄文が施される。32は破片から，ほぼ全体形を復元することができた。胴部と口縁部の境が大きく屈曲し，口縁部は短頸で肥圧し外反する。内面調整はミガキ調整が施されている。31と同様に口縁部にはナデ調整が施され，口唇には縄文が施文される。胴部には単節縄文が施される。また，胴部上端には列点刺突文が施されている。33～35は甕の口縁部資料である。いずれも口縁部には横位のナデ調整が施され，口唇には縄文が施文される。また，33の胴部上端には補修孔と思われる穿孔が１箇所みられる。

4　弥生時代後期の土器（図60，写真78）

所謂「天王山式土器」に比定されるもので，出土点数は非常に少なく，図示したものでほぼ全てである。２～５は同一個体の破片で，個体数も２個体と極めて少ない。

１は口縁部が複合口縁状を呈し，口唇は尖鋭で刻みが加えられる。また，口縁に沿って２条の平行沈線が巡り，沈線間には刺突文が施される。胎土には粗砂を含み非常に脆い。２～５は口縁が波状になり，口唇には刻目が施される。２は口縁が突起状に肥大し，突起頂には刺突が加えられる。

口縁下端部には横位の隆帯に刻目を加え，その直上には刺突文が施される。口縁部には縄文が施文される。全体的に器面には，炭化物が付着している。

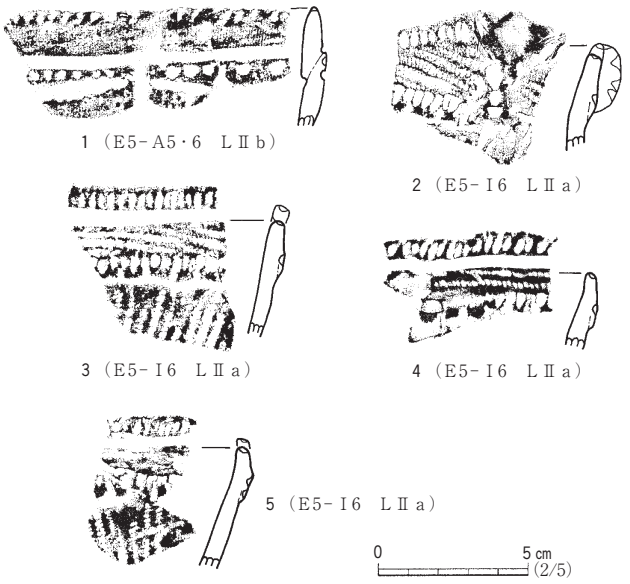


図60　遺構外出土遺物（５）　弥生後期

５　縄文時代晩期～弥生時代の粗製土器（図61～63，写真77）

61図には，縄文時代晩期から弥生時代に属する粗製土器の口縁部資料を一括した。全体的な器形を把握できるものが少ないため，詳細な分類は困難である。一部，器面の施文の特徴から縄文時代後期に遡る資料も見受けられる。器種は，口縁が大きく開く７は壺形土器，30は小型の鉢形土器である他は，いずれも深鉢形土器であると思われる。また，62・63図には器種不明の体部資料で，地文のみが施された資料を抽出して掲載した。61図１～４・６は口縁が小波状を呈する。いずれも口縁は押捺を加えて小波状を表出しているため，押捺を加えた部分の口唇は肥大気味となる。口縁はいずれも強いナデ痕が観察できるが，２の口縁上端には沈線が囲繞し，口唇にも沈線が施される。また３・４・６の口縁上端には横位の撚糸文が施文される。５は平縁で器面にはケズリ痕が観察できる。７は口縁部が複合口縁状を呈し，口唇は尖鋭で大きく外反する。器面にはナデ痕が観察できるが，複合口縁部分では単節縄文が施文される。８～10は出土位置や色調・胎土から同一資料と思われる。胴部上端で僅かにくびれ，口縁部が緩やかに外反する形態である。口縁は小波状を呈し，押捺を加えて小波状を表出しているため，押捺を加えた部分の口唇は肥大気味になる。口縁は横位の強いナデ痕が観察できるが，９には整形時の粘土紐痕が明瞭に残る。また，胴部には斜位の細かい撚糸文が施文される。11は小破片であるため，全体形は不明であるが，器面に単節縄文が施されている。

12～14は口頸部が緩やかに屈曲しているものを集めた。12の口縁には強いナデ痕が観察でき，胴部には単節縄文が施文される。13も同様であるが，口縁が複合口縁を呈し，尖鋭気味である。14は胴部には細かい条痕文が縦方向に施される。15は，胴部最大径は上部にあり，胴部上端でくびれ，口縁部がほぼ直立するものである。口縁は強いナデ痕が観察でき，胴部には比較的太めの撚糸文が横位～斜位方向に施される。胎土には粗砂を含み脆い。16は，比較的薄手で口縁部が内湾する形態の深鉢形土器である。口唇は尖鋭気味に作出され，器面には網目状撚糸文が施文される。17は器面に幅広の櫛状工具で条痕を施すことから，縄文時代後期後葉から晩期前葉の土器になる可能性がある。補修孔と思われる穿孔が１箇所みられる。18は胴部と口縁部の境が「く」の字状に屈曲し，口縁部は短頸で外反する。口縁付近はナデ調整が施され，器面には網目状撚糸文が施文される。

19～29は内湾する口縁部資料を集めた。いずれも深鉢形土器である。19・25～27は複合口縁を呈

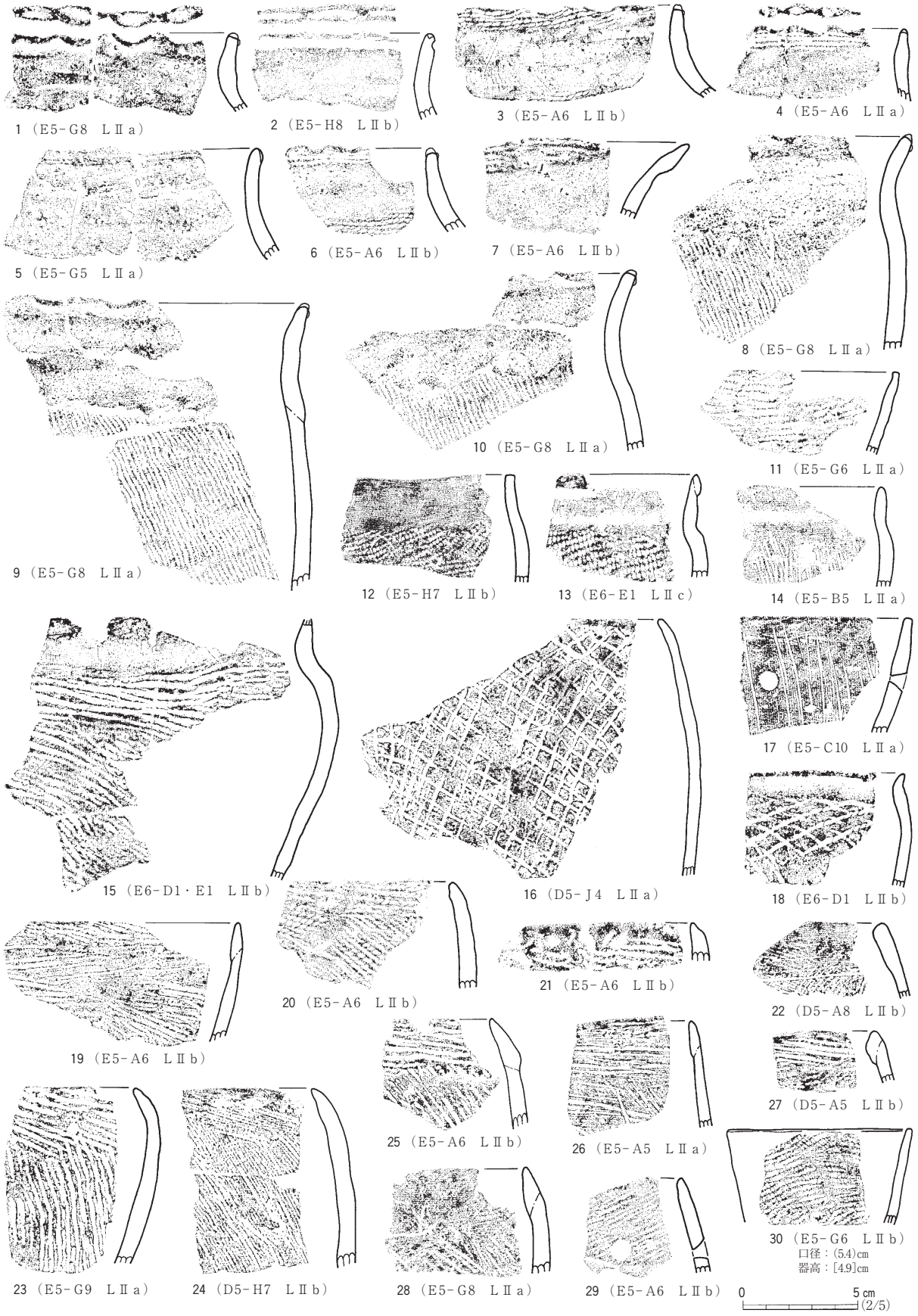


図61　遺構外出土遺物（６）　縄文晩期～弥生　※粗製土器口縁部

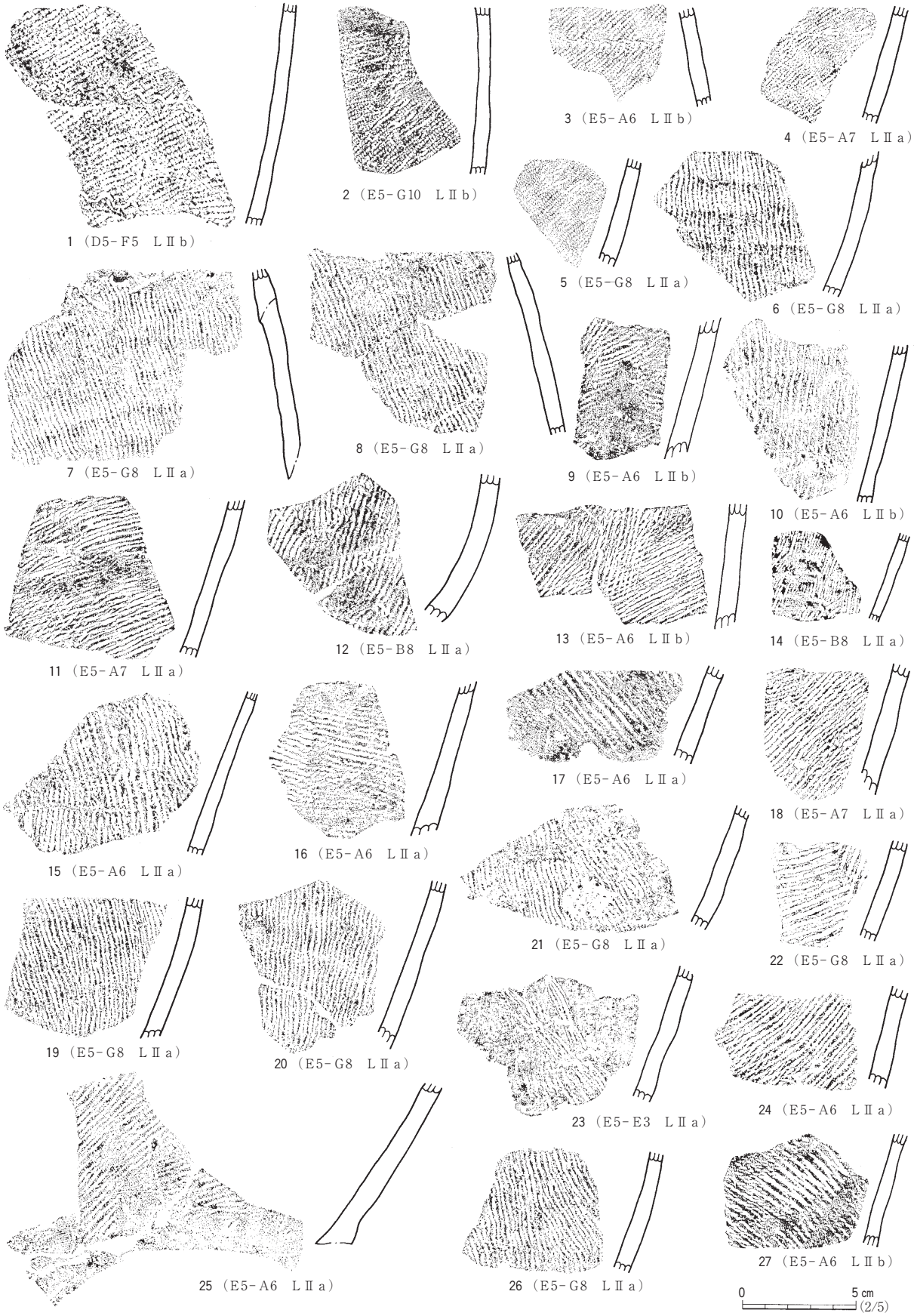


図62　遺構外出土遺物（７）　※体部資料①

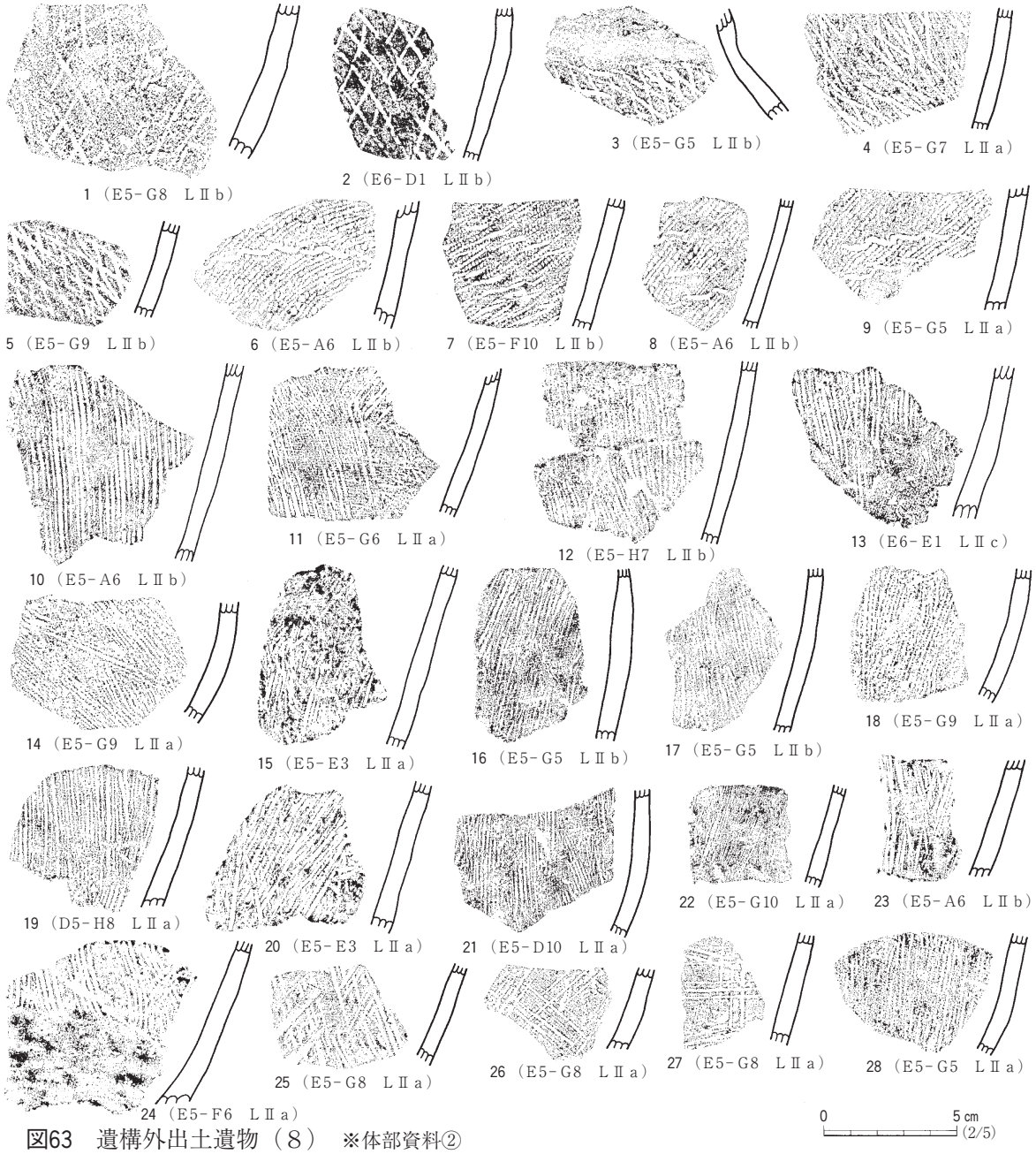


図63　遺構外出土遺物（８）　※体部資料②

し，器面には，25は口縁に横位，胴部に斜位の撚糸文が施文される他は，いずれも条痕文が施される。20・21・23は口唇が尖鋭気味に作出され，口縁に横位，胴部に斜位の撚糸文が施文されるものである。24は口唇が尖鋭に整形する際の押捺痕が口内に残る。器面には細かい条痕文が施される。22・28は胎土には粗砂を含み非常に脆い。器面には，条痕文が施されている。また，29には補修孔と思われる穿孔が１箇所みられる。30はほぼ直線的に外反する小型の鉢形土器の破片である。外面には単節縄文が施文され，内面には丁寧なナデ痕が観察できる。

62図１～５は，縄文を地文とする資料を集めた。いずれもＬＲの斜縄文を施文する。１・３・４の原体端部に綾絡文が認められ，２の器面には炭化物が付着している。同図６～27は撚糸文を地文とする資料である。今回の調査では，撚糸文が施文された破片が多く出土している。ほとんどは撚

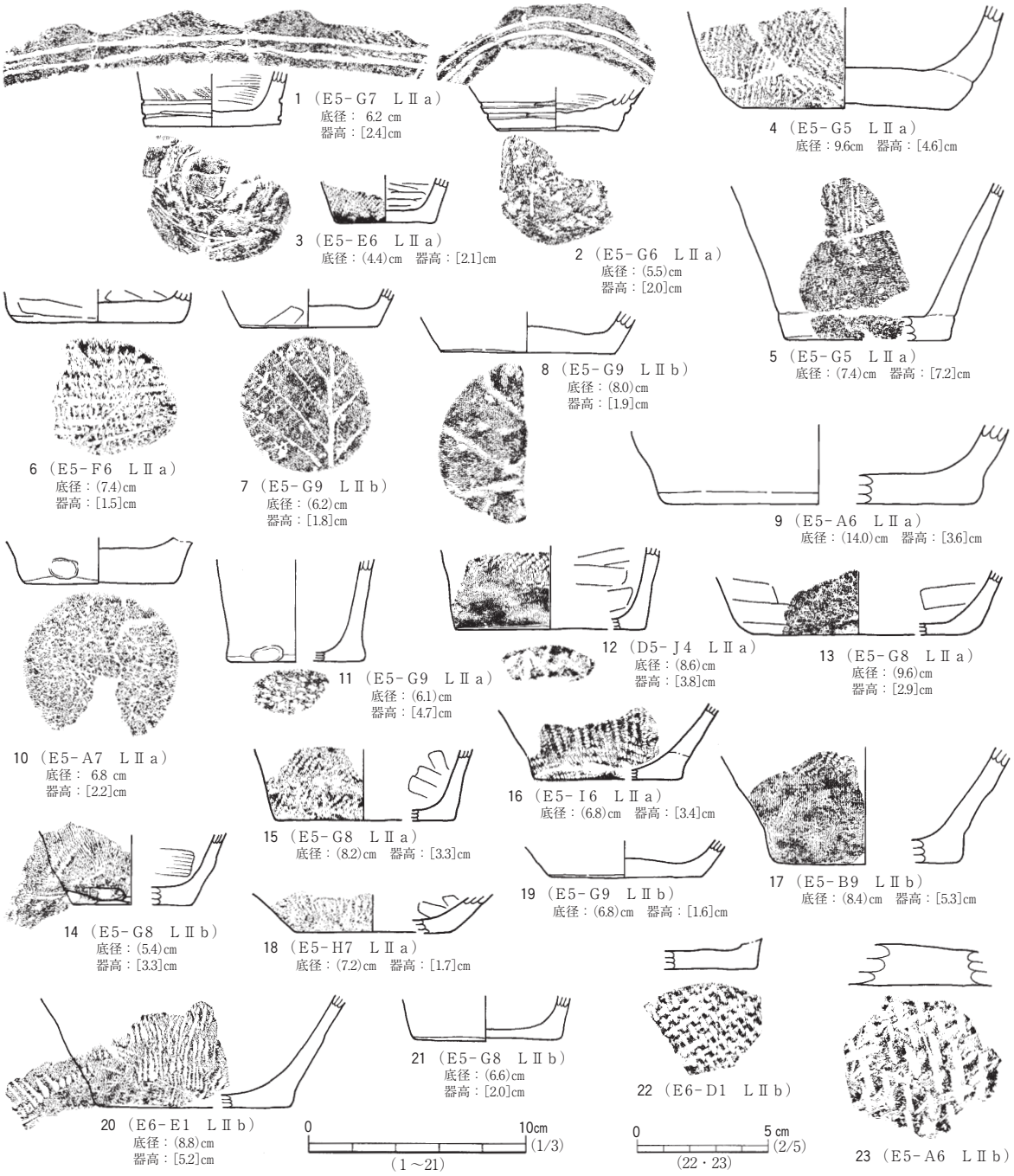


図64　遺構外出土遺物（９）　※底部資料

糸間の幅の狭いものであるが，10・17・22・24・27のように比較的幅の開くものも見受けられる。また，施文方法として一定方向に施文がなされるものと，方向が異なるものが観察できる。63図１～５は網目状撚糸文を集めた。３は無文帯との境で屈曲する形態から深鉢形土器の破片と推察される。同図６～９は付加条縄文の資料である。今回出土した遺物では，僅かに含まれる。６・８・９の原体端部には綾絡文が認められる。同図10～28は条痕文を地文とする資料である。全て施文具はハケメ状の工具と思われ，いわゆる貝殻条痕文は確認できない。施文される条痕文は，そのほとんどが条痕の１条１条の線間幅が比較的狭くて櫛歯状を呈するものであるが，25～27のように半截竹

管条の痕跡のような条痕文が認められる資料や，施文間隔が疎なものが見られる。

6　縄文土器・弥生土器の底部資料（図64）

64図には縄文～弥生土器の底部資料を一括した。全体的な器形を把握できるものや文様が遺存していないものが多いため，時期や器種などの詳細な分類は困難である。

１・２は底部下端に２条の平行沈線が囲繞するもので，精製鉢形の弥生土器と思われる。いずれも底面には，篦状工具でケズリが加えられる。器面には，１は単節縄文が施文されるが，２は丁寧に研磨されている。３は弥生時代に属する小型鉢形土器の底部であろうか。器面には植物茎回転による偽縄文が施される。４は器面に撚糸文が施文される粗製の深鉢形土器である。出土位置から縄文晩期に属するものと思われる。胎土に砂粒を多く含み非常に脆い。５も縄文晩期に属するもので

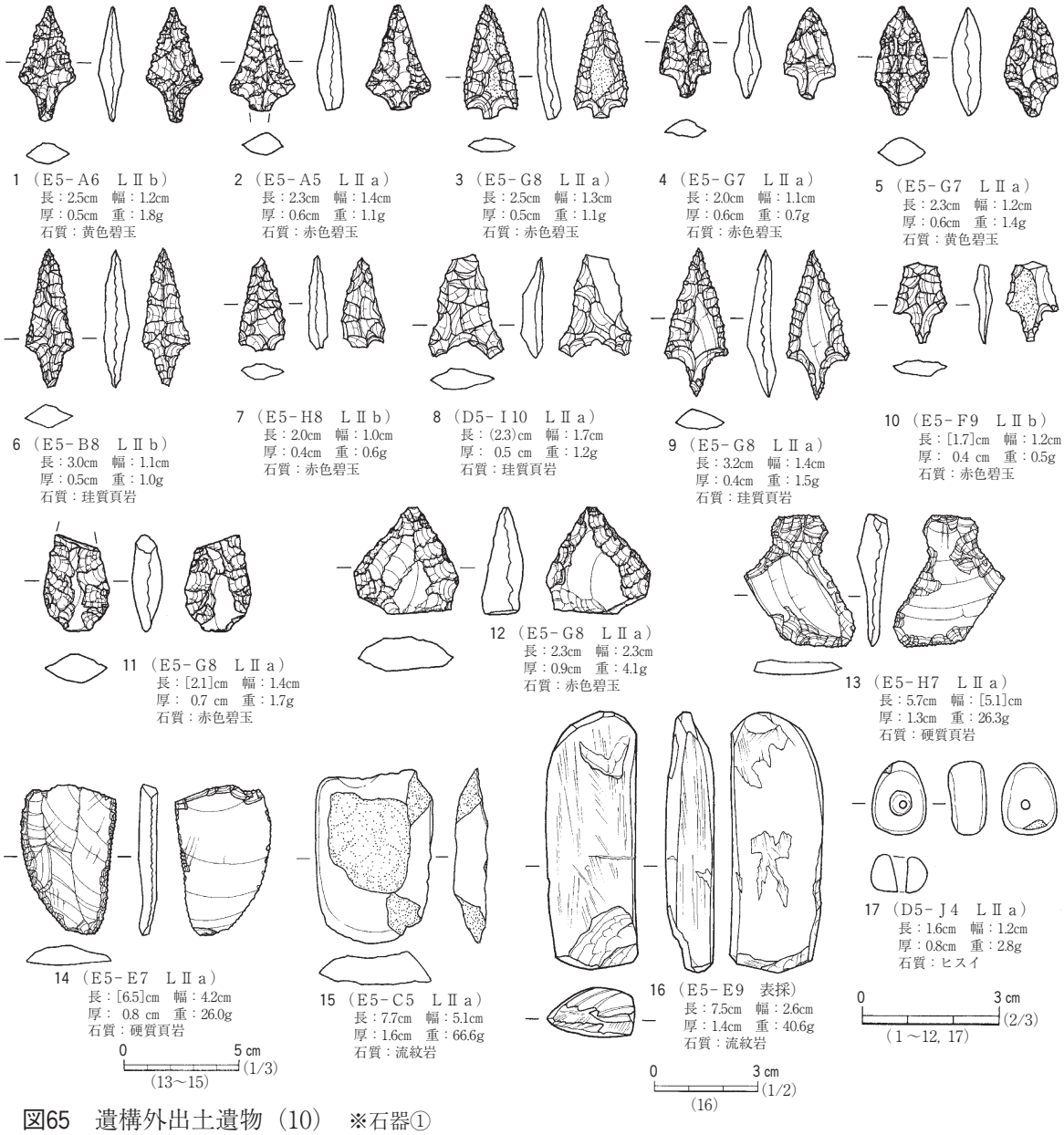


図65　遺構外出土遺物（10）　※石器①

底部外縁が突出せず，直線的に立ち上がる器形を呈する。体部下位は無文でケズリ痕が観察できるが，僅かに撚糸文が施文される。６の底面には，土器製作時に敷物として使用した網代の痕跡が認められる。また，７・８は底部圧痕として木葉痕が観察される。９は比較的大型の深鉢形土器の底部である。胎土に砂粒を多く含み非常に脆いため，施文方法は不明である。11は底部外縁が突出し，直線的に立ち上がる器形を呈する。縄文晩期から弥生時代に属する精製土器である。器面は無文で，胎土に砂粒を多く含み脆い。底面には網代痕が認められる。12・15は底部外縁が突出せず，直線的に立ち上がる器形を呈するもので，器面には斜位の単節縄文が施文される。12の底面には一部分だが網代痕が観察される。器種は鉢形土器と思われる。13は器面に丁寧なケズリ痕が見られる。14は出土位置から縄文時代晩期から弥生時代の小型の精製土器である。器面にはハケメ状の細かい条痕文が施される。16・17・20は底部外縁が直立気味に立ち上がるもので，いずれも深鉢形土器であろうか。16は器面に撚糸文を施文するが，底部付近と体部では施文方向が異なる。また，20は条痕文が施文されるが，下から上方向への施文痕が観察できる。

22・23はいずれも，土器製作時に敷物として使用した網代の痕跡が認められる資料である。

７　縄文～弥生時代の石器・石製品（図65・66，写真84・85）

石器の出土位置は，基本的には縄文土器・弥生土器と同様な分布を示している。特に，調査区中央付近に集中する。基本的に，石器の形態で時代が特定できるものはなく，縄文～弥生時代のものとして一括した。65図１～12は石鏃である。１～７・９～11は有茎石鏃で，全体的に身幅の狭い長三角形状を呈するものが多い。８は無茎の凹基石鏃である。２等辺三角形状であるが，先端は大きく欠損している。12は身幅が広い有茎石鏃であろうか，形が整っておらず，未製品の可能性がある。同図13は石匙である。刃部の一部を欠損するが，おおよそ三角形を基調とするもので，頂部につまみが造られる。側縁には両面からの細かい調整剥離を加えて刃部が造られる。同図14は石匙か削器で，基部を欠損するものである。裏面は素材剥片を採取した際に生じた剥離面を残すものであり，表面のみで細かい調整剥離を加えて刃部が造られる。同図15は磨製石斧で刃部と基部を欠損する。片側部分も欠損し，遺存状況は非常に悪い。残存する部分の表面は比較的良く研磨されている。同図16は不明の石製品である。その形状から石剣を転用したものであろうか。両端は磨痕が見られ，表裏と背の部分は研磨痕が明瞭に残る。片側は刃部のように尖鋭な形状である。

同図17はヒスイの石製品である。卵形を呈し，表裏面はほぼ平坦で中央付近には「Ｖ」字状に穿孔された孔が観察できる。

66図１～９は凹石・磨石である。円形または楕円形を呈する礫を利用している。表面は使用により平滑になる。表裏面の中央や側面に敲打痕が残る。（稲　村）

８　古代の土器（図67～70，写真79～82）

土師器　土師器の出土総量は6560片となる。層位はＬⅡａ層が９割以上を占め，他の層位からの

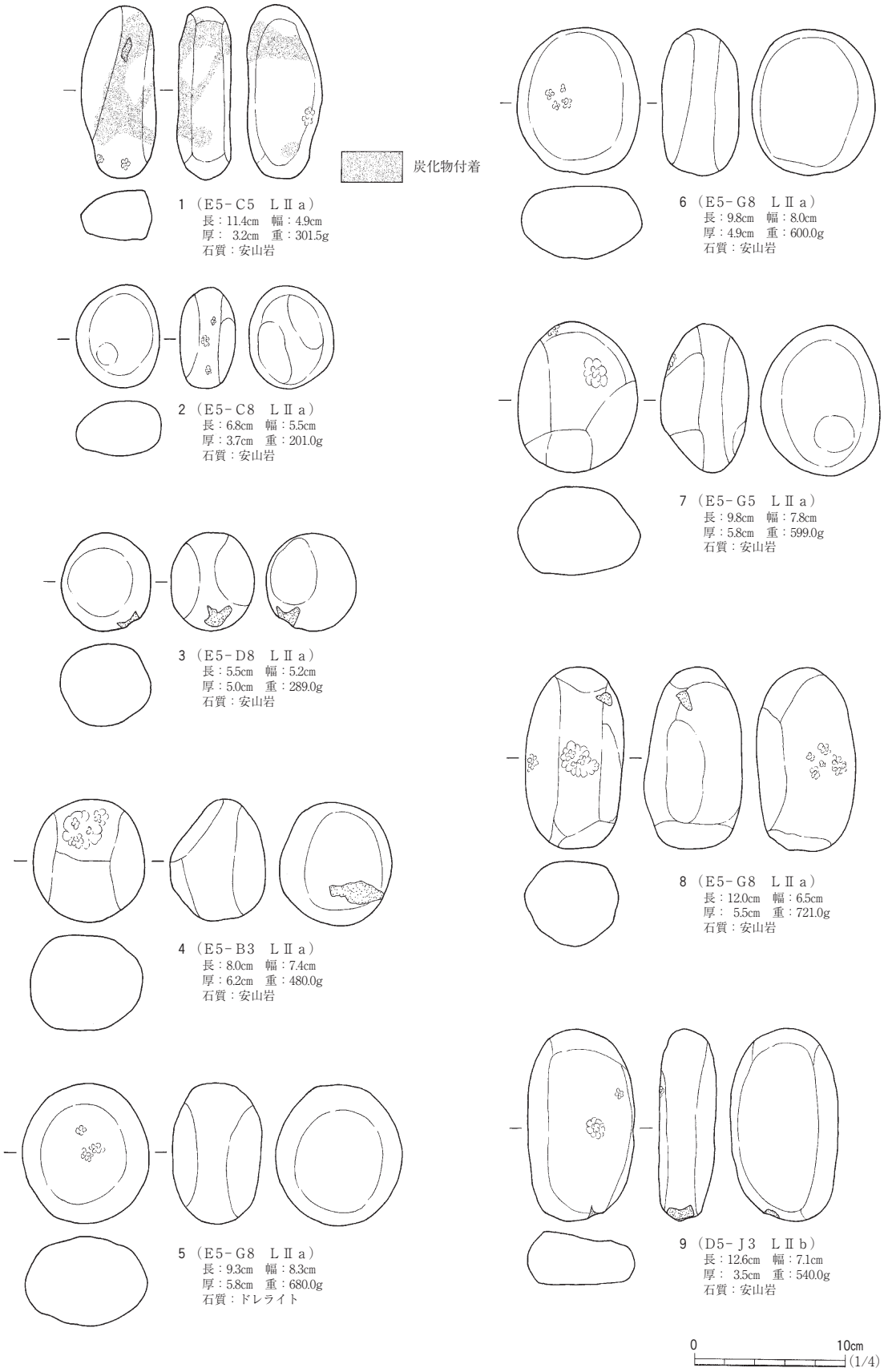


図66　遺構外出土遺物（11）　※石器②

出土は非常に少ない。出土グリッド別ではＥ５－Ｃ・Ｄ・Ｅ８～９グリッドが最も多く，住居跡の集中する地点に相当する。片側部分集中する地点に相当する。土器の種別では，ロクロ土師器が大多数を占め，非ロクロの土師器は僅少である。

67図１～３は非ロクロの土師器である。１・２は体部外面に稜をもつ丸底の杯で，口縁部外面は横方向のナデ，体部はヘラケズリ，内面はともにミガキののち黒色処理が施される。器形などから６世紀代の所産となろう。３は小型の皿状を呈する杯で，内面の黒色処理は施されていない。

67図４～23はロクロ土師器の杯となる。器形的に皿となろうものも含まれているが，破片資料が大半で器形が判明するものが少ないことから，便宜的に杯としている。なお，底部の切り離しはすべて回転糸切りである。４は小型の杯で体部外面下半に手持ちヘラケズリが施されている。５は口縁端部が外反する資料となる。10・11は体部外面に墨書がある資料であるが，破片ゆえに文字は判読不可能である。６～９，11～23は口縁部が欠損，もしくは底部のみの資料を一括した。外面体部下端の調整は，12が回転ヘラケズリ，13～15が手持ちヘラケズリ，その他はロクロによるナデのみである。内面のミガキは７～９の横方向のミガキの他に，17・20～21のような縦方向，もしくは放射状のミガキなども観察される。67図24～30,68図１～４は高台付杯となる。全体の器形が杯同様，判明するものがない。高台部は高さ６～８㎜と低く，「ハ」の字状に開くもののみとなる。また，高台の断面形は三角形のいわゆる三日月高台を呈するものが大多数を占め，断面四角形のものが少ない。68図５～７は内外面黒色処理の土師器である。５は小型の皿，６・７は高台杯となろう。先述の土師器よりも丁寧なミガキが内外面に施されている。

68図８～25はいわゆる赤焼土器･須恵系土器と呼称されている土器である。数量的には杯が多く，皿は４点･高台杯が２点のみと少ない。いずれも胎土に砂粒を多く含み，器表面は赤褐色を呈する。68図８～11は皿と考えられる資料である。８は口径9.4㎝，底径5.2㎝，器高1.7㎝と小型の皿となり，口縁部は直線的に外傾する。９は底部切り離し後，底部外縁部にのみ手持ちのケズリが加えられている。11は破片であるが，８～10よりも口径が広い大型の皿と考えられる。12～23は杯である。12～14は小型の杯で，いずれも口縁部は外反する。また，12の内面には煤が付着していることから，灯明皿として使われたと考えられる。68図15～23は底部を一括した。底部の形態は底部から直線的に外傾するものが大半を占めるが，19のように回転台から離して切り離す「離し糸切り」の資料も数は少ないが確認できる。24・25は高台坏で，２点とも直立気味の高台を有する資料となる。68図26～30，69図１～13は甕である。このうち，法量的に68図26～30は小型の甕，69図１～13は中型～大型の甕にそれぞれ分類している。26は底部が欠損する破片資料であるが，端部が直立気味につまみ出す口縁部を有し，胴部下端は手持ちによるヘラケズリが施されている。27の口縁部は横方向に屈曲する器形で，口縁端部に面を有する。内面はロクロナデのみであるが，口縁部と胴部の境界に明確な稜線が認められない。28は口縁部が「く」の字に外傾する資料となる。29・30は小型甕の底部を一括した。69図１～６は中・大型の甕である。１は「く」の字状の口縁部をもつロクロ成形の甕で，外面胴部中半～下半は縦方向のケズリが観察される。２も同じくロクロ成形であるが，

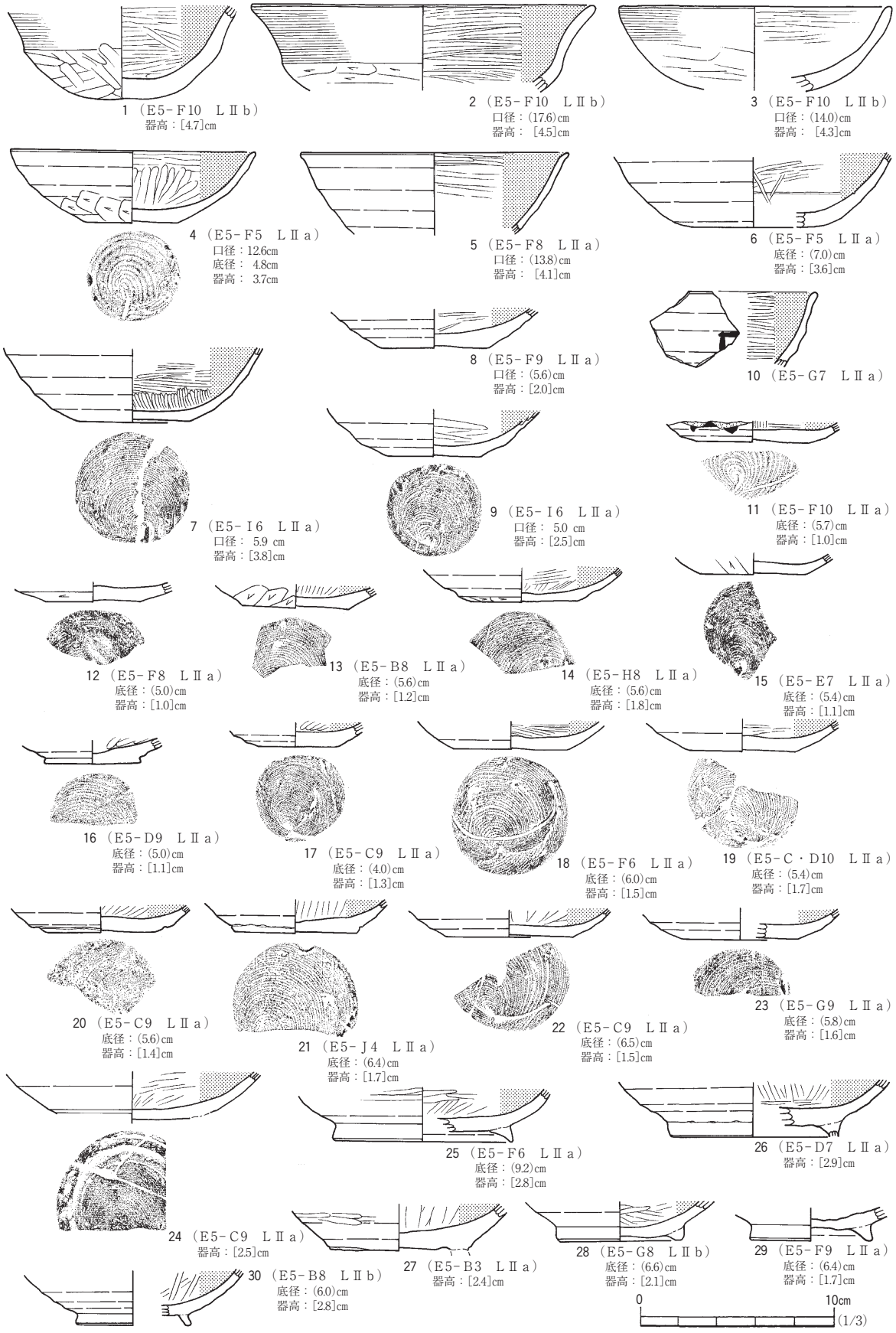


図67　遺構外出土遺物（12）　土師器①　※土師器杯（内黒）

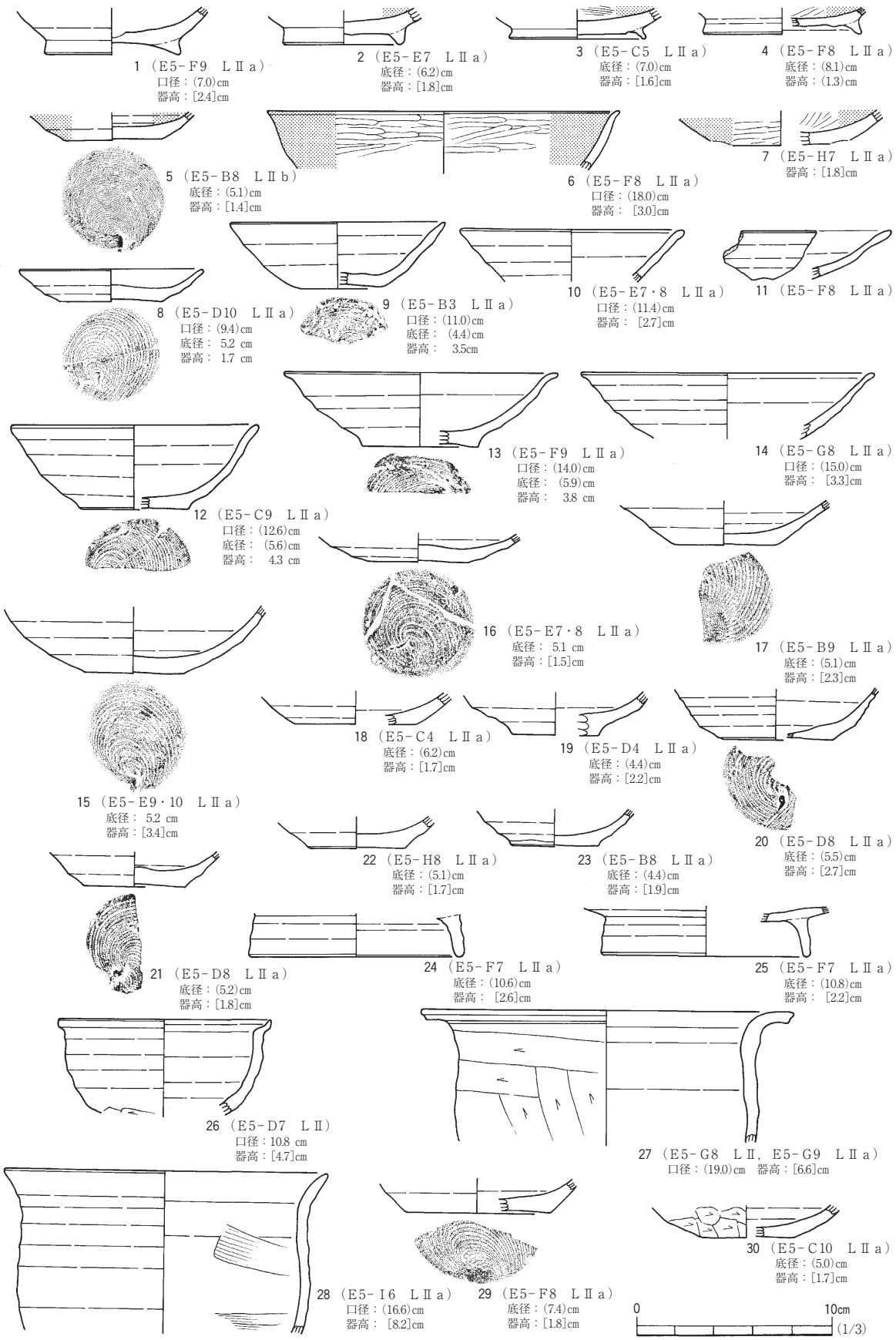


図68　遺構外出土遺物（13）　土師器②　※土師器高台杯・赤焼土器

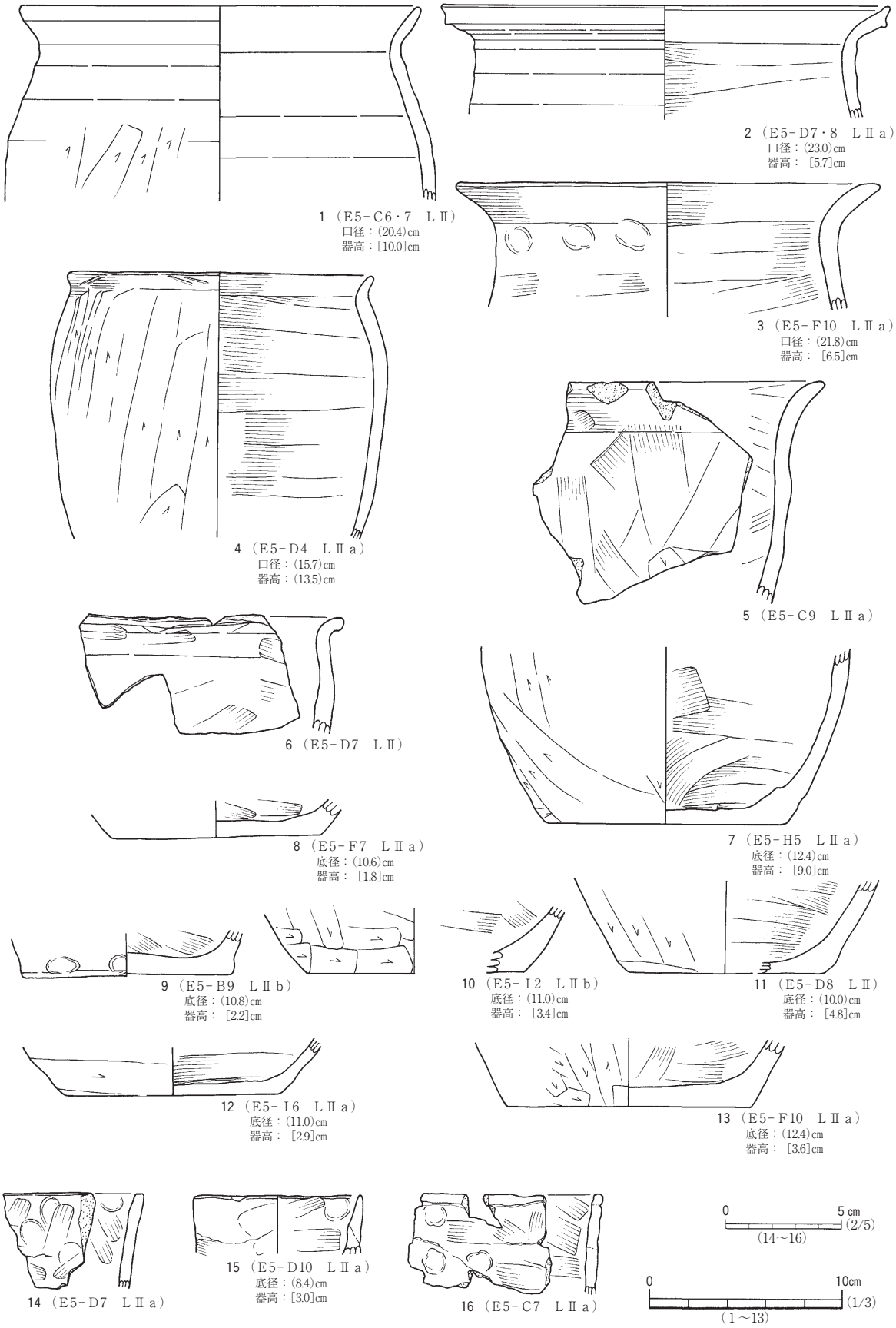


図69　遺構外出土遺物（14）　土師器③　※土師器甕・筒形土器

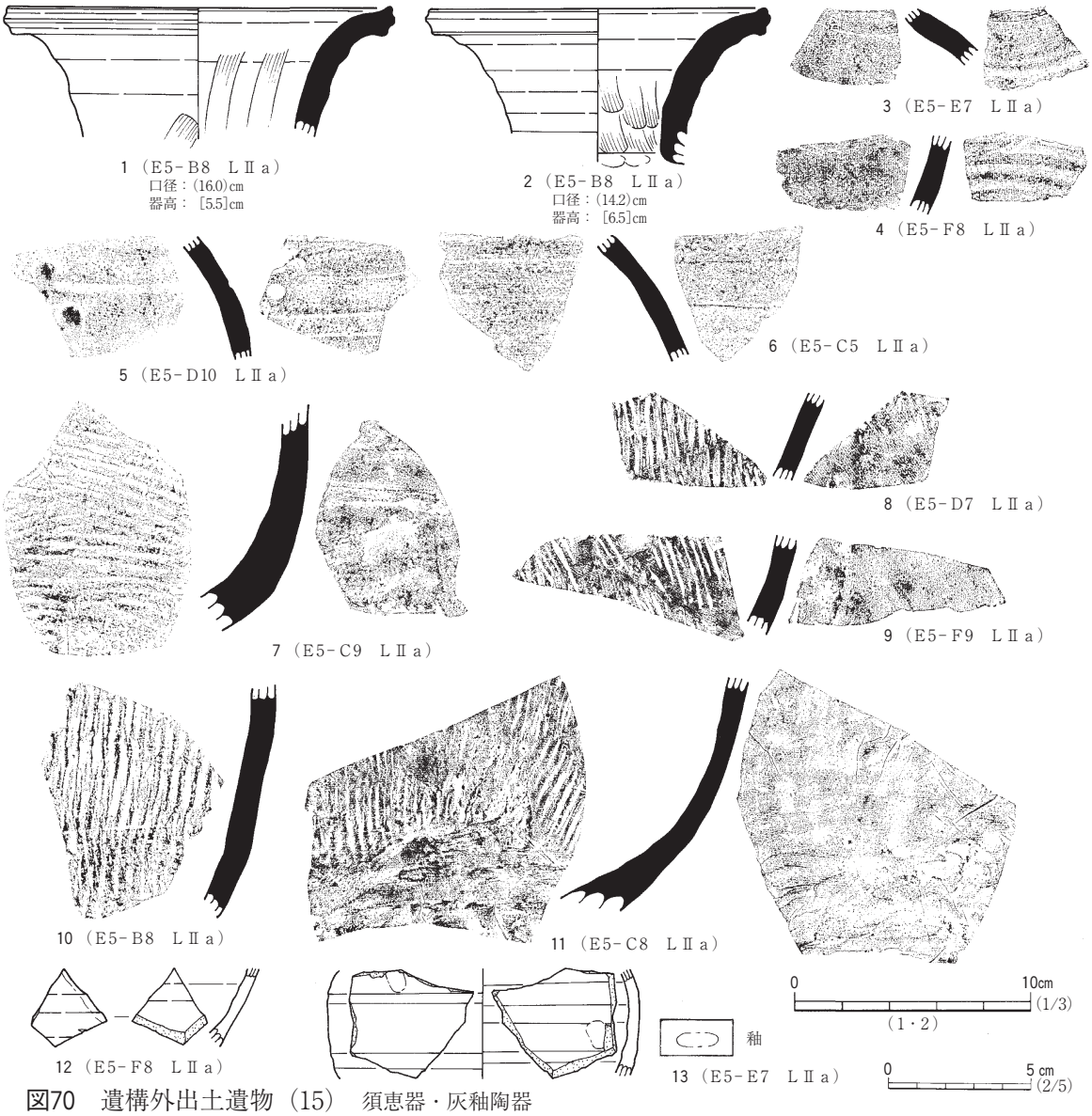


図70　遺構外出土遺物（15）　須恵器・灰釉陶器

口縁端部は受け口状で，面を有する。３～６は非ロクロ成型の甕となる。４は中型の甕で，短く「く」の字に外反する口縁部を有する。３～５は口縁部外面に横方向の布ないし革によるナデが観察される資料となる。６は調整もナデのみと粗雑な造りの甕で，胎土も非常に粗い。７～13は底部のみの資料となる。外面が縦方向のケズリ，内面が横方向のナデが施された個体が多い。

69図14～16は非ロクロ成形の筒形土器である。器表面に成形時のナデや指頭痕を明瞭に残し，破片化している。胎土は砂粒や海綿骨針を含み，赤褐色を呈する。

須　恵　器　70図１～11は須恵器で，１・２は広口瓶の口縁部となる。ともに頸部から下の部分が欠損している。口径は１が16cm，２が14.2cmを測り，ラッパ状に開く頸部から口縁部にいたり，端部はやや受け口状となる。ともに砂粒を多く含む胎土で，灰褐色を呈する。３～６も瓶の胴部片と考えられる破片である。５は自然釉の垂下が観察される。７～11は甕の破片となる。外面は平行線文の叩き，内面は当て具痕ののちにナデを施す個体が多い。また，当て具痕は円形ないし棒状のもの

で，同心円文や格子文などの当て具痕は観察されない。同図12・13は灰釉陶器である。12は椀の体部下半の破片と考えられる資料となる。外面はロクロ成形ののち，横方向のケズリが施され，体部上半に灰釉がツケガケされている。内面はロクロナデのみで，見込みには灰釉が多く付着している。胎土は白色砂粒を少量含み，断面はにぶい灰色を呈する。13は瓶類の胴部片で，器形から小瓶ないし手付瓶類と考えられる。外面に灰釉がツケガケされており，胴部上半は２次焼成時の釉が垂下している。なお，内面は露胎で，胎土は12とほぼ同様である。ともに産地は限定できないが，灰釉がツケガケされていることから，猿投では折戸53号窯様式に比定される資料と考えられる。（管　野）

９　鉄　製　品（図71，写真83）

調査東地区から出土した鉄製品は46点出土した。鉄製品の種類は刀子，鉄鏃が主体を占め，その他に棒状鉄製品，用途不明の鉄製品がある。71図に示した24点はＬⅡａ層の掘り下げ過程において出土したもので，ＬⅡａ層から出土した土師器の年代観から，おおむね平安時代の所産と考えている。また図示していない鉄製品は，小破片で形状が不明なもの。その外にＤ５－Ｊ10グリッド周辺で出土した近世以降の鉄釘や鉄片と判断したものである。鉄製品の出土位置は，平安時代の竪穴住居跡が集中する範囲および鍛冶関連遺構と推定される13号焼土遺構が位置する範囲を中心に，調査東地区のＥ５－Ｄ９・Ｃ９グリッド，Ｅ５－Ｆ６～Ｆ10グリッドの２ヶ所に集中する傾向が見られる。鉄製品の種類と出土位置の分布傾向については，特段の分布傾向は検出できない。

71図１～７は刀子である。１は刀子で使用により刀身は短くなる，刃部は薄く，磨りへっている。る。２は錆化が著しいが刀子と判断した。刀身と柄部の境にはわずかに棟関が見られる。３は切先と柄部の先端を欠損する。刀身と柄部の境に明瞭な棟関が観察できる。刃関は使用により明瞭な段は確認できない。４は切先部を欠損するが，遺存状態は極めて良好である。刀身の幅が厚い特徴があり，棟側と刃側ともに明瞭な関が作られる。柄部は短く刃関に向かって幅広になる。

５～７は刀子の切先の破片である。断面が薄い三角形をなす。８は鏃である。柄部から見た形状は，佩裏側に比べ佩表側がわずかに膨らむ。鏃内径の規模からすれば，身幅がある刀子または小刀規模の刀身が想定される。９～17は鉄鏃である。９はほぼ完形をなす長頸式の鉄鏃である。鏃身は先端部を欠損するが，逆刺が明瞭な柳刃をなす。その断面形は上下面とも丸みをおびた菱形をなす。頸部は長く，断面形が長方形をなす。頸部と茎部の境に明瞭な段を持つ。茎部は長く，断面形は正方形をなす。10は茎部を欠損する長頸式鉄鏃である。鏃身は長三角形をなし逆刺はない。鏃身の断面形は錆化で不明瞭であるが，中央部が丸く膨らむ紡錘形をなす。頸部は細長く，その断面形は長方形である。茎部は欠損するが，頸部との境に明瞭な段を持つ。11は柳刃形をなす鏃身の破片で，逆刺がない。鏃身部の断面形は，上面がやや丸みを持つが，下面は平坦になる特徴がある。鏃身と頸部に明瞭な境はないが，頸部に向かって断面形が徐々に厚く，正方形になる特徴がある。12は鉄鏃の鏃身であろうか。先端部を欠損して鏃身の形状は不明であるが，逆刺は付かない。鏃身の中軸線上に稜が見られないことから，13号焼土遺構で出土したヤリカンナとは異なるものと判断した。

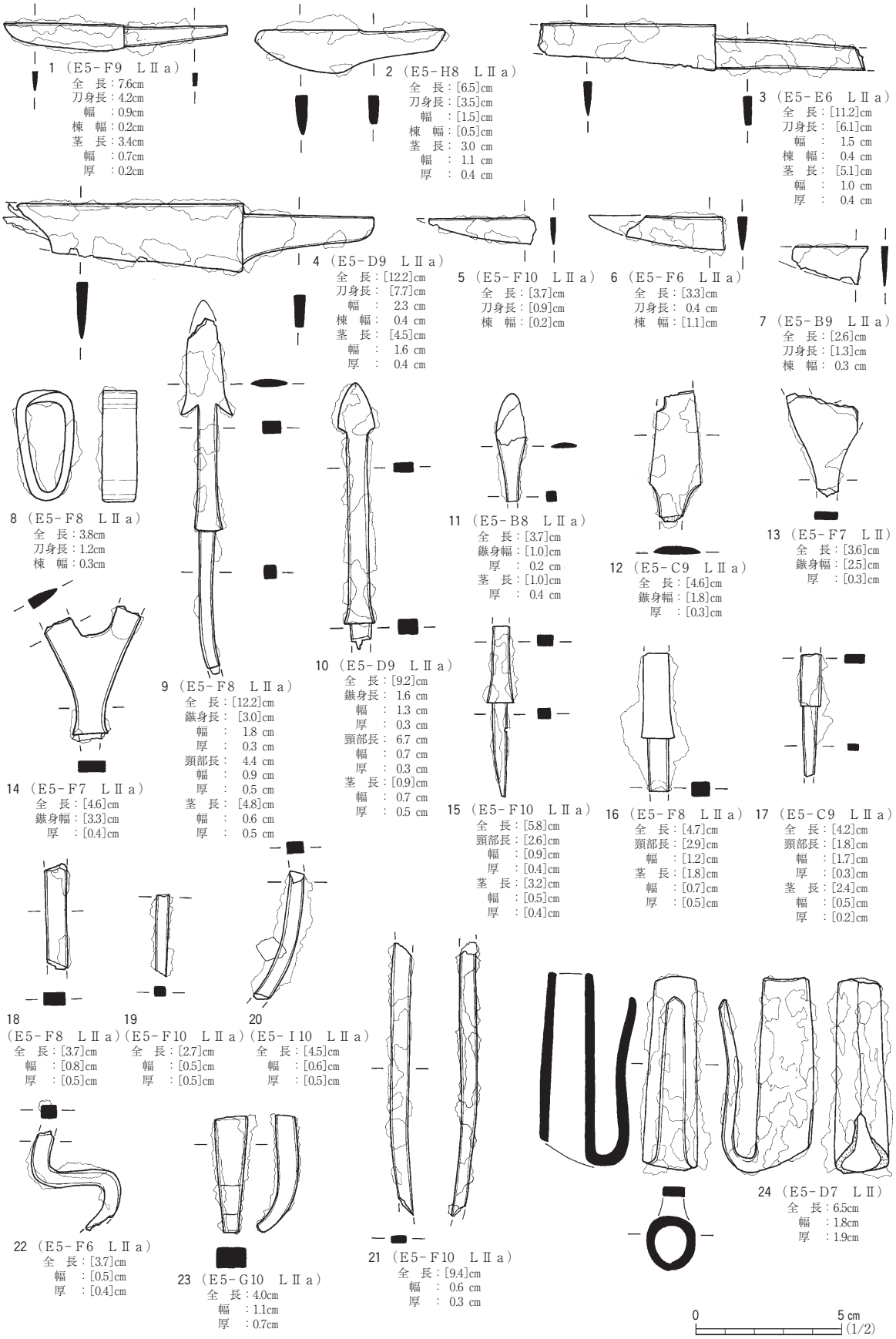


図71　遺構外出土遺物（16）　鉄製品

13・14は鏃身の先端部を欠損するが，雁叉式の鉄鏃であろう。15～17は鉄鏃の頸部と茎部の破片である。頸部と茎部の境に明瞭な段が観察できる。18～22は棒状をなす鉄製品である。欠損して小破片のものが多いことから，用途を特定できない。18～20・22は，断面形が比較的厚みのある正方形または長方形をなす。18・19は鉄鏃の頸部または茎部の可能性がある。21は断面形が長方形をなすが，薄い特徴がある。

23・24は用途不明の鉄製品である。23は下端部か細く，鉤爪状に曲がる。断面形は整った長方形をなす。24は円筒形状をなす鉄製品で，上下端は開口する。下端部は細長く延びる形状をなすが，本遺物が本来的に曲がった状態で使用されたものであるのか，廃棄時に故意に曲げられたか否かは不明である。

鍛冶関連遺物　本遺跡からは鍛冶に関連する遺物として，羽口と鉄滓が少量ながら出土したが，遺物自体が小破片であるため図示していない。本項では，これら鍛冶関連遺物について第３編第３節に掲載した科学分析結果と併せてまとめる。

本遺跡において鍛冶に関連する遺構として，13号焼土遺構が確認されている。さらに19号・20号・23号・39号・44号・48号住居跡から鉄滓が合計９点，59号土坑からは鉄滓類272.2ｇ，羽口２点が出土している。遺構外からは，鉄滓は28点，羽口１点が出土している。これら鉄滓の特徴として，いわゆる椀形滓と称される鍛冶滓と分類されるものが大半を占め，その他にわずかに粒状滓がみられる。本県浜通り地方において特徴的に確認される砂鉄を原材料とする製鉄炉から出土する鉄滓とは明らかに異なる特徴がある。本遺跡では製鉄作業が行われた痕跡はなく，鉄素材を用いた精錬，鉄製品の生産・修繕など鍛冶がおこなわれたと想定している。さらに鍛冶関連遺物の総量としても極めて少量であることからすれば，生産規模は極めて小規模なものと推定される。

10　平安時代の石製品（図72，写真85）

調査東地区の遺構外から出土した石製品として，石製帯飾り（銙帯具）２点，砥石１点がある。72図１は方形をなす形状で，いわゆる「巡方」と称される銙帯具である。Ｅ５－Ｇ９グリッドのＬⅡａ層の掘り下げ過程において出土した。石材は古環境研究所に委託した石質鑑定によれば，サヌカイトとする結果を得ている。形状はわずかに横幅が長い長方形である。その規模は長辺が3.6㎝，短辺が3.4㎝，厚さが0.6㎝を測る。銙帯具の断面形は台形をなし，上面の規模は長辺が3.3㎝，短辺が3.1㎝をはかる。裏面には２個１組の「紐とじ孔」が四隅に設けられている。「紐とじ孔」の配置は，右上がわずかにずれているが，その他は上下の辺に沿って平行するように配されている。「紐とじ孔」の形状は直径0.3～0.5㎝を測り，その上端部が大きく開き，下端部に向かって狭くなる。断面形が漏斗状をなす特徴がある。「紐とじ孔」の製作方法について，２と比べて穿孔方法に違いが見られる。はじめに垂直方向に浅く穿孔し，その内部から互いに斜めに穿孔し，Ｖ字状の貫通孔を空けたものと判断した。また表裏面と側面は丁寧に研磨されているが，裏面には素材石材から板状石材を割り取った際に生じる痕跡が研磨されずに残る。

２も同様に，長方形をなす形状で「巡方」と称される銙帯具である。下端部に長方形の「くぐり孔」が設けられる。ＬⅡａ層の掘り下げ過程において，Ｅ５－Ｇ６グリッドから出土した。石材は透閃石岩である。規模は長辺が3.9cm，短辺が3.5cm，厚さが0.75cmを測り，１と比べて僅かに大きい。銙帯具の断面形は台形をなし，上面の形状がわずかに小さく，その計測値は長辺が3.7cm，短辺が3.3cmである。「くぐり孔」は長方形をなし，長さが2.3cm，幅が0.4cmを測る。「くぐり孔」の四隅には直径0.1cm程の穿孔痕が観察できる。銙帯具の表面から「くぐり孔」の四隅に錐状工具を用いて穿孔し，その孔を基に糸鋸状工具によって，長辺側から短辺側の順に切り取る製作工程が復元できる。裏面の四隅には，２個１組の「紐とじ孔」が設けられている。

「紐とじ孔」は直径0.2cm程で１に比べ小さく，裏面に対して互いに斜めに穿孔され，Ｖ字状の貫通孔となる。下端部の１箇所は「紐とじ孔」が３箇所見られる。いずれの孔内部にも複数回におよぶ穿孔痕が見られないことから，製作時に破損したために位置をずらせて再度穿孔したものと考えている。「紐とじ孔」の配置は，左側が対角線上になるように斜めに配置される。右側の紐とじ孔は各側辺にそって，右上は右側辺に平行する縦方向，右下は下辺にそって横方向に配置される。表裏面と側面ともに丁寧に研磨され，「くぐり孔」と「紐とじ孔」の上端部が整っていることから，銙帯具の最終工程の仕上げとして研磨されていると判断した。

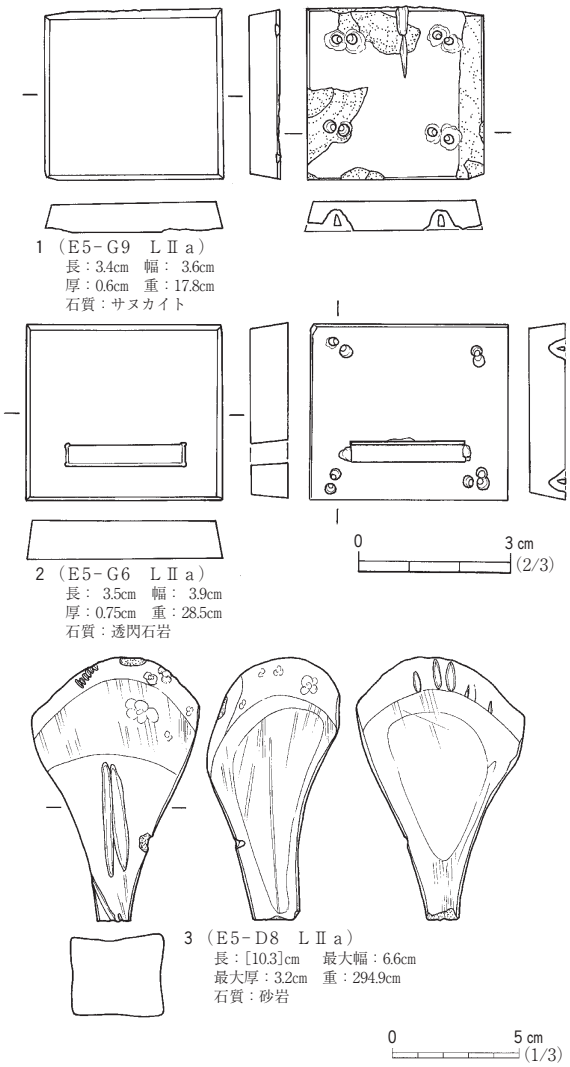


図72　遺構外出土遺物（17）　石製品

３はＤ５－Ｄ９グリッドから出土した砥石である。石材は砂岩である。表裏面と左右側辺部は，かなり使い込まれたものであろうか，その表面は大きく湾曲して小さく磨り減っている。使用面の断面形は方形をなす。側面の一部に浅い筋状の研磨痕が数条見られる。　（福　田）

荻平遺跡　作業状況スナップ写真

第３章　西地区の遺構と遺物

第１節　遺構分布と基本土層

１　調査の概要

平成20年度，西地区は，7,000㎡の面積を対象に４月８日～10月１日の期間で本発掘調査を実施した。西地区の南西縁に幅約2.5mの生活道路が現存していたため，同道路部700㎡を除く6,300㎡の範囲について調査を先行し，道路の付け替えが終了した８月18日，残る700㎡についても調査を開始した。同700㎡の範囲は，道路構築時に一部地山にまで及ぶ掘削を受けていたが，著しいものではなく30・44号住居跡等の遺構を確認している。

西地区の位置は，大グリッドＣ４地区を中心とした箇所である。Ｃ４地区の基点は，公共座標Ⅸ系Ｘ：198,600，Ｙ：84,400である。西地区の地形は，丘陵の南西縁を取り巻くように南東方向へ下る斜度10°前後の傾斜地である。標高は最上部の北西端で約293m，最下部の南東端で約270mを示し，その高低差は約23mである。西地区の北側には標高約440mの丘陵がせまり，また，南西側は宇多川に面した段丘崖となっている。西地区では砂礫の堆積・倒木痕が多数認められ，土砂崩れ等の影響が比較的著しい。標高273m以下の南東部では平坦地形となるが，降水の集まる場所であり湿地性の土壌となっている。

２　遺構の分布（図73～75，写真１－86～88）

今回，西地区で検出した遺構は，竪穴住居跡18軒・焼土遺構10基・土坑20基である。遺構の分布状況を見ると大グリッドＣ４地区の北西部に集中しており，各遺構は宇多川を見下ろす段丘崖の上端部に立地している。遺構集中地点は，標高278～287mの範囲内に収まる。立地面の斜度は比較的急であり，集落において広場的な空間を持つことが難しい地形である。西地区の北西部や平坦地形となる南東部では，遺構を確認することができなかった。この傾向は遺物の出土状況と一致し，遺構が発見できなかった地点では遺物量も少ない。

18軒の竪穴住居跡はすべて縄文時代のもので，その内訳は早期末葉～前期初頭が13軒（ＳＩ12・13・15・21～25・28・29・43・45・46），前期後葉が５軒（ＳＩ14・16・27・30・44）である。竪穴住居跡の時期から西地区には概ね２時期の縄文集落が存在したと推測されるが，遺構集中地点において縄文時代前期前半の遺物も少量出土している。西地区における竪穴住居跡の平面形は，長方形または楕円形が基本である。早期末葉～前期初頭に位置付けられる竪穴住居跡は全体的に遺存状態が悪いが，15・22～24号住居跡は形態・位置関係等から同時期に共存していた可能性がある。

前期後葉の14・16号住居跡は，立地する斜面の等高線に対して住居跡の長軸方向を直交させることが共通している。16号住居跡は，長軸方向が10.8mの大型竪穴住居跡で，その長軸上に少なくとも３ヶ所の地床炉が認められた。16号住居跡以外に，同一住居跡内から複数の炉跡が確認できたも

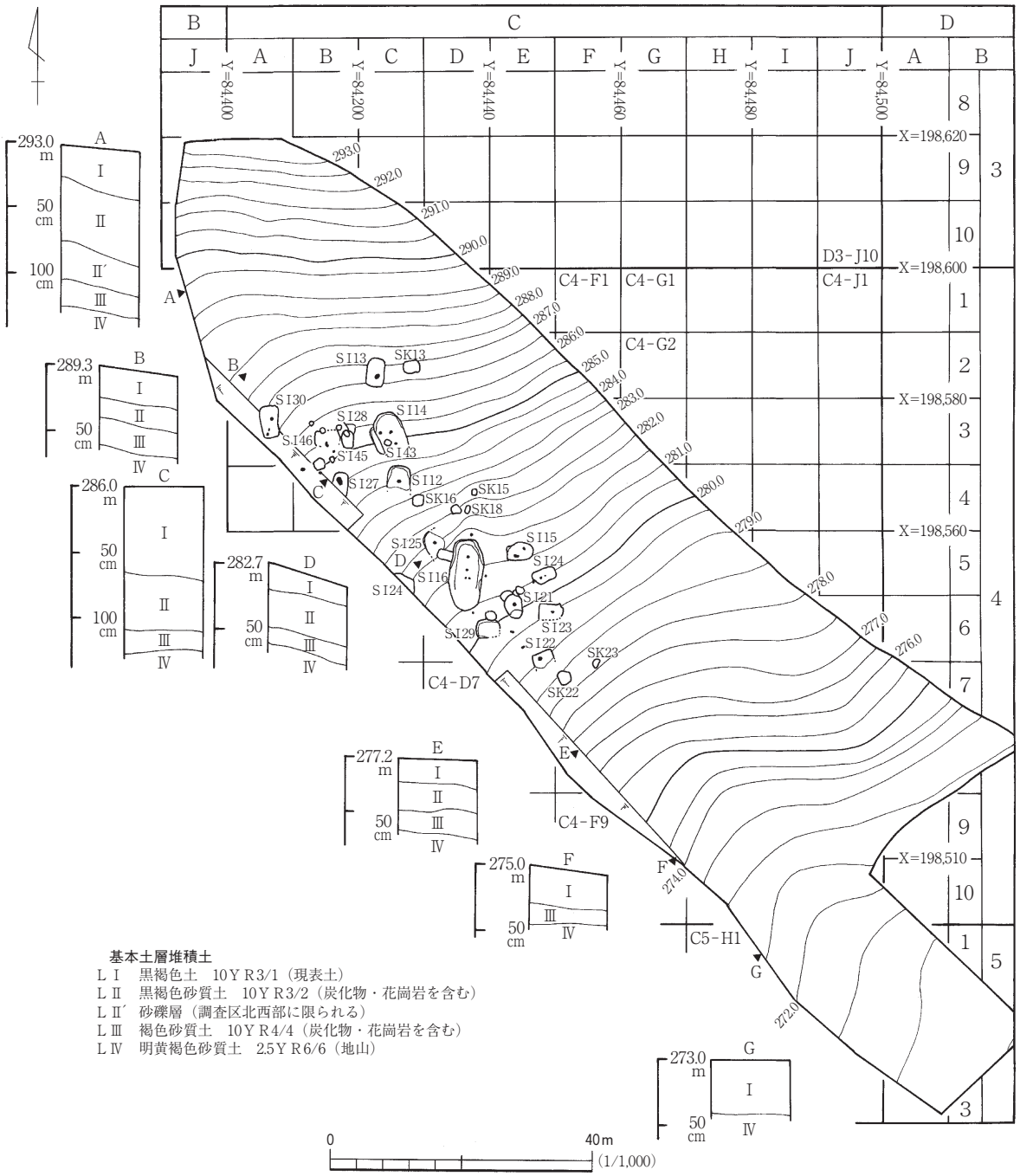


図73　グリッド配置図・基本土層図

のには14・30号住居跡があり，いずれも10m未満の竪穴住居跡である。

検出土坑は平面形が円形のものが多く，落し穴のような細長い土坑は確認できなかった。円形土坑は出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭頃のものが大半と考えられるが，Ｃ４－Ｂ３グリッドとＣ４－Ｅ５・６グリッドに比較的集中している。円形土坑の堆積土は自然堆積の様相を示しているものが多く，貯蔵穴等の機能が考えられる。焼土遺構の分布は，円形土坑の集中地点と概ね重なる傾向が見て取れる。焼土遺構の機能は屋外炉等の可能性が考えられるが，地山面で検出したＣ４－Ｂ３グリッドの７・８号焼土遺構などは，住居跡内の炉であった可能性も考えられる。（香　川）

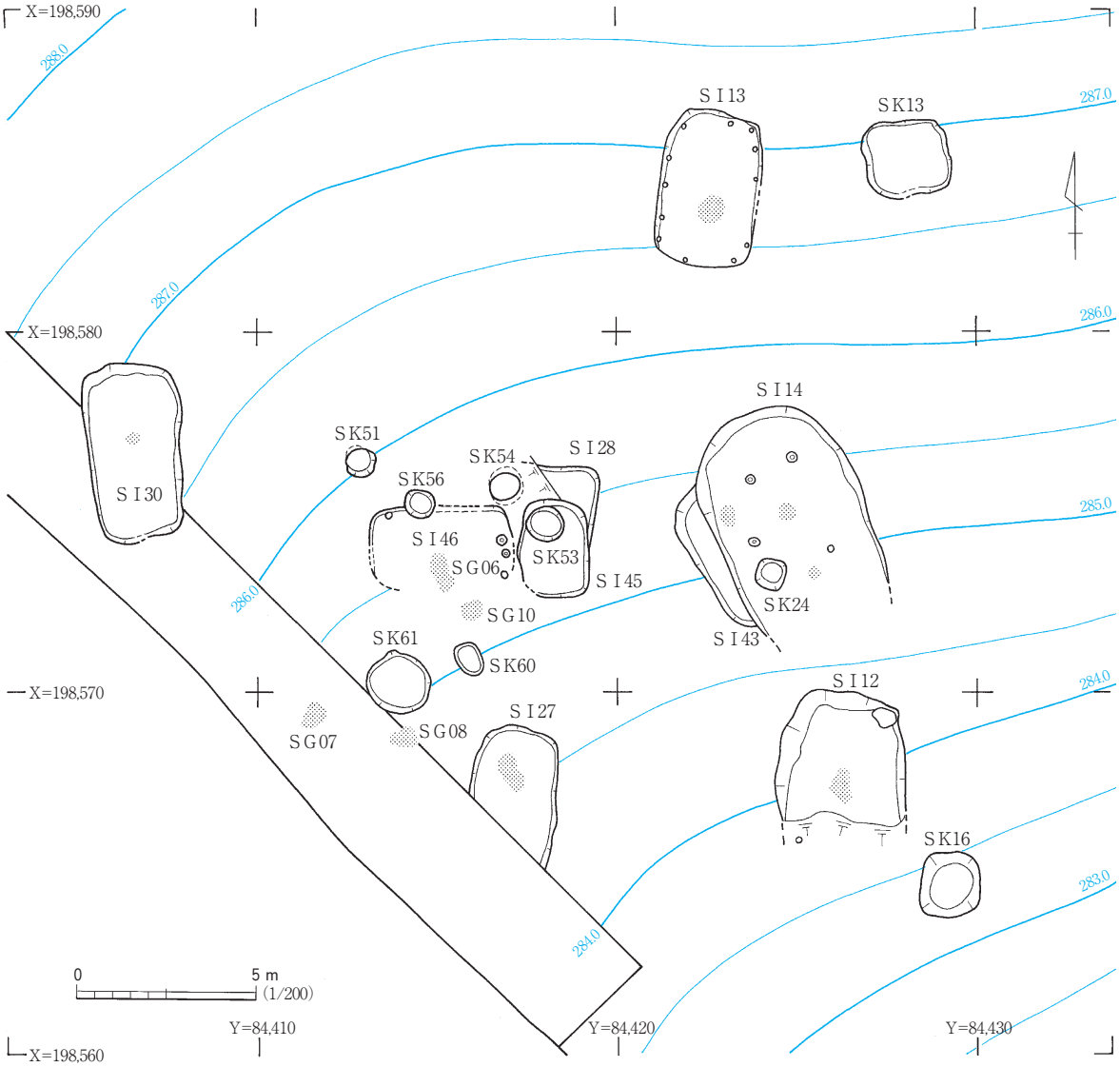


図74　遺構配置図（１）

３　基本土層（図73，写真１－89）

西地区は，北側に急峻な丘陵斜面がせまり，また花崗岩地帯であることから降雨等による浸食・土砂流入を受けやすい立地と考えられる。西地区の基本土層は，ＬＩ～Ⅳの４層に分けた。ＬＩは現表土，ＬⅣは地山とした。遺物は主にＬⅡ・Ⅲで採取された。以下に各層の概要を記す。

ＬＩ：現表土。西地区の全体を覆う黒ボク土である。西地区の斜面部は山林または桑畑などに利用されていたが，大規模な土地改変は受けていない。

ＬⅡ：西地区の北西端から標高約275mの範囲で確認した。層厚は北西部で50cm前後，南東部で15cm前後である。なお，標高275m以下では後世の削平によって欠層していた。ＬⅡ内には真砂・花崗岩を含む。遺物は，主にＬⅡ下位から出土し，縄文時代前期後半の土器が主体である。

ＬⅡ′：ＬⅡ・Ⅲの間に堆積する砂礫層であるが，同層の分布が西地区北西部の狭い範囲に限られためＬⅡ′とした。

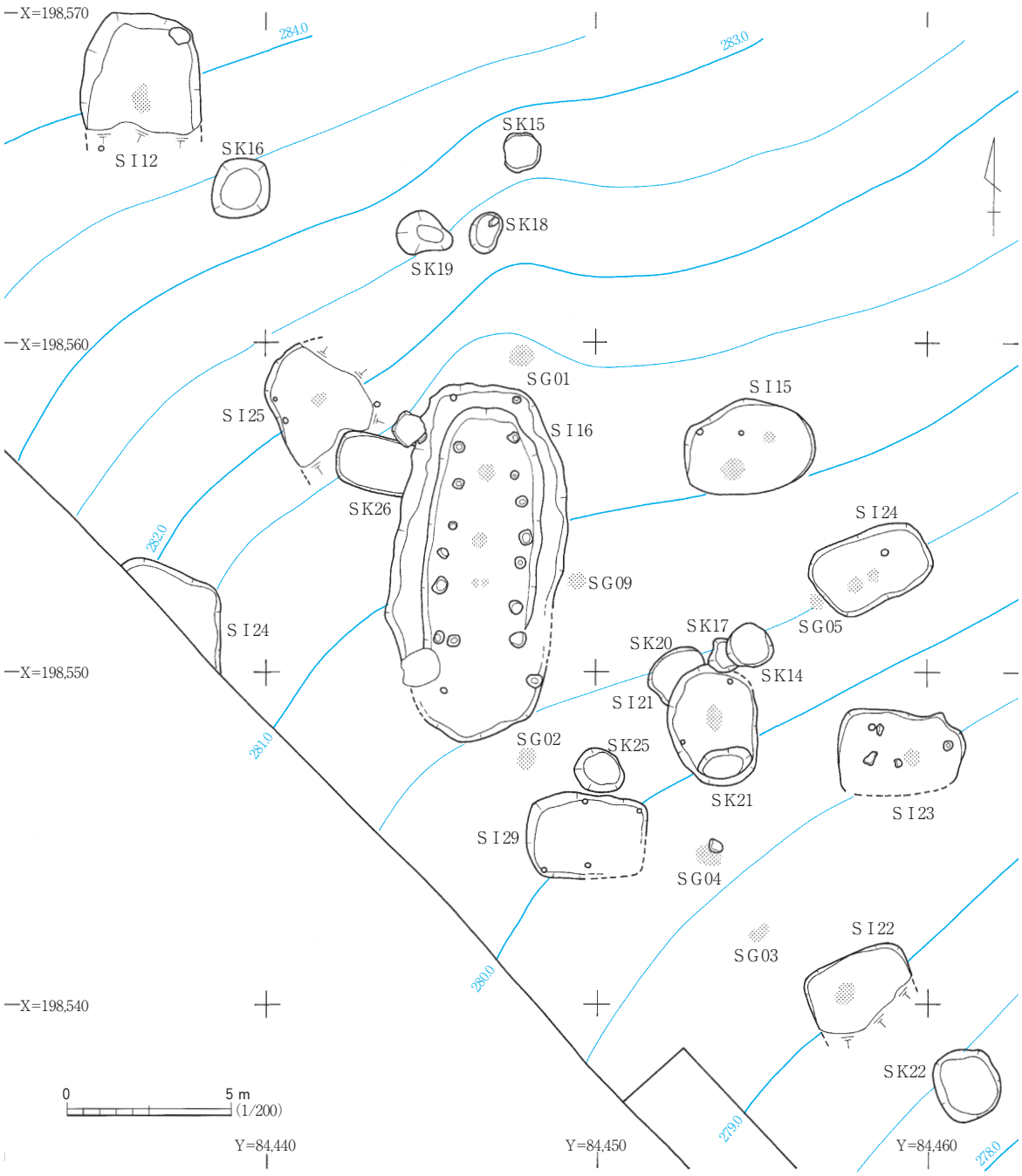


図75　遺構配置図（２）

ＬⅢ：西地区の北西端から標高約272mの範囲で確認した。層厚は，遺存範囲のほぼ全域で20cm前後である。なお，標高272m以下では，後世の削平によって欠層していた。土色は褐色で，地山の漸移層的な色調を呈する。ＬⅢ内には真砂・花崗岩を含み，その含有量は北西部側で特に多い。遺物は，主にＬⅢ上位から出土し，縄文時代早期末葉頃の土器が主体である。縄文時代前期後半の遺構は，ＬⅢ上面で確認したものが多い。

ＬⅣ：砂と粘質土が混じる明黄色土で，所謂真砂土である。花崗岩を含む。ＬⅣを地山とし，西地区における遺構の最終確認面とした。　（香　川）

第２節　竪穴住居跡

西地区では，縄文時代の竪穴住居跡を計18軒確認した。竪穴住居跡の時期は，大きく早期末葉～初頭と前期後半に分けることができる。各住居跡は，時期に関係なく西地区中央の宇多川寄りに集中しており，その立地は斜度10°前後の斜面地である。早期末葉～初頭の住居跡は規模が比較的小型であり，基本的に１基の地床炉が伴う。しかし，前期後半では，長軸方向が10mを超える比較的大型の16号住居跡が登場する。また，14・16・30号住居跡は２基以上の地床炉を伴っている。

12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構（図76，写真１－90・91）

本遺構は，Ｃ４－Ｃ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，その標高は284m前後である。検出当初，遺構範囲が明瞭でなかったため，小トレンチを設定して壁・床面の存在を確認した後，

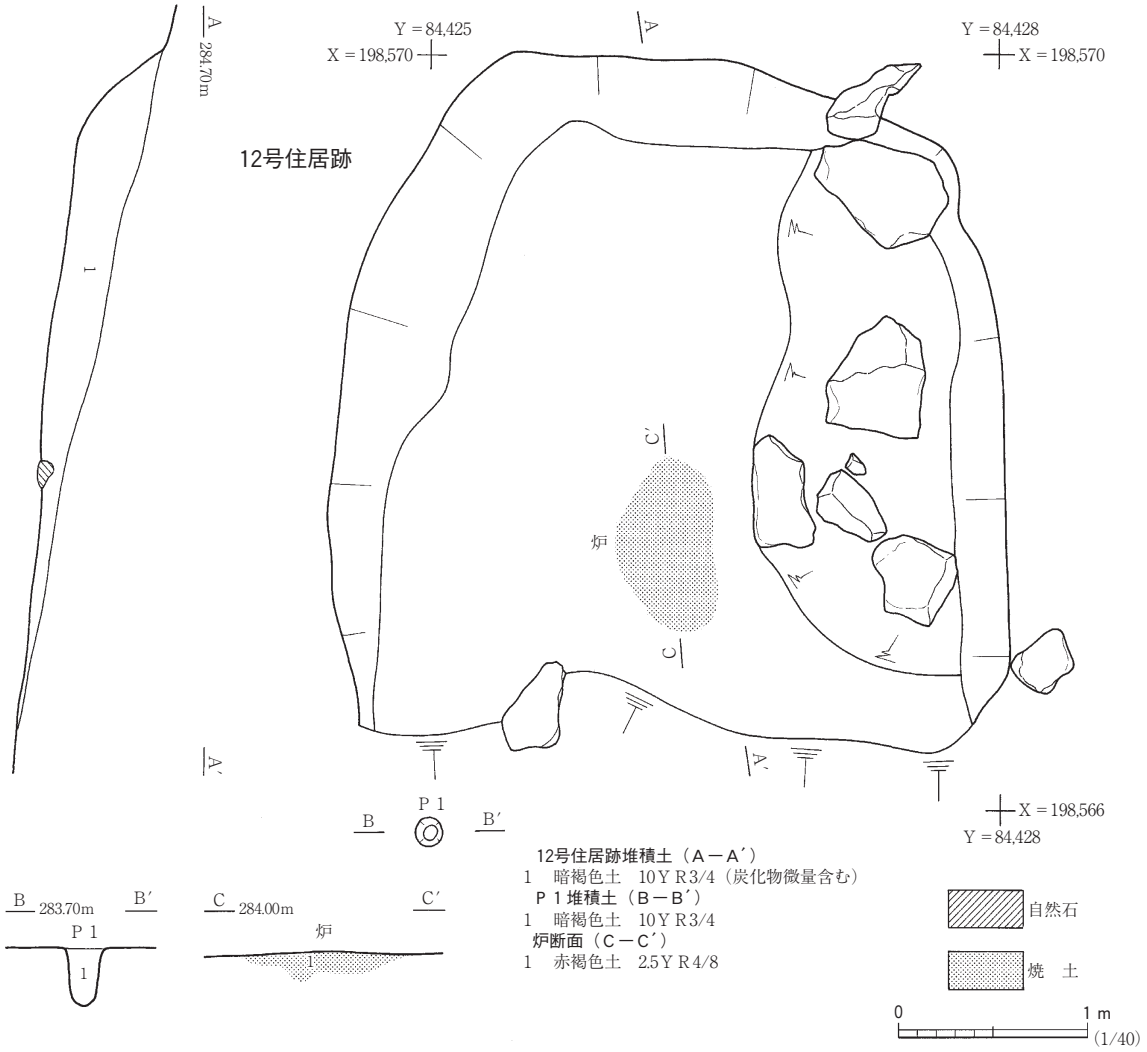


図76　12号住居跡

本格的な精査に着手した。住居跡南部は，遺構検出段階ですでに失われていた。住居跡東部の床面は流入した40～70㎝の花崗岩によって破壊されていたが，おそらく土砂崩れ等の影響と考えられ，住居跡南部も同様に破壊されたものと推測される。本遺構と重複する他の遺構は認められなかった。本遺構の北西側約３ｍの地点には，ほぼ同時期の14号住居跡がある。また，南東部1.5ｍの地点には16号土坑がある。

住居跡内堆積土は，暗褐色土ℓ１の単層とした。ℓ１は微量の炭化物を均一に含む。ℓ１の土質は基本土層ＬⅢに類似するが，土色がＬⅢよりもわずかに暗い。ℓ１の土層観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。おそらく，本遺構は自然に埋没したものと考えられる。また，住居跡東部もℓ１で覆われていたことから，花崗岩の浸入後に本遺構が埋没したものと推測される。

本遺構の平面形は，住居跡南部が消失しているため不明であるが，住居跡北部の形状等から南北に長い楕円形の竪穴住居跡であった可能性がある。住居跡北辺の東西幅2.6ｍ，炉の中心を通過する地点の東西幅3.5ｍを測る。南北方向の遺存長は3.4ｍである。南北方向の軸線はＮ５°Ｅで，真北に近い。南北方向の軸線は，立地斜面の等高線に対してほぼ直交している。

床面はＬⅢ中～下面を直接利用しており，掘形の深さはＬⅣ上面まで達していない。比較的急な立地斜面に対し，床面は約５°の斜度で構築されている。そのため北壁は遺存状態が良好で，遺構検出面から床面までの深さは最大で37㎝を測る。壁は，床面から曲線的で緩やかに立ち上がる。床面から少量だが炭化物の散布と踏み締まりが認められ，また地床炉と考えられる90㎝×50㎝の焼土面を検出した。この焼土面の断面観察では，赤褐色の熱変が最深12㎝まで浸透していた。本遺構の内外から柱穴と推測される小穴は確認できなかった。住居跡南側で検出したＰ１は，上端の直径20㎝・深さ30㎝を測るが，今回確認できた唯一の小穴である。なお，柱穴の有無を確認するために床面を徐々に掘り下げ，ＬⅣ上面を最終確認面とした。

遺　　物（図77，写真１－124・125）

本遺構から計341点の縄文土器が出土したが，すべて小破片で遺存状態が悪く，器形が復元できたものはない。図77－１～９は，いずれも内外面に縄文・条痕文が施され，胎土に繊維を含む土器で，縄文時代早期末葉に位置付けられる土器である。外面の地文は単節縄文が主体であるが，９のような撚糸文もある。５は口縁部外面にＲ撚りの縄圧痕文が認められる。図77－10は薄い剥片を利用した凹鏃で，比較的簡単に刃部調整を施して石鏃としている。同図－11は床面から出土した磨製石器で，形状は定形的ではないが刃部調整から石斧と考えられる。

ま　と　め

12号住居跡は，南部を消失しておりその全容は不明であるが，遺存部から南北に長い楕円形の竪穴住居跡と推測される。地床炉の断面観察から，住居跡の使用期間は比較的長期であった可能性がある。住居跡の内外から柱穴を確認することはできなかったため，本遺構の上屋構造は不明である。なお，住居跡東部には花崗岩が流入しており，本遺構は土砂崩れによって廃絶した可能性がある。12号住居跡の時期は，出土土器から縄文時代早期末葉と推測される。（香　川）

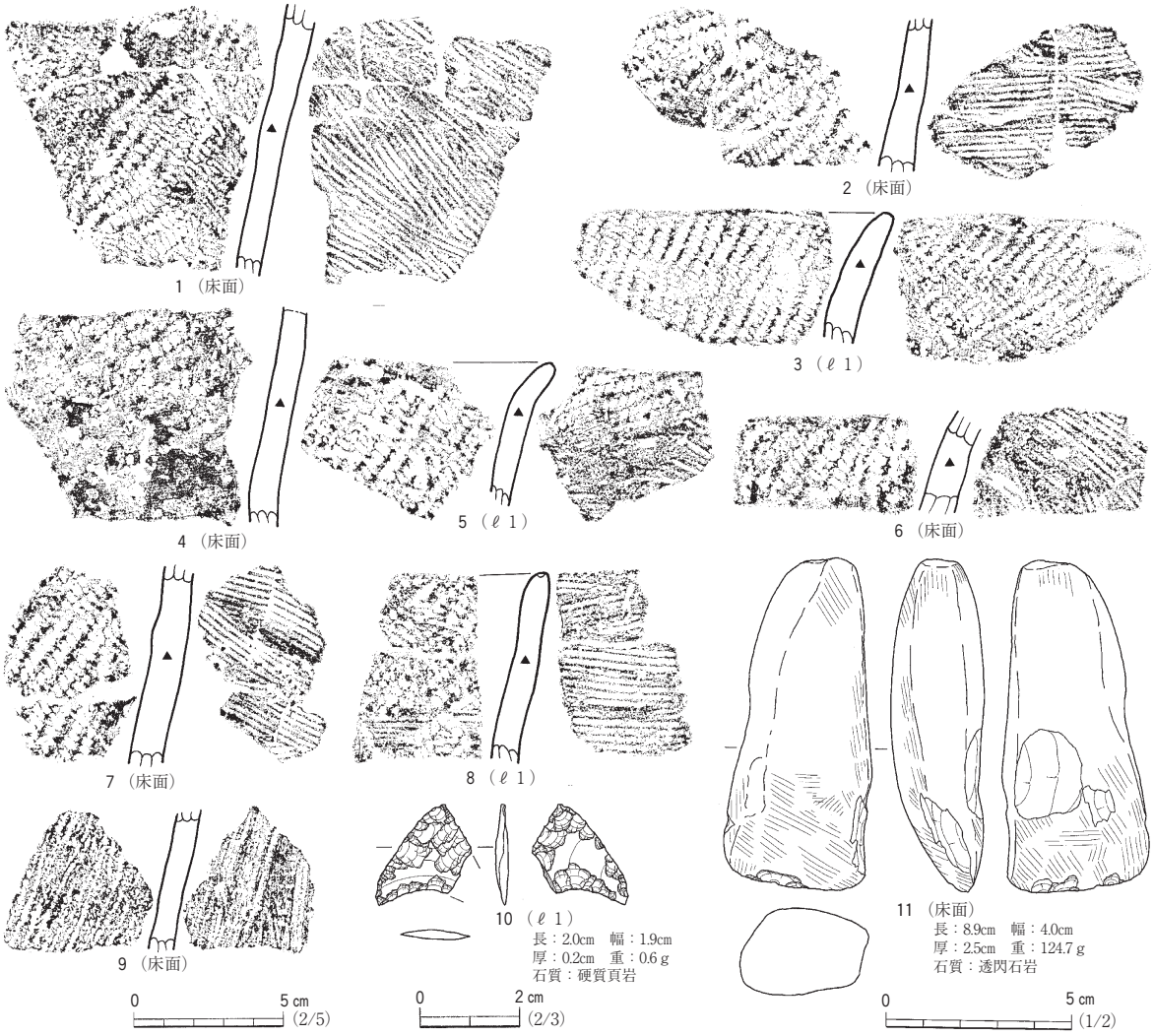


図77　12号住居跡出土遺物

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（図78，写真１－92・93）

本遺構は，Ｃ４－Ｃ２グリッドに位置し，西地区で最も北側にある竪穴住居跡である。遺構検出面はＬⅢ上面で，その標高は287ｍ前後である。検出状況は，住居跡北半部が倒木痕による攪乱を受けていたものの，南北に長い長方形の本遺構を比較的明瞭に確認することができた。本遺構と重複する他の遺構は認められなかった。本遺構の東側約３ｍの地点には，ほぼ同時期の13号土坑がある。本遺構に最も近いほぼ同時期の竪穴住居跡は，南側約６ｍの地点に43号住居跡がある。

住居跡内堆積土は，にぶい黄褐色砂質土ℓ１の単層とした。ℓ１の土質はＬⅢに類似し，真砂・花崗岩をまばらに含んでいる。ℓ１下位で少量の炭化物が認められた。ℓ１の土層観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。おそらく，本遺構は自然に埋没したものと考えられる。

本遺構の平面形は，およそ隅丸の長方形を呈するが，北壁の長さが南壁よりも30㎝短い。東壁と西壁の長さはほぼ等しい。北壁と南壁の中心を結んだ長軸方向はＮ６°Ｅで，真北に近い。長軸方向

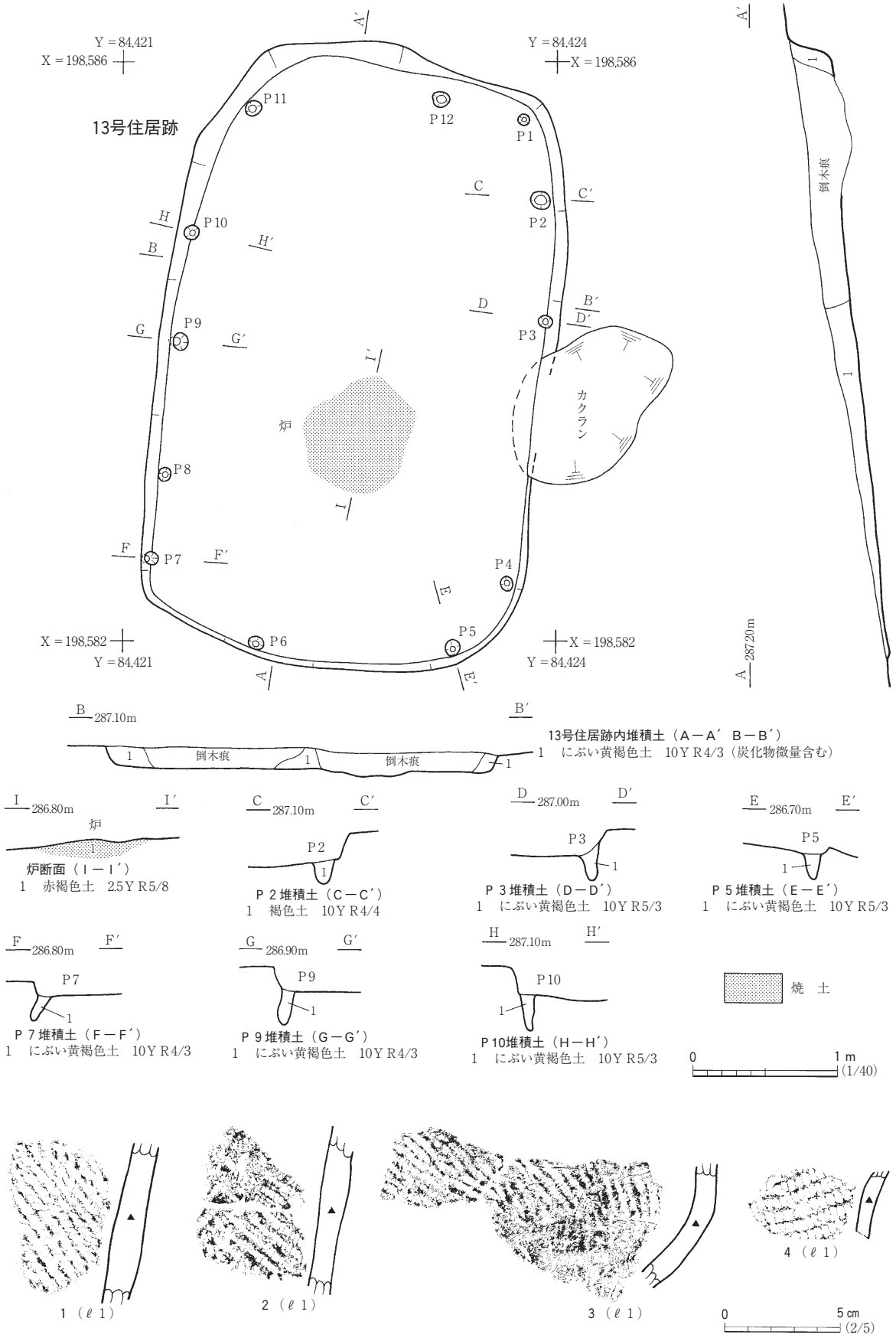


図78　13号住居跡・出土遺物

は，立地斜面の等高線に対してほぼ直交している。本遺構の規模は，長軸幅4.3m，住居跡の中央を東西に通過する短軸幅が2.7mである。長軸幅/短軸幅の比率は1.59である。壁の遺存高は，最深の北壁で27cmを測る。壁は，約60°の角度で立ち上がる。なお，東壁の中央が倒木痕によって破壊されていた。

床面はＬⅣ面を直接利用しており，掘形内から整地層は認められなかった。床面の北部は倒木痕の攪乱を受けていたが，破壊の程度は軽微である。床面は南方向へ緩やかに傾斜しており，その斜度は約６°である。床面中央からやや南寄りの地点で，地床炉と考えられる80cm×70cmの焼土面を検出した。この焼土面の断面を観察すると，赤褐色の熱変が最深11cmまで浸透していた。焼土面及び周辺には，１～３cmの炭化物が少量散布していた。

床面の壁沿いからＰ１～12の小穴を検出した。この計12個の小穴は，位置関係等から柱穴の可能性が高いと考えられる。各小穴の規模は，上端の直径が９～13cm，深さが20cm前後である。小穴間の距離は60～90cmで，一定ではない。各小穴の掘形は，概ね縦方向に掘り込まれているが，Ｐ７・９のように内側に傾いているものもある。

遺　　物（図78，写真１－125）

本遺構から計32点の縄文土器片が出土し，その内の４点を図示した。図78－１～４は，いずれも胎土に繊維を含んでいる。地文は，１・３・４がＬＲ縄文，２がＲＬ縄文である。３は底部付近の破片で，その形状から丸底であったと考えられる。

ま　と　め

13号住居跡は，平面形が長方形を呈し，壁柱穴・地床炉を持つ竪穴住居跡である。壁柱穴の掘形断面から，柱は直立気味に据えられていた可能性が高いと考えられる。なお，西地区において壁柱穴が確認された住居跡は本遺構のみである。13号住居跡の時期は，出土遺物等から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。（香　川）

14号住居跡　ＳＩ14

遺　　構（図79，写真１－94・95）

本遺構は，Ｃ４－Ｃ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，その標高は285m前後である。検出状況は，ＬⅢ面に対し本遺構が楕円形の黒褐色面で確認できた。しかし，住居跡の南壁は確認できず，攪乱等によって消失した可能性もある。本遺構は43号住居跡・24号土坑と重複関係にあり，本遺構が最も新しい。本遺構の南西側約７mの地点には，ほぼ同時期の27号住居跡がある。

住居跡内堆積土は３層に分けた。ℓ１～３はレンズ状堆積を呈する。ℓ１・２はいずれも黒褐色土であるが，色調はℓ１の方が黒味が強い。ℓ１は真砂・花崗岩を含み，基本土層ＬⅡの土質に類似している。ℓ２は床面のほぼ全域を覆う堆積土で，２cm前後の炭化物が少量含まれている。ℓ３の分布は壁際に限られており，おそらく壁崩落等による流入土と考えられる。ℓ１～３の各層は土層観察から自然堆積土の可能性が高く，本遺構は廃絶後，自然に埋没したものと推測される。

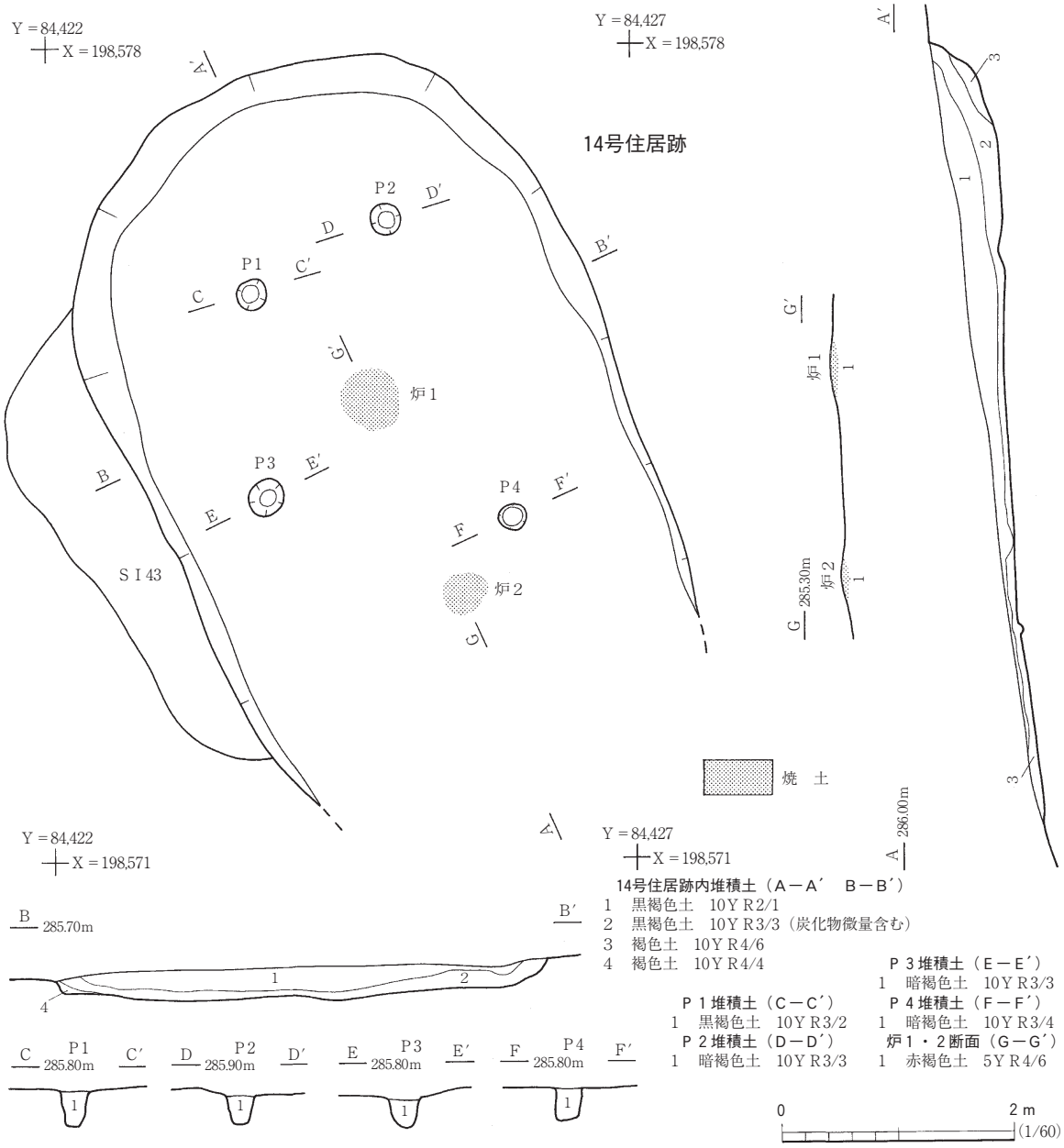


図79　14号住居跡

本遺構の平面形は，住居跡南部の遺存状態が悪いため不明であるが，北半部の形状を見る限りでは南北に長い小判形の可能性がある。長軸方向はＮ24°Ｗで，立地斜面の等高線に対してほぼ直交している。本遺構の規模は，長軸幅が遺存値で6.7ｍ，短軸幅が4.2ｍである。壁の遺存高は，最深の北壁で45㎝を測る。壁は，床面から曲線的で緩やかに立ち上がる。南壁は確認できなかったが，その有無は不明である。床面は，北半部がＬⅣ面，南半部がＬⅢ面を直接利用している。床面の形状は平坦ではなく，短軸方向の断面を見ると舟底状を呈している。また，床面は南東方向へ緩やかに傾斜しており，その斜度は約３°である。

床面上から２基の焼土面を確認した。この焼土面は住居跡の長軸上に位置することから，同時期に使用された地床炉の可能性が高く，北部の焼土面を炉１，南部の焼土面を炉２とした。炉１はＬ

Ⅳ面上にあり，その規模は直径約50cmである。炉２はＬⅢ面上にあり，その規模は直径約35cmである。北壁中央の下端から炉１の中心までの距離は2.8mである。炉１～２の中心距離は1.9mである。炉１・２の断面を観察すると，７cm前後の深さまで赤褐色に熱変していた。

柱穴の確認作業はすべて断割り方式で行い，断面観察の結果Ｐ１～４の小穴を確認した。Ｐ１～４の規模は，上端の直径が22cm前後，深さが25～30cmとほぼ等しい。また，堆積土も土質・土色が類似している。しかし，Ｐ１～４の位置を見ると，Ｐ２・４は概ね長軸方向と一致しているが，Ｐ１・３に対しては整然性に欠ける。そのため，Ｐ１～４の性格については不明である。

遺　　物（図80，写真１－126・127）

本遺構から計412点の縄文土器が出土したが，そのほとんどが細片である。図80－１～７の地文はすべてＲＬ縄文である。１は，胴部上位から口縁部がやや窄まる器形と推測され，口唇部に薄い粘土帯が貼付されている。２・３は，口縁部を鋸歯状に肥厚させている。４は口縁部に粘土紐による縦位方向の貼付文が認められ，１本の粘土紐が口唇部でＵ字状に折り返されている。５・６，は

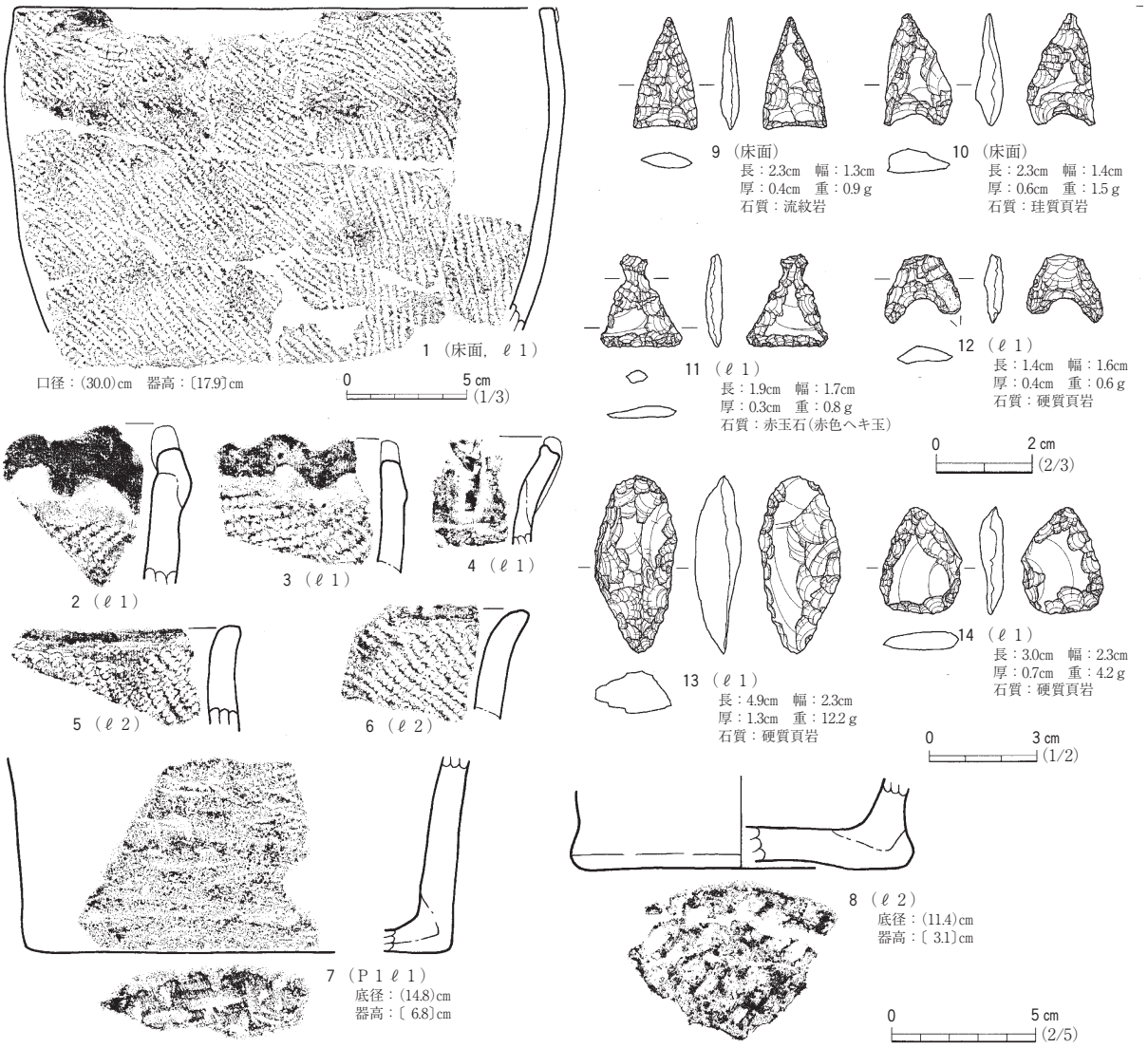


図80　14号住居跡出土遺物

口縁部が短く外反し，１の器形と異なる。７・８は底部外面に網代痕が認められる。図80－９～12は，長さ３㎝未満の小型の石器である。９・10・12はいずれも凹基の石鏃であるが，10の抉りは非常に浅く平基鏃に近い。11は先端につまみ状の突起が付き，その形状は石匙に近い。図80－13は箆状に，同図14は三角状に成形された石器で，その用途は掻器などの可能性が推測される。

ま　と　め

14号住居跡は，南壁・柱穴等を確認することができなかったため住居跡の平面形・規模は不明であるが，長軸幅は遺存値で6.7ｍを測り，比較的大型の竪穴住居跡である。床面から，長軸上にのる２基の地床炉を確認した。床面は東西方向の断面が舟底状を呈しており，平坦に造られていない。住居跡の内外から柱穴と推測される小穴は確認できなかったため，上屋構造は不明である。12号住居跡の時期は，出土土器から縄文時代前期後葉と推測される。（香　川）

15号住居跡　ＳＩ15

遺　　構（図81，写真１－96・97）

本住居跡は，西地区中央部のＣ４－Ｅ５グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，黄褐色土面に黒褐色のプランとして確認した。住居跡南部は，遺構検出段階ですでに削平を受けていた。他の遺構との重複関係はなかった。本住居跡の東側約3.5ｍには，16号住居跡がある。本住居跡の南側には３ｍ前後の間隔で24・23・22号住居跡が並ぶように位置しており，また，各住居跡の規模・長軸方向が類似している。

本住居跡内の堆積土は３層に分けた。堆積土の大部分がℓ１であり，ℓ２は地床炉と考えられる焼土面の直上に，ℓ３は北壁隅に堆積するのみである。ℓ１～３は人為堆積の痕跡が見られず，いずれの覆土も自然堆積によるものと判断した。

本住居跡の平面形は3.9ｍ×2.9ｍの楕円形であり，遺構検出面から床面までは最も深い部分で14㎝を測る。住居の長軸方向はＮ81°Ｅであり、等高線にほぼ平行する。残存する東・西・北壁は比較的緩やかに立ち上がるが，南壁は削平のため有無や形状は不明である。床面は北から南に下り，斜度は４°である。

床面から焼土面を２基・小穴Ｐ１・２を検出した。中央部南西寄りの焼土面は直径70㎝・熱変の厚さ10㎝を測り，その規模から地床炉の可能性がある。北東寄りに位置する焼土面は直径30㎝であるが，同様に炉として火が焚かれた可能性がある。Ｐ１は住居跡中央からやや北側に位置しており，その規模は上端の直径12㎝・深さ50㎝である。Ｐ２は北西端の壁際に位置し，その規模は上端の直径18㎝・深さ20㎝である。Ｐ１・２の機能については確認できなかった。

遺　　物（図81，写真１－128）

本住居跡から出土した遺物を図81－１～５に示した。１～４の縄文土器はいずれも胎土中に繊維を含む。１は口縁部破片で，わずかに外反する器形である。１の口唇部には刺突が施されている。１の地文は，ＬＲ縄文である。２は胴部破片で，外面に不整な撚糸文が施される。３は肥厚気味の

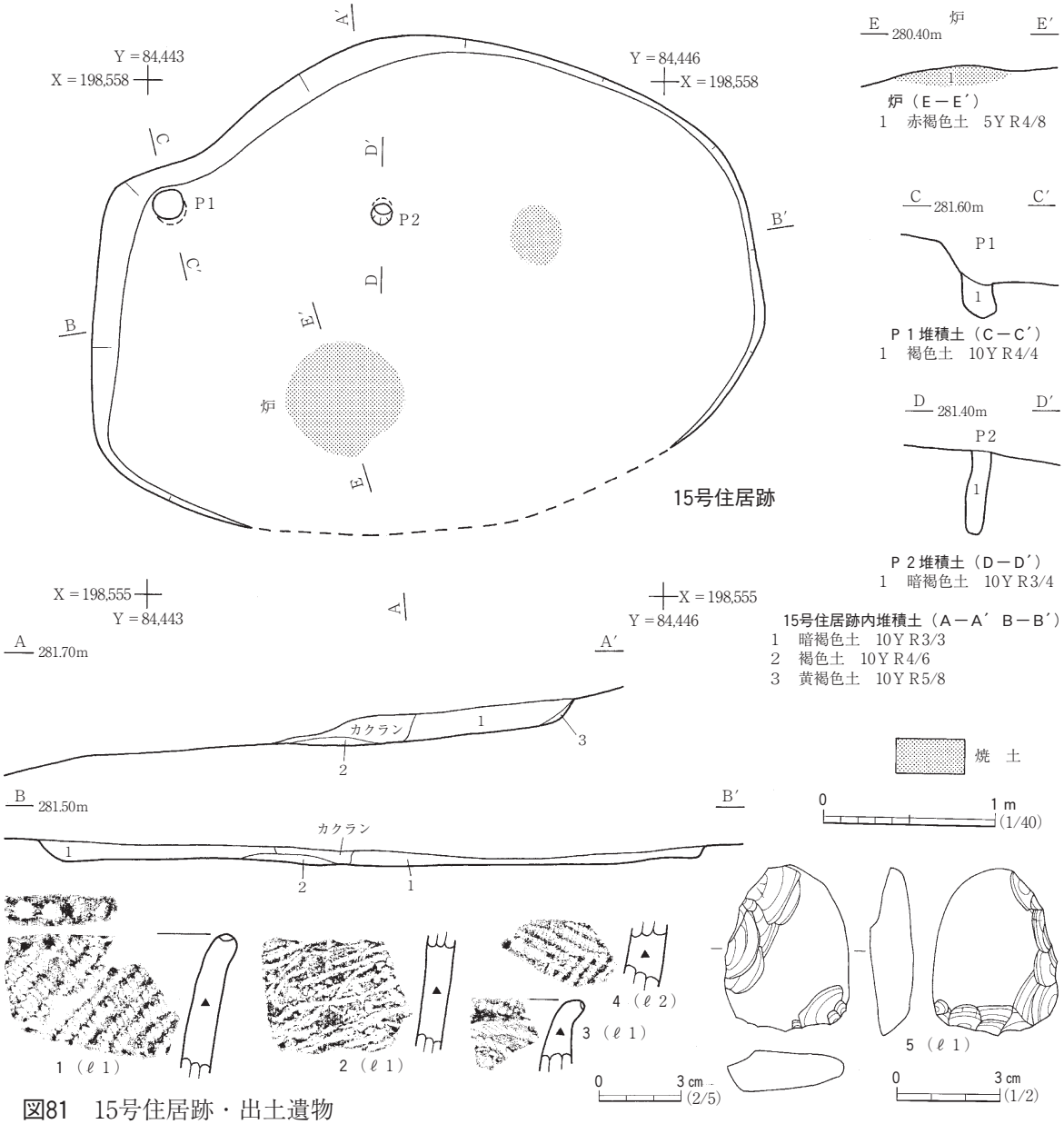


図81　15号住居跡・出土遺物

口縁部上端が短く外反している。口唇部にＬ原体による側面圧痕文が認められる。４は胴部破片で，ＬＲ・ＲＬの原体によって結節の無い羽状縄文を外面に施している。５は篦状を呈する石器である。比較的急角度の刃部調整が施されており，その用途は掻器などの可能性が考えられる。

ま　と　め

15号住居跡は，後世の攪乱等によって遺存状態が悪く，南壁の一部が失われていた。遺存部から推測される住居跡の平面形は，概ね東西に長い楕円形であったと考えられる。その長軸方向は，概ね等高線に平行している。床面から２基の焼土面を確認したが，標高差がほとんどないため，いずれも本住居跡の地床炉であった可能性がある。また床面から２個の小穴を検出したが，その性格については不明である。本住居跡の堆積土から出土遺物は，縄文時代早期末葉～前期初頭頃のものであろう。本住居跡の時期についても，出土遺物の時期と大きな差はないと考えられる。　（小　向）

16号住居跡　ＳＩ16

遺　　構（図82・83，写真１－98～101）

本遺構の位置は，Ｃ４－Ｄ５グリッドである。本遺構の立地は南方向に下る谷地形を利用しており，その谷筋と本遺構の長軸が概ね一致している。本遺構の北側斜面は斜度12°であるが，本遺構付近では斜度６°以下緩斜面になる。遺構検出面はＬⅢ上面で，その標高は281ｍ前後である。

本遺構及びその周辺部は，倒木痕による攪乱が比較的著しい。本遺構の中央に複数の倒木痕による攪乱を受けていたこともあり，当初は本遺構を南・北２軒の住居跡として調査を行い，また住居跡平面形の把握が不十分であったため，土層観察ベルトの位置・方向が適正ではない。

本遺構は26号土坑と重複するが，本遺構の方が新しい。本遺構の北・東・南側に１・９・２号焼土遺構が近接している。本遺構の西側約５ｍの地点には，ほぼ同時期の44号住居跡がある。

住居跡内堆積土は５層に分けた。ℓ１・２はいずれも花崗岩を比較的多く含む黒褐色砂質土で，基本土層ＬⅡの土質に類似している。含有する花崗岩の大きさは，ℓ１が10～35㎝，ℓ２が18㎝前後である。ℓ１の土色は，ℓ２よりも褐色がやや強い。ℓ２はレンズ状堆積を呈し，住居跡中央部では床面まで達している。ℓ２の層厚は最深部で53㎝を測るが，ℓ２内の上下で土質等に変化がなく，ℓ２をさらに細分することはできなかった。ℓ２内には本遺構とほぼ同時期の縄文土器が比較的多く含まれていたが，そのほとんどは住居跡外から花崗岩とともに流入したような出土状況であった。ℓ１・２は，土砂崩れ等の影響による堆積土の可能性がある。ℓ３・４は，住居跡北半部及び壁沿いの床面を覆う堆積土である。ℓ３・４は土色が異なるが土質は類似しており，いずれも３～５㎝の花崗岩を含む。ℓ５は住居跡南部中央で確認した堆積土で，消炭状の炭化物を少量含む。ℓ５の北側には焼土面（炉３）が近接しており，ℓ５内の炭化物と関連している可能性がある。ℓ１～５の土層観察から，本遺構は廃絶後，自然に埋没した可能性が高い。なお，本遺構の床面に段差が認められたことから，他遺構との重複・建替え等の可能性も想定した。しかし，土層観察において壁の立ち上がりなどの痕跡は確認できず，住居跡内堆積土を見る限りでは他遺構との重複・建替え等の可能性は低いと考えられる。

本遺構の平面形は概ね南北に長い小判形を呈するが，北壁は直線的・南壁は曲線的である。東壁の南部は後世の攪乱によって破壊されている。西壁の南部も2個の倒木痕によって破壊されている。長軸方向はＮ２°Ｅで，ほぼ真北である。また，長軸方向は，立地斜面の等高線に対してほぼ直交している。本遺構の規模は，長軸幅が10.8ｍ，炉２を通過する短軸幅が5.2ｍを測る。長軸幅/短軸幅の比率は2.08である。壁の立ち上がりは北壁を除いて曲線的であり，床面と壁の境界が不明瞭な箇所もある。北壁は約60°の急角度で立ち上がり，床面までの遺存高は55㎝を測る。

本遺構の床面はＬⅣ面を直接利用しており，柱穴と推測される小穴付近で１段低くなる。長軸方向の断面（Ａ－Ｂ′）を見ると，北壁付近の床面はほぼ水平であるが，深さ約20㎝の段差後，床面は南方向へ舟底状の緩やかな曲線を描いている。短軸方向の断面形も同様で，全体として舟底状を呈する。なお，床面の段差は，住居跡南部では確認することができなかった。床面の段差部分の範囲

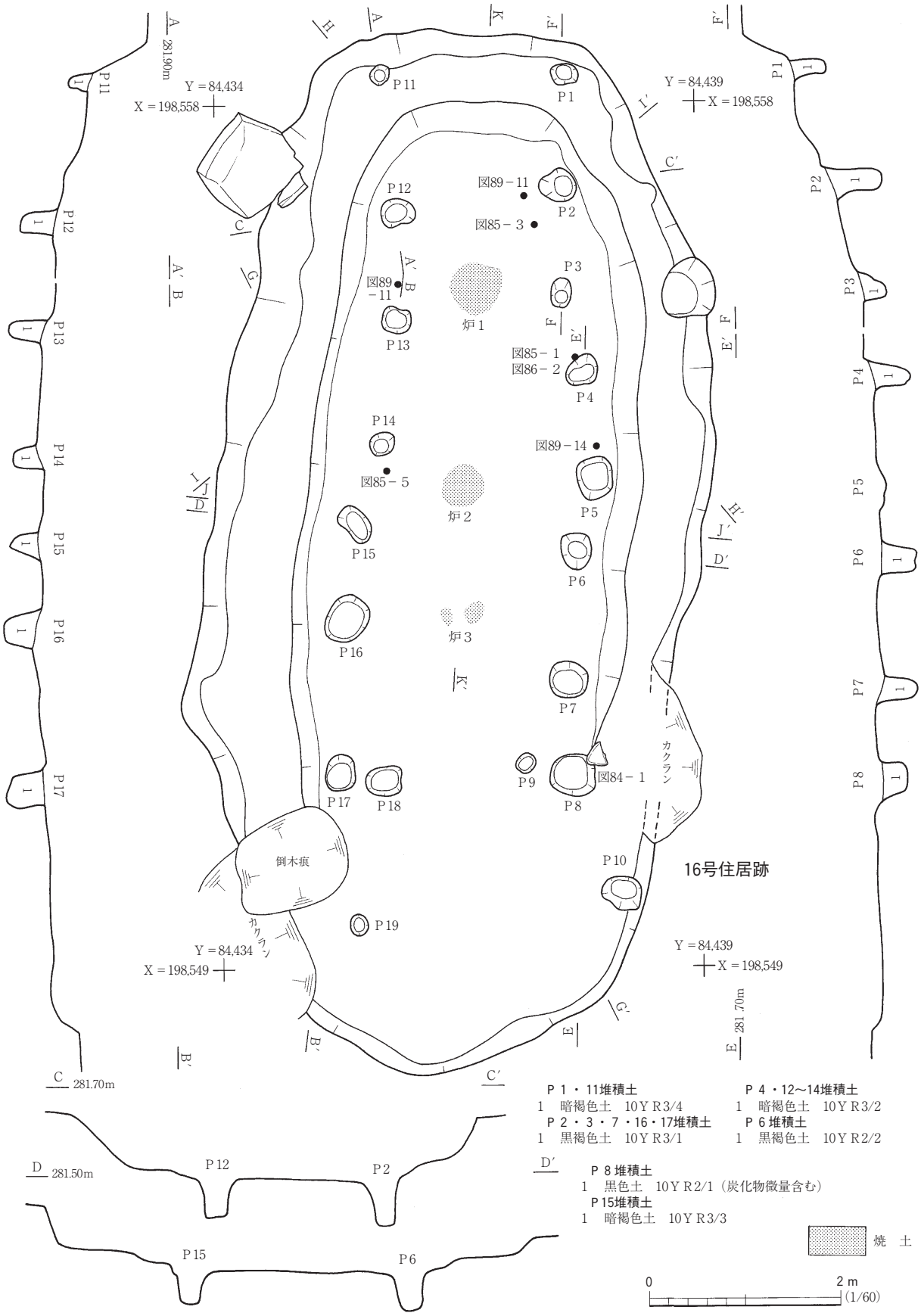

16号住居跡
Y＝84,434
X＝198,558
Y＝84,439
X＝198,558
Y＝84,434
X＝198,549
Y＝84,439
X＝198,549
A 281.90m
E 281.70m
C 281.70m
D 281.50m
図89－11
図85－3
図89－11
図85－1
図86－2
図89－14
図85－5
図84－1
炉1
炉2
炉3
倒木痕
カクラン
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P1・11堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
P2・3・7・16・17堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
P4・12～14堆積土
1　暗褐色土　10YR3/2
P6堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2
P8堆積土
1　黒色土　10YR2/1（炭化物微量含む）
P15堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
焼　土
0
2m
(1/60)

図82　16号住居跡（１）

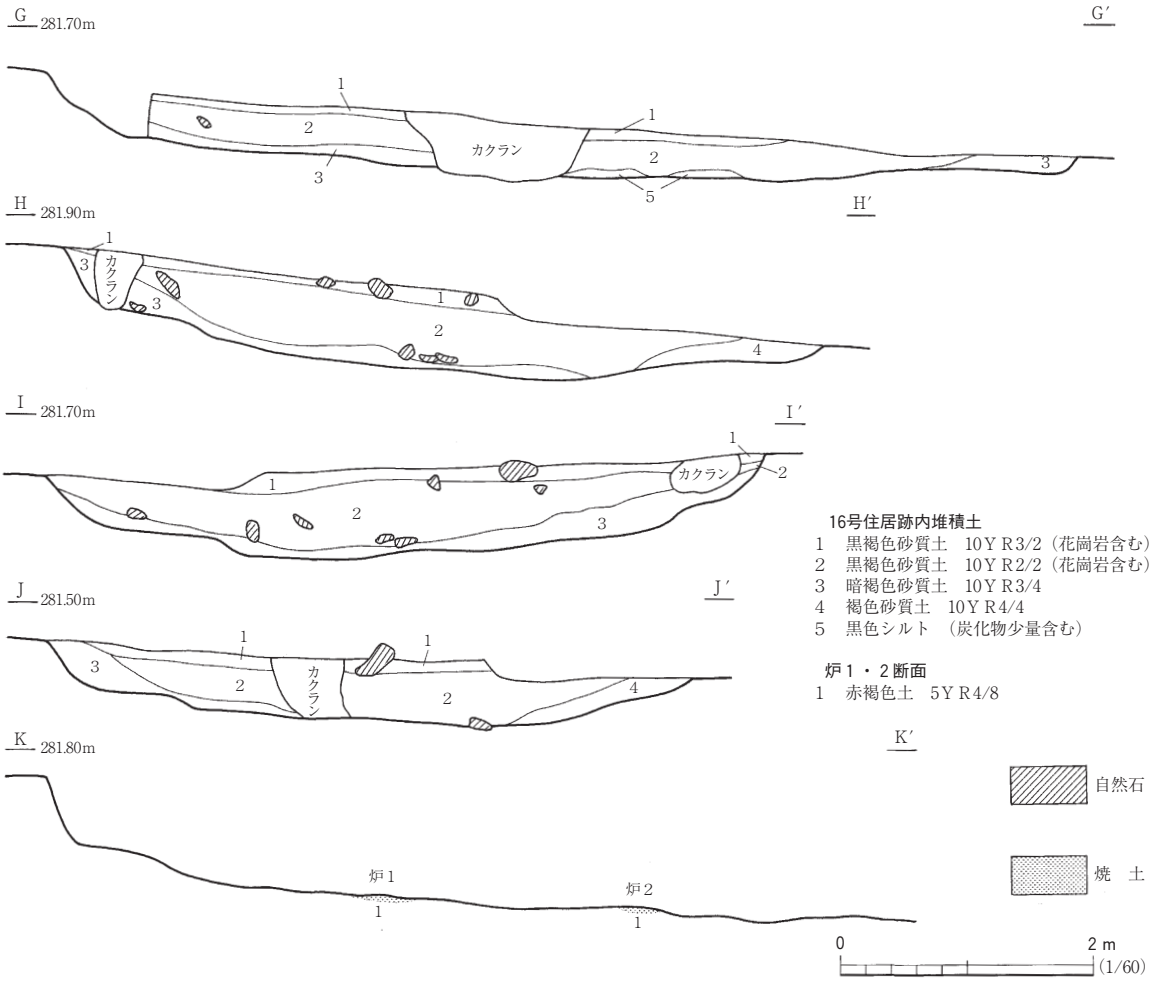


図83　16号住居跡（２）

は長軸幅が遺存値で7.3m，炉２を通過する短軸幅が3.5mを測る。床全体の面積は約40㎡である。内側段差部の床面積は，Ｐ8・17までの数値であるが約19㎡である。

床面上から３基の焼土面を確認した。この焼土面は住居跡の長軸上に位置することから，同時期に使用された地床炉の可能性が高く，北部から炉１～３とした。各炉の規模は，炉１が直径約50cm・炉２が直径約42cmである。炉３は状態が悪いが，遺存部から炉１・２とほぼ同規模であったと思われる。炉３よりも南側の範囲では，焼土面を確認することができなかった。北壁中央の下端から炉１の中心までの距離は2.4m，炉１～２の中心距離は2.1m，炉２～３の中心距離は1.3mである。炉１・２の断割断面の観察では，いずれも床面から５cm以上の深さまで赤褐色に熱変していた。

住居跡内からＰ１～19の小穴を確認した。Ｐ２～8・Ｐ12～17は，床面の段差に沿って南北方向に並んでおり，その位置から柱穴の可能性が高いと考えられる。各柱穴の規模は，上端の直径が25～33cm，深さが35cm前後である。各柱穴間の距離は，南北方向が１m前後，東西方向が1.8～2.3mである。Ｐ１・11は北壁沿いで確認した小穴で，Ｐ２～８・Ｐ12～17との位置関係からＰ１・11も柱穴の可能性がある。なお，Ｐ１～８・Ｐ11～17内の堆積土の観察から柱痕状の土層を判別することはできなかった。Ｐ９・18・19の性格は不明であるが，いずれも柱穴状の小穴である。本遺構の壁際の内

外で，小穴・溝等は確認できなかった。また，出入口に相当するような施設は，確認できなかった。

遺　　物（図84～90，写真１－129～139）

本遺構からは多量の遺物が出土している。図85～87は比較的大形の破片資料で，およその器形が分かるものを掲載した。図85－１・３は口縁部に鋸歯状装飾体が付くもので，口径復元の結果，いずれも同装飾体が４単位付いていたものと推測される。１は，炉１から南東へ約１ｍ離れた床面から出土したもので，その側から図86－２が出土している。１の胴部の地文はＲＬ縄文である。３はＰ２南西側の床面から出土し，胴部下半の破片も出土しているが，遺存状態が非常に悪く接合することができなかった。３の口縁部には，棒状工具によって横位に連続の刺突文が３段施されている。３の地文はＬＲ縄文である。２は住居跡内堆積土の比較的下位から出土したもので，全体の約60％が遺存している。２の器形は長胴で，短く外傾する口縁部は無文帯となっている。図85－４は胴部破片で，全体の約30％が遺存している。４の器形は，遺存部から最大径が胴部中央～上位の間にあり，口縁部でわずかに窄まると推測される。４の底部にはわずかに網代痕が認められた。図85－５は，炉２から西へ約60㎝離れた地点の床面で，押し潰されたような状態で出土したもので，底部以外の約90％が遺存している。５の短く外反する口縁部は無文帯で，胴部の地文はＬＲ縄文である。５の最大径は算盤玉状に張り出す胴部中央にあり，胴部下位～底部は筒状に窄まる。同様の器形は図85－６で，底部外面には網代痕が認められる。

図86－１は膨らみの強い胴部破片で，短く千切った粘土紐を鋸歯状に横位に貼付している。図86－２は，図85－１と近接して出土した口縁部破片で，直線的に上外方へ開く。２の口縁部に沿って梯子状の文様を巡らせ，その下にさらに１条の粘土紐を貼付して胴部と区画している。２の胴部には×状の文様を横位に配し，その間を波状文が垂下している。２の地文はＲＬ縄文である。図86－３は口縁波頂部の側面にほぼ円形の剥落痕があり，同部に突起が付いていた可能性がある。２と同様に口縁部が直線的に開く器形の土器には，図86－４，図87－２・３・５～７がある。図87－５には補修孔が認められる。

図86－５・７は底部外面に網代痕が認められる。5の底部外縁は，ハ状に開いている。同様の形状を呈する底部には図89－13・15・16等があり，いずれも網代痕が認められる。図86－６は比較的小型の土器で，胴部が細く長胴の器形である。６の底部外面には木葉痕が認められる。図89－14・18も木葉痕が認められる。

図86－８は，ℓ１から出土した浅鉢形の土器である。８の胎土は密，焼成も良好で器面の色調は明褐色を呈する。底部は丸底であり，胴部は緩やかな曲線を描きながら立ち上がるが，胴部中位に明瞭な段が付く。胴部上位は直角に屈曲しており，その端部は短く外反している。図86－９は，同図８の口縁部破片と推測されるもので，割れ口の様子から口縁部は直線的に立ち上がっていたものと考えられる。また，９の割れ口の側に孔が認められるため，図86－８は有孔浅鉢土器と推測される。

図87－１・８は窄まった口頸部から口縁部が緩やかに外反する器形で，８の口縁部は無文帯となっている。同図４の地文は撚糸文である。他に撚糸文の土器には図88－15があるが，本遺構の出土遺物の中では少数である。

図88－１～８は，口縁部に鋸歯状の貼付文が認められるものである。１の地文はＬＲ縄文，２の地文はＲＬ縄文である。４は口縁部が内碗気味に直立する器形と思われ，鋸歯状装飾体の下に竹管状工具によるＴ状の刺突文が施されている。図88－９は，波頂部に逆「の」状の貼付文が施されている。

図88－10～18は，細い粘土紐による装飾文が施されたものである。10・11・15・16は，２本１組の波状文が横，または縦に施されており，11を除いて細かく千切った粘土紐で文様を描出している。17・18は梯子状の文様が認められる。図88－25は，波状文が沈線によって描出されている。

図88－19～24・27～30は，地文のみの口縁部破片である。19の口唇部は，つまみによって波状に成形されている。20・21は，口縁部に結節回転文が認められる。22は波状口縁の破片の可能性がある。図88－26は，口縁部と胴部の境界に棒状工具によって刺突文が施されている

図89－１～10は，16号住居跡の床面出土遺物よりも古い時期と考えられる土器である。１～３は縄文条痕土器である。４・５は羽状縄文系の土器で，口縁部に横位隆帯が巡る。６～８は半截竹管状の工具による沈線文が認められる。６は菱形区画内に刺突文が，７は口縁部に貝殻圧痕文が施されている。９・10は地文がなく，口縁部に刺突文・沈線文が認められるものである。

図89－11～18は底部資料で，外面に網代痕・木葉痕が認められるものを掲載した。11・13・14は床面から出土したもので，いずれも外面が上に向いた状態で確認された。

図90－１～９は，本遺構から出土した石器である。１～３・５はいずれも凹基鏃であるが，２の抉りは浅く平基鏃に近い。２の先端部は欠損している。４は削器・掻器の類であろうか。４の形態は石匙にも似ている。６は短い突起が認められるもので，石錐と考えられる。９も両縁加工が施されているが，下端が錐状に尖っている。７は削器・掻器の類であると思われる。８はつまみ状の突起を持つが，表・裏面から刃部加工が施され，その下端は錐状に尖っている。図84－１は，Ｐ８の側から出土した石皿である。表面を上に向けた状態で確認された。１の下部は欠損している。縁辺は加工によって楕円状に仕上げられている。

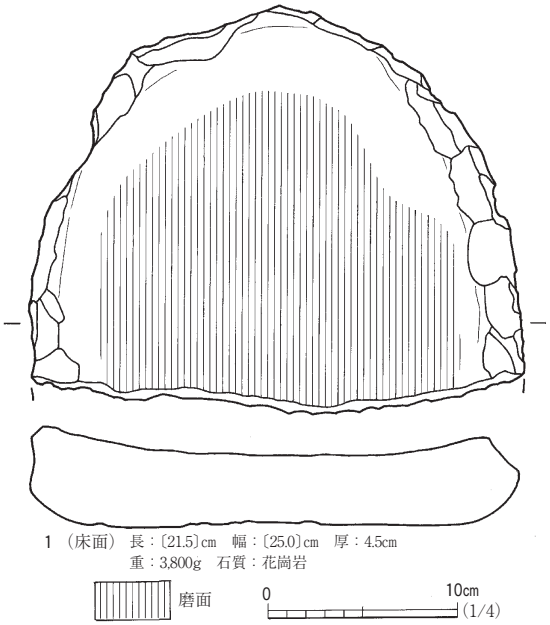


図84　16号住居跡出土遺物（１）

ま　と　め

16号住居跡は，長軸幅が10.8mを測る比較的大型の竪穴住居跡である。床面は２段のテラス状になっている。壁面は丸みを帯びており，住居跡の断面形は舟底状を呈する。柱穴は主柱穴配置で，テラス状の段差に沿って直線的に並列している。建替え等の痕跡は，確認できなかった。

床面からは計３基の地床炉を確認した。各炉は長軸上に並ぶことから同時性が窺えるが，炉間距離は等間隔でない。床面から比較的多くの遺物が出土している。本住居跡の時期は，共伴遺物から大木４～５式に位置付けられる。　（香　川）

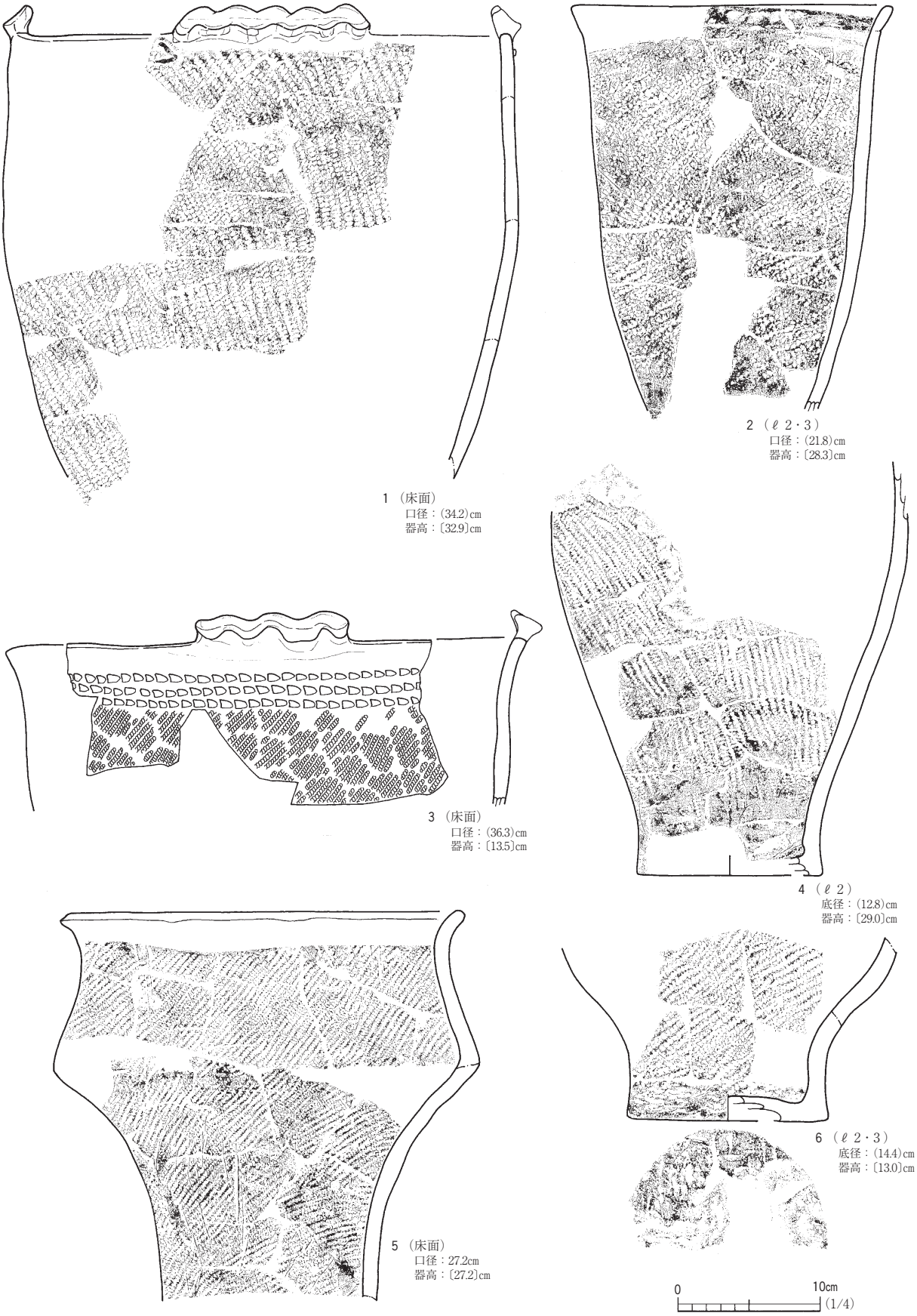


図85　16号住居跡出土遺物（２）

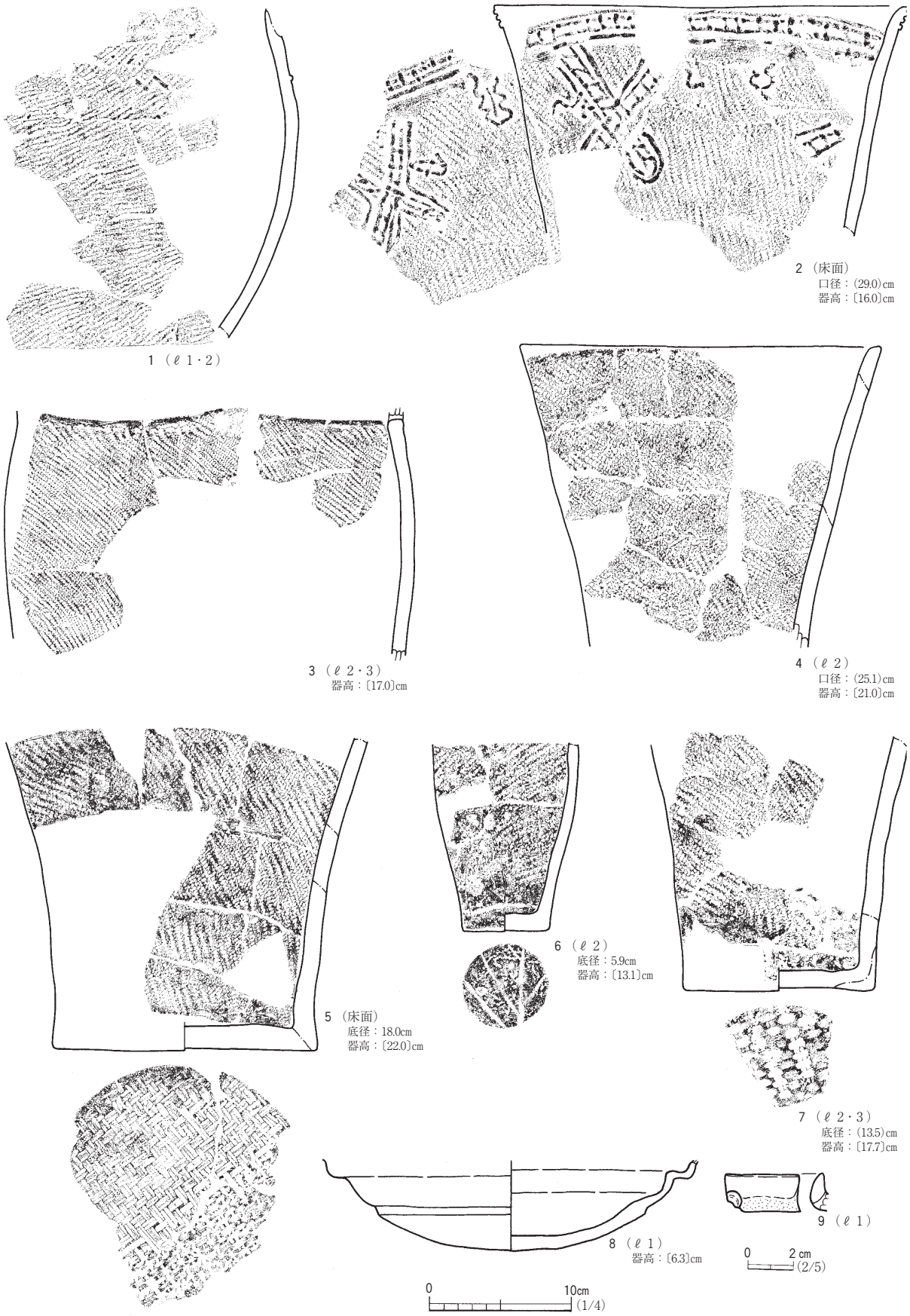


図86　16号住居跡出土遺物（３）

図87　16号住居跡出土遺物（４）

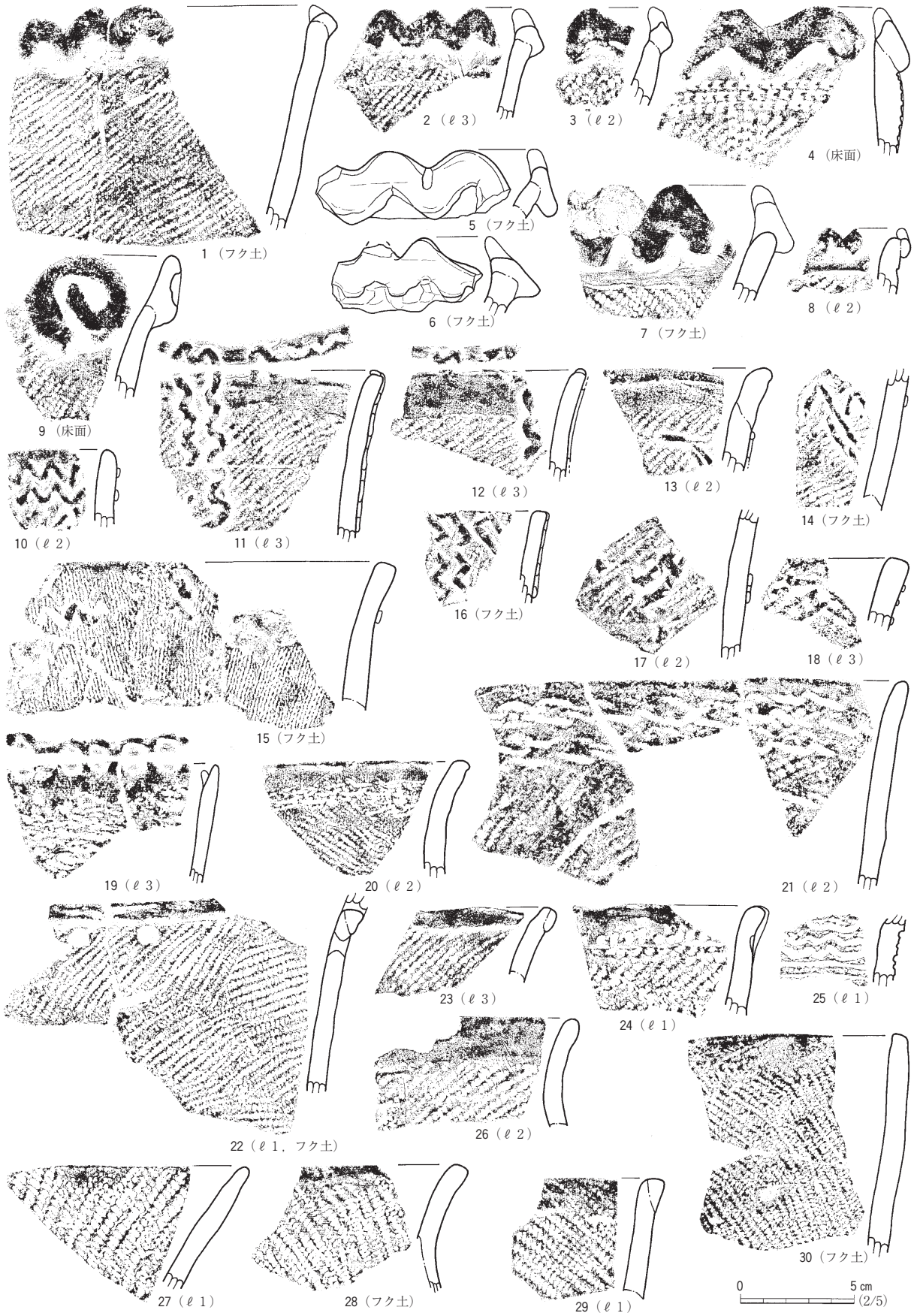


図88　16号住居跡出土遺物（５）

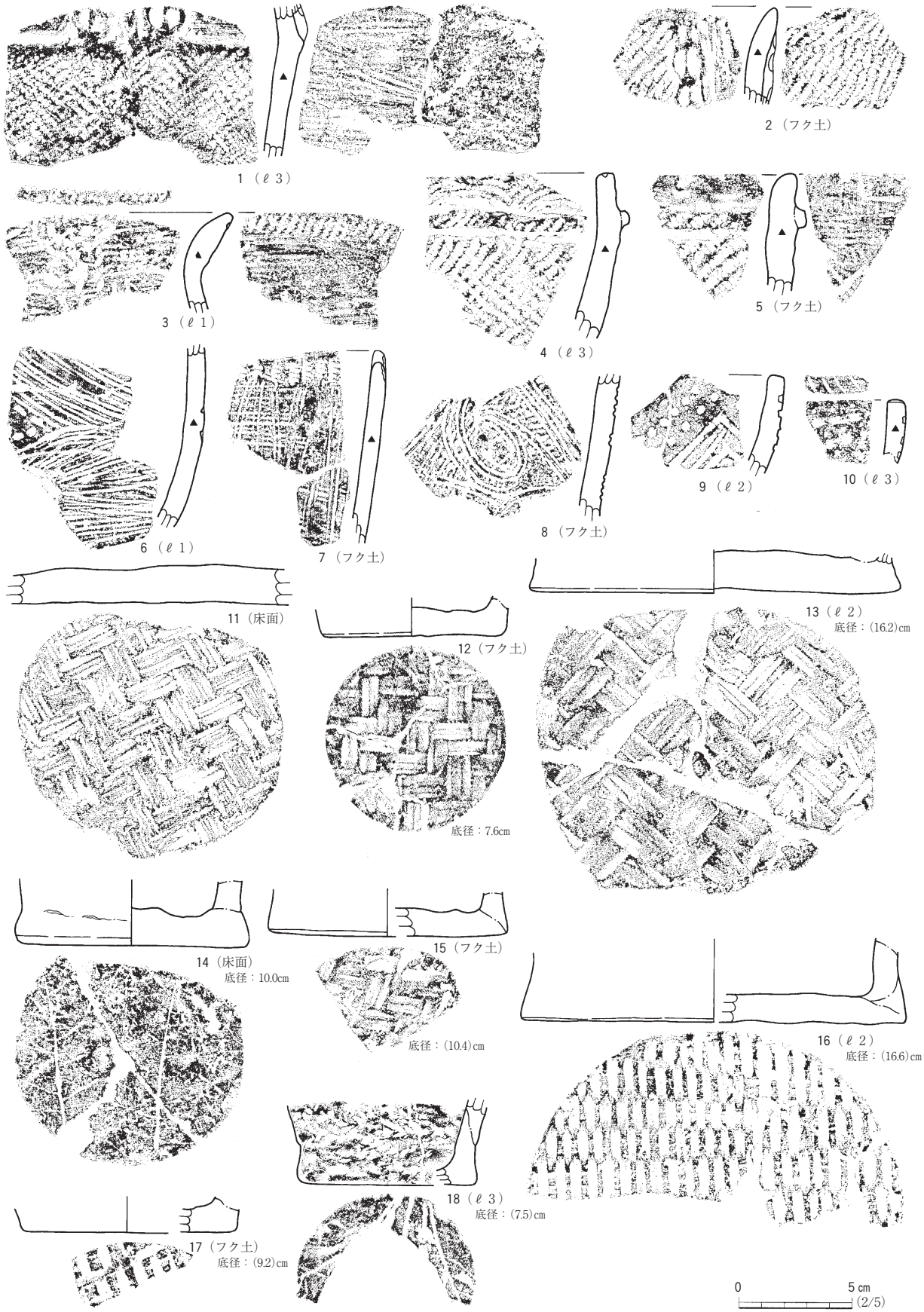


図89　16号住居跡出土遺物（６）

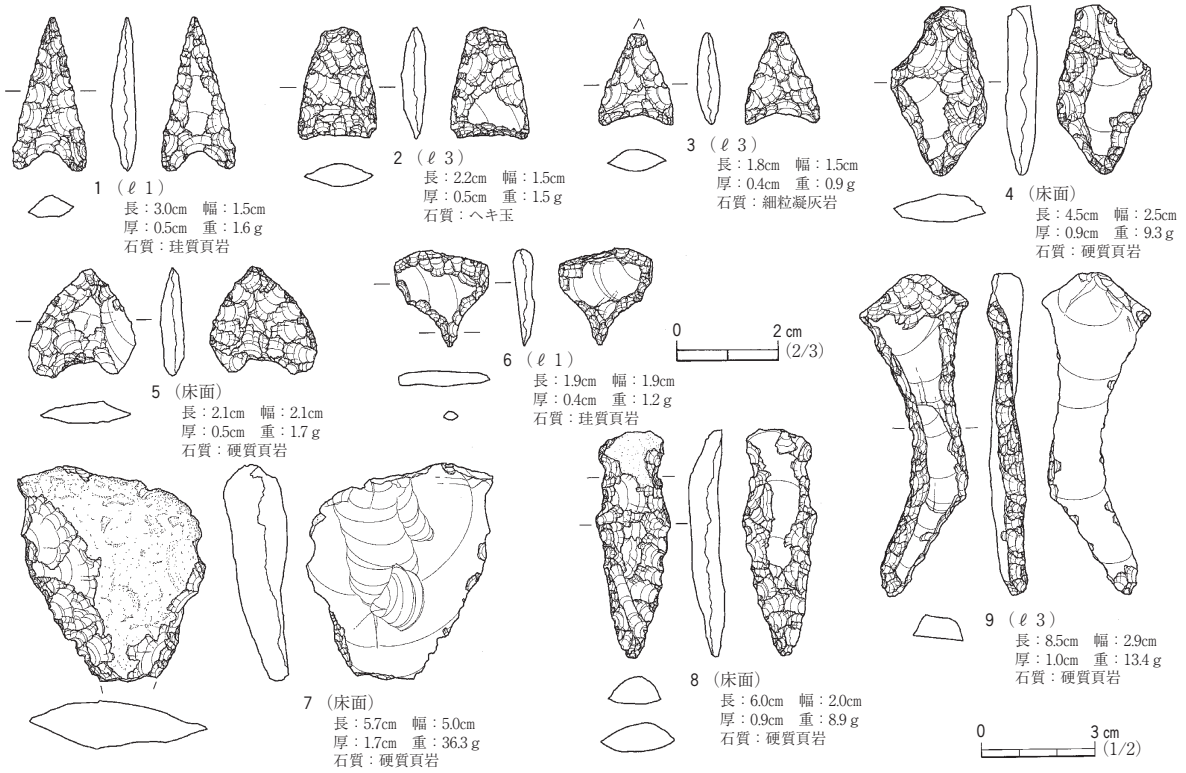


図90　16号住居跡出土遺物（７）

21号住居跡　ＳＩ21

遺　　構（図91，写真１－102）

21号住居跡は西地区の中央やや南寄り，Ｃ４－Ｅ５・６グリッドにまたがって位置する。周辺の地形は北西から南東へ下がる緩斜面である。標高は280.2m前後である。遺構検出面はＬⅢ上面で，黒褐色土の広がりとして検出した。本住居跡の北部は，攪乱によって破壊されており，北壁の一部が失われている。本住居跡は20号土坑と重複し，こちらの方が新しい。南端部分の床面下に21号土坑が存在し，本住居跡の方が新しい。また，17号土坑とも重複しているが，攪乱の影響によりその新旧関係は不明である。

遺構内堆積土は，黒褐色土ℓ１の１層とした。ℓ１の土質はＬⅢに類似するが，その土色はＬⅢよりもわずかに暗い。ℓ１の土層観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は認められず，本住居跡は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。遺構の平面形は，北部の状態が悪いが，遺存部の形状から概ね南北に長い楕円形と考えられる。規模は東西約2.7m，南北約3.7m，遺構検出面から最も深い位置で13cmである。長軸方向はＮ10°Ｗである。壁の立ち上がりは緩やかである。床面の規模は，平坦であるが水平ではなく，南東方向へ緩やかに傾斜している。

住居内施設として，炉跡と小穴Ｐ１・２を検出した。炉跡は床面のほぼ中央に位置しており，掘形をもたないいわゆる地床炉タイプである。炉跡の平面形は楕円形を呈し，その規模は東西約50cm，南北約75cmで，10cmの厚みで熱赤化が認められた。小穴はＰ１が北東壁寄りにあって，上端の直径

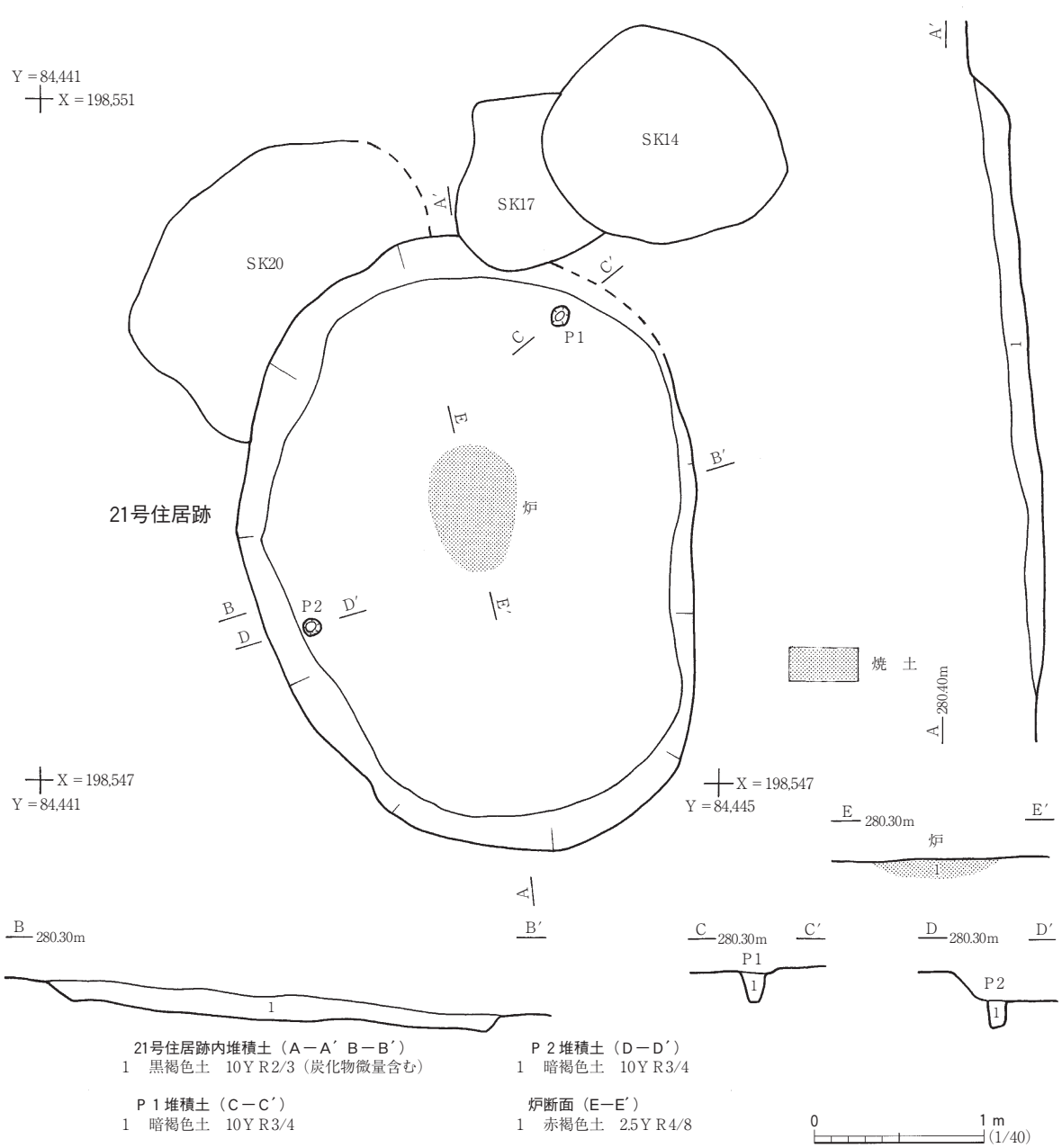


図91　21号住居跡

14cm，床面からの深さは20cm，底面は直径5cmで平坦である。Ｐ２は西壁沿いにあって，円筒形に掘り込まれている。上端の直径12cm，床面からの深さ18cm，底面の直径は9cmで平坦である。いずれも暗褐色土が堆積していた。柱痕は確認されなかった。

遺　　物（図92，写真１－140）

21号住居跡から出土した縄文土器について図92－1～８に示した。１は口縁部に刻み目を有し，器表面に非結束の羽状縄文を施す資料である。縄文条痕土器の２は，形状は不明だが貼付文が認められる。３・４はいずれも羽状縄文を有する資料で，４は口縁部である。５は内外面に縄文を施す口縁部資料である。６は口縁部付近の破片で，頸部に横位隆帯が巡る。７は細かい斜行縄文を地文とする資料である。８は内外面に条痕文を施す資料である。

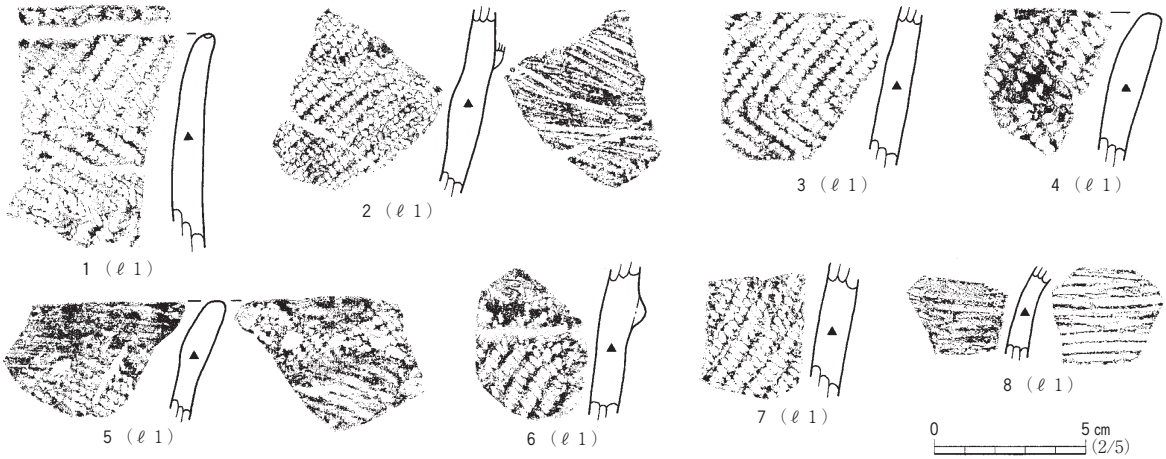


図92　21号住居跡出土遺物

ま　と　め

21号住居跡は，楕円形を呈する住居跡である。炉跡は厚く熱変化している。小穴は柱穴とも考えられるが，柱穴が２基では上屋を支える構造となっていたかどうか，不明である。出土遺物はいずれも小片であり図示できるものは少なかったが，羽状縄文を有するものや，内面に条痕文を有するものが見られた。いずれも胎土中に植物繊維を含む。出土土器は，縄文早期末葉～前期初頭頃の特徴を有しており，本住居跡も時期は該期に求めてよいものと考えられる。　（宮　田）

22号住居跡　ＳＩ22

遺　　構（図93，写真１－103）

22号住居跡は西地区の中央からやや南へ寄った，Ｃ４－Ｅ６・７グリッドにまたがって位置している。周辺の地形は北西から南東へ下がる緩斜面である。標高は279.3m前後を測る。遺構検出面はＬⅢ上面であり，不明瞭ではあったが黒褐色土の広がりとして確認した。本遺構の周辺は，耕作等によって攪乱の影響が著しい地点である。そのため，本遺構も破壊を大きく受けており，南壁全体が失われていた。他遺構との重複はない。本遺構の北側約５ｍの地点には25号土坑がある。また，北西側２ｍの地点には３号焼土遺構，南東側約３ｍの地点には22号土坑がある。

遺構内堆積土は，黒褐色土ℓ１の１層とした。ℓ１のしまり・粘性は弱い。ℓ１内には少量の炭化物が含まれていた。また，ℓ１内には，10～40cmの花崗岩が含まれていた。ℓ１の堆積状況から，本遺構は土砂崩れ等によって埋没した可能性もある。

本遺構の平面形は，遺存部の形状等から東西に長い長方形であった可能性が高いと考えられる。比較的良好に遺存する北壁の長さは3.2mを測る。北壁の形状は直線的である。西壁の遺存長は1.2m，東壁の遺存長は１ｍである。北壁の方向はN65°Ｅである。北東・北西コーナーの形状は，比較的丸味が少ない。北壁の立ち上がりは，急角度で直線的である。遺構検出面から床面まで最も深い部分で36cmである。床面は平坦で，ＬⅢ下面を直接利用している。

付属施設としては，北西コーナー寄りの地点から炉跡が１基検出された。炉跡の平面形はやや不

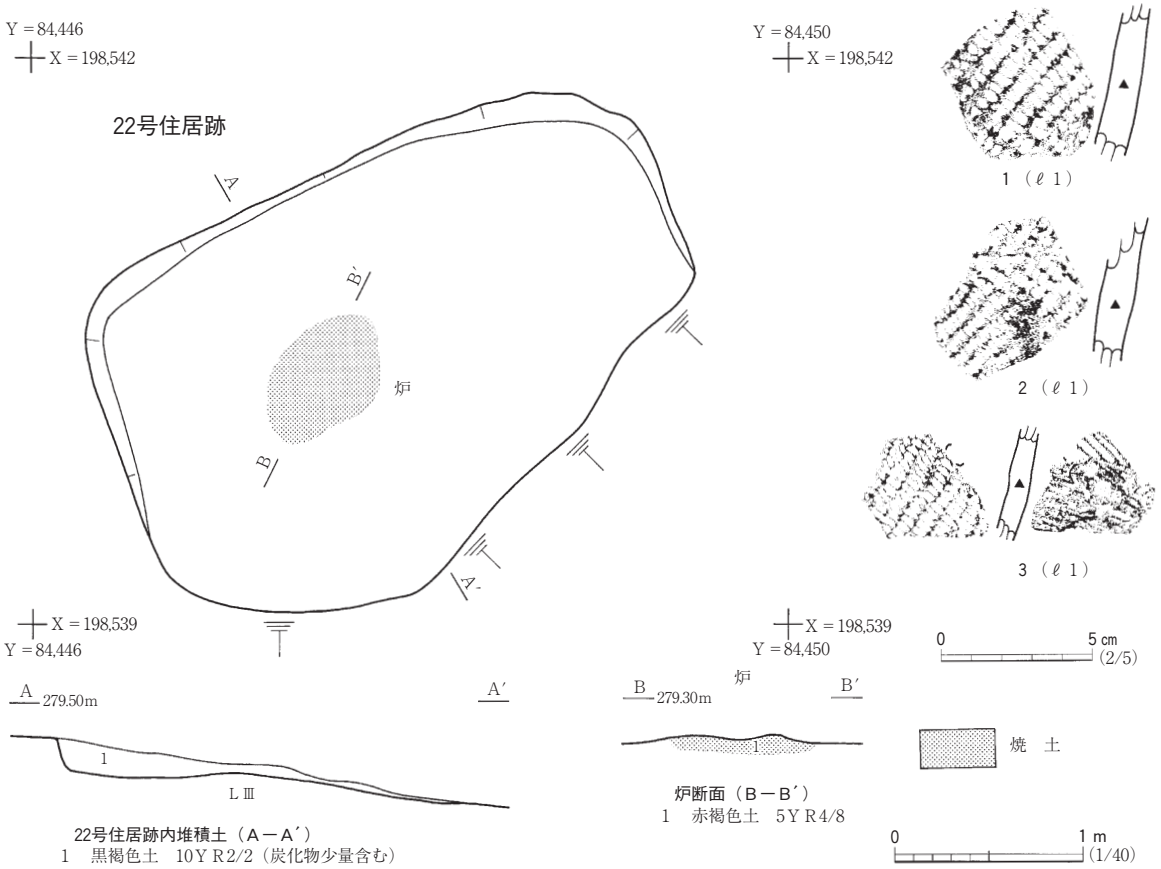


図93　22号住居跡・出土遺物

整な楕円形を呈し，掘形をもたない地床炉タイプのものである。東西方向に長軸を有し，長径約80cm，短径約50cmを測る。床面から７cmほどの深さで赤褐色土化している。なお，本住居跡の内外から小穴を確認することはできなかった。

遺　　物（図93，写真１－141）

22号住居跡からは縄文土器片が73点出土したが，その大半が小片である。出土土器については，図93－１～３の計３点を掲載した。１～３は，いずれも胎土に繊維を比較的多く含んでいる。１・２の地文は結束のない羽状縄文で，ＬＲ・ＲＬ原体を用いて描出されている。３は縄文条痕の土器である。３の地文はＬＲ縄文である。

ま　と　め

22号住居跡は，後世の攪乱等によって南部が失われており，その遺存状態は非常に悪い。北壁が直線的で，両コーナーが隅丸であるがほぼ直角に曲がっていること。床面がＬⅣまで達していないことから，本遺構の掘形は比較的浅かったと推測されること。また，炉跡の位置などから，本遺構の平面形は東西に長い長方形であった可能性が高いと考えられる。本遺構の内外から柱穴と考えられる施設は確認できなかったため，上屋構造は不明であるといわざるを得ない。

本住居跡の所属時期は，出土遺物に乏しく確証はないが，22号住居跡など周辺に位置する同規模の遺構の年代等から縄文時代早期末葉～前期初頭頃に位置付けられると思われる。　　（宮　田）

23号住居跡　ＳＩ23

遺　　構（図94，写真１－104・105）

本住居跡は，西地区中央部のＣ４－Ｆ６グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，黄褐色土面における黒褐色土のプランとして確認した。住居跡の南部は後世に削平を受けたものと思われ，遺存状態が悪い。他の遺構との重複関係はなかった。本住居跡の北側約３ｍには24号住居跡が，東側約2.5ｍには21号住居跡がある。

本住居跡の堆積土はℓ１のみの単層とした。ℓ１は，少量の炭化物・焼土を含む黒褐色土である。土層観察では人為堆積の痕跡を確認することができず，ℓ１は自然堆積層の可能性が高いと考えられる。本住居跡の平面形は，住居跡南部が破壊されているが，遺存部から東西に長い長方形であったと考えられる。本住居跡の規模は，東西方向が3.7ｍ，南北方向が遺存値で2.5ｍである。遺構検出面から床面までの深さは，北壁の最大部で12㎝を測る。住居跡の長軸方向はＮ87°Ｅであり，ほぼ等高線に平行している。東・西・北壁は，床面から比較的緩やかな角度で立ち上がる。南壁の有無

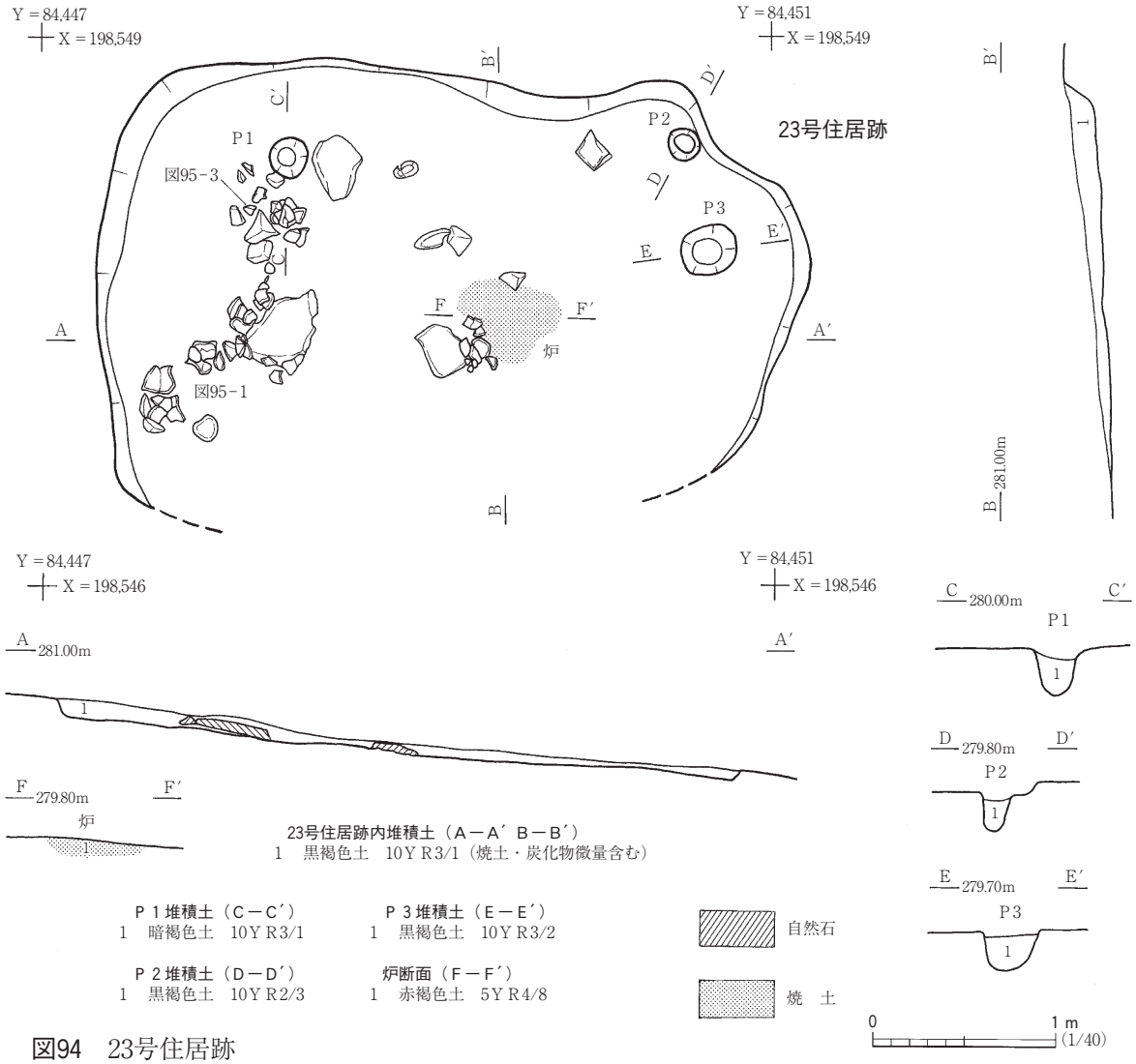


図94　23号住居跡

については不明である。

床面は西から東方向へ下がっており，その斜度は６°である。床面から焼土面を１基，小穴を３個検出した。焼土面は直径50cmで，本住居跡のほぼ中央に位置する。熱変の厚さは11cmを測る。この焼土面は，位置から地床炉の可能性が高いと推測する。焼土面の周囲には，５～25cmの礫が点在していた。全長25cmの礫は板状で，外面が床面と接地していたが，使用痕を確認することはできなかった。小穴は，北東隅で直径17cm・深さ25cmのＰ１，北西隅で直径21cm・深さ25cmのＰ２，東部で直径30cm・深さ25cmのＰ３を検出した。しかし，Ｐ１～３の性格・機能については把握することができなかった。

遺　　物（図95，写真１－141・142・145）

23号住居跡からは，周辺のほぼ同時期の住居跡と比較して多くの縄文土器が出土した。しかし，各縄文土器の保存状態は悪く，接合できたものは少数である。図95－１～５は，本住居跡の床面から

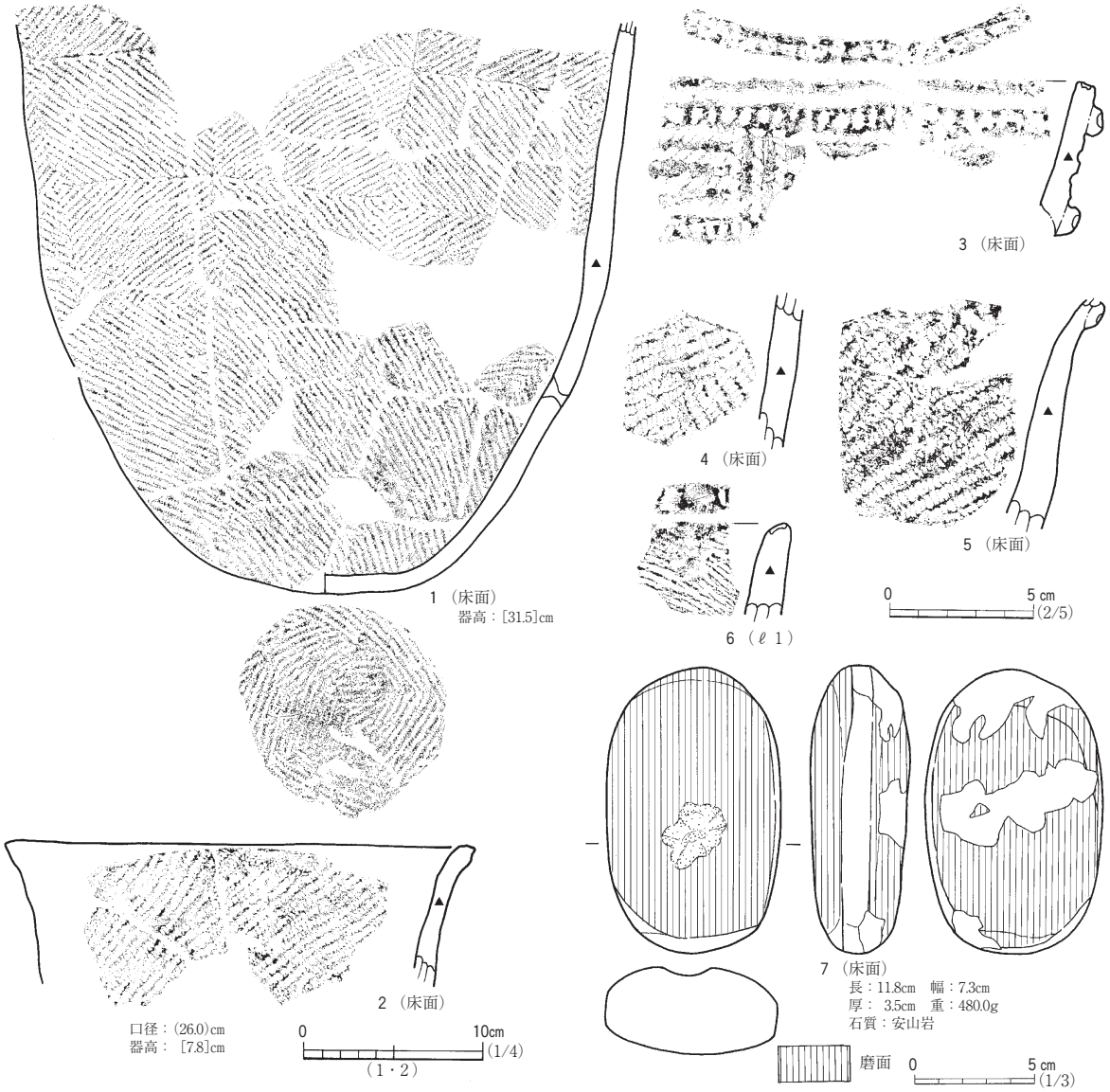


図95　23号住居跡出土遺物

出土したものである。１は住居跡南西部のコーナー付近から出土した丸底の土器で，口縁部は確認できなかったが，ほぼ原位置で押し潰れたような状態で発見された。地文の羽状縄文は，重菱文になっている箇所もある。３・４は，横位隆帯によって口縁部文様帯が区画されたものである。３は上下２本の横位隆帯の間をＲの原体圧痕が縦・横に施され，隆帯・口唇部には刺突文が巡る。５も横位隆帯が認められる資料である。４は羽状縄文，６は斜行縄文が認められる。７は床面から出土した凹石である。楕円形の石材を使用し，表面に１ヶ所の窪みが付けられている。７の表・裏面は使用によって平滑になっている。

ま　と　め

本住居跡は，攪乱等により南部の状態が悪いが，遺存部の形状から東西に長い長方形であったと推測される。本住居跡のほぼ中央で検出した焼土面は，地床炉の可能性が高いと考えられる。本住居跡から計３個の小穴を検出したが，各小穴の性格を推測することはできなかった。床面からは比較的多くの遺物が出土しており，本住居跡が突発的に破棄された可能性もある。本住居跡の時期については，出土遺物から縄文時代前期最初頭と考えられる。（小　向）

24号住居跡　ＳＩ24

遺　　構（図96，写真１－106）

本住居跡は，西地区中央部のＣ５－Ｅ５グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，黄褐色土面に黒褐色のプランとして確認した。プランの形状が不明瞭であったため，当初は攪乱の可能性も考えていた。しかし，精査中に地床炉と考えられる焼土面が検出され，改めて住居跡プランの再確認を行ったところ，概ね長方形の本住居跡を検出することができた。他の遺構との重複関係はなかった。本住居跡の北西側約2.5ｍには15号住居跡が，南側約３ｍには23号住居跡がある。５号焼土遺構とは東壁で近接するが，その新旧関係は不明である。

本住居跡内の堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１は，耕作等の影響によって攪拌されたような土質であったが，焼土・炭化物を微量含む。ℓ１の土層観察では，攪乱の影響があるものの人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，本遺構は自然に埋没した可能性が高いと思われる。

本住居跡の平面形は，東西に長い長方形である。本遺構の規模は，長軸幅3.6ｍ・短軸幅2.2ｍである。住居の長軸方向はＮ64°Ｅであり，等高線にほぼ平行している。遺構検出面から床面までは最も深い部分で12㎝を測り，各壁は比較的緩やかに立ち上がる。

床面は北から南方向へやや傾斜しているが，ほぼ平坦に造られている。床面から焼土面を２基検出した。各焼土面は東西約20㎝の間隔があるが，攪乱による分断等の痕跡は認められなかった。各焼土面はいずれも円形を呈し，その規模は直径が45㎝前後・熱変による酸化浸透が約８㎝である。２基の焼土面については，他遺構との重複が認められないため，いずれも本住居跡の地床炉であったと考えられる。

柱穴の確認作業は計４個の断割りを行ったが，小穴と判断できたものはＰ１の１個のみである。

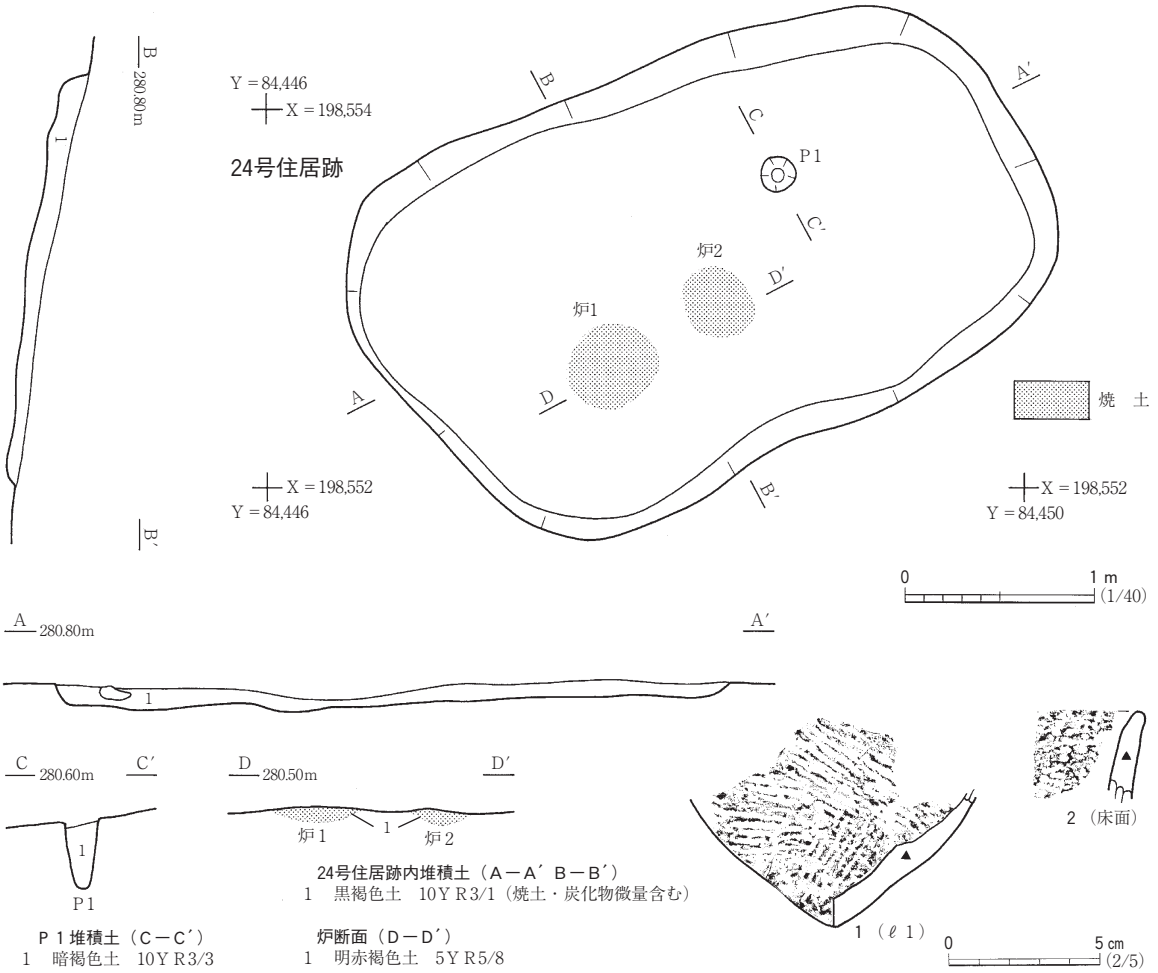


図96　24号住居跡・出土遺物

Ｐ１は焼土面の北西側に位置しており，その規模は，上端の直径18cm・深さ38cmである。Ｐ１の形状は柱穴に類似するが他に小穴を確認することはできず，Ｐ１の性格については不明である。

遺　　物（図96，写真１－141）

本住居跡から計26点の縄文土器が出土したが，いずれも細片で遺存状態が悪い。図96－１は尖底土器で，撚糸文が施されている。同図２は床面出土の土器で，胎土に繊維を含み，地文は外面にＬＲ縄文が施されている。

ま　と　め

本住居跡の平面形は東西に長い長方形を呈し，その長軸方向を立地斜面の等高線に対してほぼ平行させている。本住居跡は後世の攪乱の影響を受けているが，掘形は比較的浅く造られた可能性もある。床面からは焼土面を２基確認したが，検出面の標高がほぼ同じであり，他遺構との重複の痕跡も認められなかったことから，いずれも本住居跡の地床炉であったと推測される。本住居跡の内外から，柱穴を確認することができなかったため本住居跡の上屋構造については不明である。

本住居跡の時期については，決め手となる出土遺物に乏しいが，規模・形状が類似し，近接する23号住居跡とほぼ同時期の縄文時代早期末葉～前期初頭頃と推測される。　（小　向）

25号住居跡　ＳＩ25

遺　　構（図97，写真１－107）

本遺構は，Ｃ４－Ｄ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ中面で，その標高は282m前後である。住居跡東・南部は遺構検出段階ですでに失われており，北・西壁の一部が遺存する。住居跡北東側には１ｍを超える大形の花崗岩が密集しており，住居跡東・南部は，おそらく土砂崩れ等によって破壊されたものと考えられる。本遺構は26号土坑と重複するが，本遺構の遺存状態が悪いため新旧関係は不明である。本遺構の時期に近い遺構としては，北側約８ｍの地点に12号住居跡がある。また，東部10mの地点には15号住居跡がある。

住居跡内堆積土は，２層に分けた。ℓ１は遺構内のほぼ全面を覆う堆積土で，その土質は基本土層ＬⅢに類似する。ℓ２は，北壁沿いの限られた範囲で確認された堆積土で，壁崩落土の可能性がある。ℓ１・２の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。おそらく本遺構は自然に埋没したものと考えられる。

本遺構の平面形は，住居跡南部が消失しているため不明である。しかし，北壁の遺存部が弧状，西壁の遺存部が直線的であることから，本遺構は南北に長い小判形を呈していた可能性がある。本遺構の遺存値は，南北方向が3.2m，東西方向が2.8mである。西壁の方向はＮ27°Ｗで，立地斜面の等高線に対してほぼ直交している。西壁の方向は，概ね本遺構の長軸方向に近いと考えられる。

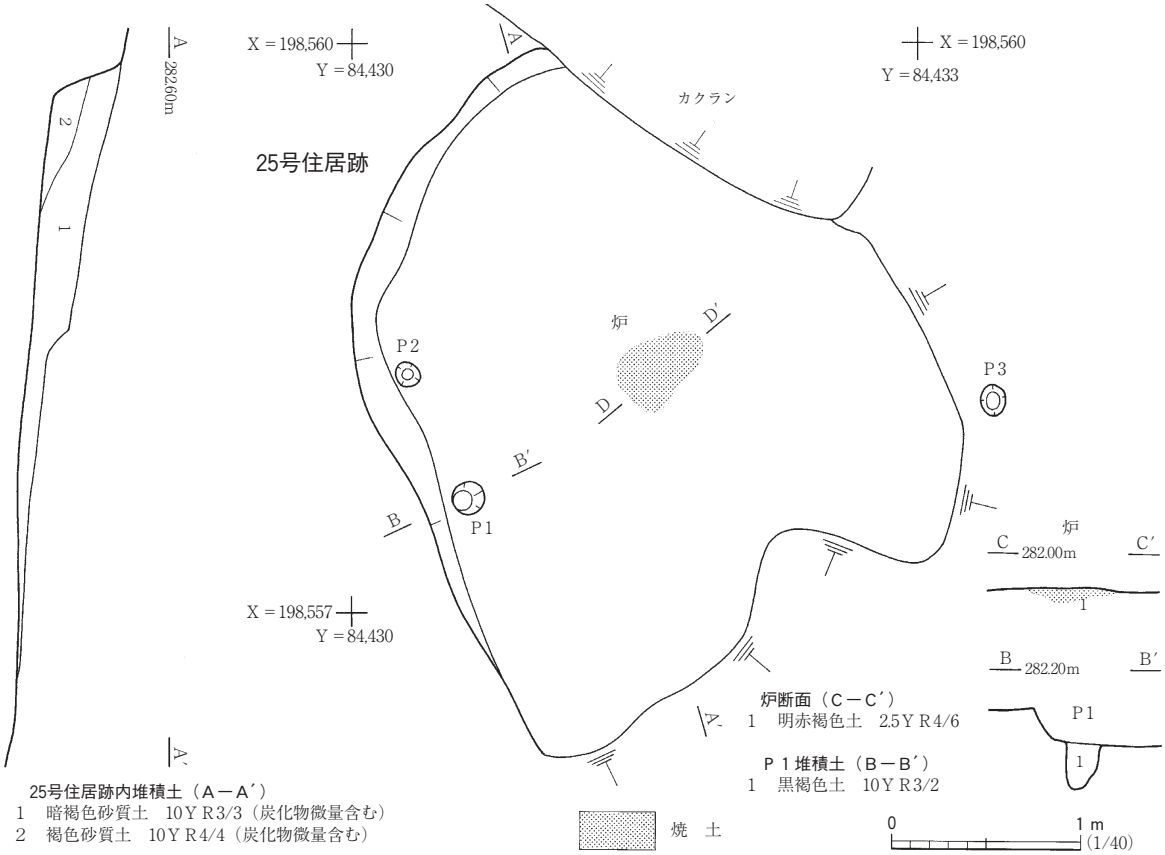


図97　25号住居跡

床面は，北部がＬⅣ面，南部がＬⅢ面を直接利用している。比較的急な立地斜面に対し，床面は約４°の斜度で構築されている。壁の遺存高は，最深部の北壁で35cmを測る。北壁の立ち上がりは，約66°の角度である。床面から，地床炉と考えられる50cm×35cmの焼土面を検出した。この焼土面の断面観察では，赤褐色の熱変が最深７cmまで浸透していた。本遺構から計３個の小穴を確認した。Ｐ１～３の規模は，上端の直径が12～18cm，深さ17～23cmを測る。Ｐ１～３の位置はいずれも壁際と推測されるが，他に小穴は確認できず，Ｐ１～３の性格については不明である。

遺　　物（図98，写真１－143）

本遺構の堆積土から計192点の縄文土器片が出土しており，その内の14点を図98に示した。１～７は，条痕文系土器である。２・６は口縁部付近の破片であり，裏面に縄文が施されている。８～13は裏面に条痕文が認められないもので，11～13は羽状縄文が施されている。14の底部破片は，丸味を帯びた平底で，底部外面にも地文の単節縄文が施されている。

ま　と　め

25号住居跡の平面形は，東・南部を消失しているため不明であるが，遺存部から南北に長い小判形であった可能性がある。床面から地床炉を検出し生活の痕跡を確認したが，本遺構に伴う柱穴を明らかにすることができなかったため，25号住居跡の上屋構造は不明である。なお，本遺構は北東側から土砂崩れ等によって破壊されているが，その時期は不明である。25号住居跡の所属時期は，出土土器から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。（香　川）

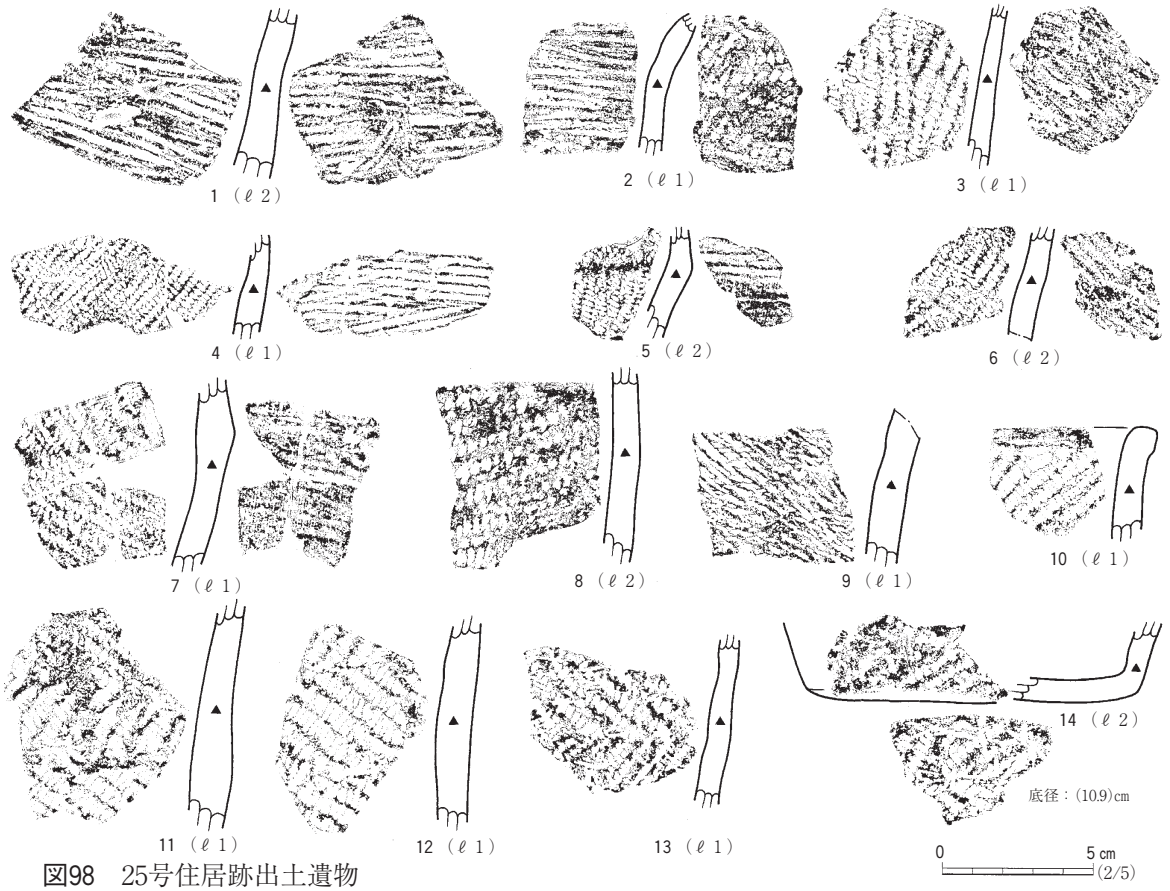


図98　25号住居跡出土遺物

27号住居跡　ＳＩ27

遺　　構（図99，写真１－108・109）

本住居跡は，西地区北西部のＣ４－Ｂ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅡ下面である。本住居跡の存在は，調査区西縁に設定した基本土層観察ベルトで確認した。その土層断面において，ＬⅡに対してわずかに色が異なる箇所があり，同観察ベルトに沿って小トレンチを設定したところ，本住居跡の床面・縄文土器が認められた。本住居跡の本格的な精査は，同観察ベルトの除去後に行った。本住居跡の周辺は倒木痕が錯綜していたが，東・西壁が比較的攪乱の影響を受けておらず，概ね小判形のプランを確認することができた。本住居跡の南部は，道路によってすでに削平されていた。本住居跡と他遺構との重複関係はなかった。本住居跡の北東側約７ｍの地点には，ほぼ同時期の14号住居跡がある。

住居跡内堆積土は，ℓ１の１層とした。ℓ１は本住居跡の床面全体を覆っており，壁付近においても土色・土質に変化は認められなかった。ℓ１内には焼土が含まれていたが，床面上の焼土が植物等によって巻き上げられたものと思われる。ℓ１は，基本土層観察ベルトにおいてＬⅡとほとんど区別が付かなかった。しかし，ℓ１の方がやや暗い土色で，また焼土を比較的多く含んでいたことからＬⅡと区別することができた。なお，ℓ１から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。このことから，本住居跡は自然に埋没した可能性が高い。

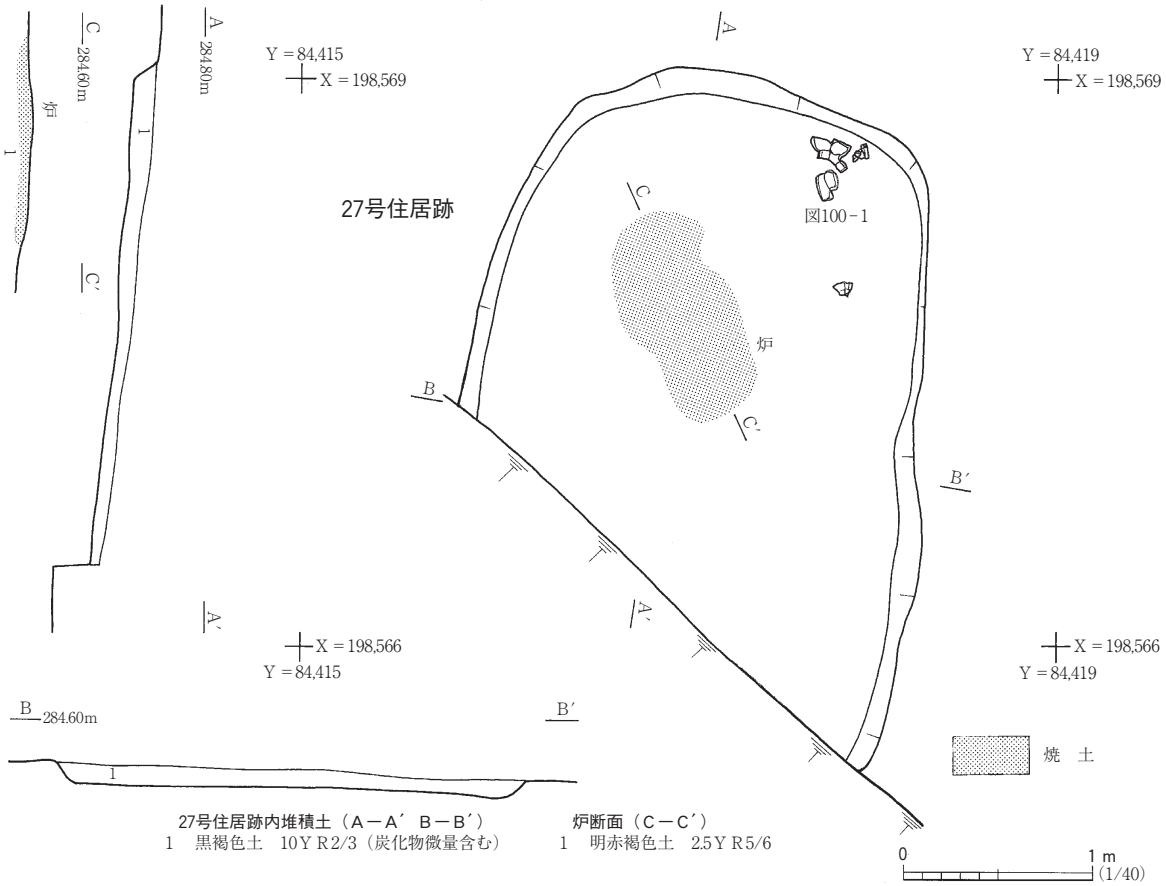


図99　27号住居跡

本住居跡の平面形は，南部が破壊されているが，遺存部の形状から南北に長い小判形であったと考えられる。本住居跡の規模は，南北方向が東壁の遺存値で3.2m，東西方向が2.5mである。東壁の方向はN15°Eを指し，立地斜面の等高線に対して約35°の角度で横切る。壁は，全体的に遺存状態が悪いが，床面から比較的丸味を帯びて立ち上がっている。壁の遺存高は12cm前後である。

本住居跡の床面はＬⅢ面を直接利用している。本住居跡の掘形は，ＬⅢを上面から５cm前後の深さまで掘り下げている。床面は植物等の影響によって起伏していたが，概ね平坦に仕上げられていたと思われる。床面は北から南方向に下がっており，その斜度は４°である。床面の東西方向はほぼ水平である。

本住居跡の中央部から北寄り床面上で，焼土面を１基検出した。焼土面の規模は南北112cm×東西58cmである。熱変の厚さは最大で８cmで，位置から住居の地床炉と推測する。本住居跡の内外から，柱穴と推測される小穴は確認できなかった。

遺　　物（図100，写真１－144・145）

本住居跡の床面から図100－１の縄文土器が出土した。その出土状況は，住居跡北部で口縁部を北側に向けて押し潰れたような状況であった。１の胎土には繊維痕が確認される。１の口縁部は無文で，口唇部には波状の貼付文が認められる。胴部の地文は反撚りの縄である。図100－２は，頁岩の剥片を利用した不定形石器で，表面の右辺に刃部加工が施されている。同図３は，表面の下端・右辺に刃部加工が施されており，その形状から掻器などの可能性が推測される。

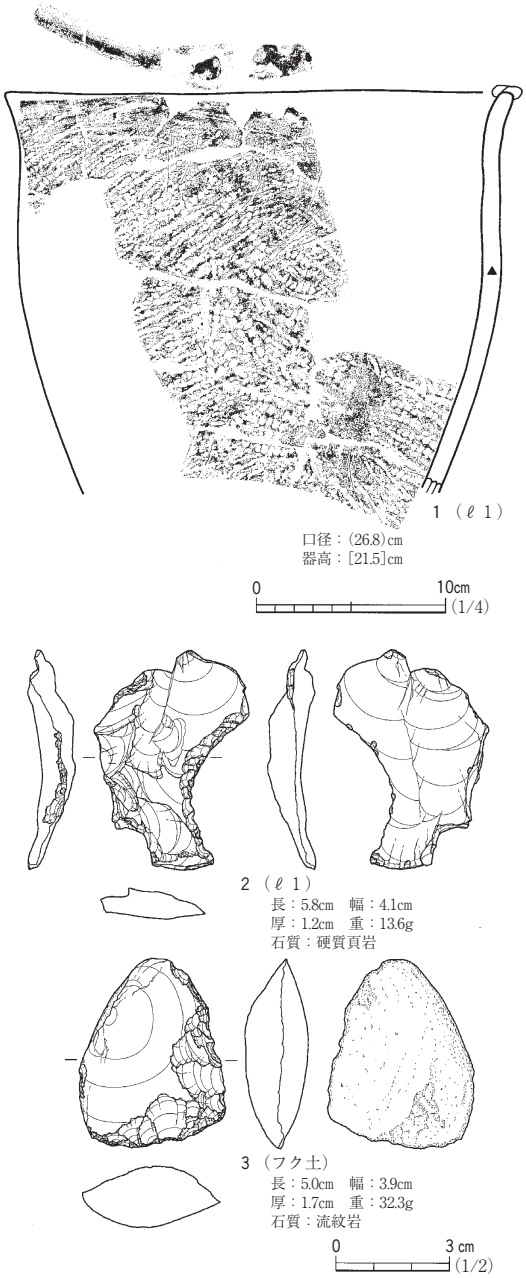


図100　27号住居跡出土遺物

ま　と　め

本住居跡の南部は後世の攪乱によって破壊されており，規模・形状については不明である。本住居跡の床面から地床炉と考えられる焼土面を検出したが，焼土面の位置は北側に寄っている。本住居跡の柱穴確認については断割り方式で行い，また床面を下げて再確認も実施したが，遺構の内外から柱穴を検出することはできなかった。本住居跡の時期については，出土遺物から縄文時代前期後葉と考えられる。

（小　向）

28号住居跡　ＳＩ28

遺　　構（図101，写真１－110）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構の発見は，土層確認のために設定したトレンチ断面から偶然確認したもので，その遺存部は住居跡北東部に限られる。本遺構は46号住居跡・53号土坑と重複するが，本住居跡が最も新しい。

本住居跡の堆積土は，２層に分けた。いずれも黄褐色系の堆積土で，基本土層ＬⅢに類似している。ℓ１・２の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，本遺構は自然に埋没した可能性が高い。本住居跡の平面形は，住居跡北東部の形状等から南北に長い長方形であったと推測される。東壁の方向は，Ｎ９°Ｅを指している。東壁・北壁の遺存長は，いずれも1.7mである。壁の遺存高は，北壁で24cmを測る。

床面は北から南方向へ７°の斜度で下がっており，やや勾配がある。床面から直径約55cmの焼土面を検出した。同焼土面の位置から本遺構の地床炉の可能性が高いと思われる。なお，本遺構の内外から小穴を確認することはできなかった。

遺　　物（図101，写真１－141）

本遺構から計10点の縄文土器が出土し，その内の２点を図示した。図101－１・２は，胎土に繊維

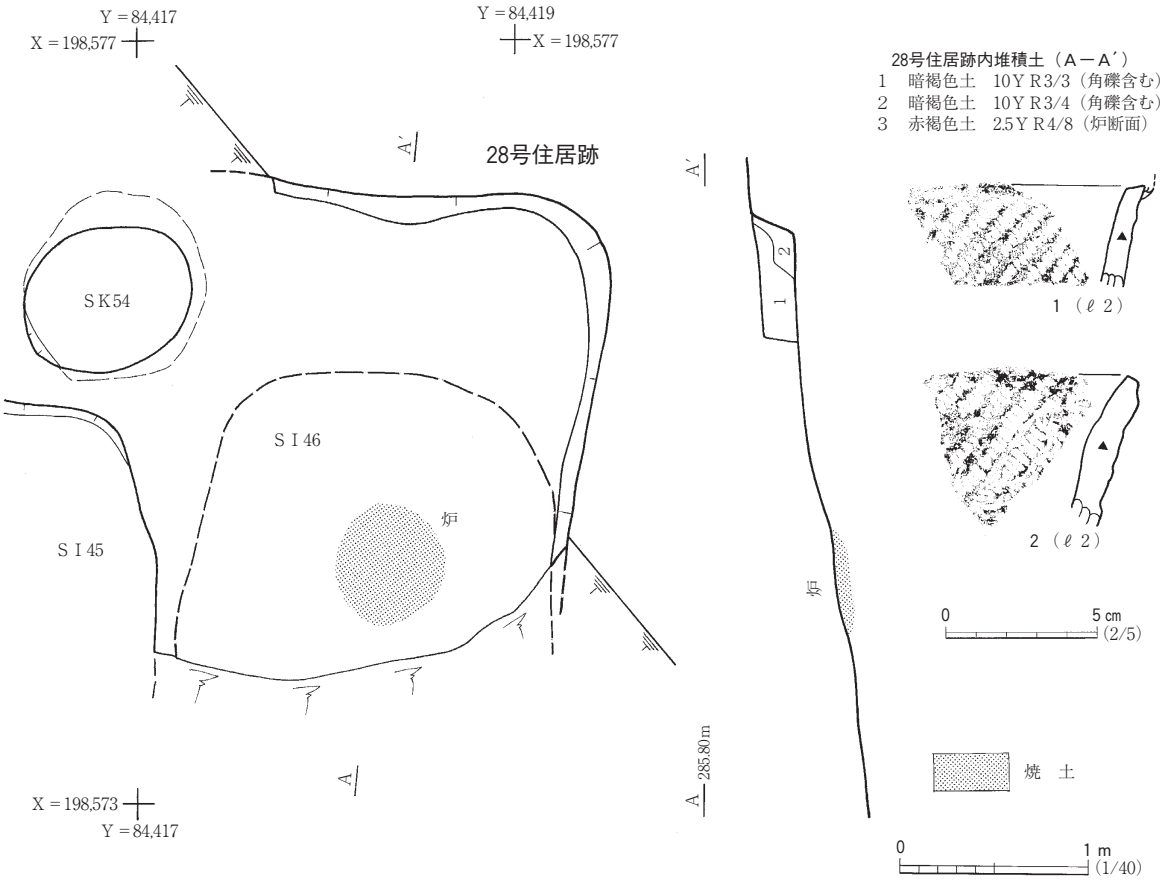


図101　28号住居跡・出土遺物

を含む口縁部の破片である。地文はいずれもＬＲ縄文である。１は直線的に開く器形で，その口唇部は平坦に仕上げられている。一方，２の口縁部は緩やかに外反しており，その口唇部も丸味を帯びている。

ま　と　め

28号住居跡はトレンチの掘削によって破壊してしまい，遺存状態が非常に悪い。東・北壁の遺存部・地床炉の位置から，本遺構の平面形は南北に長い長方形であったと推測される。本遺構の内外から柱穴を確認することができなかったため，上屋構造については不明である。本住居跡の時期については，出土土器等から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。　（香　川）

29号住居跡　ＳＩ29

遺　　構（図102，写真１－111）

本遺構は，Ｃ４－Ｄ・Ｅ６グリッドに位置する。遺構検出面は，東半部がＬⅢ中～下面，西半部がＬⅢ上面である。遺構検出面の標高は，280ｍ前後である。本遺構の発見は，土層確認のために設定したトレンチ断面から偶然確認したもので，同トレンチによって住居跡南東部の壁を破壊してしまった。本遺構の北側に25号土坑が接しているが，その新旧関係は不明である。

本遺構と時期が近いと推測される竪穴住居跡は，北東側約２ｍの地点に21号住居跡，東側約６ｍの地点に23号住居跡がある。また，本遺構の北西側約１ｍの地点に２号焼土遺構，東側２ｍの地点に４号焼土遺構がある。

住居跡内堆積土は，暗褐色土ℓ１の単層とした。ℓ１の土質は基本土層ＬⅢに類似するが，土色がＬⅢよりもわずかに暗い。ℓ１内には粒状の炭化物を微量含む。ＬⅢ内にも微量の炭化物が含まれているが，ℓ１の方がわずかに多い。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。おそらく本遺構は自然に埋没したものと考えられる。

本遺構の平面形は，住居跡南東部の壁を破壊してしまったが，東西方向に長い長方形を呈していたと考えられる。北西・南西角の形状は比較的丸みを帯びているが，北東角は直線的に折れ曲がる。本遺構の規模は，長軸幅が3.6ｍ，短軸幅が2.6ｍである。長軸幅/短軸幅の比率は1.38である。短軸方向は，ほぼ真北を指している。短軸方向は，立地斜面の等高線に対して約60°の角度で横切るように交わる。壁は，40°前後の角度で曲線的に立ち上がる。壁の遺存高は，北西角25㎝・南西角６㎝・北東角10㎝である。

床面は，ＬⅣ面を直接利用しており，掘形内から整地層は認められなかった。床面の短軸方向はほぼ水平である。しかし，長軸方向では東側に傾斜しており，その斜度は３°である。床面のほぼ全面で，踏み締まりのような汚れが観察された。床面から，焼土面など火を使用したような痕跡は確認できず，炉の有無については不明である。

本遺構内から計４個の小穴を確認した。Ｐ１～４は，いずれも壁沿いに位置する。Ｐ２・４は北東・南西角に位置する。Ｐ１・３は，南北で対面するような位置にある。Ｐ１～４の上端の直径は14㎝前後である。床面から小穴底面までの深さは，Ｐ１・３が15㎝前後，Ｐ２・４が23㎝前後であ

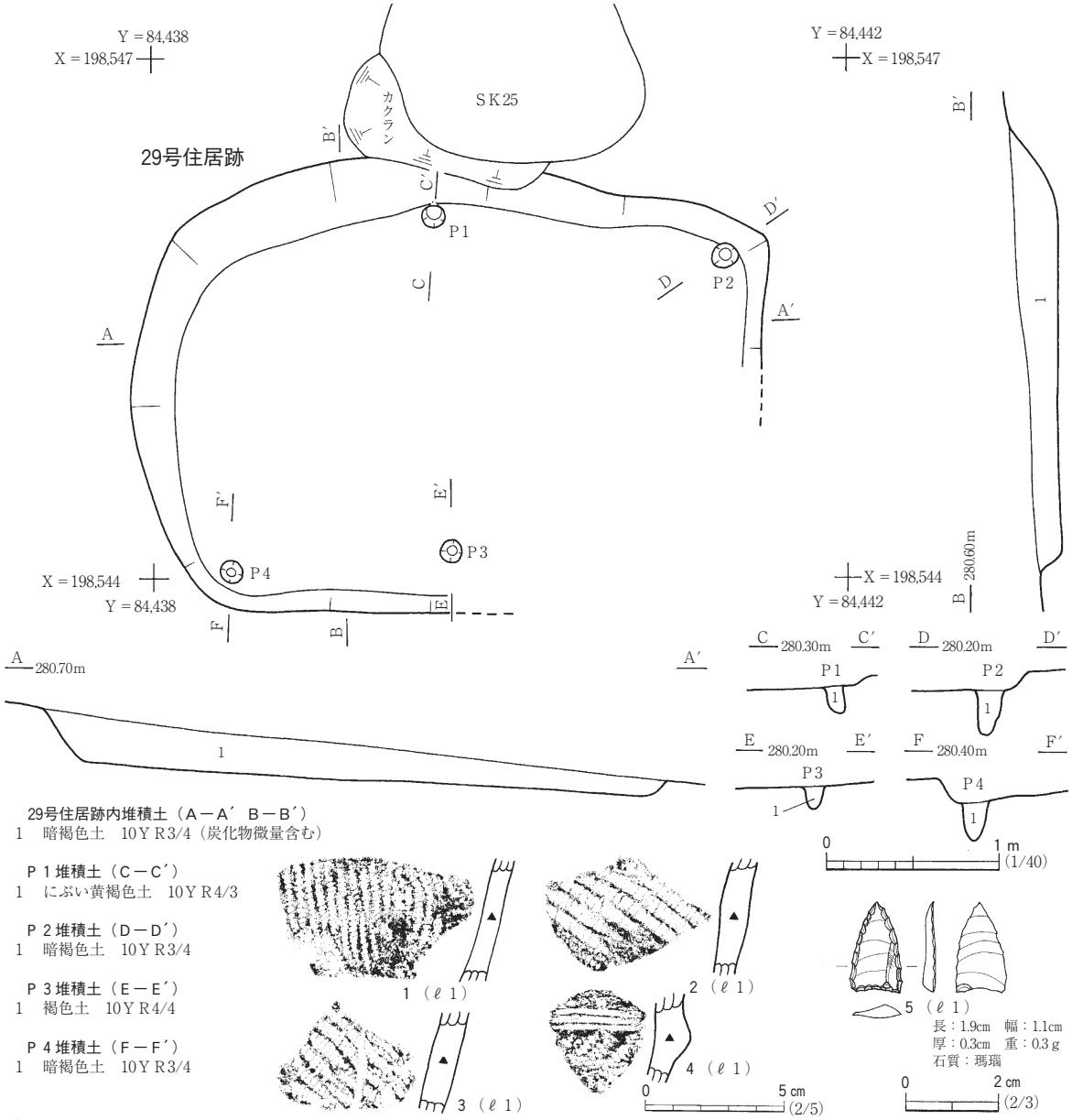


図102　29号住居跡・出土遺物

る。Ｐ１～４は形状・規模から柱穴の可能性もあるが，その配置に整然性を欠いている。

遺　　物（図102，写真１－146）

本遺構から出土した遺物を図102－１～５に示した。１～４の縄文土器はいずれも胎土に繊維を含む。１～３の地文はＲＬ縄文である。４は屈曲部から上が条痕文，下がＬＲ縄文となっている。５は縦長の剥片を利用した石鏃と思われ，表面に細部調整を行って刃部を作り出している。

ま　と　め

29号住居跡内から炉跡は確認できなかった。また，柱穴の有無も明確ではない。しかし，床面の踏み締まりのような汚れは生活痕の可能性があり，掘形の規模も近接する23・24号住居跡とほぼ同じことから，本遺構の性格を竪穴住居跡とした。29号住居跡の所属時期は，出土土器から縄文時代早期末葉頃と推測される。

（香　川）

30号住居跡　ＳＩ30

遺　　構（図103，写真１－112・113）

30号住居跡は西地区の最も北西寄りのＣ４－Ａ３グリッドに位置する。周辺の地形は，北西から南東へ下がる緩斜面となっている。標高は285.5mを測る。遺構検出面はＬⅣ上面で，褐色土の広がりとして検出した。他の遺構との重複はない。南半分が市道建設のため削られており，また南壁と床面が一部攪乱を受けていたが，遺構の遺存状態は比較的良好であった。

遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１・２は全体的にしまりが強く，粘性もある堆積土である。ℓ２は微量の炭化物粒を含む層である。ℓ１・２は斜面上方からレンズ状に堆積しており，このことから本遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

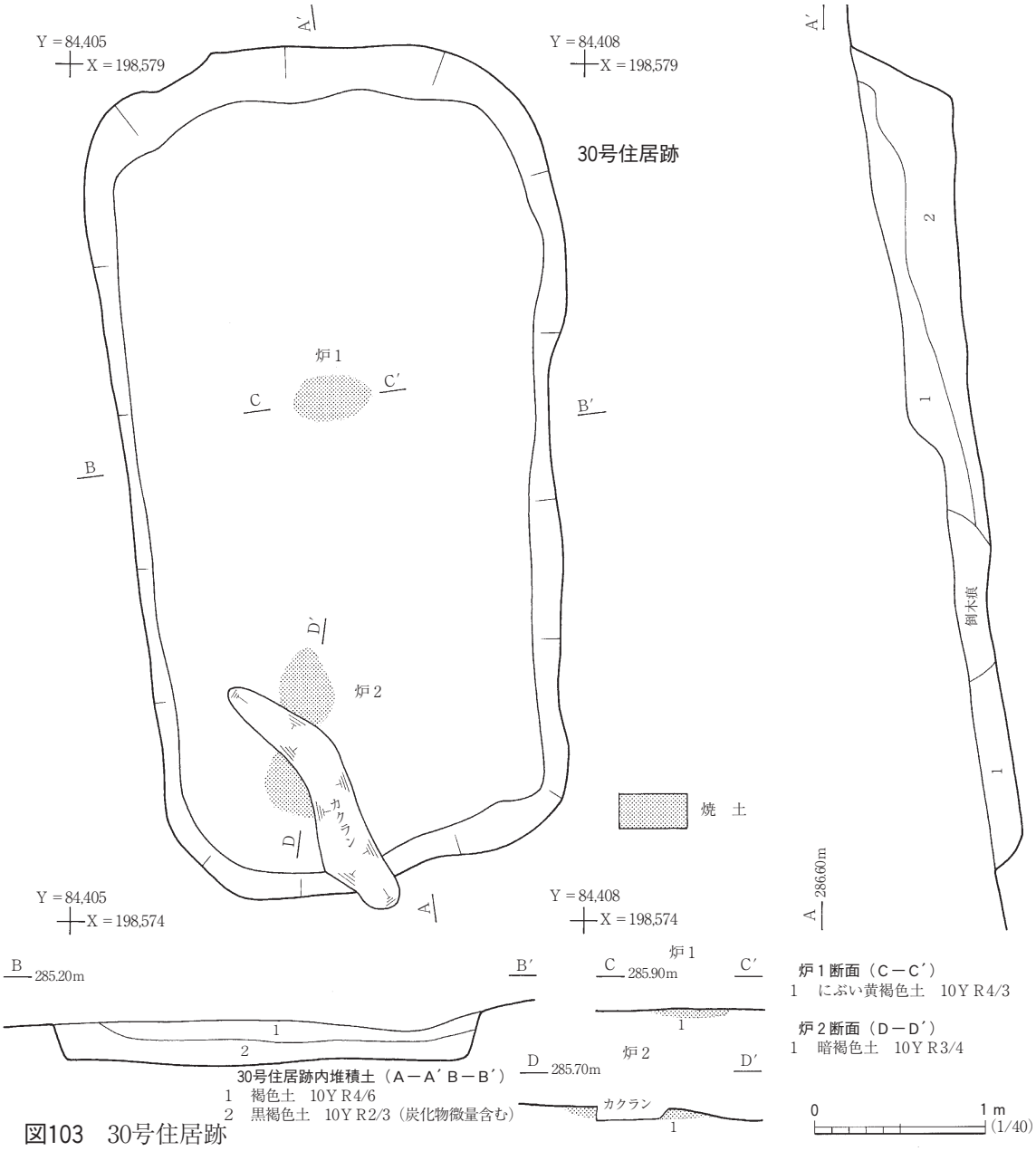


図103　30号住居跡

遺構の平面形は概ね長方形であるが，南壁に対し北壁の幅がやや広い。南北方向の長さは5.0mを測る。東西方向の規模は，北壁の長さが2.4m，南壁の長さが2.2mである。長軸幅/短軸幅の比率は2.15である。長軸方向はN10° Wである。遺構検出面から床面まで最も深いところでは62cmを測る。壁の立ち上がりは急角度で，北壁は65°を測る。床面はＬⅣ面を直接利用しており，概ね平坦に仕上げられているが，北から南方向へ緩やかに下がっている。

床面上から焼土面を２基検出した。炉１は床面のほぼ中央にあり，本遺構の地床炉と推測される。炉２は南壁に接近しており，また攪乱も受けているが，他遺構との重複が認められないため，炉２についても本遺構の地床炉であった可能性が高いと思われる。各焼土面の規模は，炉１が東西50cm×南北28cm，炉２が東西35cm×南北100cmである。本遺構の柱穴確認についてはすべて断割り方式で行い，遺構の内外で実施したが，柱穴と推測できるものは検出できなかった。

遺　　物（図104，写真１－146・147）

30号住居跡から出土した遺物を図104－１～８に示した。１～６はいずれもℓ２から出土した縄文土器で，１～５は胎土に繊維を含んでいる。１・２は同一個体の土器で，口縁部が直線的に開く器形と推測される。１・２の地文はＲＬ縄文である。３はＲ原体によるループ状の圧痕文が認められる。４・５の地文は撚糸文である。６は繊維を含まない堅緻な土器で，地文はＲＬ縄文である。

７は炉２付近の攪乱部から出土した磨製石斧で，本遺構との関連性は不明である。８は片面加工の石器で，その用途には掻器などが考えられる。

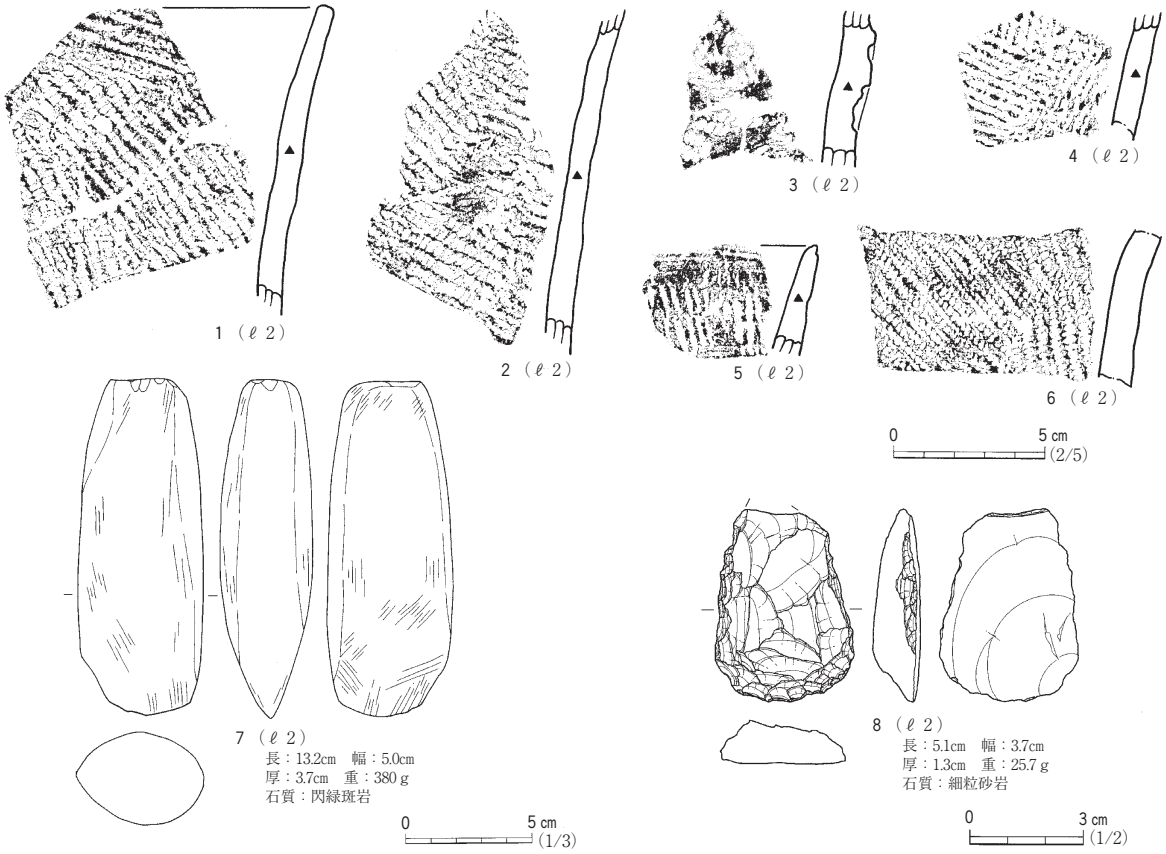


図104　30号住居跡出土遺物

ま　と　め

本住居跡は，平面形が長方形を呈する竪穴住居跡である。本住居跡の長軸は，概ね南北方向を指しており，立地斜面の等高線に対して直交している。床面から２基の焼土面が確認され，同一住居内に複数の地床炉が存在した可能性がある。掘形は比較的深く遺存状態の良好な竪穴住居跡であったが，遺構の内外から柱穴を確認することはできなかった。そのため，上屋構造については不明である。本住居跡の所属時期は，床面遺物がないため不明であるが，ℓ２から出土した土器から縄文時代前期後半の可能性がある。（宮　田）

43号住居跡　ＳＩ43

遺　　構（図105）

本遺構は，Ｃ４－Ｃ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ中面である。本遺構は，縄文時代前期後葉の14号住居跡によって大きく破壊されており，西壁と北壁の一部しか遺存していない。本遺構と時期が近い竪穴住居跡は，南側約２ｍの地点に12号住居跡がある。また，西側約３ｍの地点には28号住居跡がある。

住居跡内堆積土は，暗褐色土ℓ１の単層とした。ℓ１の土質は，基本土層ＬⅢに類似している。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

西壁の形状は直線的であり，その方向はN 25° Wを指している。西壁の長さは3.8mである。北壁は14号住居跡との重複部分にもわずかに遺存しており，その形状は曲線的である。北壁の南側約１ｍの地点で，53cm×44cmの焼土面を検出した。本遺構の内外から小穴は確認できなかった。

ま　と　め

43号住居跡の形状は，遺存部から南北方向に長い隅丸長方形の可能性が高い。床面から地床炉と推測される焼土面を確認した。しかし，柱穴は確認できず，本遺構の上屋構造は不明である。本遺構の時期は，出土遺物はないが住居内堆積土から縄文時代早期末葉頃の可能性が高い。（香　川）

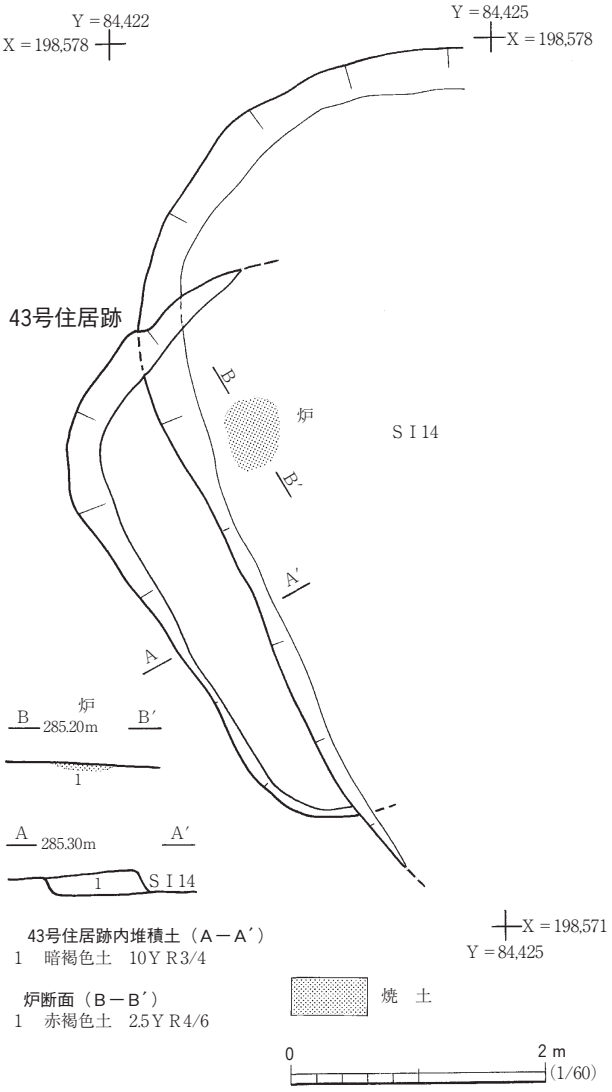


図105　43号住居跡

44号住居跡　ＳＩ44

遺　　構（図106，写真１－114）

44号住居跡は，Ｃ４－Ｃ５グリッドの調査区境界で検出した遺構である。遺構検出面はＬⅣ上面で，黒褐色土の広がりとして確認した。周辺の地形は北西から南東へ下がる緩斜面となっており，標高は281.9m前後を測る。他の遺構との重複はない。本遺構の東側約５ｍの地点には16号住居跡がある。また，北東側約５ｍの地点には25号住居跡がある。

本住居跡は，道路工事の削平によって旧表土が失われていた箇所であるが，調査区境界の断面から，本住居跡の掘り込み面はＬⅡ下面であることが確認できた。遺構内堆積土は，黒褐色土ℓ１の１層とした。ℓ１の土色はＬⅡに類似するが，ℓ１の方がわずかに明るい。ℓ１内には，微量の炭化物が含まれていた。ℓ１の土層観察から人為的に埋め戻されたような状況は確認できなかった。おそらく，本住居跡は自然に埋没したものと推測される。

本遺構の大半が調査区外にあると推測されるため，本遺構の平面形は不明である。今回検出した部分は，北壁と西壁の一部と考えられる。北壁から東壁へのコーナー部は，鈍角に曲がっている。

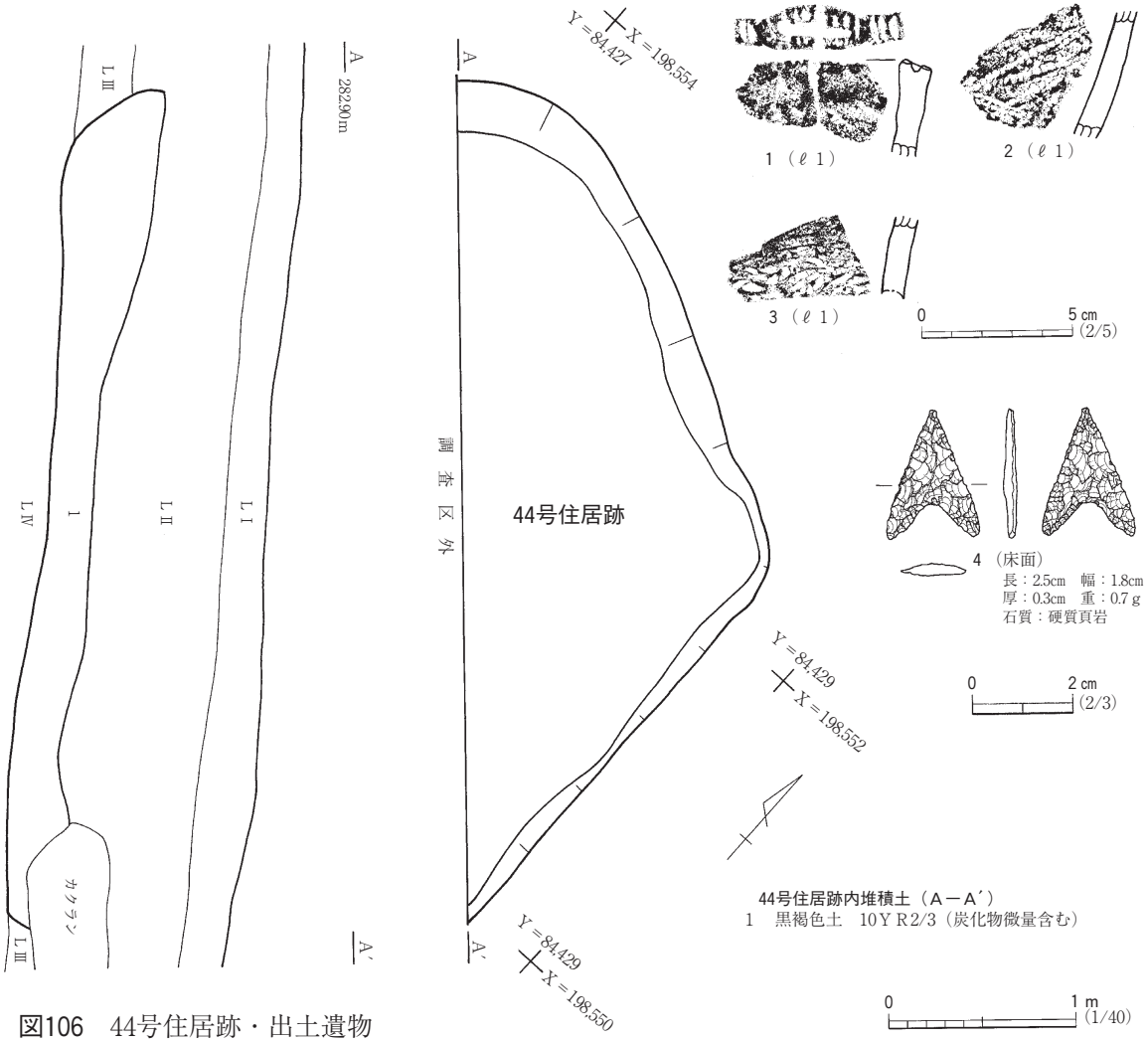


図106　44号住居跡・出土遺物

同様のコーナーを持つ住居跡には，16号住居跡の北東コーナーがある。北壁の全長は3.2m，東壁の遺存長は2.4mである。壁の立ち上がりは，曲線的である。壁の遺存高は，調査区境界での断面で最大30cmを計測した。

床面は，ＬⅣまで掘り込んでいるが，貼床などの整地層は確認できなかった。床面はほぼ平坦であるが，南西方向に下がっている。なお，本遺構の内外から小穴は確認できなかった。また，本遺構内から焼土面は確認できなかった。

遺　　物（図106，写真１－146）

44号住居跡から出土した遺物を図106－１～４に掲載した。１は波状口縁の突起部であり，中央が窪められている。１の口唇部には刻みが施されている。２の地文は，反拠りとなっている。３は口縁部に近い破片で，無文部の下に結節回転文が認められる。４は凹基鏃である。４の形状は精美な二等辺三角形で，剥離調整も微細である。

ま　と　め

44号住居跡は，そのほとんどが調査区外にかかっているため確認できた範囲が少ない。また，本住居跡から炉跡や柱穴を確認することもできず不明点が多い。しかし，北東コーナー部を見る限りでは，本住居跡の平面形について，16号住居跡との類似性を指摘することも可能である。

本住居跡の所属時期は，掘り込み面がＬⅡ下面であることや，出土土器などから縄文時代前期後半の可能性が高いと考えられる。（宮　田）

45号住居跡　ＳＩ45

遺　　構（図107，写真１－110）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ下面～ＬⅣ上面で，その標高は約285mである。本遺構の周辺部は倒木痕が密集する一帯で，住居跡南西部が攪乱によって破壊されていた。本遺構は，28号住居跡・53号土坑と重複するが，28号住居跡よりも古く，56号土坑よりも新しい。本遺構の西側には46号住居跡が近接している。

住居跡内堆積土は，褐色土ℓ１の単層とした。ℓ１は土質・土色は基本土層ＬⅢに類似しているが，ℓ１の方がわずかに粘性があり，また暗い色であった。ℓ１の土層観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず，本遺構は自然に埋没したものと考えられる。

本遺構の平面形は，南北に長い長方形を呈する。長軸方向はＮ１°Ｗで，ほぼ真北を指している。本遺構の規模は，長軸幅2.7m・短軸幅2.0mである。長軸幅/短軸幅の比率は1.35である。北壁は約70°前後の角度で直線的に立ち上がり，床面との境界は比較的明瞭である。北壁の遺存高は，32cmである。床面はＬⅣ面を直接利用しており，掘形内から整地層は認められなかった。床面に起伏はほとんどなく，平坦に仕上げられている。床面は南方向へわずかに傾斜しており，その斜度は２°である。床面から小穴状の変色部分を複数確認し，すべて断割りを行った。しかし，植物痕と思われる攪乱がほとんどで，柱穴の有無については確認できなかった。また，住居跡内から焼土面を確

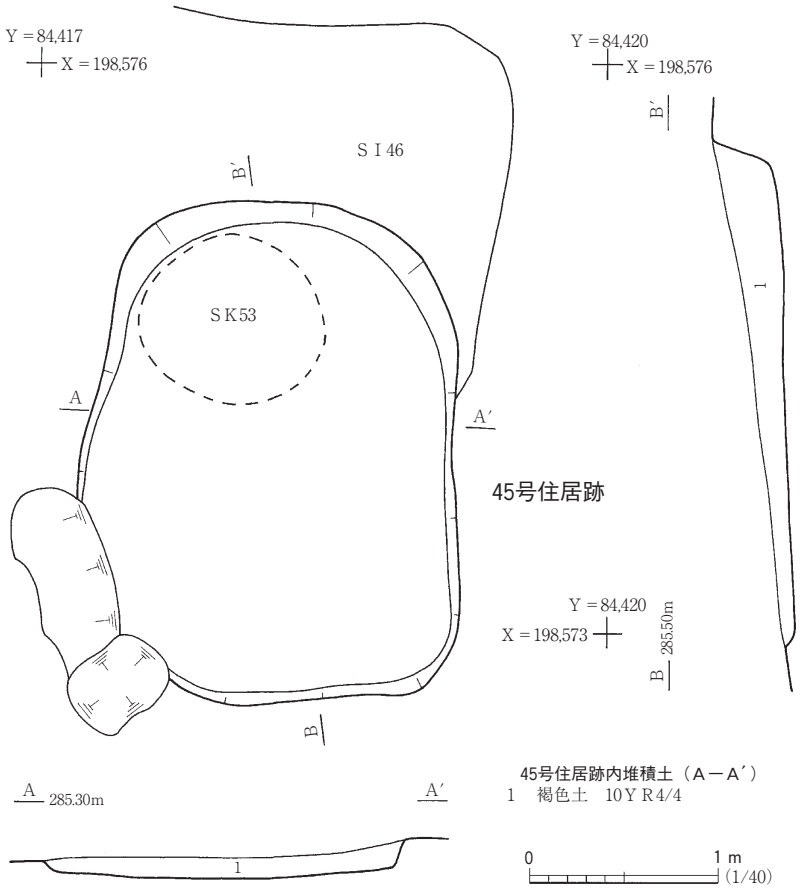


図107　45号住居跡

認することはできず，炉跡の有無についても確認できなかった。なお，本遺構から遺物は出土していない。

ま　と　め

45号住居跡は，炉跡・柱穴を確認することができなかった。しかし，掘形の成形が比較的丁寧であることから，竪穴住居跡の可能性が高いと考えられる。

本遺構から遺物は出土しなかったが，28号住居跡よりも古く，また住居跡内堆積土がＬⅢに類似している。よって，45号住居跡の時期は，縄文時代早期末葉頃の可能性が高い。　（香　川）

46号住居跡　ＳＩ46

遺　　構（図108，写真１－115）

本住居跡は西地区北西部，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ下面である。本住居跡の周辺は，西地区でも遺構や攪乱の密度が特に高い。本住居跡は遺構の重複や倒木痕の攪乱を受けてプランの大部分が失われており，当初は存在を確認できなかった。重複遺構や倒木痕の精査が終了した段階で東壁・西壁のプランを確認し，残存していたプランの形状と柱穴の検出によって最終的に竪穴住居跡と判断した。本住居跡の遺存状況は，西壁部分と北東角付近がわずかに確認できた程度である。本住居跡は56号土坑・６号焼土遺構と重複しているが，攪乱が著しくその新旧関係は不明である。本住居跡の東側には45号住居跡・53号土坑が隣接している。また，本住居跡の南側約1.8mには61号土坑が，南側約0.5mには10号焼土遺構がある。

本住居跡内の堆積土は，遺構中央を２個以上の倒木痕等による攪乱を受けており，多くの部分が失われていた。遺構内堆積土が確認できたのは，主に西壁沿いの箇所である。遺構内堆積土は，灰黄褐色砂質土ℓ１の単層とした。ℓ１は少量の炭化物・焼土粒を含むが，周囲の攪乱による影響の可能性もある。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

本住居跡の平面形は，遺存部の形状から東西に長い長方形を呈していたと思われる。遺存部から

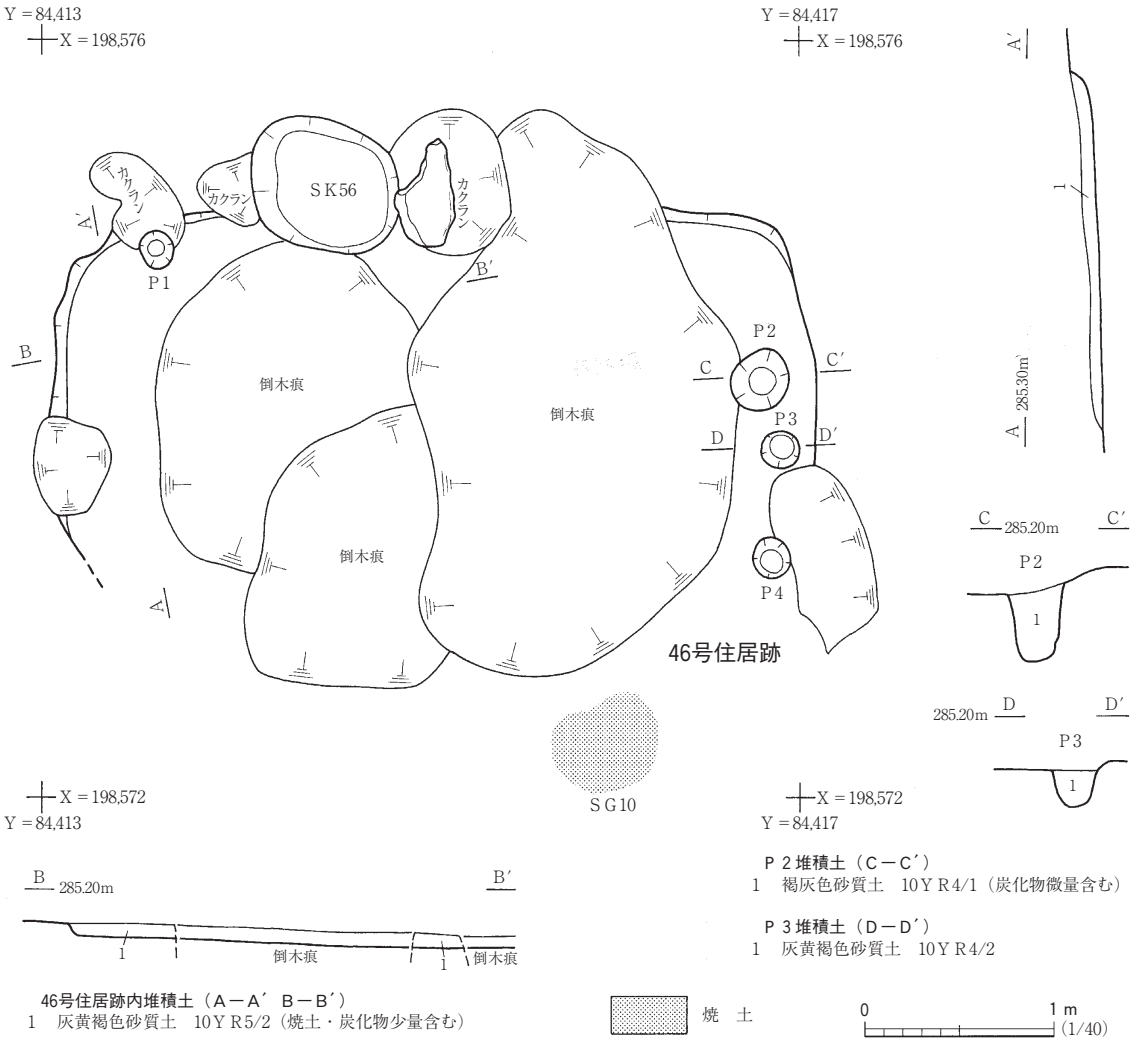


図108　46号住居跡

推測される本住居跡の規模は，東西方向が約４ｍ，南北方向が２ｍ強である。西壁の方向はＮ２°Ｅで，ほぼ真北を指している。壁の遺存高は，北西部で８cmを測る。床面は，北から南方向へわずかに傾斜している。床面からは小穴を計４個検出した。Ｐ１は北西角に位置し，上端が攪乱を受けているが直径約20cm・深さ20cmの柱穴状を呈する。Ｐ２～４も東壁沿いで検出した柱穴状の小穴で，各規模は，Ｐ２が上端の直径27cm・深さ37cm，Ｐ３・４が上端の直径20cm前後・深さ18cm前後である。

本住居跡の中央南部で重複する６号焼土遺構は，倒木痕によって反転した黄褐色土面から検出されたものである。しかし，６号焼土遺構の位置から，本住居跡の炉であった可能性も考えられる。

ま　と　め

本住居跡は，複数の倒木痕などに多くの部分を破壊されているが，遺存部の形状から東西に長い長方形の竪穴住居跡であると推測する。本住居跡から計４個の小穴を検出したが，各小穴はその形状から柱穴の可能性も考えられる。本住居跡の所属時期については，出土遺物等に乏しく詳細に判断することは難しい。しかし，周囲の同規模の住居跡の所属時期が概ね縄文時代早期末葉～前期初頭であることから，本住居跡もほぼ同時期に属している可能性がある。　（小　向）

第３節　土　　坑

西地区から，計20基の土坑を確認した。土坑の分布は，竪穴住居跡の分布域と概ね一致しており，特に縄文時代早期末葉～前期初頭頃の住居跡と接近しているものが多い。土坑の平面形は円形を呈するものが主体であるが，その断面形は筒型に掘り込まれたものが多い。筒型土坑については，遺構内堆積土が自然流入を示しているものがほとんどで，貯蔵穴等の可能性が考えられる。

13号土坑　ＳＫ13（図109・113，写真１－116・149）

本土坑は，Ｃ４－Ｃ２グリッドに位置し，西地区において最も北側にある遺構である。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構と重複する他遺構はない。本遺構の東側３ｍの地点には13号住居跡が近接している。本土坑の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は，微量の炭化物と１～８㎝の花崗岩を含む黒褐色土である。ℓ１の土層観察から人為堆積の痕跡は確認できず，本土坑は自然堆積により埋没した可能性が考えられる。本土坑跡の平面形は，東西がやや長い方形を呈する。

本土坑の規模は，長軸幅2.2m・短軸幅2.0mを測る。壁の立ち上がりは直線的で，北壁は垂直に近い。遺構検出面から底面までの深さは，最深部の北壁で20㎝を測る。底面は概ね平坦であるが，北から南方向へわずかに傾斜している。

本土坑から，縄文土器片が計37点出土し，その内の５点を図示した。図113－１～５は，いずれも胎土に繊維を含む。１・４・５は，３本以上のrをＬに撚りあわせた原体による単節斜行縄文が施される。２はＬＲ単節斜行縄文が，３はＲＬ単節斜行縄文が施される。

本土坑の性格については竪穴状を呈することから，住居跡の可能性も考えられた。しかし，柱穴など住居跡の根拠となるような施設は確認できなかったため，本土坑の性格は不明である。なお，本土坑の時期は，出土土器などから縄文時代早期末葉～前期初頭と考えられる。　　（小　向）

14号土坑　ＳＫ14（図109・113，写真１－116・150）

14号土坑は西地区の中央南寄り，Ｃ４－Ｅ５グリッドに位置する。周辺の地形は，北西から南東へ下がる緩斜面である。標高は280.6m前後である。遺構検出面はＬⅢ上面である。北側が攪乱を受け，遺存状態は良好でない。本遺構の西部で17号土坑と重複し，これよりも新しい。本遺構の南部は21号住居跡と重複関係にあったと思われるが，攪乱による影響のため新旧は不明である。

遺構内堆積土は６層に分けた。ℓ１は，基本土層のＬⅡに由来する黒色土と思われる。ℓ２～６の土層観察から，各層は北側斜面からの土砂の流れ込みによって徐々に埋まった自然堆積層と判断した。

本遺構の平面形は楕円形を呈し，東西130㎝，南北145㎝を測る。遺構検出面から底面まで最も深い部分は72㎝を測る。壁は，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦に作られている。

本土坑からは縄文土器が43点，石器１点が出土した。このうち土器片９点，石鏃１点を図113－

６～15に示した。６は底面から出土した資料で肥厚する口唇部をもち，口縁部と胴部は凸帯によって区切られ，口縁部はＬ原体を渦巻き状に押し付けて文様を描出している。胴部の地文はＲＬ縄文である。７は，外反気味の胴部から口縁部は直立気味に立ち上がり，その境界に稜線が付く。地文はＲＬ縄文で，口縁部と胴部で施文方向を変えているため，羽状縄文のように見える。８・９は縄文条痕土器である。８の裏面の地文は，口唇～口縁部が縄文，胴部が条痕文となっている。胴部破片の９の裏面には，条痕文が施されている。10・11・14は羽状縄文を施す胴部の資料である。12は口唇部から下垂する隆帯の上に刺突文を施している。13は撚糸文の土器である。15は小剥片を利用した小型の凹基石鏃である。

本遺構の底面から縄文土器が出土しており，当初は墓等の可能性も考えた。しかし，本遺構は自然に埋没した可能性が高いと推測されるため，本遺構の機能については貯蔵穴等の可能性がある。本遺構の時期については，出土遺物から縄文時代早期末葉～前期初頭と考えられる。　（宮　田）

15号土坑　ＳＫ15　（図109・113，写真１－116・151）

本土坑は西地区中央部，Ｃ４－Ｄ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，他の遺構との重複関係はなかった。本土坑跡の南西約1.5ｍには，18号土坑・19号土坑が近接している。本土坑跡の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は，1cm前後の石と微量の炭化物を含む暗褐色土である。北壁沿いの底面上には，20cm前後の花崗岩が認められた。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

本土坑跡の形状・規模は長軸幅1.2ｍ・短軸幅1.1ｍで，平面形は方形に近い。壁の深さは遺存状態が良好な北壁部で20cm前後であるが，南壁部は４cm前後であり遺存状態が悪い。北壁の底面からの立ち上がりは，ほぼ垂直である。底面は概ね平坦であるが，若干南に向かい傾斜している。

本遺構から出土した遺物を図113－16～24に示した。土器は全て胎土中に繊維を含む。土器の地文については，16にＲＬ斜行縄文，17にＬＲ・ＲＬ原体による羽状縄文が施される他は，全てＬＲ単節縄文である。24は，つまみ状の突起が作り出された石器である。その形態は石匙状であるが，両面加工によって刃部が形成されている。また，その先端部は石槍状に尖っている。

本土坑は，遺構内堆積土の観察から自然に埋没した可能性が高い。底面からは縄文土器・花崗岩が検出されたが，土砂崩れ等による流入の可能性がある。本土坑は比較的遺存状態が悪く，特に南半部の削平が著しい。そのため，本土坑の性格は不明である。なお，本土坑の時期は，出土遺物から縄文時代早期末葉頃である。　（小　向）

16号土坑　ＳＫ16　（図109・114，写真１－117・149）

本遺構は，Ｃ４－Ｃ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，円形のプラン内に直径約50cmの焼土範囲を確認した。この焼土範囲については，本遺構が埋没した跡地を利用して火が焚かれた可能性も想定していた。しかし，焼土範囲の断面観察を行った結果，攪乱等によって原位置か

ら移動した可能性もあり，本遺構と焼土範囲の関係は不明である。本遺構の北西側1.5mの地点には，縄文時代早期末葉頃の12号住居跡がある。

本遺構の堆積土は，４層に分けた。ℓ１は遺構検出面で確認した焼土層で，暗褐色土塊を混入しており，植物等によって他所から移動してきた可能性がある。ℓ２～４はレンズ状に堆積しており，いずれも花崗岩を含んでいる。特に最下層のℓ４内には30cm前後の石が多量に含まれていた。ℓ２は基本土層ＬⅡに類似している。ℓ２～４の様相から自然堆積の可能性が高いと推測され，またℓ４から本遺構は土砂崩れ等によって埋没した可能性もある。本遺構の平面形は概ね円形を呈し，その直径は約170cmである。底面は，ほぼ水平に仕上げられている。壁は，底面から70°以上の急角度で立ち上がっている。遺構検出面から底面までの深さは105cmである。

本遺構の堆積土から縄文土器が出土しており，図114－１～３に示した。１・２は，胎土に繊維を含む。１は緩やかに外反する口縁部破片で，地文はＲＬ縄文である。２の地文はＬＲ縄文である。３は底部縁辺の小破片で，網代痕が認められる。

本遺構は堆積土の状況から自然に埋没した可能性が高いが，その機能については確認することができなかった。可能性としては比較的大形の貯蔵穴等が考えられるが，明らかではない。本遺構の時期については共伴遺物がなく不明であるが，遺構内の堆積土等から縄文時代早期～前期の間と考えられる。（香　川）

17号土坑　ＳＫ17　（図109，写真１－116）

17号土坑は，Ｃ４－Ｅ５グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構の東部で14号土坑と重複し，本遺構の方が古い。

遺構内堆積土は，２層に分けた。ℓ１はしまり弱くやや粘性があり，３cm大の礫を含んでいる。ℓ２はしまり良くやや粘性があり，５cm大の礫を含む。ℓ１・２の土層観察から，人為的に埋められたような痕跡は確認できなかった。

本遺構は14号土坑によって大きく破壊されており，その全容は不明である。本土坑の規模は，南北幅が100cm，東西幅が遺存長で70cmを測る。遺構検出面から最も深い部分で33cmである。壁は北・西壁が比較的緩やかであり，南壁はそれらに比して急角度である。なお，本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は遺存状態が悪く，不明点が多い。本遺構の時期は，14号土坑との重複関係から縄文時代早期末葉～前期初頭頃の可能性が考えられる。（宮　田）

18号土坑　ＳＫ18　（図110・114，写真１－117・152）

本遺構は，西地区中央部Ｃ４－Ｄ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，褐色土面に対し暗褐色のプランとして確認した。他の遺構との重複関係は無かった。西側約0.5mには19号土坑が，北東側約1.5mには15号土坑が近接する。本土坑の堆積土はℓ１の単層とした。ℓ１は礫を

含む暗褐色土で，植物の根による小規模な撹乱を複数受けていた。礫は主に直径10㎜以下であるが，北壁際・床面直上では37㎝以上のものが見られる。ℓ１の土層観察では人為堆積の痕跡は確認できなかったため，本遺構は自然堆積により埋没したものと思われる。

本遺構の規模は長軸幅1.2m・短軸幅0.9mで，南北に長い楕円形である。南壁は比較的緩やかに立ち上がるが，他の壁はほぼ垂直である。遺構検出面から底面までは最も深い北壁側で55㎝を測り，底面は水平である。

本土坑から出土した縄文土器・石器を図114－４～10に示した。４～７の土器は，いずれも胎土に繊維を含む。５は羽状縄文が認められる。６は口縁部に近い破片と思われ，棒状工具によって菱形文が施されている。７は耳状の突起が付いた口縁部破片で，突起には刺突が施されている。８・９は石鏃で，８が平基鏃，９が抉りの浅い凹鏃である。９の先端部は欠損している。10は横型の石匙で，刃部の平面形は三角形に近い。10のつまみは左側が欠損している。

本遺構は自然に埋没したものと推測されるが，その機能について判断できるような痕跡を確認することはできなかった。本遺構の時期についても不明であるが，出土遺物等から縄文時代早期末葉～前期前半の間と考えられる。（小　向）

19号土坑　ＳＫ19　（図110，写真１－117）

本遺構は，西地区中央部のＣ４－Ｄ４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。褐色土面に対し，黒褐色～暗褐色のプランとして確認した。他の遺構との重複関係は無かった。本遺構の東側約0.5mには18号土坑が近接し，南側約４mには16号住居跡がある。本土坑跡の堆積土は２層に分けた。ℓ１は１㎝以下の礫を少量含む黒褐色土で，主に斜面下方側に堆積する。ℓ２は斜面上方側に堆積し，７㎝～20㎝の礫を含む暗褐色土である。ℓ１・２の土層から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

本遺構の平面形は洋梨形を呈するが，中・下場は東西に長い楕円形を呈する。本遺構の規模は長軸方向が1.7m，短軸方向が最長1.4m・最短0.6mである。底面の規模は長軸方向が70㎝・短軸方向が45㎝である。遺構検出面から底面までの深さは，最大で32㎝を測る。壁の立ち上がりは緩やかであり，また曲線的である。

本遺構は不明点が多く，その機能について明らかにすることはできなかった。また，出土遺物も認められなかったが，本遺構の時期については遺構内堆積土等の状況から縄文時代に位置付けられると思われる。（小　向）

20号土坑　ＳＫ20　（図110・114，写真１－117・149）

20号土坑は，Ｃ４－Ｅ５・６グリッドにまたがって位置する。周辺の地形は北西から南東へ下がる緩斜面である。遺構検出面はＬⅢ上面であり，暗褐色土の広がりとして検出した。本遺構の東部は21号住居跡によって破壊されている。

遺構内堆積土は暗褐色土ℓ１の１層とした。ℓ１内には，３～５㎝の石と微量の炭化物が含まれていた。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。遺構の平面形は不明だが，東西の遺存長120㎝，南北190㎝を測る。遺構検出面から底面まで最も深い位置で約37㎝を測る。底面はほぼ平坦である。壁面の立ち上がりは，急角度である。

本遺構からは図114－11が出土した。資料上部には，竹管状の施文具を用いた連続刺突文が認められる。胎土には繊維を含む。本遺構は比較的大形の土坑であり，住居跡の可能性も考えられたが遺存状態が悪く，その全容は不明である。本遺構の時期については，21号住居跡との重複関係から縄文時代早期末葉～前期初頭頃の可能性が考えられる。（宮　田）

21号土坑　ＳＫ21　（図110，写真１－118）

21号土坑はＣ４－Ｅ６グリッドに位置する。本遺構は21号住居跡の床面で検出したもので，その新旧関係は本土坑の方が古い。

遺構内堆積土は，炭化物粒を含む暗褐色土ℓ１の１層とした。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。本遺構の平面形は楕円形である。本遺構の規模は東西幅165㎝・南北幅110㎝である。遺構検出面から底面までの深さは，40㎝を測る。壁面は南東壁がやや緩やかであるが，概ね急角度で立ち上がっている。

本遺構の底面から，縄文時代早期末葉頃の土器が出土したが遺存状態が非常に悪く図化ができなかった。本遺構の性格については，把握することができなかった。本遺構の時期については，出土遺物から縄文時代早期末葉頃である。（宮　田）

22号土坑　ＳＫ22　（図111・114，写真１－118・149）

22号土坑は，Ｃ４－Ｆ７グリッドに位置する。周辺の地形は北西から南東へ下がる緩斜面であり，標高は約278.6ｍである。他の遺構と重複はなく，北西側に22号住居跡が近接して存在する。遺構検出面はＬⅢ上面で，暗褐色土の広がりとして検出した。

遺構内堆積土は２層に分けた。ℓ１・２ともしまりがなく，５㎜大の小石を多く含む。また，ℓ１には人頭大の大型礫が含まれていた。ℓ２が壁際の三角堆積の様相を示すことから，本土坑は自然に埋没したものと考えられる。

本土坑の平面形は，概ね隅丸の方形である。本遺構の規模は，東西幅210㎝，南北幅220㎝である。南北線の方向はＮ17°Ｗである。遺構検出面から底面までの深さは30㎝である。南向き斜面のため北壁の遺存状態が比較的良好である。北壁は55°の角度で立ち上がる。底面は起伏があり，平坦には仕上げられていない。

本遺構から出土した縄文土器を図114－12に示した。12は胎土に繊維を含む胴部破片で，地文はＬＲ縄文である。本遺構の平面形は比較的整っており，当初は小型住居跡の可能性も考えられた。しかし底面は起伏があり，また焼土面等も確認できなかったことから，本遺構の性格については不

明である。なお，本遺構の所属時期については，判断材料に乏しいが縄文時代早期末葉～前期の間と考えられる。（宮　田）

23号土坑　ＳＫ23　（図110・114，写真１－118・149）

本遺構は，西地区南部のＣ４－Ｆ７グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面で，褐色土面に対し，にぶい黄褐色のプランとして確認した。本遺構の南西側約4mには22号土坑がある。

本遺構内の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は，粘性がやや強いにぶい黄褐色土で，ＬⅢの土質に類似している。ℓ１の土層観察から，人為堆積の痕跡は確認できず，本遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。本遺構は南北に長い形状で，東壁の中央が内側に湾曲している。本遺構の規模は，長軸方向が170cm，短軸方向が最大で92cmを測る。遺構確認面から底面までの深さは，最深部で50cmを測る。壁は比較的急角度で立ち上がっている。

図114－13は，本遺構のℓ１から出土した縄文土器で，胎土中に繊維を含んでいる。地文はＬＲ縄文である。なお，本遺構の機能については，不明点が多く，明らかにすることができなかった。本遺構の時期については，堆積土の状況等から縄文時代早期末葉頃と思われる。（小　向）

24号土坑　ＳＫ24　（図111・114，写真１－118・153）

本遺構の位置は，Ｃ４－Ｃ３グリッドである。本遺構は14号住居跡南部の床面から確認され，遺構検出面はＬⅢ面である。14号住居跡との新旧関係は，本遺構の方が古い。本遺構の堆積土は３層に分けた。ℓ１の土色は，重複する14号住居跡のℓ２に類似している。ℓ２・３はいずれも暗褐色系の堆積土で，ℓ３内には少量の炭化物が含まれていた。ℓ１～３の堆積状況は所謂レンズ状堆積であり，本遺構は自然に埋没した可能性が高い。

本遺構の平面形は，円形に近い。本遺構の規模は，上端が東西75cm×南北80cm，底面が東西84cm×南北90cmを測り，その断面形はフラスコ状を呈する。底面の形状は，中央がわずかに窪む丸底である。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で33cmを測る。

本遺構のℓ２から縄文土器が出土しており，図114－14～16に示した。14は胎土に比較的多くの繊維を含み，竹管状工具によって口縁部・隆帯に横位方向の刺突文が施されている。また，14の口唇部には刻みが施されている。15は，外面に縄文，内面に条痕文が認められる。16の胴部破片は，14と同様の羽状縄文が施されている。

本遺構の性格については，形状から貯蔵穴等の可能性が考えられる。本遺構の時期については，出土土器等から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられる。（香　川）

25号土坑　ＳＫ25　（図111・114，写真１－119・153）

本遺構は，Ｃ４－Ｄ・Ｅ６グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構と重複する遺構はないが，本遺構の南側に29号住居跡が接している。本遺構の堆積土は，ℓ１の単層とした。

ℓ１内には混入物等が特に認められず，本遺構は自然に埋没した可能性が高い。

本遺構の平面形は，概ね楕円形を呈する。本遺構の規模は，長軸幅155㎝・短軸幅127㎝を測る。長軸方向はＥ14°Ｎを指し，近接する29号住居跡の長軸方向と異なる。壁は，60°以上の急角度で底面から立ち上がっている。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で52㎝を測る。底面は起伏が認められ，平坦に仕上げられていない。

本遺構の堆積土から縄文土器が出土しており，図114－17～19に示した。17～19はいずれも繊維を胎土に含む。17はＲＬ・ＬＲ原体による羽状縄文が施され，口唇部には原体圧痕による刺突が巡る。18は横位隆帯によって区画された口縁部文様帯に，胴部の地文と同じのＲＬ原体による連弧状の圧痕文が施されている。19は，内外面にＬＲ縄文が認められる。

本遺構の時期は，出土土器等から縄文時代早期末葉～前期初頭頃と考えられ，近接する29号住居跡とほぼ同時期の可能性がある。本遺構の機能については，判断材料に乏しく確証はないが，形状等から貯蔵穴の可能性も考えられる。（香　川）

26号土坑　ＳＫ26　（図111・114，写真１－119・153）

本遺構は，Ｃ４－Ｄ５グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構は16号住居跡と重複するが，本遺構の方が古い。また，本遺構は25号住居跡と重複するが，25号住居跡の遺存状態が悪く，その新旧関係は不明である。

本遺構の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は基本土層ＬⅢに類似するが，ℓ１の方がやや暗い。ℓ１の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。本遺構の東部が16号住居跡によって破壊されているが，遺存部の形状から本遺構の平面形は小判型を呈していたものと推測される。本遺構の規模は，東西の長軸幅が遺存値で240㎝，南北の短軸幅が157㎝を測る。長軸方向はＥ14°Ｎを指す。壁の遺存高は最大で12㎝を測る。底面はＬⅣ面まで達していない。底面の形状は，ほぼ平坦であるが水平ではない。

本遺構の堆積土から図114－20が出土した。20は屈曲する胴部破片で，胎土に繊維を含み，外面にＬＲ縄文，裏面に条痕文が施されている。

本遺構は，底面が平坦に仕上げられていることから竪穴住居跡の可能性も考えられた。しかし，炉・柱穴など住居跡特有の施設が確認できなかったため，本遺構の性格については不明である。本遺構の時期は，遺構内堆積土等の状況から縄文時代早期末葉頃の可能性がある。（香　川）

51号土坑　ＳＫ51　（図112・114，写真１－119・148）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構の南側は倒木痕によって一部破壊されていた。本遺構の南東側約２ｍの地点には46号住居跡・56号土坑がある。本遺構の堆積土は２層に分けた。ℓ１は，倒木痕の影響によって土が攪拌されたようになっていた。ℓ２の土質は基本土層ＬⅢに類似しているが，土色はℓ２の方がやや暗い。ℓ２の様子から，人為

的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

本遺構の平面形は概ね円形で，その規模は直径80cmである。斜面上方側の北壁は，底面からほぼ垂直に立ち上がっている。しかし，南壁の立ち上がりは曲線的である。底面は平坦に造られており，またほぼ水平である。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で65cmを測る。

本遺構のℓ１から図114－21が出土した。21は全体の約80％が遺存しており，完形品に近い。21の口縁部は無文帯であり，横位隆帯によって胴部と区画されている。尖底の底部は砲弾形を呈する。地文の羽状縄文は，ＲＬ・ＬＲ原体の組み合わせである。21の出土状況はℓ１下位から押し潰れた状態で確認され，発見当初は本遺構の共伴遺物と考えていた。しかし，21の出土地点からさらに35cm下がって本遺構の底面が確認された。またℓ２は自然堆積層の可能性が高く，さらにℓ１が攪乱の影響を受けていることを考え合わせると，21は他所から流入した可能性が高いと推測される。

本遺構の性格について確認することはできなかったが，形状等から貯蔵穴等の可能性も考えられる。本遺構の時期は，遺構内堆積土等から縄文時代早期末葉以降と推測される。　（香　川）

53号土坑　ＳＫ53　（図112，写真１－119）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ面である。本遺構は28・45号住居跡と重複するが，本遺構が最も古い。本遺構の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は，混入物等は認められず自然堆積層と考えられる。

本遺構の平面形は円形に近い。本遺構の規模は東西方向が93cm，南北方向が87cmを測る。壁は，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面の形状は平坦で，ほぼ水平に仕上げられている。重複する45号住居跡の床面から本遺構の底面までの深さは27cmを測る。なお，45号住居跡の遺構検出面から本遺構の底面までの深さは66cmである。

本遺構から遺物を確認することはできなかった。本遺構の性格については判断材料に乏しいが，形状等から貯蔵穴等の可能性も考えられる。本遺構の時期は，他遺構との重複関係から縄文時代早期末葉～前期初頭頃の可能性が考えられる。　（香　川）

54号土坑　ＳＫ54　（図112，写真１－120）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構は28号住居跡と重複していたと考えられるが，28号住居跡の遺存状態が悪く，その新旧関係は不明である。本遺構の南東側約１ｍの地点には45号住居跡・53号土坑が近接している。

本遺構の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は腐植質の黒褐色土で，植物等の影響を受けた可能性がある。しかし，ℓ１内から混入物等は認められず，本遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。本遺構の平面形は，上端が東西にやや長い楕円形，底面がほぼ円形を呈する。各規模は，上端が東西96cm×南北75cm，底面が直径95cmを測り，その断面形はフラスコ状を呈する。底面の形状は，中央がやや窪む丸底である。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で52cmを測る。

本遺構の堆積土から縄文時代早期末葉頃の縄文土器が出土したが，細片で図化することはできなかった。本遺構の性格については，形状から貯蔵穴等の可能性が考えられる。本遺構の時期は，周辺の各土坑とほぼ同時期の縄文時代早期末葉～前期初頭頃の可能性が考えられる。　（香　川）

56号土坑　ＳＫ56　（図112，写真１－120）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構は46号住居跡と重複していたと考えられるが，46号住居跡の遺存状態が悪く，その新旧関係は不明である。本遺構の北西側約1.5ｍの地点には51号土坑が近接している。

本遺構の堆積土は，ℓ１の単層とした。ℓ１は，混入物等は認められず自然堆積層と考えられる。

本遺構の平面形は，東西に長い長方形を呈する。本遺構の規模は，東西80㎝，南北66㎝を測る。壁は，床面から急角度で立ち上がっている。底面の形状は平坦で，ほぼ水平に仕上げられている。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で33㎝を測る。

本遺構から遺物を確認することはできなかった。本遺構の性格については，判断材料に乏しいため不明である。本遺構の時期は，縄文時代早期～前期と推測される。　（香　川）

60号土坑　ＳＫ60　（図112，写真１－120）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構の西側約１ｍの地点に61号住居跡がある。また，北側1ｍの地点には10号焼土遺構が近接している。

本遺構の堆積土は２層に分けた。ℓ１・２内には，微量であるが2㎝前後の炭化物をほぼ均一に含んでいる。ℓ１・２の土質は類似していたが，ℓ２の方がやや明るい土色である。

本遺構の平面形は長方形を呈し，その長軸方向は立地斜面の等高線とほぼ直交している。本遺構の規模は，長軸幅90㎝，東西55㎝を測る。壁は，床面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面の形状は平坦であるが，南に下がっている。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で49㎝を測る。

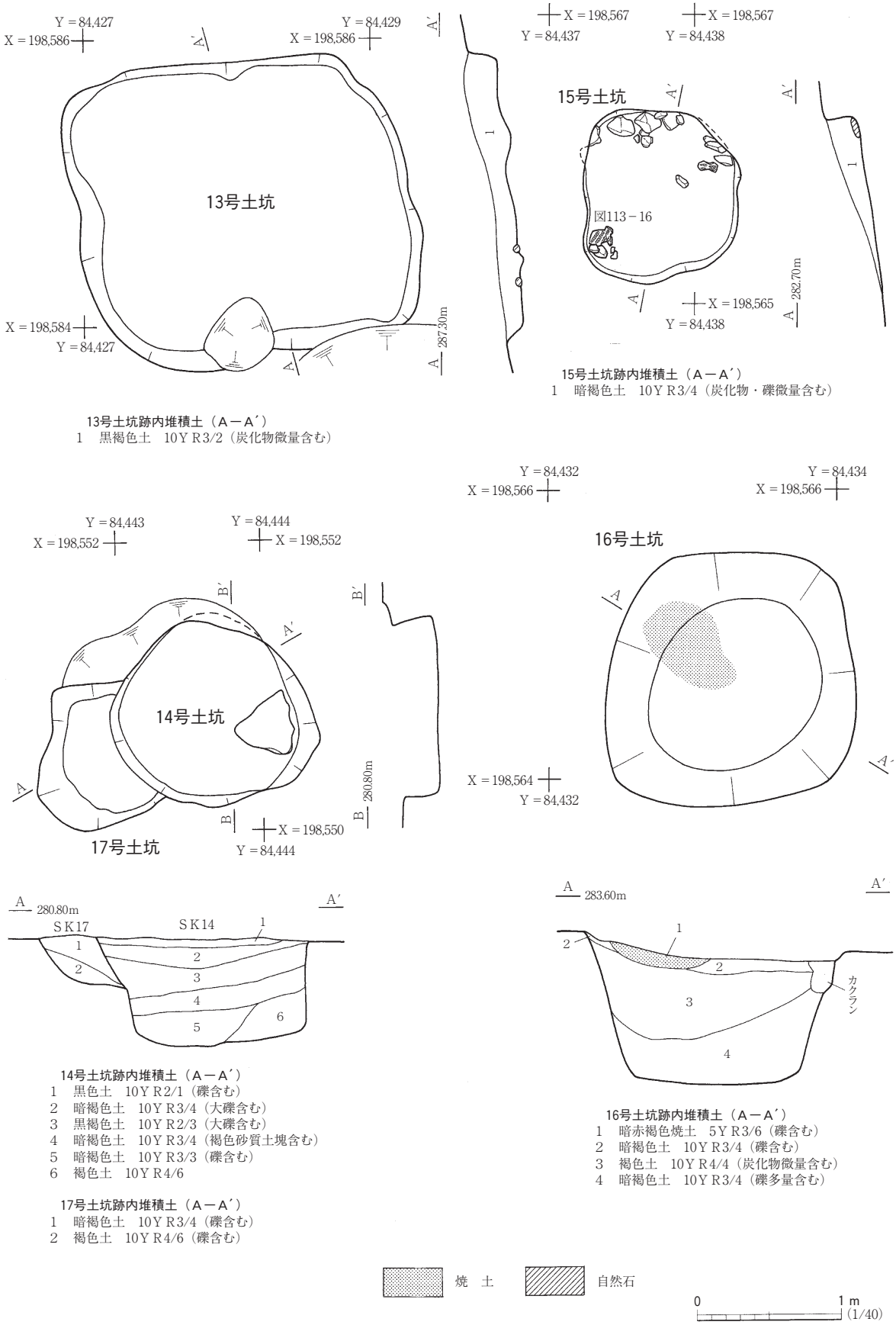
本遺構から遺物を確認することはできなかった。本遺構の性格については，判断材料に乏しいため不明である。本遺構の時期は，縄文時代早期～前期と推測される。　（香　川）

61号土坑　ＳＫ61　（図112，写真１－120）

本遺構は，Ｃ４－Ｂ３・４グリッドに位置する。遺構検出面はＬⅣ上面である。本遺構の東側約１ｍの地点に61号住居跡がある。また，南側１ｍの地点には８号焼土遺構が近接している。

本遺構の堆積土は２層に分けた。ℓ１が黄褐色系土，ℓ２が黒褐色系土であるが，ℓ１が倒木痕の反転ではなく流入土の様相を呈していた。ℓ２下位から，まばらに含まれる１～３㎝の炭化物を検出したが，その成分は不明である。ℓ１・２の土層観察から，人為的に埋め戻されたような痕跡は認められず，本遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

本遺構の平面形は円形を呈し，その規模は直径165㎝である。本遺構の断面形は，中ほどがわず



13号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物微量含む）

15号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物・礫微量含む）

14号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　黒色土　10ＹＲ2/1（礫含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（大礫含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（大礫含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（褐色砂質土塊含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（礫含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/6

17号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（礫含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（礫含む）

16号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　暗赤褐色焼土　5ＹＲ3/6（礫含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（礫含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物微量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（礫多量含む）

図109　13～17号土坑

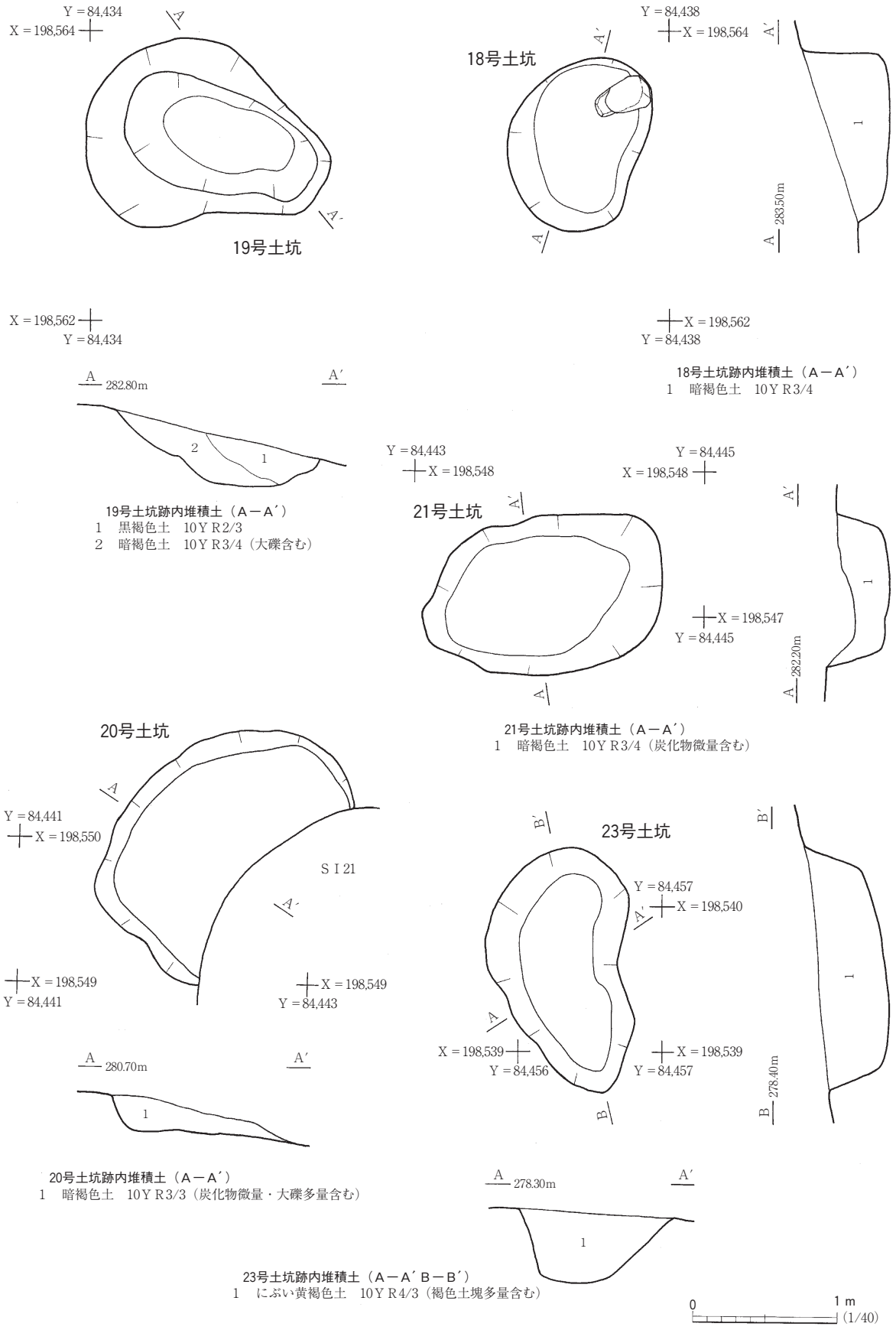
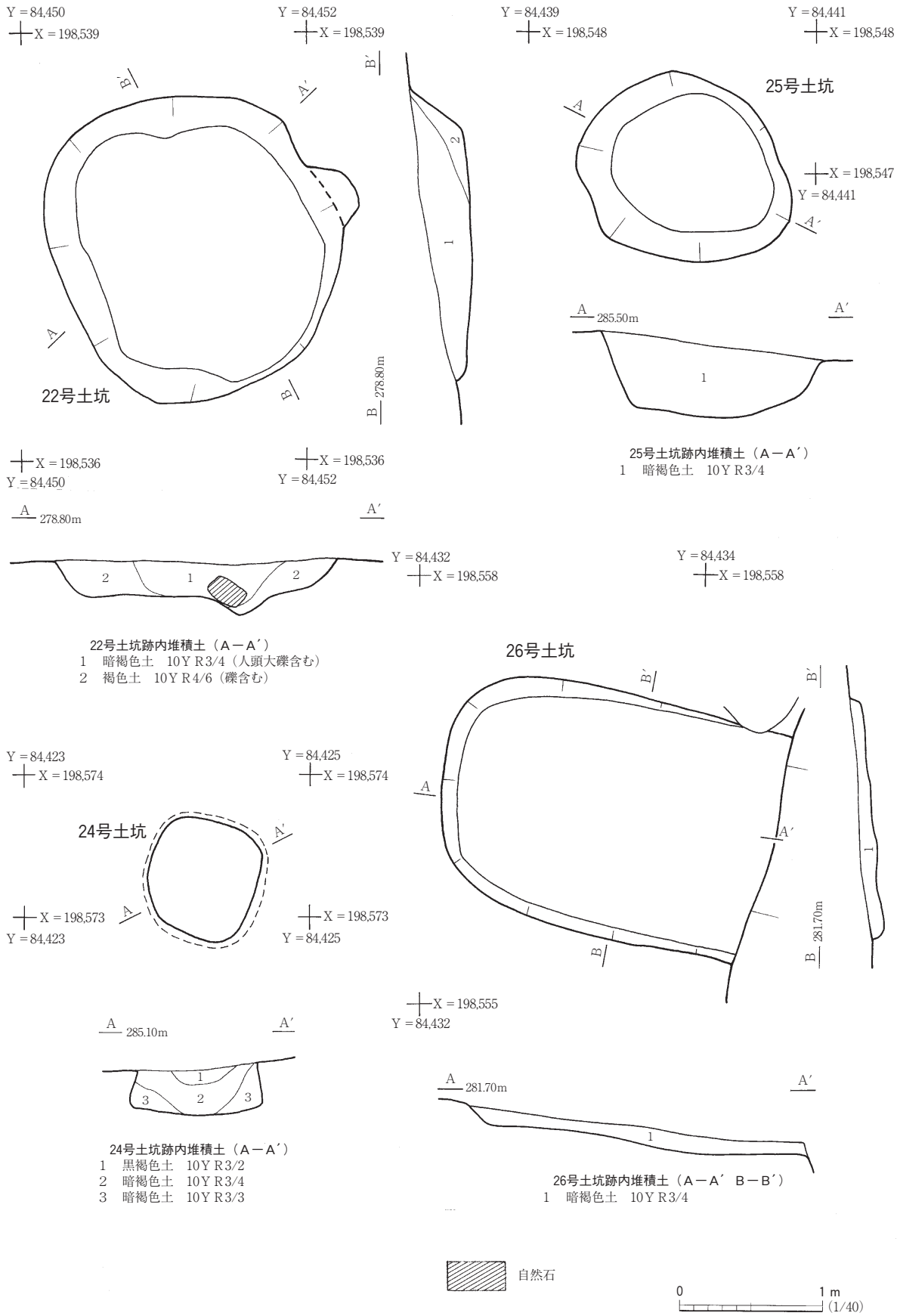


図110　18～21・23号土坑



22号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4（人頭大礫含む）
2　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6（礫含む）

25号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4

24号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′）
1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ3/2
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3

26号土坑跡内堆積土（Ａ－Ａ′　Ｂ－Ｂ′）
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4

図111　22・24～26号土坑

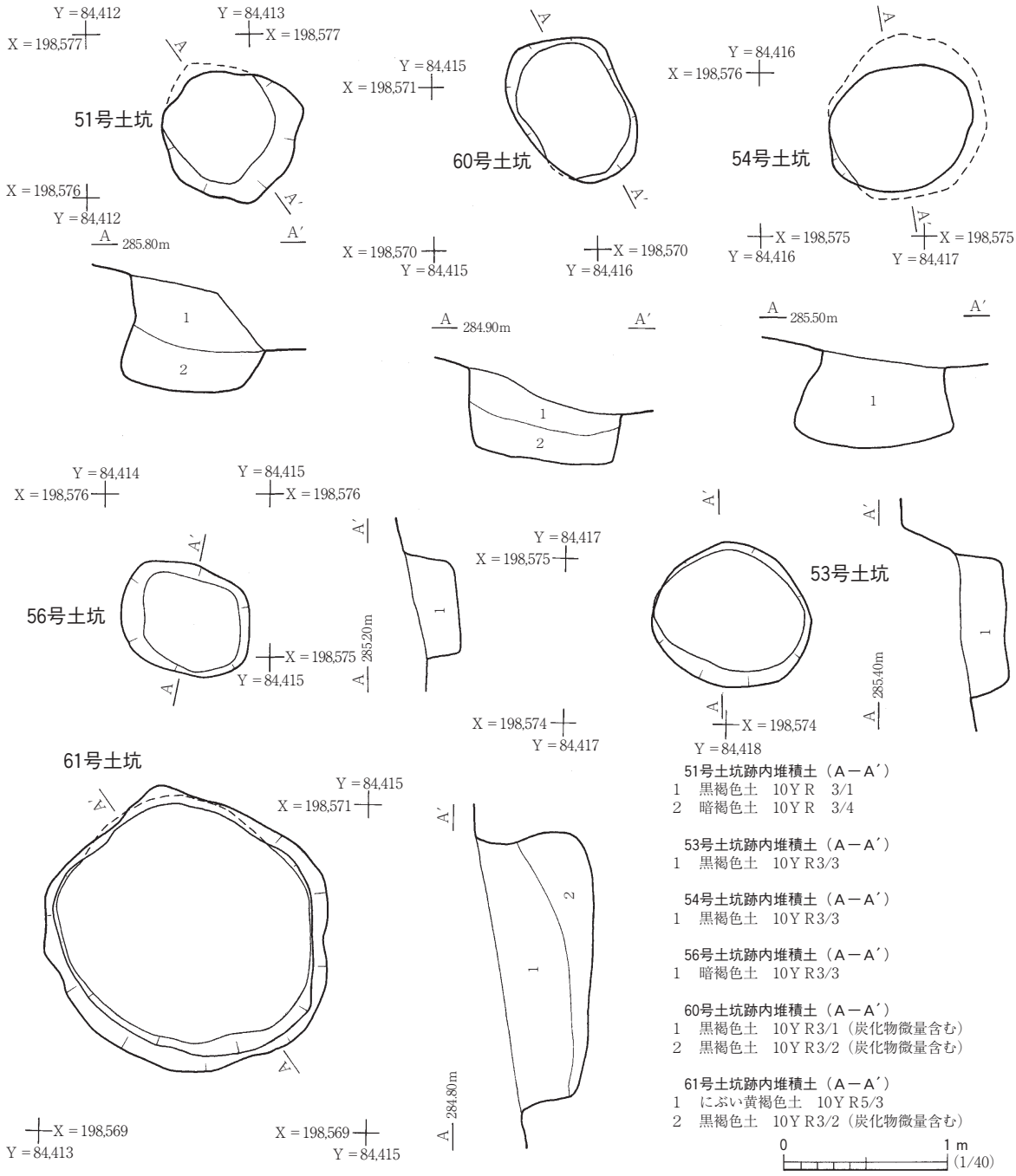


図112　51・53・54・56・60・61号土坑

かに窄まり，筒状に近い。底面は起伏がほとんど認められず，平坦に仕上げられている。遺構検出面から底面までの深さは，最深部で64cmを測る。

本遺構は，西地区において最も規模の大きい土坑である。遺構内堆積土の状況から，本遺構は自然に埋没したものと推測される。本遺構の機能については，形状等から貯蔵穴などの可能性が考えられる。本遺構のℓ２から縄文時代早期末葉頃と推測される土器片が出土したが，遺存状態が悪く図化することができなかった。本遺構の時期については，周辺の遺構・出土土器等から縄文時代早期末葉頃と推測される。（香　川）

図113　土坑出土遺物（1）

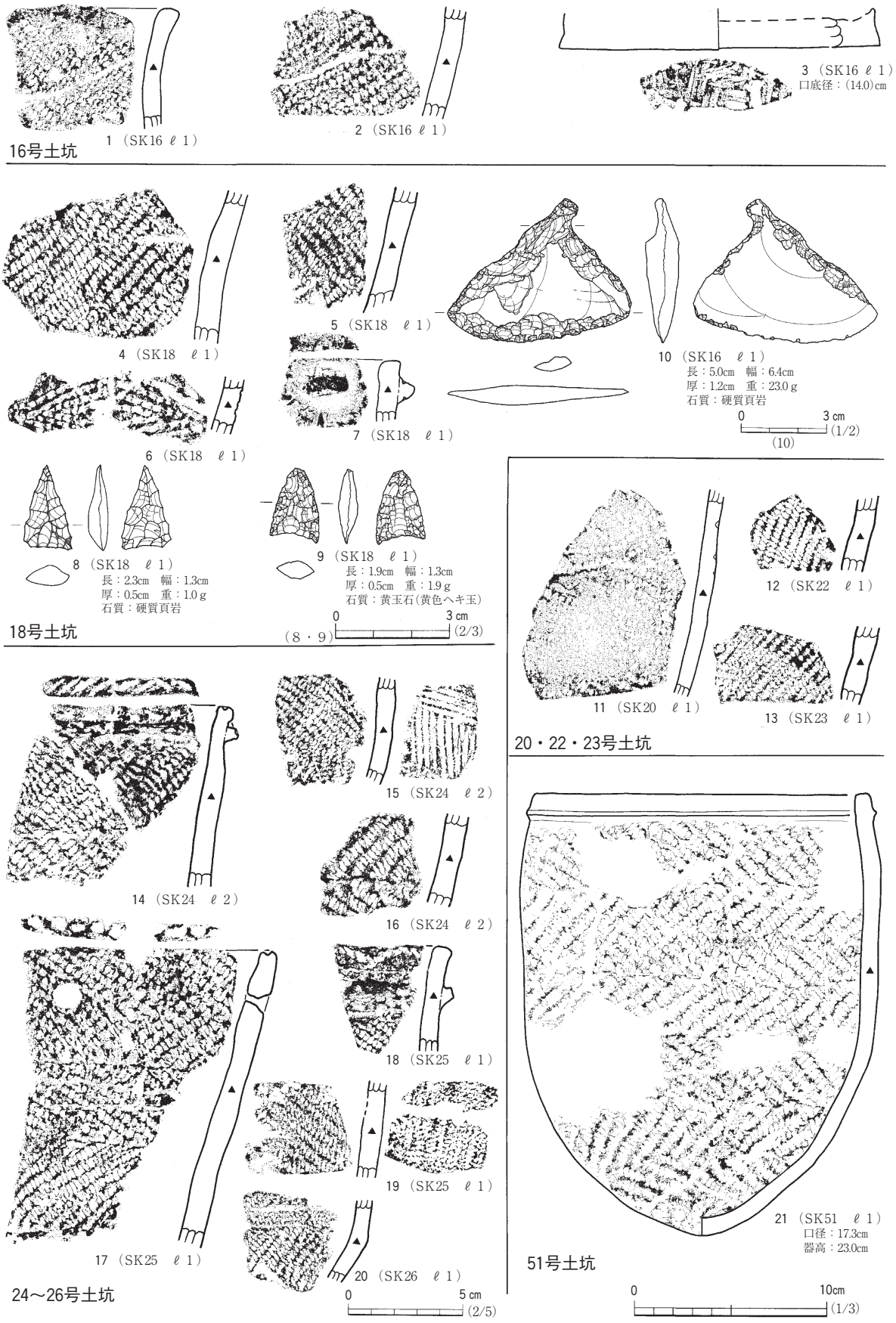


図114　土坑出土遺物（２）

第４節　焼　土　遺　構

遺　　構（図115，写真１－121～123）

西地区から，１～10号焼土遺構を確認した。焼土遺構の分布は竪穴住居跡が分布する地域と重なり，特にＣ４－Ｂ３・４，Ｃ４－Ｅ６グリッドに集中している。遺構集中地点以外では，焼土遺構を確認することができなかった。焼土遺構の検出面はＬⅢ・Ⅳ面である。ＬⅣ面で確認したものはＣ４－Ｂ４グリッドの７・８号焼土遺構で，それ以外はすべてＬⅢ面での検出である。

１～10号焼土遺構の時期は，周囲の遺構等から縄文時代早～前期の可能性が高いと推測される。しかし，時期を特定できた焼土遺構はない。各焼土遺構の検出は，強い熱を受けて赤褐色に変色した面を確認したもので，焼土面上に炭化物層などの堆積物が確認できたものは１基もない。

焼土遺構の規模は，平均値で長軸方向が72㎝，短軸方向が50㎝である。西地区の竪穴住居跡から確認された地床炉の規模と比較すると大差がなく，10基の焼土遺構の中には住居炉であったものも含まれている可能性がある。焼土遺構の周囲についても，小穴･溝等の有無について確認作業を行ったが，住居跡を示すような痕跡が確認できた焼土遺構はない。

１号焼土遺構は16号住居跡の北側に近接しており，同住居跡の検出面で発見したものである。16号住居跡の北側は，比較的傾斜が緩やかな舟底状の谷地形であったため，１号焼土遺構についてはほぼ同時期の大型の住居が存在した可能性も考えて調査を実施した。しかし，１号焼土遺構の周囲から掘立柱跡等の遺構は確認できず，１号焼土遺構の性格について明らかにすることができなかった。

２号焼土遺構は炉跡が確認できなかった29号住居跡に近接しているが，両遺構の関係は不明である。３号焼土遺構は，立地斜面の等高線に対し長軸方向が平行している。４号焼土遺構の北側には，長軸45㎝・短軸30㎝・厚さ10㎝の平たい花崗岩が接しており，相互に関連していた可能性がある。

５号焼土遺構は東隣の24号住居跡の遺構検出面で発見したものであるが，その新旧関係は不明である。６号焼土遺構は，重複関係にある46号住居跡の地床炉の可能性があるが，その検出状況が倒木痕によって反転した状態であったため確実ではない。

７・８号焼土遺構は，道路工事によって削平された箇所に位置しており，その遺構検出面はＬⅣ面

表10　焼土遺構観察表

番号	位　置	検出面	規模（cm）			土　　色	近接遺構（ＳＧからの位置）
			長さ	幅	厚さ		
ＳＧ１	Ｃ４－Ｄ５	ＬⅢ	78	68	7	赤褐色（5YR4/6）	ＳＩ16（南0.6m）
ＳＧ２	Ｃ４－Ｄ６	ＬⅡ	62	56	5	明赤褐色（2.5YR5/6）	ＳＩ16（北西0.8m）
ＳＧ３	Ｃ４－Ｅ６	ＬⅢ	57	34	8	赤褐色（5YR4/6）	ＳＩ22（南東1.8m）
ＳＧ４	Ｃ４－Ｅ６	ＬⅢ	78	56	5	赤褐色（5YR4/6）	ＳＩ29（西1.6m）
ＳＧ５	Ｃ４－Ｅ５	ＬⅢ	40	35	3	にぶい赤褐色（2.5YR5/4）	ＳＩ24（北東0.1m）
ＳＧ６	Ｃ４－Ｅ３	ＬⅢ	113	45	1	赤褐色（5YR4/8）	ＳＩ46と重複
ＳＧ７	Ｃ４－Ｂ４	ＬⅢ	80	52	7	にぶい赤褐色（5YR4/4）	ＳＫ61（北東1.3m）
ＳＧ８	Ｃ４－Ｂ４	ＬⅣ	77	53	4	にぶい赤褐色（5YR4/4）	ＳＫ61（北0.4m）
ＳＧ９	Ｃ４－Ｄ５	ＬⅣ	70	58	5	赤褐色（5YR4/6）	ＳＩ16（東0.3m）
ＳＧ10	Ｃ４－Ｂ３	ＬⅢ	60	44	3	にぶい赤褐色（2.5YR5/4）	ＳＩ46（北0.3m）

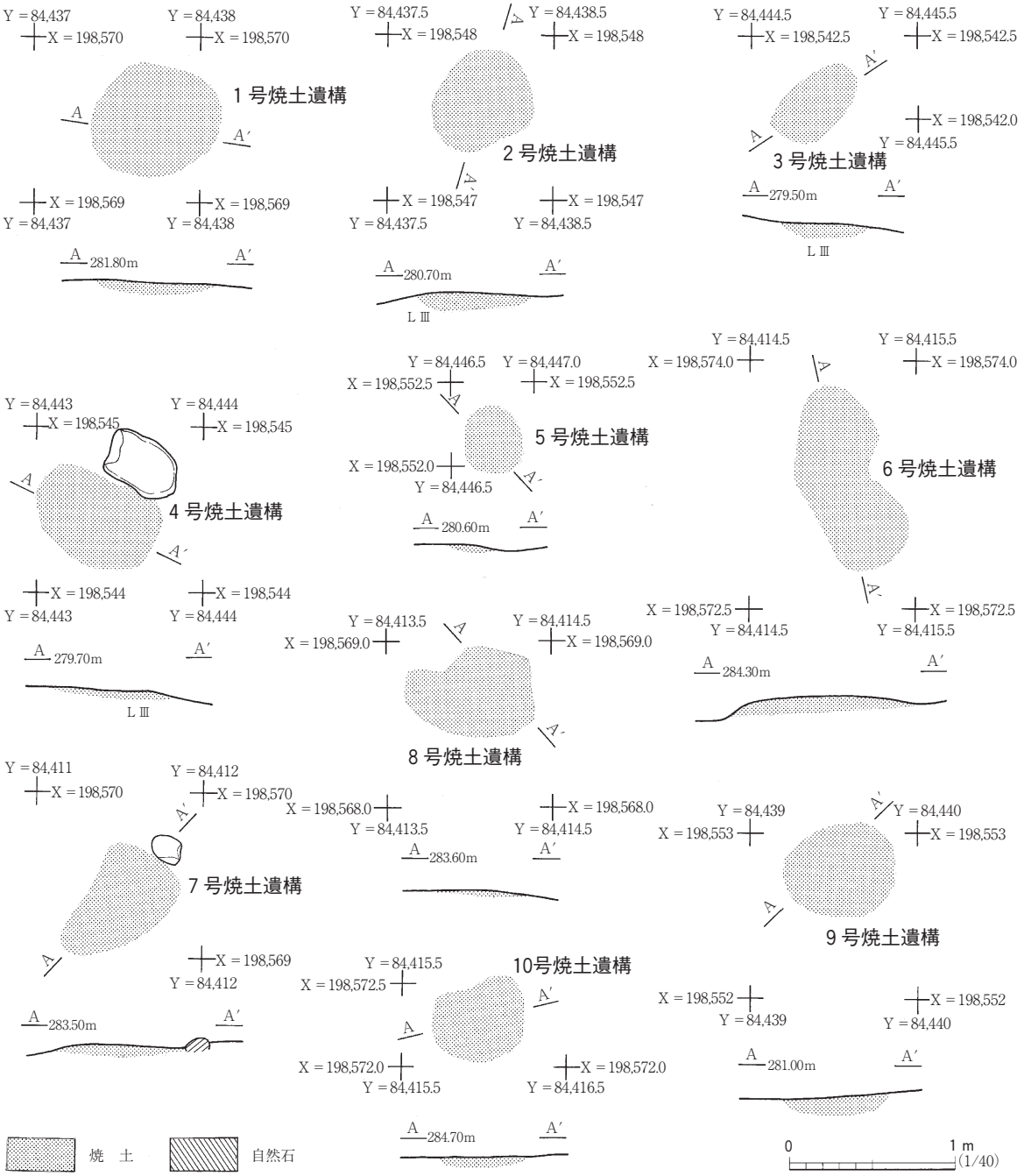


図115　１～10号焼土遺構

である。ＬⅣ面の掘削の程度は不明であるが，検出面が地山であることから７・８号焼土遺構は竪穴住居跡に伴う地床炉の可能性も考えられる。しかし，７・８号焼土遺構の周囲から，柱穴等の施設を確認することはできなかった。

９号焼土遺構は16号住居跡に近接しており，同時期に機能していた可能性は低い。しかし，両遺構の新旧関係を確認することはできなかった。10号焼土遺構は縄文時代早期末葉頃の遺構が集中する地点に位置し，その遺構検出面はＬⅢ下面である。10号焼土遺構についても竪穴住居跡に伴う地床炉の可能性があるが，周囲から柱穴等の施設を確認することはできなかった。　（香　川）

第５節　遺構外出土遺物

１　縄文土器

西地区から出土した遺構外出土遺物は，縄文土器が整理箱で24箱，石器類が１箱出土している。出土縄文土器の時期は，大きく早期末葉～前期初頭と前期後半に大きく分けられ，西地区における集落の消長と概ね一致している。縄文時代前期後半の遺物は主にＬⅡ下位から，同早期末葉～前期初頭の遺物は主にＬⅢから出土している。各層からの出土状況は，いずれも細片の状態で発見された土器が大半で，土器廃棄場のようなまとまりを持って発見された遺物は確認できなかった。ＬⅡ・Ⅲ出土土器の分布状況（図116・117）は，いずれも遺構の分布範囲とほぼ重なり，当該期の住居跡が集中する区域及びその南～南東側で縄文土器の出土が目立つ。ＬⅡ出土の土器はＣ４－Ａ２～Ｄ５を結んだ範囲に集中しており，14号住居跡の北西側にも当該期の住居跡が存在した可能性がある。ＬⅢ出土の土器では，早期末葉頃の竪穴住居跡が集中する地点と，南方向に沢筋が縦走するＣ４－Ｄ４・５グリッドの出土量が多い。以下に出土土器の特徴ついて，およその時期に分けて報告する。

（１）　条痕文系の土器（図118，図119－１～13，図120・121）

西地区の条痕文系土器は，縄文条痕土器が主流である。縄文時代早期末葉頃に位置付けられ，胎土に繊維を少～中量含む。図118－１～３は同一個体の口縁部破片であるが，胴～底部の破片を確認することはできなかった。１～３は，８単位の波状口縁である。胴部から直立気味に立ち上がり，口縁上部でわずかに外反する器形と推測され，口唇部は丸く仕上げられている。３には補修孔が認められる。波頂部から隆帯を傘状に貼付している。また，頸部にも横位隆帯が巡るようである。口縁部外面の調整は条痕文であるが，隆帯・口唇部には胴部と同様のＬＲ縄文が施されている。２の胴部の地文は横回転の斜行縄文である。

図118－４～11は，稜が付く胴部破片である。４・11は同一個体と思われるが，稜の上側に縦位隆帯が貼付され，隆帯の形成は爪を差し込んで指でつまみ上げたように作り上げている。５も

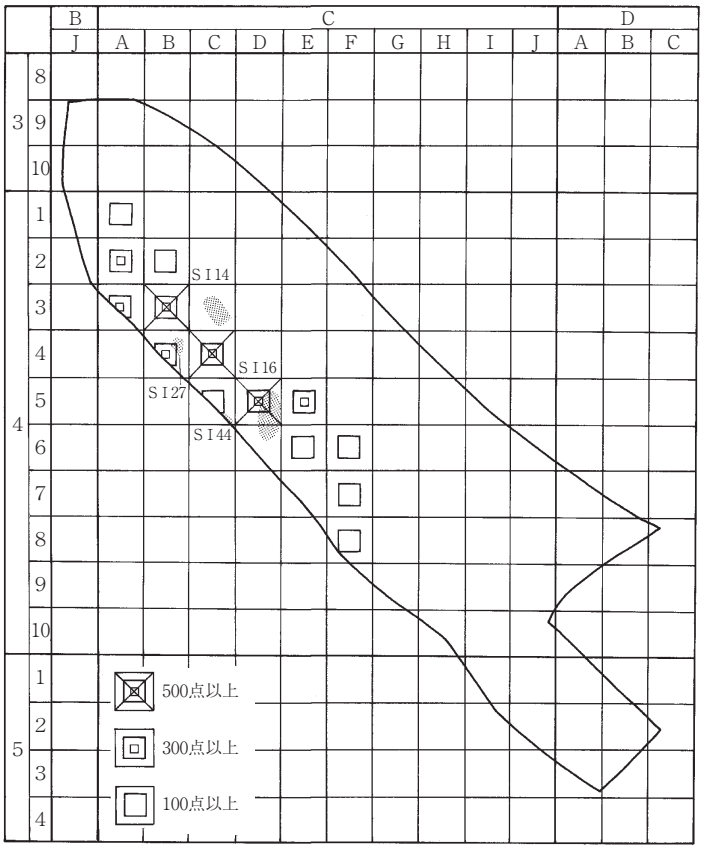


図116　西地区縄文土器出土状況（ＬⅡ）

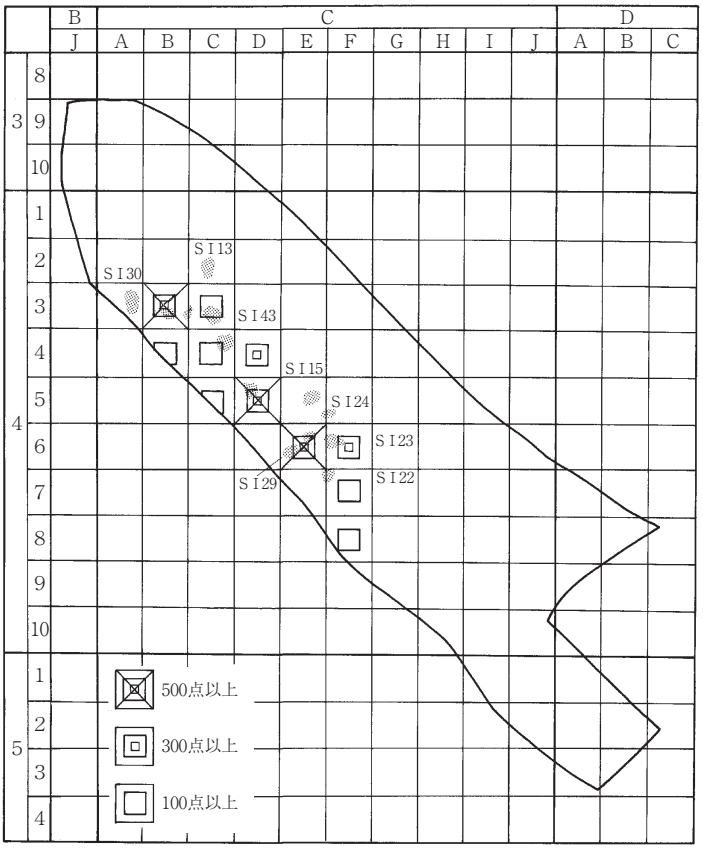


図117　西地区縄文土器出土状況（ＬⅢ）

縦位隆帯が付き，その下端に貝殻殻頂の圧痕文が認められる。また，６は，稜を押し潰すように貝殻殻頂圧痕文が施されている。７・10は頸部付近の破片と思われる。稜上側の地文が条痕文，稜下側が縄文で，条痕部に縦の細い貼付文が認められる。９は，稜直下のＬＲ縄文の上に横位の条痕文が重ねられている。図118－14は，胴部上方が内湾気味に開く器形と思われ，外面の地文は縦回転のＬＲ縄文である。

図118－12・13・15は，口縁部外面に縄の側面圧痕文が認められる資料である。12・15の側面圧痕文は，外面の地文と同様のＲＬ原体である。12・15の内面の地文は，上端が縄文，その下部が横位方向の条痕文である。12の口縁部上端は，短く外傾している。13の外面の地文は，横位方向の条痕文で，ＬＲ原体による梯子状の側面圧痕文が認められる。13の内面の地文は，上端がＬＲ縄文，その下部が条痕文である。13の口唇部は丸く仕上げられている。図119－１・４は，ＬＲ原体による×状の側面圧痕文が認められるもので，内面の地文はＬＲ縄文が比較的広範に施されている。

図119－２・３・10の側面圧痕文は曲線的である。図119－６の外面は，条痕の地文に半截竹管状の工具で平行沈線文の曲線文が施されている。図119－11～13は口縁部内面に条痕文が認められ，頸部に横位隆帯が巡る資料である。その口縁部外面は条痕文が認められないが，撚りが異なる２段の原体を並列させた矢羽状の側面圧痕文が施されている。13の頸部には横位隆帯が巡り，その隆帯上を棒状工具によって刺突が施されている。13の頸部直下には横回転のＬＲ縄文が施されているが，その下部は不明である。

図120は縄文条痕土器の口縁部破片，図121は同条痕土器の胴部破片である。口縁部の形状は外反器形が多く，また平口縁が多いが，図120－１・４のような波状口縁の土器もある。外面の地文はＬＲ縄文が多い。図121－19～22・23のように撚糸文の土器もあるが極めて少数である。内面の地文は，口唇～口縁部上位まで外面と同様の斜行縄文が施され，その下部は横位方向の条痕文となるものが多い。図120－10の内面は，口縁部上位にＲＬの斜行縄文，その下部に横位の条痕文が施され，その境界には細い沈線が認められる。口唇部にも縄文が施された資料がほとんどであるが，図120－７・21のように口唇部に刺突文・刻みが施されているものもある。

（２）　羽状縄文系の土器（図119－15～30，図122）

西地区の羽状縄文系土器は，結束しないＬＲ・ＲＬ原体によるものである。縄文時代前期最初頭に位置付けられ，胎土に繊維を中量含む。図119－15～18の口縁部には，無文地に縄文原体の側面圧痕文が認められる。縄文条痕土器の側面圧痕文が２段撚りの原体で施文されているのに対し，15～18の側面圧痕文は１段撚りである。15はＲ原体によって蕨状の圧痕文が描出されており，頸部の横位隆帯上には斜行単節縄文が施されている。16の側面圧痕文はＬ原体によるもので，頸部の地文はＬＲ縄文である。17は遺存状態が悪いが，Ｒ原体による側面圧痕文が横位隆帯の上側に認められる。18は波状口縁資料で，Ｒ原体によって渦巻文が描出されている。18の波頂部から隆帯が垂下し，また頸部に横位隆帯が巡るが，各隆帯は無文である。

図119－17・19～30は口縁部の幅が狭く，頸部に横位隆帯が巡るものである。口縁部は無文のものが多い。また口縁部は直立気味で，口唇部が尖っているものが多い。頸部は，23・30のように胴部の地文と同様の斜行縄文が施されたもの，20・29のように胴部の地文原体による側面圧痕文が施されたもの，28のように棒状工具による刺突が施されたものがある。

図122－７～11は地文のみの口縁部破片である。口縁部の形状はわずかに外反し，口唇部が平坦に仕上げられているものが多い。８・９の口唇部は，外方に短くつまみ出されている。図122－12～20は羽状縄文の胴部資料，図122－１～４は撚糸文の資料で，いずれも内面に条痕文が施されていない。

図122－21～27は，底部資料である。21・24・25は尖底土器で，21の地文は羽状縄文，24の地文は撚糸文である。25の地文は不明である。22～27は平底土器である。22は丸味のある平底で，底部外面に縄文が施されている。26の底部外面には羽状縄文が認められる。27の平底は底部外縁が窪み，上げ底風になっている。27の底部には，胴部の地文と同様のＬＲ縄文が施されている。

（３）　前期前半の土器，浮島系土器（図123，図127－１）

西地区では，縄文時代前期前葉の土器も少数だが出土している。図123－１は，ＬⅢ上位から出土した資料である。胎土には少量の繊維を含んでいる。器形は胴部中央に最大径を持ち，口縁部でわずかに窄まるものと推測される。口唇部はやや肥厚している。胴部には，横位方向の貝殻条痕文・貝殻復縁押捺文が施されている。１の口縁部には２対の補修孔が認められる。１の時期は大木２ａ式並行期と考えている。図123－２・３は別地点で出土した土器であるが，同一個体と考えられるものである。２・３の胎土には繊維は含まれていない。比較的厚みがある土器で，口縁部上端でわずかに外反する器形である。胴部の地文は，横位の条痕文である。

図123－８～14は，無文地に連続刺突文が施されている資料である。８は平口縁と思われ，口縁部とその下部に横位方向の連続刺突文が施されている。８の口縁直下には沈線が引かれている。９は胎土に微量の繊維を含んでおり，口縁部の波頂部から隆帯が垂下している。隆帯上には半截竹管状の工具による刺突が施され，また口縁部にも２段の連続刺突文が施されている。10～12は胎土に微量の繊維を含み，同時施文の平行刺突文が認められる。11・12は同一個体の可能性がある波状口縁で，波頂部には窪みが付けられている。13は口縁・口唇部に連続刺突文が施されている。14も波状口縁

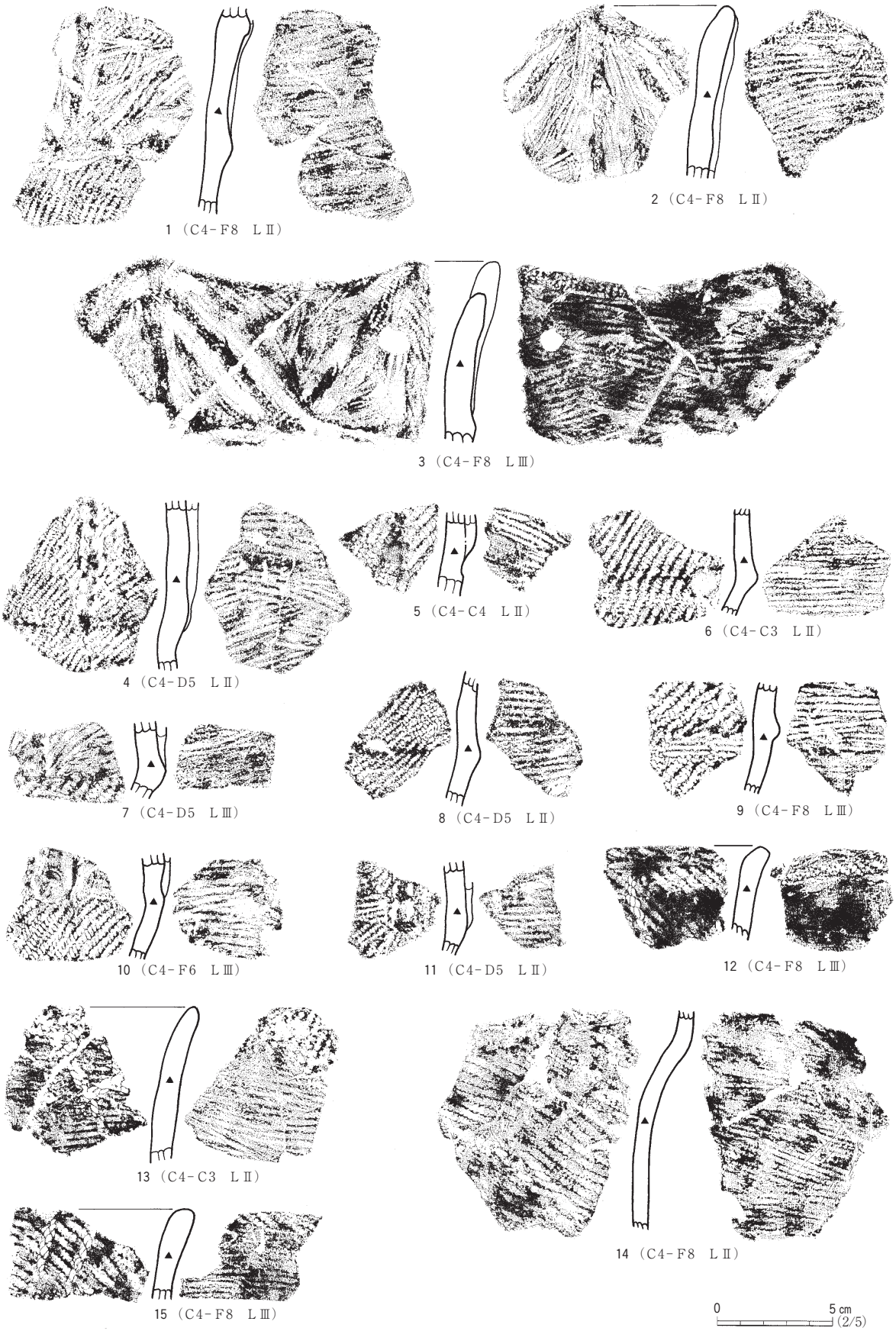


図118　遺構外出土遺物（１）

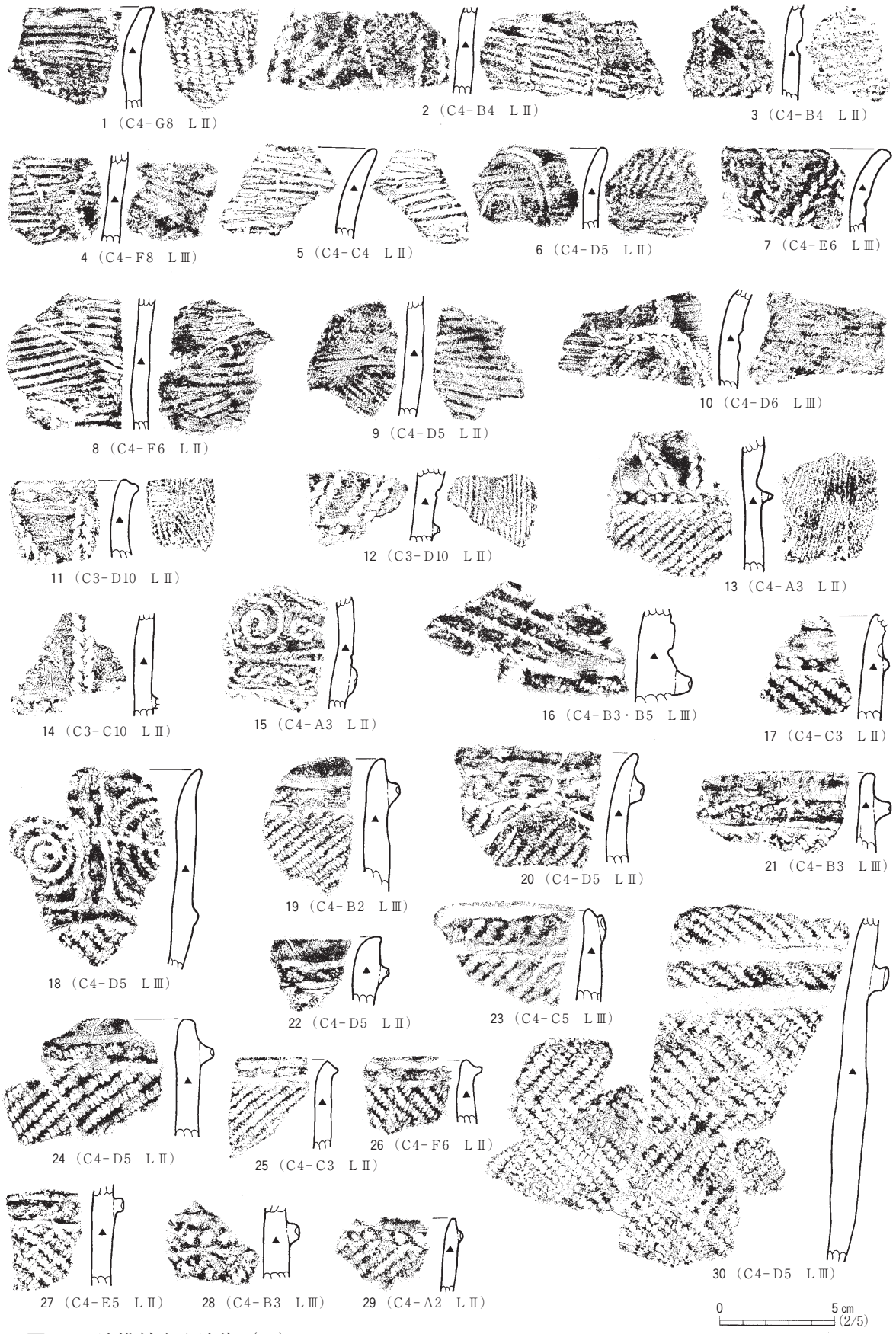


図119　遺構外出土遺物（２）

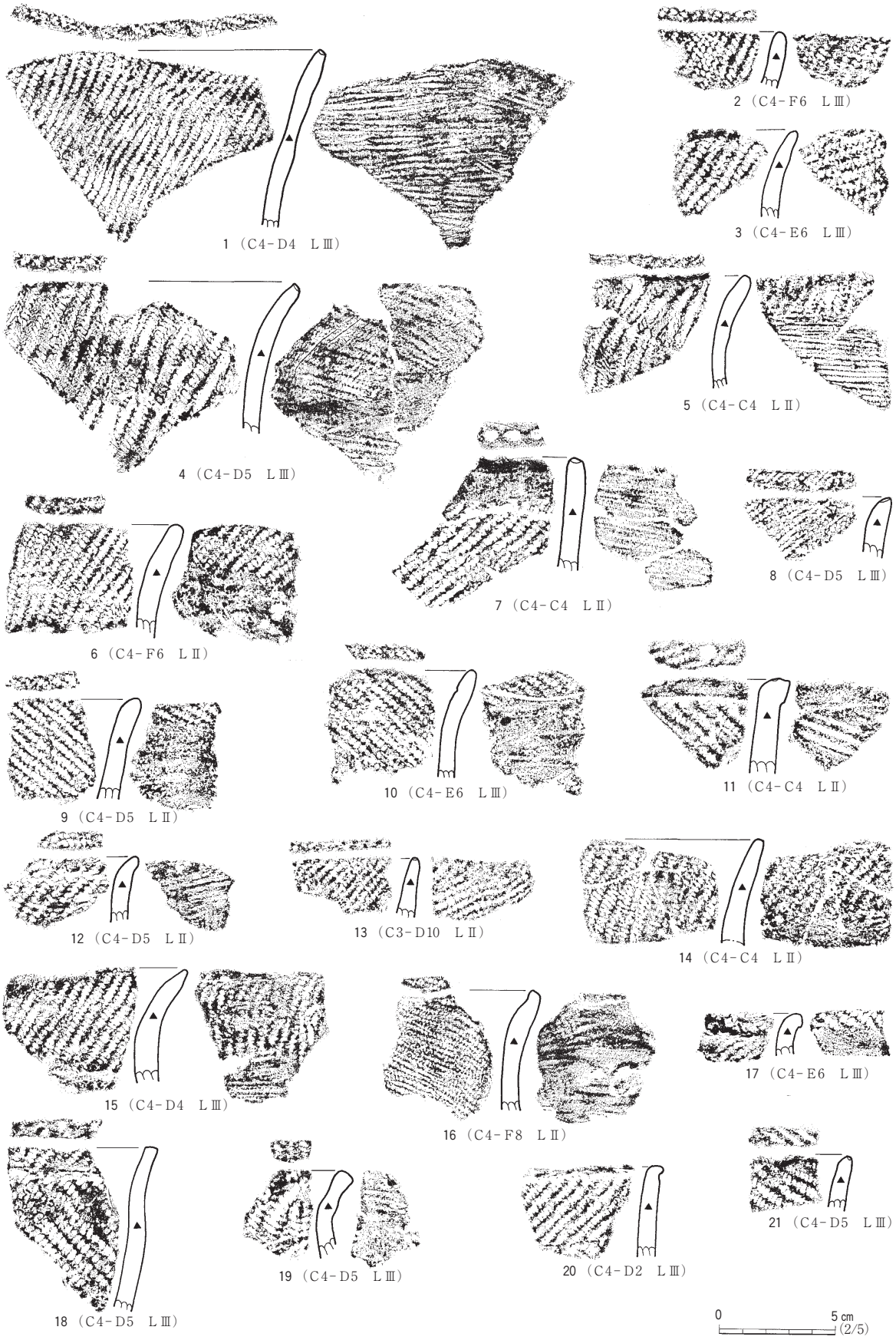


図120　遺構外出土遺物（３）

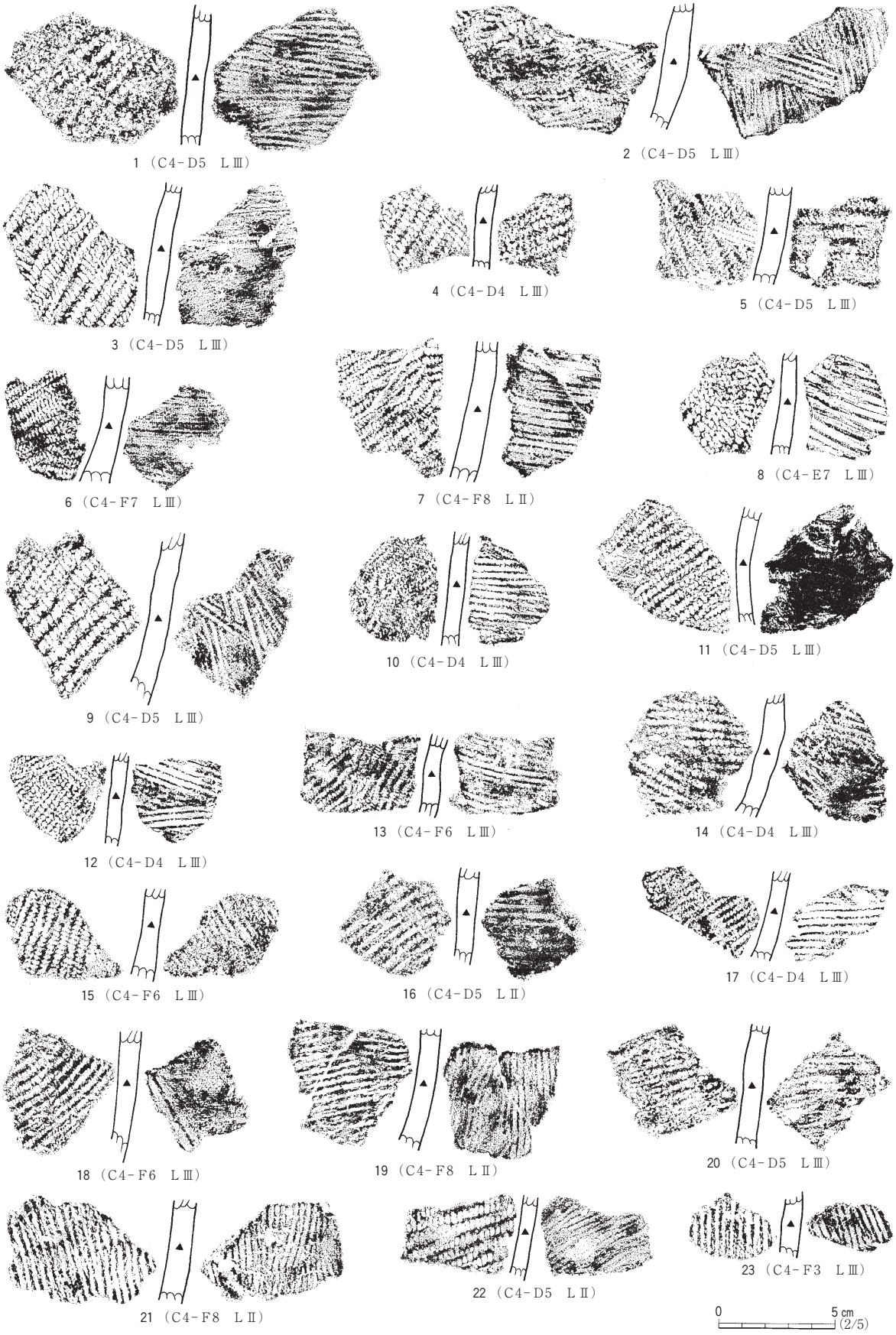


図121　遺構外出土遺物（４）

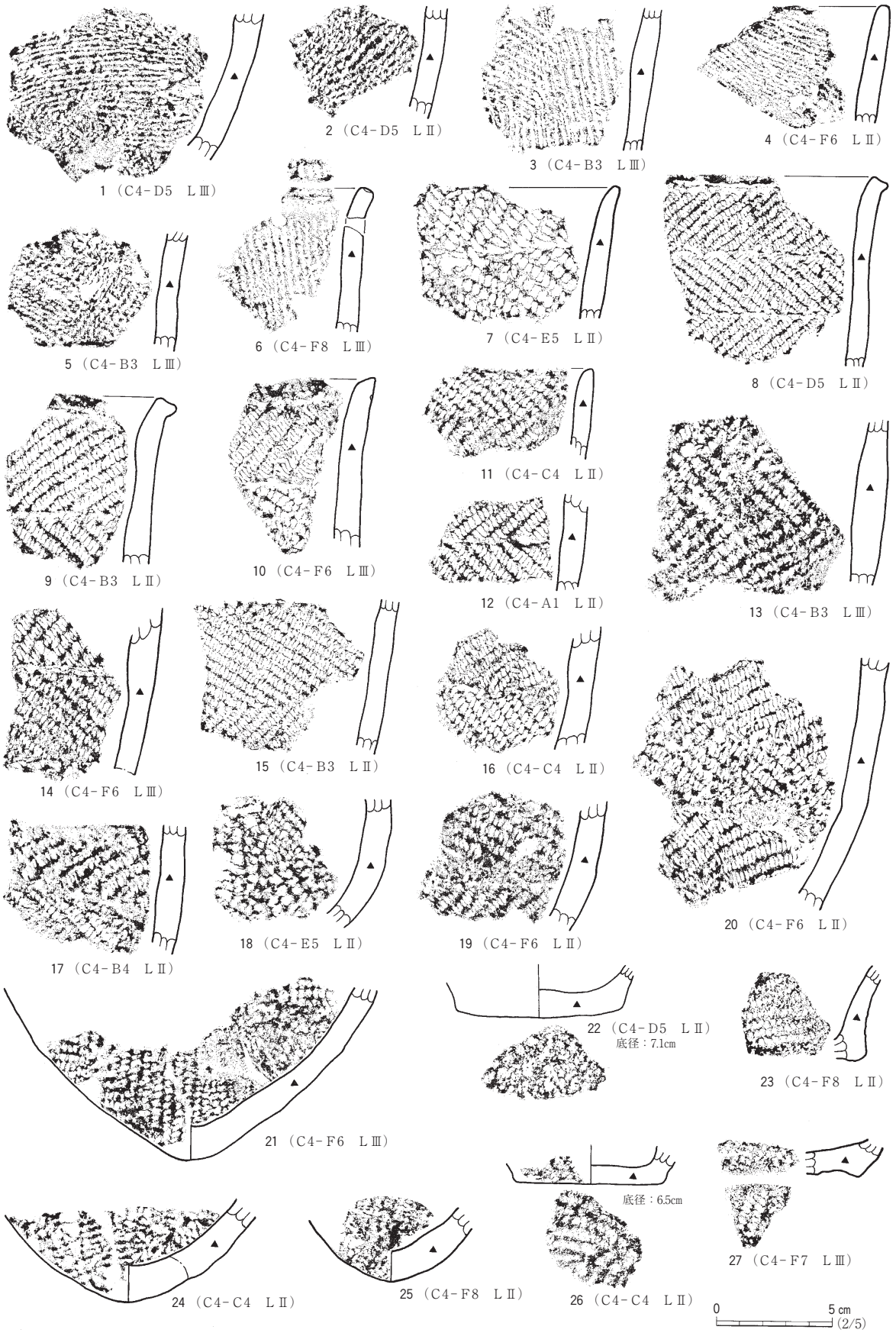


図122　遺構外出土遺物（５）

図123　遺構外出土遺物（６）

の資料で，口縁部上端に条線が刻まれ，その下部には半截竹管状の工具による押引状の刺突文が施されている。図127－１は微量の繊維を含む口縁部破片で，口唇部に刻みが施された土器である。

図123－４～７は浮島系土器である。４・５は同一個体と思われるものである。４は外反する波状口縁であり，その口縁部上端には比較的細い条線文が刻まれている。胴部文様は波状腹縁文が展開しており，４の下半は腹縁を押捺状に差し込んで幅広の波状文となっている。６・７は，４・５とは別地点から出土した土器であるが，胴部文様は押捺的な波状腹縁文である。４～７は，その特徴から浮島Ⅲ式期の土器と考えられる。

（４）　縄文時代前期後半の土器（図124～127）

西地区では，縄文時代前期前半頃の土器が減少するが，前期後葉になると増加する傾向がある。図124には，結節回転文が認められる資料を掲載した。図124－１～16は，胎土内に繊維を含んでいないと判断した資料である。１は，Ｒ原体による結節回転文が観察され，口唇部には刻みが施されている。２の口縁部は無文であり，その下部にＬ撚りの結節回転文が認められる。２の胴部の地文はＲＬ縄文である。２の口唇部は斜め方向からの刺突を行っており，その端部は鋸歯状となっている。３は，結節回転文は認められないが，口縁部が無文で，口唇部が斜め方向からの刺突文が施されているものである。５は波状口縁で，口縁部は無文，その下部はＲ原体による結節回転文が認められる。５の波頂部付近には，２状の粘土紐を平行させた曲線的な貼付文が認められる。７は外反器形の口縁部で，口唇部に刺突文は施されていない。８は無文部がない口縁部破片で，部分的に横位方向の結節回転文が認められる。10の胴部破片は，Ｒ撚りの結節回転文が認められるが，地文は浅く判然としない。13も結節回転文に対して，地文のＬＲ縄文は浅い施文となっている。

図125は，前期後葉の装飾口縁の破片である。１～３・８・10・11は，口唇部に幅広の鋸歯状装飾体が付くものである。１・10・11の鋸歯状装飾体は，胴部に対して50°前後の角度で貼付されている。２・３は胴部と平行するように密着させている。６・７・９は，鋸歯状装飾体の下部に横位隆帯を巡らせているものである。６・７は口縁部上端まで地文が施されているが，９の口縁部は無文地に

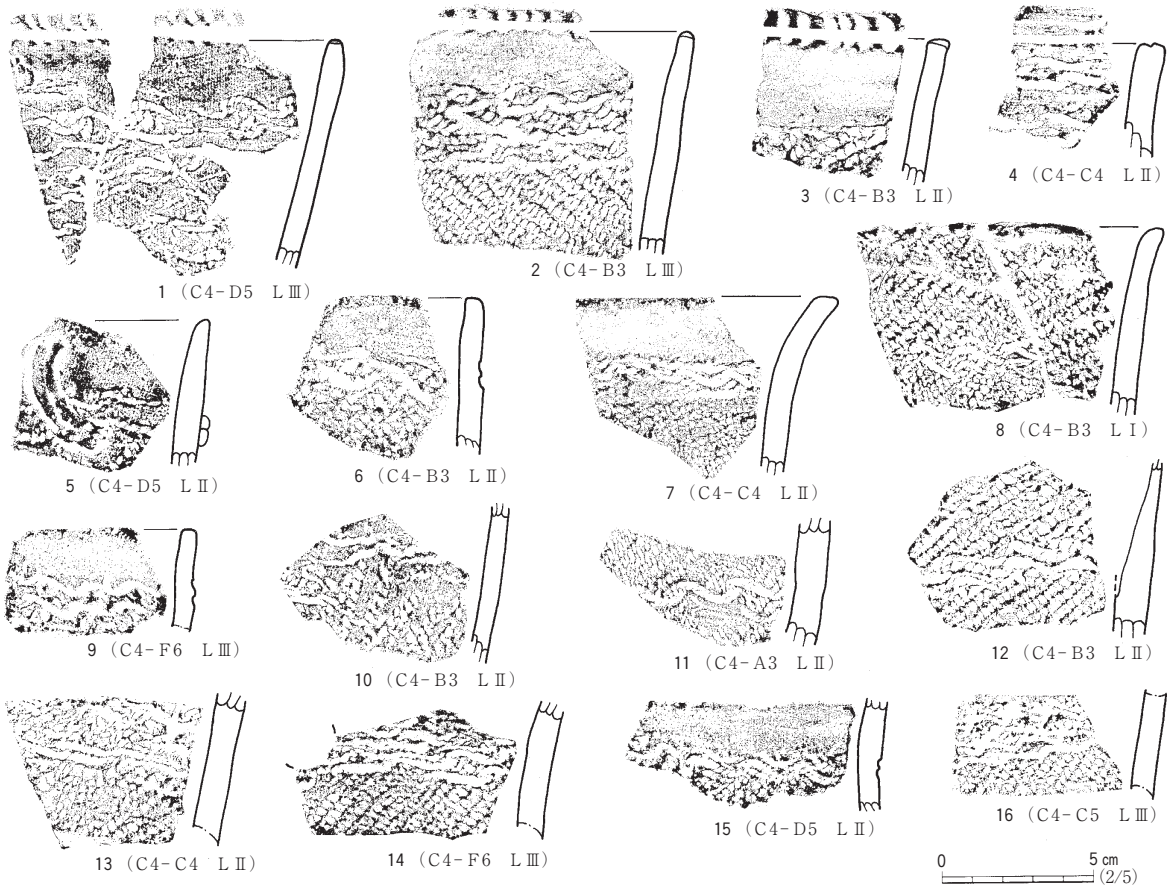


図124　遺構外出土遺物（７）

鋸歯状装飾体・横位隆帯を貼付している。

図125－12・14・17・20は，平坦に仕上げられた口唇部に鋸歯状文を載せるように貼付している資料である。14・17・20の口縁部外面は無文帯となっている。同図15は，丸味を帯びた口唇部に鋸歯状文を載せるように貼付している。同図16は外反器形の口縁部破片で，口唇部に貼付した厚めの粘土隆帯の上下から刻みを入れて，鋸歯状装飾体を作り出している。同図21・23は，口唇部を指でつまんで波状文を作り出しているものである。

図125－18・19・22・25～29は装飾突起である。18の装飾体は，波頂部の側面を環状に取り巻き，さらに右方向へ流れている。その装飾体上には棒状工具による列点文が施されている。19・26・27は，台状の突起が付けられた口縁部破片である。19は，突起部両側の口縁部上端に鋸歯状文を貼付している。26の口縁部は，地文のＲＬ縄文の上に粘土を貼り付けて突起と無文帯を形成しており，突起の左側には粘土紐が貼付されている。27の突起は外方に張り出しており，その平面形は円形に近い。22は波頂部の側面に付けられた円形の突起で，口縁部の形状は撫肩風である。25・29は同一個体と考えられる装飾突起で，突起中央の孔は口縁部も貫通している。25の突起の両側には，細く千切った粘土紐が３本貼付されている。28も口縁部上端の側面に付けられていたと思われる円形の突起で，Ｃ状の沈線文が描かれている。

図126－１～７は，粘土紐による鋸歯状の装飾文が認められるもので，外反器形のものが多い。１・２は同一個体の土器で，調査区北部の遺構集中部から離れた地点で出土した。１・２の口唇部は平坦に仕上げられており，口縁上部は無文帯となっている。装飾は横位に巡る２段１組の鋸歯状文であり，短く千切った粘土紐で文様を描出している。４・５は千切った粘土紐で鋸歯状文を描出しているものであるが，４の鋸歯状文の剥落痕を見ると波状の浅い沈線が観察される。おそらく，粘土紐の貼付前に沈線で下書きを行ったものと推測される。４・５の地文は撚糸文である。３・６・７は，頂部が丸味を帯びた波状の貼付文の土器である。同貼付文にはつなぎ目が認められない。３の口縁部は無文帯であり，口唇部には刻みを施している。６の波状文の下には横位隆帯が貼付されている。

図126－８～12は，２条１組の粘土紐によって雷状の装飾文が認められるものである。８～12の口縁部破片は内湾器形である。８の口縁部には幅広の鋸歯状装飾体が付く。９は波状口縁で，口縁部に沿って２段の粘土紐が貼付され，その下方から雷状文が垂下している。10は口縁部直下に２段の横位鋸歯状文が巡り，その下方に雷状文が垂下している。10の装飾文は，短く千切った粘土紐である。

図126－13・16～18は，粘土紐による梯子状の装飾文が認められるものである。13は，喇叭状の装飾突起が付く口縁部破片である。13・17の梯子状文は，直線的な粘土紐で縁取りが施されている。

図126－14・15・19は沈線文の土器である。沈線文の土器は，西地区ではほとんど確認されていない。14は胴部が膨らむ器形で，曲線文・鋸歯状文が施されている。15は雷状文が認められる。19は口縁部が無文帯で，口唇部の形状は斜め方向からの刻みによって波状に仕上げられている。19の頸部には緩やかな波状文が横位方向に施されている。

図126－20～27は地文のみの口縁部破片で，胎土に繊維を含まない土器である。24以外は平口縁

図125　遺構外出土遺物（８）

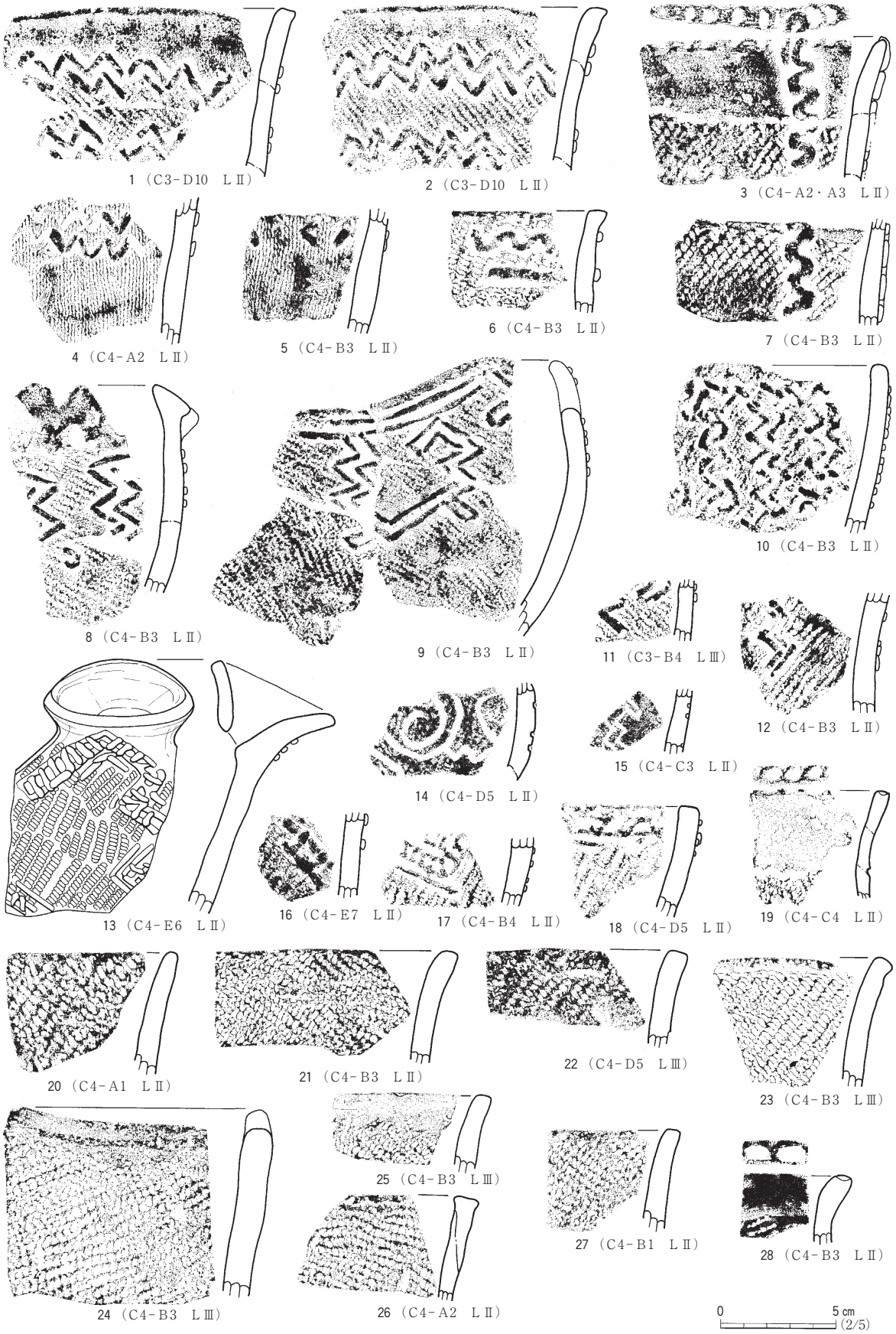


図126　遺構外出土遺物（９）

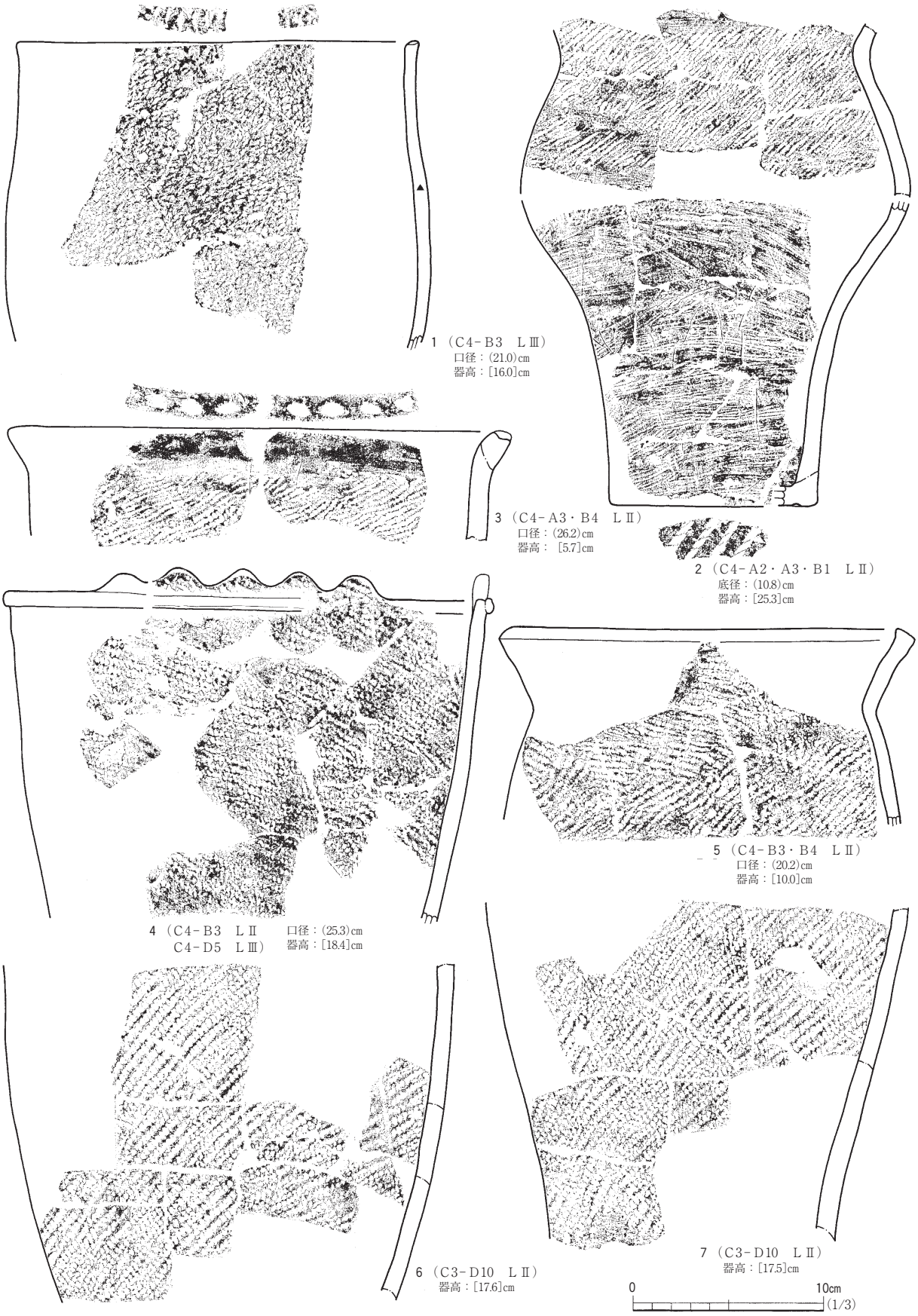


図127　遺構外出土遺物（10）

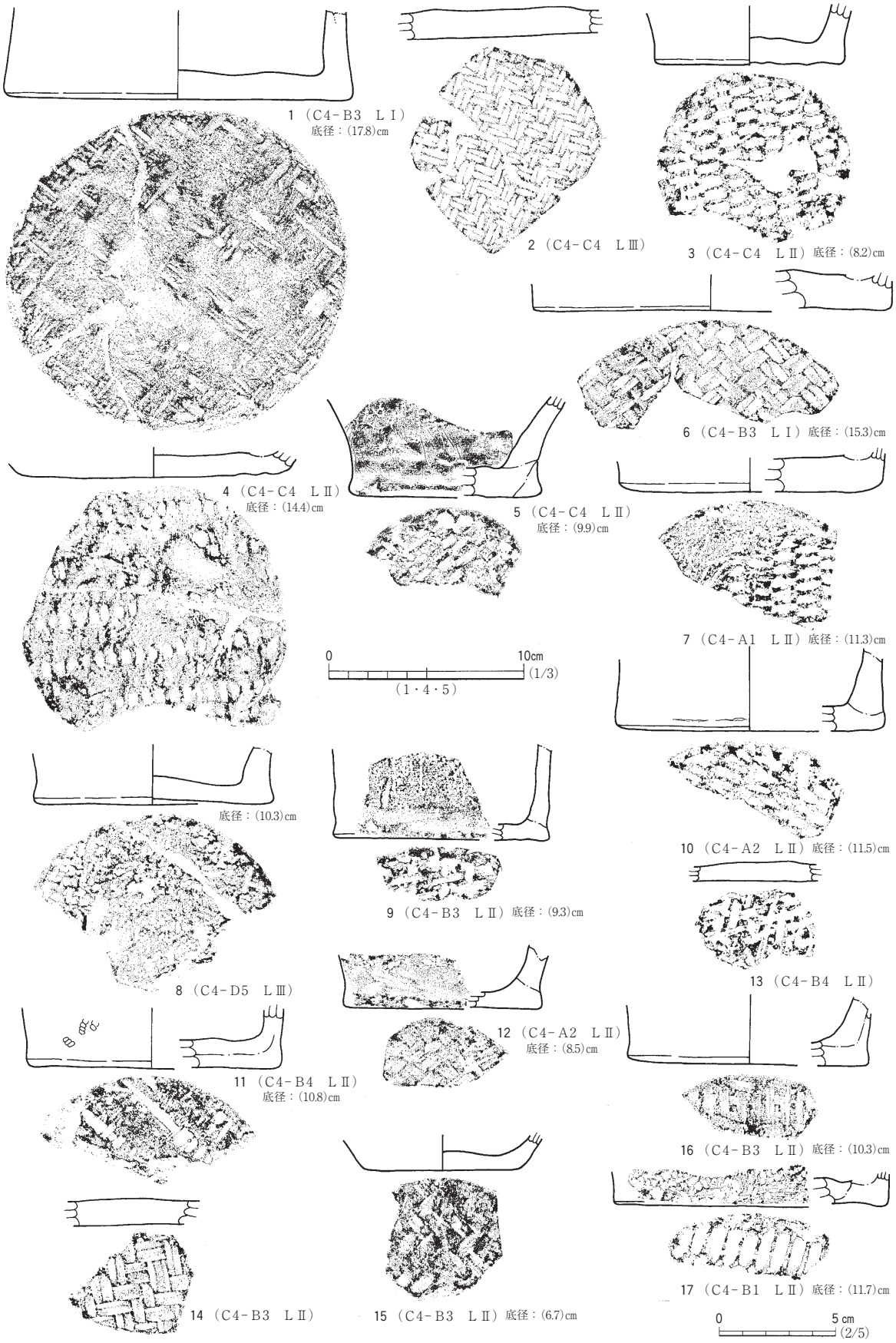


図128　遺構外出土遺物（11）

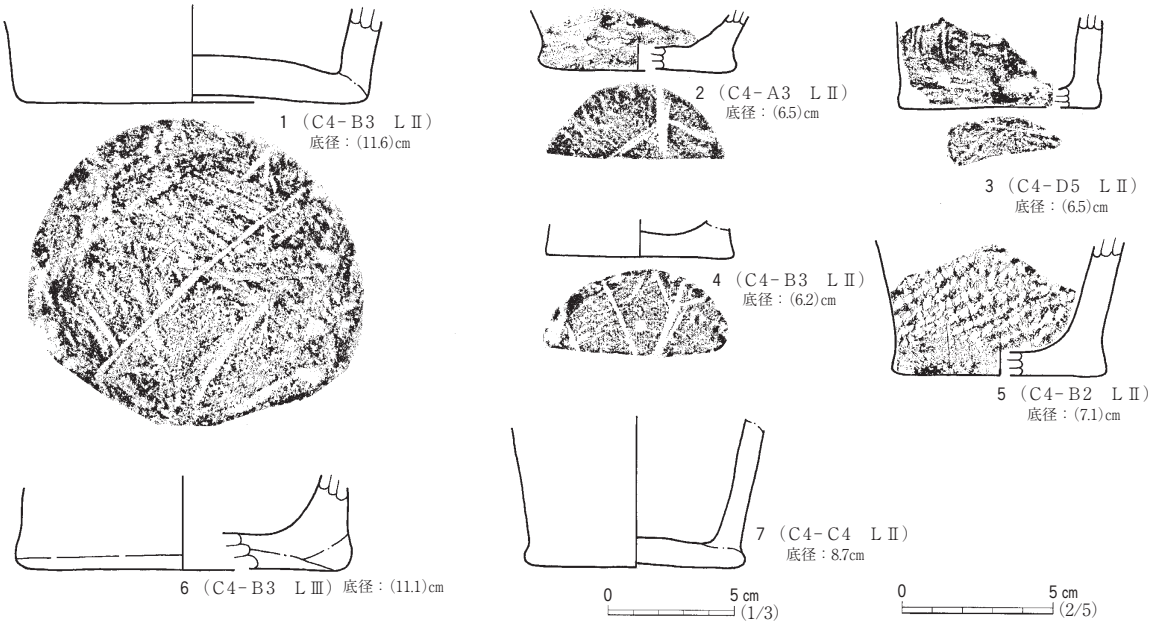


図129　遺構外出土遺物（12）

の土器と推測される。口唇部は平坦に仕上げられているものが多い。図126－28は，口唇部に長さ１cm前後の刺突が施されている。

図127－２～７は，復元実測の資料である。２は，胴部中央に最大径を持ち，頸部と胴部が括れる器形である。頸部は無文帯となっている。胴部上半の地文は，撚りが甘いＬＲ縄文である。胴部下半は，工具は不明であるがナデ調整が施され，条線状の擦痕が認められる。２の底部外面には撚糸文状の圧痕が認められる。３は，口縁部が短く外傾するもので，口唇部に図126－28と同様の刺突文が認められるものである。４は，口縁部の約2/3が遺存している資料である。口縁部上端に隆帯を巡らせている。口縁の一部を波状に仕上げており，その単位はおそらく１単位である。５の胴部も２と同様の球胴形の土器で，口縁部は外傾する。口唇部は平坦に仕上げられている。６・７は同一個体と思われる胴部破片で，底部付近の立ち上がりは直線的であるが，胴部中程から膨らむ器形である。

図128－１～17は，網代痕が認められる資料である。底部外面は水平のものが多く，８のように中央が窪んでいるものは少数である。底径は最大の１が18.7cm，最小の15が6.7cmである。底部中央の厚さは，0.8～1.8cmである。外面の網代痕は，３～５・７・17が１本越え－１本潜りの簡単編みである。２・４が４本越え－４本潜りの２本送りである。14は１～３本送りの変則的な網代痕である。他は不鮮明で，判別が困難である。

図129－１は底部中央と下部に葉の主脈状の筋が認められるが，側脈を消したような痕跡が認められないため，棒状工具で付けられた沈線と思われる。同図２～４は，底部外面に木葉痕が認められる資料で，広葉樹の葉脈が観察される。２～４の底径は6.2～6.5cmで，比較的小型の土器である。３の胴部には，半截竹管状の工具による平行沈線文が認められる。

図129－５～７は，底部外面が無文の資料である。５の底部外面は水平で，磨いたように滑らかな器面になっている。７は２次的に熱を受けており，その器面は荒れている。　（香　川）

２　石　　器（図130～図132）

（１）　石鏃（図130－１～３，５，６）

図130－１～３は凹基鏃である。１は基部の抉りは非常に浅く，器厚も比較的薄い。２は，１よりも直線的な側縁部を持ち，厚みのある石鏃である。３の両脚は丸みを帯びている。５・６は平基鏃である。７には下端に脚部のような抉りこみがあり，石鏃の未成品の可能性もあるが不明である。

（２）　石錐（図130－４）

図130－４は，側縁部に左右から深い抉りを施し，錐部を作り出している。錐部の先端は欠損する。

（３）　石匙（図130－８～16）

つまみ状の突起が付くものを石匙として一括した。８～12は片面加工に近い縦長石匙で，刃部の形状は左側が曲線的，右側が直線的になっている。15の先端は棒状の突起となっているが，刃部の形態・調整から石匙とした。16も同様の刃部を持つが，先端は錐状に加工している。13は突起部から下の形状が石槍状を呈しており，刺突具としての機能を持っていた可能性がある。

（４）　掻器・削器（図130－17～20・図131－３・４）

図130－17～20は，形状・刃部調整等から掻器・削器の機能が考えられる石器である。17・18は，剥片の下端部と側縁に刃部調整が加えられたものである。いずれも下端の刃部は比較的急角度に作られており，掻器の類と考えられる。19の下端部には細かな調整剥離が，先端部には大まかな調整剥離が認められ，いずれも比較的急角度の刃部が形成されている。図131－３は石箆状を呈する石器である。図131－４は円形に近い石器で，両縁・下端は比較的急角度の刃部調整が行われている。

（５）　打製石斧（図131－１・２）

図131－１は，比較的小型の打製石斧である。風化が著しく，全体的に磨耗している。１の刃部が両面加工によって両刃状の刃部が形成されている。同図２は下端の刃部調整から石斧の部類に含めたが，側縁の刃部から削器の機能も持っていた可能性がある。

（６）　磨製石斧（図131－５）

図131－５は，刃部の両端を欠損している。刃部の形状は片凸刃を呈し，比較的扁平な磨製石斧である。両側面は，面取りによって平坦になっている。全面に比較的丁寧な研磨が行われている。

（７）　石製品（図131－６）

図131－６は両端が折れている。断面は扁平な楕円形で，面取り後に研磨を行って仕上げられた石器と思われる。遺存部の形状から石剣などの可能性も考えられる。

（８）　石核（図131－７）

図131－７の石核は様々な方向から剥片が剥がされ，自然面は残っていない。作業剥離面は５面以上であり，比較的小さな石器の素材を採取したものと推測される。

（９）　敲石・磨石・凹石（図132－１～６）

円礫を利用した石器で，敲石・磨石・凹石などがある。各石器の用途は，磨石と凹石など２種類以上の機能を兼ねたものが多い。　　（小　向）

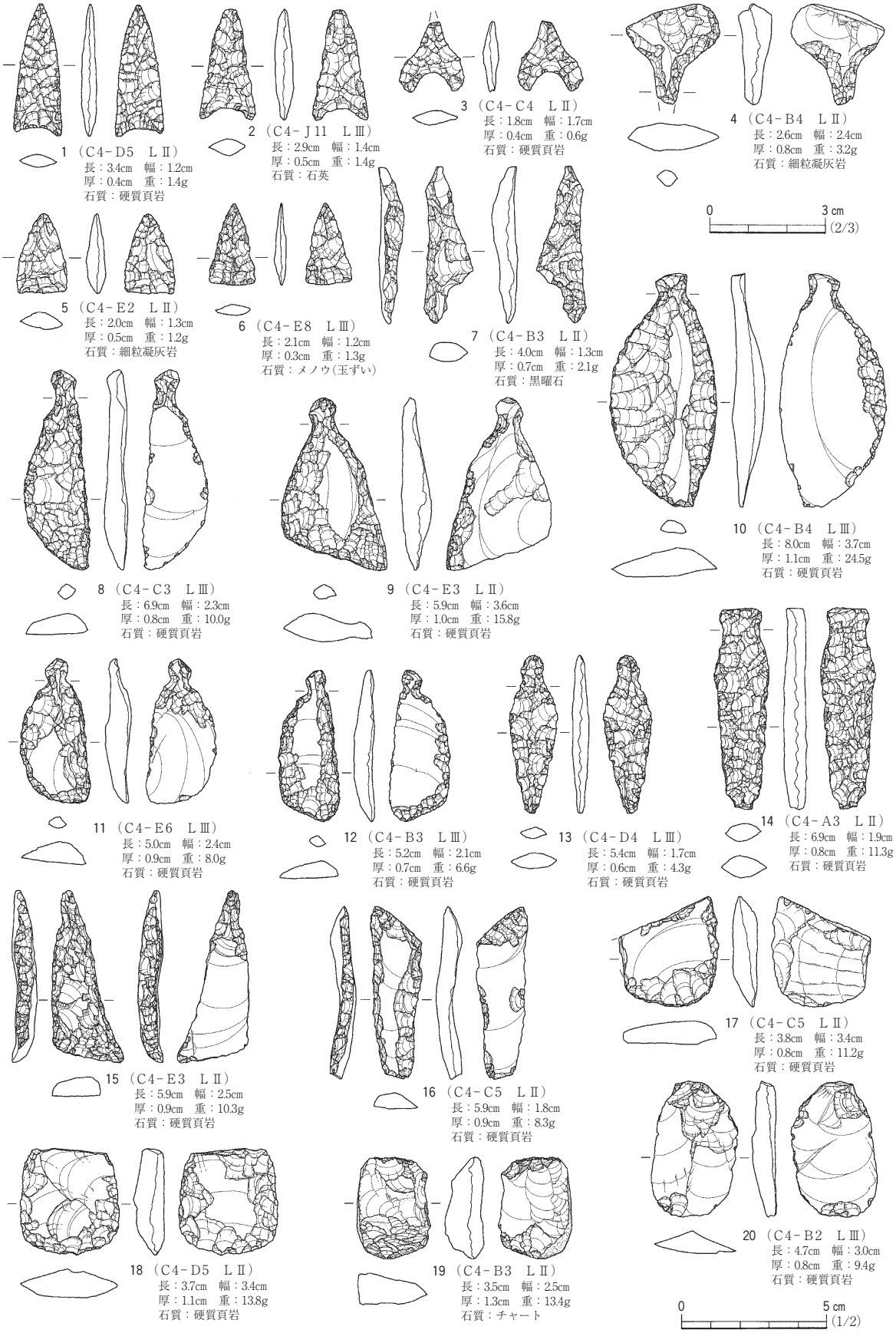


図130　遺構外出土遺物（13）

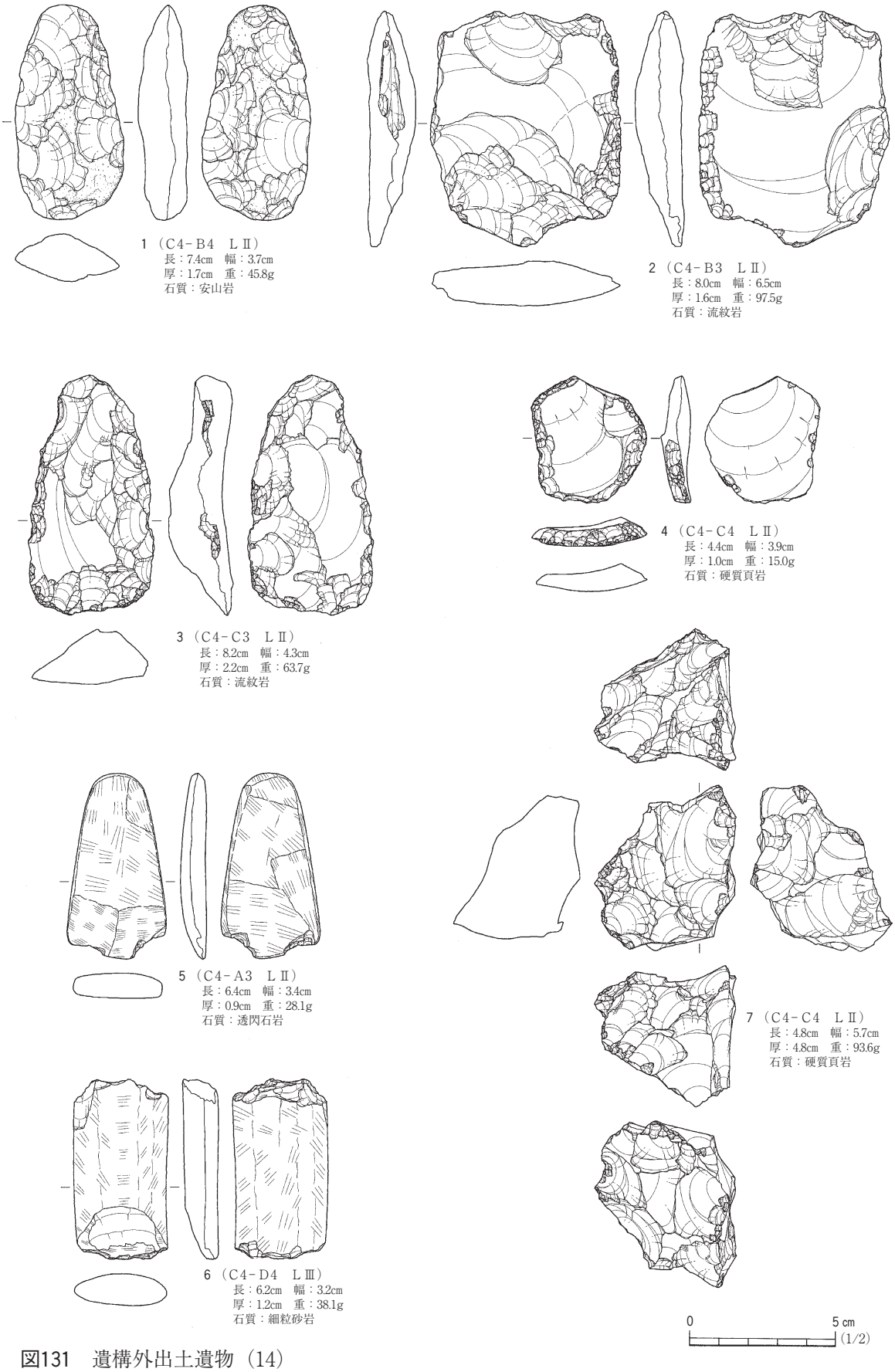


図131　遺構外出土遺物（14）

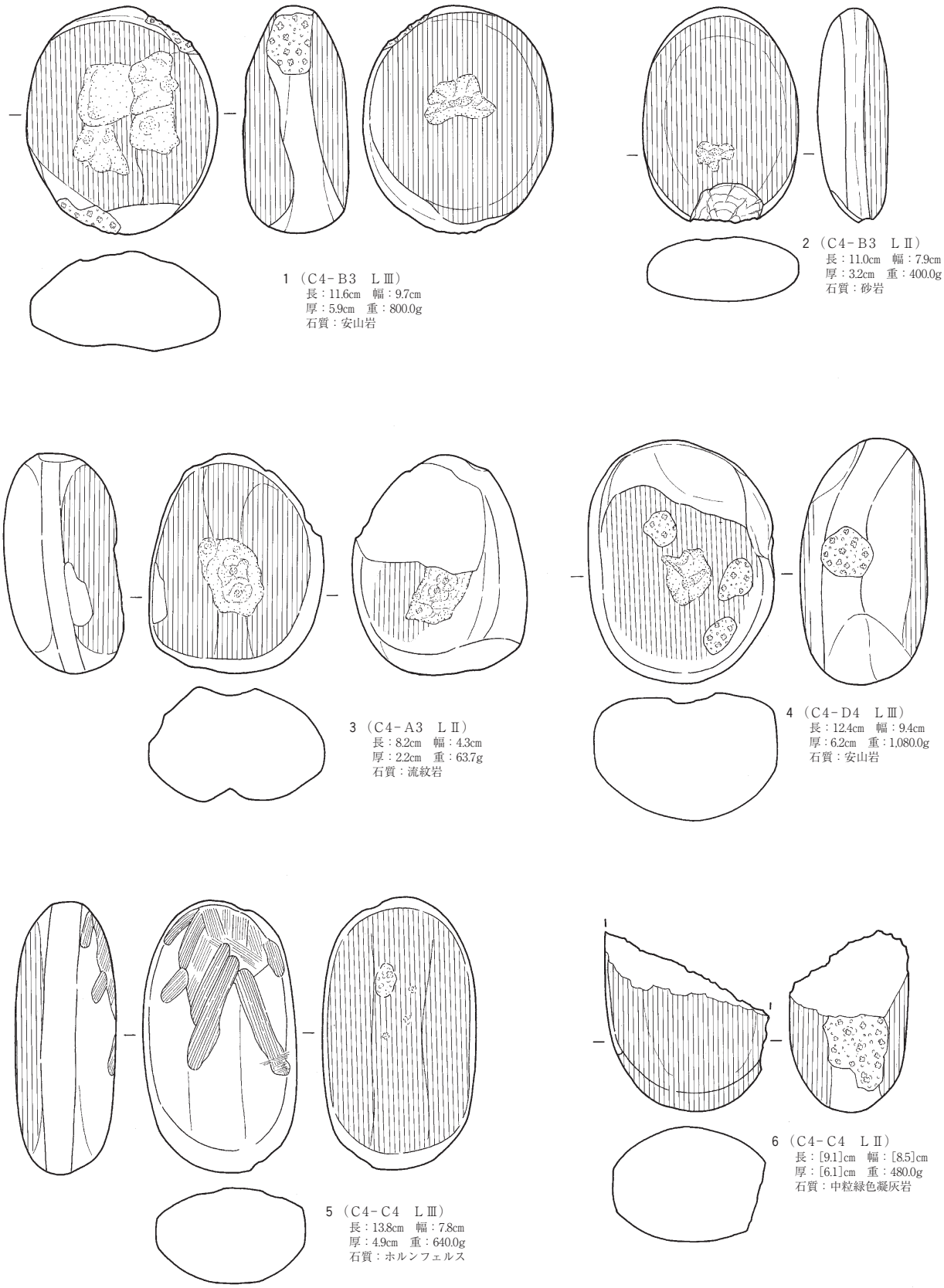


図132　遺構外出土遺物（15）

第４章　総　　括

第１節　東地区の総括

今回の調査では縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，施釉陶器，石器，石製品，鉄製品などが出土した。このうち主体をなすのが縄文・弥生土器と土師器である。遺物は，遺構内からは少なく，その大半は遺構外からの出土である。ここでは，出土土器の年代的な位置づけを行いたい。

１　縄文時代・弥生時代について

①　縄文時代晩期後葉～弥生時代初頭の土器について

縄文時代晩期から弥生時代の土器は，今回の調査で出土した縄文・弥生土器の約７割を占める。時期を異にする遺物が混在する出土状況である。ここでは，縄文時代晩期の土器と弥生土器（おおよそ大洞Ａ～Ａ′式期）を包括したのは，縄文時代と弥生時代の接点をめぐって，見解は様々で，これは該期土器研究にも如実に反映している現状であり，縄文土器と弥生土器の境界は今のところ流動的だからである。荻平遺跡出土のこの種の土器の特徴として，次の点があげられる。

①器種の点では破片資料が多いため判然としないが，精製の浅鉢形・鉢形・深鉢形・壺形土器などがあり，粗製の深鉢形土器・甕形土器が伴う。

②文様は無文地に沈線文の構成であるが，稀に貼瘤状の突起をもつものがみられる。文様構成は「工字文・変形工字文」が基本である。

③沈線幅は細・太両方があるものの，全体的にはやや太い傾向がみられる。沈線の幅は２～３㎜を測り，断面は「Ｕ」字状を呈する。但し，細い沈線は，断面は「Ｖ」字状を呈し，沈線も深いものが多い。

④口縁内面に稜をつくり，沈線文を施す例が，浅鉢・鉢型土器などの全体の3/4を占める。

以上が，本遺跡出土の縄文晩期終末～弥生時代初頭の土器の特徴である。破片資料が圧倒的に多く，全体の文様構成を把握し得るものはほとんどないため明確な分類は不可能であるが，掲載したほとんどの土器が，大洞Ａ式に代表される工字文の流れをくみ沈線化が進行し，沈線による文様表出が盛んに行われる資料である。また，133図１～３は鎖状隆帯文が施された浅鉢形土器で，鎖状隆帯文の施される土器は大洞Ｃ２式から大洞Ａ式期に渡って，福島県内では普遍的に認められるものである。また，浅鉢形土器では133図４・５のようなコブ状の突起のある類は前代との関連が考えられ，古相を示している。133図12・13は，小破片であるがいわゆる「π字文」と呼ばれるもので，宮城県南部の阿武隈川下流域や福島県浜通り地方の諸遺跡に比較的多く見られるようである。

荻平遺跡の土器は，工字文系の文様が施されるものが主体を占め，浮線網状文系の文様を施した土器は見られない。飯舘村岩下Ｃ遺跡や南相馬市（旧原町市）羽山遺跡・小池田遺跡での浮線網状

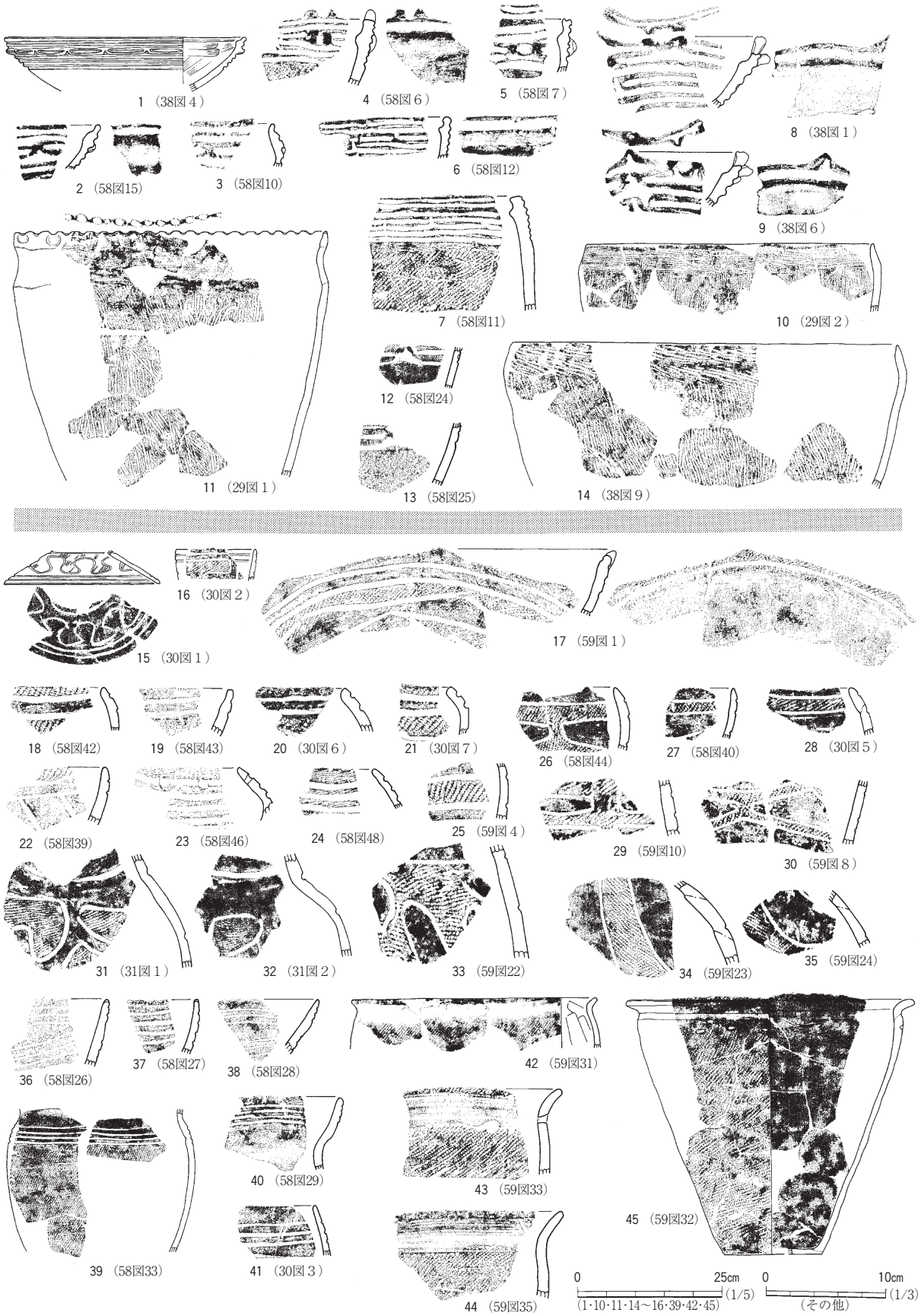


図133　荻平遺跡出土の縄文時代晩期後葉～弥生時代の土器

文系土器の出土にあるように，福島県北地域も浮線網状文系土器群の分布範囲には確実に入っていると思われるが，荻平地区内の大洞Ａ式期では基本的な土器のセットに浮線文系の土器は含まれないものと考えておく。

また，この時期になると「半精製」土器が極めて少なくなる。前段階で見られた，「精製」・「半精製」・「粗製」という土器の３極構造が，精製・粗製土器という２極構造へと変化しているものと推測される。この現象は小・中型深鉢型土器が極めて少なくなる傾向と表裏の関係にあるものだろうか。また，粗製土器では撚糸文や条痕文を地文とする深鉢や，口縁部が内湾するタイプの深鉢などの存在（133図10・14）が多く認められる。会津美里町（旧会津高田町）下谷ケ地平Ｃ遺跡１号住居跡例から網目状撚糸文の施されたものは，そのほとんどは大洞Ａ式よりは古い時期の所産，条痕文が施されたものは大洞Ａ式期の所産と推察されている（福島県教育委員会 1986）。荻平遺跡はこれを裏付けるように，網目状撚糸文が施文された粗製土器は極端に少なく，条痕文土器が主体を占めている。また，これは福島県内の縄文時代晩期終末～弥生時代にかけての遺跡では普遍的に認められるものである。

②弥生時代中期の土器について

磨消縄文手法が卓越する土器の一群が，本遺跡出土土器の主体となる弥生土器である。一部充填手法や沈線のみで構成される土器も含まれる。これら土器の特徴を以下にまとめてみる。

①器形全体がわかる資料は非常に少ないが，器種には精製の鉢・深鉢・蓋・壺と粗製の甕がある。

②文様は太目の沈線を用いた磨消縄文手法を駆使するものが大半を占める。沈線の幅は２～３㎜を測り，断面は「Ｕ」字状，沈線も深いものが多い。

③施文は地文（縄文）→ 沈線区画 → 磨消の順序をとるようである。また，充填縄文も一定量だが認められる。

④前述した土器群の工字文からの明確な流れを捉えられる資料は少なく，代わりに幅広の縄文帯による曲線的な文様が多いようにみえる。

⑤地文は縄文がほとんどで，ＬＲ単節縄文が主体を占める。しかし，施文方向に規則性はあまり観察できない。縄文の他にも植物茎回転による偽縄文のものも含まれる。

以上が本遺跡出土弥生土器の大まかな特徴としてあげられる。器種別の文様は破片資料が多いため，詳述できないが，全体の傾向としては133図18～25のように，口縁部直下に１～３条の沈線を巡らし，以下に曲線的な文様を描出されるものが多く，鉢類に多い。蓋形土器でも，133図15のように口縁に沿って沈線を巡らせ，天井部までの間に文様を描出されるものもみられる。基本的には，縄文部を組み合わせながら，横方向の沈線によって文様帯を区画し，区画内に曲線的な文様を描出したり，あるいはこの横方向の沈線のみで構成されるものが大部分を占めるといえる。

本遺跡出土の弥生土器の類例を求めてみると，県内では，阿賀野川水系に位置する北会津村西麻生・今和泉の両遺跡，阿武隈川水系に位置する福島市孫六橋遺跡や郡山市御代田遺跡，相馬・いわき付近では，いわき市龍門寺遺跡，飯舘村岩下Ａ遺跡，相馬市柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群などがあげ

られる。県外では距離的にも近い宮城県南部の角田市鱸沼遺跡があげられる。

鱸沼遺跡の資料は細分され，「磨消縄文手法が盛行し，文様が複雑化し，人手文・菱形文・垂下文などが盛行」するものに，この遺跡の「鱸沼式」の型式が弥生時代中期前葉の土器として考えられている。仙台湾沿岸から福島北部にかけて強い斉一性を有する土器群である。また，鱸沼の資料は従来から形式的に分類が可能で，磨消縄文のない段階からある段階への変化が考えられてきた。荻平遺跡では，こうした考えを裏付ける層位的所見は得られなかったが磨消縄文をもつ土器は後続する枡形囲式，あるいは県内の棚倉式・南御山Ⅰ式等へ連続すること，逆に沈線文のみの土器は，前段階への結びつきが看取されるようである。

荻平遺跡資料と最も近似するのは，鱸沼遺跡や岩下Ａ遺跡の土器群である。また，同じ宇多川流域であるならば柴迫Ａ遺跡の１号溝跡７層土器群がある。鱸沼遺跡と岩下Ａ遺跡ともに本遺跡の大洞Ａ～Ａ′式期とそれに後続する土器とともに出土している。こうした出土状況は荻平遺跡でも共通しており，本遺跡で出土したこれらの土器群も時間的には大差ないものと推察している。なお，岩下Ａ遺跡はその立地する環境も荻平遺跡と非常に類似するものであり，出土する土器の文様構成においても，工字状文がほとんどなく，三角文主体の複雑なモチーフを持たない磨消縄文を施す鉢類の特徴や，縄文部による入り組んだ曲線文，あるいは沈線区画内を充填する手法なども非常に類似していることを指摘しておきたい。しかし，以上の遺跡などで出土している土器群には，土器組成や器種構成が不明瞭なものもあり，そのうえ地域性による相違が内在していることから，当土器群と比較し，明確な位置づけを行うことが困難な面もあり，相馬地域を中心とした前後型式の土器様相が明らかになった段階で，決定されるべきと考えられる。

また，133図36～41は数条の平行直線文で文様が構成される土器で，沈線の断面形は「Ｖ」字状を呈する一群である。見た目は，細く鋭利な感じのする沈線で，ブレが少なく一気に引き終えたかのような印象を受けるものである。これらの土器も器種別の文様は破片資料が多いため，詳述できないが，36・38の破片から推察するなら，口縁直下の平行直線で区画帯があり，その直下に波状の文様を呈する“波形文”が展開するものと思われ，弥生中期中葉の枡形囲式期に属するものと推察される。これら土器群の出土数は前段階のものと比べると遥かに少ないため，ここでは言及程度に留めておきたい。

③縄文時代晩期・弥生時代の住居跡について

今回の調査で，荻平遺跡の東地区では，縄文時代から弥生時代の竪穴住居跡を５軒確認した。うち２軒は出土遺物の稀少さから，検出層位や周辺からの出土遺物との関連から，おおよそ縄文時代後期から晩期の所産であるとした（ＳＩ31・32）。

また，調査区中央付近に位置する崩落層上に立地する３軒の住居跡（ＳＩ42・47・53）からは，縄文時代晩期～弥生時代に属する比較的多くの遺物が出土し，これらの出土土器の特徴から，

42号住居跡　→　縄文晩期後葉～弥生時代初頭（大洞Ａ～Ａ′式期）

47号住居跡　→　弥生時代中期前葉（磨消縄文手法が主体となる弥生土器）

53号住居跡　→　縄文時代晩期後葉（大洞Ａ式期）

以上の所産と判断した。ここでは，ほぼ全体形を把握できた３軒の住居跡に焦点を絞ってまとめてみたい。これら３軒の住居跡の構造については先述したが，再度まとめてみると，①平面形は楕円形状を呈し，小型から中型の感がある。②炉は地床炉である。③柱穴は不明瞭だが，53号住居跡は変則的な配置である。④貯蔵穴状の土坑がみられない。等が挙げられる。

福島県内においては，縄文時代晩期の竪穴住居跡検出例は近年急増しているが，その大半は大洞Ｂ～Ｃ２式期のもので，晩期終末の大洞Ａ・Ａ′式期の住居跡は稀少に等しい。僅かに会津美里町（旧会津高田町）北ノ前遺跡（大洞Ａ式期），同町下谷ケ地平Ｃ遺跡（大洞Ａ式期），只見町窪田遺跡（大洞Ａ～Ａ′式期），福島市南諏訪原遺跡（晩期後葉），飯舘村岩下Ａ遺跡（晩期終末～弥生時代初頭），同村羽白Ｃ遺跡（大洞Ａ式期）が管見ではあるが報告されているに過ぎない。

一方，弥生時代中期の例も稀少で，会津地方では会津若松市一ノ堰Ｂ遺跡，中通りでは，矢吹町文京町遺跡・八幡町Ｂ遺跡，須賀川市土取場Ｂ遺跡，浜通りでは，新地町向田Ｅ遺跡・武井Ｄ遺跡，相馬市柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群，南相馬市鳥打沢Ｂ遺跡・長瀞遺跡，双葉町塚ノ腰遺跡，楢葉町美シ森Ｂ遺跡，いわき市龍門寺遺跡・伊勢林前遺跡・白岩堀ノ内遺跡・上ノ内遺跡・朝日長者遺跡・大畑貝塚等が管見に触れているのみである。しかし，この弥生時代の例の大半は荻平遺跡47号住居跡よりもやや後出する時期の所産である。この点で，荻平遺跡のこの３軒の住居跡は縄文時代晩期後葉～弥生時代の住居跡として貴重な新例といえる。

福島県内の縄文時代晩期後葉の例は先述したように数少ないため，時期を多少広げて晩期全体の例と荻平遺跡の42・53号住居跡を大雑把に比較してみると，まず規模の点で酷似し，プランも楕円形のものなどがあり類似している。また柱穴の配置については，県内例をみると福島市南諏訪原遺跡など縄文時代晩期後葉の住居跡は，縄文時代後期以来の壁溝と壁柱穴の形態をとっているのに対

表11　福島県内の縄文時代晩期後葉竪穴住居跡一覧

市町村	遺跡名	遺構名	平面形・規模（m）		炉	住居跡内付属遺構	時期
飯舘村	岩下Ａ	１号住居跡	隅丸長方形	3.6×2.9	地床炉	壁沿柱穴・貯蔵穴状ピット	晩期終末～弥生初頭
	羽白Ｃ	62号住居跡	楕円形	5.5×4.25	石囲炉	ピット７	大洞Ａ～Ａ′
		63号住居跡	（楕円形）	（4.2×3.4）	石囲炉	ピット13	大洞Ａ′
福島市	南諏訪原	45号住居跡	隅丸方形	5.5×5.5	地床炉	壁溝・入口部・ピット30	縄文晩期後葉
		46号住居跡	隅丸方形	4.4×4.3	－	壁溝・ピット12	縄文晩期後葉
		47A号住居跡	楕円形	6.92×6.14	－	壁溝・ピット	縄文晩期後葉
		47B号住居跡	円形	5.84×5.76	地床炉	壁溝・ピット37	縄文晩期後葉
		48号住居跡	隅丸方形	4.88×4.65	－	壁溝・ピット31	縄文晩期後葉
		49号住居跡	不明	5.8×5.7	－	壁溝・ピット27	縄文晩期後葉
		50号住居跡	楕円形状	6.4×4.82	－	壁溝・ピット30	縄文晩期後葉
		55号住居跡	円形	5.9×5.2	地床炉	壁溝・ピット21	縄文晩期後葉
		56号住居跡	台形状	5.42×4.9	－	壁溝・ピット14	縄文晩期後葉
		58号住居跡	（隅丸方形状）	（6.42）	－	壁溝・ピット５	縄文晩期後葉
会津美里町	北ノ前	３号住居跡	（楕円形）	（3.8×3.2）	石囲炉	壁溝	大洞Ａ
	下谷ケ地平B･C	１号住居跡	楕円形	4.28×3.77	石囲炉	ピット10	大洞Ａ
		２号住居跡	不明	（4.08×2.9）	石囲炉	ピット５	大洞Ａ
只見町	窪田	２号住居跡	不明	－	石囲炉	ピット19	弥生初頭

＊（　）内の数値は遺存値を表す

し，荻平遺跡は砂礫層上に立地し花崗岩が露出しており，地形的な制限もあるためか，柱の配置等は不明瞭な部分が多い。また，飯舘村岩下Ａ遺跡１号住居跡には貯蔵穴状土坑が付属する。これは南関東地方などの弥生期の住居跡には数多く見られることから先駆的な例とされるが，ほぼ該期に属する荻平遺跡の42・53号住居跡には見られない。また後出する47号住居跡にも見られず，柱穴の配置等には不明瞭な部分が多い。こうした点から荻平遺跡の住居跡は，規模・形状・炉など県内の晩期の住居跡の流れの上に理解されるが，柱穴の構造や周溝など，地形的な制限があるためか不明瞭な部分も多い。

一般に，縄文時代晩期後葉～弥生時代初頭にかけての遺跡には，再葬墓など埋葬関係の遺構の検出例は卓越するものの，生活に関する遺構・遺物などの情報は極端に少ない傾向にある。こうした点からすると，今回の42・53号住居跡は重要な確認となろう。類例はまだ少なく，今後の調査に期するところ大である。

また，弥生時代中期に属する住居跡の形態は，上述した遺跡例から，方形・楕円形・隅丸方形等，平面プランにバラエティーがあるのが特徴であり，炉を持つものは地床炉となっている。また，本遺跡の47号住居跡のように不整形で無柱穴と推定される住居跡も存在し，相馬市武井地区遺跡群や南相馬市（旧原町市）金沢地区遺跡群と同様に，その認定については今後の課題となろう。

荻平遺跡東地区では，遺構の稀有・集中部分はあるが，弥生時代に属する47号住居跡が位置する箇所は，丘陵中腹の極狭小な緩斜面上である。丘陵地を中心とするこのような遺跡のあり方は，相双地区では中期後葉の桜井式期の遺構が検出された武井地区遺跡群や金沢地区遺跡群の成果を基にして，詳細に論じられているように（福島県教育委員会 1992），沖積地での遺跡が発見されにくい事も起因しているであろうが，本例のような遺跡・遺構のあり方が一般的な傾向として普遍的に存在するようである。

相双地区では桜井式期に遺跡数のピークを迎え，かつ先述したようなほぼ共通した立地形態をとることが分かる。しかし，本遺跡で主体を占める弥生中期前葉の遺跡・遺構については，相双地区ではまだ稀少であり，集落域の立地形態をそのまま桜井式期の事由と当てはめる事ができるのか，今後の検討課題の一つであり，これからの当該期の遺構の増加を待ち，結論は保留しておきたい。

（稲　村）

2　平安時代について

①荻平遺跡出土の土師器・須恵器について

土師器は8733点出土した。このうち，158点を図化した。半数は遺構外からの出土となる。掲載した土器の種別および器種別の頻度表を表12に示した。量的には土師器杯と甕がもっとも出土量が多い。また，須恵系土器は遺構内では少なく，大半は遺構外からの出土である点が注意される。

杯類はおもに内面に黒色処理が施されたもの（土師器とする）と酸化炎焼成のもの（赤焼土器・土師質土器などと呼称されているが，ここでは須恵系土器と呼称する）が出土している。土師器杯は遺構内外から出土するものの，須恵系土器の杯は33・38・39・52号住居跡で出土したのみである。

土師器杯・高台杯

土師器杯は全体の器形が判明するようなものが非常に少なく，ここでは底部の切り離し技法と体部下端の再調整をもとに分類を行う。

Ａ類－体部下端の再調整が回転ヘラケズリの杯

Ｂ類－体部下端の再調整が手持ちヘラケズリの杯

Ｃ類－体部下端の再調整が無調整の杯

さらに，底部切り離し技法が，１類－回転ヘラ切り，２類－手持ちヘラケズリ，３類－回転糸切りに細分する。なお，底部の破片資料が多く，静止糸切りか回転糸切りかの区別がつかない個体が多く認められたが，確認できる個体はすべて回転糸切りとなる。

Ａ類は遺構外から出土したＡ３類のみである（67図12）。

Ｂ類も遺構外から出土したもののみで，Ｂ３類に相当する（67図４・13～15）。

Ｃ類はこれら以外が該当する。大半がＣ３類であり，Ｃ１類は18号住居（12図３），Ｃ２類は13号焼土遺構（54図１）のみである。

高台杯は遺構内外から出土したが，高台部の器高が１㎝に満たない低い高台のもの（Ｂ類）が大半で，１㎝以上のものは13号焼土遺構で出土しているのみである（Ａ類・54図９）。前者は断面が四角形のものと三角形のものが存在する。また，遺構外の図25・27は体部外面にもミガキが施された個体が認められた。同じ調整が施された20号住居跡出土の16図３も高台杯と考えている。

黒 色 土 器

黒色土器は13号焼土遺構で２点，39号土坑で１点，遺構外で３点の計６点が出土した。杯が２点，高台杯が２点で，その他は体部片で器種は不明となる。杯の底径は５㎝程度である。

須恵系土器

須恵系土器は，杯と小皿，高台杯が出土した。前述の通り大半が遺構外からの出土であり，遺構内からはその器形が判別できるものが少ない。口径が12㎝以下のものを小皿ととらえている。器高が２㎝未満の浅いもの（皿Ａ・68図８）と口径が11㎝前後で，杯を小型化したもの（皿Ｂ・68図９・10）がある。杯は底径が５㎝前後のものが多く，体部が直線的に外傾，端部が外反するもの（杯Ａ・68図12～14）と，体部が丸みを帯びるもの（杯Ｂ・68図15・16）の２者に大別される。後者は丸みを帯びる点で法量が大きくなる。また，底部を切り離す際に台からやや離して糸切りを実施したもの（68図12・13・19）も認められる。高台杯は遺構外から２点出土したのみである。なお，高台皿と思われる資料は見いだすことができなかった。

甕　　類

甕は，ロクロ成形の個体と非ロクロ成形の個体が認められる。杯よりも形態差が認められるので，やや詳しく分類する。ロクロ成形の個体は，口縁部が短く外反するものと（Ａ類），素口縁で外傾するもの（Ｂ類），口縁部が「コ」の字で端部に面を有するもの（Ｃ類）が認められる。非ロクロの甕は短く水平方向に外反する口縁部のもの（Ｄ類）と短く直立気味に外反する口縁部のもの（Ｅ

類），口縁部が「く」の字状に外反するもの（Ｆ類）が認められる。遺構ごとの分類は以下の通りである。

Ａ類－18号住（12図８），50号住（33図３），遺構外（69図１）

Ｂ類－20号住（16図６）

Ｃ類－18号住（12図９・11），遺構外（69図２）

Ｄ類－17号住（９図１・２），33号住（20図４），37号住（24図２），49号土坑（50図15），遺構外（69図６）

Ｅ類－18号住（12図７），36号住（23図２），遺構外（69図４）

Ｆ類－18号住（12図10），20号住（16図５），26号住（17図３），35号住（22図２・３），52号住（35図６），29号土坑（50図１），遺構外（69図３・５）

その他の土器類

土師器の鉢は２点のみの出土である。２点ともロクロ成形で，小型甕の器高を低くしたもの（遺構外・68図26）といわゆる鉄鉢模倣の鉢（仏供・18号住・12図６）となる。

両面黒色を除く鉄鉢模倣の土師器は福島県内で17遺跡を数えるが（田中1997），大半は非ロクロ成形の土師器である。本遺跡のようなロクロ成形でなおかつ内面が黒色処理されない土師器鉢は管見に触れた範囲で，いわき市大久保Ｆ遺跡（９世紀末・福島県教育委員会1996），郡山市田向Ａ遺跡（９世紀前半・福島県教育委員会1990）などで出土している。これらと比較すると，本遺跡の鉢はこれらよりも口径が小さい特徴を有する。本遺跡でも明確な村落内寺院とはいえないだろうが，仏教的な思惟に基づいた生活が行われていた証左となろう。

筒形土器は14点出土した。13号焼土遺構が６点程となるが，いずれも小破片で器形が明らかなものはなかった。

須　恵　器

須恵器は非常に数が少ない。遺構内外から僅かに104点のみである。器形がわかるものも少なく，瓶類と甕類のみで，杯類は皆無であった。胎土の分類では，次の４グループに分けられる。

①やや砂質を帯びる胎土で，３㎜以上の夾雑物がほとんど無い精良な胎土の一群。精良ゆえに器表面もざらつきが少ない。色調は淡い灰色や灰白色を呈し，焼成温度が比較的低かったためか，軟質の印象を受ける。（遺構外・70図１・２・７・８・９・10）

②やや砂質を帯びる胎土で，①に似ているが，石英や砂粒などの内容物が①より多い。器表面に白色砂粒の吹き出しが目立つ一群。色調は灰色を呈し，硬質。（19号住・14図３・39号土坑・50図６，遺構外・70図11）

③砂質で，石英などが多く，微量の海綿骨針を含む胎土。色調は黄灰色を呈し，やや硬質な一群。（17号住・９図３，遺構外・70図３・４・６）

④粘土質で，白色･黒色砂粒を多く含む胎土。色調は灰白色で，白が強い印象を受ける。（遺構外･70図５）

表12　荻平遺跡出土平安時代土器頻度表（杯類・甕のみ）

遺構番号	土師器														須恵系土器				
	杯A3	杯B2	杯B3	杯C1	杯C2	杯C3	高台杯A	高台杯B	甕A	甕B	甕C	甕D	甕E	甕F	皿A	皿B	杯A	杯B	高台杯
ＳＩ17												2							
ＳＩ18				1		1		1	1		2		1	1					
ＳＩ19						1													
ＳＩ20						1				1				1					
ＳＩ26						1								1					
ＳＩ33						2						1							
ＳＩ35								1						2					
ＳＩ36													1						
ＳＩ37								1				1							
ＳＩ38																		1	
ＳＩ39																			
ＳＩ48						1													
ＳＩ50						1			1										
ＳＩ52						1		1						1				1	
ＳＩ54								1				1							
ＳＫ29														1					
ＳＫ39						1		1											
ＳＫ40								1											
ＳＫ46																			
ＳＫ55								1				1							
ＳＧ13					1	1	1												
遺構外	1		4			11		9	1		1	1	1	2	1	2	3	2	2
SI2(1次)		1									3								

次に，大まかな産地を類推してみる。①・②は時代が異なるものの，古墳時代の須恵器窯跡である善光寺窯跡などと同様な胎土であることから，現在の相馬市周辺で生産された可能性が高い。相馬市でも内陸部に産地が求められよう。これに対して③は海綿骨針が含まれることから，海岸部にその生産地を求められる。しかしながら，近隣で生産されたものか遠隔地からの搬入品かは明らかにされない。④は粘土質で①～③と明らかに異なる胎土の一群である。粘質であることや，白色・黒色砂粒の内容物などから類推すると，会津若松市大戸窯の製品である可能性が高い。

灰釉陶器

灰釉陶器は遺構外から出土した２点のみである（70図12・13）。椀と小瓶ないし手付瓶類となり，ともに器表面に灰釉がツケガケされている。精良で夾雑物が少ない胎土から類推すると，東濃産の可能性が高いと考えられる。口縁部や底部が欠損した資料ゆえに，時期については言及できないが，猿投の編年にしたがうと灰釉がツケガケされていることなどから折戸53号窯式（10世紀前半）に比定されよう。

福島県内における灰釉陶器の出土遺跡はそれほど多くはなく，本遺跡の位置する浜通り北部には非常に少ない。また，出土する灰釉陶器の多くは黒笹90窯式の製品（９世紀後半）が大半で，10世紀段階の灰釉陶器が少ない。その点で，新たな知見が蓄積されたこととなろう。

②相馬地域の９～10世紀代の土器と荻平遺跡の土器

相馬地域における該期土器の変遷案としては，橋本博幸が北原遺跡の資料をもとに９～11世紀代の土器を５期に分割した変遷案を嚆矢とし（福島県教育委員会1986），その後の相馬開発関連遺跡

調査での資料増加に伴って，飯村均（福島県教育委員会1989）・佐々木慎一（福島県教育委員会1997）による該期土器の集成がみられる。ここでは,研究史のトレースから筆者なりの年代を提示したい。

なお，分類に際しては杯類を主体とし，本遺跡における分類をそのまま踏襲した。本地域では緑釉・灰釉陶器や貿易陶磁器などの陶磁器類はむろん，木簡など紀年銘の資料と共伴したものは皆無に近い。ゆえに，多賀城跡の成果などを適宜参考としていきたい。本地域は歴史的にも地理的にも多賀城のいわば前線たるところで，深い関わりを有していたと考えられるからである。また，法量のグラフを提示して可能な限りその根拠を示すようにした。

ロクロ土師器導入期の土器群としては，北原遺跡18号住が該当する。前代の非ロクロ杯が共伴していないが，前代の器形をそのままロクロ成形で仕上げた土器が主体をなす（福島県教育委員会1986）。このため，器高が低いのが特徴で，径高指数（器高÷口径×100）が22～27，口底指数（底径÷口径×100）が50～55を示す。分類の底部下端が回転ヘラケズリで再調整されるＡ３類の杯が主体を占める。仲田茂司のいう広網遺跡第２群に並行し（仲田1994），９世紀初頭の資料となろう。

同じく北原遺跡11号住居の資料は，口径は前代と変わらないが，器高が１～２㎝程度高くなる。また，それに呼応して深みのある器形に変化する。底高指数は30～35，口底指数40～50代を示す土器が多い。体部下半の調整は，前代からの回転ヘラケズリが減少し，手持ちヘラケズリを主体とする（Ｂ２・Ｂ３類）。この土器群に類似する資料として，多賀城跡60次ＳＥ2101Ｂ井戸跡第Ⅲ層の出土土器を取りあげる（宮城県多賀城跡調査研究所1991）。このⅢ層からは口径15㎝前後，底径６～８㎝，器高４～６㎝の杯が多く，北原遺跡11号住の法量とほぼ共通する。ただし，体部の再調整が異なり，多賀城では回転ヘラケズリの資料が多い。この第Ⅲ層からは天長９（832）年銘の漆紙文書が共伴しており，９世紀代第二四半期に位置づけられる。よって，多少の差異はあるものの，北原遺跡11号住居の資料も本期に包括されよう。また，該期の土器は三貫地遺跡（原口地区）37号住居などでも出土している（福島県教育委員会1987）。

別所遺跡ＳＸ01の資料は，ほぼ同一層からまとまって土師器が出土している。北原遺跡11号住居同様，体部下半の調整は手持ちヘラケズリを主体とし，回転糸切り無調整のものと底部全体に手持ちヘラケズリを施したものが拮抗する。径口指数はＡ１類で30～33，Ｂ２・３類で30～35，Ｃ３類で26，一方，口底指数はＡ１類が37前後，Ｂ２・３類で40～45，Ｃ３類で48となり，法量の分化が明瞭となる。また，外面ロクロナデのみで底部切り離しが回転糸切りとなるＣ３類が存在することも注意されよう。本遺構からは緑釉陶器椀が共伴しているが，高台部が欠損している。このため厳密な時期は限定されないが，先の北原遺跡11号住や多賀城60次ＳＥ2101Ｂ号第Ⅲ層の土器群と共通性は高いものの，Ｃ３類の存在などからこれらよりは若干後出すると考えられ，９世紀第３四半としておきたい（福島県教育委員会2006）。また，北原遺跡では15号住居跡の資料が該当すると考えられる。多賀城で９世紀第３四半期とされる五万崎地区ＳＫ2272（1994年度）に並行する資料となろう（宮城県多賀城跡調査研究所1994）。

猪倉Ｂ遺跡５号木炭窯の資料は，近接する須恵器窯の製品が主体をなすが，土師器・須恵器とも

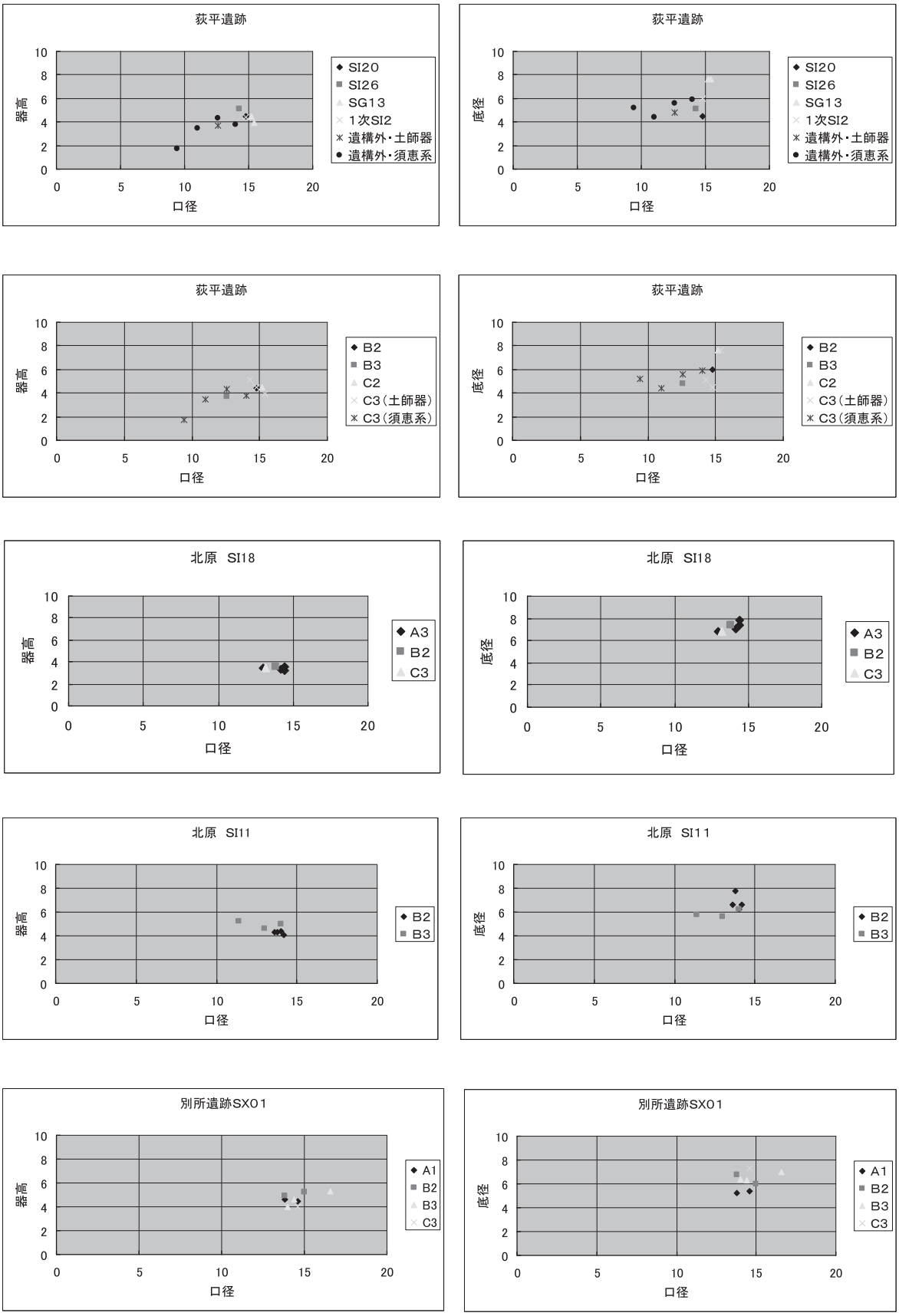


表13　相馬地域における平安時代土器の法量（１）

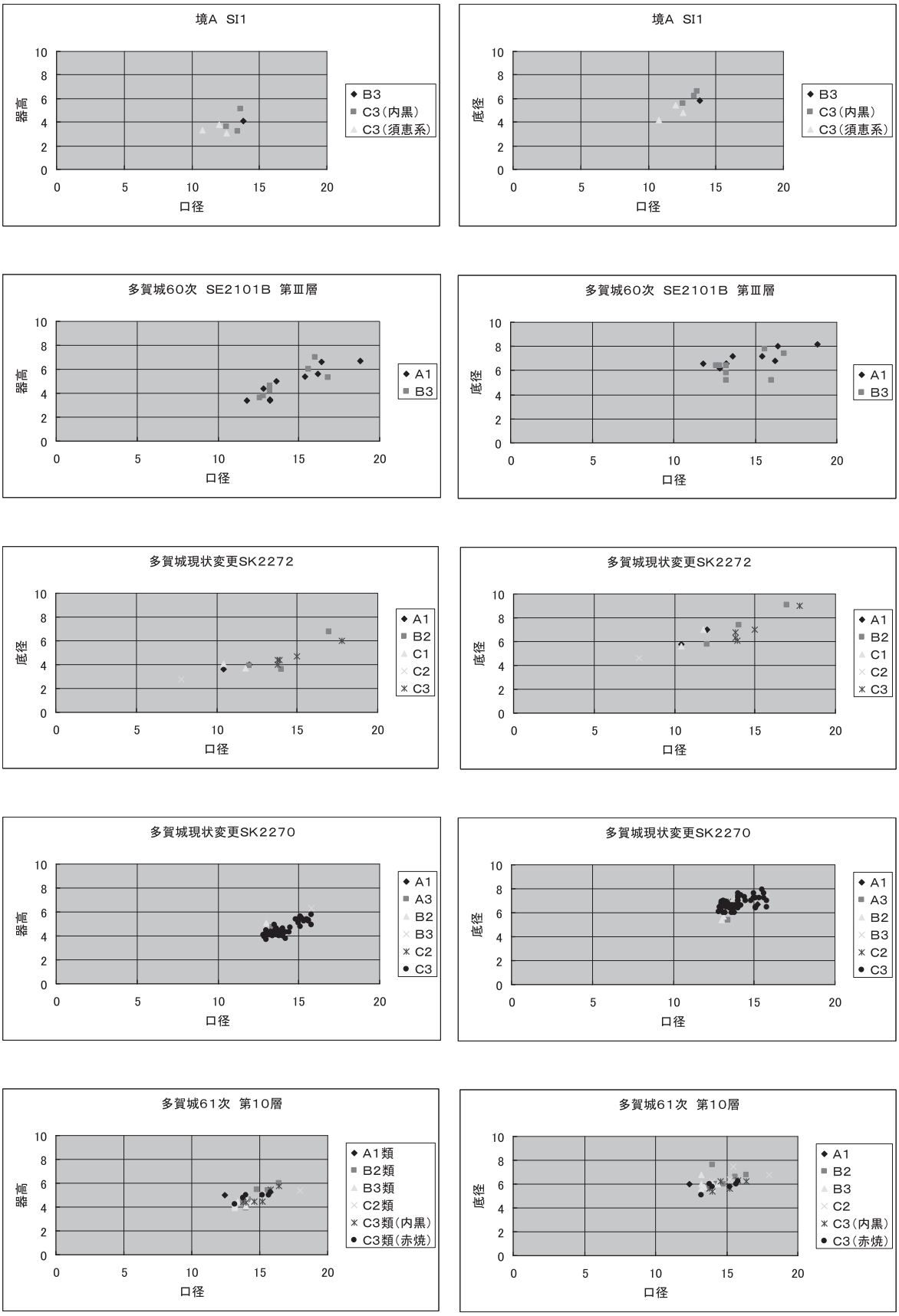


表14　相馬地域における平安時代土器の法量（２）

表15　相馬地域における平安時代土器変遷

時期	相馬地域の遺跡・遺構	荻平遺跡	出土量	多賀城
９世紀初頭	北原遺跡　18号住			
９世紀 第２四半期	北原遺跡　11号住 三貫地遺跡（原口地区）37号住			多賀城60次SE2101B第Ⅲ層
９世紀 第３四半期	別所遺跡　ＳＸ01 北原遺跡　15号住	２号住居（1次）		多賀城SK2272（1994年度）
９世紀 第４四半期	猪倉Ｂ遺跡　５号木炭窯，4･6号須恵窯 北原遺跡　10号住	13号焼土遺構 18号・26号住居		多賀城SK2270（1994年度） 多賀城61次第10層
10世紀前半	境Ａ遺跡　1号住 猪倉Ｂ遺跡　７号須恵窯	20号住居		山王遺跡（９次）SX543
10世紀後半	北原遺跡　24号土坑			多賀城61次第７層

口径14cm，底径７cm，器高５cm前後の法量を示す土器が大半である（福島県教育委員会1996）。別所遺跡の土器に比して，小型化が進行すると考えられる。また，４・６号須恵窯も法量的に同様となる。体部下端の回転ヘラケズリのＡ類は消滅して，回転糸切り無調整のＣ３類が主体を占める。多賀城では五万崎地区ＳＫ2270（宮城県多賀城跡調査研究所1994）や61次調査の第10層（宮城県多賀城跡調査研究所1994）に並行する。後者の土器は灰白色火山灰層の上層からの出土となることから，９世紀第４四半期と考えられる。なお，多賀城では本期に須恵系土器が出現するとされるが，本地方では明確にされない。

境Ａ遺跡１号住居跡の資料は，内面黒色の土師器と須恵系土器が拮抗する。分類的には古相のＢ３類が残存しているものの，大半は回転糸切り無調整のＣ３類を主体とし，口径や底径が小型化する（福島県教育委員会1988）。この小型化にともなって，皿が登場するものと推測される。多賀城における須恵系土器の出現は，９世紀末以降に出現し，10世紀前半以降に内面黒色土器の量が減少する。本住居は須恵系土器と内面黒色の土師器が共伴することなどから，10世紀前半の所産と推測される。多賀城では，山王遺跡９次調査のＳＸ543廃棄土坑に並行すると考えている（多賀城市埋蔵文化財センター1991）。

なお，10世紀中葉～後葉以降の土器は散発的である。北原遺跡24号土坑出土資料はこれまで11世紀前半に比定されていたが，土師器高台杯の残存や須恵系土器の小型杯などの特徴などから10世紀後半～末に位置づけられると思われる。

③荻平遺跡出土土器の年代的位置づけ

先に，相馬地域における平安時代土器の変遷案を提示したが，次に荻平遺跡から出土した土器群の年代的位置付けを行ってみたい。なお，遺構内からの出土土器が少なく，群としての分別が困難である。ゆえに，ここでは器形や調整がわかる土器のみについて言及したい。また，１次調査で唯一該期の住居が認められた２号住居跡出土資料も加えて検討する。

土師器・須恵系土器杯

まず，遺構内出土の杯について述べる。18号住居跡の床面から出土した杯Ｃ１類（12図３）は，本遺跡では異質とも言える回転ヘラ切りの資料である。相馬市周辺の遺跡で比較してみても，９世紀前半に位置づけられている北原遺跡８・24号住居跡や９世紀中葉の別所遺跡ＳＸ01性格不明遺構

などで出土しているに過ぎない。また，北原・別所両遺跡の土器は体部下端に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリなどの再調整がみられるのに対して，18号住居のそれは無調整である点が異なる。破片資料で直接の比較はできないが，少なくとも９世紀末までは下らない時期と判断される。

次に，20号住居跡出土のＣ３類（16図１）は先に挙げた相馬地域の土師器に類似するものはない。多賀城では，山王遺跡９次ＳＸ543などで出土しており，10世紀前半と考えられる。同様な土師器は遺構外からも出土している（67図４）。

26号住居跡のＣ３類（17図１）は別所遺跡ＳＸ01や猪倉Ｂ遺跡５号木炭窯などと類似性が認められることから，９世紀後半の所産となろう。これは20号住居跡が新しく，26号住居跡が古い遺構の切り合い関係からも矛盾しない。

次に，13号焼土遺構で出土した杯Ｃ２類（54図１）は径口指数29.7，および底口指数40となる。北原遺跡15号住居跡の土器群と似た数値を示すことから，９世紀中葉以降の所産となろうか。ただし，共伴したＣ３類（54図３）は体部外面がヘラないしコテ状の工具で整形された土師器で，９世紀末以降の所産と考えられる。このため，時期が古いＣ２類は，後世の混入である可能性が高い。

この他の遺構内出土土師器杯に関しては，器形が明らかなものはないが，大半が底部糸切りで無調整のＣ３類である。先に提示した変遷に照らし合わせれば，Ｃ３類が登場するのは９世紀後半以降で，９世紀末には主体を占める。また，底径が６㎝前後のものが大半である。このことから，少なくとも９世紀末以降の所産と推測される。少なくとも，９世紀前半や中葉の資料でないことは明白で，杯が小型化してきた時期に相当しよう。

なお，１次調査の２号住居跡からはＢ２類の杯が１点出土している。法量的に別所遺跡ＳＸ01に似ることから，９世紀第３四半期の所産と考えている。このＢ２類は今回の２次調査では確認されておらず，該期の明確な遺構も明白でない。また，同遺跡といえども１次調査区と今回の２次調査区（東地区）とは沢を隔てており，同一の立地ではない。ゆえに，今回の２次調査区よりは明らかに時期が先行する住居跡となろう。

須恵系土器のうち，皿（68図８・９）に類似した資料は楢葉町小山Ｂ遺跡７号住・23号住などで出土している（福島県教育委員会2002）。多賀城では61次調査の７層（宮城県多賀城跡調査研究所1994）や４次調査（政庁跡）78号土坑（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所1982）などで散見され，時期的には10世紀中葉に比定されている。ゆえに，遺構外出土の須恵系土器もこれに前後する年代と考えられよう。なお，68図13はその器形などから，灰釉陶器などの陶器を模倣した土器と考えられる。

甕　　類

甕は，非ロクロ成形のものが半数を占め，ロクロ成形のものも内外面にケズリやヘラないし指によるナデを施した個体が多い。また，口縁部内面の稜が明瞭でないものが大半である。この非ロクロの甕は境Ａ遺跡１号住居跡や北原遺跡11号住居などで出土しており，おおむね９世紀後半以降にみられるが客体的である。１次調査の２号住居跡のようなロクロ成形のＣ類が主体を占める。

これに対して10世紀前半～中葉の楢葉町小山Ｂ遺跡の住居跡は非ロクロの甕が主体的に使用されており，造りや口縁部形態などは本遺跡と共通性が高い。ゆえに，出土甕類の大半は９世紀後半から10世紀中葉の所産となり，杯類と同様な年代観となろう。

須　恵　器

須恵器は杯類が皆無で，瓶類や甕類が出土したに過ぎない。器形がわかる資料としては遺構外出土の70図１・２のみである。これらは広口瓶と考えられる資料である。会津地方の事例ではあるが，大戸窯における広口瓶は10世紀前半の上雨屋112号窯式（ＫＡ－112）以降に出現するとされる（会津若松市教育委員会1994）。本遺跡出土の広口瓶もおおよそこの年代と考える。

他の甕類などを含めた年代は，共伴した土師器などから９世紀末～10世紀代と幅を持たせておきたい。須恵器出土量の減少は福島県内の各地域で若干の違いは有するが，ほぼ９世紀後半以降より本格化する。また，10世紀代の須恵器生産は主に貯蔵用の甕・瓶類などに限定され，杯の生産はほとんど見られなくなる。本遺跡出土の須恵器はこの須恵器杯類の生産量が減少する時期に相当すると考えられよう。

④小　　結

以上，本遺跡出土の平安時代土器の年代について述べた。遺構内出土の土器が少なく，かつ破片資料が多い資料的な制約があるものの，須恵器杯が皆無で土師器が主体である点や，土師器杯の底径が６㎝前後である特徴を有する。また，灰釉陶器や鉄鉢模倣の土師器など稀少な遺物が出土した。

先に検討した遺構の年代は，13号焼土遺構や18号住居跡，26号住居跡などでやや古相を呈する土器が認められるものの，遺構の多くは９世紀末～10世紀前半にかけての所産となる。また，遺構外から出土した土器は10世紀前半～中葉の須恵系土器が多く含まれる。遺物の多くは10世紀中葉までの年代観を示し，10世紀後半や11世紀以降の遺物は含まれていない。相馬地方（宇多郡）では先に９世紀第４四半期に比定した北原遺跡10号住居跡や10世紀前半の境Ａ遺跡１号住居に並行する時期に本遺跡が営まれたと考えられる。

本期は，伝統的な土師器から須恵系土器に転換していった時期に相当するが，これまで宇多郡では須恵系土器の出土が少なく，10世紀以降の様相については不明な点が多かった。その点で新たな資料を提供することができたと考えられる。しかしながら，須恵系土器の出現期やその組成などは未だに不明な点が多い。今後の資料の増加による増補を期待したい。

荻平遺跡全体を通観すると，１次調査で確認された２号住居跡が９世紀中葉であることから，今回の２次調査において確認された平安時代遺構はそれよりも新しい年代を示す。ゆえに，平安期における集落は９世紀中葉に出現し，次第に集落を拡大しながら10世紀前半まで存続したと考えられる。同時に，竪穴住居が営まれる立地においても変化が見られる。１次調査区と２次調査区は沢を隔てて対峙しており，標高も１次調査区が２次調査区に比して50m近く高い。おそらくは，山よりの緩斜面から時代を経るにしたがってより標高が低く川に近い段丘上に移動したものと推測される。

（管　野）

3　荻平遺跡の平安時代集落について

これまでの発掘調査で確認した平安時代の竪穴住居跡は合計20軒である。出土遺物では日常生活具となる土器類の他に，刀子や鉄鏃などの鉄製品があり，石製銙帯具や灰釉陶器・鉄鉢模倣土器の出土も特筆される。本項では，荻平遺跡の平安時代集落の特徴と石製銙帯具の出土意義を併せて，近年調査事例の増加してきた古代の山間部集落について検討を加える。

①竪穴住居跡の年代と構造

荻平遺跡で確認した平安時代の遺構は，竪穴住居跡が20軒，掘立柱建物跡が１棟，土坑21基，焼土遺構３基である。ここでは前項で検討された土師器の年代観に基づいて，各竪穴住居跡の分布や構造的な特徴をまとめる。

竪穴住居跡の年代と構造　竪穴住居跡から出土した遺物の特徴と各住居跡の存続期間を勘案すると，９世紀中葉から10世紀前半代まで大きく３時期（Ⅰ～Ⅲ期）の変遷が見られる。出土遺物が乏しく，所属時期を特定できなかった住居跡を除くと，概ね以下のように整理できる。

Ⅰ期	２号・７号住居跡	９世紀中葉頃
Ⅱ期	17・18・26・35・37・38・50・54号住居跡	９世紀後葉頃
Ⅲ期	19・20・33・39・52号住居跡・13号焼土遺構	９世紀末～10世紀前半頃

Ⅰ期には２号・７号住居跡の２軒が該当する。これらの住居跡の構造は，北向き斜面に構築された竪穴住居跡で，斜面上位側を開削し，その残土を斜面下位に押し広げて床面となる空間を構築している。内部施設として，斜面上位側の壁面中央に石造りのカマドを伴う。上屋構造は柱穴などがなく不明であるが，斜面の等高線と住居跡の長軸の向きが平行する特徴がある。長軸の規模は4.5ｍを測る。７号住居跡は２号住居跡に先行するが，それほど時間差はないと判断した。

Ⅱ期の住居跡の平面形は長方形を基調とする。住居跡の長軸方向は，若干の乱れはあるが，周囲の等高線に対して平行するものが多い。住居跡の規模は，長軸の長さが3.5ｍ～4.1ｍ，短軸の長さが2.96ｍ～3.34ｍを測る。18・26号住居跡などに代表されるように，平面形が長軸に対して短軸が短い長方形をなすものも含まれる。住居内部の施設には，37号住居跡がカマドを持ち，18・54号住居はカマドと炉跡を伴い，17・26・38号住居跡が炉跡のみを確認した。35・50号住居跡ではカマドや炉跡などが確認できない。これらのカマドは遺存状態が悪く，その構造が不明瞭であるが，Ⅰ期の石造りカマドと同様に，天井や袖部の一部に石が用いられていたのであろう。また18・54号住居跡では，住居内でカマドと炉跡が併設されているためか，カマドの位置が18号住居跡では住居壁隅，54号住居跡では壁面中央から東よりの位置に造られる。炉跡は床面中央からずれた位置に造られるものが多いが，その位置に特段の傾向は見出すことができない。住居内の炉跡の性格は，炉跡周辺から鍛冶滓や羽口などの出土遺物が確認できず，鍛冶炉とするには積極的根拠に乏しい。20・26号住居跡の炉跡周辺では，焼けた骨片がわずかに出土している。住居内で暖を取るためや煮炊きに使用された炉と考えておきたい。

上屋構造については，柱穴が規則的な配置をもって確認できた例が少なく不明な点が多い。37・38号住居跡は住居跡長辺側の中軸線上に２基配される。住居の長辺に沿った中軸線上に棟を持つ切妻屋根と推定される。41・54号住居跡は床面隅に寄った位置に主柱穴が確認でき，寄棟となる上屋構造が推定される。

Ⅲ期に属する住居跡は，住居跡の平面形やその規模は，Ⅱ期の住居跡と相違点はないが，カマドを伴う住居跡がない点にⅡ期の住居跡と明確な違いが見られる。Ⅱ期の住居跡に属する26・41号住居跡に重複する20・39号住居跡は，いずれも住居構造が類似してわずかに位置をずらせていることから，Ⅱ期住居跡の同一地点での建て替えと判断した。また出土遺物の検討でも明確な時期区分できない住居跡もあり，Ⅲ期まで継続的に住居が機能していた可能性もある。

炉跡は20・33・52号住居跡で確認した。20・33号住居跡が床面中央から壁際に寄った位置，52号住居跡が床面中央に位置する。上屋構造では19号住居跡が床面四隅に寄った位置に柱穴が確認される。その他の例では柱穴の間隔は不均等だが壁際に配される傾向が見られ，いわゆる４本主柱穴で支持される上屋構造ではなく，壁建ちの住居構造と推定される。

その他の遺構　竪穴住居跡の他に掘立柱建物跡や土坑，焼土遺構を確認した。いずれの遺構も年代や性格を特定できたものは少なく，前述したⅠ～Ⅲ期のいずれに属するかは不明である。掘立柱建物跡は１棟のみ確認した。２×３間の規模を有する小型側柱建物跡で，住居跡群から離れた位置に分布している。出土遺物に乏しく建物跡の性格については不明である。土坑は，46号土坑が木炭焼成土坑と特定できた。59号土坑は鍛冶滓が出土したが鍛冶炉跡とは断定できない。その他多くの土坑と同様に，当時の生活ゴミと共に鍛冶滓などを廃棄した穴の一つと推定している。焼土遺構の性格については，鍛冶炉跡と推定される13号焼土遺構を除き，焼土化して赤褐色をなす焼面を確認した。出土遺物から性格を特定できないが，削平された竪穴住居跡の炉跡となる可能性がある。

②荻平遺跡の平安時代集落の変遷

前項で整理した住居跡について，時期ごとにその分布傾向をまとめる。荻平遺跡における平安時代直前の状況について，13号焼土遺構（54図６），遺構外出土遺物（67図１～３），古墳時代後期から奈良時代の土師器が数点見られるだけで，平安時代集落の形成に直接的に繋がる時期の遺構はない。２・７号住居跡の出現まで集落が営まれていないことを再確認しておく。

竪穴住居跡の分布　Ⅰ期の住居跡は荻平遺跡の最北端部に位置する。宇多川に向かって南西方向に延びる丘陵頂部付近で，狭隘な沢地に面する北向き斜面に立地している。１次調査の成果によれば，北向き斜面となり生活に不便と思われるが，住居の構築に際して基盤土に含まれる花崗岩巨石を避けるように占地している特徴が見られる。

Ⅱ～Ⅲ期の住居跡は，遺跡南半部となる宇多川の河岸段丘上が集落域となる。東側の山体崩落を起源とする堆積物が扇状地状地形を形成している場所で，住居跡は小高い丘状扇状地の中腹部から裾部に相当する緩斜面に構築される。Ⅰ期の住居跡分布域に比べれば，かなり開けた場所が集落域となる。Ⅱ・Ⅲ期に属する住居跡の分布は，33・39・41号住居跡が分布する北西部の西向き緩斜面，

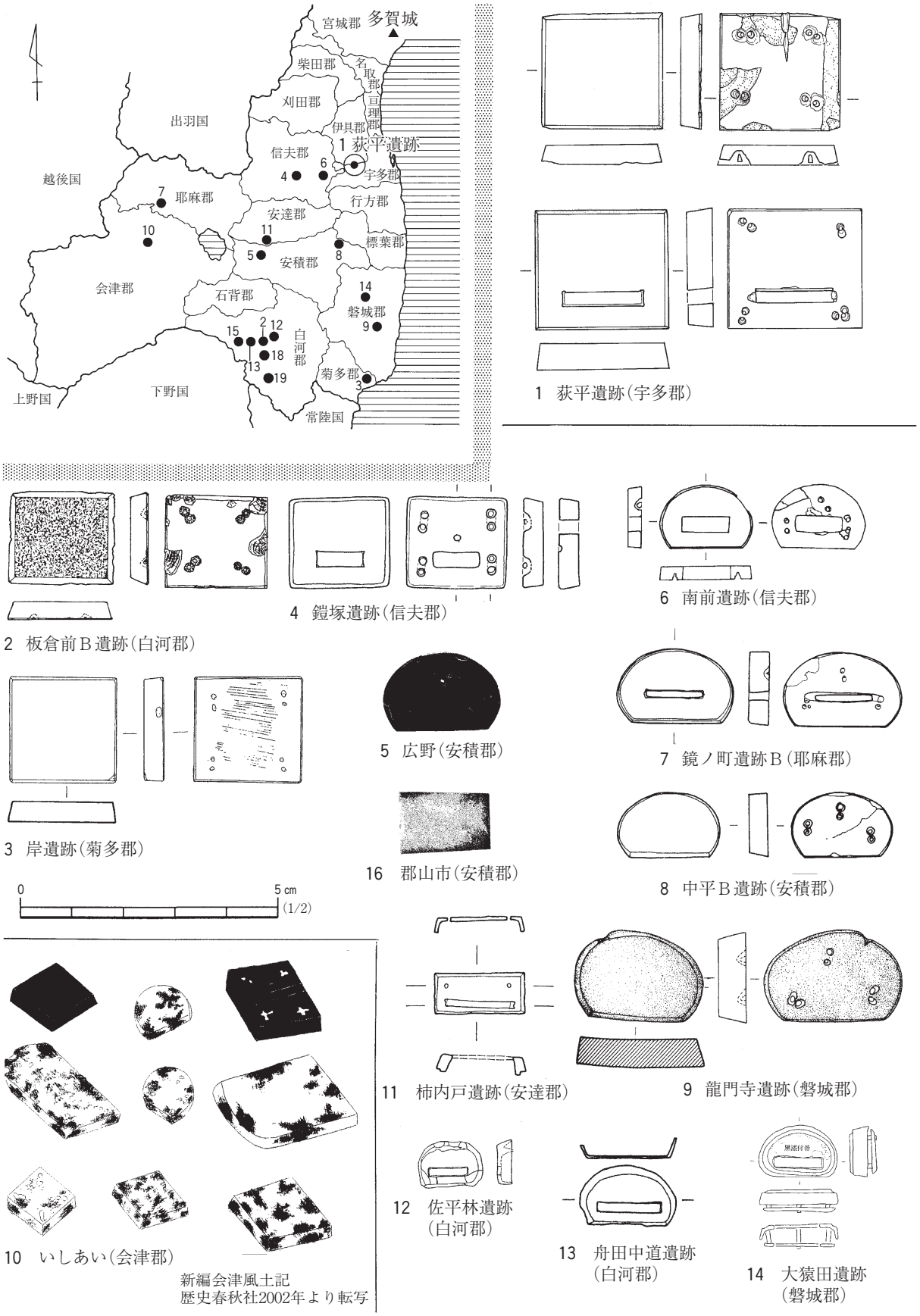


図134―1　福島県出土の銙帯具集成（１）

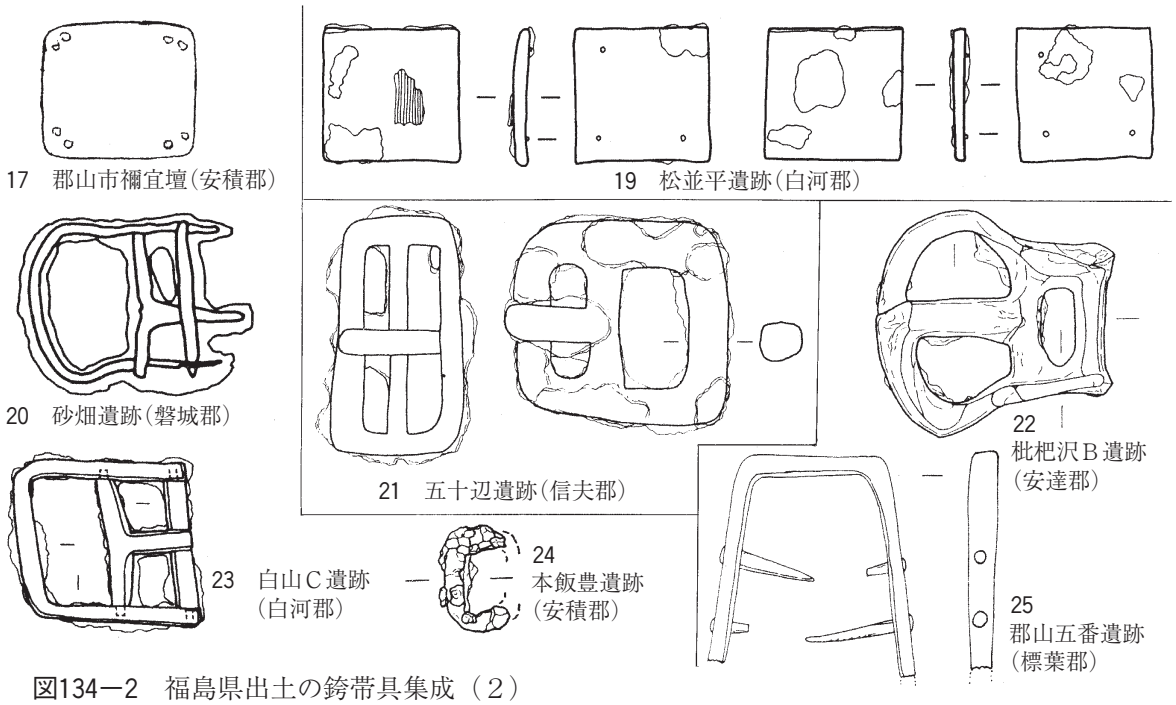


図134―2　福島県出土の銙帯具集成（２）

表16　福島県内の銙帯具出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種類	遺構名	年代	石材･付着物	文献
1	荻平遺跡	相馬市山上	石製巡方(2)	遺構外	－	透閃石岩・サヌカイト	福島県文化財調査報告第463集『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２』福島県文化振興事業団2009年
2	板倉前Ｂ遺跡	西白河郡東村上野出島	石製巡方(1)	17号竪穴住居跡	－	黒色粘板岩	福島県文化財調査報告書第74集『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会1979年
3	岸遺跡	いわき市渡辺町	石製巡方(1)	遺構外	－	蛇紋岩	いわき市埋蔵文化財調査報告書第27冊『岸遺跡』いわき市教育文化振興事業団1990年
4	鎧塚遺跡	福島市仁井田	石製巡方(1)	16号住居跡	9世紀後半	緑色凝灰岩	福島市埋蔵文化財報告書第53集『一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告』福島市教育委員会1993年
5	郡山市広野	郡山市日和田広野	石製丸鞆(1)	出土地不明	－	－	『東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇（北海道東北）』東京国立博物館1968年
6	南前遺跡	川俣町小島	石製丸鞆(1)	遺構外	－	粘板岩	高橋圭次「川俣町町畑遺跡の縄文式土器と南前遺跡の石製銙」『福島考古第24号』1983年
7	鏡ノ町遺跡Ｂ	喜多方市塩川町	石製丸鞆(1)	第9a号溝状遺構	8世紀末～9世紀初頭	玉髄	塩川町文化財調査報告第８集『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５』塩川町教育委員会2001年
8	中平Ｂ遺跡	田村郡大越町	石製丸鞆(1)	第2地点2号住居跡	－	白色大理石	大越町埋蔵文化財調査報告第13冊『大越・堂平Ｂ遺跡・中平Ｂ遺跡』大越町教育委員会1996年
9	龍門寺遺跡	いわき市平下荒川	石製丸鞆(1)	遺構外	－	ヒスイ	いわき市埋蔵文化財調査報告書第11冊『龍門寺遺跡』いわき市教育文化振興事業団1985年
10	いしあい	会津美里町	石製巡方(5) 石製丸鞆(3) 石製鉈尾(2)	出土地不明 伝 火葬壺	－	－	新編会津風土記第七十七巻 生江芳徳「新編会津風土記にみるいしあい出土の遺物について」『福島考古第20号』1971年
11	柿内戸遺跡	郡山市富久山	銅製巡方(1)	18号竪穴住居跡	－	－	福島県文化財調査報告書第101集『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会1982年
12	佐平林遺跡	西白河郡東村上野出島	銅製丸鞆(1)	Ⅷ地区2号住居跡	9世紀前半	黒漆付着	福島県文化財調査報告書第85集『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』福島県教育委員会1980年
13	舟田中道遺跡	白河市舟田	銅製丸鞆(1)	遺構外	－	－	白河市埋蔵文化財調査報告書第33集『ほ場整備事業舟田地区関連遺跡発掘調査報告書４』「舟田中道遺跡Ⅱ」白河市教育委員会2002年
14	大猿田遺跡	いわき市四倉町	銅製丸鞆(1)	2号特殊遺構	－	黒漆付着	福島県文化財調査報告書第341集『常磐自動車道遺跡調査報告11』福島県文化センター1997年
15	百目木遺跡	白河市舟田	石製巡方(1)	－	－	－	『白河市史４』白河市2001年
16	郡山市	郡山市	石製巡方(1)	出土地不明	－	－	『郡山市史８』郡山市1973年
17	郡山市襴宜壇	郡山市	石製巡方(1)	出土地不明 伝 墳墓	－	－	『相生集』二本松市2004年
18	表郷内松	白河市表郷内松	石製巡方(1)	出土地不明	－	－	個人蔵　未報告　内松Ａ遺跡か
19	松並平遺跡	東白河郡棚倉町下山本	鉄製巡方(2)	23号住居跡	9世紀前半	銅表金具痕跡	『松並平遺跡』棚倉町教育委員会1985年
20	砂畑遺跡	いわき市平菅波	鉄製鉸具(1)	第12号竪穴状遺構	8世紀後半～9世紀初頭	－	いわき市埋蔵文化財調査報告第84冊『一般国道６号常磐バイパス遺跡発掘調査報告Ⅹ』「荒田目条里制遺構・砂畑遺跡」いわき市教育委員会2002年
21	五十辺遺跡	福島市北ノ前・館ノ内	鉄製鉸具(2)	第13号住居跡 第３号土坑	9世紀前半	－	福島市埋蔵文化財報告書第22集『五十辺遺跡』福島市教育委員会1987年
22	枇杷沢Ｂ遺跡	郡山市田村町山中	鉄製鉸具(1)	1号住居跡	9世紀前半	－	福島県文化財調査報告書第223集『母畑地区遺跡発掘調査報告29』福島県教育委員会1990年
23	白山Ｃ遺跡	西白河郡矢吹町白山	鉄製鉸具(1)	19号住居跡	9世紀代	－	福島県文化財調査報告書第354集『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告３』福島県教育委員会1999年
24	本飯豊遺跡	田村郡小野町	鉄製締金具(1)	遺構外	－	－	福島県文化財調査報告書第295集『東北横断自動車道遺跡調査報告24』福島県教育委員会1993年
25	郡山五番遺跡	双葉郡双葉町	鉄製鐙金具(1)	f地点住居跡	－	－	『郡山五番遺跡Ⅰ』双葉町教育委員会1978年

＊（　）内の数値は出土点数を示す。　＊－は報告書・文献等に記載なく、不明なもの。

それ以外の住居跡が分布する南向き緩斜面と大きく２ヵ所の分布域が認められる。扇状地の西側に偏在する傾向が見られる。これは土砂崩落に起因する深い谷が扇状地東側に形成されたためと推定される。大雨など自然災害による危険を避けるため，土砂崩落層に含まれる花崗岩の含有量にも影響された占地の結果と考えられる。

集落の変遷　荻平遺跡では古墳時代後期から奈良時代までの生活痕跡は極めて乏しく，竪穴住居跡からなる集落が営まれることはない。平安時代となるⅠ期とした９世紀中葉頃に集落が出現する。Ⅰ期の集落は，比較的標高が高い場所で，丘陵を開析する狭い沢地に面した丘陵頂部付近に占地する。本遺跡の最北端部の地形からは，集落の規模は極めて小規模と推定され，１～２軒程度の竪穴住居跡で構成される。Ⅱ期の集落は，宇多川の河岸段丘上に形成された小高い扇状地に立地し，比較的緩やかな斜面地に集落が形成される。竪穴住居跡は概ね10軒前後が認められ，Ⅰ期に比べれば数的に増加傾向が看取される。Ⅲ期の住居跡は，Ⅱ期と同一地点に分布し，集落の様相などに相違が見られない。住居跡の出土遺物からⅢ期に属するものは５軒と少なくなるが，前述したように10世紀前半代まで継続的に集落が営まれているのであろう。またⅡ～Ⅲ期の集落は，鉄製品の出土が顕著となる傾向にあり，鍛冶関連遺構とした13号焼土遺構が集落内で機能してくる。第３編の化学分析結果からも，精錬鍛冶や鍛錬鍛冶の存在を窺うことができ，他地域で生産され素材鉄を持ち込み，集落内で鍛冶が行われていたことがわかる。一方鍛冶製鉄の規模は極めて小規模と推定されることから，鍛冶に特化した集落とは考えにくい。集落内で使用される鉄製品の生産または修繕に供されたものと考えている。Ⅲ期以降の出土遺物は皆無となることから，10世紀前半代で荻平遺跡の平安時代集落は機能を停止したのであろう。

③銙帯具について　（図134－１・２，表16）

荻平遺跡の平安時代に属する出土遺物のうち，石製銙帯具の出土は特筆される。ここでは福島県内で出土した銙帯具の特徴をまとめ，その出土意義について検討する。

荻平遺跡出土銙帯具の特徴　本遺跡からは２点の石製銙帯具が出土した。いずれも巡方と称されるもので，「垂孔」を持たないもの（72図１）と，持つもの（72図２）の２タイプがある。石材については，石質鑑定を委託した古環境研究所の鑑定によれば，１がサヌカイト，２が透閃石岩とされる。本県近郊では産出しない石材を用いて石製銙帯具が製作されていることが分かる。石材の色調は黒色を呈する。石製銙帯具の出土状況は，いずれも直接的に遺構に関わる状態で出土したものではなく，ＬⅡａ層とした平安時代の遺物を含む堆積土を掘り下げる過程で出土している。１と２の出土位置は，竪穴住居跡が密集する場所の外縁部にあたり，それぞれ約30m間隔がある。また今回の調査では，鉈尾や銙具など腰帯を構成する遺物は確認されていない。出土状況からは，１・２が一連の腰帯を構成する銙帯具かどうかは不明である。さらに石製銙帯具が腰帯に着装された状態であったか否かなど，最終的な廃棄状況までは知り得なかった。年代については，詳細な時期を特定できないが，周辺に分布する住居跡から出土した土師器の年代観から，９世紀後葉～10世紀前半代と推定される。

福島県内出土の銙帯具　福島県内で出土した銙帯具は16表に示すとおり，19遺跡（地点）で30点が知られている。銙帯具の素材別では，銅製が４点，鉄製が２点，石製が24点である。銙帯具の形状では，巡方17点（銅製１点・鉄製２点・石製14点），丸鞆11点（銅製３点・石製８点），鉈尾２点（石製）である。石材は報告や文献等の記述なく詳細は不明であるが，多種多様な石材が用いられている。概ね黒色を呈する石材が大半を占めるが，中平Ｂ遺跡は白色大理石，龍門寺遺跡はヒスイが用いられるなど銙帯具の色調的に違いが見られる。なお佐平林遺跡や大猿田遺跡の銅製銙帯具は黒漆が塗られる。『日本後紀』や『養老衣服令』に見られるように，銙帯具の材質や色調をもとに官人の位階を示すものとされる。銅製または石製を問わず，黒色銙帯具よりも位階が上位とされる白色石材を用いた中平Ｂ遺跡の石製銙帯具は，その入手経路など含め検討を要する。

銙帯具の分布について，古代陸奥国南部に相当する郡域でみると，各郡で１～３遺跡で銙帯具の出土が知られている。特に白河郡では６遺跡７点が確認された。陸奥国内で唯一の大郡であることが銙帯具の偏在傾向として現れたのであろう。銙帯具を出土する遺跡の性格は，以下のＡ～Ｅに分類される。Ａ：郡衙など郡の中枢機能を果たす遺跡（舟田中道遺跡・百目木遺跡）。Ｂ：郡内の郷など拠点集落または官衙的要素の強い集落遺跡（板倉前Ｂ遺跡・鏡ノ町遺跡Ｂ・中平Ｂ遺跡・柿内戸遺跡・佐平林遺跡）。Ｃ：官営的な生産遺跡（大猿田遺跡）。Ｄ：古墳・古墓（いしあい・郡山市禰宜壇）。Ｅ：官衙的要素の少ない集落遺跡（荻平遺跡・岸遺跡・鎧塚遺跡・龍門寺遺跡・松並平遺跡）。Ａとした郡衙遺跡からの出土例は少なく，ＢまたはＣに分類した郡内でも官衙的要素の強い遺跡に集中する傾向が見られる。その他に荻平遺跡をはじめとする小規模集落にも銙帯具出土が認められる。本来的に銙帯具は官人の位階表示機能をもつ腰帯の一部であり，より官人の存在頻度が高い遺跡において，出土例の増加として反映されているのであろう。

銙帯具の出土状況について，いしあいの事例は火葬壷内から10個の銙帯具が出土したとされる。銙帯具が一揃い着装された腰帯が副葬されたのであろう。それ以外は銙帯具１～２点の出土である。銙帯具が遺構と伴って出土する事例では，竪穴住居跡など遺構内出土が８例あり，住居覆土中から板倉前Ｂ遺跡・中平Ｂ遺跡・松並平遺跡，カマド内部からは佐平林遺跡，住居の貼床土内が鎧塚遺跡，柱穴の埋土内が柿内戸遺跡である。出土状況からはカマド内部，柱穴や貼床土内など，カマド祭祀または地鎮祭祀に関わると指摘されそうであるが，銙帯具を用いた祭祀行為の具体的な内容が不明で，早急に結論付けるには妥当性に乏しい。一方，大猿田遺跡の銅製銙帯具は他遺跡と同様に単独出土であるが，表金具と裏金具が遺存している。革帯に着装された状態と考えられるが，銙具などの帯付属品がない。いずれの出土例からも廃棄に当たって一連の銙帯具が装着された腰帯を想定するには困難である。銙帯具が集落内に持ち込まれた段階でも，既に一連の腰帯ではなく，銙帯具単体で持ち込まれた可能性を指摘しておく。

銙帯具出土の意義　これら福島県内で出土する銙帯具の事例からは，先学の研究成果が指摘するように，墳墓から出土する銙帯具は，腰帯として副葬されたのであろう。集落内から単独で出土する銙帯具は，腰帯に着装される機能は既に失われているとするほうにより妥当性がある。さらに銙

帯具の単独出土例について，「１本の腰帯を分解し，飾金具のみを象徴的に分有していた」（田中2003年）と指摘する。本県内の銙帯具の分布と併せても，この見解を覆すだけの事例はみられない。しかし腰帯から銙帯具を分割した段階で，腰帯としての位階表示機能は消失することは間違いない。

銙帯具の出土のみで，直接的に官人の存在を示すものではなく，腰帯を所有する官人と分有された銙帯具の所有者との関わりを示すものに過ぎない。官人の存在頻度が高い内容を示す遺跡の出土例が多いことは当然で，山間部集落など小規模集落内での出土も見られることに注意を要する。平安時代前期において，従前まで集落が営まれてない山間部に新たに集落が出現することを評価すれば，山間部開発を必要とする状況であったことを示し，官主導による計画的な集落編成を背景としている。銙帯具の出土は，山間集落の出現に関わる官人の存在を裏付ける一端となるだろう。また，やや飛躍した考えであるが，在地社会の支配体制を強固にするために，位階表示機能を持つ銙帯具を分配していたのであろう。公的な実行力を持ち，銙帯具として用いられるかは検討課題となるが，銙帯具の所有により地域社会内での身分秩序を擬制させていた可能性を指摘しておきたい。

④ま　と　め

荻平遺跡の平安時代集落は，地形的には宇多川上流域の狭隘な開析谷が入り組む山間部に位置する集落には間違いない。１次調査の成果で示された，畑作に依拠する山間開発を担う集落（福田2008年）とする集落の性格を覆すだけの知見は得られていない。今回の調査で得られた新たな知見として，９世紀後半頃から10世紀前半代にかけての集落が宇多川河岸段丘上の比較的傾斜の緩やかな開けた場所に占地し，竪穴住居の増加傾向が見られることが判明した。集落の性格を特定できるような出土遺物はなく，鍛冶関連遺構の存在も集落を支える主要な機能を持つにはあまりに小規模である。集落の性格としては，近年の発掘調査で事例が増加している山間部に営まれた平安時代集落と同様に，山間部開発に携わる集落の一つと位置づけられる。

出土遺物では日常生活雑器の土器類の他に，鉄製品や仏具模倣土器，搬入品と考えられる灰釉陶器を伴う。さらに石製銙帯具などが特筆される。従前の研究や論考に見られる，山間部集落内の極めて生産規模の小さい鍛冶遺構や少量の他地域搬入品や仏具などであえて集落の性格を特定するには妥当性が見られない。山間部集落について，福島県内においては９世紀前半代にはその出現が確認できる。この点を積極的に評価すれば，律令制度に基づく国家的な社会基盤の整備･拡充があり，地域社会が山間部を開発できるまでに成長したことが背景となるのであろう。こうした山間部開発の担い手として，平野部の水田農耕だけでは得られない，木材・獣皮など多岐にわたる品々の獲得に従事した人々と考えられる。さらに石製銙帯具や仏具模倣土器や灰釉陶器の出土意義から，山間部開発を一般的な農民層が個々に従事したとは考えにくく，地域の有勢者および富裕層の存在が欠かせない。山間部開発に携わる集落構成員の中には，地域官人と深い連携を持つ人物が含まれることを改めて指摘しておきたい。

今後は調査事例の増加を待って，荻平遺跡を含めた平安時代の山間部集落跡について，慎重に検討したい。

（大野・福田）

第２節　西地区の総括

平成20年度，西地区の7,000㎡について発掘調査を実施した。西地区の地形は，宇多川に面した河岸段丘面の突端部であるが，概ね南東方向に下る斜度10°前後の斜面地である。基盤層は花崗岩を含む真砂で，比較的急傾斜の西地区は風水害の影響を受けやすい立地でもある。遺跡周辺の植物相は落葉樹林でコナラ等が認められるが，宇多川沿いにはオニグルミの木が確認される。

西地区では，縄文時代の早期末葉～前期初頭と前期後葉の集落跡を確認した。東地区では縄文時代前期以降も集落が断続的に形成されており，複合遺跡としての様相を見せる。しかし，西地区における集落の消長は縄文時代早～前期の比較的限定された時期である。この差異は地形的要因が大きいと思われるが，結論は次年度も継続される荻平遺跡の終了を待つ必要がある。本節では，西地区の調査成果について要約する。

１　縄文時代の遺構（図135）

今回の発掘調査によって，竪穴住居跡18軒・土坑20基・焼土面10基を検出した。竪穴住居跡の平面形は，時期差を超えて小判形・長方形など横長の形状が主流である。西地区における竪穴住居跡の出現は縄文時代早期末葉である。前期前葉～中葉の遺構は確認できなかった。なお，前期前半期の竪穴住居跡は，西地区の北西側に位置する第1次調査区において確認されている。

西地区において再び集落跡が確認されるのは前期後葉の時期である。特徴的な遺構としては長軸上に複数の地床炉が作られた竪穴住居跡があり，16号住居跡のように長軸幅が10mを超えるものもある。前期末葉以降，西地区では再び遺構が確認できなくなるが，中期初頭の竪穴住居跡が第１次調査区で確認されている。

（１）　早期末葉～前期初頭の住居跡

縄文時代早期末葉～前期初頭に位置付けられる竪穴住居跡は，計13軒（表17－1）である。各住居跡の平面形は隅丸長方形・楕円形等があるが，基本形は横長形状である。住居跡の長軸幅は，最大が13号住居跡の4.3m，最小が45号住居跡の2.7m，平均値で3.7mであり，住居跡の規模に大きな差異はない。長軸幅/短軸幅の比率は13号住居跡が1.59，45号住居跡が1.35で，その平面形は３：２の長方形に近い。

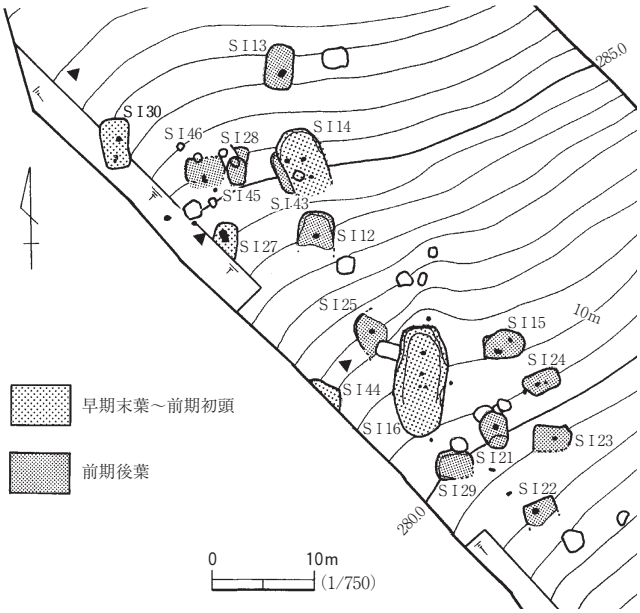


図135　竪穴住居跡分類図

竪穴住居跡の長軸方向は，立地斜面の等

表17－1　西地区竪穴住居跡観察表（早期末葉～前期初頭）

遺構	平面形	規模					長軸方向	炉数	備　考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	面積(m²)	長軸/短軸			
ＳＩ12	(長方形)	(3.4)	3.5	37	－	－	Ｎ５°Ｅ	1	
ＳＩ13	長方形	4.3	2.7	27	9.9	1.59	Ｎ６°Ｅ	1	
ＳＩ15	楕円形	3.9	(2.9)	14	(8.2)	－	N81°Ｅ	1	
ＳＩ21	楕円形	3.7	2.7	13	－	1.37	N10°Ｗ	1	
ＳＩ22	(長方形)	3.2	(2.2)	36	－	－	N65°Ｅ	1	
ＳＩ23	(長方形)	3.7	2.5	12	7.8	1.48	N87°Ｅ	1	
ＳＩ24	長方形	3.6	2.2	12	5.9	1.63	N64°Ｅ	1	
ＳＩ25	(楕円形)	(3.2)	(2.8)	35	－	－	N27°Ｗ	1	
ＳＩ28	(長方形)	(1.7)	(1.7)	24	－	－	Ｎ９°Ｅ	1	
ＳＩ29	(長方形)	3.6	2.6	25	6.3	1.38	Ｎ１°Ｗ	0	
ＳＩ43	(長方形)	(3.8)	(2.0)	34	－	－	N25°Ｗ	1	
ＳＩ45	長方形	2.7	2.0	32	3.9	1.35	N88°Ｗ	0	
ＳＩ46	(長方形)	(4.0)	(2.0)	8	(8.0)	－	－	－	ＳＧ10と重複

高線に対して平行するものと直交するものに二分される。長軸方向の違いは時期差の可能性が高いと思われるが，各住居跡は出土遺物に乏しく，所属時期を細かく特定することはできなかった。しかし，前期最初頭に位置付けられる23号住居跡の周辺には，形状及び長軸方向が類似する15・22・24号住居跡があり，その位置関係から同一集落の住居跡群であった可能性がある。

29・45号住居跡以外の住居跡から，地床炉と推測される焼土面を１基ずつ確認している。46号住居跡は，６号焼土遺構が同住居跡の炉であった可能性がある。14軒の住居跡の内，概ね12軒で炉が確認され，炉を有する割合は約９割である。なお，13号土坑とした遺構は，炉跡・柱穴等は確認できなかったが，底面がほぼ水平に造られており，住居跡として使用された可能性もある。柱穴が確認できた住居跡には13号住居跡があり，小穴が壁沿いに並ぶ壁柱穴である。しかし，他の住居跡については，柱穴の有無・配置状況を明確に把握できなかった。

西地区における縄文時代早期末葉～前期初頭の竪穴住居跡は，長軸幅が3.7m前後と規模に大きな差はなく，基本的に地床炉が１基設けられている。柱穴は13号住居跡で壁柱穴を確認した以外は判然とせず，上屋構造の不明な住居跡が多い。当該期の竪穴住居跡の周囲にはほぼ同時期の筒状・フラスコ状土坑が近接しており，比較的斜度の急な斜面地において，単位的な小規模住居跡と貯蔵穴が組み合った小集落が形成されていたと推測される。

（２）　前期後葉の住居跡（図136）

縄文時代前期後葉に位置付けられる竪穴住居跡は，計５軒（表17－２）である。各住居跡の時期は，大木４～５式期に位置付けられる。５軒の住居跡の内，出土土器から16号住居跡が最後の住居跡と推測されるが，前期後葉の集落は大木５式古段階で終焉するようである。

前期後葉の住居跡の特徴は，１軒の中で複数の地床炉を持つことにある。比較的大型の14・16号住居跡は長軸上に地床炉が並ぶほか，比較的小型の30号住居跡でも２基の炉跡を確認した。検出住居数では前期後葉の方がはるかに少ないものの，単純比較であるが，地床炉の合計では早期末葉～初頭が10基に対して，前期後葉が８基と差が縮小する。

比較的遺存状態が良好な14・16・27・30号住居跡の平面形は，いずれも南北に長い小判形・長方

表17―2　西地区竪穴住居跡観察表（前期後葉）

遺構	平面形	規模					長軸方向	炉数	備　考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	面積(m²)	長軸/短軸			
ＳＩ14	小判形	(6.7)	4.2	45	(21)	－	N24°W		
ＳＩ16	小判形	10.8	5.2	55	40	2.08	N２°E		床面２段構造
ＳＩ27	楕円形	(3.2)	2.5	12	－	－	N15°E		
ＳＩ30	長方形	5.0	2.3	62	9.8	2.15	N10°E		
ＳＩ44	(楕円形)	(3.2)	(2.4)	30	－	－	－		

形で，東・西壁が概ね平行している。また，早期末葉～前期初頭の住居跡よりも平面形が細長く，最も小型の30号住居跡においてもその長軸幅/短軸幅の比率は2.15である。

最も大型の16号住居跡は床面がテラス状の２段になっており，特徴的な形態を呈する。16号住居跡の規模は長軸幅10.8m・短軸幅5.2mで，長軸幅/短軸幅の比率は2.08である。床面積は約40㎡で，早期末葉～前期初頭の住居跡と比較すると４倍以上の広さがある。地床炉は３基確認したが，隔室構造の痕跡は確認できなかった。柱穴は南北２列の主柱穴配置で，東西の対向関係は比較的整然性に欠けるが概ね６対と見ることも可能かもしれない。16号住居跡から出入口の痕跡を確認することはできなかった。16号住居跡の１段低い内側の床面積は約19㎡である。この面積は，14号住居跡の推定床面積に近い。16号住居跡の外壁の立ち上がりは曲線的であり，床面と壁の境が不明瞭であることも特徴的である。

福島県における前期後葉の長方形大型住居跡は，浜通り地方の羽白Ｄ遺跡（飯舘村）23号住居跡・本町西Ａ遺跡（富岡町）１・２号住居跡や，会津地方の胄宮西遺跡７・８・11号住居跡・鹿島遺跡４号住居跡（会津美里町）などが知られ，いずれも横長のプランを持ち長軸上に複数の地床炉が設けられた住居跡である。荻平遺跡16号住居跡と同様の床面形態を持つものは，鹿島遺跡４号住居跡が上げられる。同４号住居跡の規模は長軸幅10.64m・短軸幅6.25mを測り，長軸幅は16号住居跡とほぼ同規模である。２段構造の床面を持つ住居跡は秋田県能代市の杉沢台遺跡が著名であるが，最近の事例では，岩手県胆沢町の大清水上遺跡が知られる。大清水上遺跡では大型住居跡が環状に配

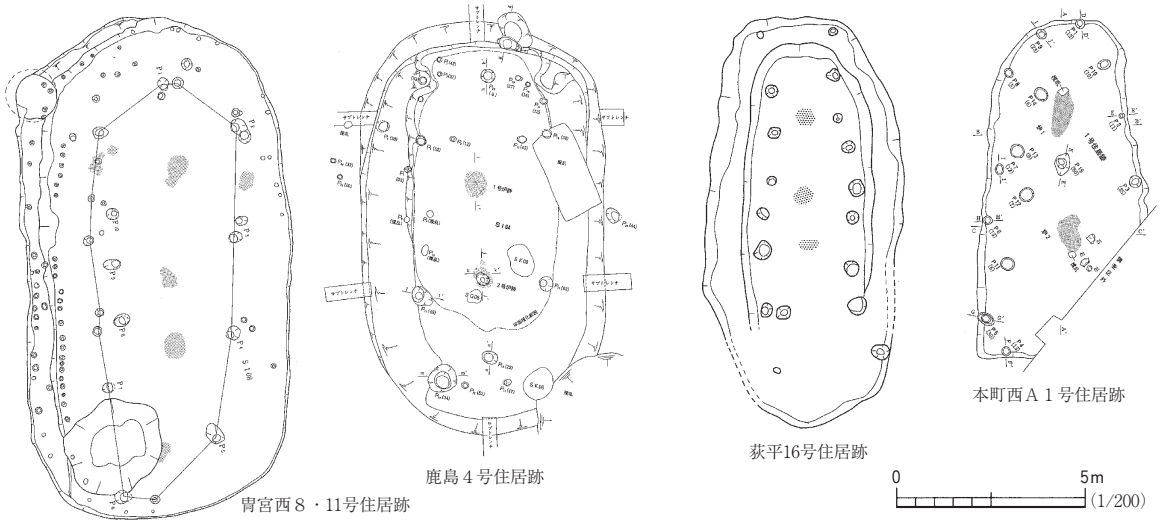


図136　福島県の大型住居跡

列され，その中央が広場状の空間となっている。

だが，荻平遺跡の西地区は比較的急な斜面地であるため，広場の確保は本より困難である。大清水上遺跡・秋田県上ノ山Ⅱ遺跡・宮城県嘉倉遺跡など大型住居跡の計画的配列で知られる集落跡は，いずれも台地上を占地している。しかし，西地区の前期後葉集落は断続的ではあるが早期末葉～前期初頭集落の立地を踏襲し，住居跡数が減少するものの屋内炉数では差がほとんどない。荻平遺跡と同様の集落遺跡は，同じ浜通り地方の羽白Ｄ遺跡で確認される。

武藤康弘氏は，縄文時代前期中～後葉の長方形大型住居跡が東北地方中～南部を中心に分布し，また規模の点で同南部の大型住居跡は比較的小さい傾向にあることをすでに指摘している。武藤氏によれば東北地方南部の長方形大型住居跡の長軸幅の平均値は9.1mであり,本遺跡の16号住居跡も東北地方南部においては標準的な規模の大型住居跡であるといえる。16号住居跡の２段構造の床面形態は，青森県新野町遺跡，秋田県杉沢台遺跡・池内遺跡，大清水上遺跡など東北地方北・中部で比較的多くの事例が見られることから，北からの伝播性が推測される。

西地区における前期後葉の竪穴住居跡の評価については，荻平遺跡の調査終了を待つ必要があるが，前期中葉～後葉における東北地方中・南部の長方形大型住居跡の広まりを荻平遺跡でも確認することができたといえる。（香　川）

２　縄文時代の遺物について

（１）　縄文土器について

今年度の発掘調査では，西地区からは縄文時代早期末葉～前期後葉の土器が出土している。早期末葉～前期初頭については，福島県内における該期の土器型式は，時期，地域によって異なる複雑な分布範囲をみせる。ここでは本遺跡に地理的に近接する飯館村松ヶ平Ａ遺跡，羽白Ｂ遺跡，柏久保遺跡出土資料を中心に該期の土器を分類した鈴鹿良一の案を参考にする。鈴鹿は松ヶ平Ａ遺跡報文中で早期末葉の土器を第Ⅰ段階～第Ⅴ段階に分け，それぞれ素山２ｂ式－宮城県の素山２ｂ式に見られない一群－梨木畑式・船入島下層式－北前式－石川町源平Ｃ遺跡例に近似する一群に当てはめている。鈴鹿（：1989）は後に源平Ｃ遺跡のものを日向前Ｂ式に比定し，早期末葉の最後に位置付け，さらに日向前Ｂ式期と前期初頭の花積下層式期の間に「前期最初頭の土器群」を設けている。

今回の発掘調査で出土した土器を鈴鹿の分類に比定させてみる。図98－５や，図118－４～14は胴部に屈曲部を持ち，縦位の隆帯や屈曲部に指頭圧痕が施されることから，松ヶ平Ａ報文中で示された第Ⅰ段階，素山２ｂ式期に相当するものと思われる。図113－12のような，縦の隆帯上に刺突が施されるものや，図118－13・15のように口縁部に二段撚りの縄圧痕文が施されるものは第Ⅱ段階に相当する。同じく松ヶ平Ａ遺跡の包含層出土資料が類例に挙げられる。図118－１～３は波状口縁で，口縁部文様帯に低い隆帯で傘様文を描いたもので，第Ⅲ段階に比定されるものと思われる。図118－13の口縁部破片は，縄圧痕によるＸ字状の文様や地文から第Ⅳ段階に位置づけられるものと思われ，飯館村岩下Ｄ遺跡に類例が見られる。図114－21の51号土坑出土土器や図113－６などは，

口縁部直下に断面が三角形またはカマボコ形の隆帯を持ち，縄文時代前期初頭に位置づけられるものと考えられる。第Ⅱ段階相当のものでは二段撚りだった口縁部縄圧痕文は一段撚りのものになり，かわって体部に二段撚りの非結束羽状縄文があらわれるようである。

縄文時代前期前葉のものは比較的出土量が少ない。特に大木１式に関しては，小片が多いため，器形・文様について特定できるものは見られなかった。図122－12など精緻な非結束羽状縄文を施すものも見られることから，今回の出土遺物中に一定数の大木1式が含まれる可能性がある。

縄文時代前期後葉の時期では，西地区中央部の16号住居跡などから大木４～５式古段階に比定される資料が得られた。大木式と系統の異なるものとしては，まず16号住居跡から出土した図86－９が挙げられる。上半部の多くを欠損しているが，残存する下半部と口縁部片の形状から，諸磯ｂ式期に見られる縁孔土器である。無文のものである可能性が高く，諸磯ｂ式の細分では新段階に属するものと思われる。福島県内では，喜多方市上野原遺跡などに出土例がある。また，浮島Ⅲ式土器に該当すると思われるもの（図123－４～７）も出土している。今回の調査では両型式と大木式の明確な供伴関係を示す出土状況は見られなかったが，瓦吹堅は浮島Ⅲ式に併行する型式として大木４式を，今村啓爾は諸磯ｂ式新段階に併行する型式として浮島Ⅲ式を挙げている。飯館村柏久保遺跡でも大木４式土器と浮島Ⅲ式土器が遺構外の同一層位から伴出している。

今回の調査では，西地区からは松ヶ平報文中の第Ⅴ段階，つまり日向前Ｂ式に相当する特徴をもつものは見られなかった。本間宏は上田郷Ⅳ遺跡報文中で，日向前Ｂ式及びこれに先行する大畑Ｇ式といった，屈曲や隆帯がない縦走する地文を持つ段階に，胴部に隆帯を持つ土器が併行することを示唆している。本間は茅山下層式期の胴部屈曲が棚倉町胡麻沢遺跡例の，胴部の低い隆帯に上下から短沈線を加える段階につながり，前期初頭の口縁部隆帯に継続する案を述べている。一方，本遺跡に近接する飯館村羽白Ｃ遺跡からは日向前Ｂ式期に比定される土器が出土している。早期末葉のより詳細な検討及び，前期後葉における大木式土器と異なる系統の土器との共伴関係は次年度の調査結果をあわせた上で検証したい。

（２）出土石器について

西地区からは定形石器及び定型的な石器が計74点出土した。その内訳は，石鏃24点，削器・掻器19点，石匙12点，石錐２点，石箆１点，打製石斧２点，磨製石斧４点，礫石器７点，石皿１点，石製品１点，石核１点である。器種組成比率では，石鏃33%，削器･掻器28%，石匙15％，礫石器９％，磨製石斧６％，石錐３％，打製石斧３％，石核１％，石皿１％，石箆１％，石製品１％となる。

出土した石器の石材ごとの点数を見ると，頁岩類40点，碧玉類７点，安山岩５点，流紋岩５点，凝灰岩類４点，砂岩類４点，透閃石岩２点，黒曜石，チャート，ホルンフェルス，細粒花崗閃緑岩，瑪瑙，石英，閃緑斑岩が１点ずつを数える。石材の比率では頁岩類54%，碧玉類９％，安山岩７％，流紋岩７％，凝灰岩類５％，砂岩類５％，透閃石岩３％，黒曜石，チャート，ホルンフェルス，細粒花崗閃緑岩，瑪瑙，石英，閃緑斑岩が各１％ずつである。頁岩類には硬質頁岩と珪質頁岩の二種類がある。二種の比率は硬質頁岩の方が40点中37点，頁岩類全体の92%を占める。碧玉類は７点中

５点が黄色碧玉で，他に碧玉，赤色碧玉が各１点ずつ見られる。

次に器種ごとの石材の利用について見ていく。石鏃に使われる石材ごとの点数は，硬質頁岩11点，珪質頁岩２点，黄色碧玉３点，流紋岩２点，細粒凝灰岩２点，黒曜石・瑪瑙，石英・碧玉が１点ずつである。石鏃における各石材の比率は，硬質頁岩47%，黄色碧玉13%，流紋岩８%，細粒凝灰岩８%，黒曜石・石英・碧玉・瑪瑙は各４%ずつである。

削器・掻器の石材ごとの点数は，硬質頁岩14点，黄色碧玉２点，赤色碧玉・流紋岩・細粒砂岩・チャート各１点ずつである。石材の比率では硬質頁岩70%，黄色碧玉10%，流紋岩・チャート・赤色碧玉・細粒砂岩各５%である。

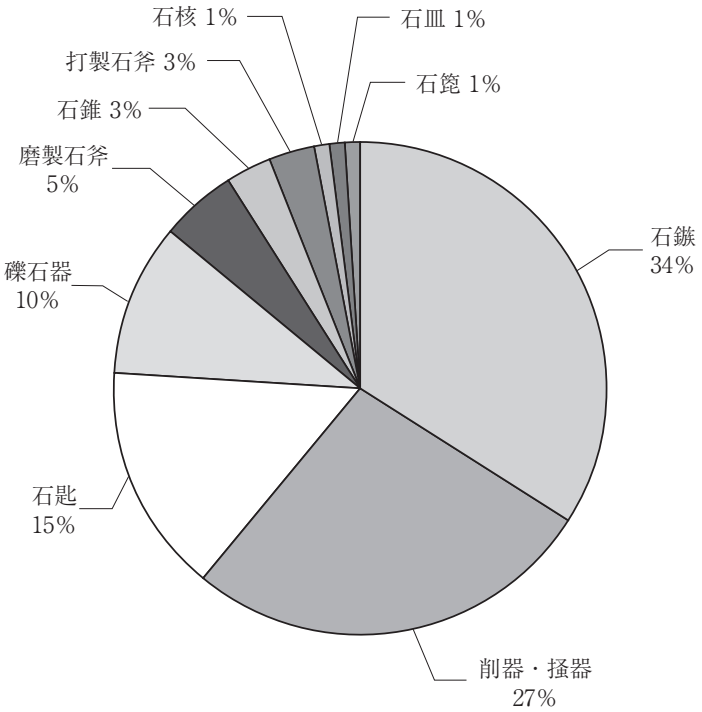
石匙は１点の赤色碧玉製のものの他は，頁岩類が使用される。石箆は１点の出土で，材質には流紋岩が選択されている。石錐では珪質頁岩製のものと細粒凝灰岩製のものが１点ずつ見られる。磨製石斧の使用石材ごとの点数は透閃石２点，閃緑斑岩１点，打製石斧では流紋岩１点，安山岩１点である。礫石器では安山岩が３点，ホルンフェルス・中粒緑色凝灰岩・弱固結凝灰質砂岩・砂岩が１点ずつで，比率は安山岩44%，他は各14%ずつである。その他の１点ずつ出土した石器に関しては，石核が硬質頁岩製，石皿が細粒花崗閃緑岩製，石製品が細粒砂岩製である。

器種組成比の上では石鏃・削器・掻器・石匙といった比較的小型の利器の比率が高く，合計で全体の76%を占める。その中でも，石鏃の占める割合は三器種中の45%と高い。石鏃には比較的多様な石材が使用されている。石鏃に使用された素材の比率では頁岩製のものが55%を占め突出しているが，頁岩製以外の石鏃では７種類の石材が特に偏りなく使用される。

削器・掻器では，頁岩類製のものの他は，黄色碧玉・流紋岩・チャート・細粒砂岩の４種類が選択され，剥片石器では石鏃に次いで多様な石材を使用している。石匙は１点の赤色碧玉製のものを除き全て頁岩製であり，材質が比較的限定されている。削器・掻器，石匙の素材の頁岩類は全て硬質頁岩で，珪質頁岩製のものはみられない。礫石器では，安山岩製のものの他に，ホルンフェルス・中粒緑色凝灰岩・弱固結凝灰質砂岩・砂岩製の４種類の石材が使用され，削器・掻器同様，石鏃に次いで多様である。

剥片石器で石材の選択肢の幅に差がみられることは，各石材の母岩の大きさに関係があると思われる。今

表18　西地区石器器種比率



回の調査で出土した石匙は石鏃・削器・掻器に比べて大型のものであるが，石鏃や削器・掻器で頁岩以外に選択された石材は，碧玉類や瑪瑙など母岩の規模が比較的小さいものが多い。石匙の石材に硬質頁岩が良く選択されるのは，母岩の大きさが必要とする剥片の規模を満たしているためであると考えられる。

器種組成比の上では石鏃・削器・掻器・石匙といった比較的小型の利器の比率が高く，合計で全体の76%を占める。その中でも，石鏃の占める割合は三器種中の45%と高い。石鏃には比較的多様な石材が使用されている。石鏃に使用された素材の比率では頁岩製のものが55%を占め突出しているが，頁岩製以外の石鏃では７種類の石材が特に偏りなく使用される。

削器・掻器では，頁岩類製のものの他は，黄色碧玉・流紋岩・チャート・細粒砂岩の４種類が選択され，剥片石器では石鏃に次いで多様な石材を使用している。石匙は１点の赤色碧玉製のものを除き全て頁岩製であり，材質が比較的限定されている。削器・掻器，石匙の素材の頁岩類は全て硬質頁岩で，珪質頁岩製のものはみられない。礫石器では，安山岩製のものの他に，ホルンフェルス・中粒緑色凝灰岩・弱固結凝灰質砂岩・砂岩製の４種類の石材が使用され，削器・掻器同様，石鏃に次いで多様である。

剥片石器で石材の選択肢の幅に差がみられることは，各石材の母岩の大きさに関係があると思われる。今回の調査で出土した石匙は石鏃・削器・掻器に比べて大型のものであるが，石鏃や削器・掻器で頁岩以外に選択された石材は，碧玉類や瑪瑙など母岩の規模が比較的小さいものが多い。石匙の石材に硬質頁岩が良く選択されるのは，母岩の大きさが必要とする剥片の規模を満たしているためであると考えられる。（小　向）

引用・参考文献

阿部義平　1976「銙帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』 東出版寧楽社

会津若松市教育委員会　1994『会津 大戸窯(遺物編)』 会津若松市文化財調査報告書第37号

胆沢町教育委員会　2006『大清水上遺跡』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第475集

伊藤玄三　1983「八世紀の銙帯に示される授位」『法政史学』第36号　法政大学史学会

今村啓爾　1981「諸磯式土器」『縄文文化の研究』第３巻　雄山閣

井上国雄　1977「久慈川上流域における縄文時代早期後半の土器編年」『福島考古』第18号　福島県考古学会

井上尚明　1987「銙帯をめぐる二・三の問題」『埼玉の考古学』 新人物往来社

いわき市教育委員会　1972『伊勢林前遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第１冊

いわき市教育委員会　1981『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第６冊

いわき市教育委員会　1985『龍門寺遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊

いわき市教育委員会　1990『岸遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第27冊

いわき市教育委員会　1994『上ノ内遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第38冊

宇都宮市教育委員会　1988「根古谷台遺跡発掘調査概要」『聖山公園遺跡Ⅴ』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第24集

大越町教育委員会　1996『大越・堂平Ｂ遺跡　中平Ｂ遺跡』 大越町埋蔵文化財調査報告書第13冊

小川　望　1985「縄文時代の大形住居について」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第４号
大館市教育委員会　1997『池内遺跡』　秋田県文化財調査報告書第268集
瓦吹　堅　1989「浮島・興津式土器様式」『縄文土器大観１』　小学館
興野義一　1968「大木式土器の理解のために(Ⅱ・Ⅲ)」『月刊考古学ジャーナル』№16・18
ニュー・サイエンス社
黒坂勝美　1980『改訂増補 国史大系 日本後記』　吉川弘文館
郡山市　1973『郡山市史８』
小林敏夫　1988「群馬県出土の腰帯具について」『群馬の考古学』　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
塩川町教育委員会　2001「鏡ノ町遺跡Ｂ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５』　塩川町文化財調査報告第８集
志間泰治　1971『鱸沼遺跡』
白河市教育委員会　2002「舟田中道遺跡Ⅱ」
『ほ場整備事業舟田地区関連遺跡発掘調査報告書4』　白河市埋蔵文化財調査報告書第33集
菅谷通保　1987「縄文時代特殊住居論批判」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第６号
高橋圭次　1983「川俣町町畑遺跡出土の縄文式土器と南前遺跡の石製銙」『福島考古』第24号
福島県考古学会
只見町教育委員会　1987『窪田遺跡』　只見町文化財調査報告書第３集
田中広明　1997「(8)鉄鉢形土器」『中堀遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
田中広明　2003『地方の豪族と古代の官人』　柏書房
多賀城市埋蔵文化財センター　1991『山王遺跡－第９次発掘調査報告書』　多賀城市文化財調査報告書第26集
東京国立博物館　1968『東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇　北海道東北』
名取市教育委員会　1997『原遺跡』　名取市文化財調査報告書第38集
生江芳徳　1971「新編会津風土記にみるいしあい出土の遺物について」『福島考古』第20号
福島県考古学会
奈良文化財研究所　2002『銙帯をめぐる諸問題』
二本松市　2004『相生集』
能代市教育委員会　1981『杉沢台遺跡』　秋田県文化財調査報告書第83集
花見朔巳　『新編会津風土記』第４巻　雄山閣
福島県教育委員会　1979「板倉前Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』　福島県文化財調査報告書第74集
福島県教育委員会　1980「佐平林遺跡(Ⅷ区)」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』　福島県文化財調査報告書第85集
福島県教育委員会　1980「孫六橋遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』　福島県文化財調査報告書第81集
福島県教育委員会　1982「鳴神・柿内戸遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅴ』
福島県文化財調査報告書第101集
福島県教育委員会　1982「土取場塚群・土取場Ｂ遺跡」
『阿武隈中部地区遺跡分布調査Ⅱ』　福島県文化財調査報告書第105集
福島県教育委員会　1983「松ヶ平Ａ遺跡(第１次)」
『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ』　福島県文化財調査報告書第118集
福島県教育委員会　1984「松ヶ平Ａ遺跡(第２次)」
『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』　福島県文化財調査報告書第129集
福島県教育委員会　1984「一斗内遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告16』　福島県文化財調査報告書第132集

福島県教育委員会　1984「北ノ前遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅱ』
福島県文化財調査報告書第135集
福島県教育委員会　1985「岩下Ａ遺跡（第１次）・岩下Ｂ遺跡・岩下Ｃ遺跡」
『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』　福島県文化財調査報告書第150集
福島県教育委員会　1986「岩下Ｄ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ』　福島県文化財調査報告書第165集
福島県教育委員会　1986「腰巻遺跡・下谷ケ地平Ｂ・Ｃ遺跡」
『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』　福島県文化財調査報告書第164集
福島県教育委員会　1986「北原遺跡」『国道113号バイパス遺跡発掘調査報告Ⅱ』　福島県文化財調査報告書第166集
福島県教育委員会　1987「三貫地遺跡（原口地区）」
『国道113号バイパス遺跡発掘調査報告Ⅲ』　福島県文化財調査報告書第179集
福島県教育委員会　1987「稲荷塚Ｂ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ』　福島県文化財調査報告書第182集
福島県教育委員会　1987「岩下向Ａ遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』　福島県文化財調査報告書第183集
福島県教育委員会　1988「浜井場Ｂ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』　福島県文化財調査報告書第189集
福島県教育委員会　1988「一ノ堰Ｂ遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』
福島県文化財調査報告書第191集
福島県教育委員会　1988「境Ａ遺跡」『国道113号バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ』
福島県文化財調査報告書第192集
福島県教育委員会　1988「岩下Ａ遺跡（第２次）・羽白Ｄ遺跡（第２次）」
『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』　福島県文化財調査報告書第193集
福島県教育委員会　1988「羽白Ｃ遺跡（第１次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』
福島県文化財調査報告書第194集
福島県教育委員会　1989「羽白Ｃ遺跡（第２次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告ⅩⅢ』
福島県文化財調査報告書第210集
福島県教育委員会　1989「平ヶ谷地Ａ遺跡」『福島空港関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』
福島県文化財調査報告書第212集
福島県教育委員会　1989「向田Ｅ遺跡・武井Ｄ遺跡」「第１章 遺物に関する考察」
『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』　福島県文化財調査報告書第215集
福島県教育委員会　1990「田向Ａ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告29』　福島県文化財調査報告書第223集
福島県教育委員会　1990「胄宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡Ⅷ』　福島県文化財調査報告書第227集
福島県教育委員会　1991「長瀞遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅱ』　福島県文化財調査報告書第265集
福島県教育委員会　1991「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡Ⅺ』　福島県文化財調査報告書第266集
福島県教育委員会　1992「鳥井沢Ｂ遺跡・長瀞遺跡」
『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』　福島県文化財調査報告書第281集
福島県教育委員会　1994「南入Ａ遺跡・長瀞遺跡」
『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅵ』　福島県文化財調査報告書第315集
福島県教育委員会　1996「猪倉Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅳ』　福島県文化財調査報告書第326集
福島県教育委員会　1996「大久保Ｆ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告８』　福島県文化財調査報告書第330集
福島県教育委員会　1997「白岩堀ノ内遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告10』　福島県文化財調査報告書第332集

福島県教育委員会　1997「第３編　総括　第２節　相馬地域のロクロ土師器」
『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』　福島県文化財調査報告書第333集
福島県教育委員会　1997「美シ森Ｂ遺跡」『ＮＴＣ遺跡発掘調査報告』　福島県文化財調査報告書第335集
福島県教育委員会　1998「大猿田遺跡（２次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告11』
福島県文化財調査報告書第341集
福島県教育委員会　1999「上田郷Ⅳ遺跡（１次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告18』
福島県文化財調査報告書第356集
福島県教育委員会　1999「文京町遺跡」
『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告５』　福島県文化財調査報告書第360集
福島県教育委員会　1999「八幡町Ｂ遺跡」
『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告７』　福島県文化財調査報告書第368集
福島県教育委員会　2002「小山Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告30』　福島県文化財調査報告書第389集
福島県教育委員会　2002「本町西Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告32』　福島県文化財調査報告書第391集
福島県教育委員会　2002「柴迫Ａ遺跡・柴迫古墳群」
『一般国道相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ』　福島県文化財調査報告書第403集
福島県教育委員会　2003「南倉沢遺跡」
『一般国道289号線南倉沢バイパス遺跡発掘調査報告１』　福島県文化財調査報告書第409集
福島県教育委員会　2006「別所遺跡」『相馬第２地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』　福島県文化財調査報告書第429集
福島県教育委員会　2008「小池田遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告51』　福島県文化財調査報告書第450集
福島県教育委員会　2008「荻平遺跡（第１次）」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告１』
福島県文化財調査報告書第455集
福島県立博物館　1993『企画展　東北からの弥生文化』
福島市教育委員会　1991『南諏訪原遺跡』　福島市埋蔵文化財報告書第44集
福島市教育委員会　1993『鎧塚遺跡』　福島市埋蔵文化財調査報告書第53集
仲田茂司　1994「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその展開」『考古学雑誌』79－3
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所　1982『多賀城跡　政庁跡』
宮城県多賀城跡調査研究所　1991「第60次調査」・「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1991』
宮城県多賀城跡調査研究所　1994「五万崎地区　菊地勇吉宅の調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1994』
武藤康弘　1998「縄文時代の大型住居」『縄文式生活構造』　同成社
谷藤保彦編　1993『縄文前期終末の緒様相』　縄文セミナーの会
山都町教育委員会　1983「沢口遺跡」　福島県耶麻郡山都町文化財調査報告第３集
㈶山形県埋蔵文化財センター　1997『北柳１・２遺跡発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
㈶山形県埋蔵文化財センター　2000『北柳１遺跡（２次）発掘調査報告書』　山形県埋蔵文化財センター調査報告書第76集
綿貫邦夫　1990「銙帯から見た律令制の一側面」『群馬考古学手帳』第１号　群馬県土器観察会

写　真　図　版

荻（おぎ）平（だいら）遺跡（２次調査）

１－１　調査区全景（１）（南東から）

１－２　東地区全景（１）（南から）

１－３　東地区全景（２）（真上から）

１－４　東地区基本土層

a　調査区南壁基本土層（北から）　b　Ｅ５－Ｈ６基本土層（東から）
c　Ｅ５－Ｈ８基本土層（東から）　d　Ｅ５－Ｅ８基本土層（南から）

1－5　17号住居跡（北から）

1－6　17号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　炉跡（北から）
c　断割土層（東から）

１－７　18号住居跡（東から）

１－８　18号住居跡細部

a　ベルト土層（南東から）　b　カマド（東から）
c　炉跡（西から）

１－９　19号住居跡（東から）

１－10　19号住居跡細部

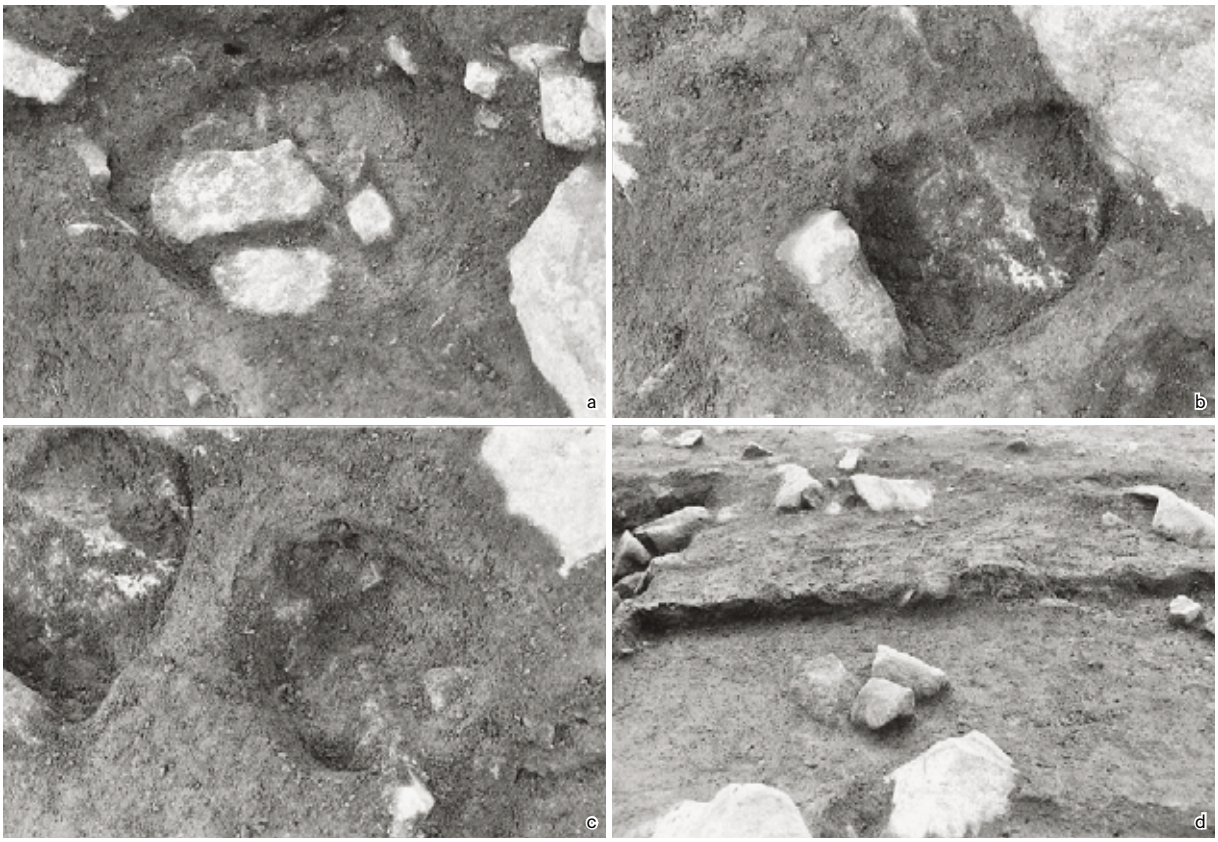
a　ベルト土層（東から）　b　Ｐ３土層（東から）
c　鉄鏃出土状況（北から）

１－11　20号住居跡（西から）

１－12　20号住居跡細部

a　ベルト土層（南西から）　b　焼土面（西から）
c　刀子出土状況（北西から）

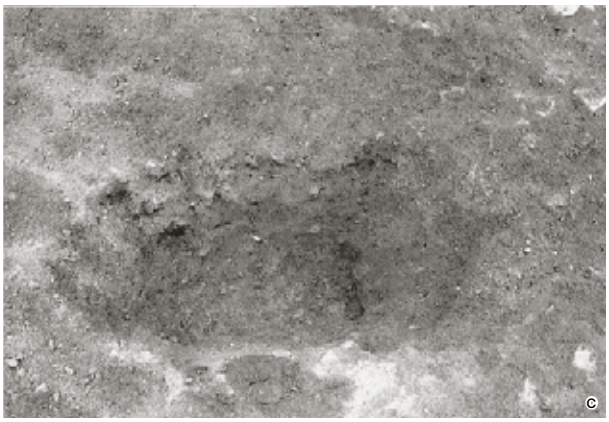
1－13　26号住居跡（南西から）



1－14　26号住居跡細部

a　Ｐ１（東から）　b　Ｐ２（東から）
c　Ｐ３（東から）　d　貼床断面（北西から）

１－15　31号住居跡（西から）



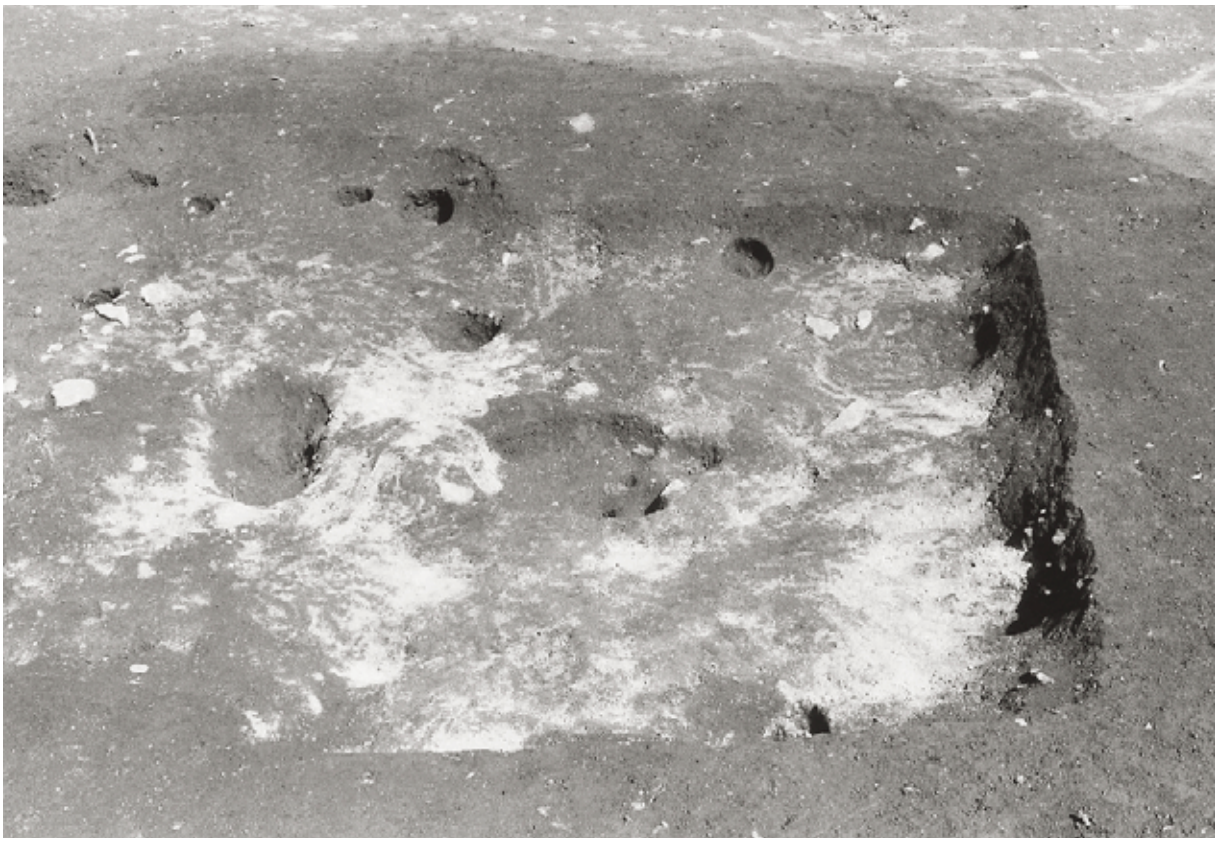
１－16　31号住居跡細部

a　ベルト土層（東から）　b　炉跡断面（南東から）
c　Ｐ１（東から）

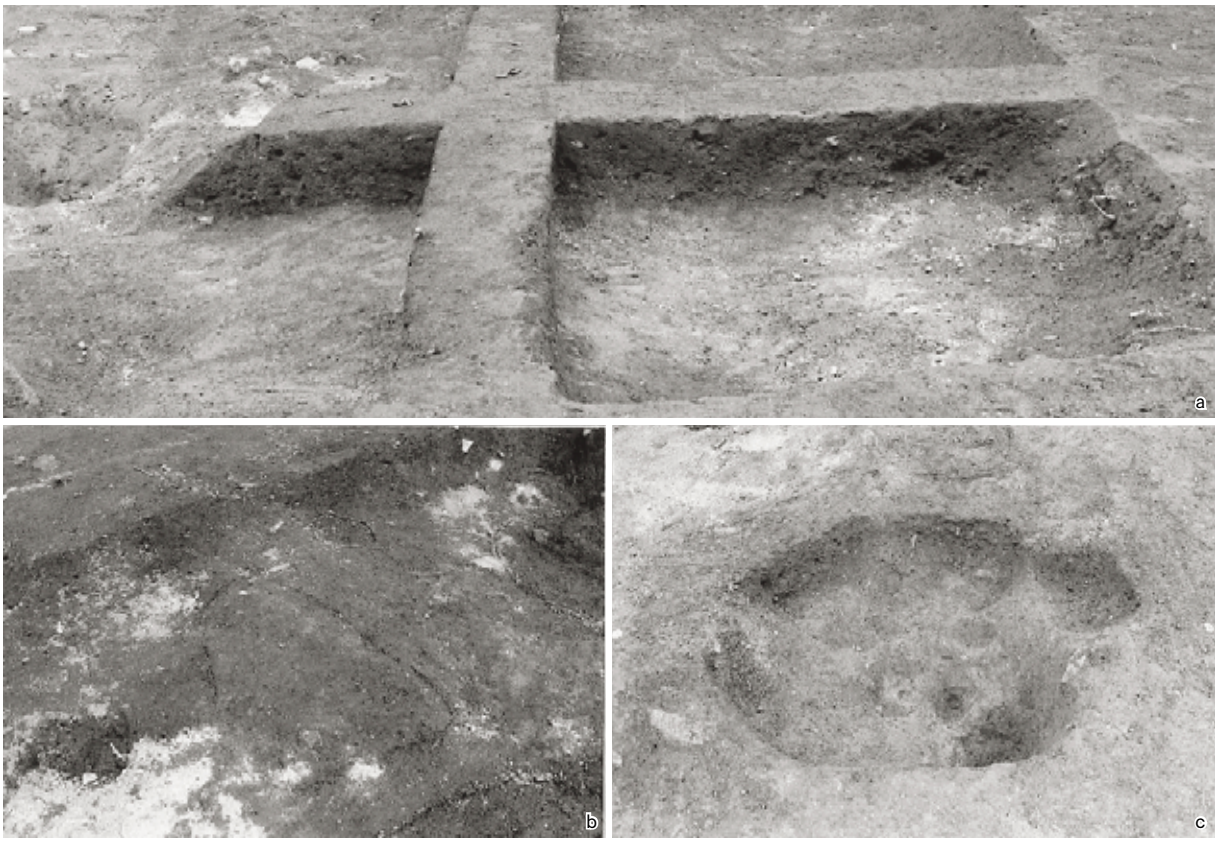
1－17　32号住居跡（西から）

1－18　32号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　炉跡断面（東から）
c　作業風景（西から）



１－19　33号住居跡（南から）



１－20　33号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　炉跡（南西から）
c　Ｐ１（南から）

1－21　34号住居跡（北から）

1－22　34号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　Ｐ１（北から）
c　Ｐ２（南から）

１－23　35号住居跡（北から）

１－24　35号住居跡細部

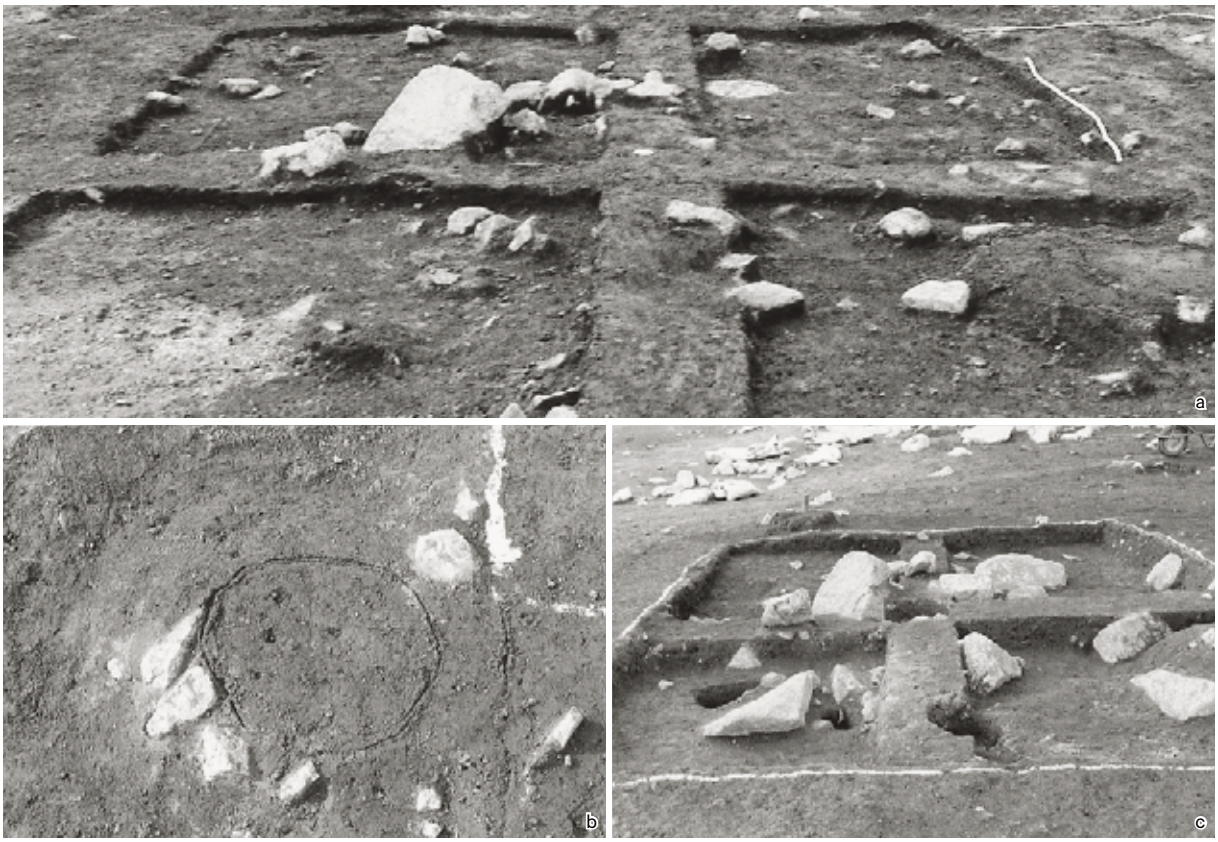
a　Ｐ１（西から）　b　Ｐ２（東から）
c　Ｐ３（北から）　d　断割土層（南から）

1－25　36号住居跡（東から）

1－26　36号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　炉跡（北から）
c　断割土層（東から）

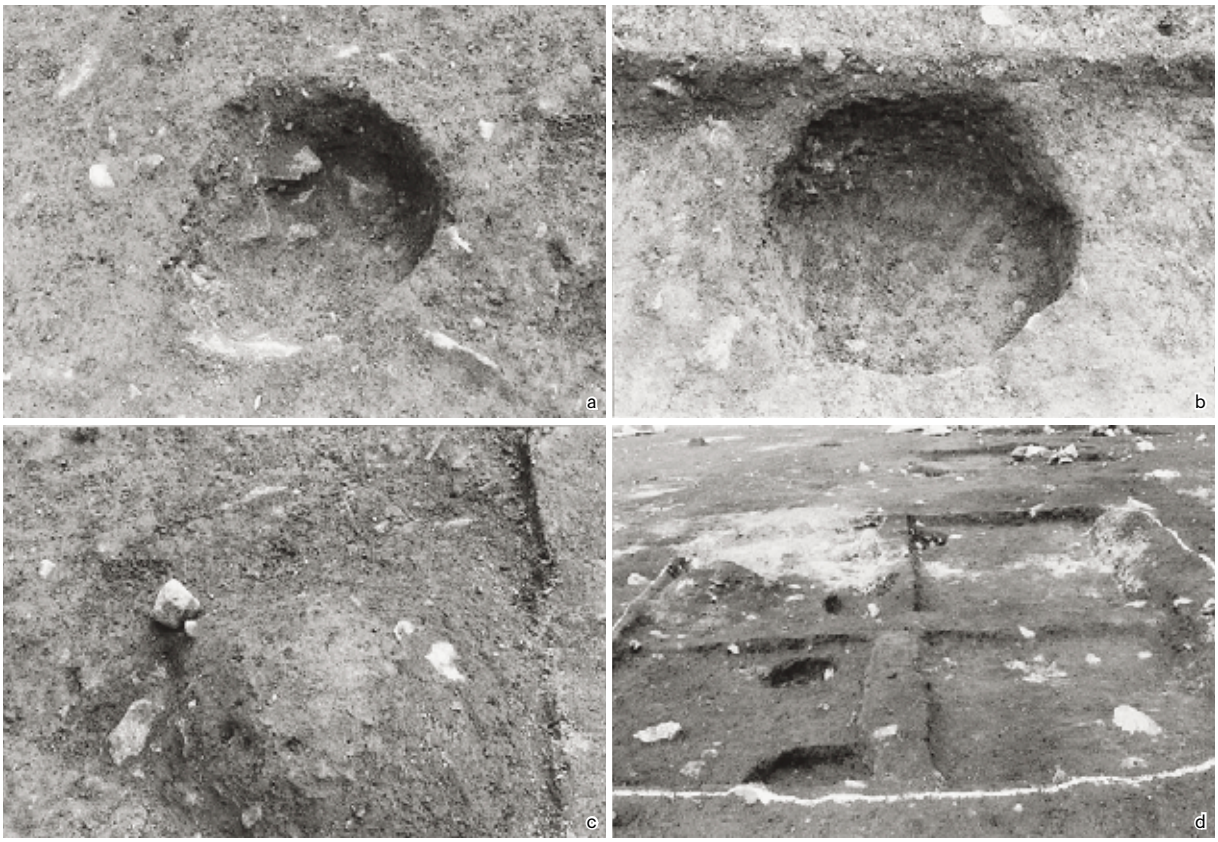
１－27　37号住居跡（北から）



１－28　37号住居跡細部

a　ベルト土層（東から）　b　炉跡（東から）
c　断割土層（東から）

1－29　38号住居跡（南から）



1－30　38号住居跡細部

a　Ｐ１（西から）　b　Ｐ３（西から）
c　炉跡（東から）　d　断割土層（東から）

１－31　39号住居跡（南から）

１－32　39号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　Ｐ１（南から）
c　刀子出土状況（南から）

1－33　41号住居跡（南から）

1－34　41号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　炉跡断面（西から）
c　Ｐ３（南から）

１－35　42号住居跡（南から）

１－36　42号住居跡細部

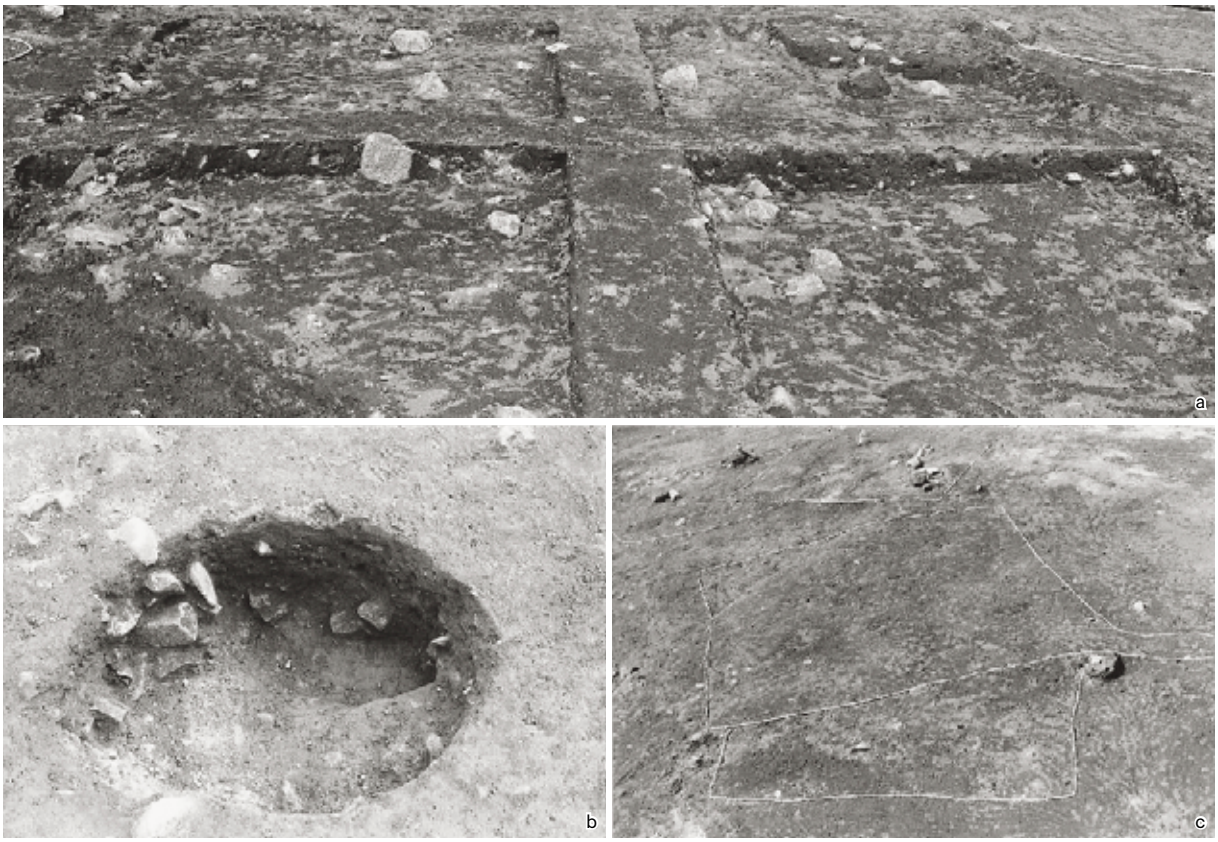
a　ベルト土層（南から）　b　炉跡（東から）
c　検出状況（南から）

1－37　47号住居跡（南から）

1－38　47号住居跡細部

a　ベルト土層（東から）　b　炉跡（西から）
c　作業風景（南から）

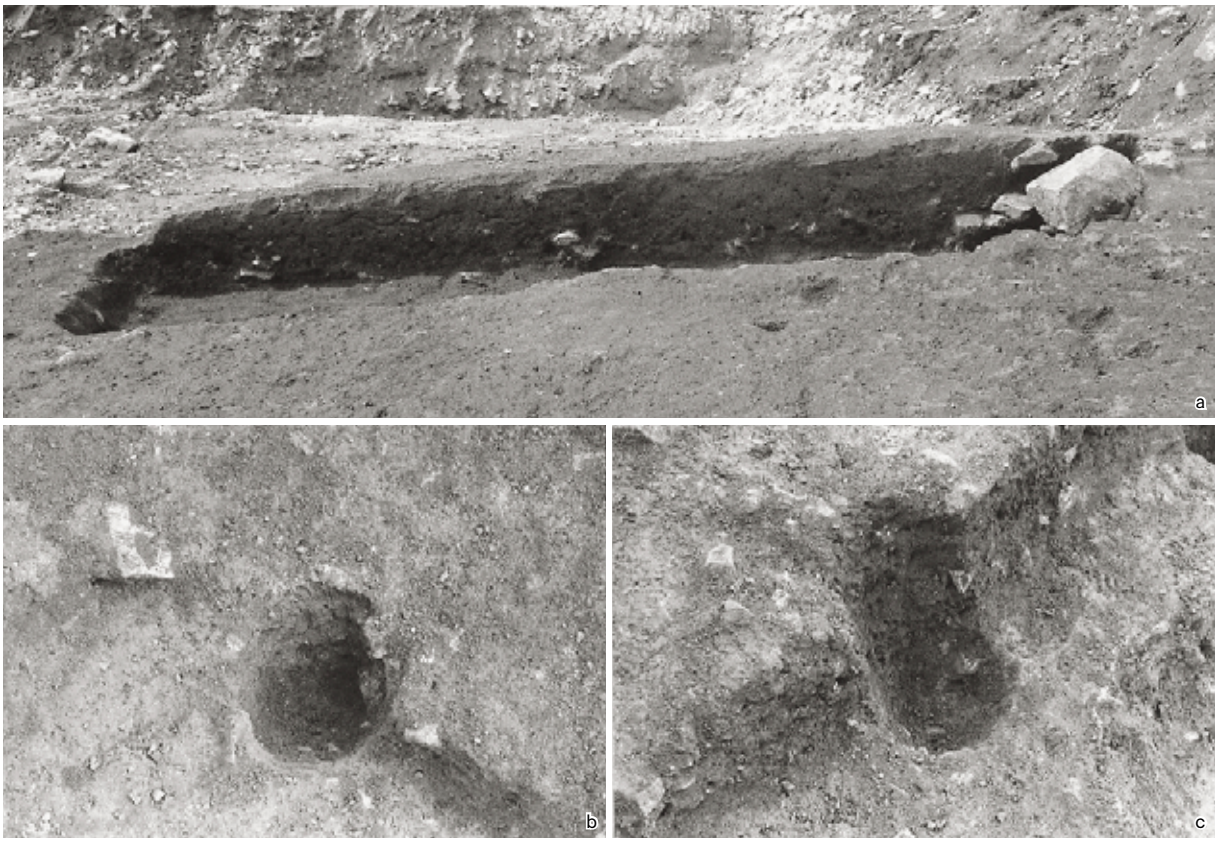
１－39　48号住居跡（南から）



１－40　48号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　Ｐ１（西から）
c　検出状況（東から）

1－41　50号住居跡（東から）



1－42　50号住居跡細部

a　ベルト土層（南東から）　b　Ｐ１（北西から）
c　Ｐ10（北西から）

１－43　51号住居跡（南から）

１－44　51号住居跡細部

a　ベルト土層（北東から）　b　Ｐ１土層（西から）
c　検出状況（北東から）

1－45　52号住居跡（南から）

1－46　52号住居跡細部

a　炉跡（南西から）　b　Ｐ１（西から）
c　Ｐ３（南から）　d　作業風景（南から）

１－47　53号住居跡（南から）

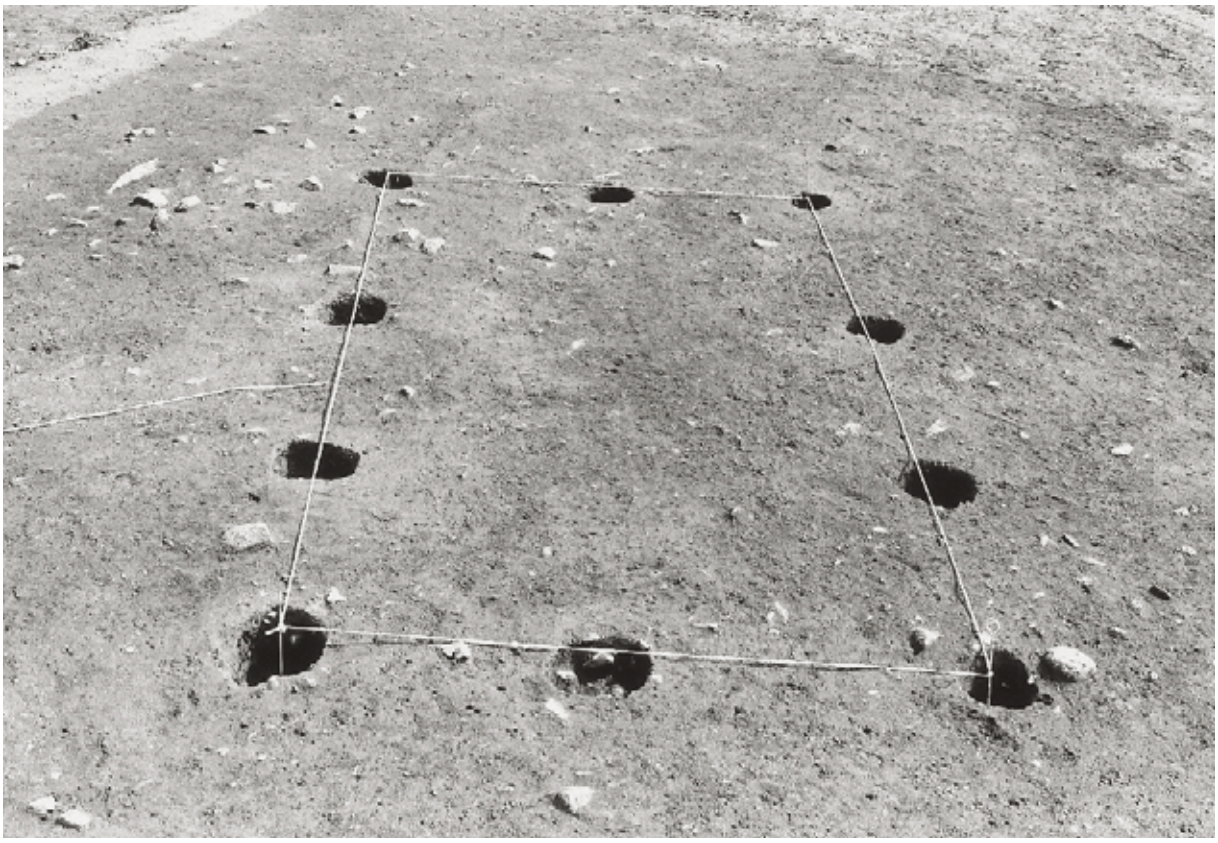
１－48　53号住居跡細部

a　ベルト土層（南西から）　b　Ｐ６（南西から）
c　遺物出土状況（南から）　d　作業風景（南から）

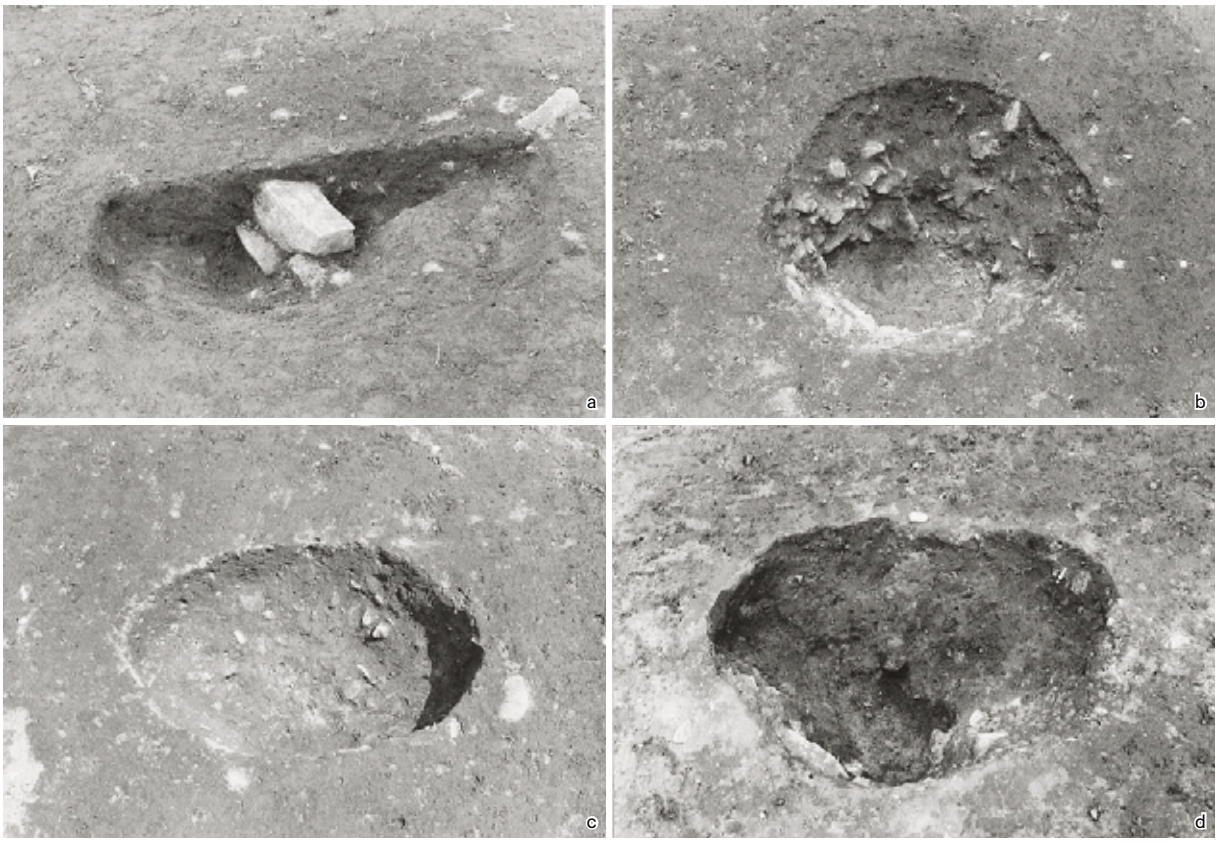
1－49　54号住居跡（南から）

1－50　54号住居跡細部

a　ベルト土層（南から）　b　カマド（南から）
c　炉跡（東から）

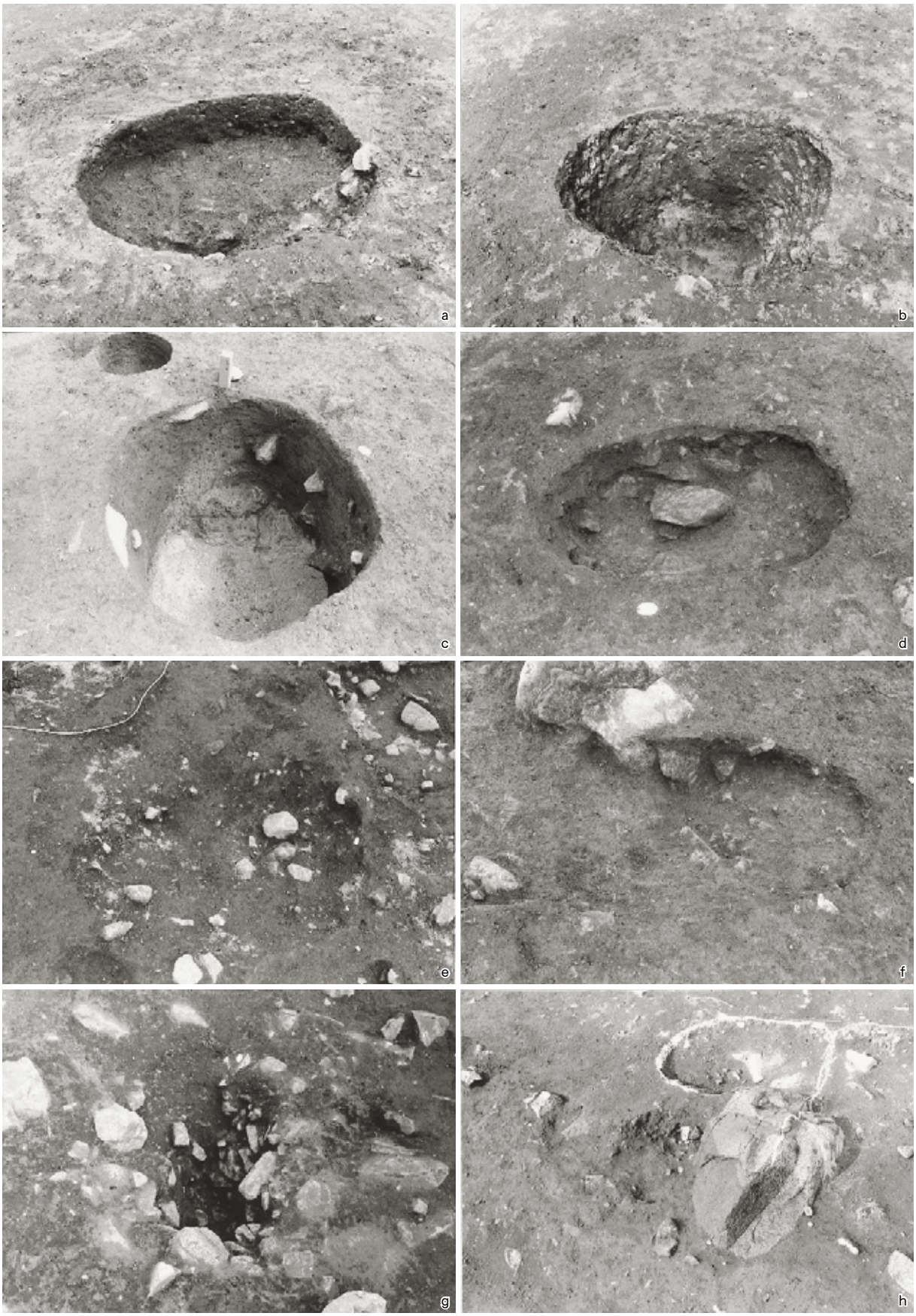


１－51　１号建物跡（北から）



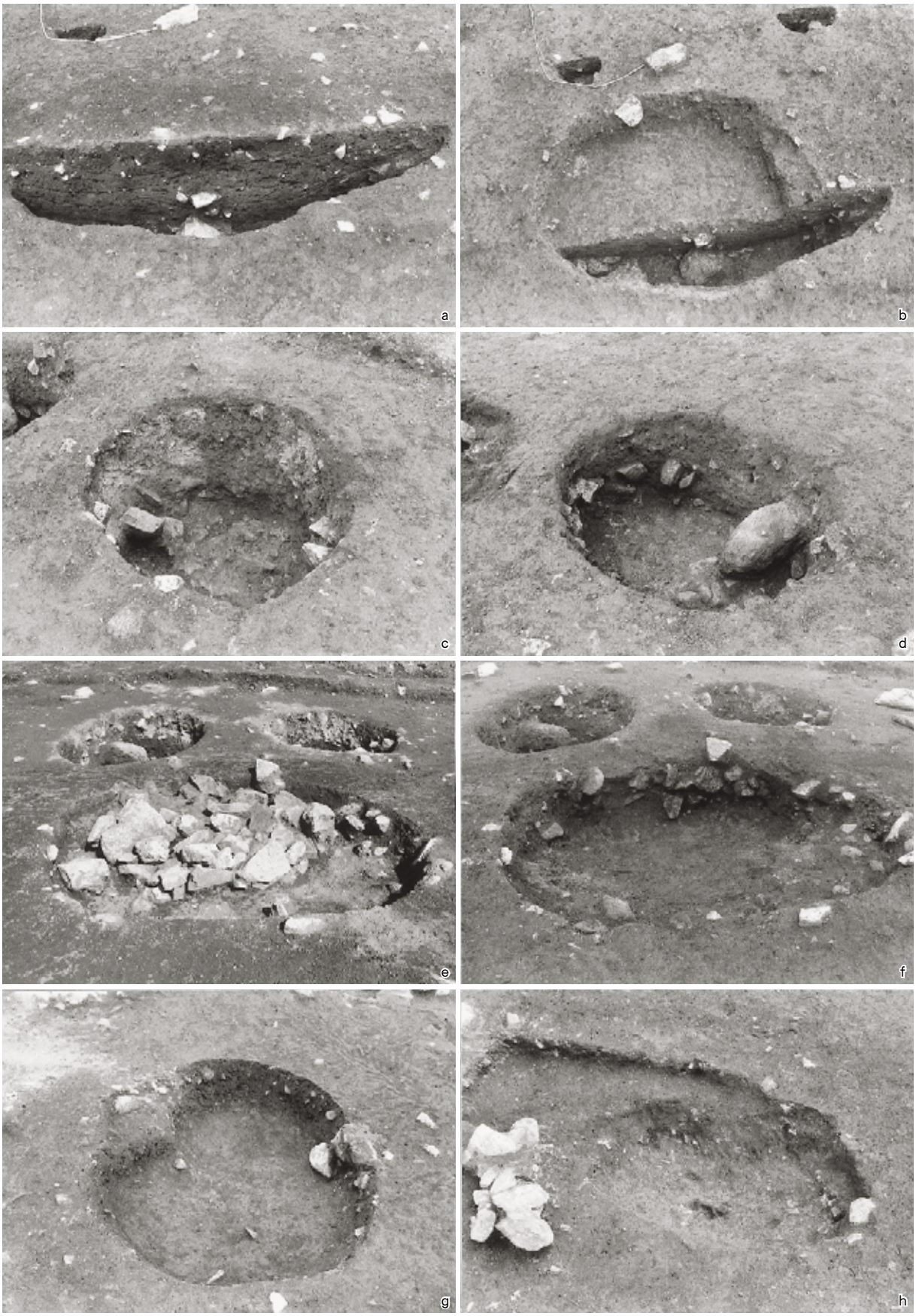
１－52　27～30号土坑

a　27号土坑堆積土（南から）　b　28号土坑（西から）
c　29号土坑（東から）　d　30号土坑（南から）



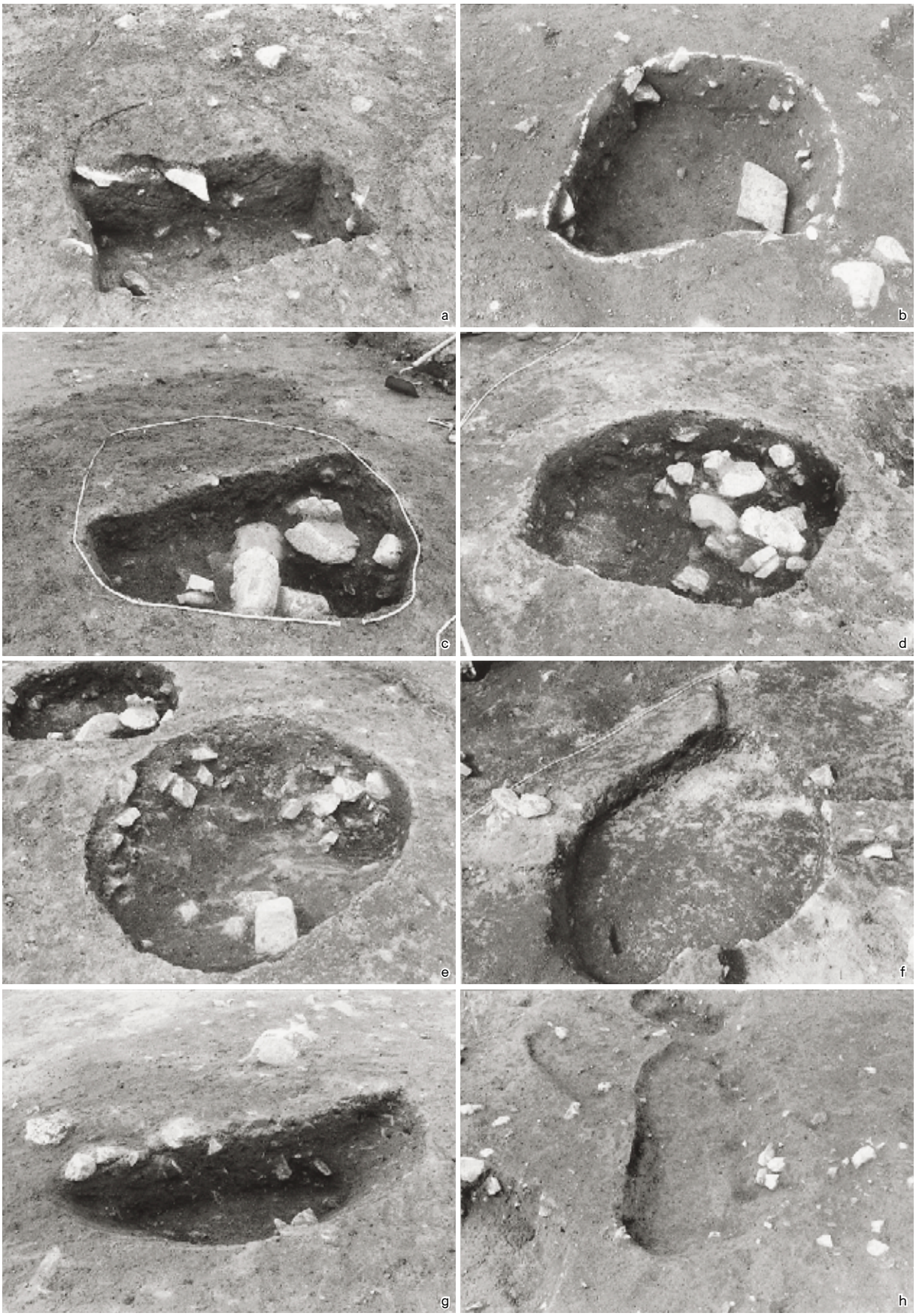
1－53　31～33・35～39号土坑

a　31号土坑（南から）　b　32号土坑（北から）　c　33号土坑（北から）
d　35号土坑（南から）　e　36号土坑（西から）　f　37号土坑（北から）
g　38号土坑（北から）　h　39号土坑（南東から）



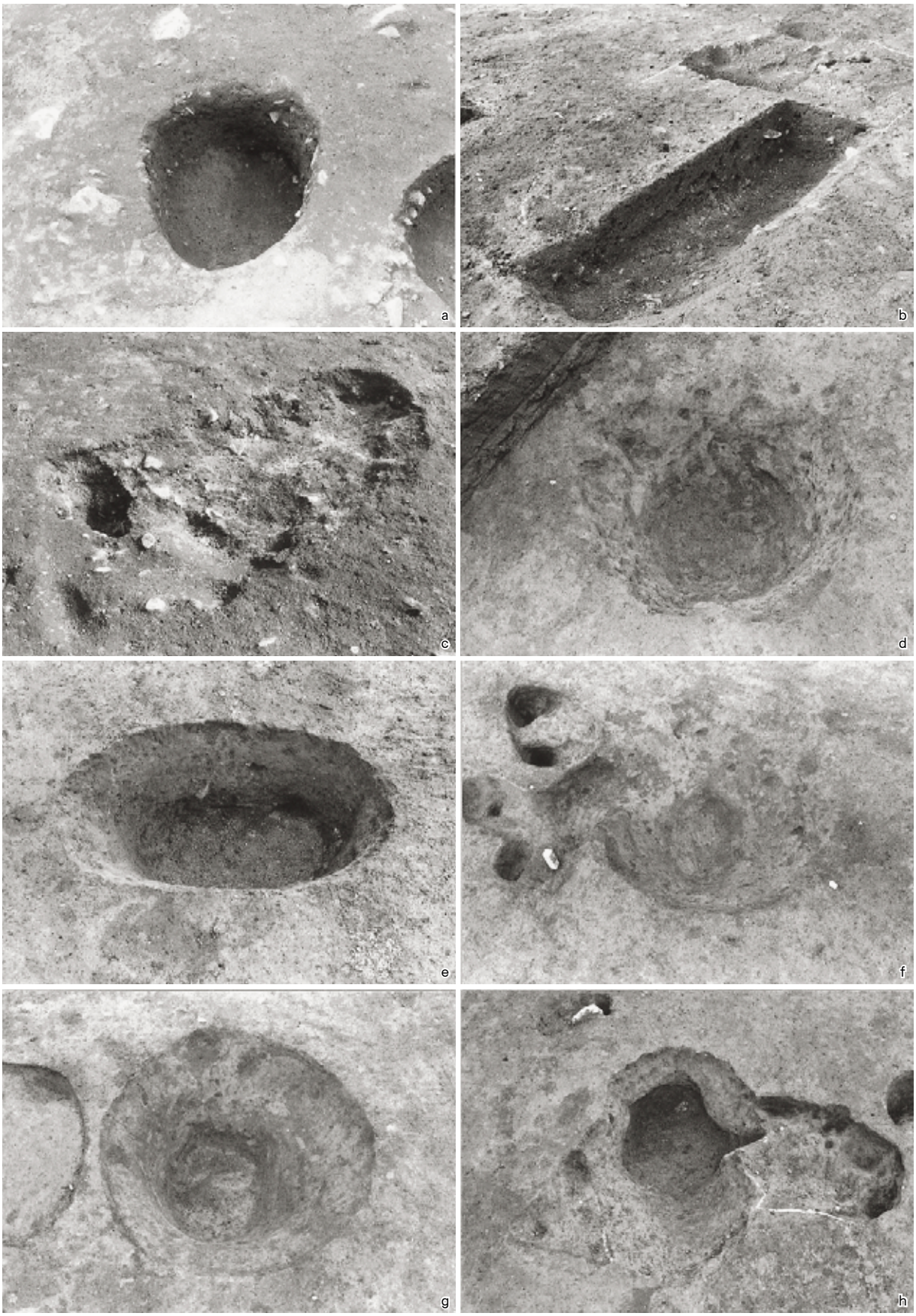
１－54　40～46号土坑

a　40号土坑（南から）　b　41号土坑（南から）　c　42号土坑（南から）
d　43号土坑（南東から）　e　44号土坑礫出土状況（西から）
f　44号土坑（西から）　g　45号土坑（北から）　h　46号土坑（西から）



1－55　47～50・52・55号土坑

a　47号土坑堆積土（南から）　b　48号土坑（東から）　c　49号土坑堆積土（南から）
d　49号土坑（南西から）　e　50号土坑（南から）　f　52号土坑（北東から）
g　55号土坑堆積土（東から）　h　55号土坑（北から）



１－56　58・59・62～66号土坑

a　58号土坑（北から）　b　59号土坑堆積土（南東から）　c　59号土坑（西から）
d　62号土坑（南西から）　e　63号土坑（南西から）　f　64号土坑（東から）
g　65号土坑（東から）　h　66号土坑（東から）

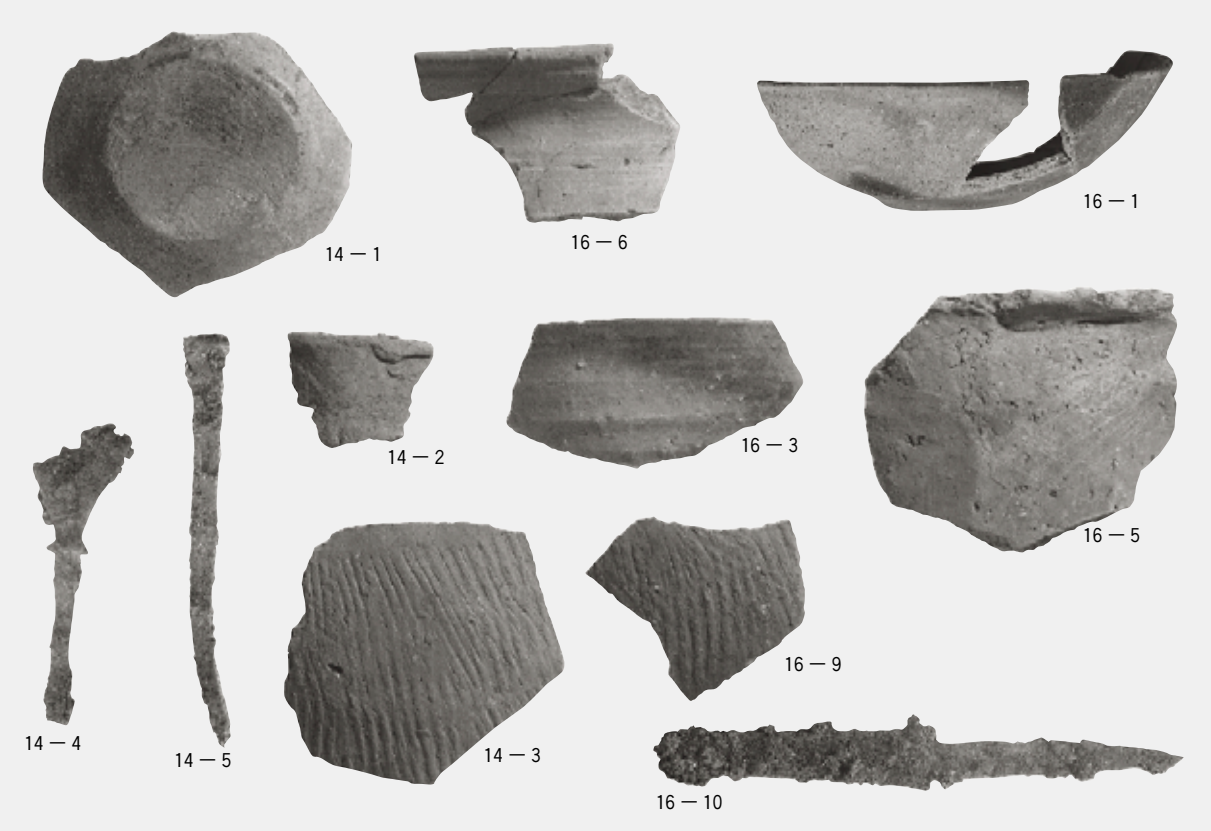
1－57　13号焼土遺構（南から）

1－58　13号焼土遺構細部

a　炉跡（西から）　b　炉跡断割（南から）
c　作業場堆積土（南から）　d　検出状況（南から）

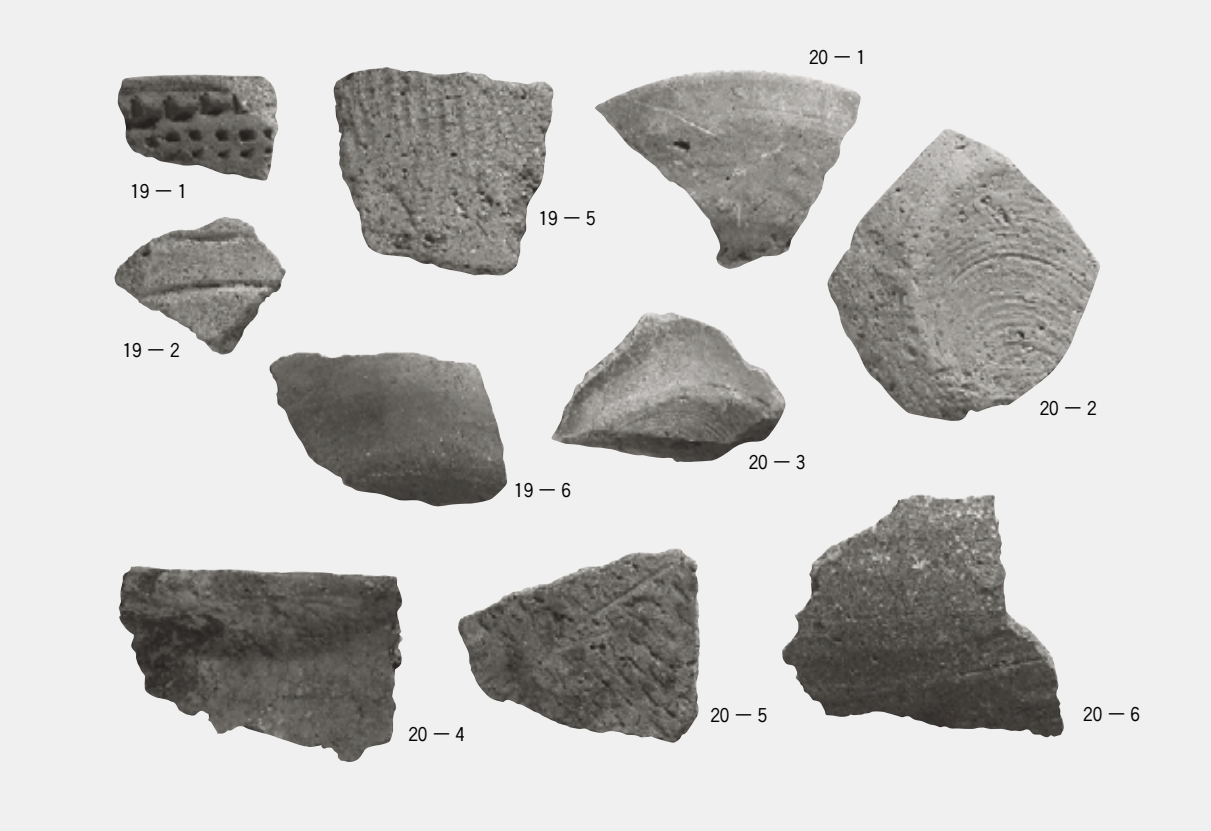
１－59　17号住居跡・18号住居跡（１）出土遺物

１－60　18号住居跡出土遺物（２）

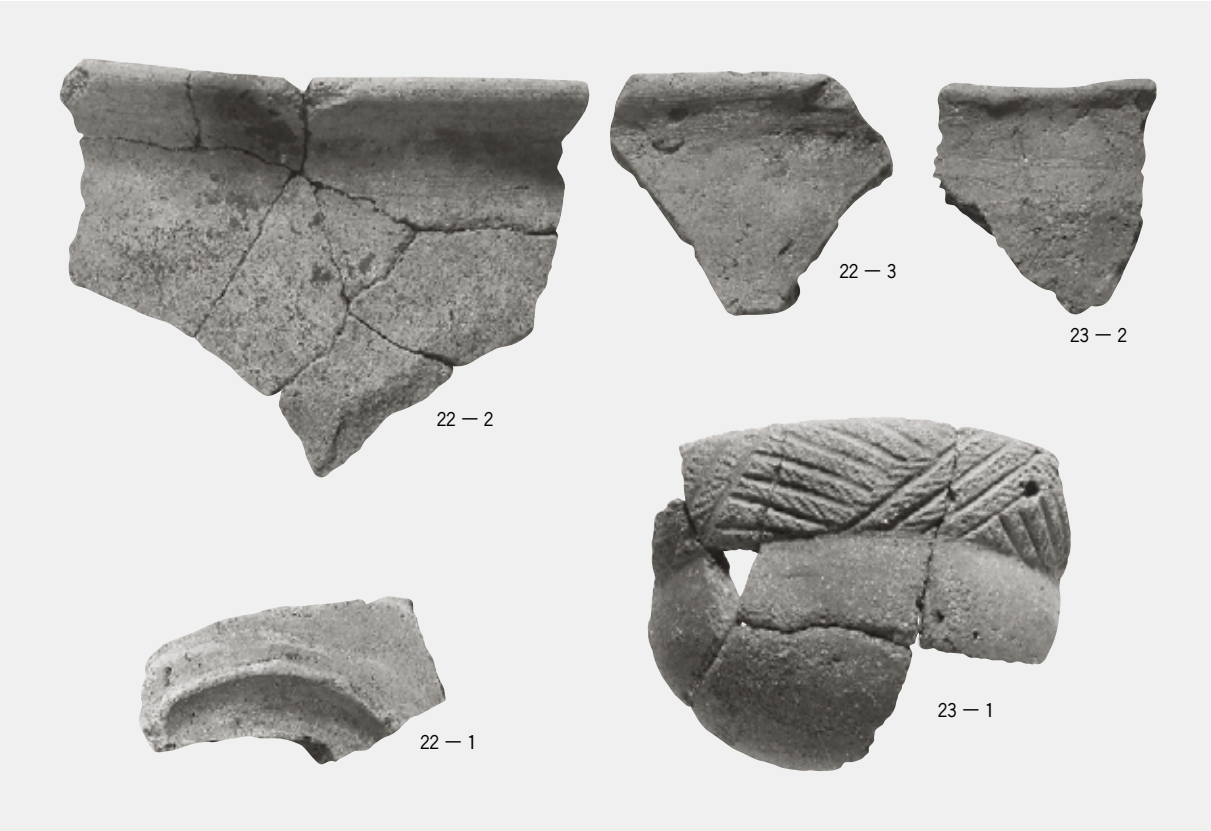


1－61　19・20号住居跡出土遺物

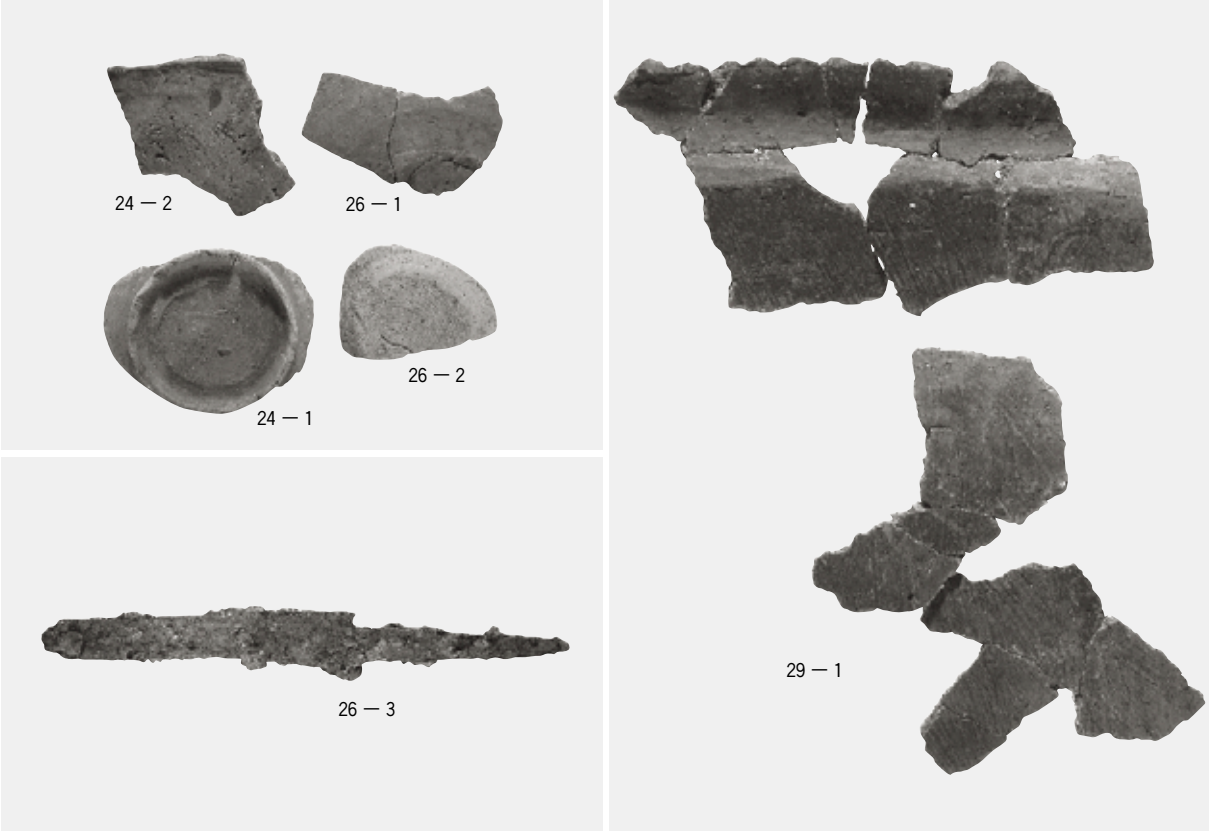
1－62　26・31号住居跡出土遺物



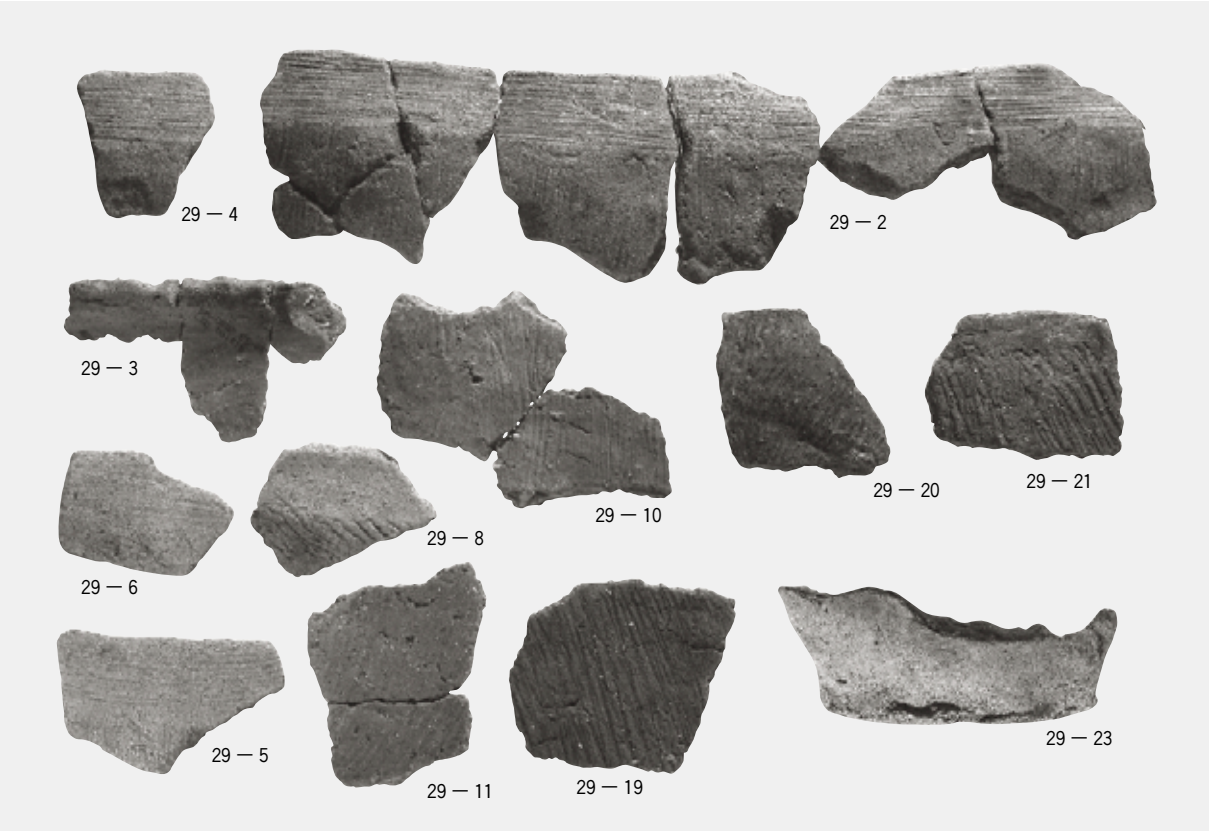
１－63　32・33号住居跡出土遺物



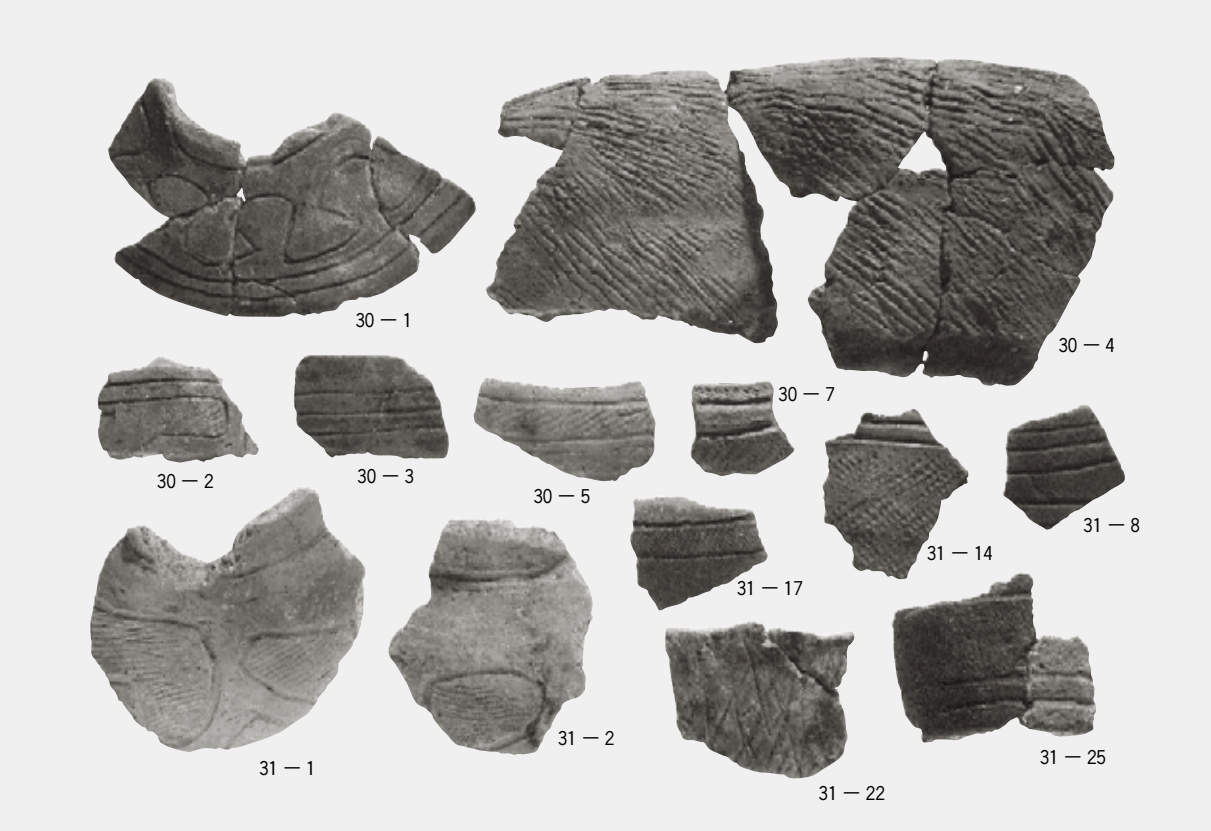
１－64　35・36号住居跡出土遺物



1 － 65　37・39号住居跡，42号住居跡（1）出土遺物



1 － 66　42号住居跡出土遺物（2）



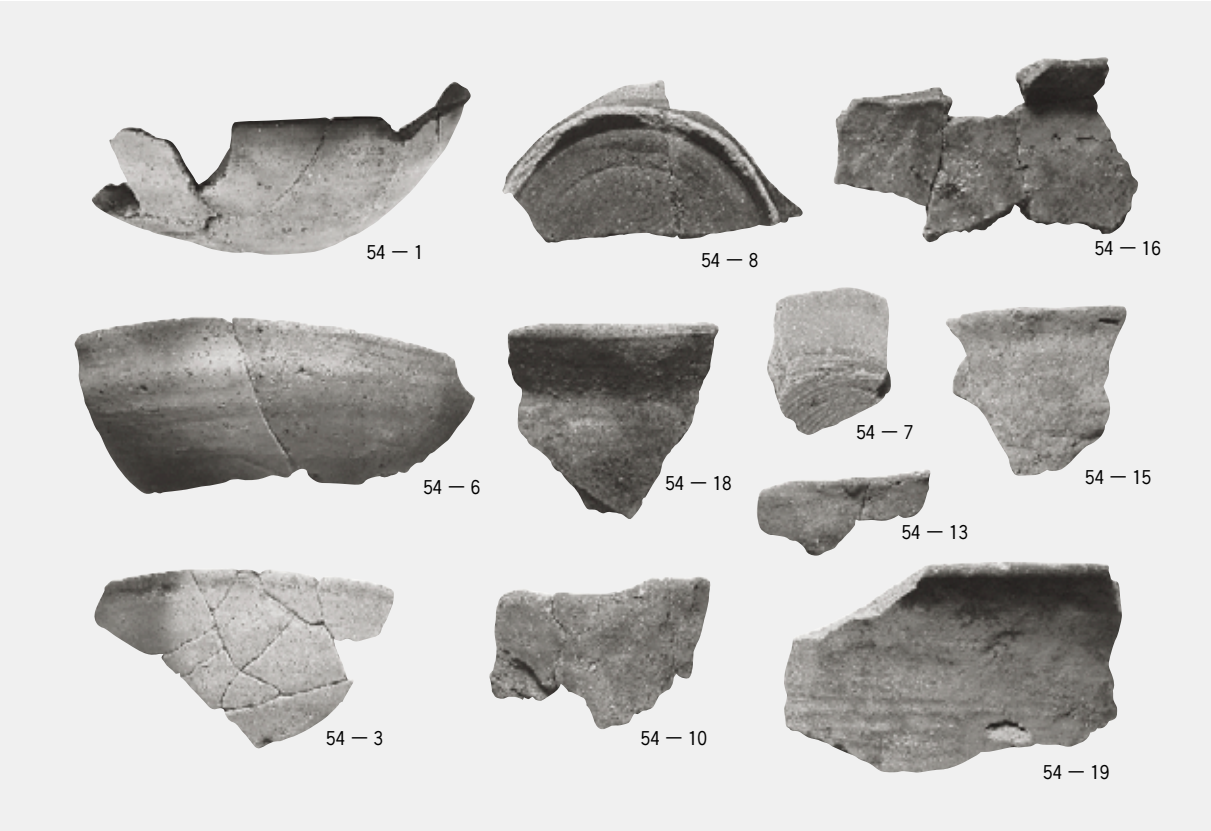
１－67　47号住居跡出土遺物

１－68　48・50・52号住居跡出土遺物

1 — 69　53号住居跡出土遺物

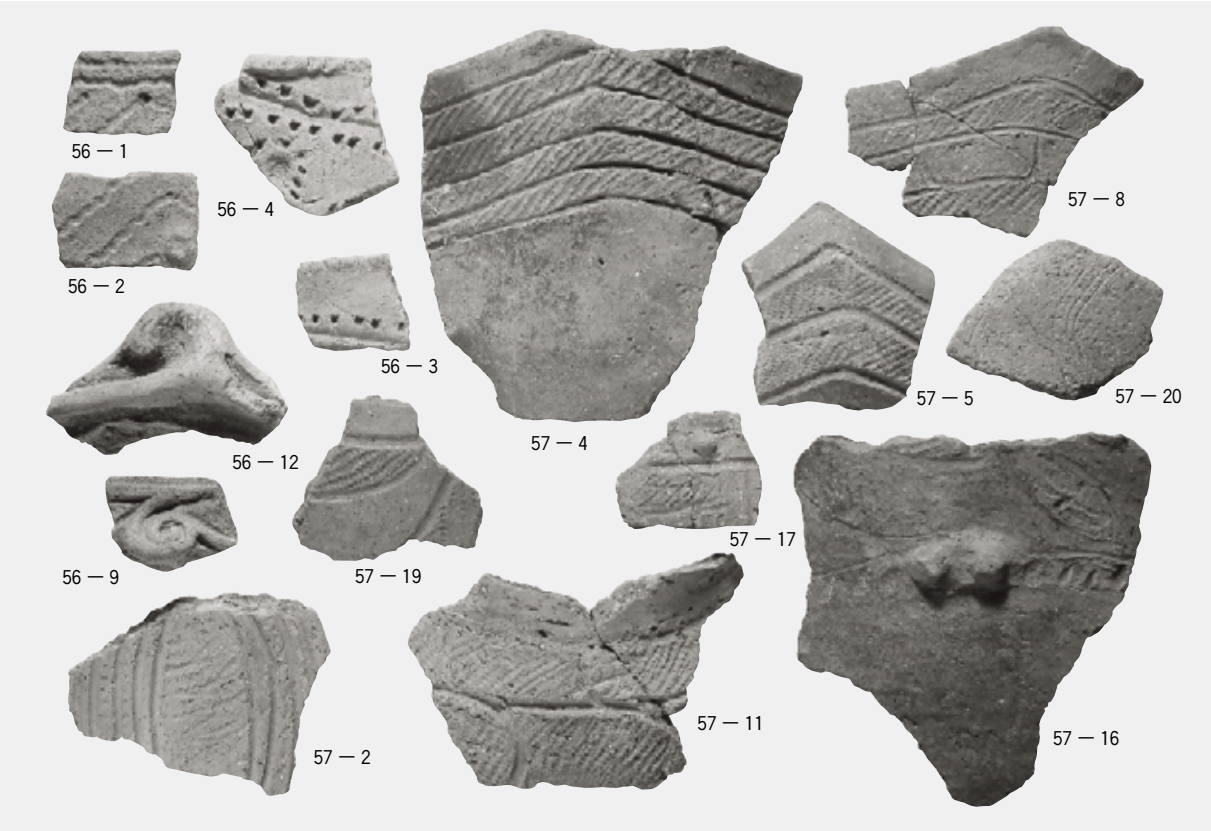
1 — 70　54号住居跡・59号土坑出土遺物

１－71　土坑出土遺物



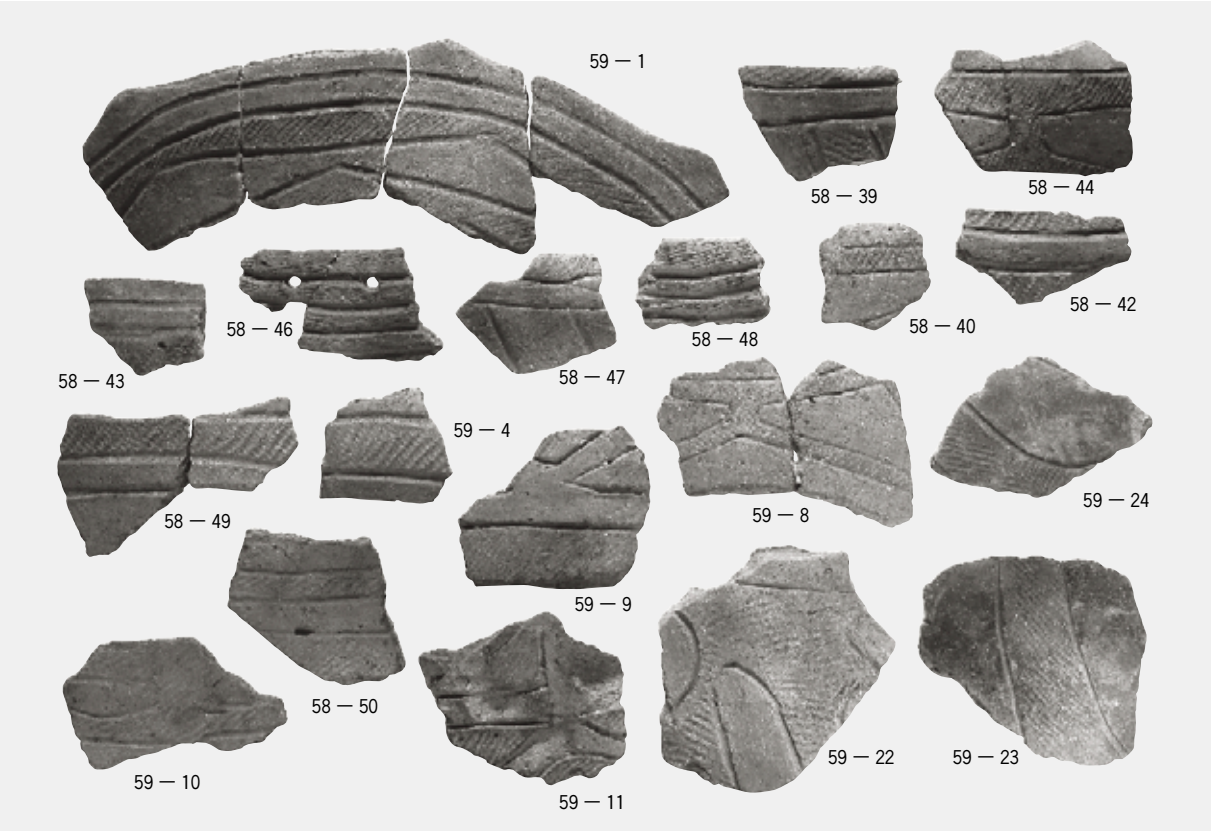
１－72　13号焼土遺構出土遺物（１）

1 — 73　13号焼土遺構出土遺物（2）

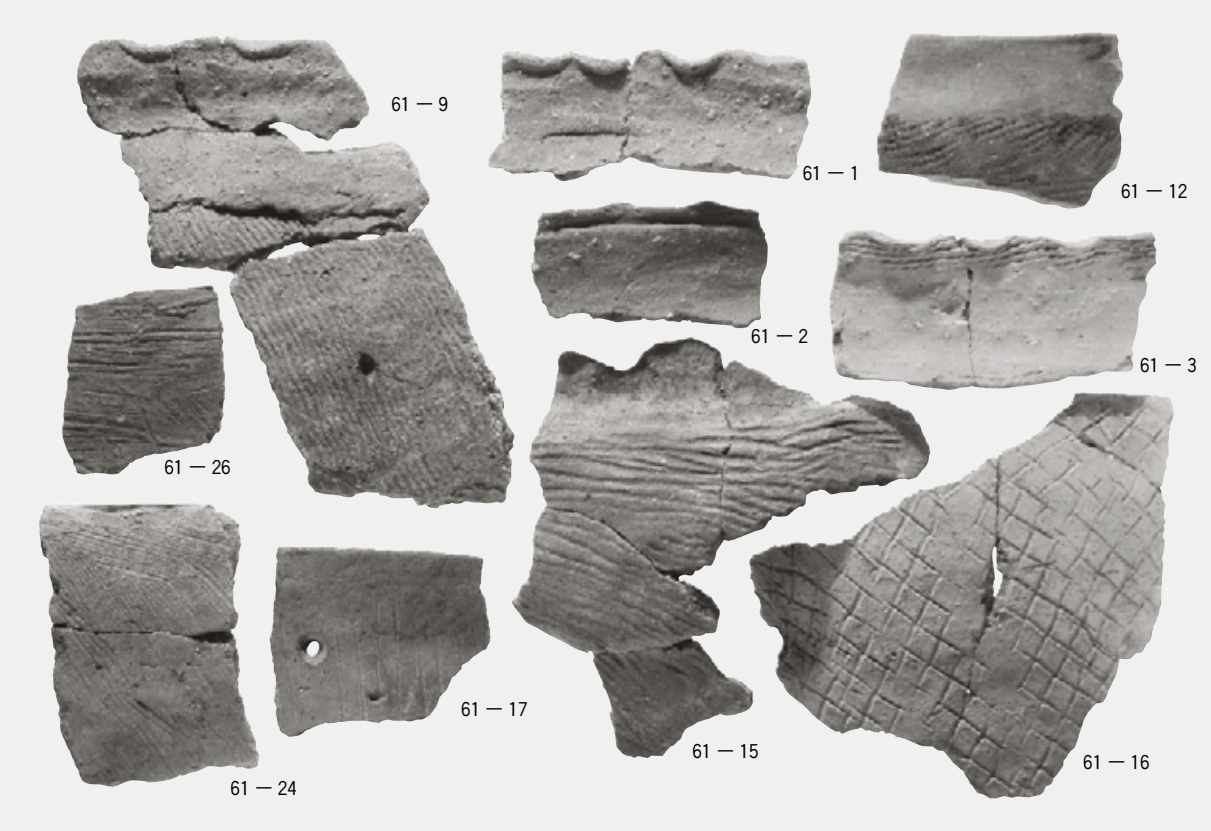


1 — 74　遺構外出土遺物（1）

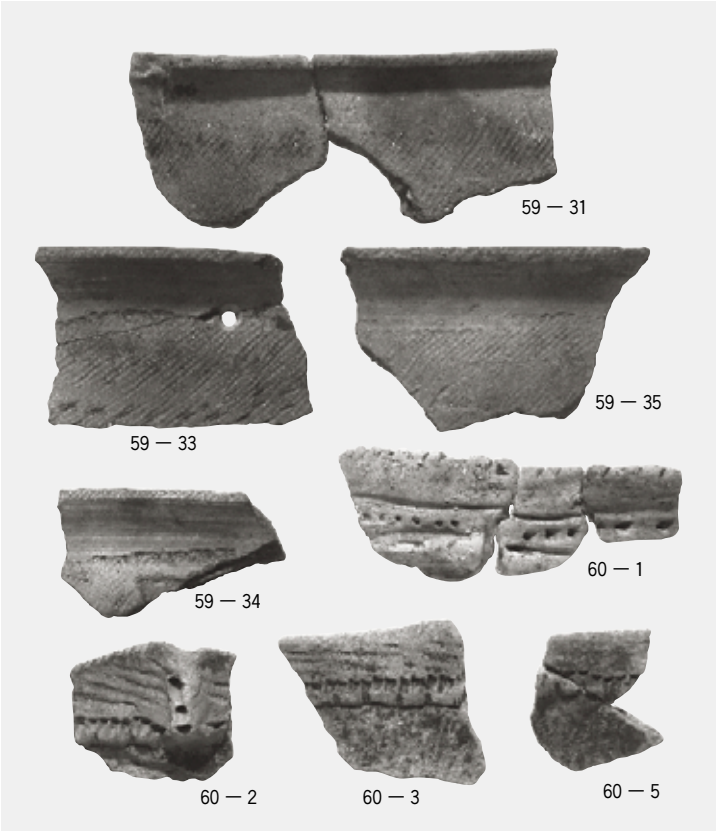
１－75　遺構外出土遺物（２）



１－76　遺構外出土遺物（３）

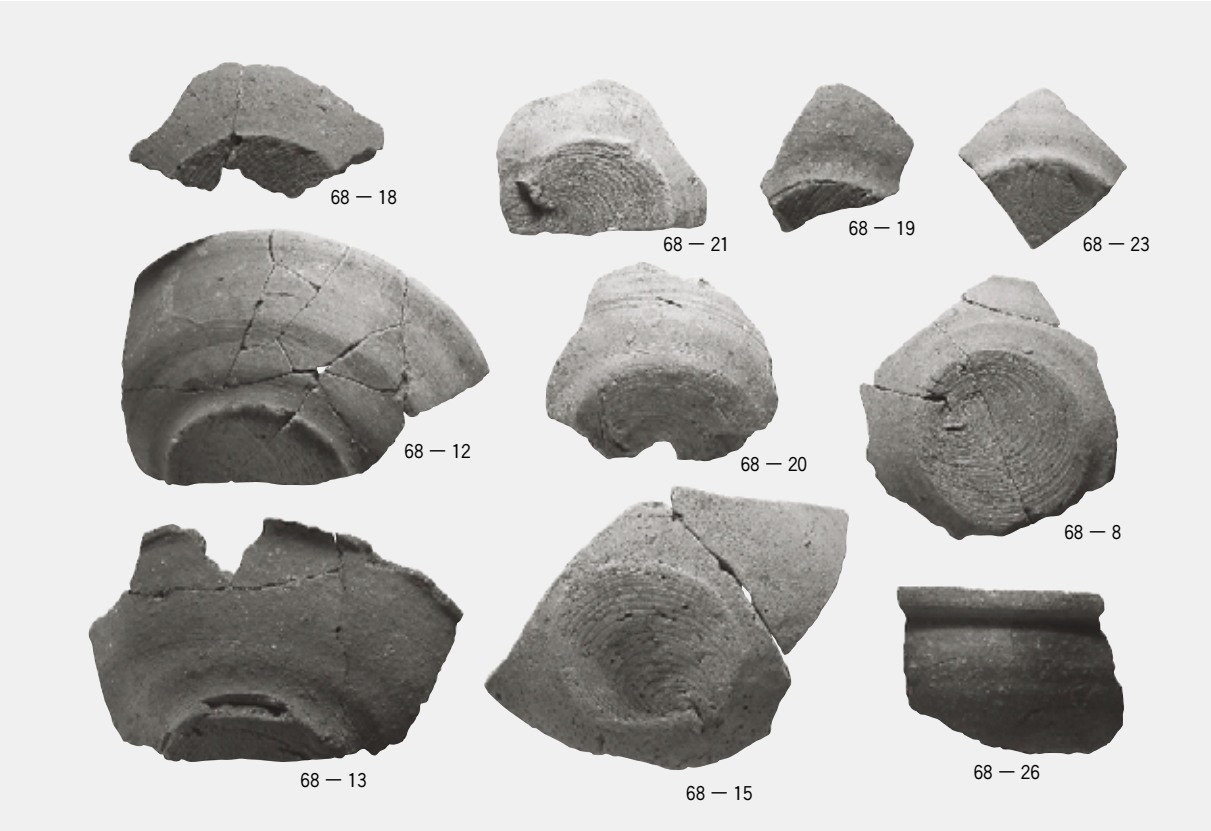


1 — 77　遺構外出土遺物（4）

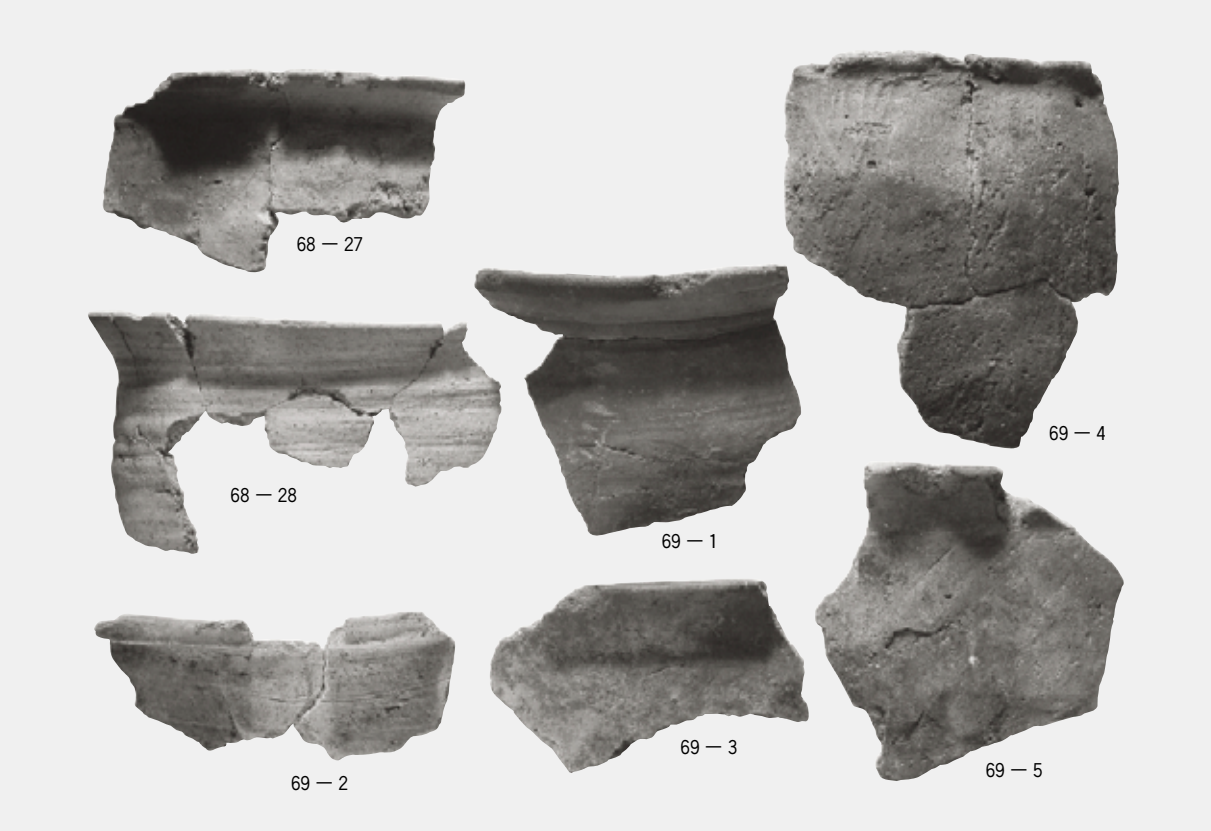


1 — 78　遺構外出土遺物（5）

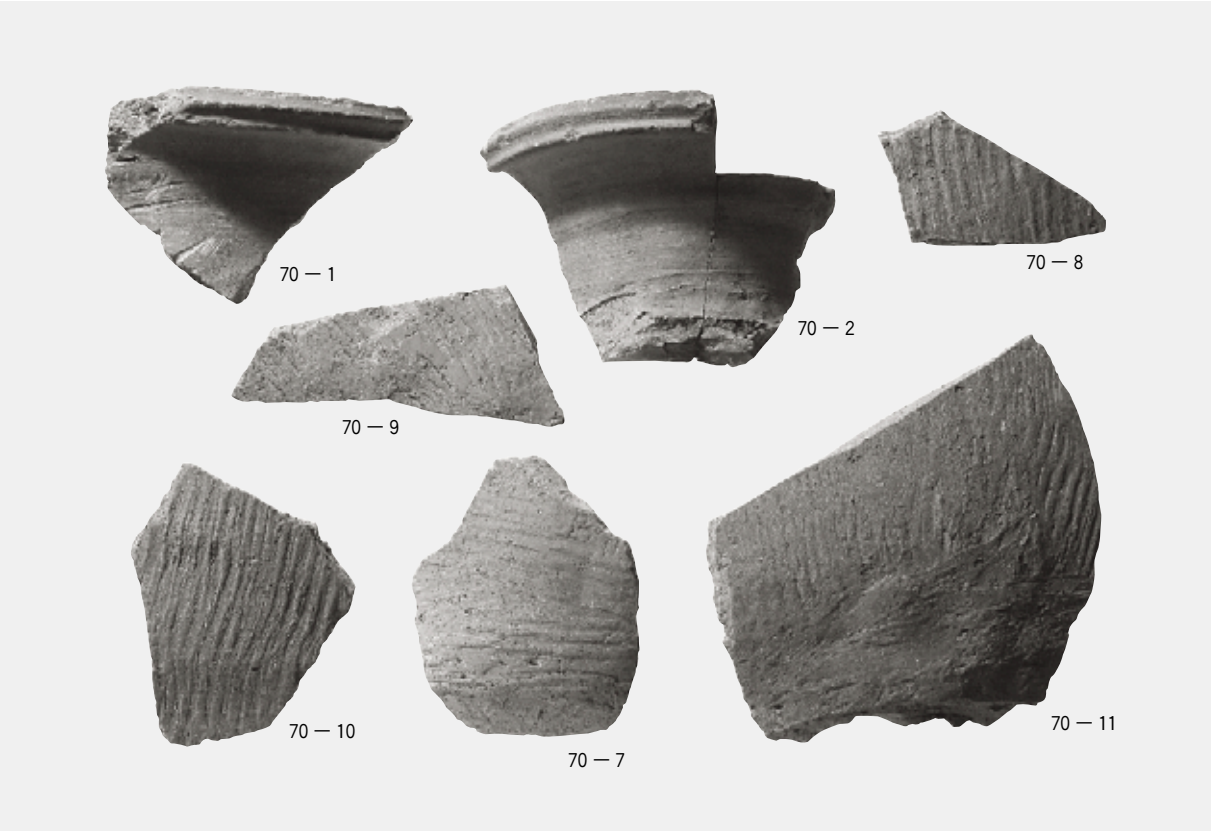
１－79　遺構外出土遺物（６）



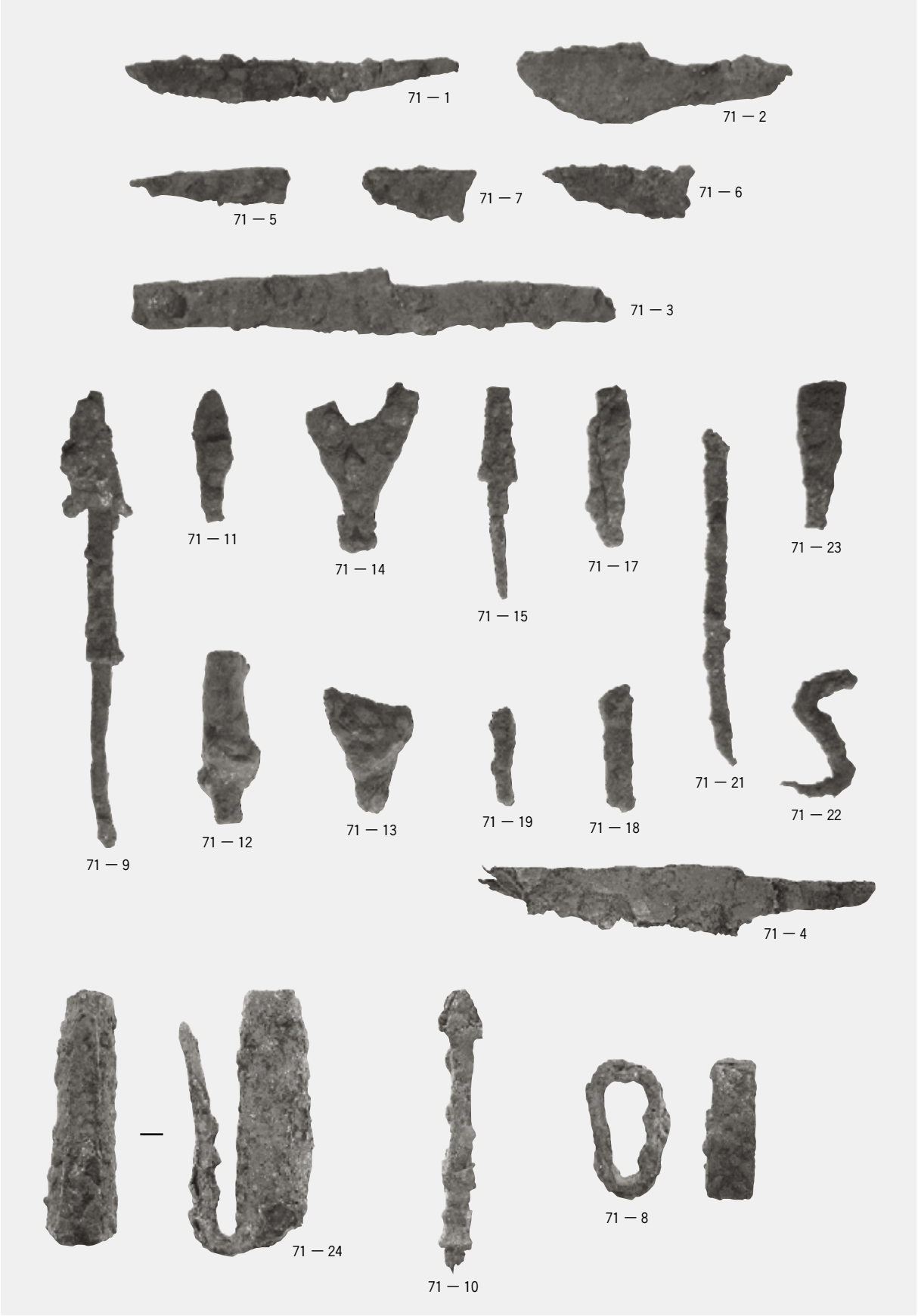
１－80　遺構外出土遺物（７）



1 ― 81　遺構外出土遺物（8）

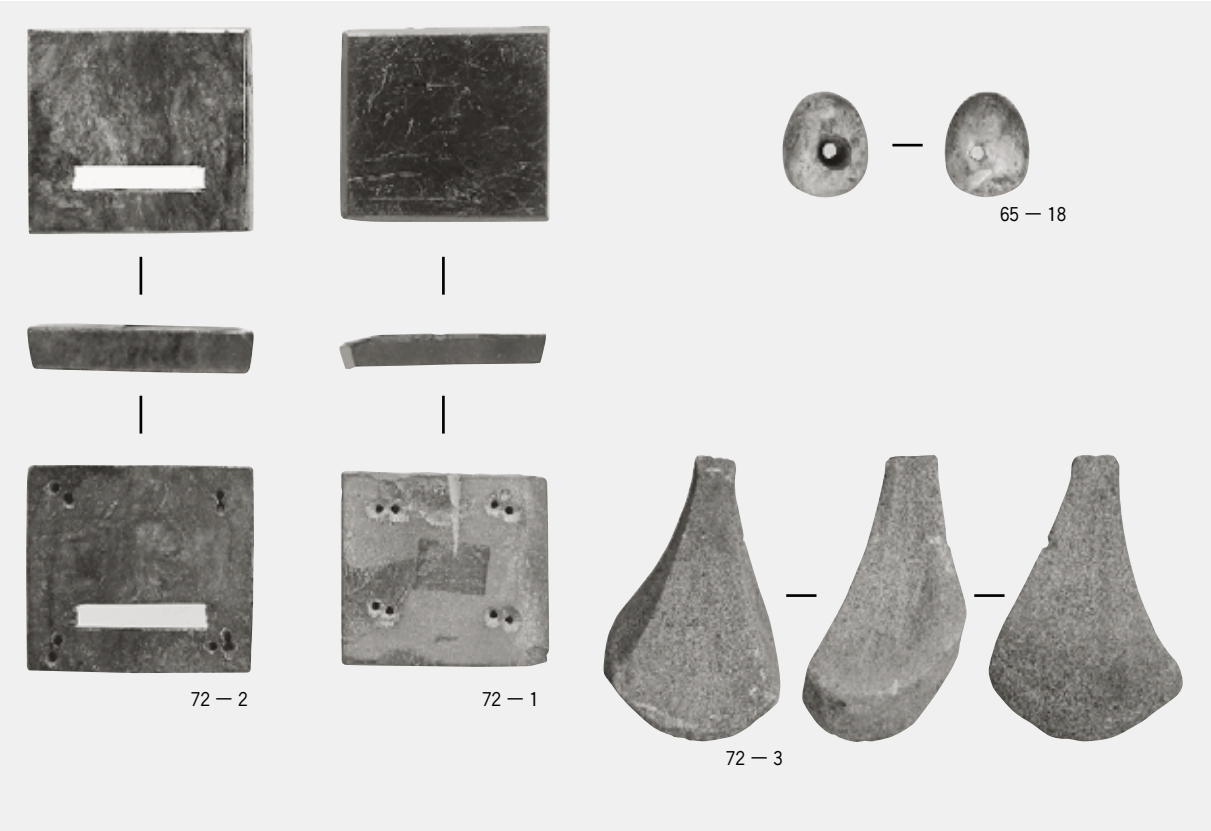


1 ― 82　遺構外出土遺物（9）



１－83　遺構外出土遺物（10）

1 — 84　遺構外出土遺物（11）

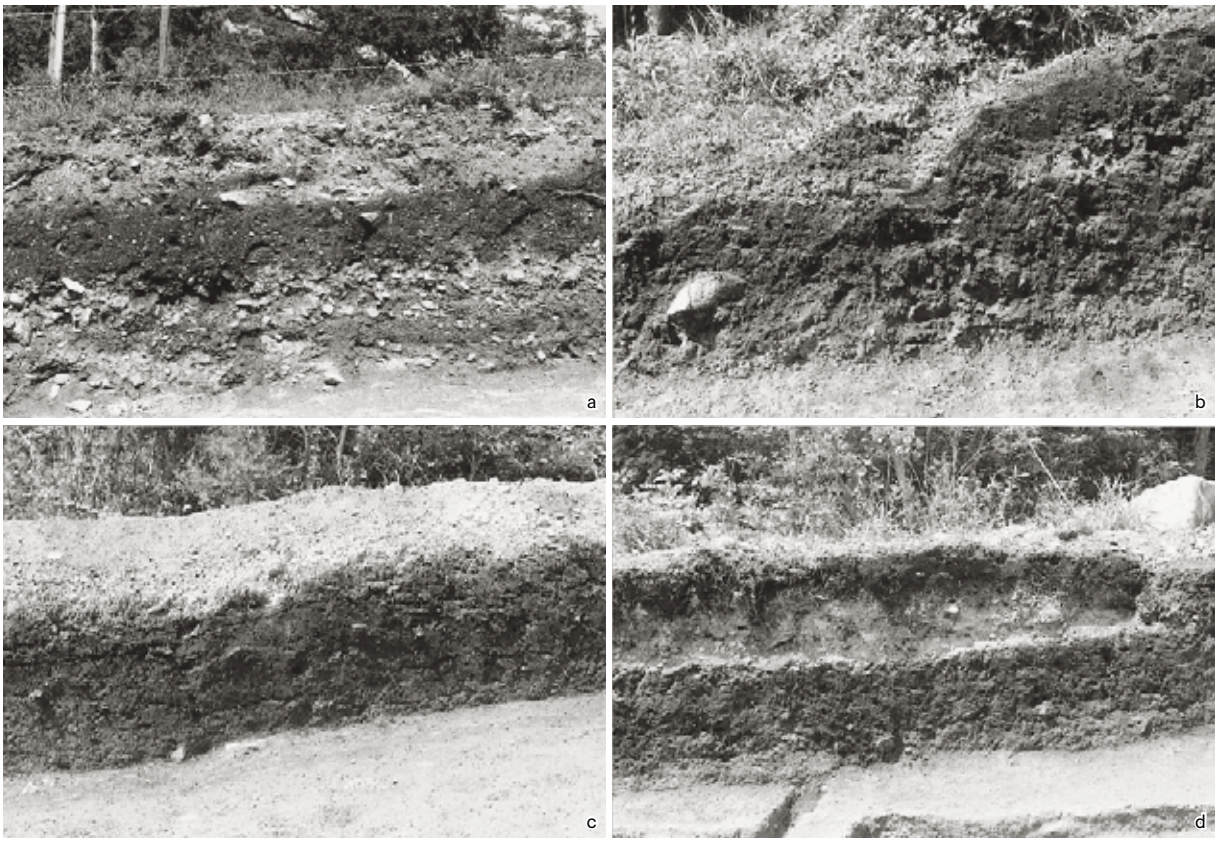


1 — 85　遺構外出土遺物（12）

１－86　調査区全景（２）（北西から）

１－87　西地区全景（南西から）

1－88　西地区遺構集中地点（北東から）



1－89　西地区基本土層

a　A地点　b　B地点
c　E地点　d　F地点

１－90　12号住居跡（南から）

１－91　12号住居跡細部

a　検出状況（東から）　b　土層断面（東から）
c　炉断面（東から）　d　柱穴検出状況（南から）

1－92　13号住居跡（南から）

1－93　13号住居跡細部

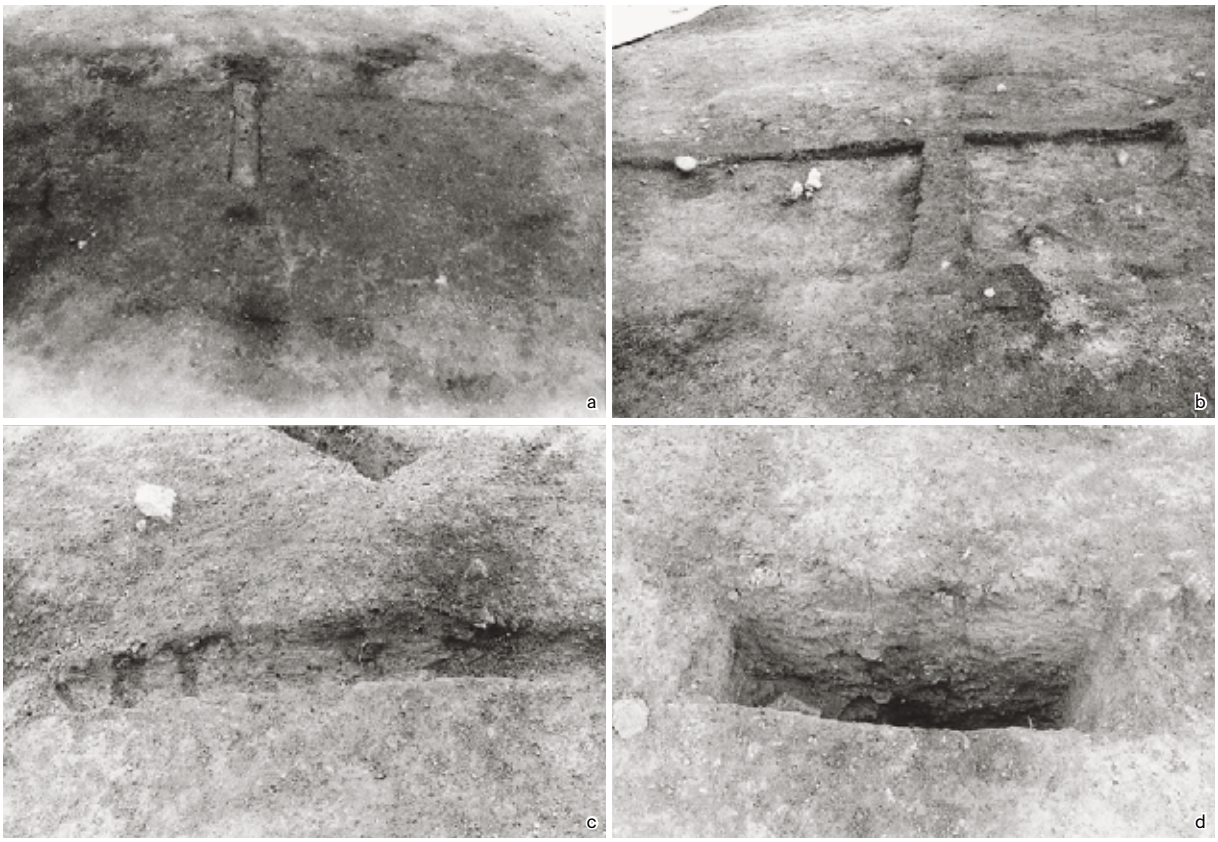
a　土層断面（東から）　b　土層断面（南から）
c　炉検出状況（東から）　d　P10断面（南から）

１－94　14号住居跡（南から）

１－95　14号住居跡細部

a　検出状況（南から）　b　土層断面（東から）
c　土層断面（南東から）　d　炉１断面（北東から）

1－96　15号住居跡（南から）



1－97　15号住居跡細部

a　検出状況（南から）　b　住居内堆積土（北から）
c　炉断面（東から）　d　Ｐ２断面（西から）

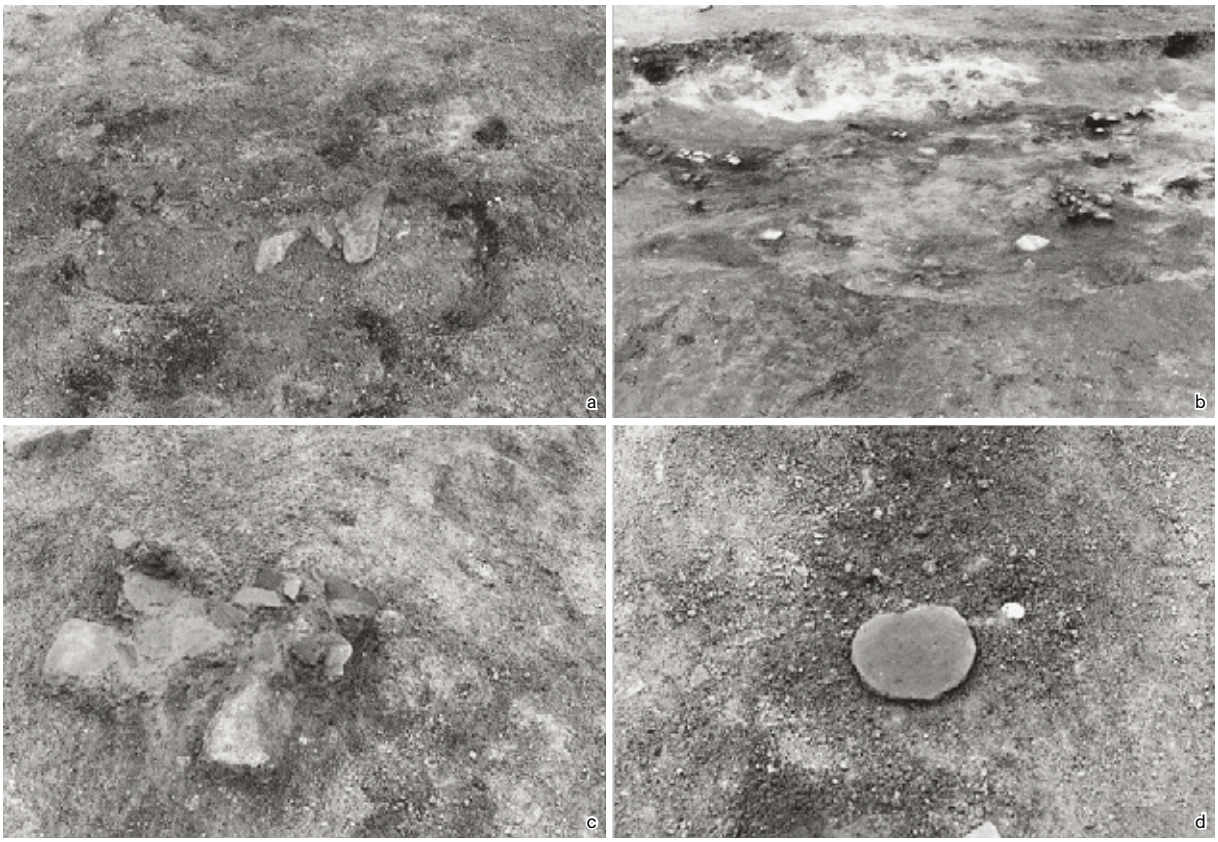
１－98　16号住居跡（南から）

１－99　16号住居跡細部（１）

a　調査状況（南から）　b　土層断面（北東から）
c　土層断面（南から）　d　土層断面（南東から）

1－100　16号住居跡細部（2）

a　柱穴検出状況（南から）　b　全景（南から）　c　P 6 断面（東から）



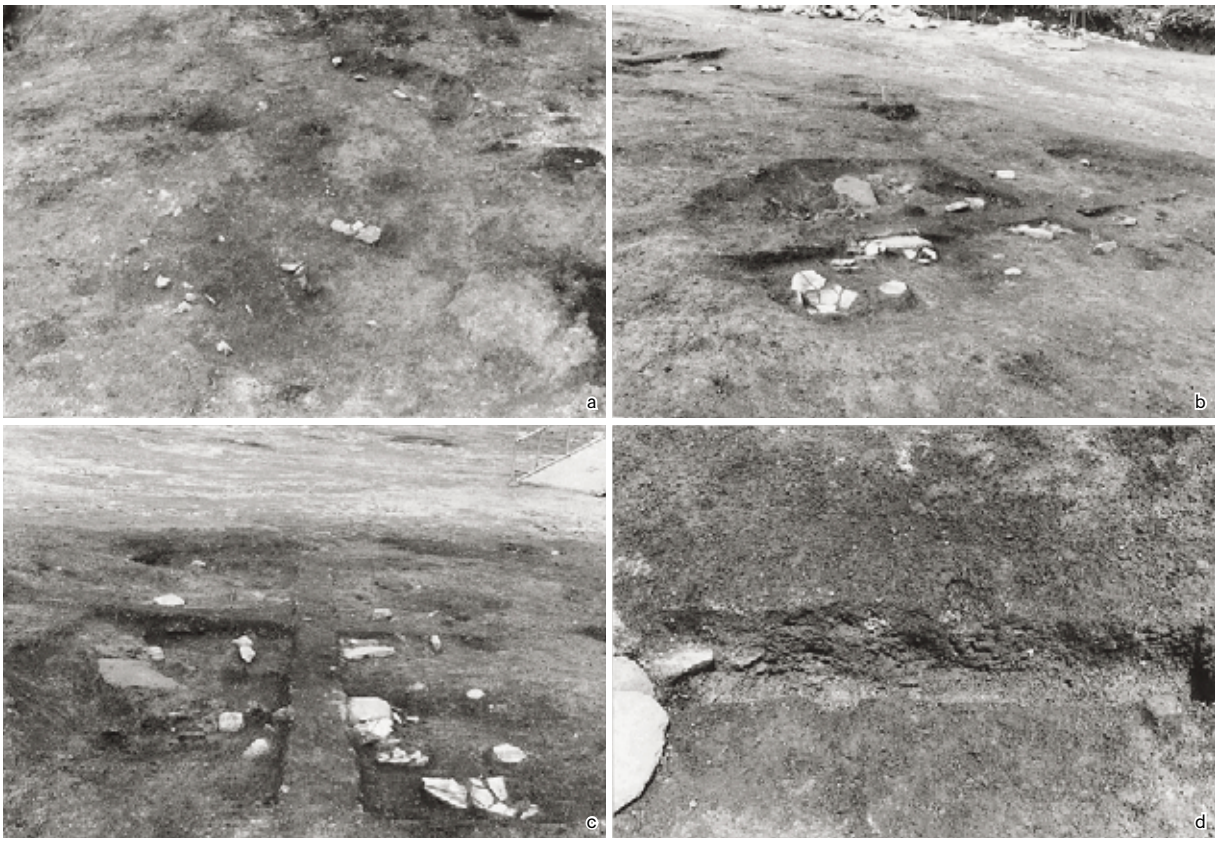
1－101　16号住居跡細部（3）

a　炉 1 断面（西から）　b　遺物出土状況（西から）
c　図85－ 5 出土状況（南から）　d　図89－11出土状況（南から）

１－102　21号住居跡（南から）

１－103　22号住居跡（南から）

1 ― 104　23号住居跡（南から）



1 ― 105　23号住居跡細部

a　検出状況（南から）　b　土層断面（西から）
c　遺物出土状況（南西から）　d　炉断面（南から）

１－106　24号住居跡（南から）

１－107　25号住居跡（南から）

1 ― 108　27号住居跡（南から）

1 ― 109　27号住居跡細部

a　検出状況（南から）　b　土層断面（西から）
c　炉断面（東から）　d　図100－１出土状況（南西から）

１－110　28・45号住居跡全景（南から）

１－111　29号住居跡（東から）

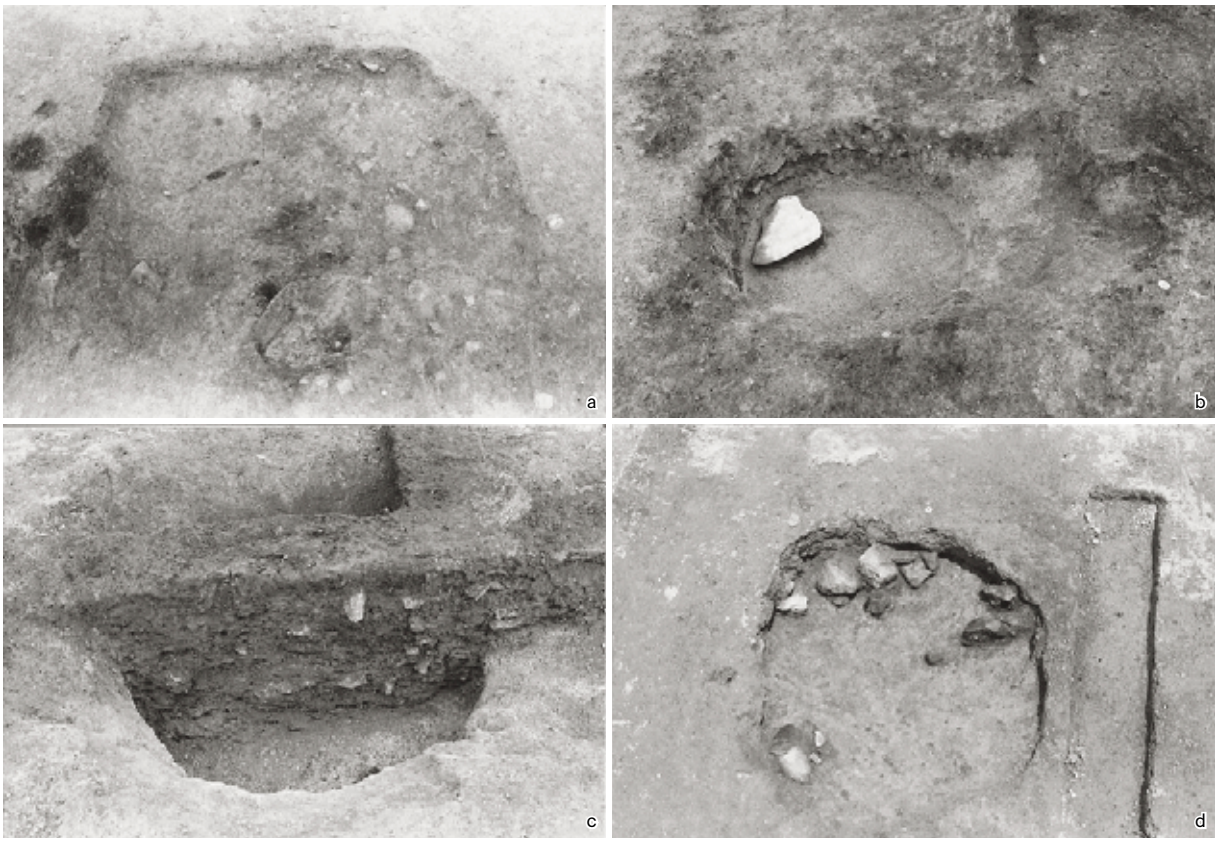
1－112　30号住居跡（南から）

1－113　30号住居跡細部

a　検出状況（南から）　b　土層断面（南東から）
c　土層断面（南から）　d　炉断面（南から）

１－114　44号住居跡（北から）

１－115　46号住居跡（南から）

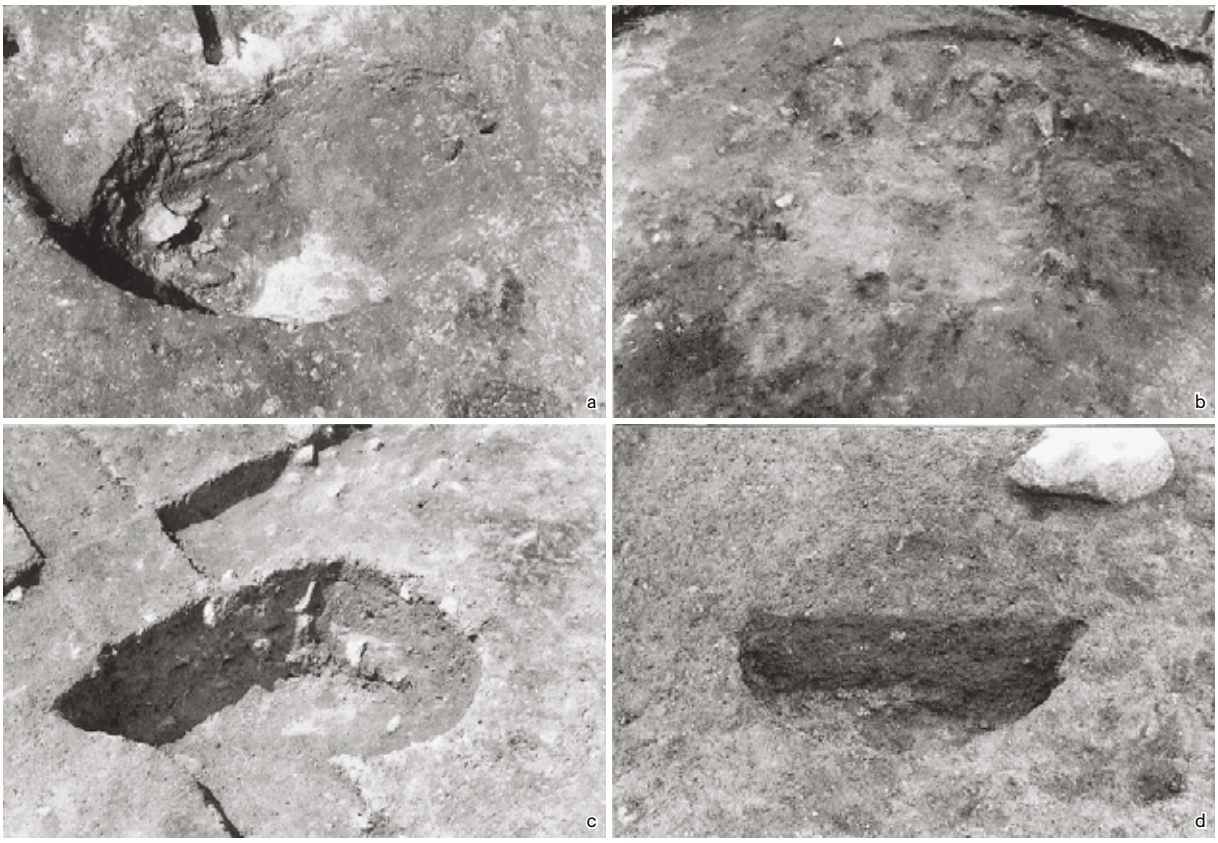


1－116　13～15・17号土坑

a　13号土坑（南から）　b　14・17号土坑（北から）
c　14号土坑断面（北から）　d　15号土坑（南から）

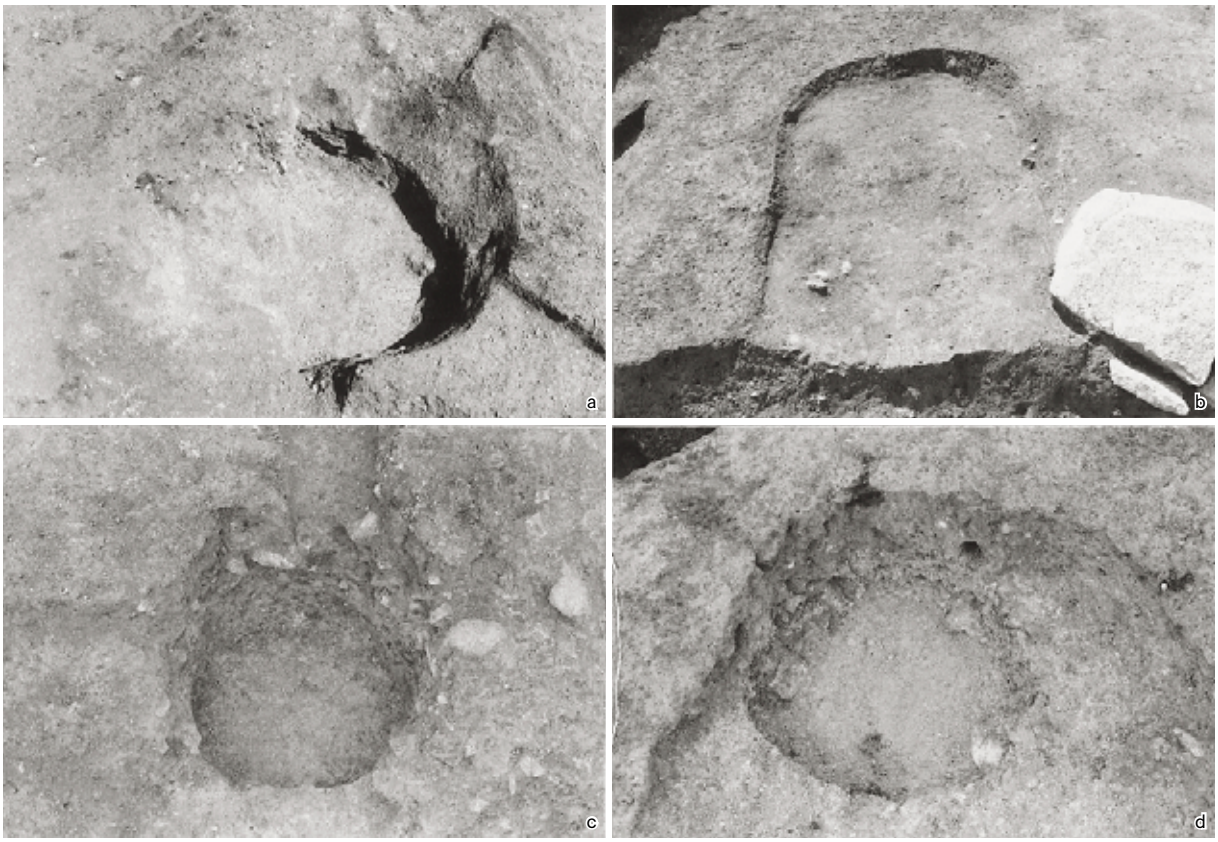
1－117　16・18～20号土坑

a　16号土坑（南から）　b　18号土坑（南から）
c　19号土坑（東から）　d　20号土坑（東から）



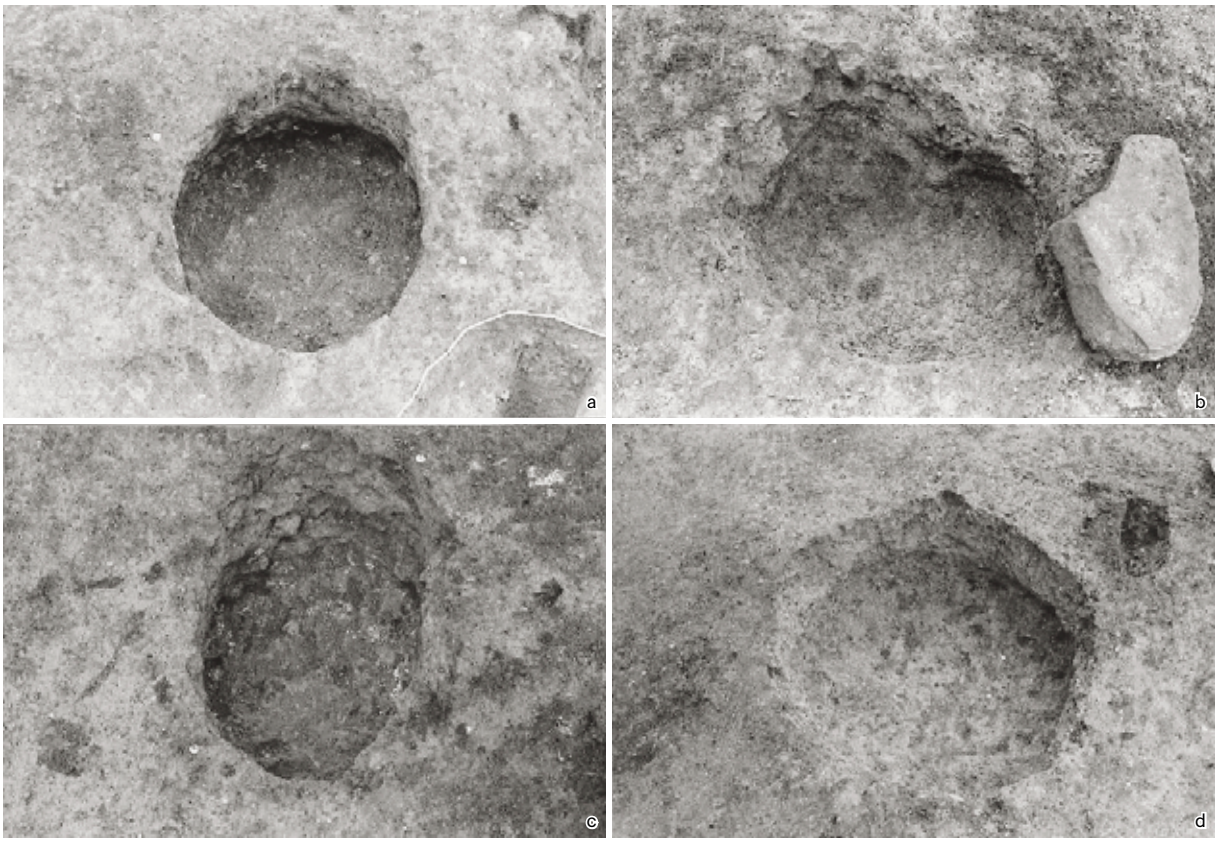
1－118　21～24号土坑

a　21号土坑（南から）　b　22号土坑（東から）
c　23号土坑（東から）　d　24号土坑断面（南から）



1－119　25・26・51・53号土坑

a　25号土坑（南から）　b　26号土坑（東から）
c　51号土坑（南東から）　d　53号土坑断面（南から）

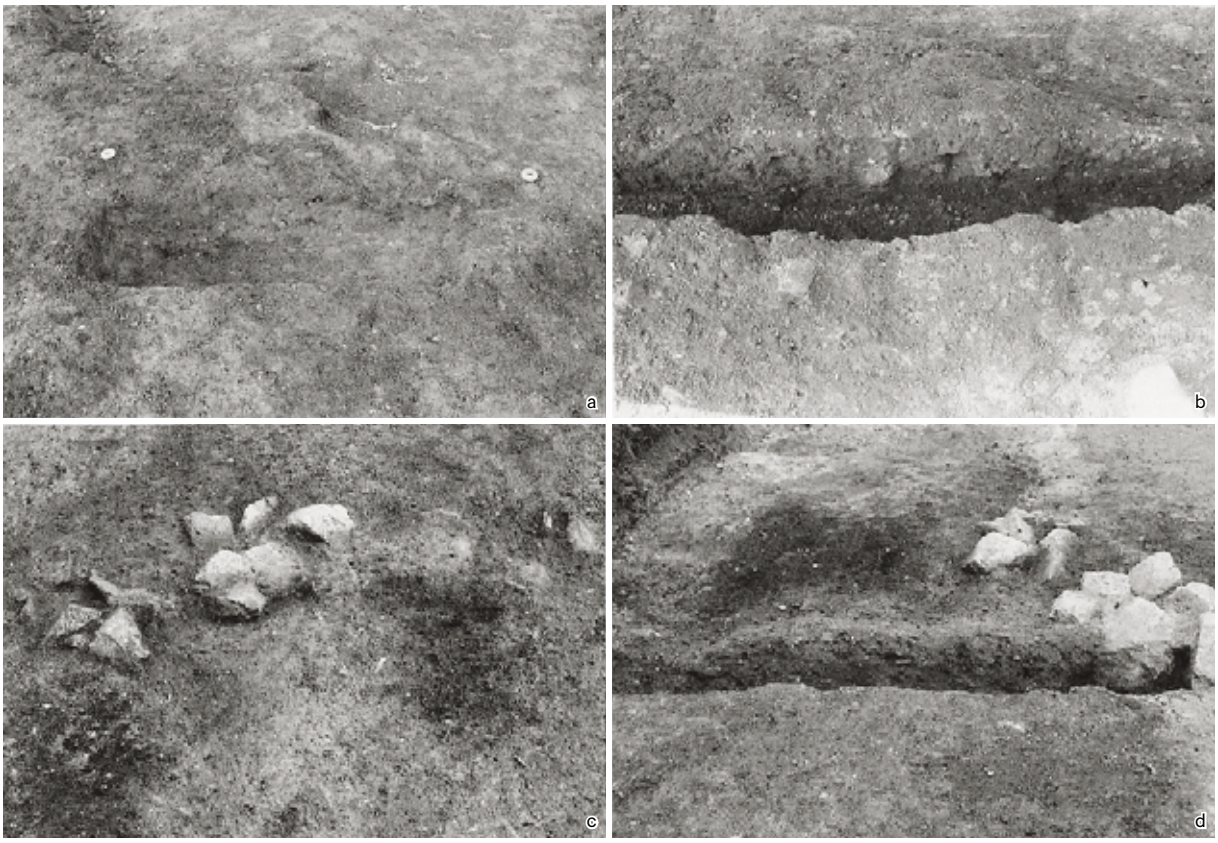


1－120　54・56・60・61号土坑

a　54号土坑（南から）　b　56号土坑（南東から）
c　60号土坑（南から）　d　61号土坑（南から）

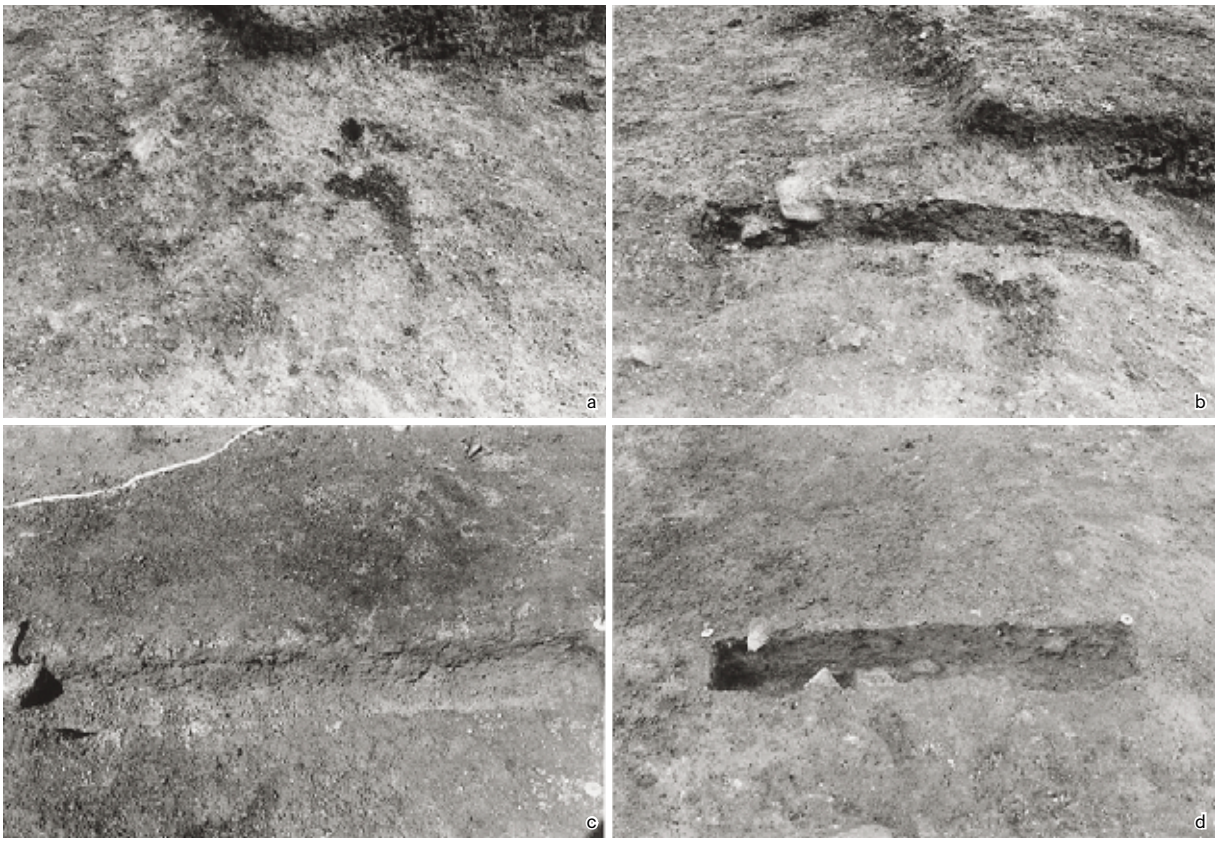
1－121　1～4号焼土遺構

a　1号焼土遺構（東から）　b　2号焼土遺構断面（南東から）
c　3号焼土遺構（北から）　d　4号焼土遺構断面（南から）



1－122　5～7号焼土遺構

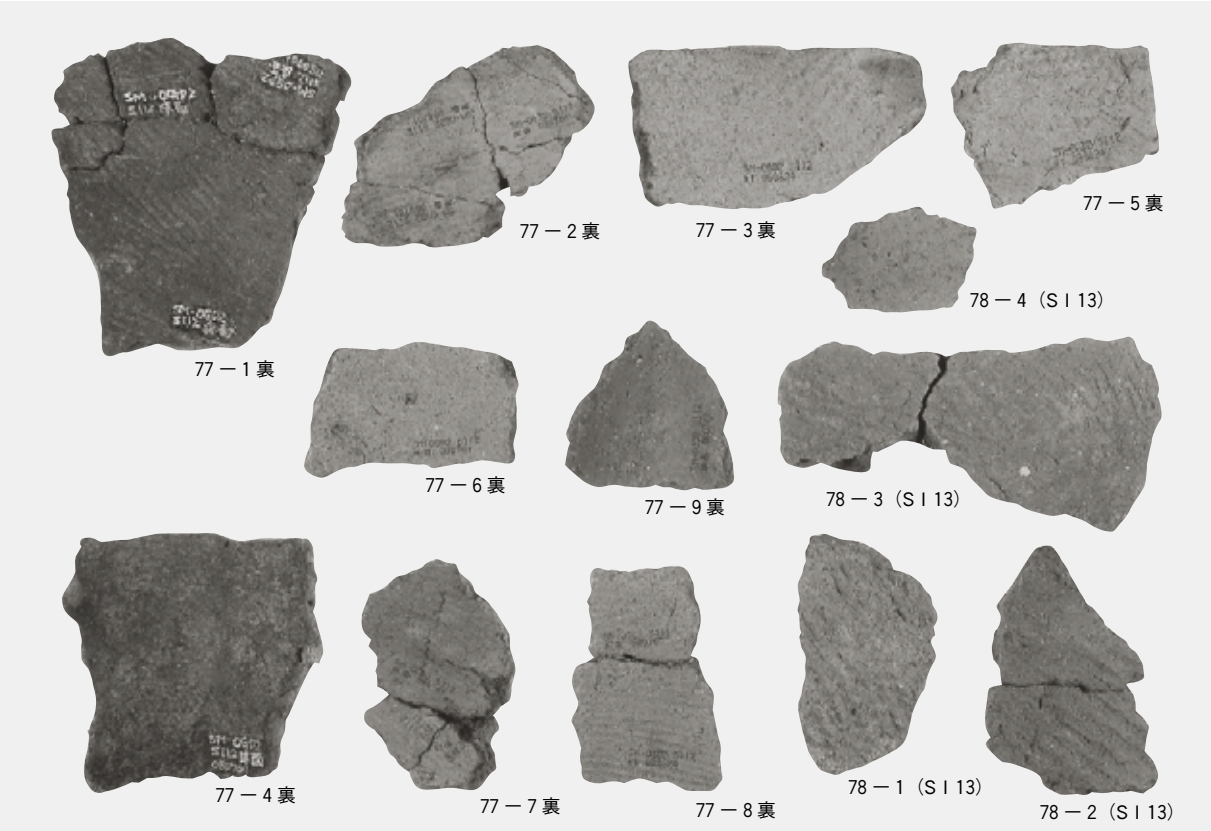
a　5号焼土遺構断面（東から）　b　6号焼土遺構断面（東から）
c　7号焼土遺構（西から）　d　7号焼土遺構断面（南東から）



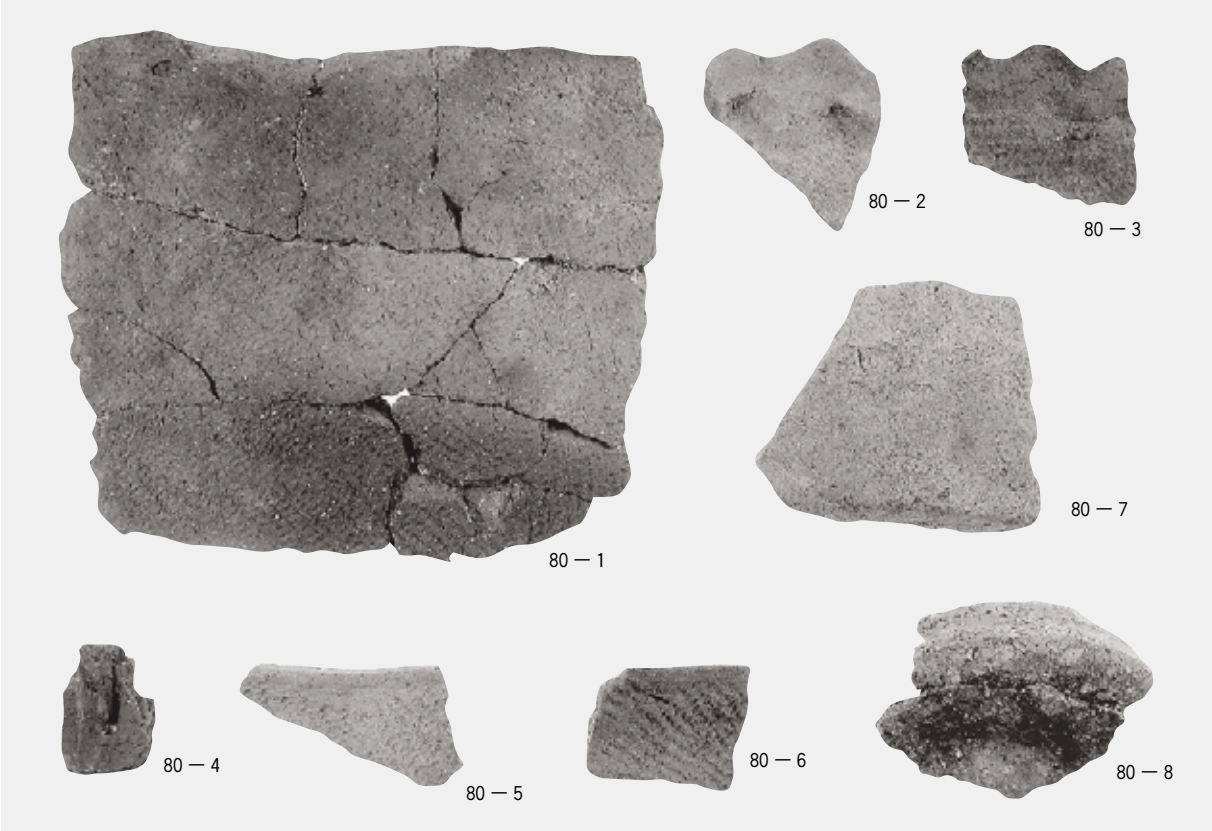
1－123　8～10号焼土遺構

a　8号焼土遺構（西から）　b　8号焼土遺構断面（南西から）
c　9号焼土遺構断面（東から）　d　10号焼土遺構断面（南から）

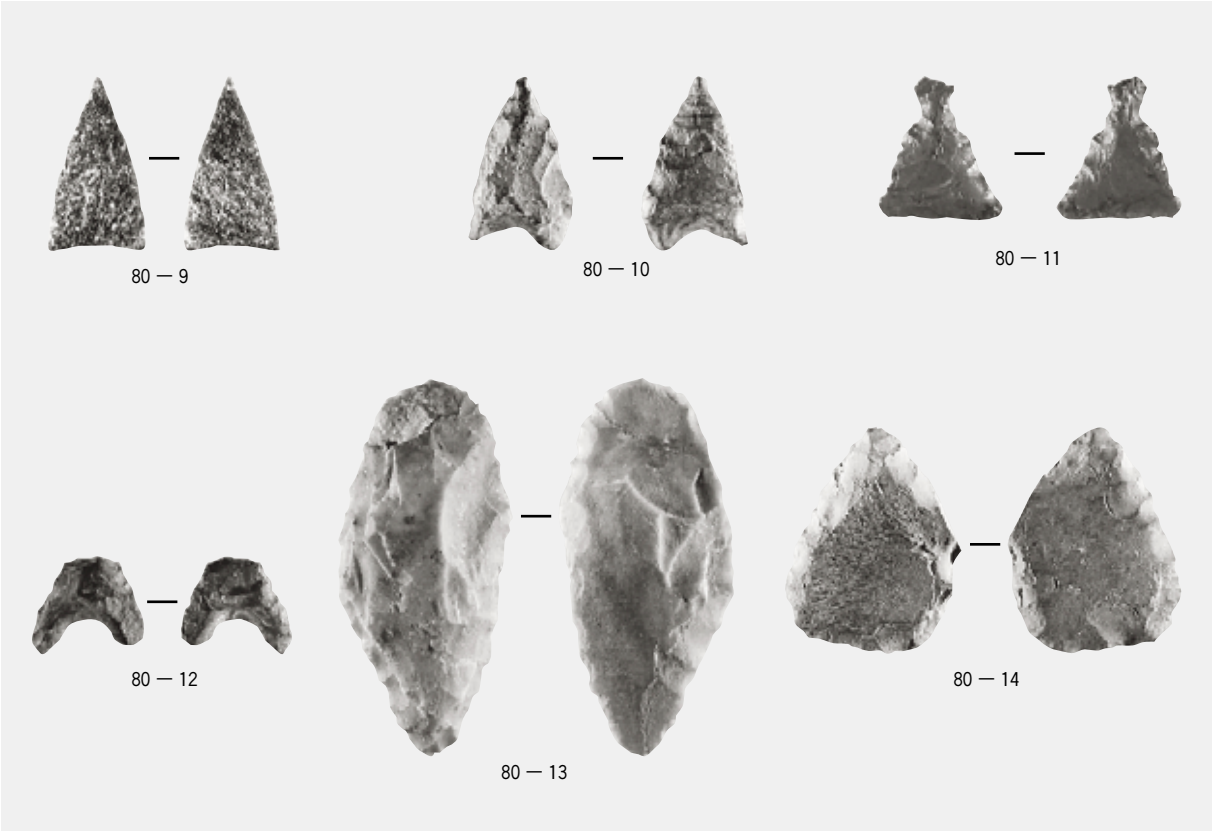
1－124　12号住居跡出土遺物



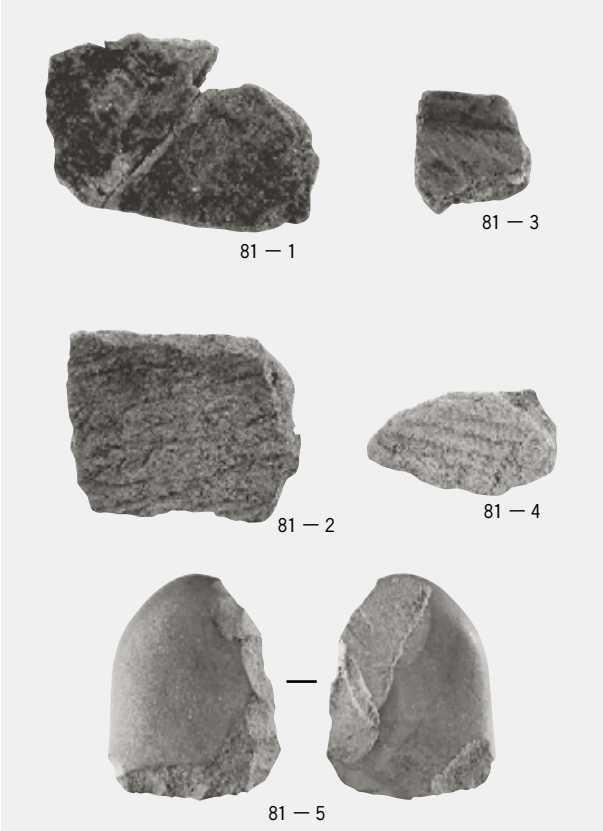
1－125　12・13号住居跡出土遺物



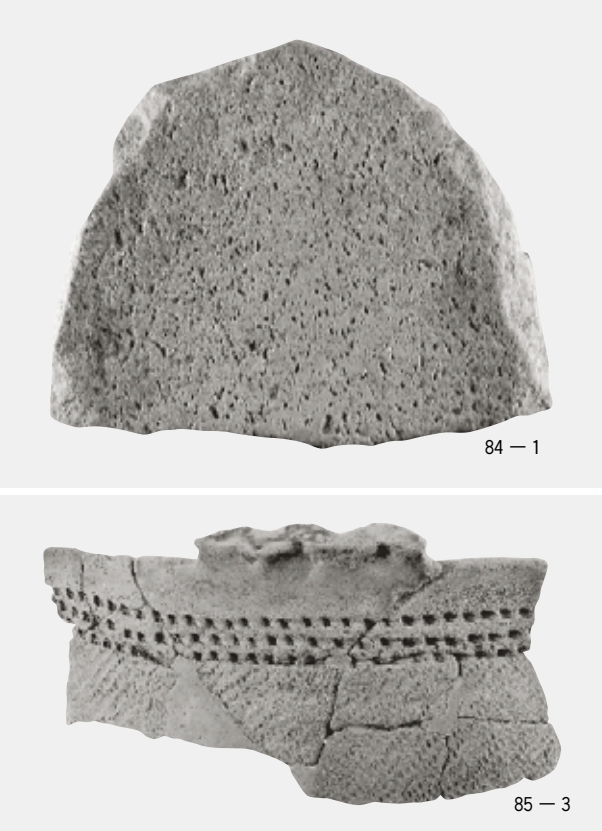
１－126　14号住居跡出土遺物（１）



１－127　14号住居跡出土遺物（２）



1 ― 128　15号住居跡出土遺物



1 ― 129　16号住居跡出土遺物（1）

1 ― 130　16号住居跡出土遺物（2）

85－5

85－6

86－2

85－4

86－3

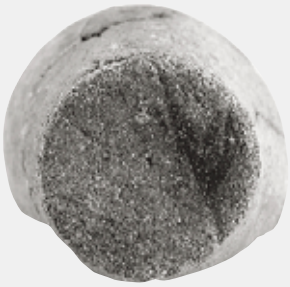
87－5

86－4

１－131　16号住居跡出土遺物（３）

86 ― 5

86 ― 6



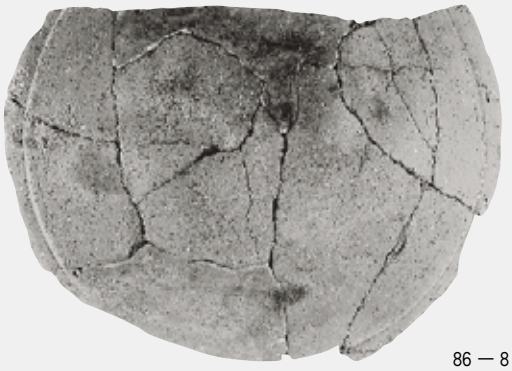
86 ― 6 底

87 ― 3

86 ― 8

86 ― 9

86 ― 8

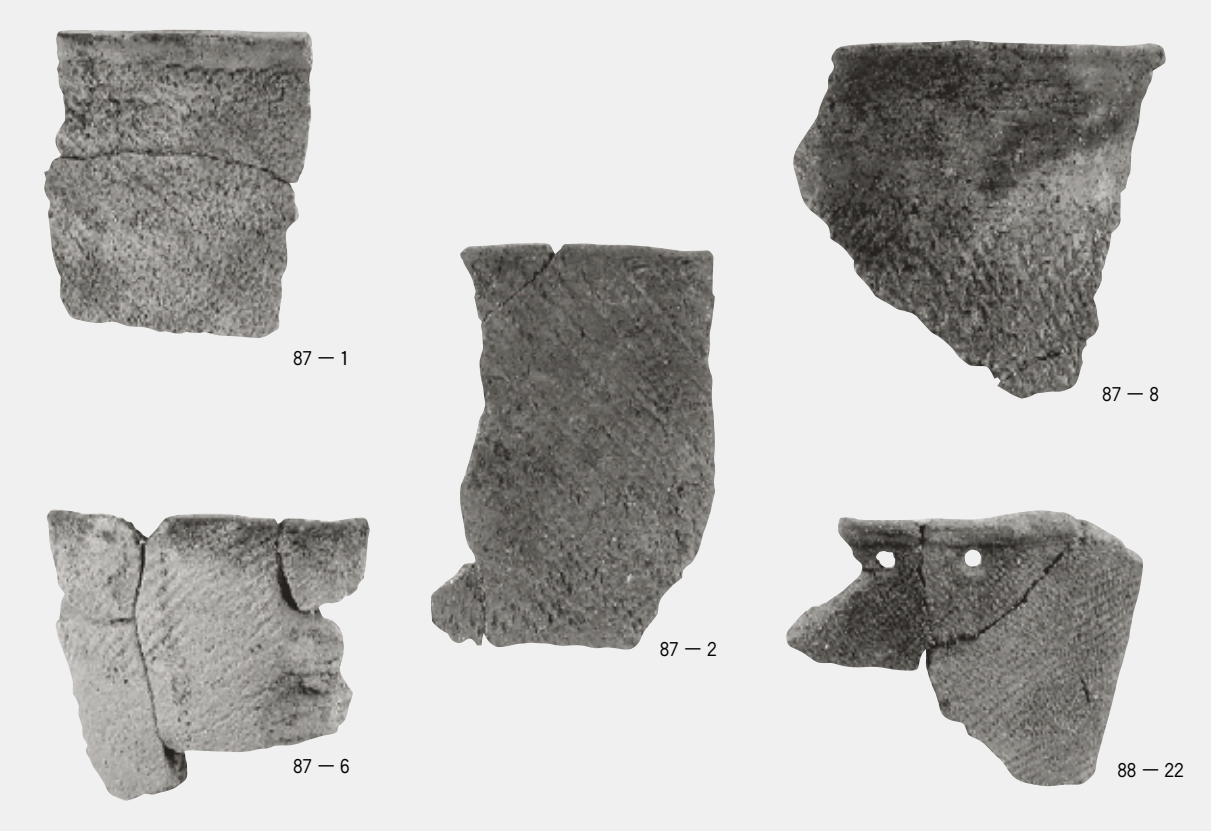


86 ― 8 底

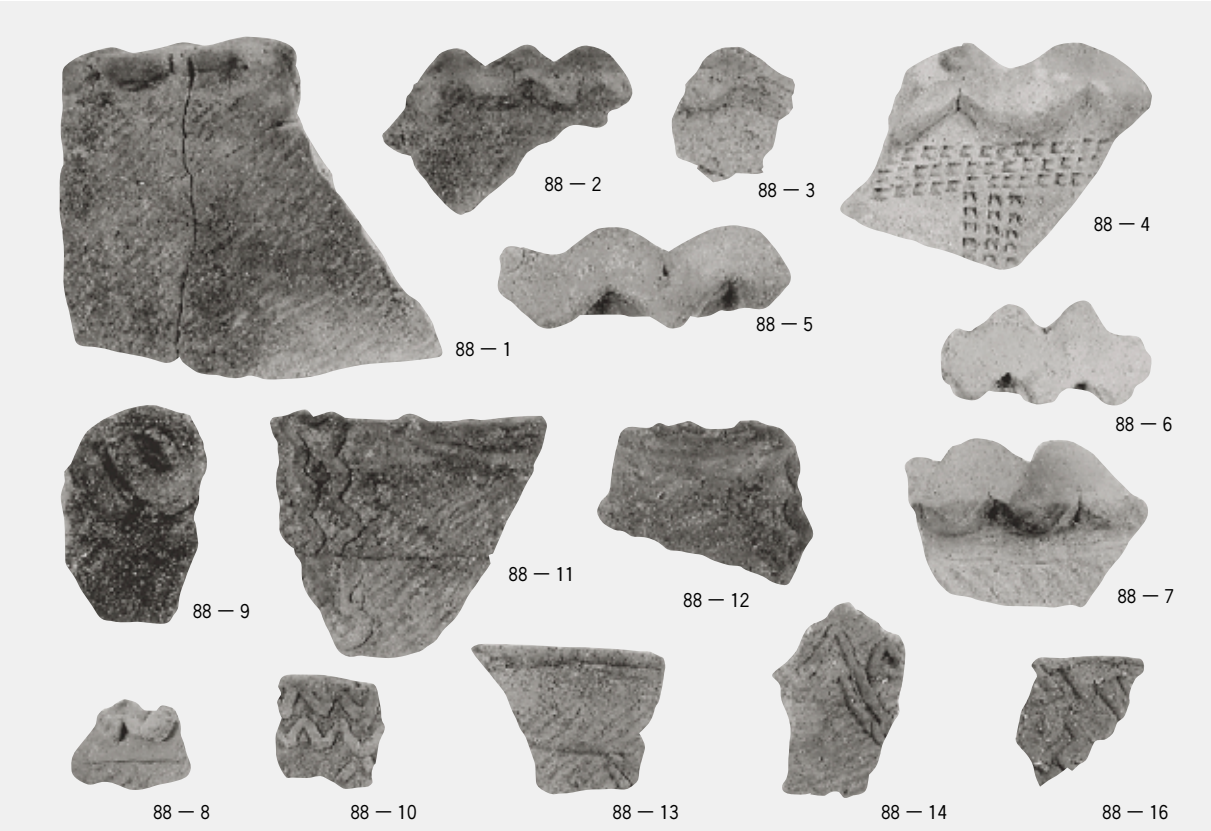
87 ― 7

87 ― 4

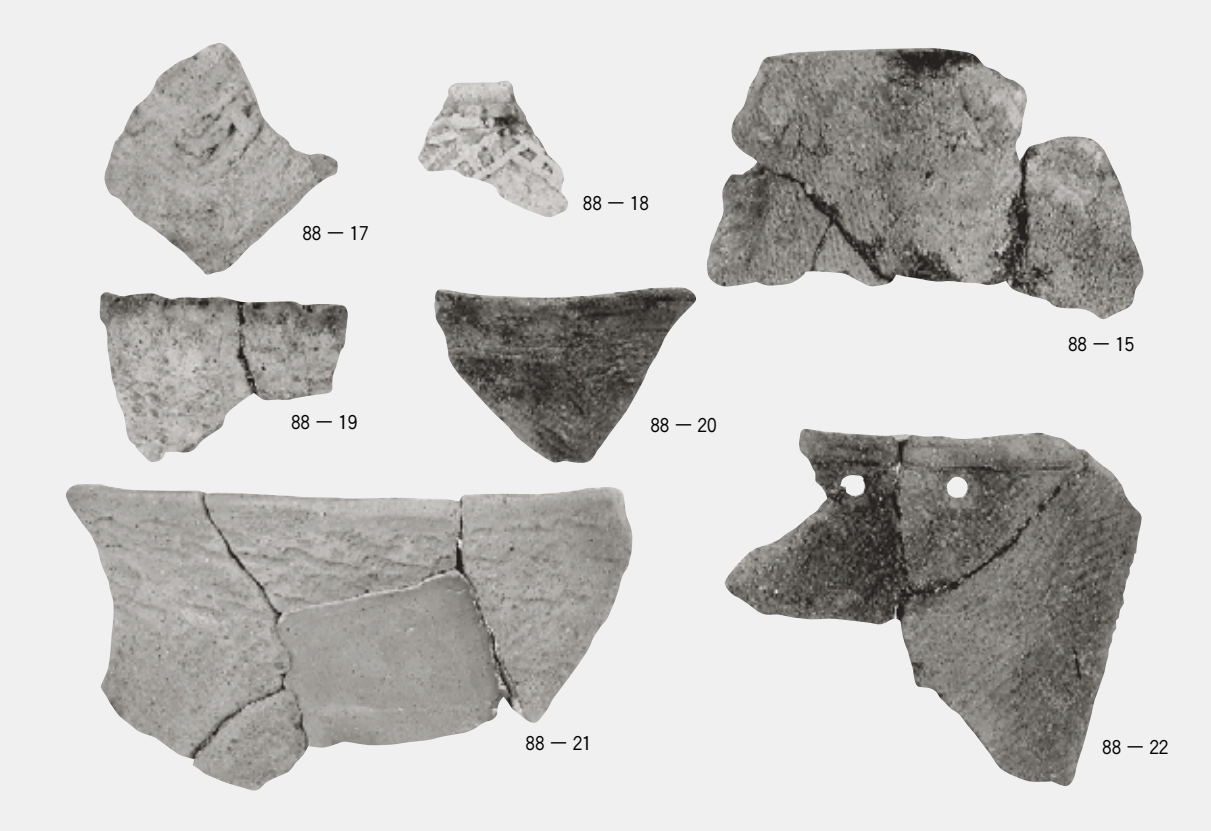
1 ― 132　16号住居跡出土遺物（4）



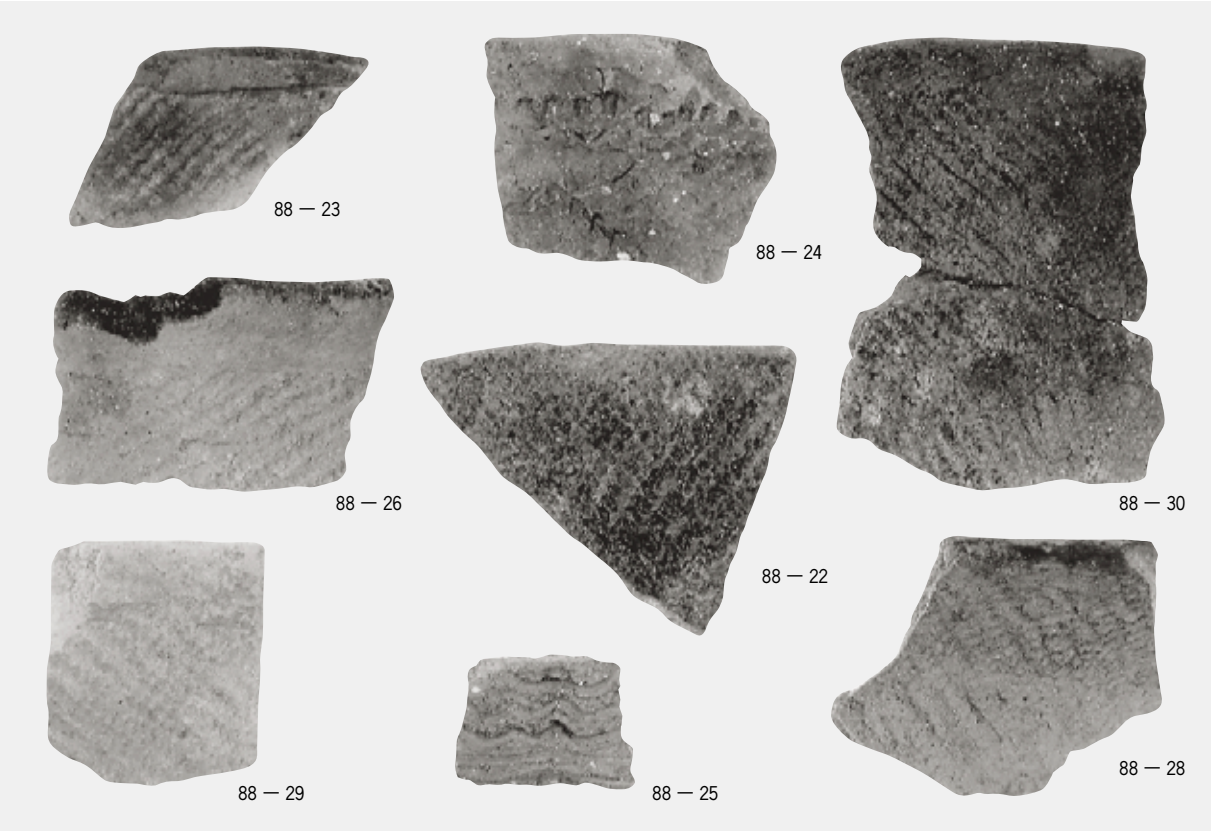
１－133　16号住居跡出土遺物（５）



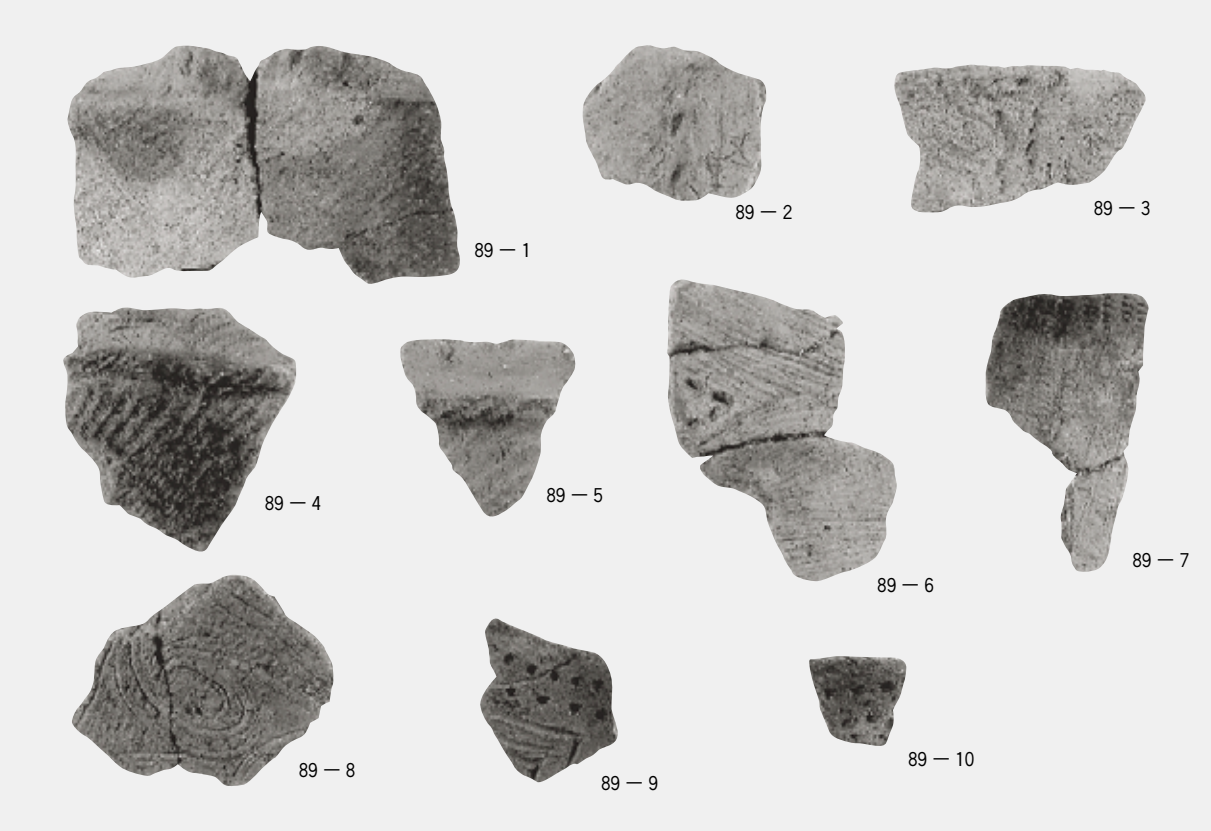
１－134　16号住居跡出土遺物（６）



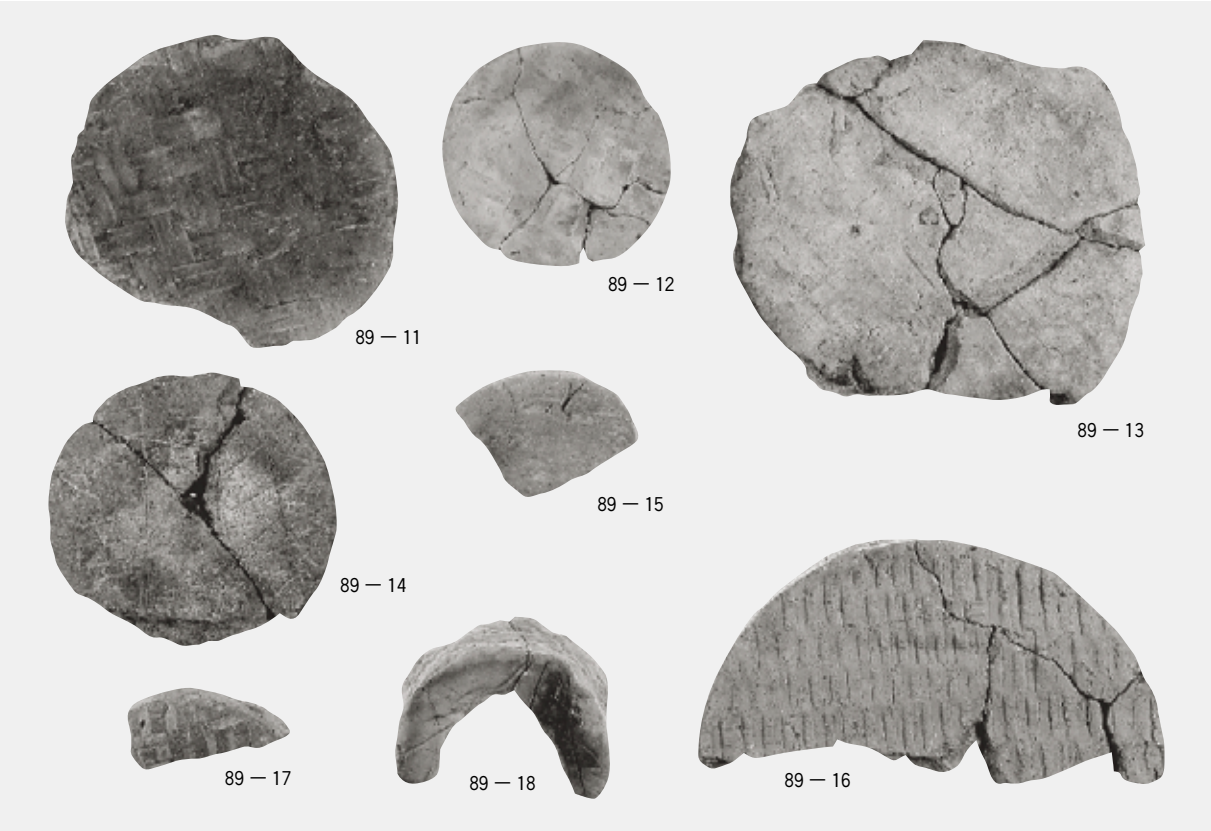
1 — 135　16号住居跡出土遺物（7）



1 — 136　16号住居跡出土遺物（8）

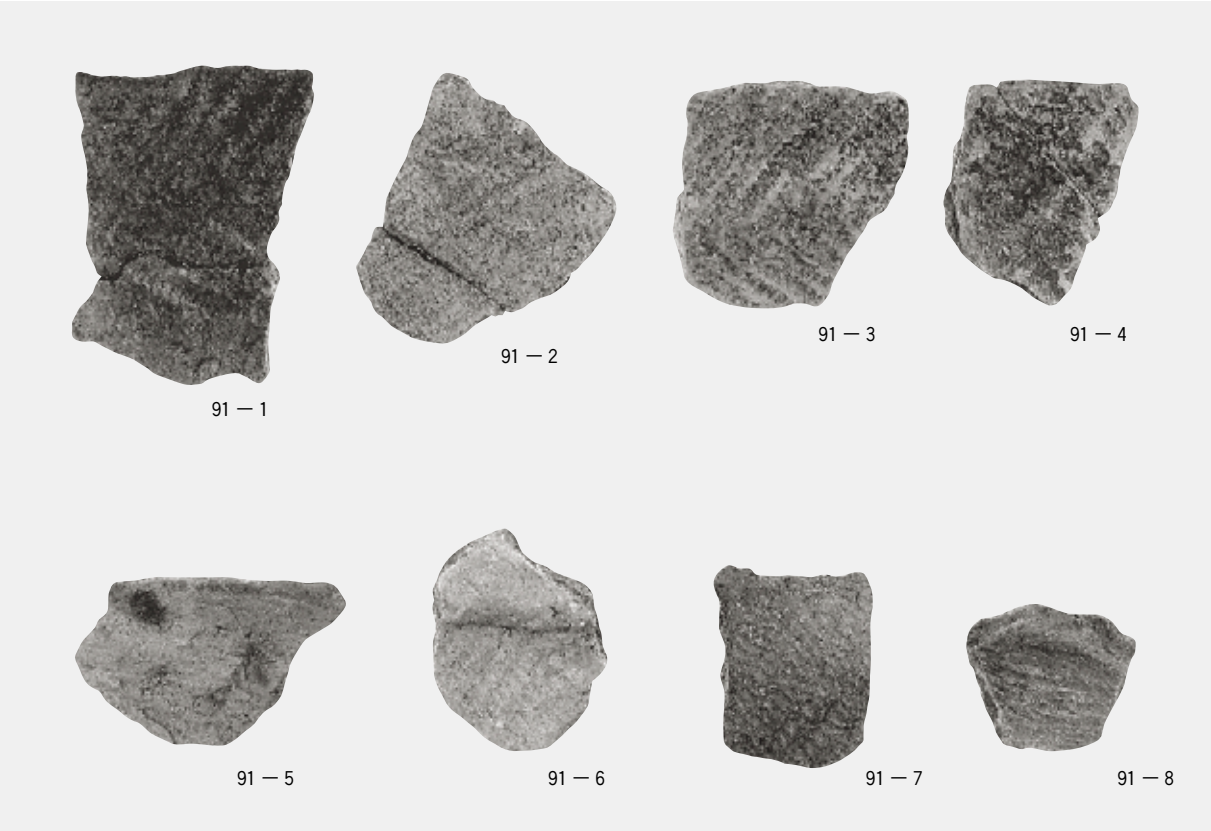


１－137　16号住居跡出土遺物（９）

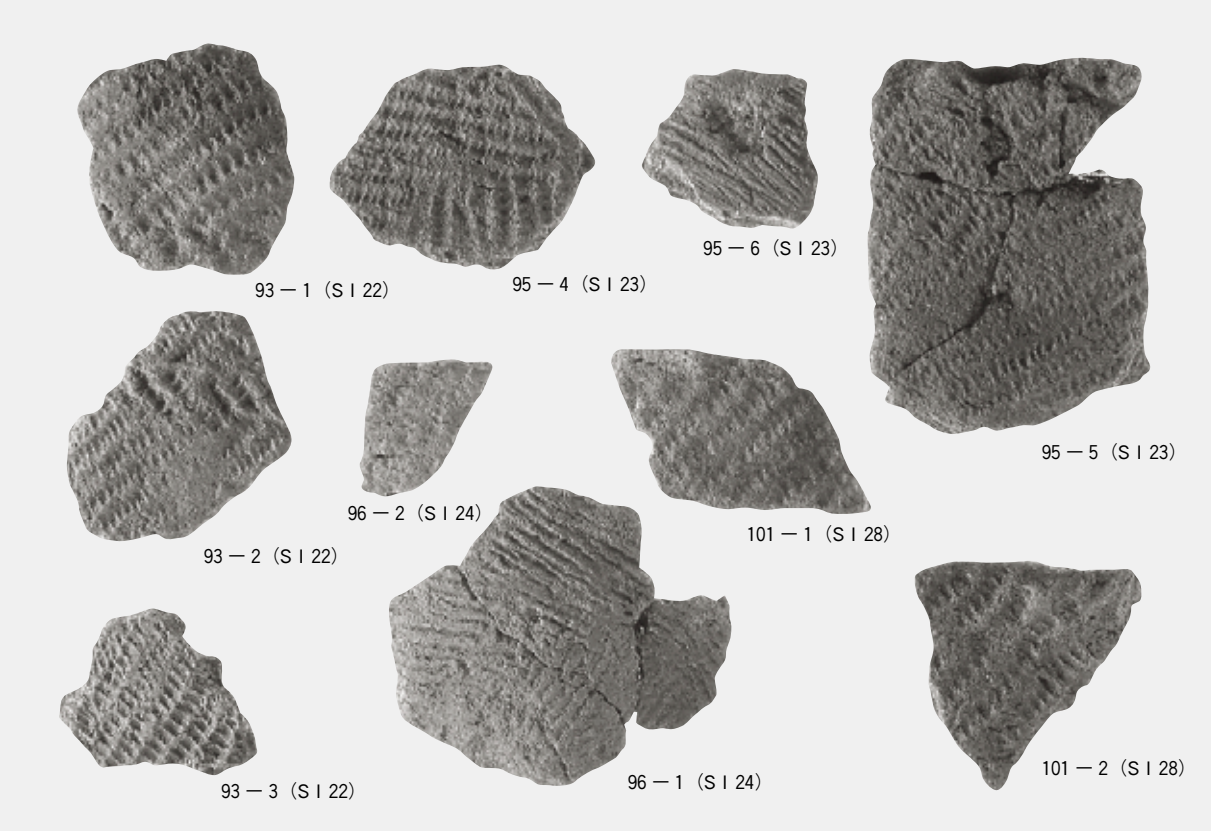


１－138　16号住居跡出土遺物（10）

1 — 139　16号住居跡出土遺物（11）

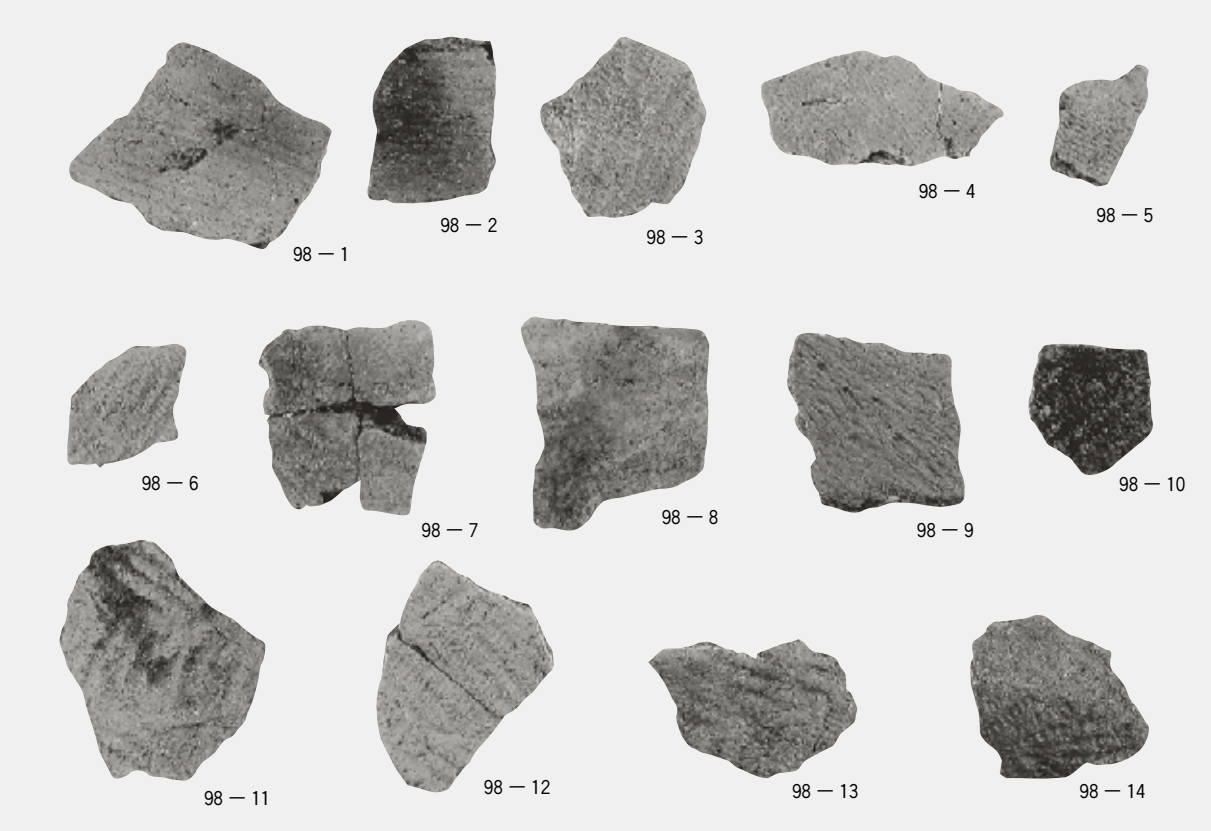


1 — 140　21号住居跡出土遺物



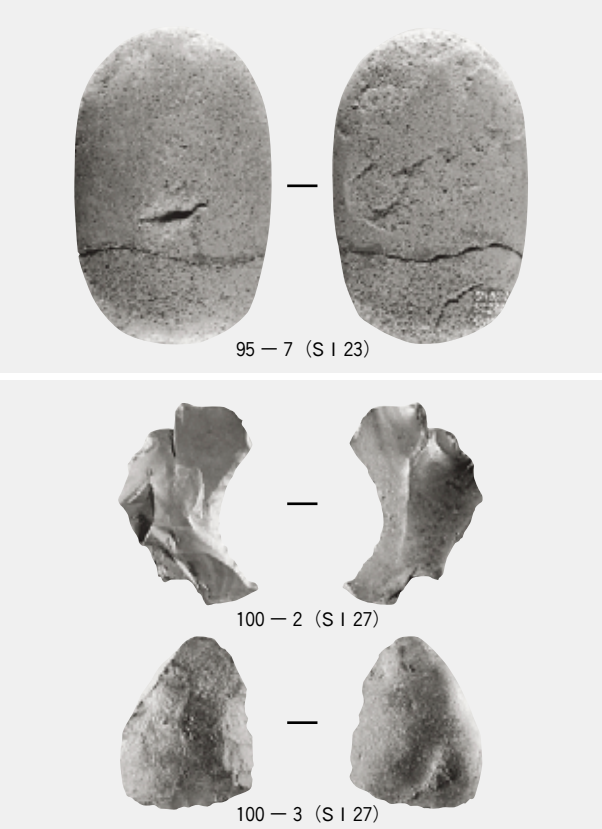
１－141　22～24・28号住居跡出土遺物

１－142　23号住居跡出土遺物

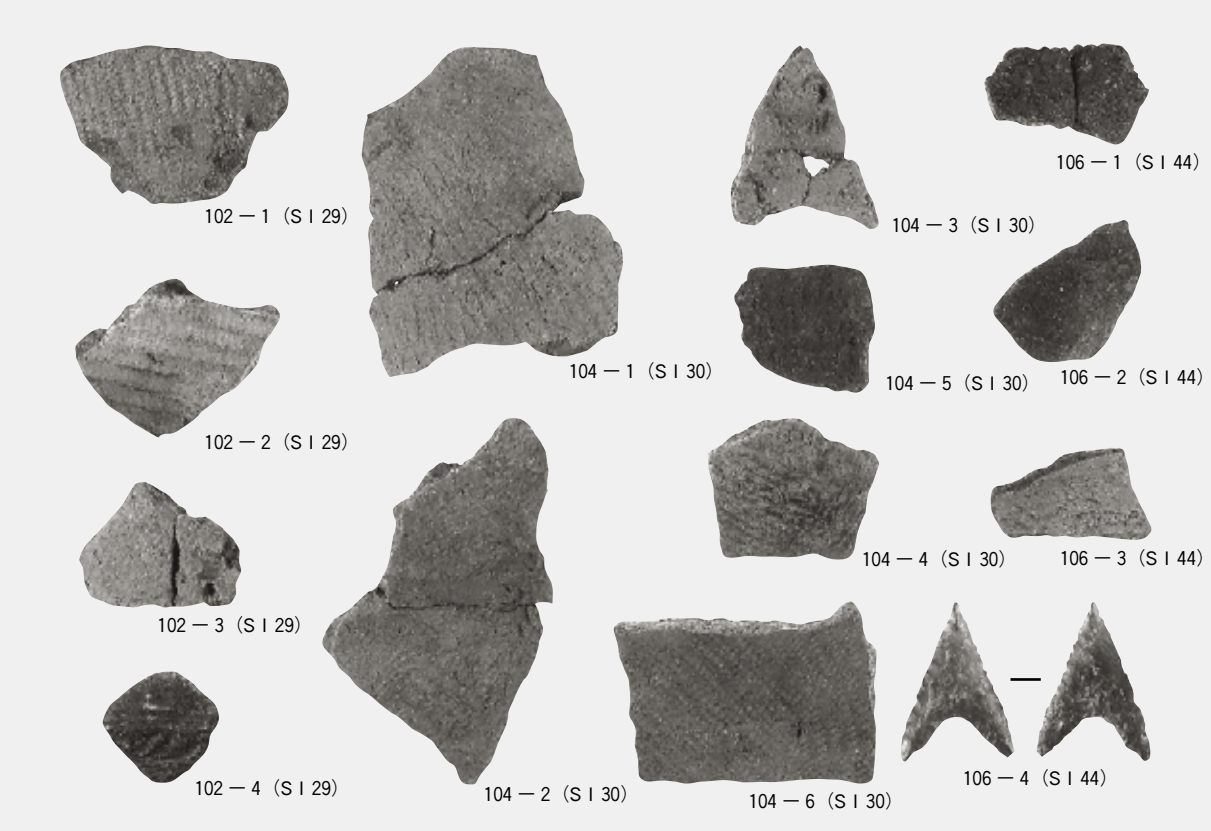


1 — 143　25号住居跡出土遺物

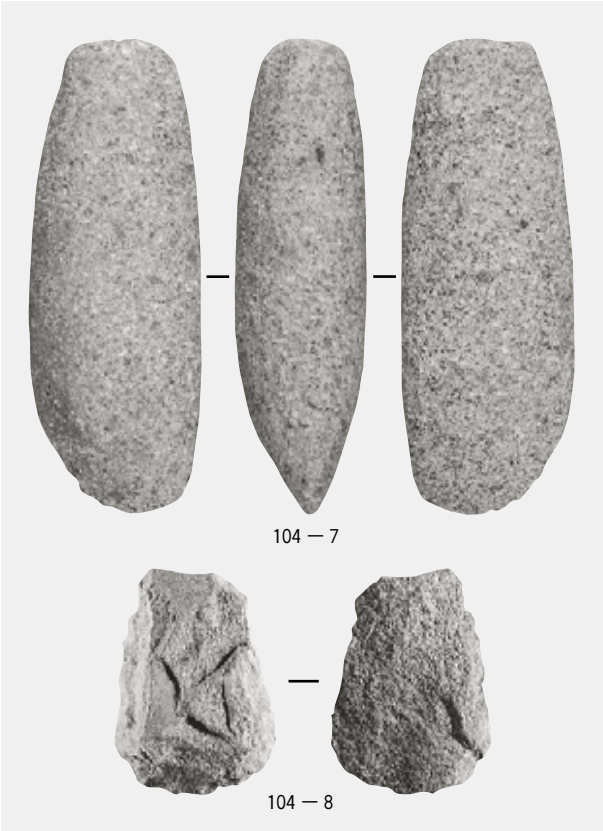
1 — 144　27号住居跡出土土器



1 — 145　23・27号住居跡出土石器

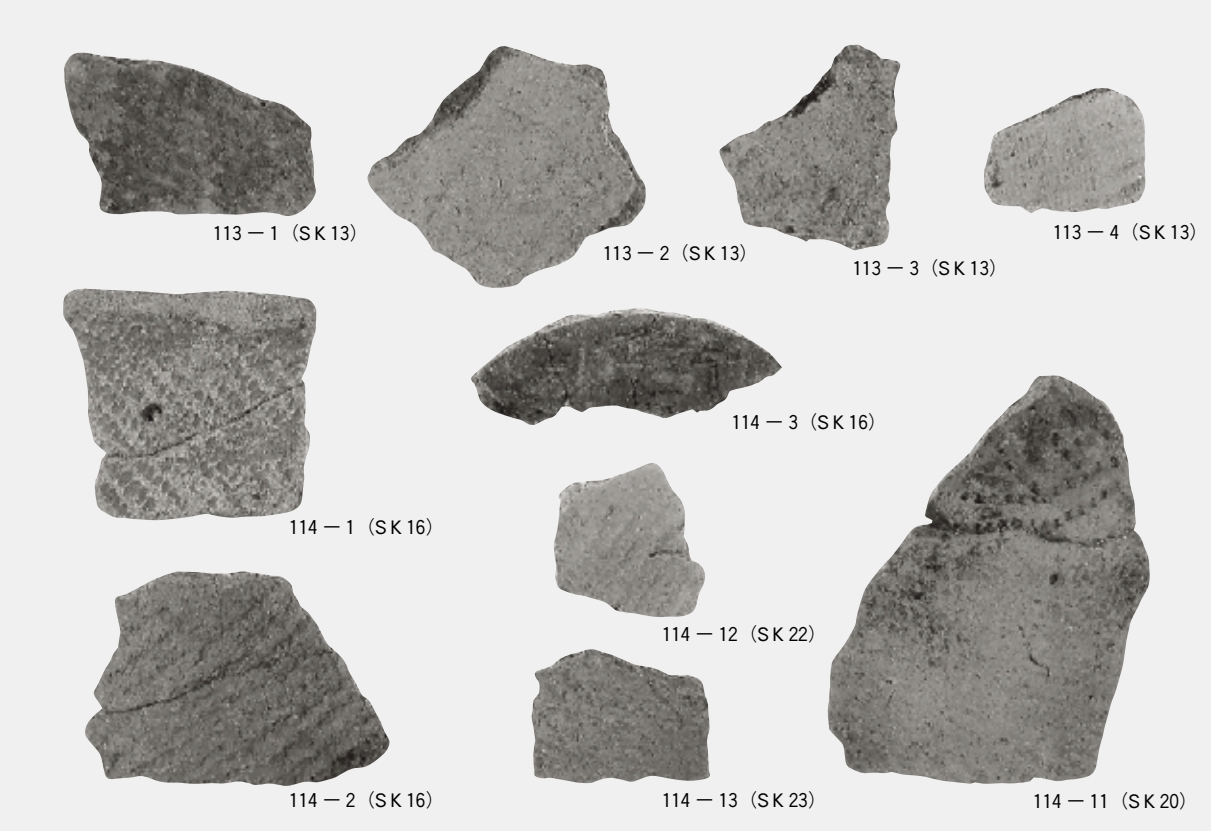


1－146　29・30・44号住居跡出土遺物

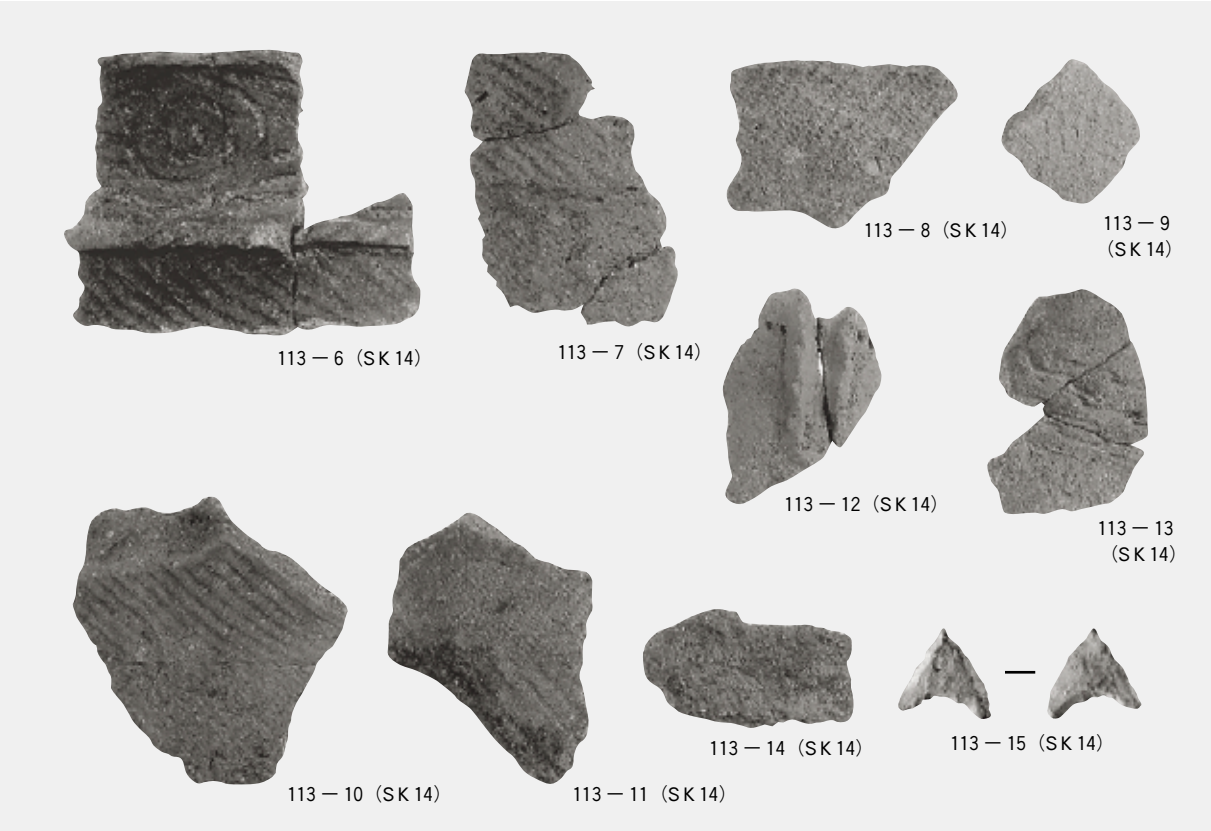


1－147　30号住居跡出土石器

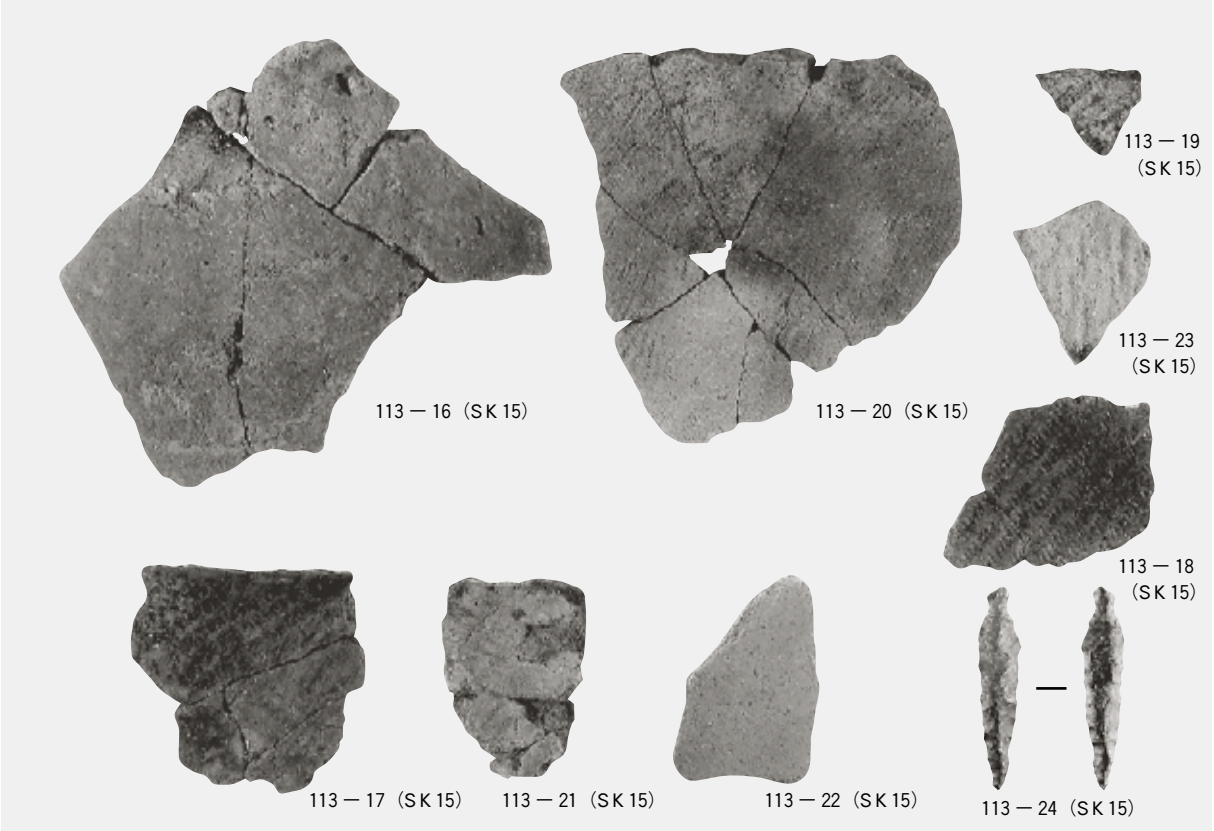
1－148　土坑出土遺物（1）



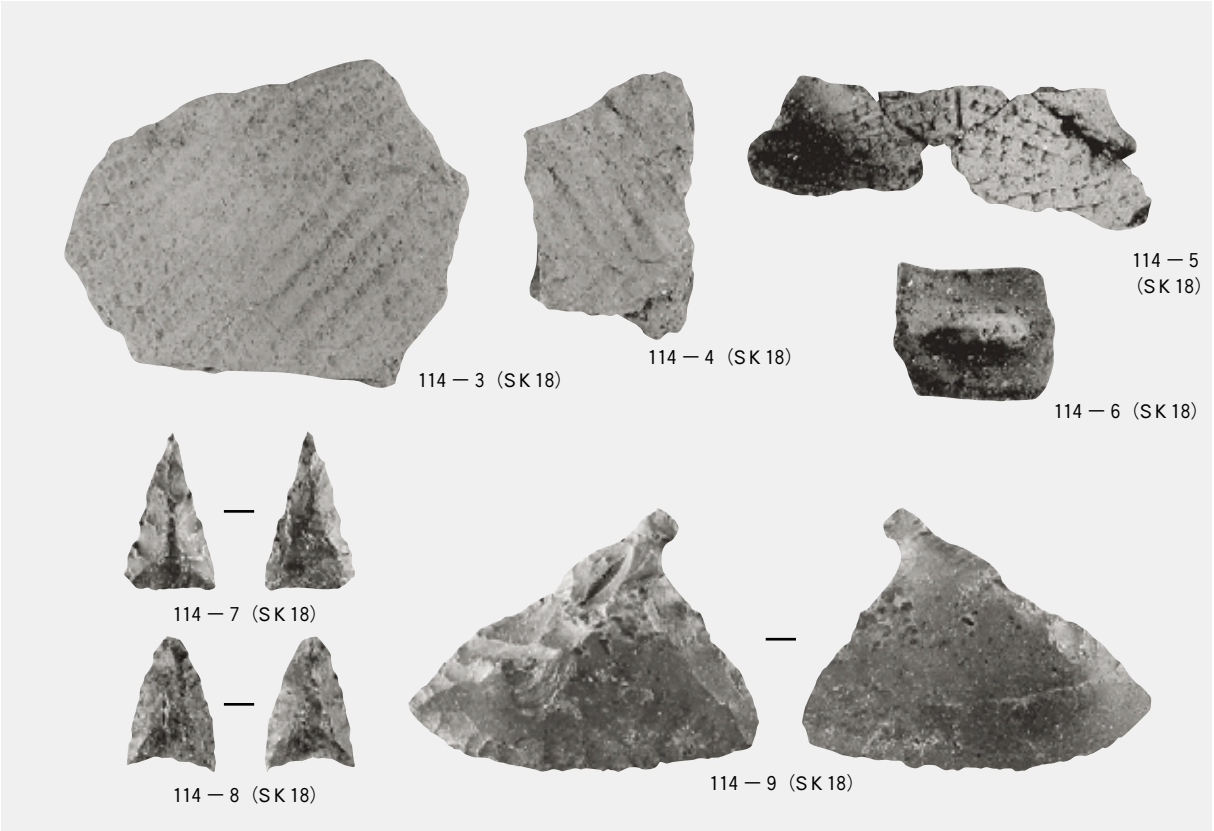
1－149　土坑出土遺物（2）



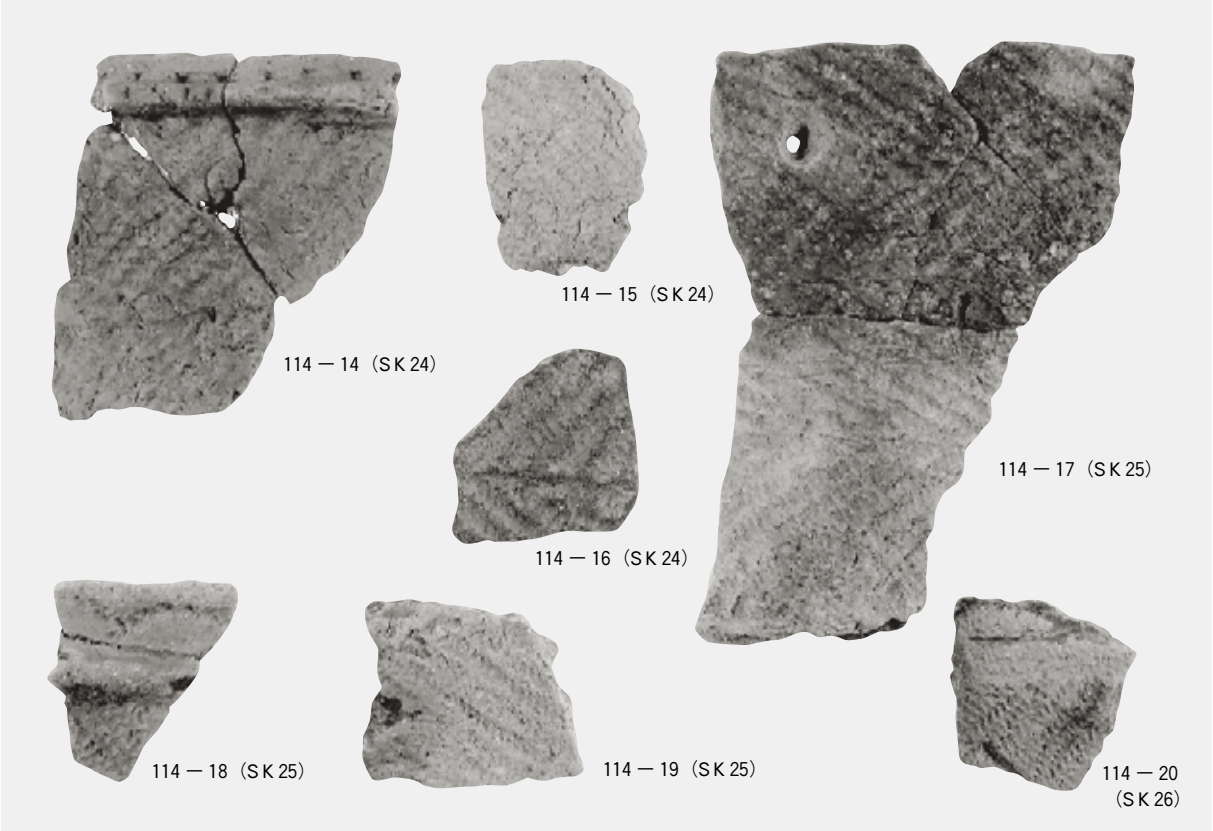
1－150　土坑出土遺物（3）



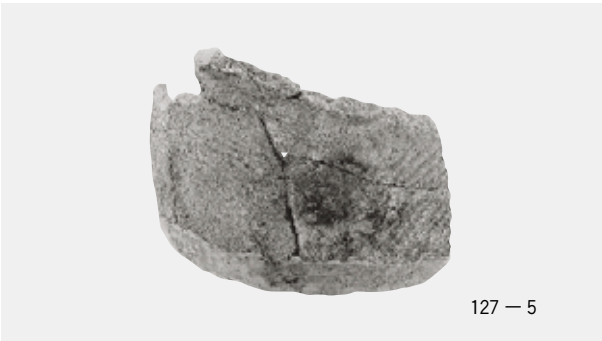
１－151　土坑出土遺物（４）



１－152　土坑出土遺物（５）

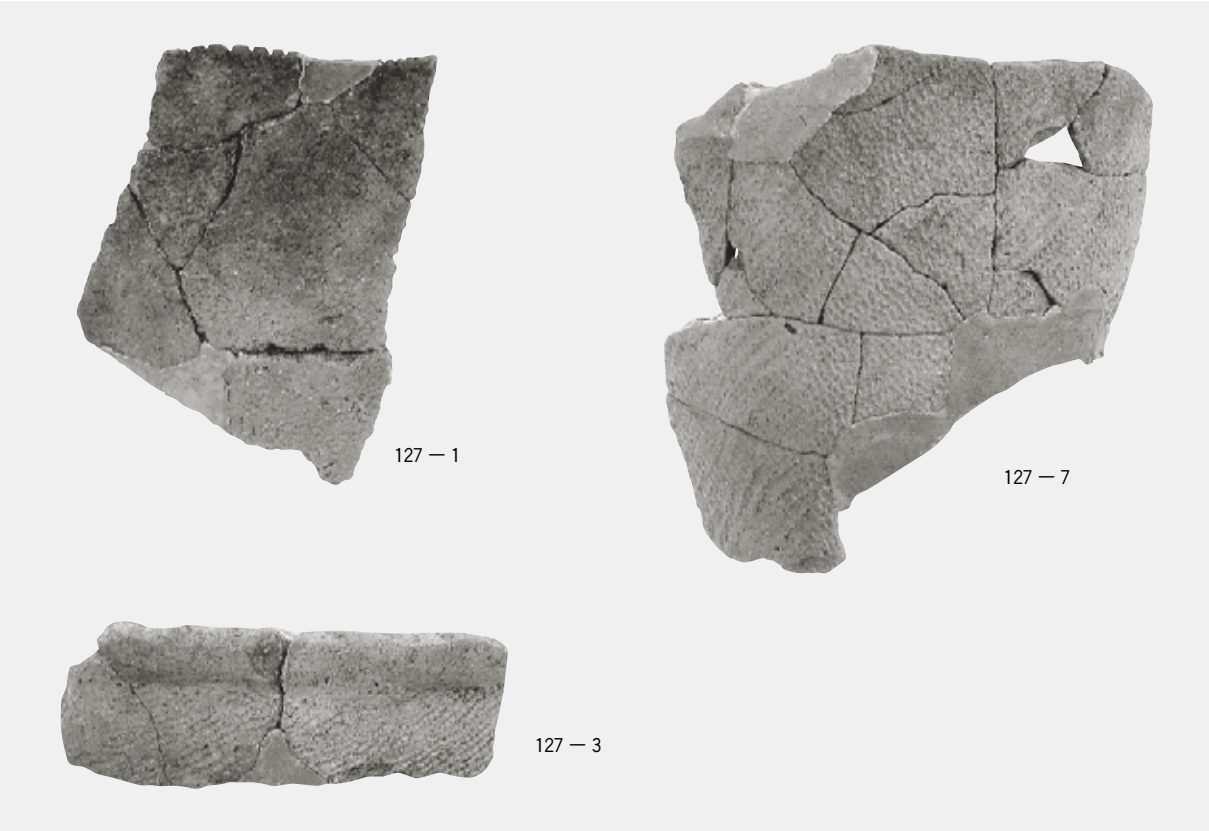


1－153　土坑出土遺物（6）

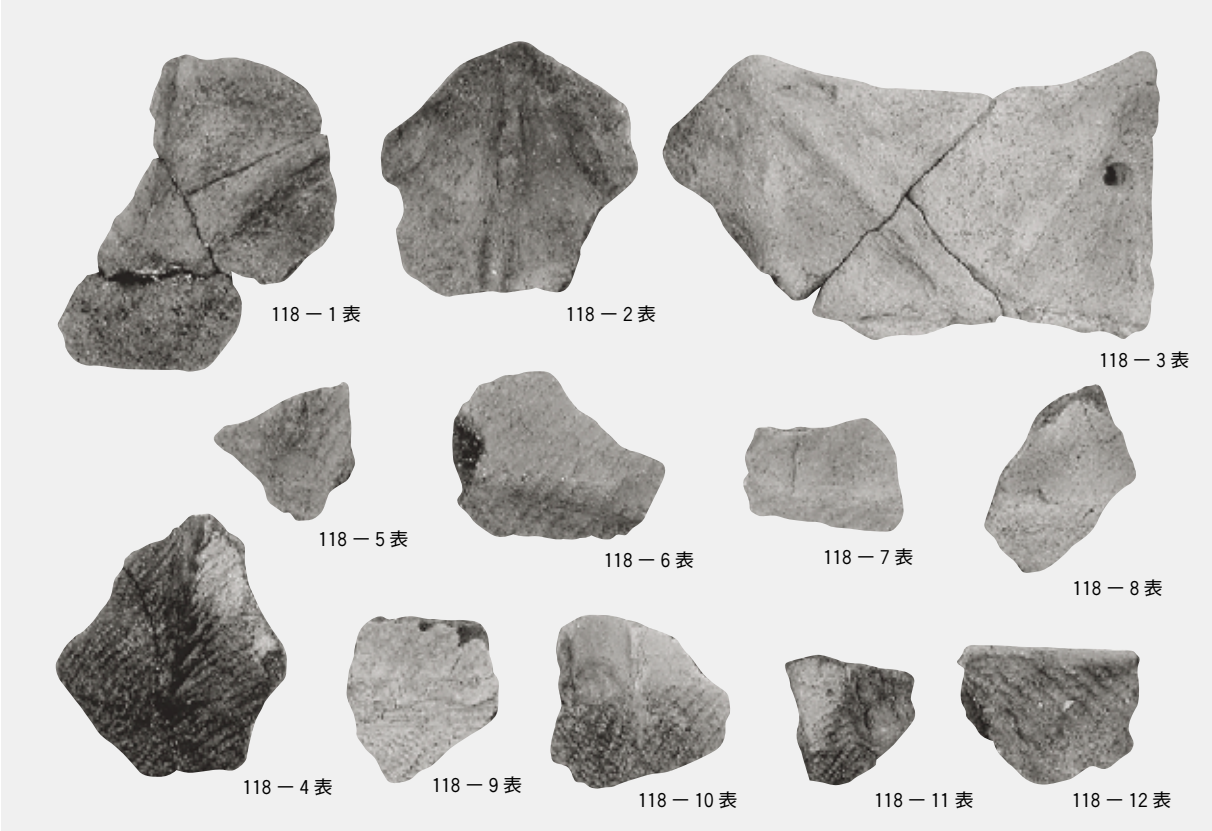


1－154　遺構外出土遺物（1）

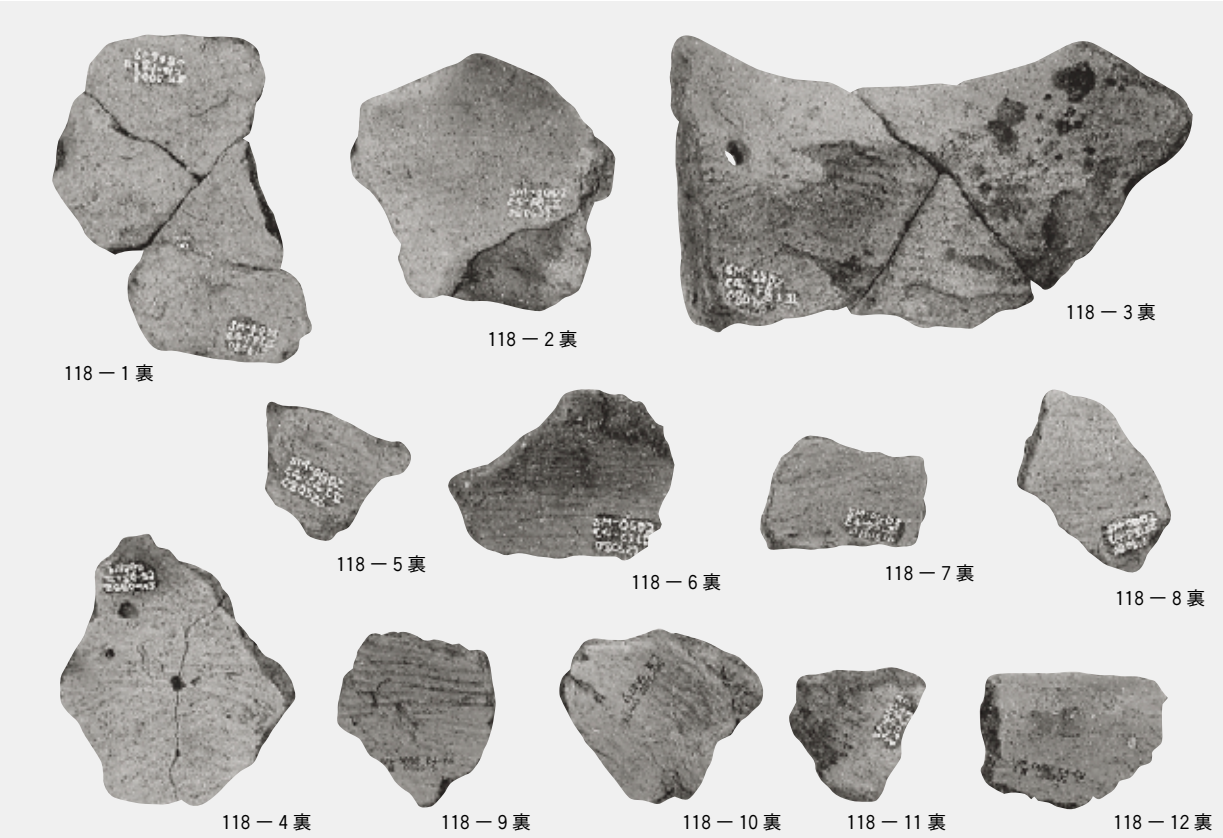
１― 155　遺構外出土遺物（２）



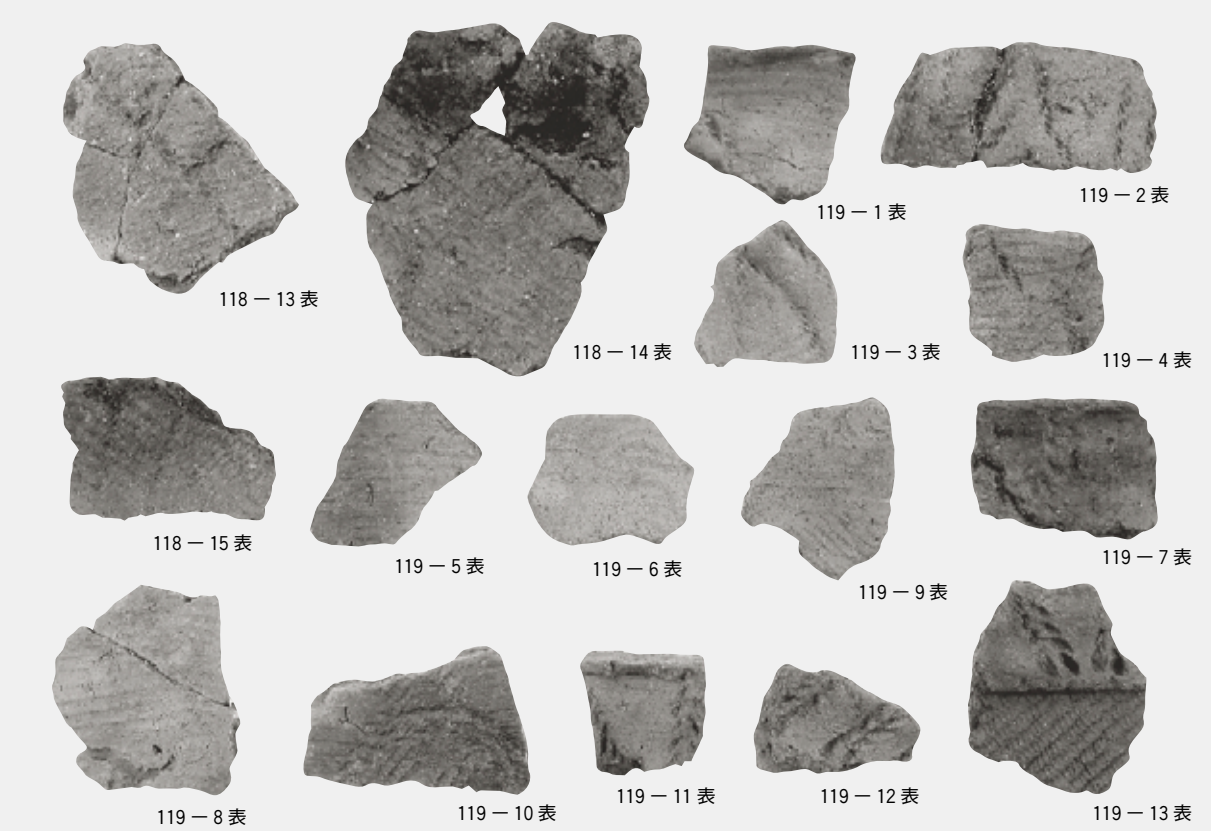
１― 156　遺構外出土遺物（３）



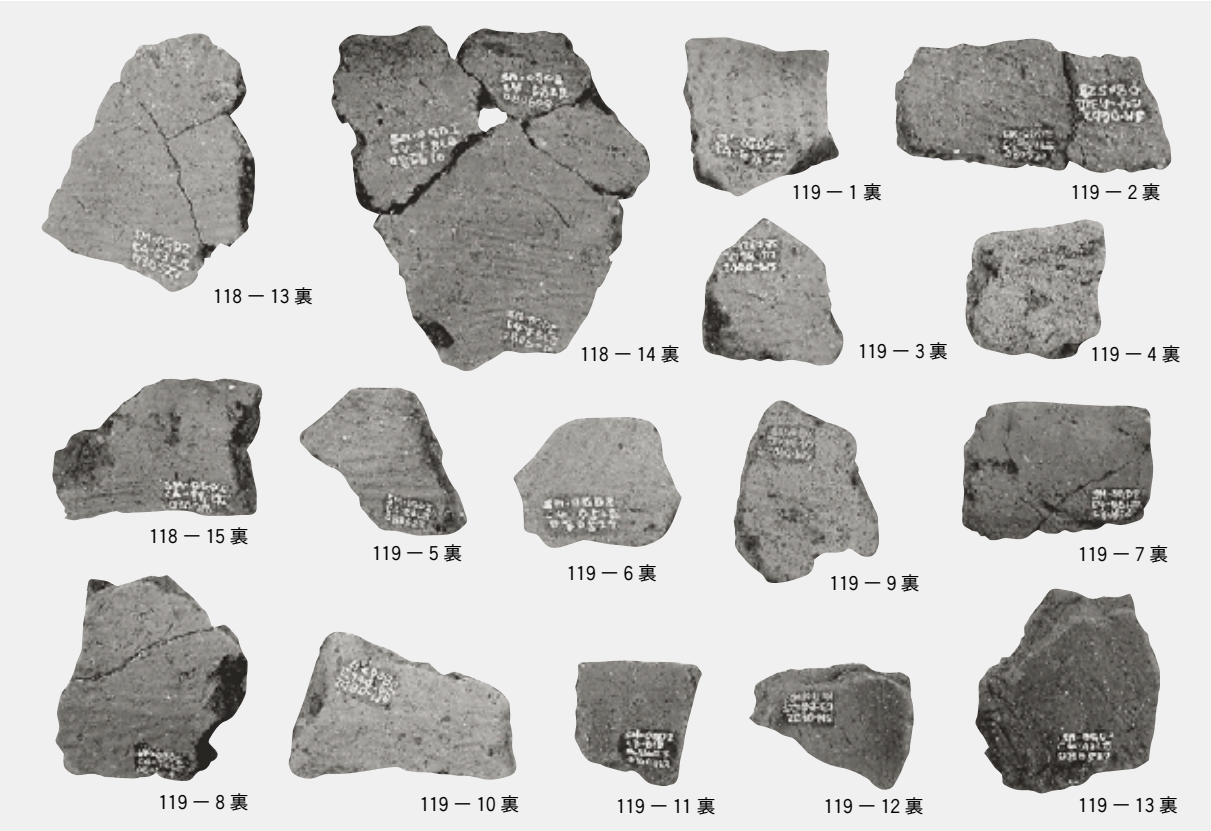
1－157　遺構外出土遺物（4）



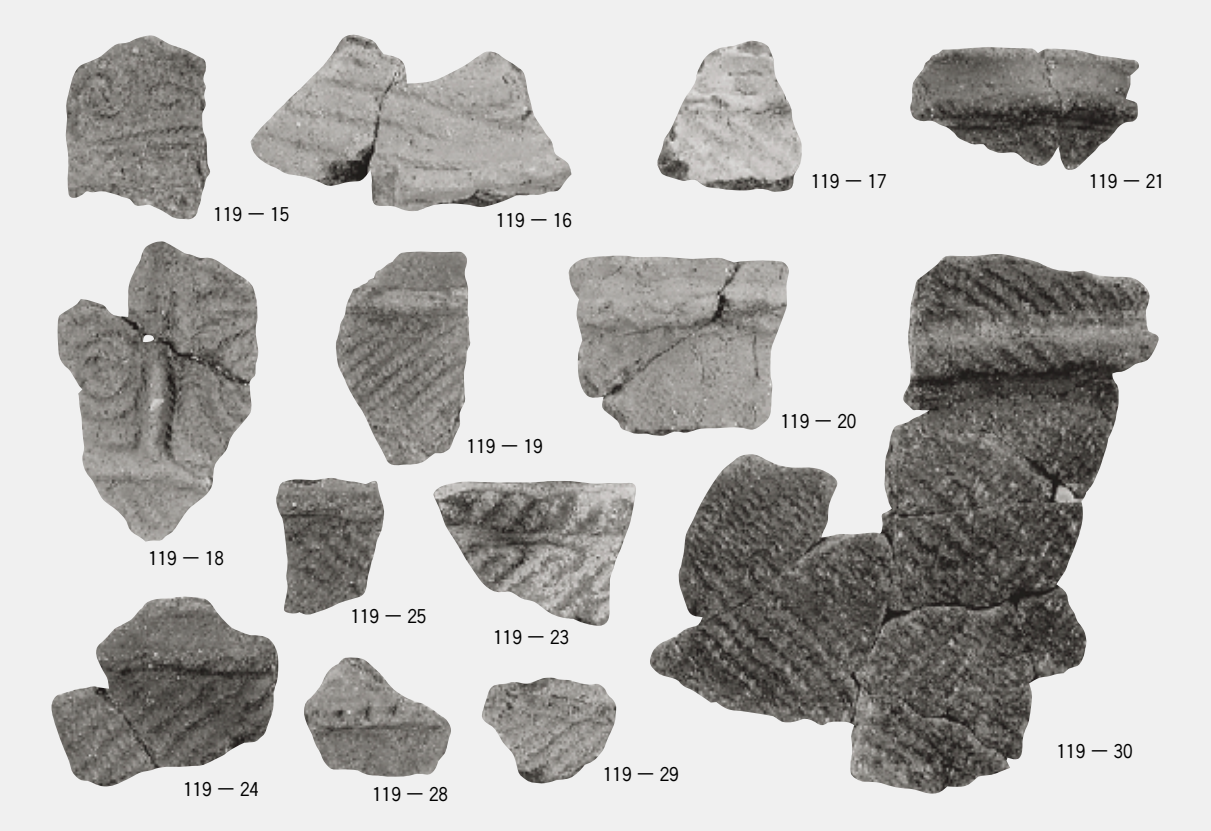
1－158　遺構外出土遺物（5）



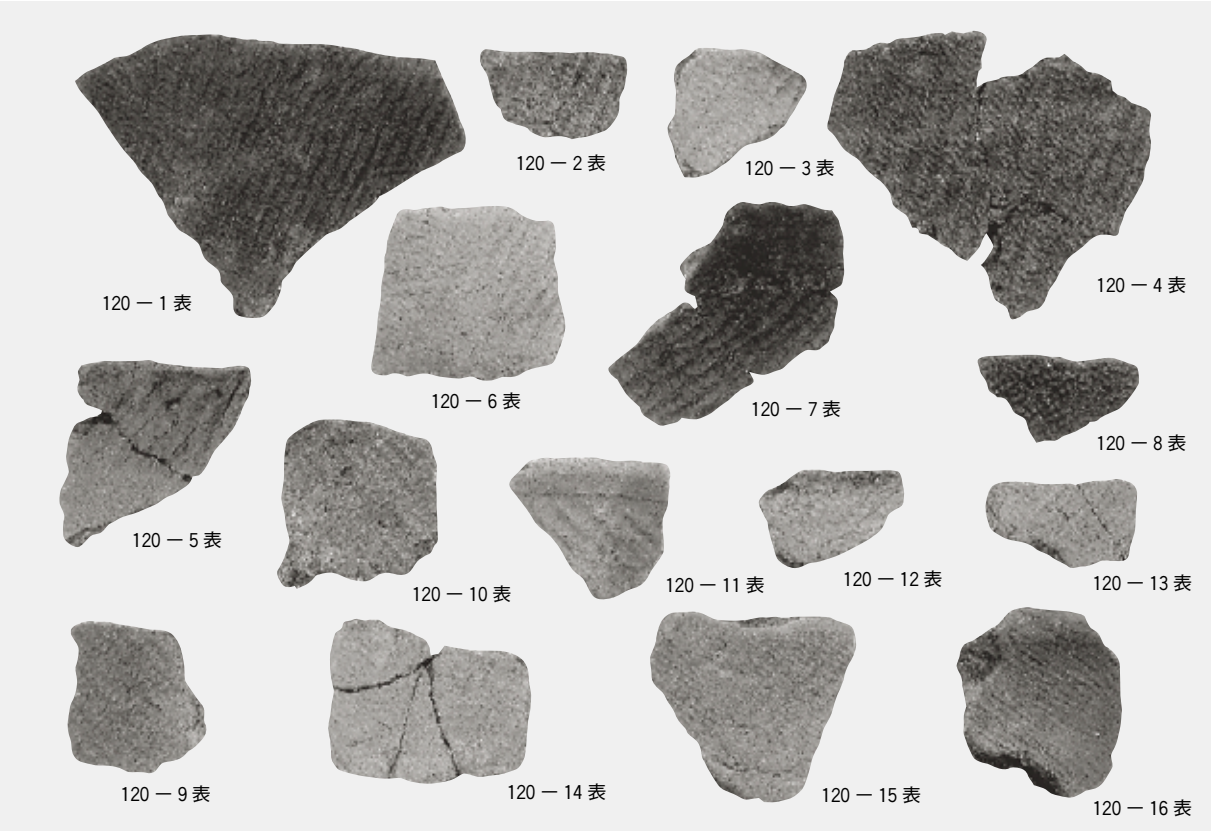
1－159　遺構外出土遺物（６）



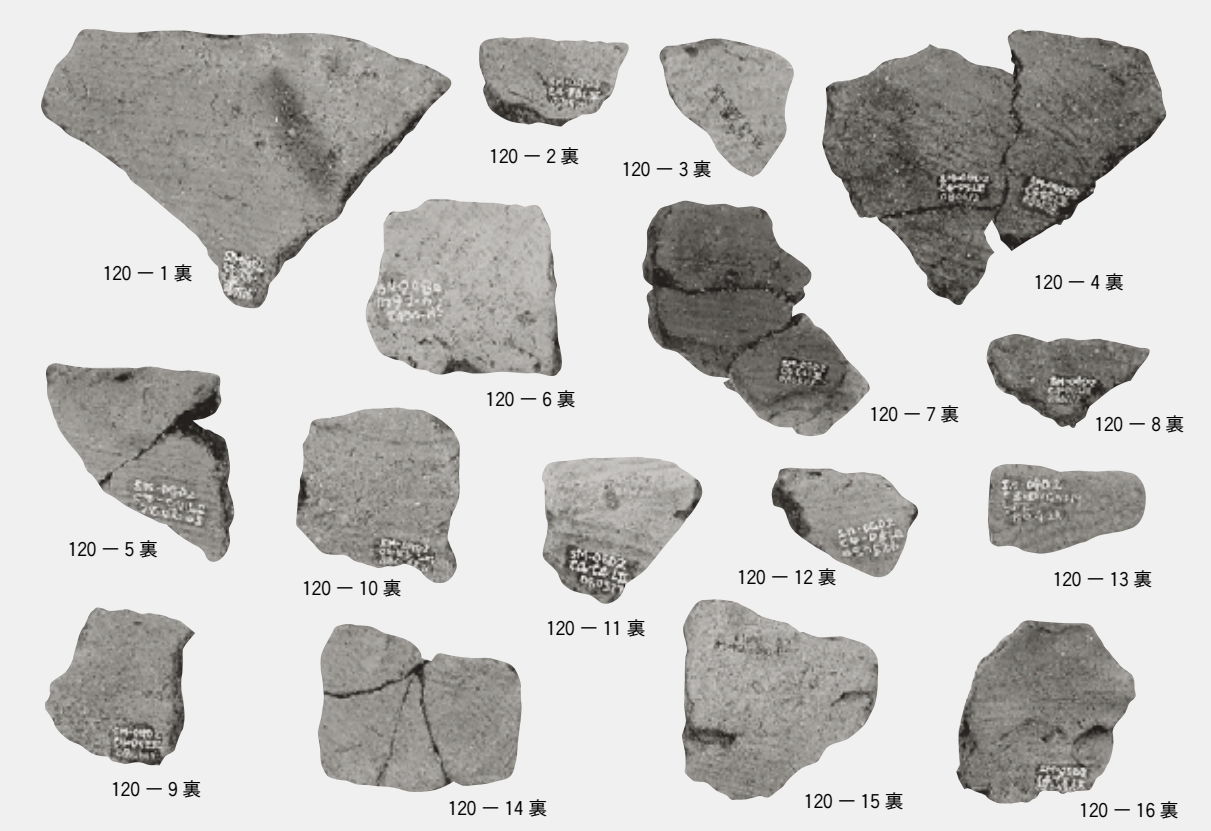
1－160　遺構外出土遺物（７）



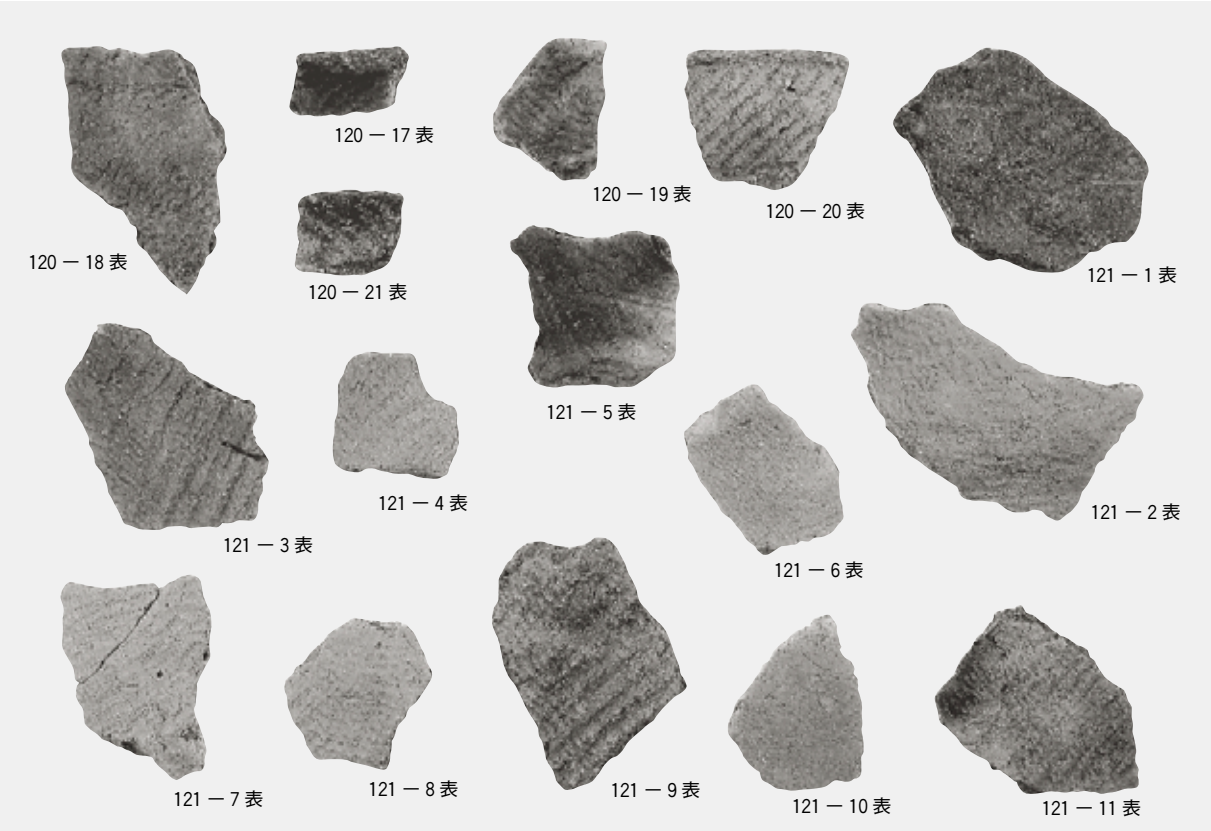
1 ― 161　遺構外出土遺物（8）



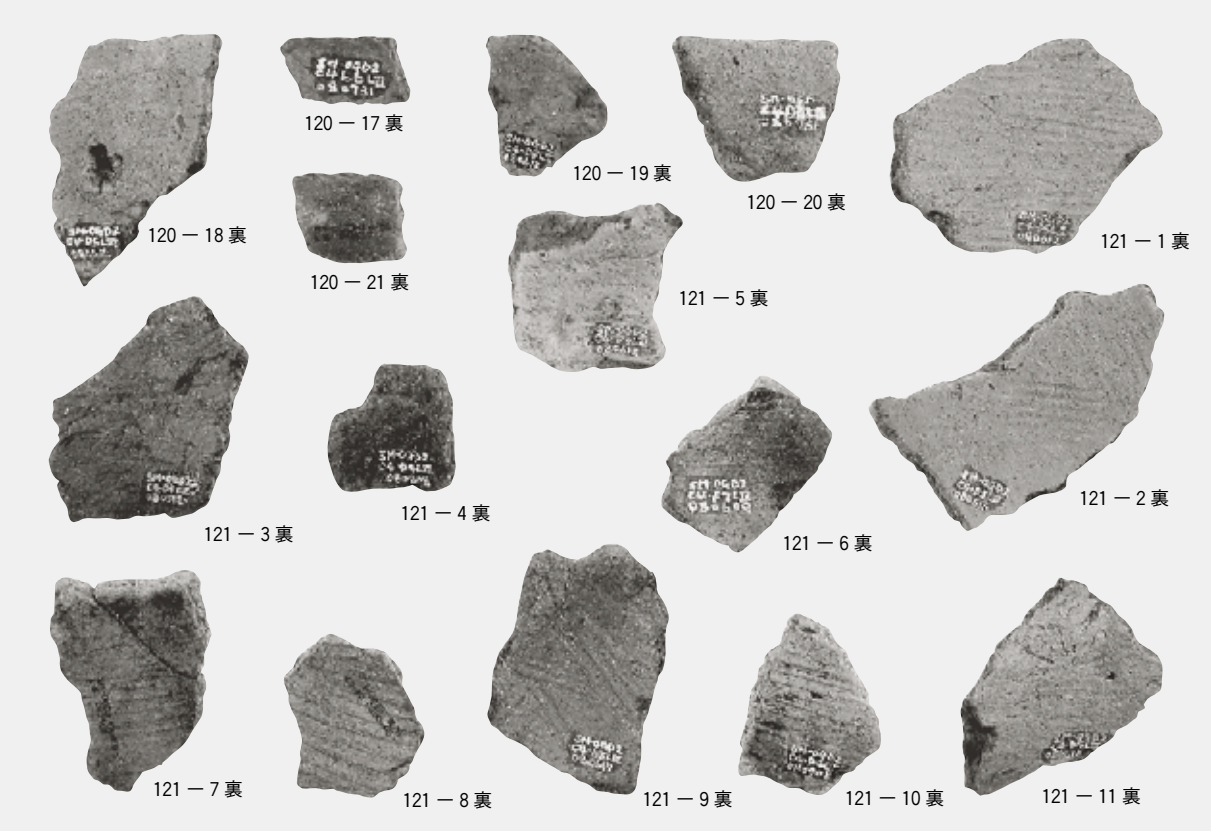
1 ― 162　遺構外出土遺物（9）



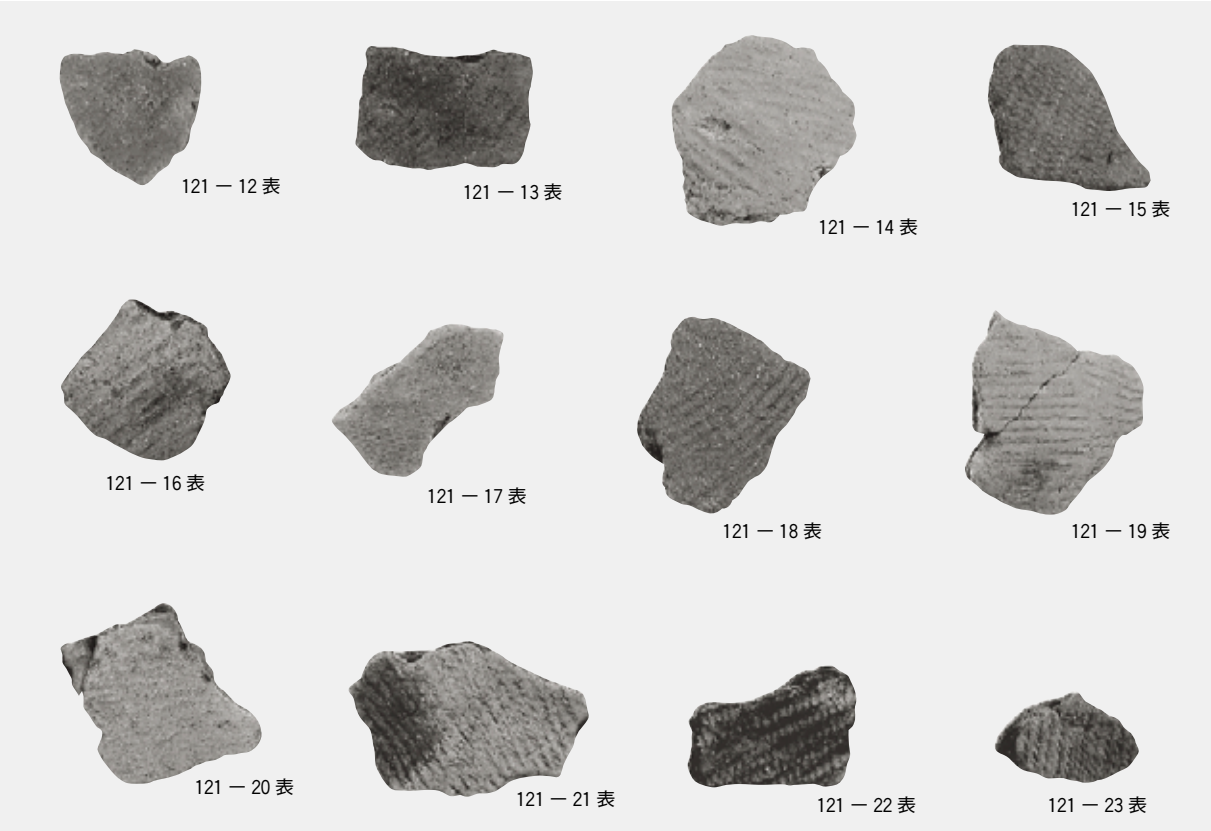
1 ― 163　遺構外出土遺物（10）



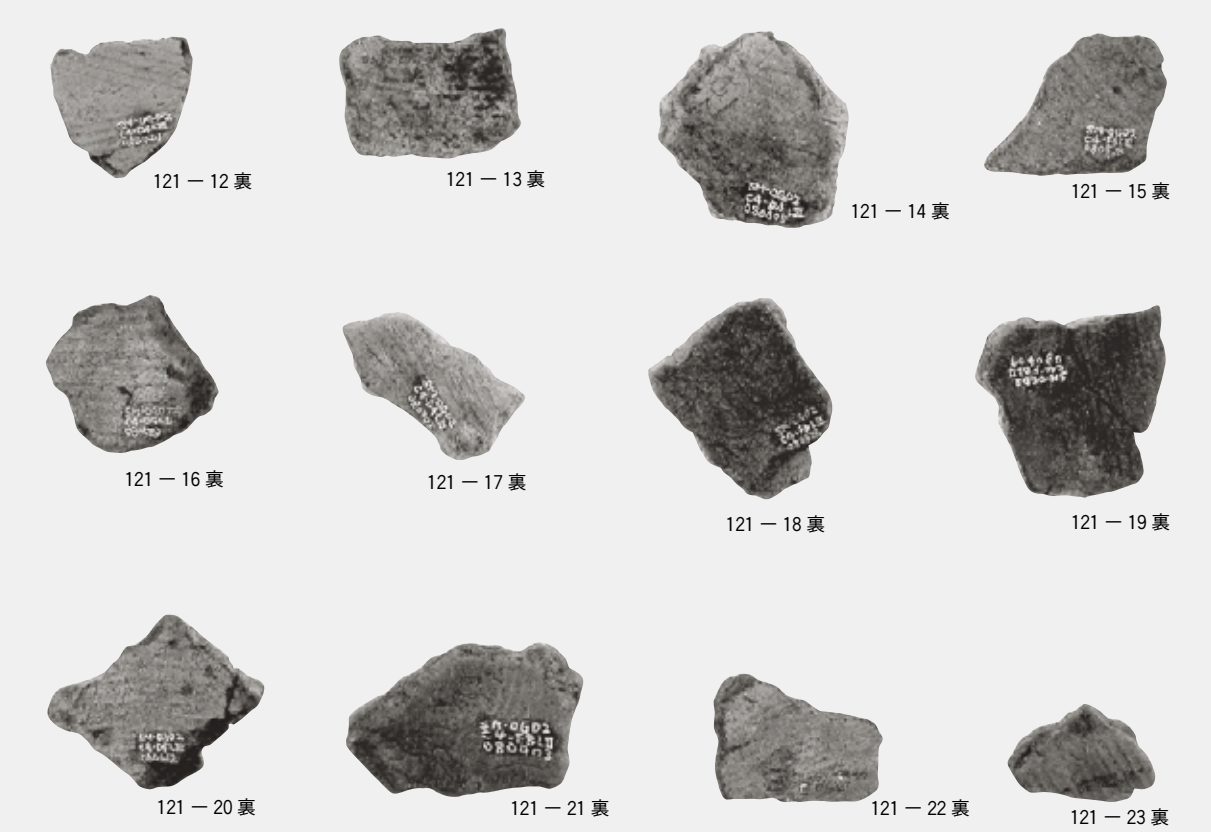
1 ― 164　遺構外出土遺物（11）



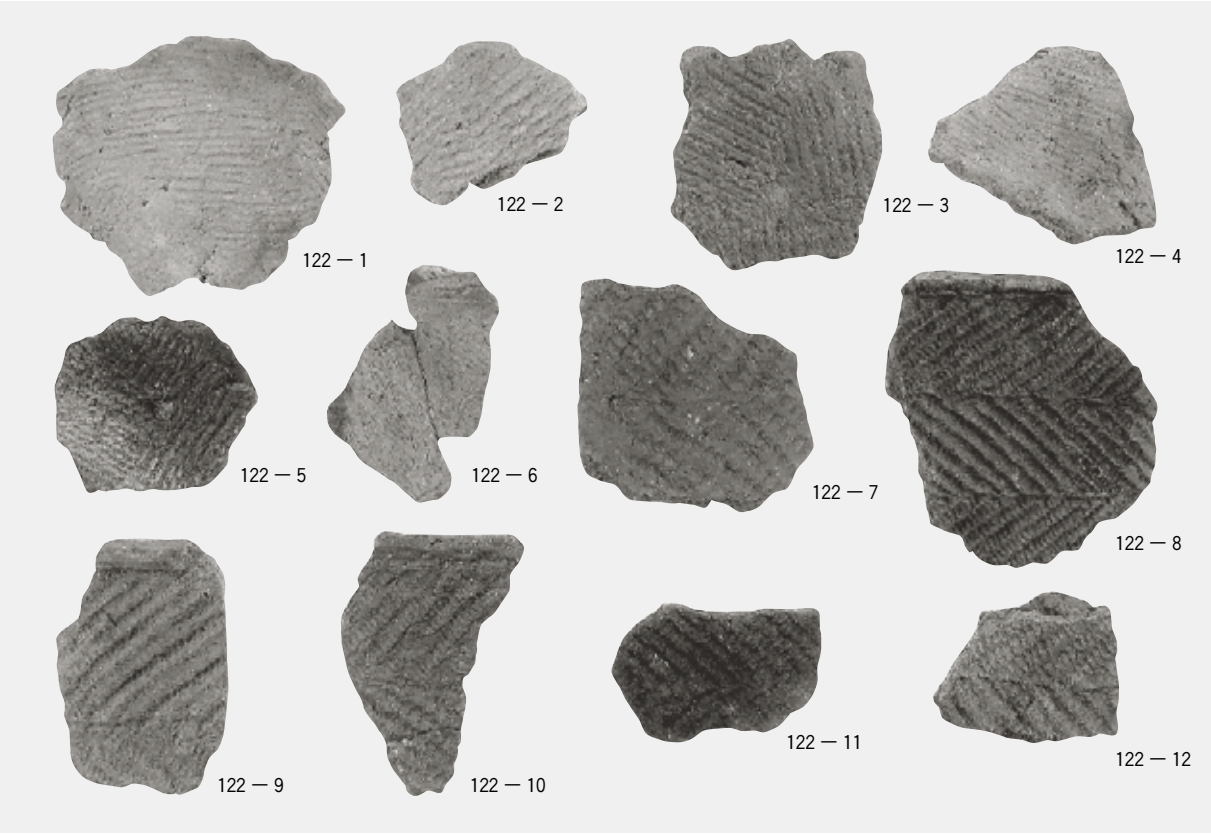
1 ― 165　遺構外出土遺物（12）



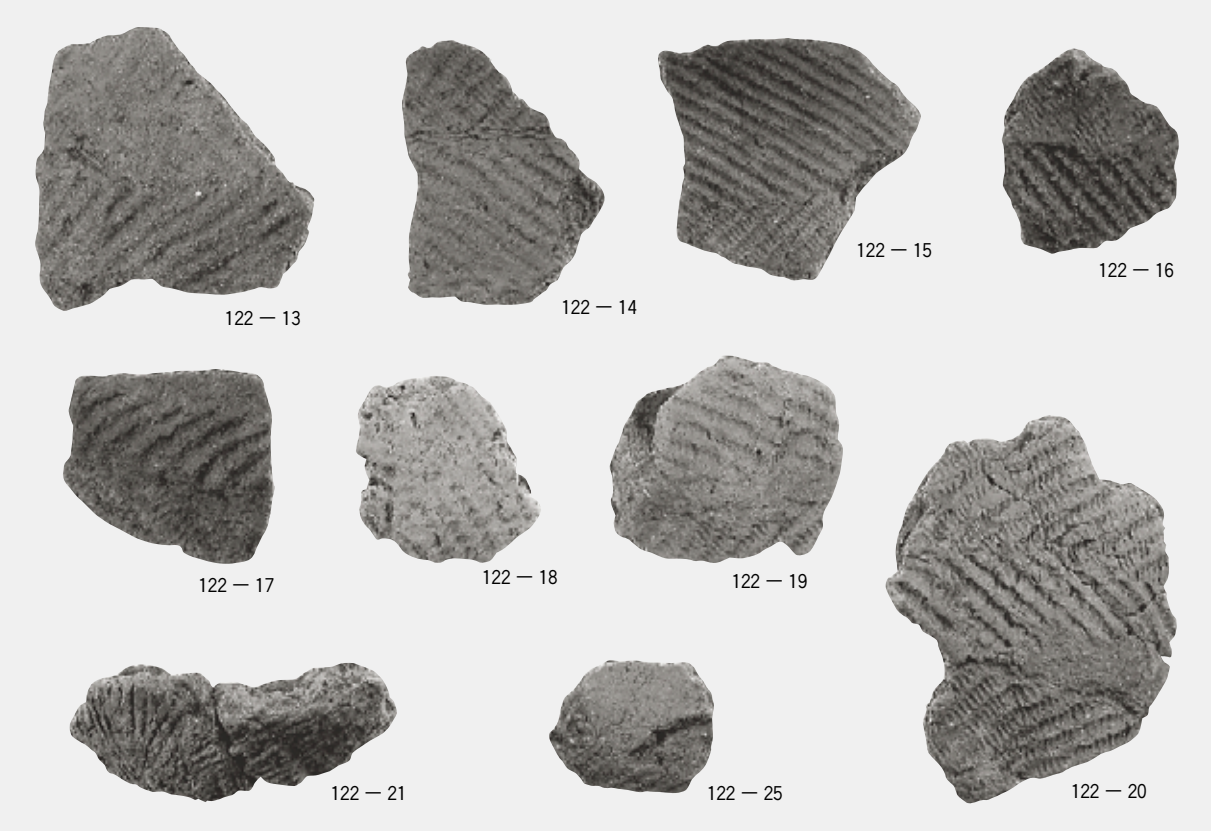
1 ― 166　遺構外出土遺物（13）



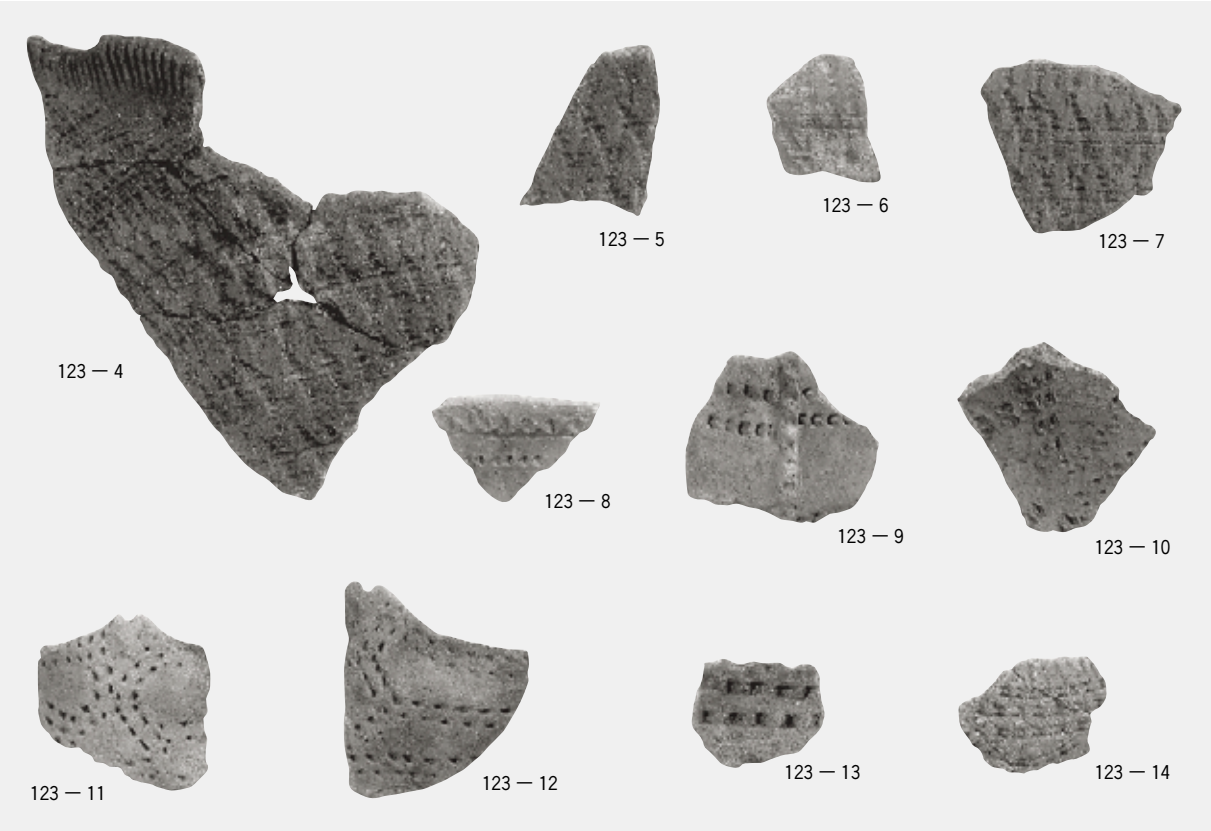
１― 167　遺構外出土遺物（14）



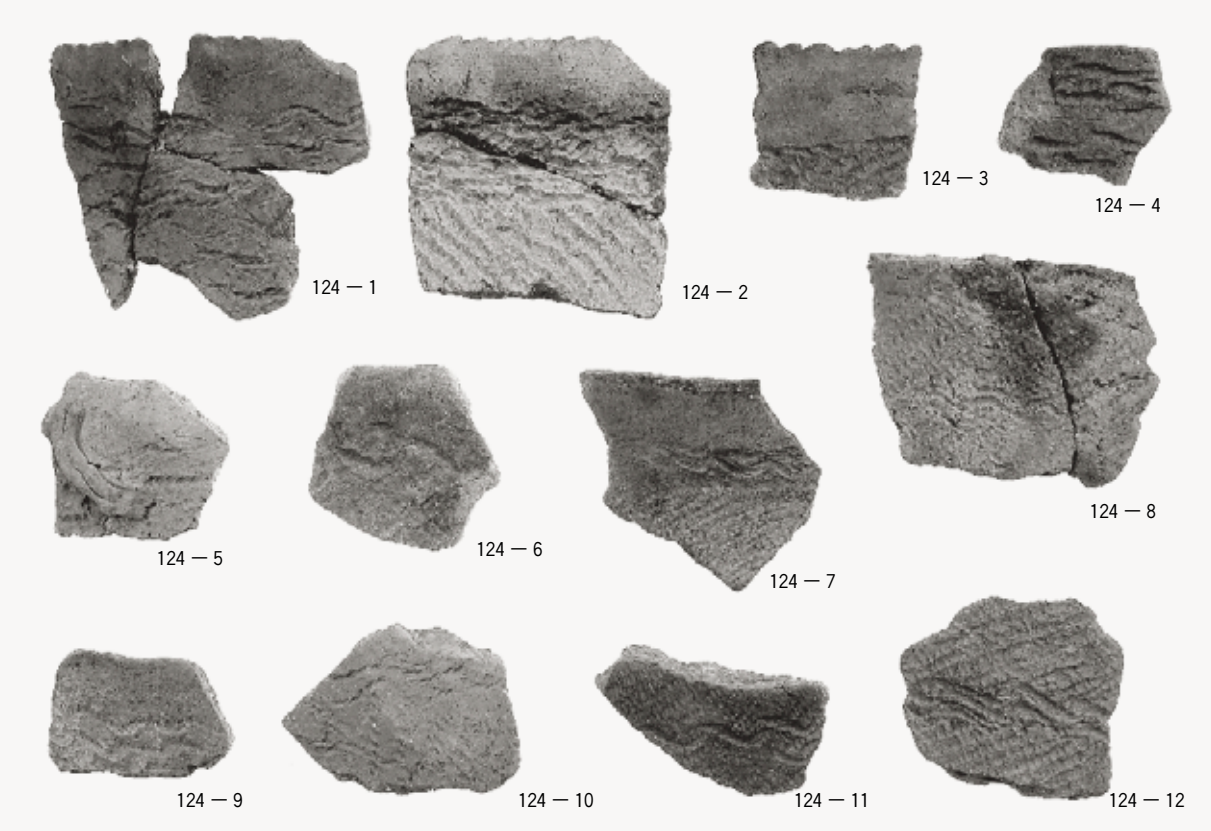
１― 168　遺構外出土遺物（15）



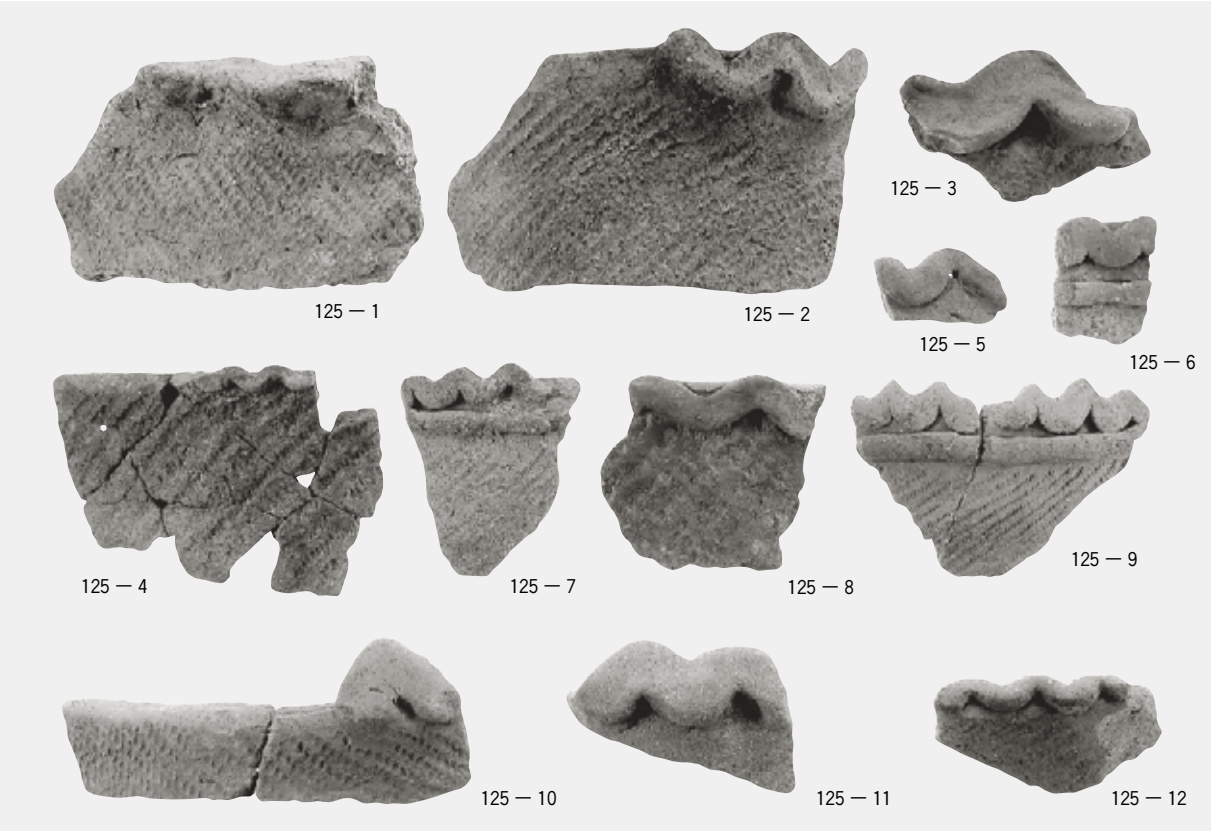
1 — 169　遺構外出土遺物（16）



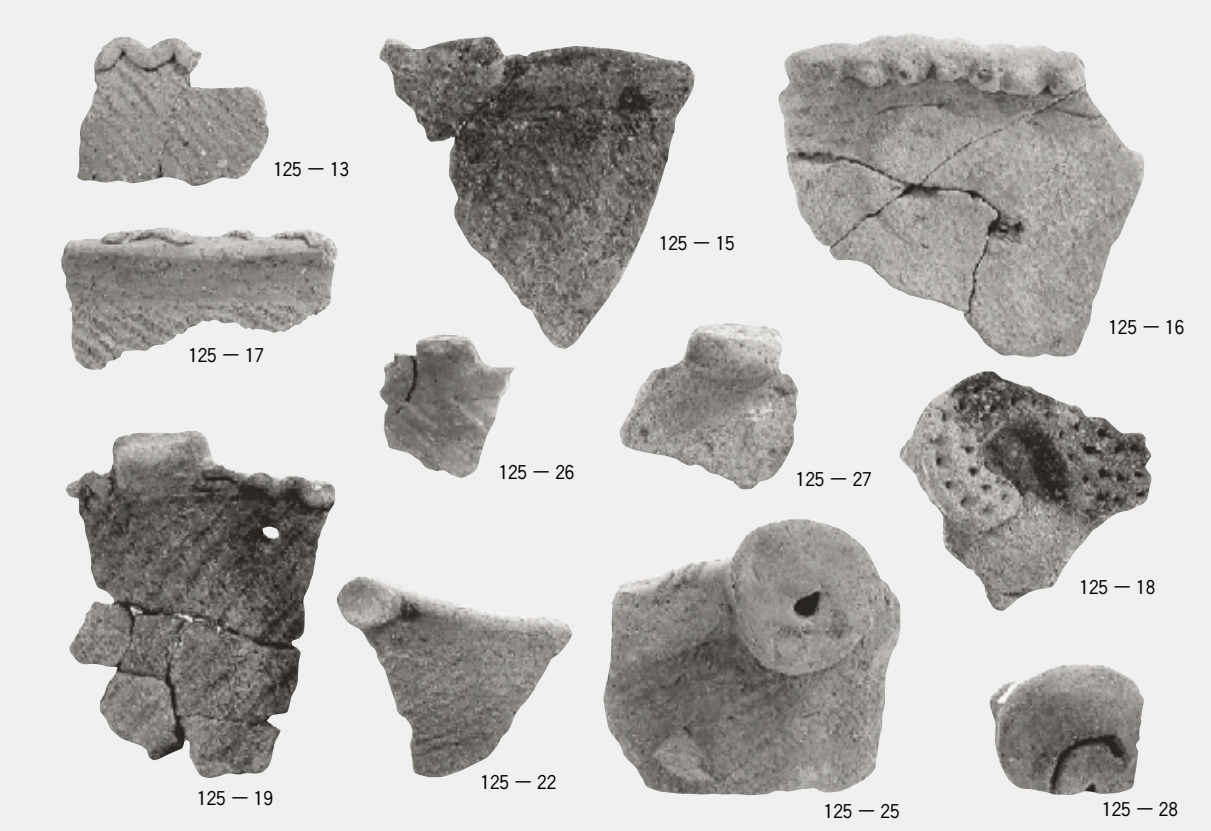
1 — 170　遺構外出土遺物（17）



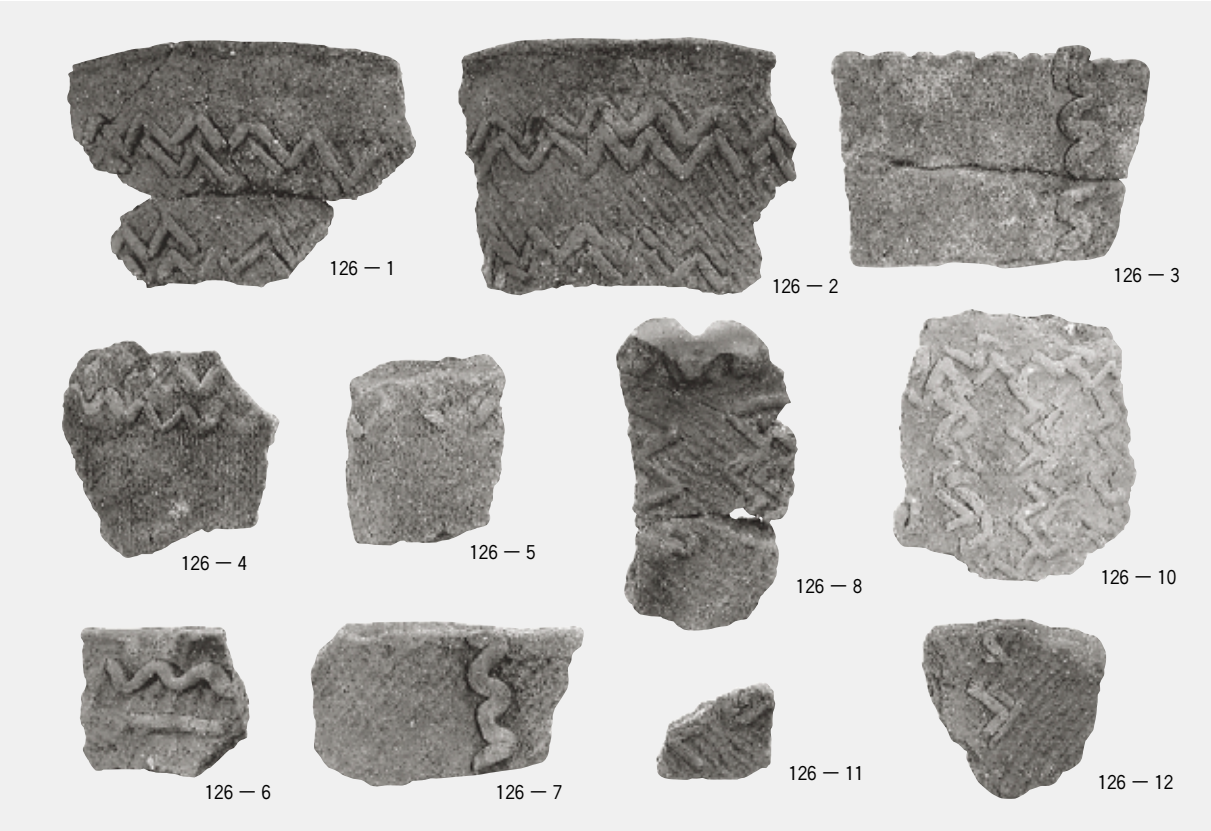
１－171　遺構外出土遺物（18）



１－172　遺構外出土遺物（19）

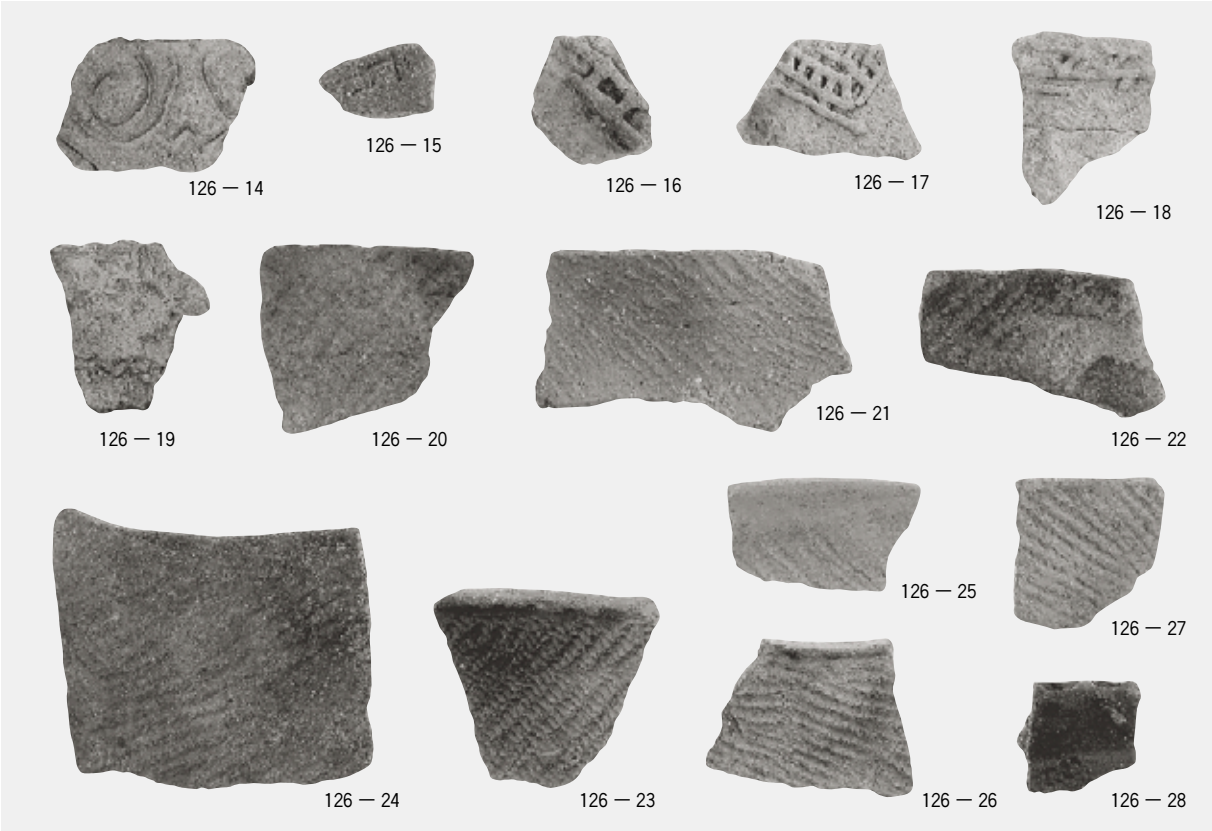


1 ― 173　遺構外出土遺物（20）

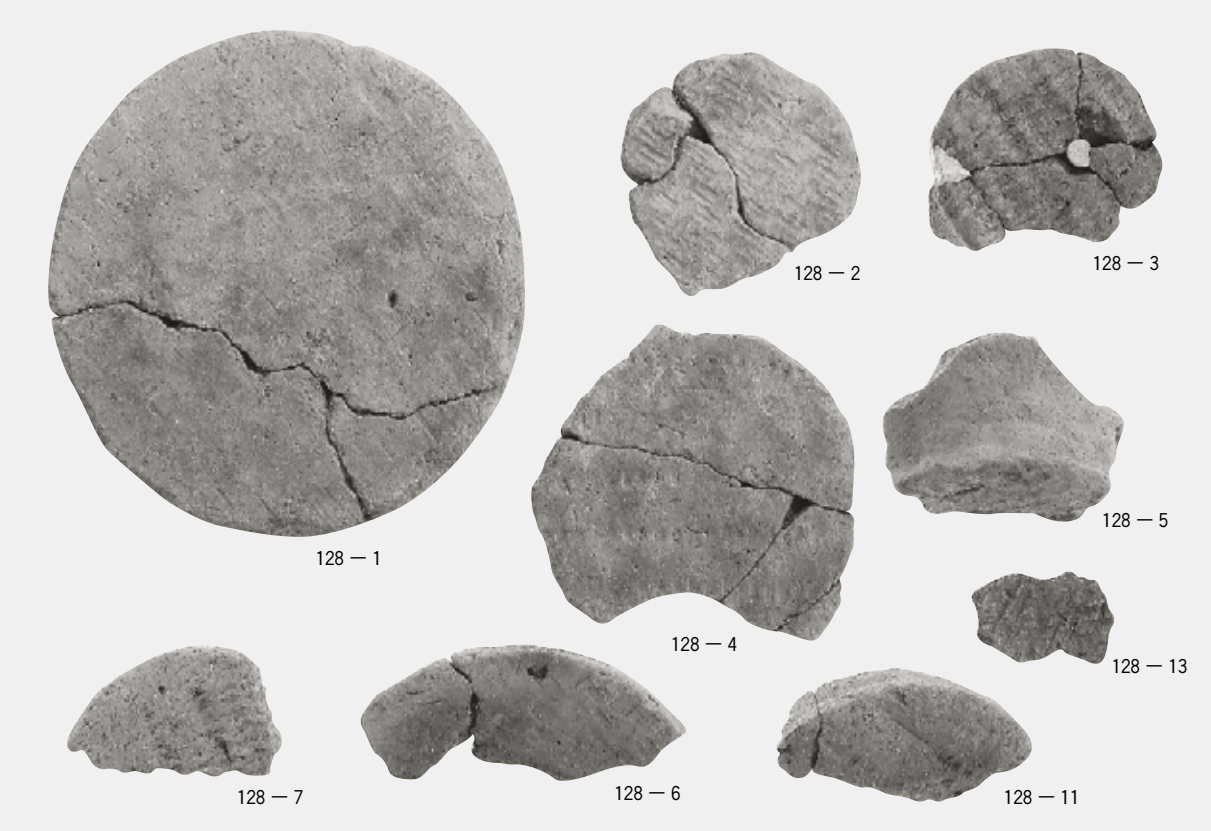


1 ― 174　遺構外出土遺物（21）

１― 175　遺構外出土遺物（22）

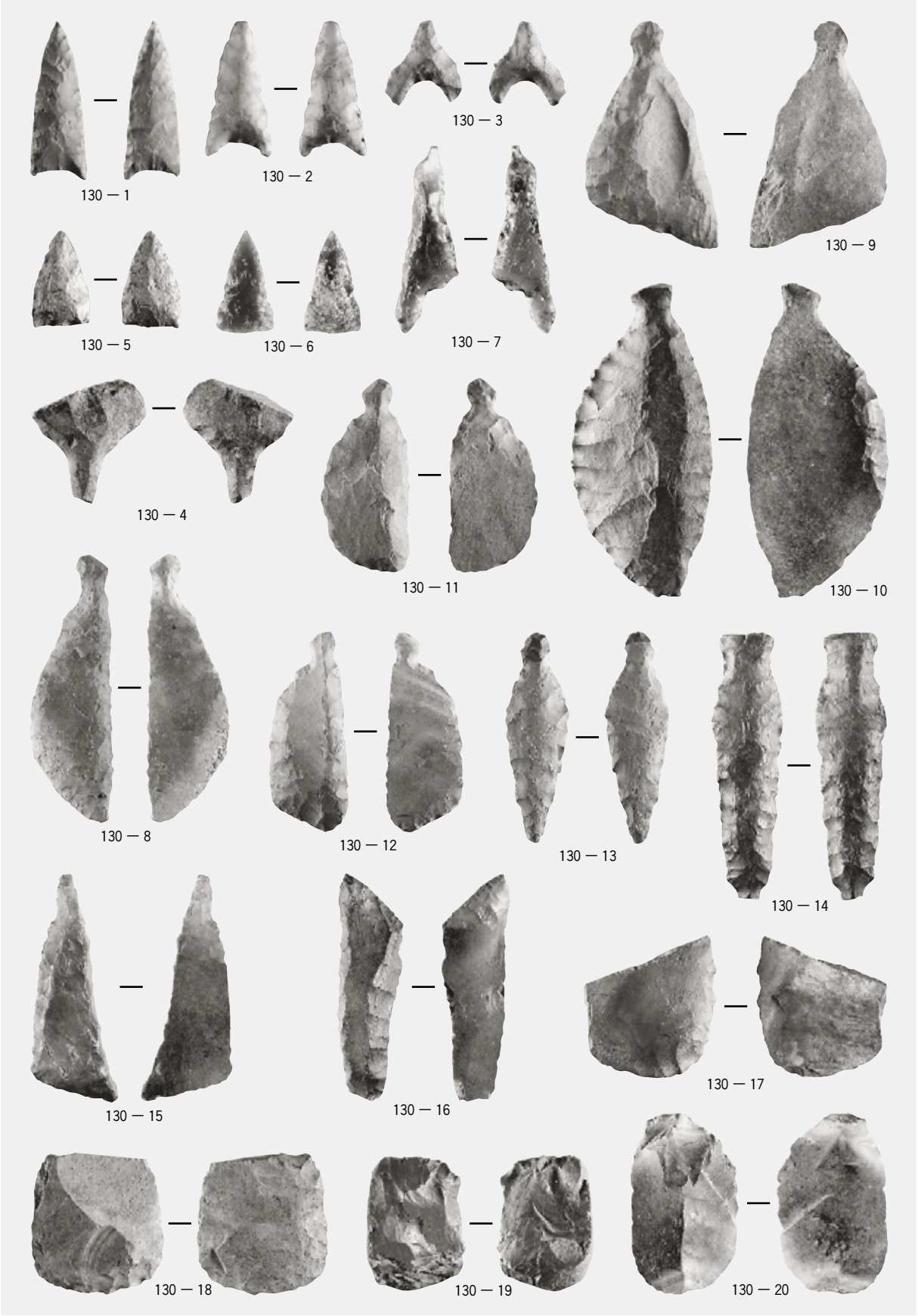


１― 176　遺構外出土遺物（23）

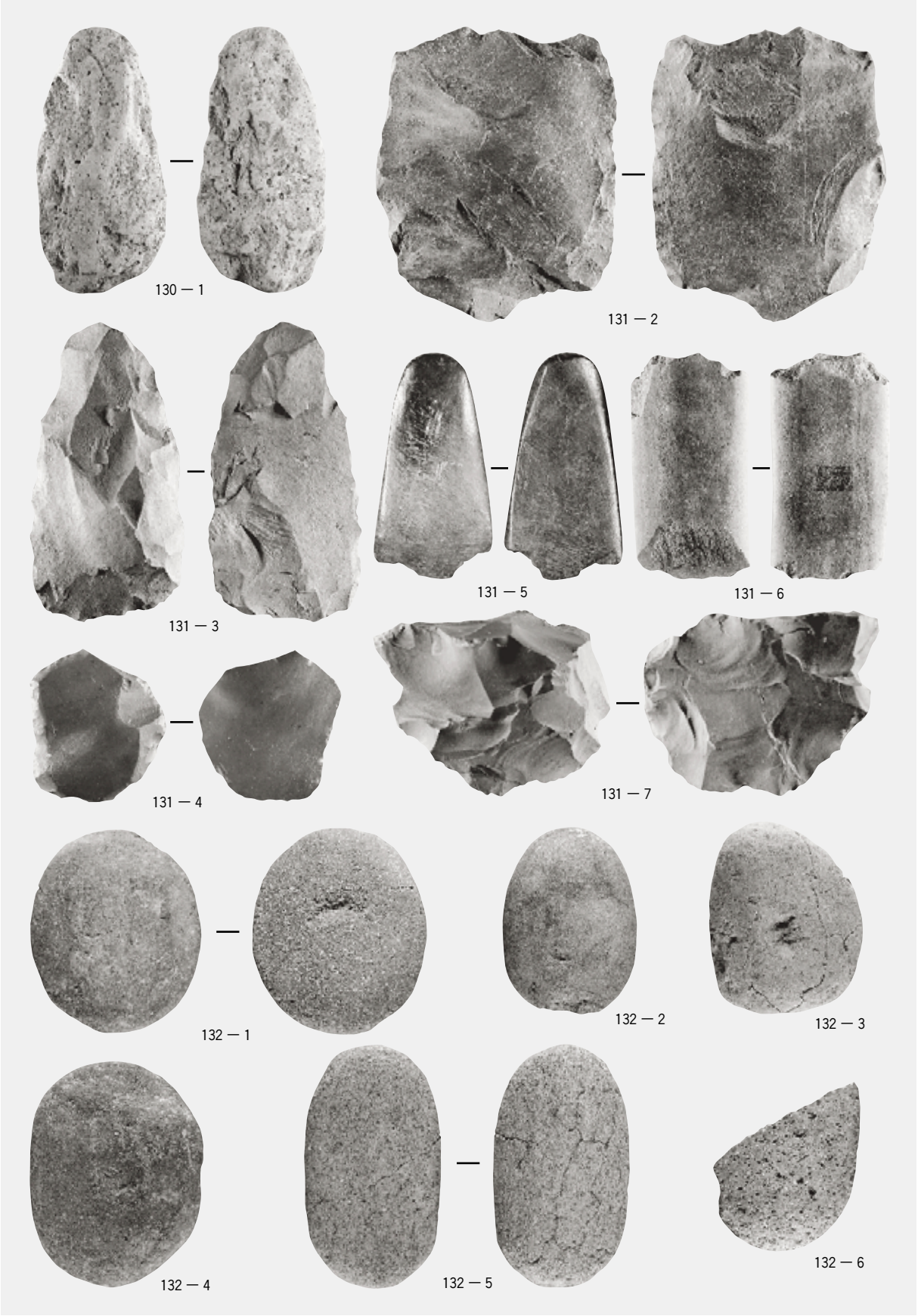


1 — 177　遺構外出土遺物（24）

1 — 178　遺構外出土遺物（25）



１－179　遺構外出土遺物（26）



1 — 180　遺構外出土遺物（27）

第２編　小豆畑遺跡

遺跡記号	ＳＭ－ＡＺＢ
所在地	相馬市山上字小豆畑
時代・種類	中世・近世－生産
調査期間	平成20年４月17日～５月30日
調査員	稲村　圭一・管野　和博

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

小豆畑遺跡は，相馬市山上字小豆畑に所在し，北緯37度12分１秒，東経140度15分15秒に位置する。相馬市は浜通り地方北部に位置し，北は新地町，南相馬市に接している。また，東は浜通り低地帯が広がり，松川浦および太平洋に面している。西は阿武隈高地となり，標高500m前後の高原状山地となっている。

本遺跡はＪＲ常磐線相馬駅から直線距離で西へ約６㎞の地点に位置する。また，遺跡のすぐ南には国道115号が東西に走っている。

遺跡は，松川浦に注ぐ宇多川が，支流の胴切沢と合流する地点の，標高133.0m前後の丘陵の北西斜面裾にあたる河岸段丘上に立地する。調査区内の標高は，131.0m～132.5mで，宇多川の川床との標高差は約30mである。調査区の範囲は，丘陵裾の段丘の平坦面を中心とする800㎡で，現況は東側が耕地，西側が宅地跡である。周辺には，胴切沢の対岸には縄文時代の散布地である物倉遺跡や，国道115号線を挟んだ宇多川の段丘上には，縄文時代の散布地，および古代の集落遺跡である小田原遺跡が，また本遺跡と同一段丘上で東側400mには，古代の製鉄関連遺跡である小田原Ｂ遺跡が所在している。

第２節　調 査 経 過

小豆畑遺跡は，平成９年度に福島県教育委員会から委託を受けた㈶福島県文化振興事業団が実施した，阿武隈東道路建設に伴う表面調査でＳＭ－Ｂ①とした遺跡推定地と登録した。平成19年度には試掘調査が実施され，木炭焼成土坑や土師器等の遺構・遺物が確認されたことから，800㎡が保存を要する範囲として提示され，新発見の遺跡として，本地点の字名から「小豆畑遺跡（遺跡番号20900203）」と登録された。

小豆畑遺跡の発掘調査は，調査員２名，作業員10名の体制で平成20年４月17日に開始し，５月30日にかけての延べ24日間にわたって行った。以下に調査概要を記す。

４月17日には，重機による表土剥ぎを開始した。５月６日からは作業員を投入し，環境整備・遺構の検出作業を行いながら，測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。遺構の検出作業時には，検出面としたＬⅣ（基底面）には礫を多く含むことから，遺構の確認には困難を来たし，時間を要した。しかし，進行するにつれて遺構の有無が明らかになり，調査区北半部分は宅地の造成により旧地形を掘削していること，また調査区南半付近の緩斜面を中心に，中世の土坑や近世の溝跡をはじめとした遺構群が検出され，遺構精査へ移行することとなった。

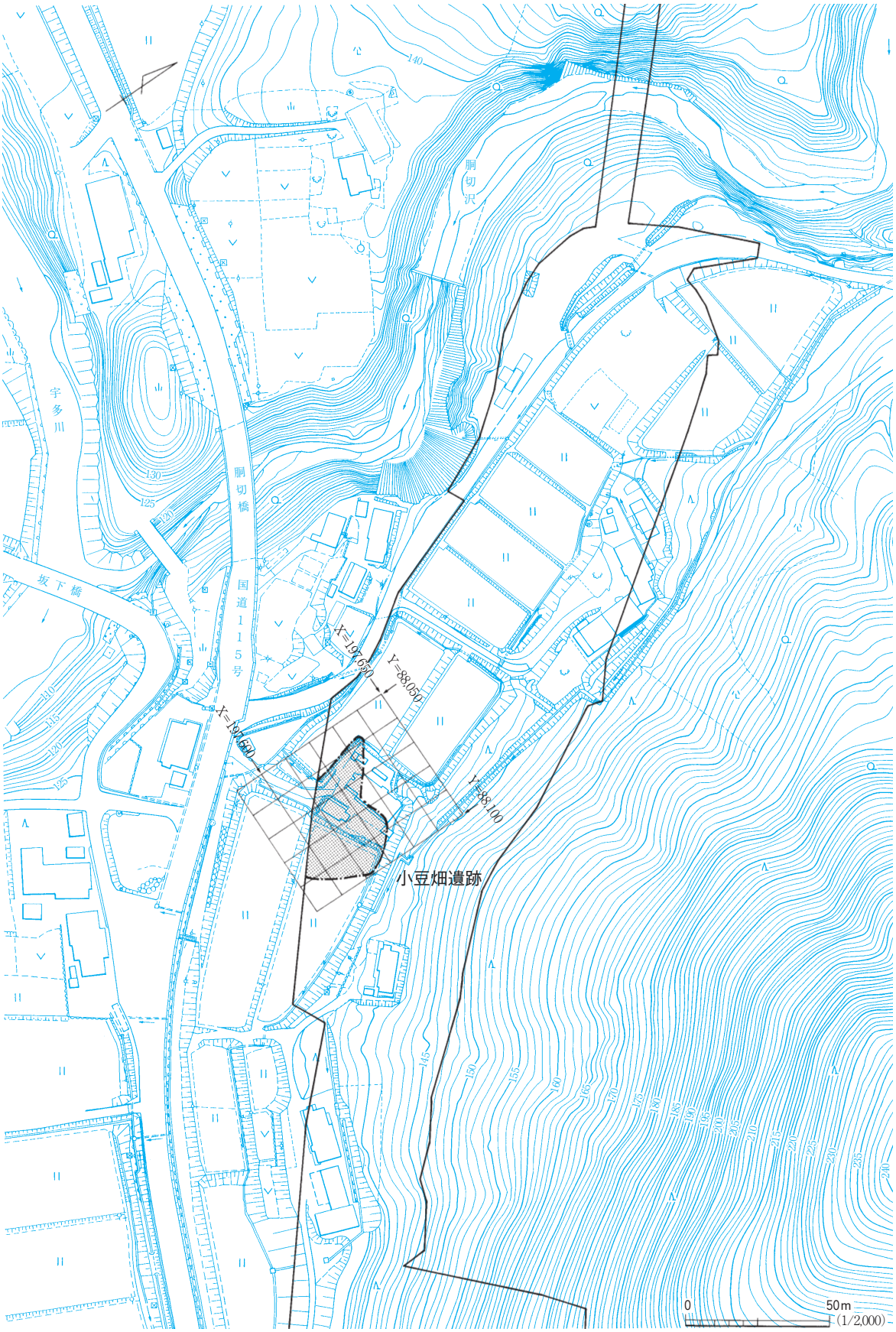


図137　小豆畑遺跡調査区位置図

５月中旬から下旬にかけては，天候に恵まれたこともあり，精査作業が順調に進んだ。遺物は殆ど希薄であったが，旧表土（ＬⅡ）中から若干の縄文土器片や土師器が出土した。

５月28日は，調査終了に向けて調査区全体の写真撮影を行い，５月30日には，現地において福島県教育委員会・㈶福島県文化振興事業団・阿武隈東道路建設事務所の各担当者が集まり，調査経過や成果・状況等を説明し，現地の引き渡しが完了した。

第３節　調査の方法

平成20年度に調査を実施した小豆畑遺跡の調査は，以下に基づいて行った。

グリッドの設定　調査区の位置を国土座標の中で正確に把握するために，世界測地系を基本とした測量用基準杭（X=197,610 ，Y=88,090）を打設した。国土座標値は，世界測地系公共座標第Ⅸ系に一致させ，一辺10m方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図137中に示した。

個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

基準線の設定　遺構の平面図を作成するに際しては，各グリッドを１ｍの方眼に分割し，これを基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点（Ｅ０，Ｓ０）とし，ここから東へ１ｍ行くごとにＥ１～９，南へ１ｍ行くごとにＳ１～９として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば，Ｆ10－Ｅ２・Ｓ４とは，Ｆ10グリッドの北西端の杭から，東に２ｍ，南に４ｍ離れた場所を示す。

発掘作業　発掘作業では，表土は重機を用いて除去した。その後，人手により包含層を除去し，遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに，層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積層は，アラビア数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

記録作成　調査の成果は，実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は，土坑や溝跡等は１／20で作成した。また，調査区内の地形図や遺構配置図は，１／100で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。調査現場での写真撮影は35㎜小型一眼レフカメラ，６×4.5判の中型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管　発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。（稲　村）

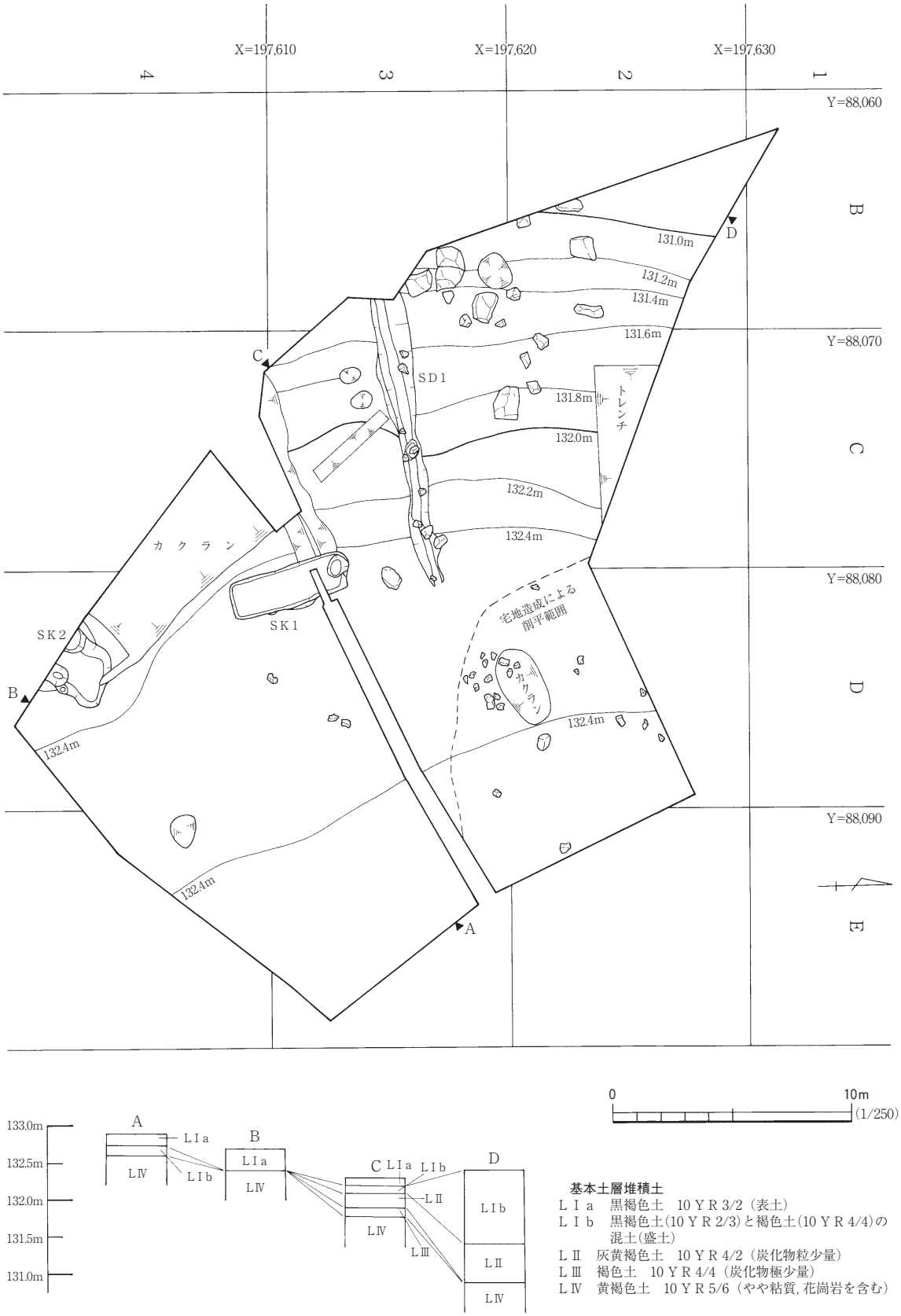


図138　遺構配置図・基本土層

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図138，写真１）

小豆畑遺跡から検出された遺構は，土坑２基，溝跡１条である。調査区内は，南側の宇多川に向かって緩やかに傾斜する地形を呈しており，調査区北半部は，旧宅地等の造成により削平が著しい。検出された遺構は，調査区内の中央付近からやや南寄りにかけての，旧表土が遺存している比較的標高が低い区域に集中している。

土坑は２基検出された。うち１基は長軸4.5m程の長方形を呈し，遺構内堆積土中には炭化物や焼土粒が多く混入していた。他の土坑も含め，遺構に伴う遺物が出土しなかったため，詳細な時期は不明であるが，概ね中世の所産と推測される。溝跡は，傾斜に直交する形で１条検出された。この溝跡は，旧表土からの掘り込みが認められ，堆積土中から相馬焼等の陶器が出土することを勘案すると，近世～近代の可能性がある。

出土遺物は，縄文土器７点，土師器２点，陶器２点で，遺物の大半は旧表土（ＬⅡ）から出土した。今回の調査で検出された遺構・遺物の年代は，縄文時代・古代，中世～近代まで及ぶが，その主体は中世・近世である。

基本土層（図138）

本遺跡では，基本土層を大きく４層に区分した。土層観察は調査区境の壁面を利用し，記録を行っている。以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩａ　：現表土・畑地耕作土の黒褐色土である。調査区全域に20～30cmの厚さで分布する。層中には遺物を含まない。

ＬＩｂ　：黒褐色土と褐色土の混土であり，プラスチック・空き瓶等の堆積から現代の盛り土と判断した。宅地が造成されていた西側の調査区に顕著に認められ，層厚は約20～120cm程であり，西端ほど厚く堆積していることから，宅地造成のための整地層であると判断した。調査に際しては基本的に本層まで重機による掘削を行った。層中には遺物は全く含まれない。

ＬⅡ　：耕地改修前の旧表土で灰黄褐色土と判断した。そのほとんどは，耕地改修時に削平されているが，調査区南半部分では，部分的に免れ残存している状況が認められる。層厚は約15cm程度である。層中には炭化物が比較的多く混入しており，縄文時代や古代の遺物が僅かに含まれる。調査西側の１号溝跡は，本層上面からの掘込みが認められることから，本層上面が近世～近代の遺構検出面となる。

ＬⅢ　：ＬⅡ直下に堆積する漸移層で，褐色をした軟弱な土層である。分布域はほとんどＬⅡの残存範囲と同範囲である。層中には炭化物が少量混入しており，縄文土器が僅かに含まれる。

ＬⅣ　：礫を含む黄褐色を基調とするローム層である。調査区のほぼ全面において確認されている。この層は遺跡が位置する丘陵の基盤層で，火砕流堆積物である。風化が進みかなり粘土化している。調査区東側付近は，宅地造成時に上位層が欠層しているため，土坑２基は本層上面での検出である。（稲　村）

第２節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は２基である。いずれも調査区南の緩斜面に位置している。１号土坑は，堆積土中に焼土や炭化物を多く含み，生産施設との関連が窺われる。２号土坑は，調査区外へ延びるため全体像が把握できず，また出土遺物がないため，時期･性格等については不明である。

１号土坑　ＳＫ１（図139，写真３）

本遺構は，調査区中央のＣ３，Ｂ３・４グリッドに位置する。遺構が確認された周辺は，標高132.4ｍ程の西向き緩斜面である。検出面はＬⅣ上面であるが，調査区際の壁面からは，ＬⅢ上面からの掘り込みが認められる。重複する遺構はない。

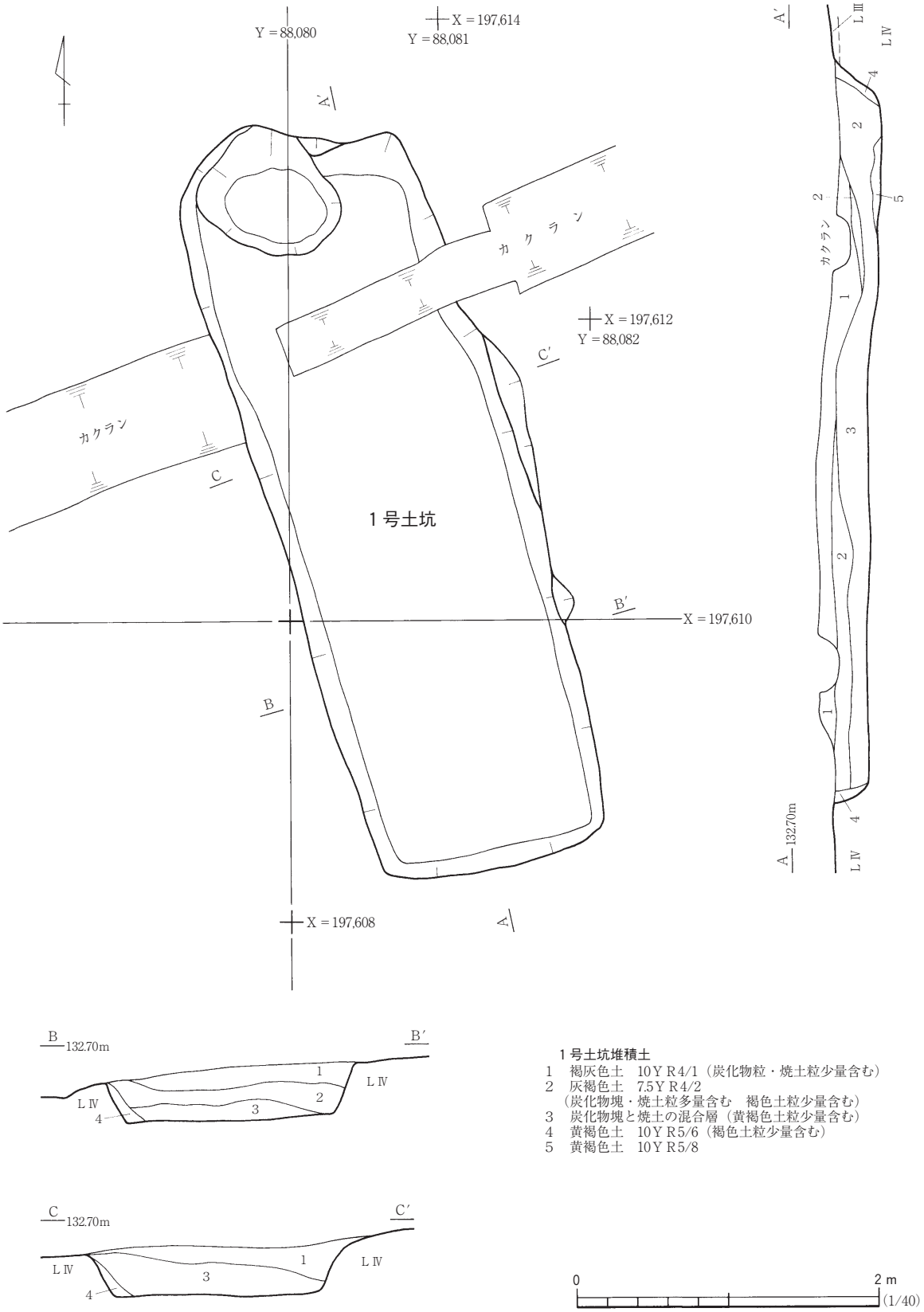
遺構内堆積土は，色調および混入物から５層に分層した。１層は炭化物を少量含み，比較的明るい色調を呈する。相対的に炭化物の量が少なく，粒子も小さいので遺構使用後の自然堆積の可能性が高い。２層は褐色土粒・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。また，本層の下位には比較的焼土粒が多く認められることから，機能時に本土坑を覆っていた層と考えられる。３層はほぼ純粋な炭化物層で，ほかは撹拌された層と判断される。４・５層はＬⅣに類似するので崩落土の可能性がある。

遺構の平面形は，長方形状を呈し，その規模は長軸5.2m，短軸1.85mを測る。周壁は，底面から急峻な立ち上りとなる。底面はほぼ平坦であり，検出面から最深部までの深さは38cmを測る。また，底面西側には，直径100cm・深さ12cm程の窪みがあり，鍋底状である。当初は重複関係かと推測したが，堆積土３層が窪みに入り込んであるため，遺構内施設と判断したが，用途は不明である。

本土坑からは，炭化物塊・炭化材が多量に出土した。大型の炭化材は３層中に多く出土した。他には，縄文土器片が５点出土した。ともに１・２層中からの出土で周囲から流入したものと考えられる。小破片で摩耗が著しいため，器種・部位・時期については判断できなかった。

本土坑は，炭化物の出土や焼土の分布から，木炭焼成のための土坑であると判断した。２層は，炭化材層の直上に堆積するので，上方を遮断した層とも考えられ，天井の役割をはたしたとみられる。この想定に立つならば，北壁に観察される張り出しは，煙出しのための施設の可能性が高い。

本遺構内からは共伴遺物がなく，明確な所属時期については不明である。しかし，３層に含まれ



１号土坑堆積土

1　褐灰色土　10Ｙ Ｒ4/1（炭化物粒・焼土粒少量含む）
2　灰褐色土　7.5Ｙ Ｒ4/2
（炭化物塊・焼土粒多量含む　褐色土粒少量含む）
3　炭化物塊と焼土の混合層（黄褐色土粒少量含む）
4　黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/6（褐色土粒少量含む）
5　黄褐色土　10Ｙ Ｒ5/8

図139　１号土坑

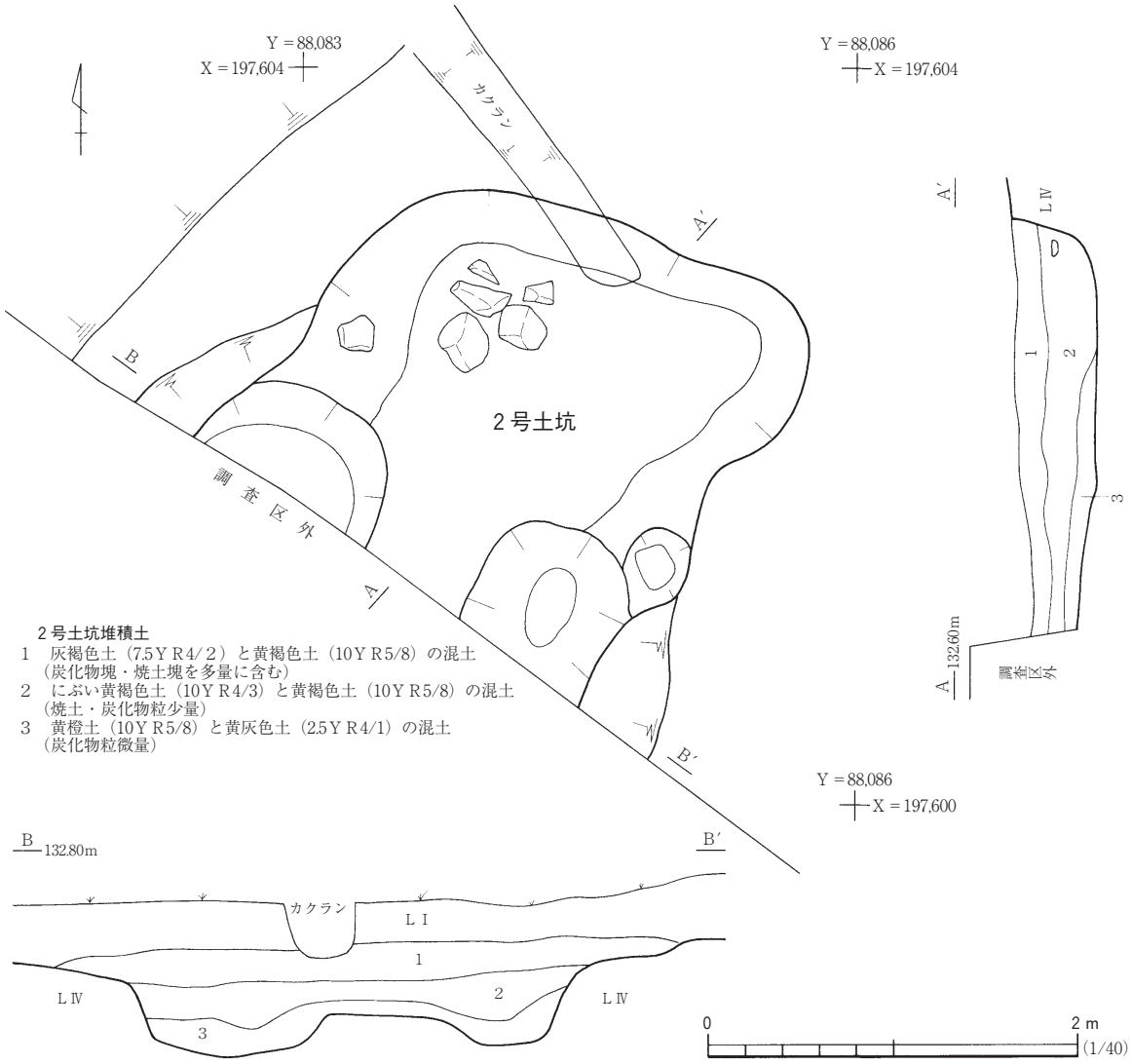


図140　２号土坑

た２点の炭化材について放射性炭素の年代測定を行ったところ12世紀末～13世紀初頭（もうひとつは13世紀代）という年代が示されている。その例から勘案すると，中世の生産遺跡との関連が窺われる。（稲　村）

２号土坑　ＳＫ２（図140，写真３）

調査区南側のＤ４グリッドに位置する。遺構は，南西側にかけて緩やかに傾斜する斜面に構築されており，遺構検出面はＬⅣ層となる。表土を除去した時点で，焼土や炭化物を多く検出したことから，遺構としての認識は容易であった。また，検出した時点では，住居跡の可能性が高いと判断したが，精査の結果，床面や焼土などが確認されなかったことなどから，土坑と判断した。調査前にはすでに一部撹乱を受けている箇所がみられたものの，遺構の残りは良好で，現代の撹乱以外に重複する遺構はない。

遺構内の堆積土は３層からなる。１層はＬⅣ層由来の褐色土系の土質で，炭化物や焼土粒を多く

含む。２層は１層に似た土質だが，炭化物や焼土が１層に比べて相対的に少ない特徴を有する。３層もＬⅣ層由来の土質と考えたが，ややグライ化している。堆積状況は３層ともほぼ水平をなし，おのおのがブロック状（２～４㎝大）に含まれることから，人為的な埋め戻しによる堆積と判断した。また，炭化物は上層が最も多く含まれ，下層に移行するにつれて減少する。

土坑の南側は調査区外に延長するが，確認された範囲での規模は不整の隅丸長方形を呈する。規模は，南北軸で2.3ｍ以上，東西で3.2ｍをそれぞれ測る。周壁は確認されうる北・西・東壁ともに急激に立ち上がる。周壁の高さは各壁とも40㎝内外を測る。底面は北側が平坦であるが，東・西壁には長軸１ｍほどの窪みがみられる。この窪みの断面形は皿形を呈し，調査区壁面での土層観察をみる限り，上層から掘り込まれてはいない。このことから，本土坑にともなうものと判断される。また，土坑北西部の底面近くには長軸20～30㎝大の礫が出土している。

遺物は，底面付近で出土した石以外は出土しておらず，土器なども皆無であった。礫は取りあげたのちに現地で洗浄したが，比熱や煤が付着したものを見いだすことができなかった。このため具体的な時期については言及できず，その性格も不明である。ただし，炭化物の多寡はあるものの，１号土坑に似た堆積土を有することから，これに付属する施設と考えることも可能となろう。

（管　野）

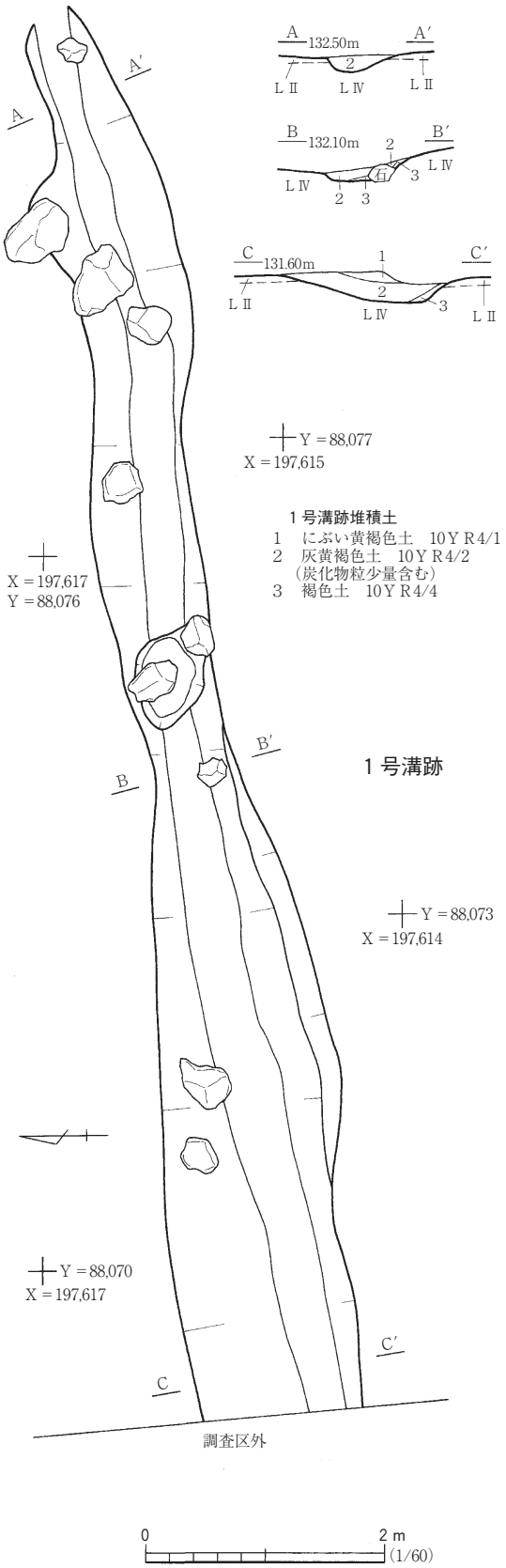
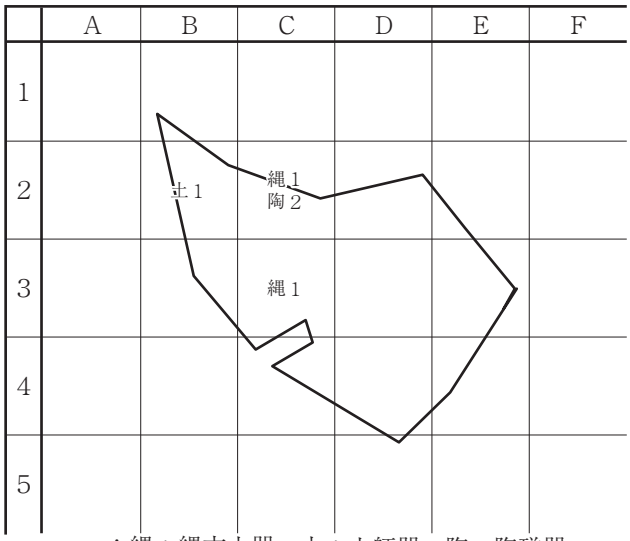


図141　１号溝跡

第３節　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は１条である。調査区のほぼ中央付近に位置し，斜面に対して直交

表19　グリッド別出土遺物点数表



＊縄：縄文土器　土：土師器　陶：陶磁器

するように巡っている。出土遺物から，近世～近代の溝跡と推測される。

１号溝跡　ＳＤ１（図141，写真４）

本遺構は，調査区中央付近のＢ・Ｃ・Ｄ３グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は，標高131.4m～132.4m程の西向き緩斜面である。検出面はＬⅡ上面である。遺構内堆積土は大きく３層に分層される。いずれも斜面上位からの流入が認められ，その状況から自然堆積と判断される。

検出した規模は東西約12.4m，溝幅0.85～1.50mを測り，ほぼ等高線に直交するように東西方向に直線的に延びる。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は浅い皿状を呈する。底面標高および検出面からの深さは，西側へ向かうほどやや深くなる。東西端での高底差は100cm前後である。溝跡底面および周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は，陶器片が２点出土した。ℓ１からの出土で周囲から流入したものと考えられる。小破片で摩耗が著しいため，器種・部位については判断できなかった。

本溝跡は，全長12m程の東西方向にほぼ直線的に延びる溝跡である。所属時期･性格については，伴出する遺物から近世～近代の所産であり，排水的な機能が推察される。（稲　村）

第４節　遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は非常に少なく，図化できたのは表土層および旧表土層のＬⅡ層から出土した３点のみである。

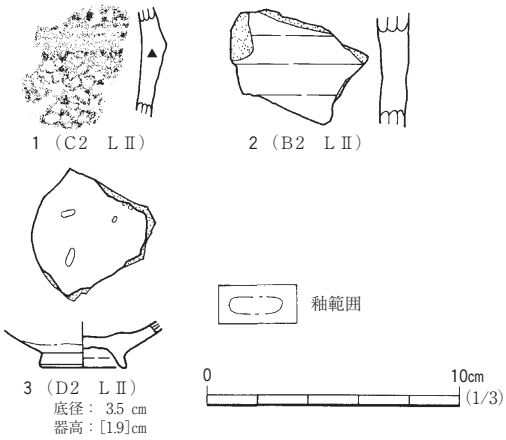


図142　遺構外出土遺物

142図１は縄文土器である。本遺跡から出土した縄文土器はいずれも摩滅が著しく，その多くが二次的な流れ込みによるものと推測される。１は胎土に繊維を混和している深鉢の口縁部片となる。土器器表面の摩滅が著しいが，口縁端部に刻み，胴部にループ文が観察される。縄文前期前葉の所産と考えられる。２はロクロ土師器甕の胴部片である。遺跡全体でも平安時代の土師器はその出土が少なく，僅かに２点のみを数え

る。３は大堀相馬焼の小碗である。高台部から体部下半の残存で，高台はやや直立する。内面および外面体部下半に灰釉がツケガケされており，特に内面は灰釉が白濁化している。また，内面見込みに重ね焼きの目跡が３箇所認められる。胎土は淡褐色で，細かい石英を多く含む。19世紀代の所産と考えられる。（管　野）

第３章　総　　括

今回の調査で検出された遺構は，土坑２基，溝跡１条である。時代を特定できたものは，調査区西側に位置する溝跡で，相馬焼等の出土遺物から近世～近代の所産である。土坑については，出土遺物が乏しいため，年代を把握できた遺構はなく，自然科学分析方法によって年代を特定している。

出土遺物では縄文土器・土師器など，総量でコンテナ0.1箱程度であった。出土遺物のほとんどは縄文土器で，その大半は旧表土中から出土したものである。ほぼ摩滅が著しく，年代を特定するのは困難である。本章では，ほぼ全体形を把握できた１号土坑に焦点をしぼってまとめてみたい。

１号土坑は，長辺5.2m・短辺1.85mを測る規模の大きい土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し，短辺北部が若干張り出している。底面および壁の一部には被熱して酸化面がみられ，部分的に還元化しているのも観察できる。堆積土は炭化材を基調とする黒褐色土と，炭化物を多量に含む層からなり，焼土も多量に含まれる。こうした所見から，木炭を焼いた土坑であることは明らかである。精査の結果，天井部などの構築物は想定できず窯構造をとらない，半地下式の木炭焼成土坑と考えた。

このような土坑の類例として，近年調査例が増加しており，特に浜通り地方に集中している。これは，近年調査が常磐自動車道建設関連等で浜通り地方に集中しているためであると思われる。管見にふれたものでは，南相馬市原町区八重米坂Ａ・Ｂ遺跡・同市小池田遺跡・同市羽山Ｂ遺跡，浪江町朴迫Ｃ遺跡・双葉町八房平Ｂ遺跡・大熊町上平Ａ遺跡・富岡町上郡Ｂ遺跡・楢葉町鍛冶屋遺跡・同町下小塙上ノ原遺跡・いわき市駒込遺跡・同市馬場Ａ遺跡などが挙げられる。特に小池田遺跡・八房平Ｂ遺跡・駒込遺跡例は，底面中央の長軸に沿って溝が走っており，おそらく焼成中に発生する樹脂や水分を集める施設と想定できる。これらの中には「炭窯」に扱われるものもあるが，本遺跡の遺構の名称としては「木炭焼成土坑」が適切と考える。

以上の所見から考えられる木炭焼成法は，「伏焼法」ないし「堆積製炭法」である可能性が高いとしている。「伏せ焼き」とは炭材の上に枝や葉などの可燃物を乗せ，さらに土をかぶせて外気を遮断させる方法で，半地下式の場合と地面に直接壁を構築する場合がある。平面形は長形を呈するものが多く，長軸の一方に焚口，もう一方に煙出しを設ける。焚口から着けられた火は，順次奥へ移動するが，その際，焚口と煙出し周辺の熱は外へ出るのに対し，中央部では熱の逃げ場がないため，遺構の中央部が最も被熱することとなる。自然に消火するのを待って，被せていた土を除いて木炭を取り出して使用する。生成された木炭は，比較的粗悪であるが，火付きが良く，家庭用の燃

料としては十分に利用可能であるという。

これらの特徴を，検出された遺構と比較してみる。共通点としては，①張り出しがあり，煙出し部とみられる。②木炭層の上に灰褐色土が堆積する。などがみられる。一方，今回の調査では，炭化材層と灰褐色土の間層に，葉や枝材など可燃物集中層がみられないという相違点も指摘できる。今後，成因の違いによる木炭層の分層が可能かを確認する作業が必要となろうと思われる。

また，立地する場所を見ると，おおよそ２つの様相が認められる。南相馬市小池田遺跡や浪江町朴迫Ｃ遺跡のように丘陵頂部または谷地部の平坦面上に構築されるものと，双葉町八房平Ｂ遺跡や郡山市影遺跡のように緩やかな斜面上に，長軸方向を等高線に平行して構築されるもので，本遺跡の１号土坑もこのタイプである。また，付近に製鉄炉跡や地下式木炭窯跡などの平安時代の製鉄関連遺跡に隣接して構築される例も若干見られる。

また，これまでの分析結果から，堆積土および底面から採取した木炭の樹種については，「クヌギ節」と「コナラ節」の鑑定結果が多いようである。炭材には，主に雑木を利用しており，炭材の利用からは地下式木炭窯との違いが認められない。

また，操業年代については，自然科学分析による年代測定を行った小池田遺跡を始めとした５例の結果があり，西暦にして12世紀から14世紀の間の値が示されている。１号土坑についても放射性炭素の年代測定により同様の年代が示されており，お互い関連のある遺構形態として更なる増加を待ち検討を加えたい。　（稲　村）

引用・参考文献

郡山市教育委員会他　1991「影遺跡」『郡山西部第二工業団地開発関連報告書4』

福島県教育委員会　2007『福島県内遺跡分調査報告14』福島県文化財調査報告書第447集

福島県教育委員会　1992「羽山Ｂ遺跡・八重米坂Ａ遺跡」
『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第281集

福島県教育委員会　1994「八重米坂Ａ遺跡・八重米坂Ｂ遺跡」
『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第297集

福島県教育委員会　1995「駒込遺跡・馬場Ａ遺跡」
『常磐自動車道遺跡調査報告４』福島県文化財調査報告書第316集

福島県教育委員会　2000「下小塙上ノ原遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告20』福島県文化財調査報告書第364集

福島県教育委員会　2001「鍛冶屋遺跡（第２次）」『常磐自動車道遺跡調査報告24』福島県文化財調査報告書第377集

福島県教育委員会　2002「上郡Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告32』福島県文化財調査報告書第391集

福島県教育委員会　2002「上平Ａ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告33』福島県文化財調査報告書第392集

福島県教育委員会　2006「八房平Ｂ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告45』福島県文化財調査報告書第435集

福島県教育委員会　2008「朴迫Ｃ遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告50』福島県文化財調査報告書第445集

福島県教育委員会　2008「小池田遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告51』福島県文化財調査報告書第450集

写　真　図　版

小豆畑（あずきばたけ）遺　跡

２－１　調査区全景（北から）

２－２　調査細部

a　調査前現況（東から）　b　基本土層（北西から）
c　遺構検出作業（西から）　d　遺構精査作業（西から）

２－３　１・２号土坑

a　１号土坑（南から）　b　１号土坑土層（南から）
c　２号土坑（北東から）　d　２号土坑土層（北東から）

２－４　１号溝跡，作業風景

a　１号溝跡完掘（東から）　b　１号溝跡土層（南から）
c　１号溝跡作業風景（北から）

第３編　自然科学分析

第１節　荻平遺跡出土赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線分析

㈶福島県文化振興事業団　小林　啓

１　はじめに

平成20年度常磐自動車道遺跡発掘調査事業に係る荻平遺跡の発掘調査では，土器表面に赤色顔料による彩色が施された土器（以下，赤彩土器）が数点出土している。本年度における当事業団の遺跡発掘調査事業においても，赤柴遺跡や横大道遺跡など複数の遺跡から赤彩土器が出土している。

また，福島県内における過去の発掘調査においても，県内全域から赤彩土器の出土事例が報告されている。しかし，過去の調査報告では，それら赤彩土器はその殆どが目視観察による分類に留まり，科学的手法による顔料の分析報告はごく一部の遺跡に限られている。

縄文時代や弥生時代の赤彩土器に利用された赤色顔料は，ベンガラ（Fe_2O_3）と水銀朱（HgS）の２種類があり，各々その発色要因となる金属元素が異なる。本報告では，赤彩土器顔料の種類を明らかにするため，Ｘ線分析顕微鏡（エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置）による赤彩土器顔料の元素定性を行った。

２　資　　料

対象資料は弥生土器片４点（31図10・11・25，59図１）である。いずれも弥生時代中期前葉の所産であり，磨消縄文手法が卓越する一群が本遺跡出土土器の主体となる弥生土器である。

本遺跡出土の弥生土器の類例をあげると，県内では阿賀野川水系に位置する西麻生遺跡（会津若松市），阿武隈川水系に位置する孫六橋遺跡（福島市）や御代田遺跡（郡山市），相馬・いわき周辺地域では岩下Ａ遺跡（飯舘村）や龍門寺遺跡（いわき市）などがある。県外では，距離的にも近い鱸沼遺跡（宮城県角田市）などがあげられる。これら遺跡の中で，本遺跡資料と最も近似するものは，岩下Ａ遺跡や鱸沼遺跡の土器群である。

３　方　　法

資料の元素定性は当事業団設置のＸ線分析顕微鏡を用いて，以下の条件により行った。

【分析条件】分析機器：Ｘ線分析顕微鏡（堀場製作所製XGT-2700），Ｘ線管球：ロジウム（Rh），検出器：半導体検出器，測定雰囲気：大気，管電圧：50kv，管電流：1.0mＡ，分析径：100μm，測定時間：120s

尚，文化財の分析は非破壊を原則とするため，分析用サンプルは採取せず土器表面の顔料箇所を直接分析した。

４　結　　果

分析の結果,赤彩土器の顔料箇所からは鉄（Fe）が顕著に検出された（図１～２）。前述のとおり，縄文時代や弥生時代の赤彩土器に利用された赤色顔料は，鉄を主成分とした「ベンガラ」（酸化第二鉄：Fe_2O_3）と水銀と硫黄の化合物である「水銀朱」（硫化水銀：HgS）の２種類である。分析結果から，いずれの土器についても赤色顔料の付着箇所から鉄（Fe）が顕著に検出され，水銀（Hg）が全く検出されていないことから，本資料に利用された赤色顔料は鉄由来の赤色顔料「ベンガラ」であると考えられる。

過去における福島県内の赤彩土器顔料に係る分析報告から，縄文後期及び晩期から弥生時代初頭にかけて，ベンガラが使用されていた事例が報告されている。今年度調査が行われた，横大道遺跡の赤彩土器顔料（縄文時代）もベンガラである。これらについては，未だ報告事例が乏しい状況ではあるが，本遺跡資料もこれまでの分析結果と同様の傾向を示すものとなる。今後，赤彩土器顔料の分析が継続的に行われることが望まれるが，同時に分析資料の考古学的な分類及び時期的，地域的特長等を併記することも必要である。

【参考文献】

福島県教育委員会　1979　『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告書第81集
福島県教育委員会　1985　『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅶ』福島県文化財調査報告書第150集
名取市教育委員会　1997　『原遺跡』名取市文化財調査報告書第38集
会津若松市教育委員会　2001『上雨屋遺跡』会津若松市文化財調査報告書第71集
福島県教育委員会　2002　『一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ』
福島県文化財調査報告書第403集
奥山誠義 2005「赤彩土器顔料の蛍光X線分析」『研究紀要2003』福島県文化財センター白河館研究紀要

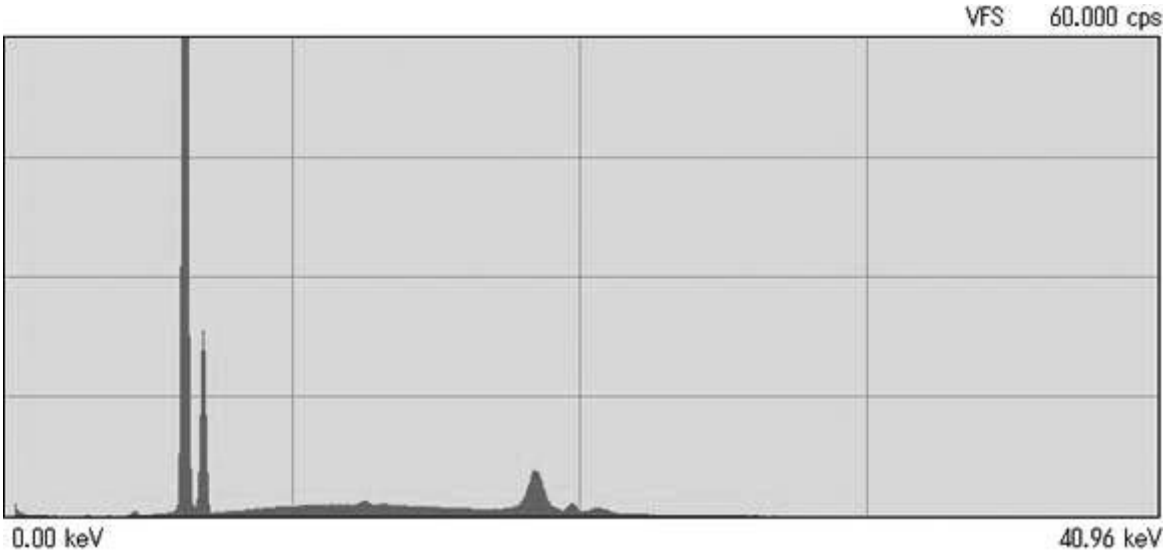
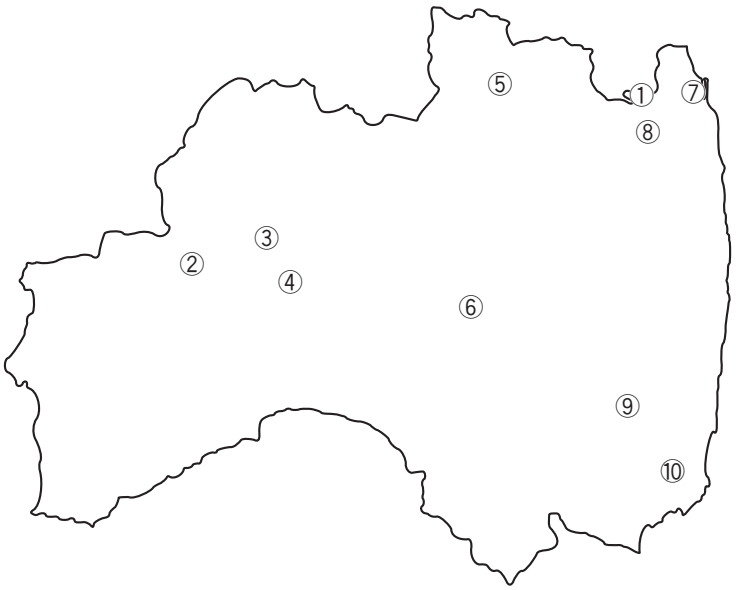


図１　赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線スペクトル①

図２　赤彩土器顔料の蛍光Ｘ線スペクトル②

表１　赤彩土器出土遺物（福島・宮城・山形）

遺跡名	市町村	時　　期	赤彩土器	分　析
荒屋敷遺跡	三島町	縄文時代晩期	○	ベンガラ
和泉遺跡	会津若松市	弥生時代中期	－	－
上雨屋遺跡	会津若松市	縄文時代晩期～弥生時代初頭	○	－
西麻生遺跡	会津若松市	弥生時代中期	－	－
孫六橋遺跡	福島市	弥生時代中期前葉	○	－
御代田遺跡	郡山市	弥生時代前期	○	－
松ヶ作Ａ遺跡	須賀川市	弥生時代前期	－	－
荻平遺跡	相馬市	弥生時代中期前葉	○	ベンガラ
柴迫Ａ遺跡	相馬市	弥生時代中期前葉	○	－
柴迫古墳群	相馬市	弥生時代中期前葉	○	－
作Ｂ遺跡	いわき市	弥生時代中期	○	－
龍門寺遺跡	いわき市	弥生時代中期	○	－
鱸沼遺跡	宮城県角田市	弥生時代中期前葉	○	－
高田Ｂ遺跡	宮城県仙台市	弥生時代中期前葉	○	ベンガラ
中在家南遺跡	宮城県仙台市	弥生時代中期前葉～中葉	○	ベンガラ
原遺跡	宮城県名取市	弥生時代中期前葉～中葉	○	－
生石２遺跡	山形県酒田市	弥生時代前期	○	－
北柳１遺跡	山形県山形市	弥生時代前期	○	ベンガラ



① 荻平遺跡（相馬市）
② 荒屋敷遺跡（三島町）
③ 西麻生遺跡（会津若松市）
④ 上雨屋遺跡（会津若松市）
⑤ 孫六橋遺跡（福島市）
⑥ 御代田遺跡（郡山市）
⑦ 柴迫Ａ遺跡（相馬市）
⑧ 岩下Ａ遺跡（飯舘村）
⑨ 作Ｂ遺跡（いわき市）
⑩ 龍門寺遺跡（いわき市）

図３　弥生期の赤彩土器出土遺跡（福島県内）

図４　岩下Ａ遺跡出土赤彩土器（福島県教育委員会　1979『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』より）

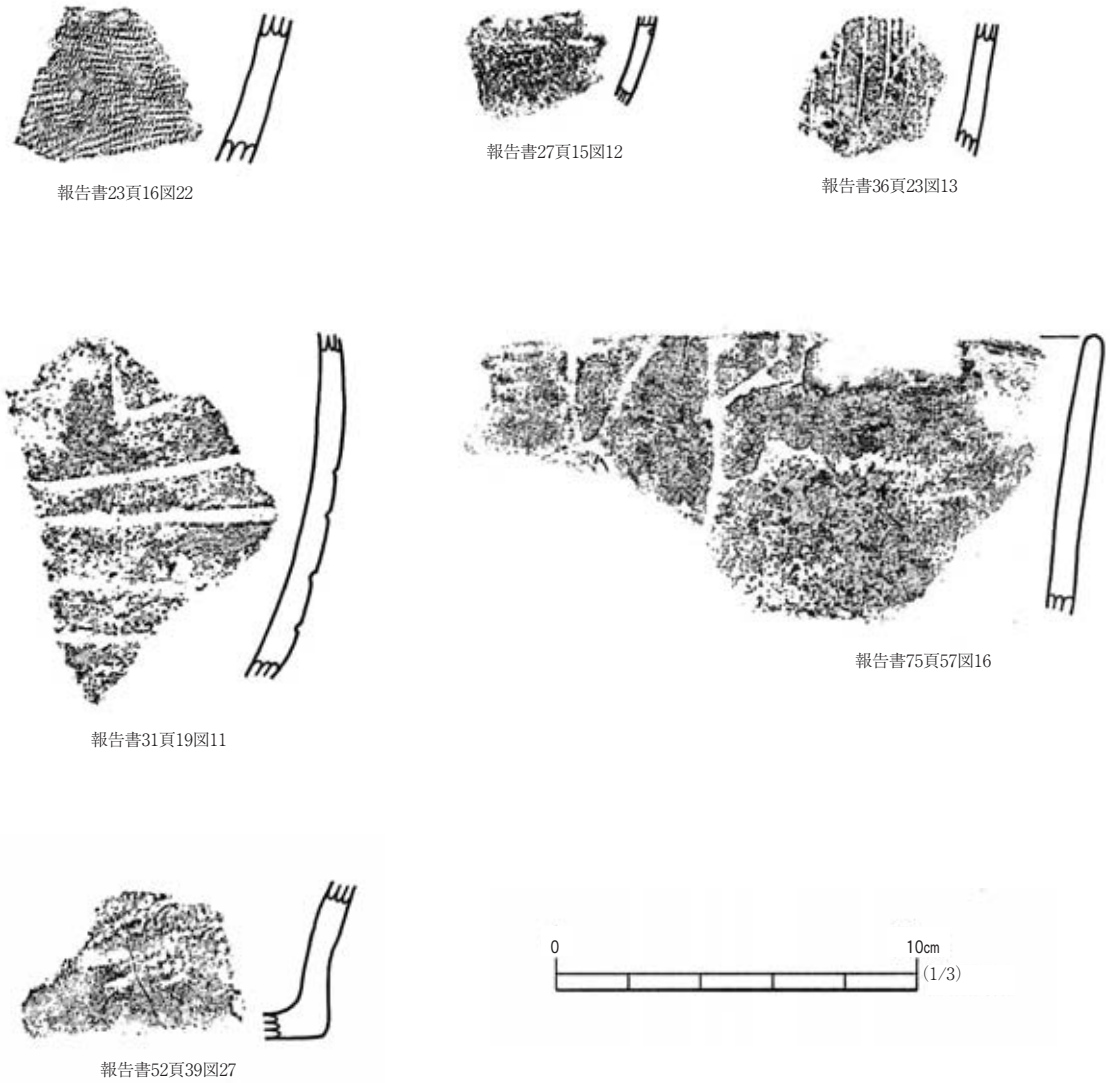


図５　柴迫Ａ遺跡･柴迫古墳群出土赤彩土器（福島県教育委員会　2002『相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅵ』より）

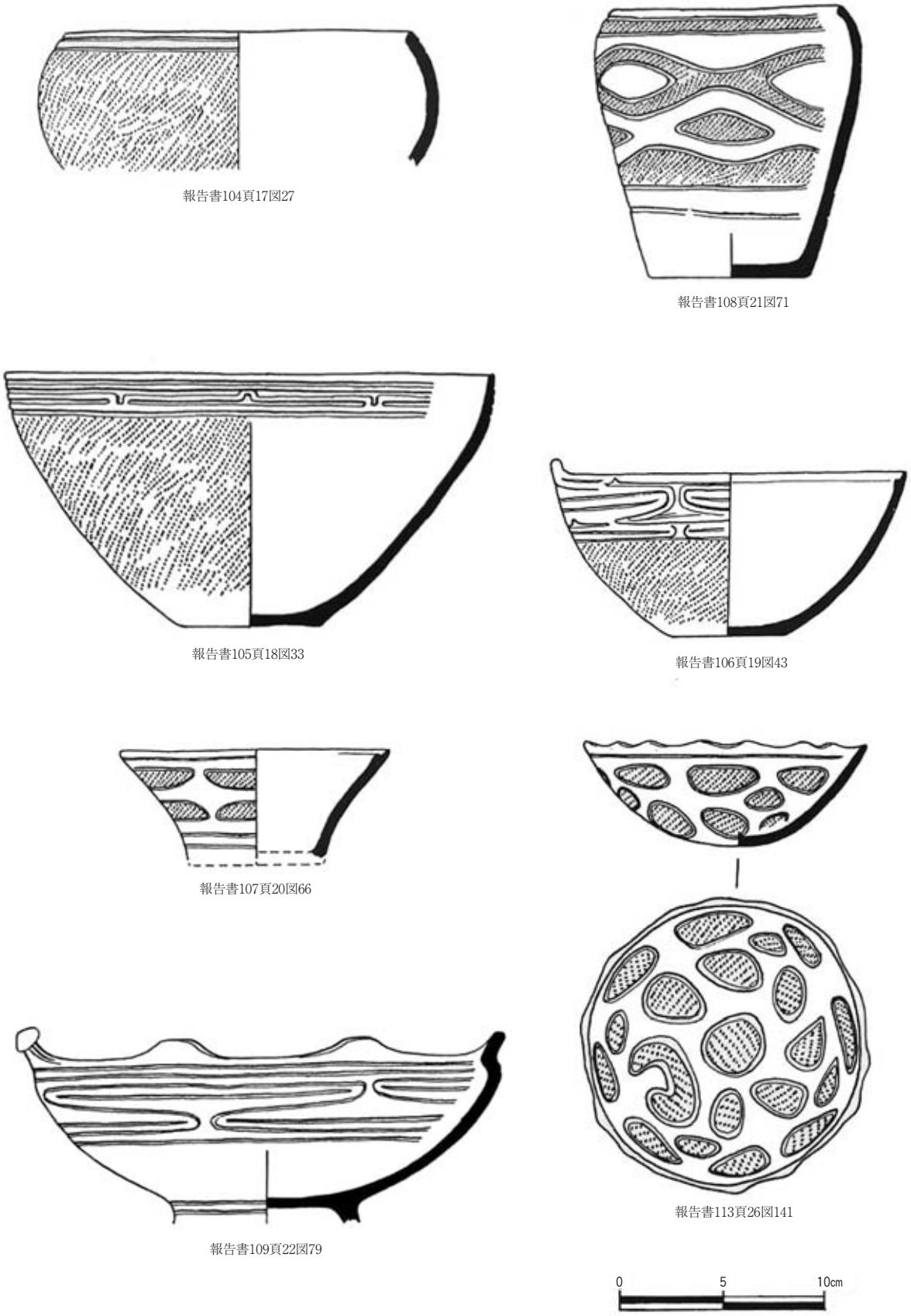


図６　鱸沼遺跡出土赤彩土器（志間泰治　1971『鱸沼遺跡』より）

第２節　小豆畑遺跡･荻平遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

㈱加速器分析研究所

１　測定対象試料

小豆畑遺跡は，福島県相馬市山上字小豆畑に所在する。測定対象試料は，土坑出土の炭化物４点（FB.AZB.001～004：IAAA-81567～81570）である。

荻平遺跡は，相馬市山上字荻平に所在する。測定対象試料は，住居跡出土の炭化物４点（FB.OGD.005～008：IAAA-81571～81574）と土器付着炭化物５点（FB.OGD.009～013：IAAA-81575～81579），土坑出土の炭化物１点（FB.OGD.014：IAAA-81580），包含層出土の土器付着炭化物11点（FB.OGD.015～025：IAAA-81581～81591），合計21点である。

土器付着炭化物では，FB.OGD.009～013が土器の外面，FB.OGD.015～025が土器の内面から試料を採取した。

２　測定の意義

遺構および土器の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（２）酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA処理において，アルカリ濃度が１N未満の場合，表中にAaAと記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

（３）試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

（４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

（６）グラファイトを内径１mmのカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

4　測定方法

測定機器は，３MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（１）年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は，δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（４）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

（５）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

6　測定結果

小豆畑遺跡の^{14}C年代は，１号土坑ℓ３出土の炭化物２点が820±30yrBP（FB.AZB.001）と750±30yrBP（FB.AZB.002），２号土坑ℓ２出土の炭化物２点が180±30yrBP（FB.AZB.003）と170±30yrBP（FB.AZB.004）である。１号土坑から出土した炭化物２点には^{14}C年代に開きがある。いずれも炭化物に認められた年輪の最外部から試料を採取しているが，樹皮を残す状態ではなく，樹木の伐採年代を示す年代とは言えない。FB.AZB.001は断面に円形の年輪が確認でき，芯部に近い部位と判断される。形状から考えて，樹木の枝の可能性がある。一方，FB.AZB.002は，断面に平行に近い年輪が確認され，辺材であると予想される。このように測定対象となった部位が帰属する年

輪の違いが^{14}C年代の差に反映された可能性がある。この場合，より外側に近い年輪の年代が伐採年代に近く，遺構の機能時期にも近いと判断される。暦年較正年代（１σ）から判断すれば、１号土坑は鎌倉時代前半，２号土坑は江戸時代から明治時代に該当する。

荻平遺跡の遺構出土試料の^{14}C年代は，33号住居跡ピット２のℓ１の炭化物２点が1040±30yrBP（FB.OGD.005）と1050±30yrBP（FB.OGD.006），53号住居跡の炉跡の炭化物２点が1550±30yrBP（FB.OGD.007）と1560±30yrBP（FB.OGD.008），42号住居跡の床面の土器付着炭化物２点が2500±30yrBP（FB.OGD.009）と2490±30yrBP（FB.OGD.010），47号住居跡ℓ１の土器付着炭化物２点が2290±30yrBP（FB.OGD.011）と2230±30yrBP（FB.OGD.012），53号住居跡ℓ２の土器付着炭化物が2230±30yrBP（FB.OGD.013），48号土坑ℓ１の炭化物が1220±30yrBP（FB.OGD.014）である。

同一遺構から出土した試料の^{14}C年代は，誤差範囲内で一致し，妥当な年代と判断される。暦年較正年代（1σ）から判断すれば，33号住居跡ピット２出土の２点が977～1020AD，53号住居跡の炉跡出土の２点が435～540AD，42号住居跡の床面出土の２点が765～545BC，47号住居跡ℓ１出土の２点が398～211BC，に含まれる。53号住居跡ℓ２の土器付着炭化物は，同じく53号住居跡の炉跡の年代と大きく異なり377～211BCに含まれ，別時期の所産と考えられる。48号土坑ℓ１の炭化物は722～868ADに含まれる。

包含層出土試料の^{14}C年代は，C4-B3グリッドＬⅠ出土の土器付着炭化物が6190±40yrBP（FB.OGD.015），C4-A3グリッドＬⅢ出土の土器付着炭化物が4930±40yrBP（FB.OGD.016），C4-B3グリッドＬⅠ出土の土器付着炭化物５点が4980±40yrBP（FB.OGD.017），6230±40yrBP（FB.OGD.018），6170±40yrBP（FB.OGD.019），4890±40yrBP（FB.OGD.020），6170±40yrBP（FB.OGD.021），C4-F7グリッドＬⅡ出土の土器付着炭化物が5040±30yrBP（FB.OGD.022），C4-C4グリッドＬⅡ出土の土器付着炭化物２点が4980±30yrBP（FB.OGD.023）と5020±40yrBP（FB.OGD.024），C4-E7グリッドＬⅡ出土の土器付着炭化物6270±40yrBP（FB.OGD.025）である。これらは，縄文時代早期末から前期初頭（FB.OGD.015・018・019・021・025）と，縄文時代前期後葉（FB.OGD.017・018・020・022・023・024）に分かれる。なお，FB.OGD.015～025については，土器の内面から試料を得ているが，δ^{13}C値が-25‰前後であることから陸生起源と判断され，海洋リザーバー効果について考慮する必要は無い。

炭化物の炭素含有率はすべて64％以上と十分な値であった。土器外面付着炭化物では，50％以上が多かったが，FB.OGD.010が39.2％，FB.OGD.013が37.9％とやや低い値であった。土器内面付着炭化物では，多くが50％以上であったが，FB.OGD.017が35.5％，FB.OGD.019が6.7％，FB.OGD.020が19.5％，FB.OGD.021が39.5％と低い値が認められた。炭素含有率は試料の由来に関係し，土器内面の付着物では，その内容物の性格を反映している可能性が高い。そのほかの化学処理や測定内容には問題が無く，^{14}C年代もまとまった値であることから，問題の無い測定結果と判断される。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 ´Wiggle Matching´ radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

表１　測定試料及び処理，結果

試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
					Libby Age（yrBP）	pMC（%）
FB. AZB. 001	1号土坑　ℓ３	炭化物	AAA	−29.50±0.35	820±30	90.34±0.31
FB. AZB. 002	1号土坑　ℓ３	炭化物	AAA	−28.87±0.36	750±30	91.05±0.30
FB. AZB. 003	2号土坑　ℓ２	炭化物	AAA	−27.57±0.36	180±30	97.76±0.31
FB. AZB. 004	2号土坑　ℓ２	炭化物	AAA	−29.03±0.54	170±30	97.88±0.34
FB. OGD. 005	33号住居跡ピット２　ℓ１	炭化物	AAA	−26.05±0.49	1,040±30	87.81±0.30
FB. OGD. 006	33号住居跡ピット２　ℓ１	炭化物	AAA	−26.73±0.43	1,050±30	87.71±0.30
FB. OGD. 007	53号住居跡　炉跡	炭化物	AAA	−28.92±0.43	1,550±30	82.44±0.30
FB. OGD. 008	53号住居跡　炉跡	炭化物	AAA	−27.10±0.53	1,560±30	82.32±0.30
FB. OGD. 009	42号住居跡　床面	土器付着炭化物	AaA	−22.78±0.49	2,500±30	73.24±0.29
FB. OGD. 010	42号住居跡　床面	土器付着炭化物	AaA	−24.20±0.42	2,490±30	73.31±0.28
FB. OGD. 011	47号住居跡　ℓ１	土器付着炭化物	AaA	−24.15±0.60	2,290±30	75.23±0.27
FB. OGD. 012	47号住居跡　ℓ１	土器付着炭化物	AaA	−23.58±0.52	2,230±30	75.76±0.27
FB. OGD. 013	53号住居跡　ℓ２	土器付着炭化物	AaA	−26.61±0.56	2,230±30	75.73±0.28
FB. OGD. 014	48号土坑　ℓ１	炭化物	AAA	−29.53±0.49	1,220±30	85.86±0.30
FB. OGD. 015	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−26.44±0.58	6,190±40	46.26±0.21
FB. OGD. 016	C4−A3グリッドＬⅢ	土器付着炭化物	AaA	−28.03±0.63	4,930±40	54.15±0.24
FB. OGD. 017	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−26.54±0.82	4,980±40	53.77±0.26
FB. OGD. 018	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−23.73±0.57	6,230±40	46.06±0.22
FB. OGD. 019	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−27.47±0.25	6,170±40	46.38±0.22
FB. OGD. 020	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−26.94±0.20	4,890±40	54.42±0.24
FB. OGD. 021	C4−B3グリッドＬⅠ	土器付着炭化物	AaA	−26.89±0.32	6,170±40	46.39±0.23
FB. OGD. 022	C4−F7グリッドＬⅡ	土器付着炭化物	AaA	−27.34±0.46	5,040±30	53.40±0.22
FB. OGD. 023	C4−C4グリッドＬⅡ	土器付着炭化物	AaA	−25.05±0.41	4,980±30	53.78±0.22
FB. OGD. 024	C4−C4グリッドＬⅡ	土器付着炭化物	AaA	−29.11±0.41	5,020±40	53.56±0.23
FB. OGD. 025	C4−E7グリッドＬⅡ	土器付着炭化物	AaA	−25.49±0.49	6,270±40	45.81±0.20

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果（１）

試料番号	δ13C補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)	(yrBP)		
FB.AZB.001 (IAAA81567)	890±30	89.50±0.30	816±27	1212AD−1260AD(68.2%)	1173AD−1267AD(95.4%)
FB.AZB.002 (IAAA81568)	820±30	90.33±0.29	752±26	1254AD−1283AD(68.2%)	1223AD−1284AD(95.4%)
FB.AZB.003 (IAAA81569)	220±30	97.25±0.30	182±25	1666AD−1683AD(13.5%) 1736AD−1784AD(36.0%) 1796AD−1805AD(5.8%) 1936AD−1952AD(12.8%)	1659AD−1691AD(19.4%) 1728AD−1811AD(56.0%) 1922AD−1954AD(20.0%)
FB.AZB.004 (IAAA81570)	240±30	97.07±0.31	172±27	1669AD−1683AD(11.8%) 1735AD−1781AD(38.5%) 1799AD−1805AD(5.2%) 1930AD−1947AD(12.8%)	1661AD−1697AD(17.7%) 1725AD−1815AD(52.8%) 1835AD−1878AD(5.5%) 1916AD−1954AD(19.4%)
FB.OGD.005 (IAAA81571)	1,060±30	87.62±0.29	1,044±27	985AD−1020AD(68.2%)	898AD−919AD(7.0%) 962AD−1029AD(88.4%)
FB.OGD.006 (IAAA81572)	1,080±30	87.40±0.29	1,053±27	977AD−1019AD(68.2%)	898AD−920AD(10.7%) 945AD−1025AD(84.7%)
FB.OGD.007 (IAAA81573)	1,620±30	81.78±0.29	1,550±29	436AD−490AD(44.0%) 509AD−518AD(5.6%) 529AD−552AD(18.5%)	426AD−575AD(95.4%)
FB.OGD.008 (IAAA81574)	1,600±30	81.96±0.28	1,563±28	435AD−492AD(48.6%) 508AD−519AD(9.1%) 528AD−540AD(10.5%)	425AD−560AD(95.4%)
FB.OGD.009 (IAAA81575)	2,460±30	73.58±0.28	2,501±31	765BC−737BC(12.3%) 689BC−663BC(9.6%) 649BC−548BC(46.4%)	786BC−517BC(95.4%)
FB.OGD.010 (IAAA81576)	2,480±30	73.43±0.28	2,494±31	763BC−732BC(12.6%) 691BC−681BC(4.0%) 672BC−661BC(4.6%) 651BC−545BC(47.0%)	783BC−510BC(94.7%) 436BC−426BC(0.7%)
FB.OGD.011 (IAAA81577)	2,270±30	75.37±0.25	2,286±28	398BC−361BC(60.3%) 272BC−262BC(7.9%)	402BC−354BC(65.5%) 291BC−231BC(29.9%)
FB.OGD.012 (IAAA81578)	2,210±30	75.98±0.26	2,230±29	373BC−352BC(14.0%) 297BC−228BC(47.7%) 221BC−211BC(6.5%)	387BC−342BC(22.9%) 326BC−204BC(72.5%)
FB.OGD.013 (IAAA81579)	2,260±30	75.48±0.27	2,233±29	377BC−352BC(16.3%) 295BC−229BC(46.5%) 220BC−211BC(5.4%)	388BC−343BC(23.9%) 324BC−205BC(71.5%)
FB.OGD.014 (IAAA81580)	1,300±30	85.07±0.28	1,224±27	722AD−741AD(10.8%) 770AD−830AD(39.2%) 837AD−868AD(18.1%)	692AD−749AD(23.2%) 763AD−885AD(72.2%)
FB.OGD.015 (IAAA81581)	6,220±40	46.13±0.20	6,192±36	5214BC−5202BC(6.5%) 5176BC−5070BC(61.7%)	5292BC−5267BC(3.0%) 5262BC−5250BC(1.1%) 5229BC−5035BC(91.3%)
FB.OGD.016 (IAAA81582)	4,980±30	53.81±0.22	4,928±34	3757BC−3744BC(5.9%) 3713BC−3654BC(62.3%)	3776BC−3647BC(95.4%)
FB.OGD.017 (IAAA81583)	5,010±40	53.60±0.24	4,984±38	3797BC−3706BC(68.2%)	3937BC−3872BC(15.8%) 3810BC−3659BC(79.6%)
FB.OGD.018 (IAAA81584)	6,210±40	46.18±0.21	6,228±38	5297BC−5242BC(26.6%) 5231BC−5207BC(14.7%) 5163BC−5136BC(11.0%) 5130BC−5119BC(4.6%) 5106BC−5079BC(11.3%)	5305BC−5196BC(51.3%) 5180BC−5061BC(44.1%)
FB.OGD.019 (IAAA81585)	6,210±40	46.15±0.22	6,171±39	5208BC−5196BC(6.2%) 5180BC−5062BC(62.0%)	5221BC−5001BC(95.4%)
FB.OGD.020 (IAAA81586)	4,920±40	54.20±0.23	4,887±34	3695BC−3645BC(68.2%)	3761BC−3742BC(2.5%) 3733BC−3726BC(0.8%) 3715BC−3635BC(92.1%)

表３　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果（２）

測定番号	δ 13C補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)	(yrBP)		
FB.OGD.021 (IAAA81587)	6,200±40	46.21±0.22	6,170±39	5208BC−5196BC(6.0%) 5180BC−5062BC(62.2%)	5220BC−5001BC(95.4%)
FB.OGD.022 (IAAA81588)	5,080±30	53.15±0.22	5,038±33	3941BC−3858BC(49.6%) 3816BC−3781BC(18.6%)	3951BC−3761BC(93.0%) 3737BC−3734BC(0.5%) 3725BC−3715BC(1.9%)
FB.OGD.023 (IAAA81589)	4,980±30	53.77±0.21	4,983±32	3786BC−3711BC(68.2%)	3931BC−3877BC(11.1%) 3805BC−3693BC(82.0%) 3682BC−3664BC(2.3%)
FB.OGD.024 (IAAA81590)	5,080±30	53.11±0.23	5,015±34	3931BC−3877BC(29.7%) 3805BC−3760BC(28.3%) 3741BC−3714BC(10.2%)	3943BC−3856BC(39.4%) 3846BC−3833BC(2.1%) 3823BC−3708BC(53.9%)
FB.OGD.025 (IAAA81591)	6,280±30	45.76±0.19	6,271±35	5300BC−5223BC(68.2%)	5324BC−5207BC(92.5%) 5162BC−5138BC(1.4%) 5129BC−5120BC(0.6%) 5093BC−5080BC(1.0%)

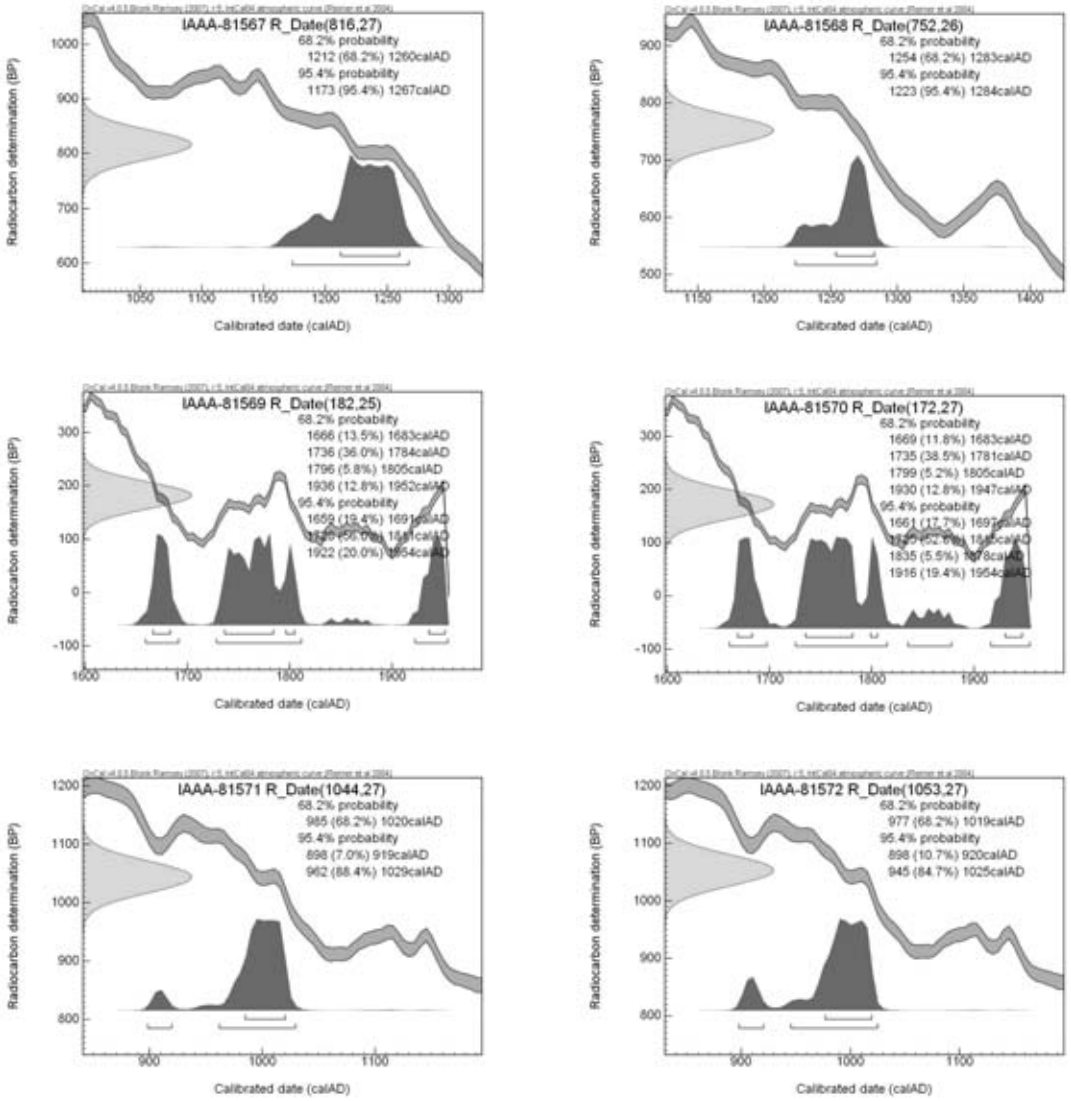


図１　暦年較正結果（１）

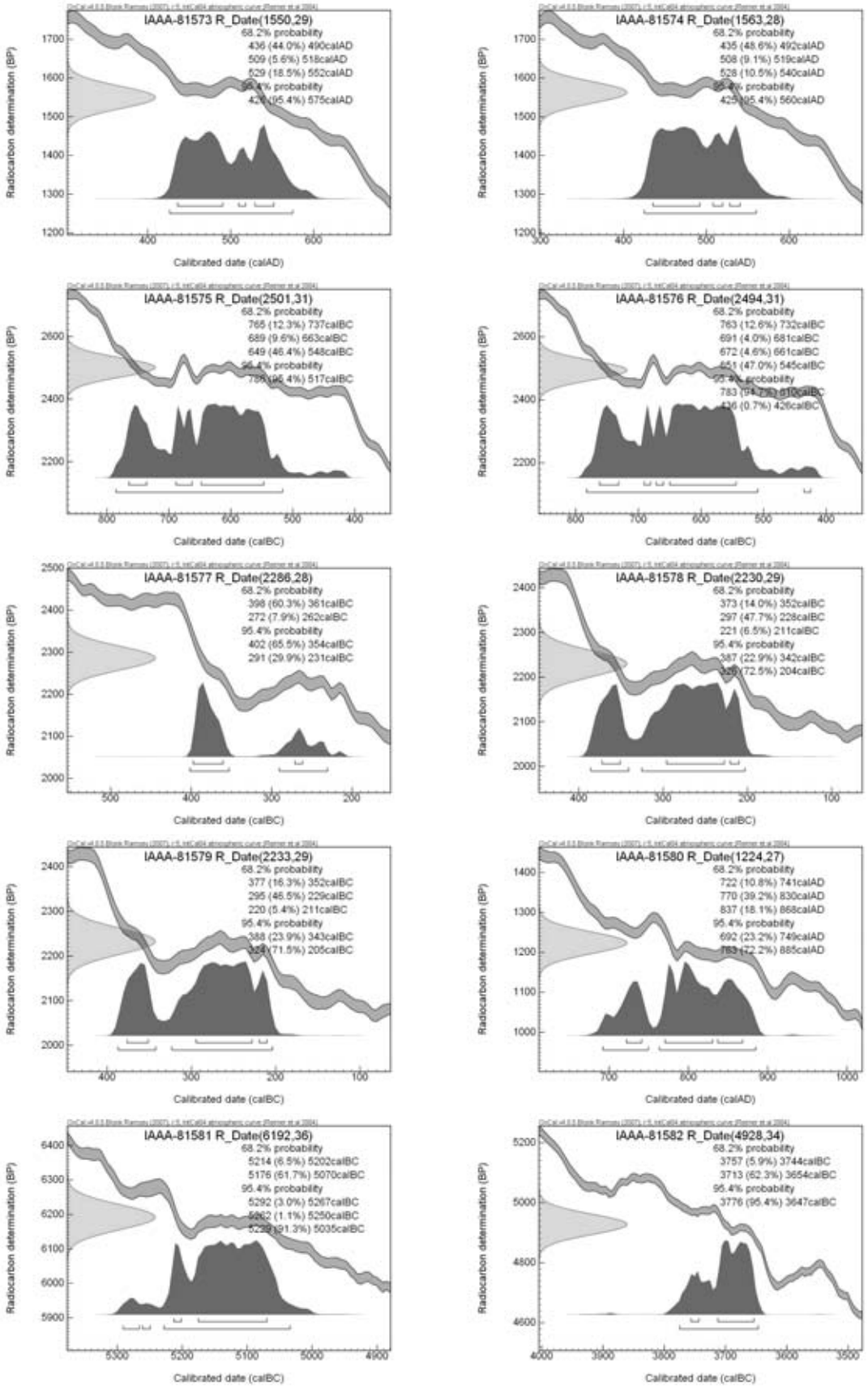

IAAA-81573 R_Date(1550,29)
68.2% probability
436 (44.0%) 490calAD
509 (5.6%) 518calAD
529 (18.5%) 552calAD
95.4% probability
426 (95.4%) 575calAD
IAAA-81574 R_Date(1563,28)
68.2% probability
435 (48.6%) 492calAD
508 (9.1%) 519calAD
528 (10.5%) 540calAD
95.4% probability
425 (95.4%) 560calAD
IAAA-81575 R_Date(2501,31)
68.2% probability
765 (12.3%) 737calBC
689 (9.6%) 663calBC
649 (46.4%) 548calBC
95.4% probability
788 (95.4%) 517calBC
IAAA-81576 R_Date(2494,31)
68.2% probability
763 (12.6%) 732calBC
691 (4.0%) 681calBC
672 (4.6%) 661calBC
651 (47.0%) 545calBC
95.4% probability
783 (94.7%) 510calBC
436 (0.7%) 426calBC
IAAA-81577 R_Date(2286,28)
68.2% probability
398 (60.3%) 361calBC
272 (7.9%) 262calBC
95.4% probability
402 (65.5%) 354calBC
291 (29.9%) 231calBC
IAAA-81578 R_Date(2230,29)
68.2% probability
373 (14.0%) 352calBC
297 (47.7%) 228calBC
221 (6.5%) 211calBC
95.4% probability
387 (22.9%) 342calBC
329 (72.5%) 204calBC
IAAA-81579 R_Date(2233,29)
68.2% probability
377 (16.3%) 352calBC
295 (46.5%) 229calBC
220 (5.4%) 211calBC
95.4% probability
388 (23.9%) 343calBC
329 (71.5%) 205calBC
IAAA-81580 R_Date(1224,27)
68.2% probability
722 (10.8%) 741calAD
770 (39.2%) 830calAD
837 (18.1%) 868calAD
95.4% probability
692 (23.2%) 749calAD
783 (72.2%) 885calAD
IAAA-81581 R_Date(6192,36)
68.2% probability
5214 (6.5%) 5202calBC
5176 (61.7%) 5070calBC
95.4% probability
5292 (3.0%) 5267calBC
5262 (1.1%) 5250calBC
5229 (91.3%) 5035calBC
IAAA-81582 R_Date(4928,34)
68.2% probability
3757 (5.9%) 3744calBC
3713 (62.3%) 3654calBC
95.4% probability
3776 (95.4%) 3647calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)
Calibrated date (calBC)

図２　暦年較正結果（２）

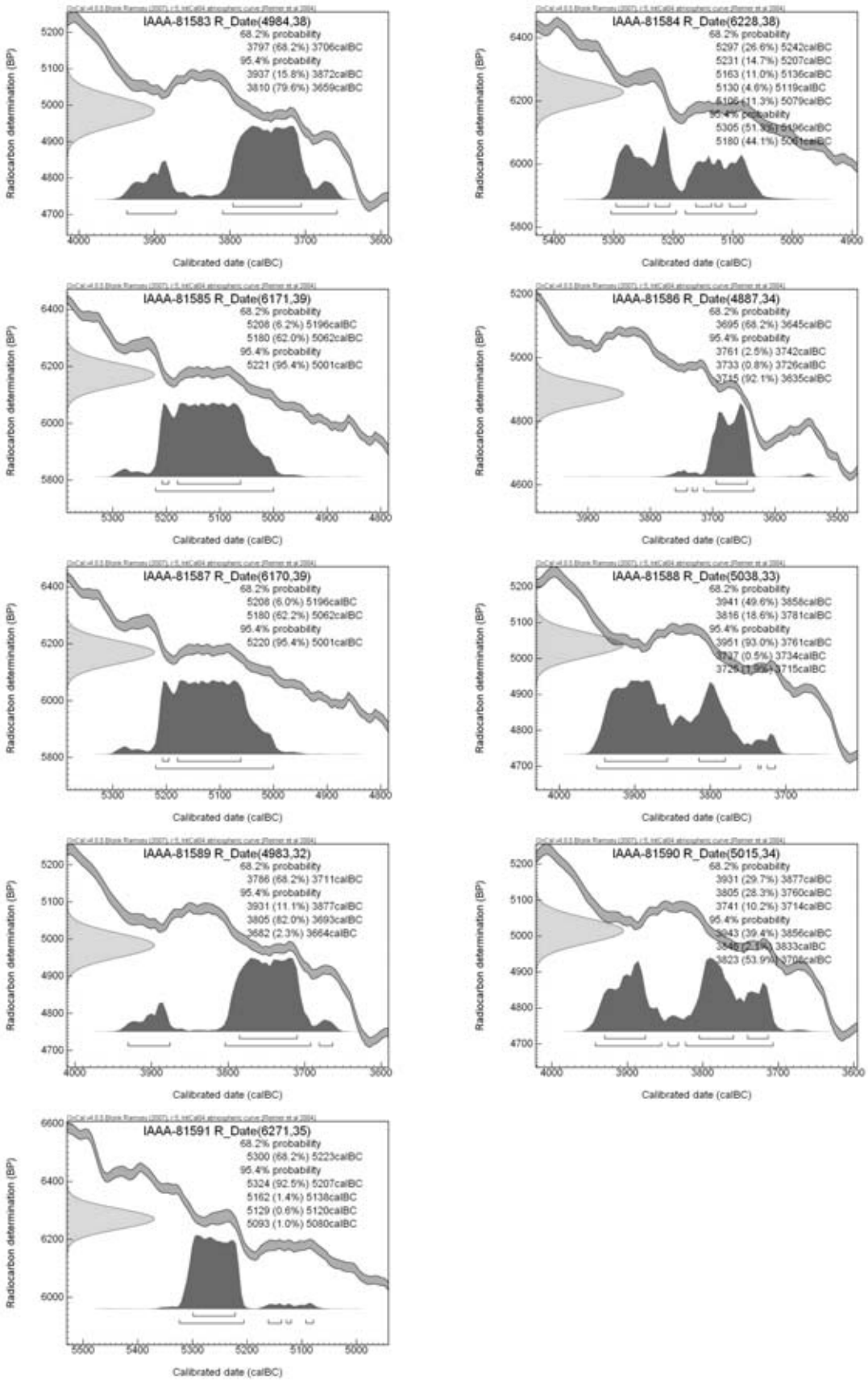

IAAA-81583 R_Date(4984,38)
68.2% probability
3797 (68.2%) 3706calBC
95.4% probability
3937 (15.8%) 3872calBC
3810 (79.6%) 3659calBC
IAAA-81584 R_Date(6228,38)
68.2% probability
5297 (26.6%) 5242calBC
5231 (14.7%) 5207calBC
5163 (11.0%) 5136calBC
5130 (4.6%) 5119calBC
5106 (11.3%) 5079calBC
95.4% probability
5305 (51.3%) 5196calBC
5180 (44.1%) 5001calBC
IAAA-81585 R_Date(6171,39)
68.2% probability
5208 (6.2%) 5196calBC
5180 (62.0%) 5062calBC
95.4% probability
5221 (95.4%) 5001calBC
IAAA-81586 R_Date(4887,34)
68.2% probability
3695 (68.2%) 3645calBC
95.4% probability
3761 (2.5%) 3742calBC
3733 (0.8%) 3726calBC
3715 (92.1%) 3635calBC
IAAA-81587 R_Date(6170,39)
68.2% probability
5208 (6.0%) 5196calBC
5180 (62.2%) 5062calBC
95.4% probability
5220 (95.4%) 5001calBC
IAAA-81588 R_Date(5038,33)
68.2% probability
3941 (49.6%) 3858calBC
3816 (18.6%) 3781calBC
95.4% probability
3951 (93.0%) 3761calBC
3737 (0.5%) 3734calBC
3726 (1.9%) 3715calBC
IAAA-81589 R_Date(4983,32)
68.2% probability
3786 (68.2%) 3711calBC
95.4% probability
3931 (11.1%) 3877calBC
3805 (82.0%) 3693calBC
3682 (2.3%) 3664calBC
IAAA-81590 R_Date(5015,34)
68.2% probability
3931 (29.7%) 3877calBC
3805 (28.3%) 3760calBC
3741 (10.2%) 3714calBC
95.4% probability
3943 (39.4%) 3856calBC
3848 (2.1%) 3833calBC
3823 (53.9%) 3706calBC
IAAA-81591 R_Date(6271,35)
68.2% probability
5300 (68.2%) 5223calBC
95.4% probability
5324 (92.5%) 5207calBC
5162 (1.4%) 5138calBC
5129 (0.6%) 5120calBC
5093 (1.0%) 5080calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)

図３　暦年較正結果（３）

第３節　荻平遺跡鉄製品及び製鉄遺物化学分析調査

JFEテクノリサーチ株式会社分析・評価事業部埋蔵文化財調査研究室

１　はじめに

㈶福島県文化振興事業団から，相馬市山上字荻平にある荻平遺跡から出土した製鉄遺物について，学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析調査を依頼された。調査の観点として，出土鉄滓の化学成分分析，外観観察，ミクロ組織観察，Ｘ線回折等に基づき，試料の製造工程上の位置づけおよび始発原料等を中心に調査した。その結果について報告する。

２　調査項目および試験・観察方法

（１）　調査項目

調査試料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表３に示す。

（２）　調査方法

（ⅰ）重量計測、外観観察および金属探知調査

試料重量の計量は電子天秤を使用して行い，少数点２位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に，試料の外観を㎜単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。試料の出土位置や試料の種別等は提供された試料に準拠した。着磁力調査については，直径30㎜のリング状フェライト磁石を使用し，６㎜を１単位として35㎝の高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（ＭＣ：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5㎜φx1.5㎜H，2.0㎜φx2.0㎜H，5㎜φx5㎜H，10㎜φx10㎜H，16㎜φx16㎜H，20㎜φx20㎜H，30㎜φx30㎜H）を使用し，これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

（ⅱ）化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するＪＩＳ分析法に準じて行っている。

- 全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
- 金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
- 酸化第一鉄（FeO）：二クロム酸カリウム滴定法。
- 酸化第二鉄（Fe_2O_3）：計算。・化合水（C.W.）：カールフィッシャー法。
- 炭素（C），イオウ（S）：燃焼－赤外線吸収法。
- ライム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化マンガン（MnO），酸化ナトリウム（Na_2O），珪素（Si），マンガン（Mn），リン（P），銅（Cu），ニッケル（Ni），コバルト（Co），アルミニウム（Al），バナジウム（V），チタン（Ti）：ICP発光分光分析法。

・　シリカ（SiO_2），アルミナ（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），酸化リン（P_2O_5），酸化カリウム（K_2O）：ガラスビード蛍光Ｘ線分析法。但しCaO，MgO，MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光Ｘ線分析法を選択。
・　酸化ナトリウム（Na_2O）：原子吸光法。

なお鉄滓中成分は，18成分（全鉄T.Fe，金属鉄M.Fe，酸化第一鉄FeO，酸化第二鉄Fe_2O_3，シリカSiO_2，アルミナAl_2O_3，ライムCaO，マグネシアMgO，酸化ナトリウムNa_2O，酸化カリウムK_2O，二酸化チタンTiO_2，酸化マンガンMnO，酸化リンP_2O_5，コバルトCo，化合水C.W.，炭素C，ヴァナジウムV，銅Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し，酸化物に換算して表示している。鉄製品中成分の化学分析は，13成分（炭素C，シリコンSi，マンガンMn，リンP，イオウS，銅Cu，ニッケルNi，コバルトCo，アルミニウムAl，ヴァナジウムV，チタンTi，カルシウムCa，マグネシウムMg）を化学分析している。

（ⅲ）顕微鏡組織観察

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み，細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。金属鉄はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後，顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し，顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および 400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡（５倍～20倍）による観察も行う。

（ⅳ）Ｘ線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し，Ｘ線を照射すると，試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて，それぞれに固有な反射（回折）された特性Ｘ線を検出（回折）できることを利用して，試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており，ほとんどの化合物が同定される。

測定装置　理学電気株式会社製　ロータフレックス（RU-300型）

測定条件

①	使用Ｘ線	Cu-Ｋα（波長＝1.54178Å）
②	Ｋβ線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250mA
④	スキャニング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S.スリット	１°
⑦	R.S.スリット	0.15㎜
⑧	S.S.スリット	１°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

（ｖ）ＥＰＭＡによる観察

真空中で試料面の直径１μm程度の範囲に焦点をあて，高速度（５～30kV）の電子線を照射すると試料面から二次電子，反射電子，特性Ｘ線などが発生する。その特性Ｘ線の波長および強度を測定することにより，存在する元素の定性あるいは定量分析を行う。電子線マイクロプローブＸ線アナライザー（ＥＰＭＡ）という。試料表面の微小部分（200μm程度以下の範囲）に存在する元素の濃度分布を測定できる。光学顕微鏡による視野（140～560倍，500μm）を同時に観察できる。

３　調査結果および考察

調査試料と調査項目を表３に，表４～表８に試料の化学成分分析結果を，表９に羽口の耐火度測定結果を，表10にＸ線回折結果をそれぞれ示した。全試料の外観写真は写真１～５に，EPMAのポイント分析は図８・９に，Ｘ線回折の結果を図10～12に，鉱物組織の英文，化学式は一括して５．参考に示した。各試料の調査結果をまとめて最も確からしい推定結果を最後にまとめた。

試料番号FB.OGD.001　鉄鏃（雁又式），着磁度：５，メタル反応：12㎜大

外観観察：長さ73.9㎜×幅24.8㎜×厚さ5.7㎜。試料の重量は13.2gである。外観写真を写真１に示す。雁又の先が銹化欠落した雁又鏃である。メタルの遺存は比較的良好で，先端と後端の一部が銹化している。顕著な銹瘤は雁又の付根付近にある。関は良好な形状を残している。

切断面・マクロ組織：メタルの遺存は比較的良好であるが，部分的には銹化は試料の中央部近くまで進行している。鍛打を受けたと思われ結晶組織は細かい。マクロ組織では左側の方がやや白くＣは低い。

顕微鏡組織：白色のフェライト組織と黒色のパーライト組織で構成されている。パーライト組織が20％程度で，Ｃは0.2～0.4％程度と推察される。亜共析鋼組織でフェライト粒度は10～30μmに細粒化しており，鍛打による加工を受けたものと推察される。

ＥＰＭＡ分析：メタルの介在物をEPMAで調査した。多角形板状ウルボスピネルとその周囲にはファイヤライトが観察された。鉄（Fe）は化学式に示されるようにウルボスピネル，ファイヤライトいずれにも分布している。わずかに存在するガラス質の部分には，珪酸質スラグとファイヤライトによる珪素（Si）と鉄（Fe）が現れ、チタン（Ti）もウルボスピネル部に集中している。滓部分の２次電子線像（SE像）とポイント分析結果を図９・10に示す。ウルボスピネルと判断される部分のポイント分析をチャート１に示す。FeOが68.6％，TiO_2が23.8％で，Al_2O_3が7.0％，MgOが0.6％含まれるが，ほぼウルボスピネルと確認される。ファイヤライトと判断される組織のポイント分析をチャート２に示す。FeOが68.4％，SiO_2が26.2％で，MgOが1.7％，CaOが1.4％，TiO_2が0.7％含まれるが，ほぼファイヤライトと確認される。本試料中に混入していた滓は成分的にも砂鉄に起因するウルボスピネル，ファイヤライトを主要鉱物としていることが明らかである。

以上の結果を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とし、鍛打による加工を受けた亜共析鋼組織の鉄鏃と思われる。

試料番号FB.OGD.002　刀子，着磁度：５，メタル反応：12㎜よりやや大

外観観察：長さ145.0㎜×幅18.4㎜×厚さ4.8㎜。試料の重量は21.6gである。外観写真を写真１に示す。先端側が錆化欠落した両関の刀子で，先端には大きな錆瘤がある。試料全体が錆と錆瘤に覆われているが，メタルの遺存は比較的良好である。関手前側の背には縦亀裂が生じている。

切断面・マクロ組織：Ｌ断面，及びＣ断面２方向から試料を採取した。試料の中央部近くまで錆化が進行している。鍛打を受けたと思われ，炭素濃度の異なる層が水平方向に縞状に層を形成している。結晶組織はFB.OGD.001と同様に細かい。

顕微鏡組織：白色フェライト組織と黒色パーライト組織の領域と，白色フェライト組織の領域が，ほぼ半々で構成された亜共析鋼組織である。フェライト組織は，フェライト粒度がほぼ揃っており，鍛打による加工を受けたものと推察される。フェライト組織は結晶粒の中間に微量のパーライトが観察され，純鉄に近い軟鉄と推察される。

ＥＰＭＡ分析：メタルの介在物をEPMAで調査した。多角形板状ウルボスピネル，ファイヤライトが観察される。鉄（Fe）は化学式に示されるようにウルボスピネル，ファイヤライトいずれにも分布している。チタン（Ti）は中央部にあるウルボスピネル部に集中し，珪酸質スラグ部では，珪素（Si），アルミナ（Al）等が現れている。滓部分の２次電子線像（SE像）とポイント分析結果を図10・11に示す。ウルボスピネルと判断される部分のポイント分析をチャート３に示す。FeOが66.5％，TiO_2が17.4％で，Al_2O_3が16.1％含まれるが，ほぼウルボスピネルと確認される。ファイヤライトと判断される組織のポイント分析をチャート４に示す。FeOが68.6％，SiO_2が27.3％で，MgOが2.7％，CaOが1.4％含まれるが，ほぼファイヤライトと確認される。本試料中に混入していた滓は成分的にも砂鉄起因のウルボスピネル，ファイヤライトを主要鉱物としていることが明らかである。

以上の結果を総合すると，本試料は砂鉄を始発原料とし，鍛打による加工を受けた亜共析鋼組織の刀子と思われる。

試料番号FB.OGD.003　羽口，着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ55.9㎜×幅47.3㎜×厚さ24.4㎜。試料の重量は35.4g である。外観写真を写真１に示す。外面側が炉内還元炎に曝され黒褐色～灰色を呈した羽口の小破片である。炉内側と判断される外面側の，黒褐色～灰色を呈した部分は被熱によりブツブツと発泡している。内面側は赤褐色を呈していた。乳白色の長石類が多く混入されているように見える。

顕微鏡組織：通常みられる胎土で，半透明の石英粒や長石類の粒子が多く観察される。

化学成分：分析結果を表７・８に示す。強熱減量は1.05％で，熱影響は強く受けた状態での分析である。二酸化珪素（SiO_2）が65.1％で，耐火度に有利なAl_2O_3は19.8％と高目である。軟化性成分である全鉄（T.Fe）が5.11％とやや多く，K_2O+Na_2Oは4.71％と高い。恐らく地場の粘土で作ったと思われる。

耐火度：耐火度測定の結果を表９に示す。耐火度は1120℃で，成分系を反映して鍛冶羽口としては低めで炉壁並みである。

以上から本試料は，$SiO_2$65.1％，$Al_2O_3$19.8％を含む耐火度1120℃の鍛冶炉羽口と思われる。

試料番号FB.OGD.004　羽口，着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ64.6㎜×幅39.2㎜×厚さ21.0㎜。試料の重量は39.5gである。外観写真を写真１に示す。内径が25～30㎜φ，外径が45～50㎜φとみられる羽口の炉内先端部の破片である。先端部は内外面ともに，炉内還元炎に曝されて黒褐色を呈している。先端部の外面側は発泡し，部分的に溶融して黒色ガラス化している。先端部から30㎜程度以降の内面側は赤褐色を呈していた。長石類が多く見られ試料FB.OGD.003と同質と思われる。

顕微鏡組織：滓と反応して発泡した多孔質の組織で，通常見られる石英粒や長石類の粒子は，大きいものが未溶融で観察される。

化学成分：分析結果を表７・８に示す。強熱減量は0.97％で，熱影響は強く受けた状態での分析である。FB.OGD.003と同様に，二酸化珪素（SiO_2）は68.4％と通常の範囲で，耐火度に有利なAl_2O_3は18.3％とやや高目で，軟化性成分である全鉄（T.Fe）は4.29％，K_2O+Na_2Oは4.71％と高い。地場の粘土で作られたものであろう。

耐火度：耐火度測定の結果を表９に示す。耐火度は1280℃で，成分系を反映して鍛冶羽口としてはやや低めで炉壁並みである。

以上から本試料は，$SiO_2$68.4％、$Al_2O_3$18.3％で耐火度1280℃の鍛冶炉羽口と思われる。

試料番号FB.OGD.005　鉄塊系遺物、着磁度：3、メタル反応：10㎜よりやや大

外観観察：長さ25.1㎜×幅15.3㎜×厚さ13.5㎜。試料の重量は10.6gである。外観写真を写真２に示す。魚の尾のような形をし，ゴツゴツとした凹凸のある鉄塊系遺物の小片である。上面には暗紫色の錆がみえる。下面側は赤褐色の錆と錆汁で覆われている。側面の錆は瘤のように盛り上がっている。メタル反応は10㎜よりやや大きく，試料の大きさからみると大半がメタルとみられる。錆化が進み着磁度は３程度である。

切断面・マクロ組織：金属鉄は滓中にまとまった鉄塊として存在し，金属鉄，内包気泡の形状から溶融した履歴を持つとみられる。金属鉄の周囲が錆化した亜共晶白鋳鉄の組織である。

顕微鏡組織：灰黒色のパーライト組織に白色のセメンタイトが析出した亜共晶白鋳鉄組織である。

化学成分：化学成分は金属鉄について行った。分析結果を表６に示した。Ｃは2.78％で亜共晶組成の範囲にある。Si，Al，Ti等の不純物は非常に少なく，溶融によりメタルと滓の分離が十分進んだと考えられる試料である。

以上を総合すると本試料は炭素が2.78％の亜共晶白鋳鉄組織の鉄塊系遺物と思われる。滓組織の混入はなく始発原料が砂鉄か否かは特定できない。

試料番号FB.OGD.006　鉄塊系遺物→鉄滓，着磁度：２，メタル反応：２㎜よりやや小

外観観察：長さ42.4㎜×幅27.8㎜×厚さ18.1㎜。試料の重量は19.2gである。外観写真を写真２に示す。アーモンドのような形をした鉄滓である。上面側は灰黒色のガラス質の滓が，中央部を帯状に流れたように覆っている。下面側は全体的には錆化鉄の赤褐色を呈しているが，局部的に暗紫色の錆や，

小さな砂礫の付着なども観察される。メタル反応は２㎜より小さく，着磁度は２である。

顕微鏡組織：樹枝状マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）組織，その背後に短冊状ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組織が観察され，メタル粒も散見される。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄35.0%に対して金属鉄は0.16％とわずかである。FeOは29.4%，Fe_2O_3は17.1%，SiO_2は37.3%，Al_2O_3は9.0％で造滓成分量が52.43％と多い。TiO_2は0.28％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。図４～６は滓の成分的特徴から製鉄工程の生成位等を検討する図であるが，造滓成分量から判断して精錬末期から鍛錬初期にかけての滓が炉壁と反応した炉内滓と思われる。

以上の結果を総合すると，本試料は精錬末期から鍛錬初期にかけての滓が炉壁と反応した炉内滓と思われる。

試料番号FB.OGD.007　鉄塊系遺物，着磁度：５，メタル反応：10㎜よりやや小

外観観察：長さ42.7㎜×幅35.5㎜×厚さ10.4㎜。試料の重量は24.5gである。外観写真を写真２に示す。不整扇形をした扁平な鉄塊系遺物である。上面は全面が銹化鉄の銹や銹汁で覆われ，ゴツゴツとした凹凸のある面を呈している。下面も上面と同様に銹化鉄の銹や銹汁で覆われているが，暗紫色の銹も見られる。破面は２，平坦でほぼ直線的な破面で，暗紫色の銹と銹化膨張による放射亀裂等が観察される。メタル反応は10㎜よりやや小さく，着磁度は５である。

切断面・マクロ組織：空隙の多い全面に銹化が進んだ鉄塊である。金属鉄はマクロ写真にみられるようにフェライト主体の組織で，粒界に少量のパーライトが観察される。

顕微鏡組織：フェライト主体の組織で，粒界にパーライトが観察される亜共析鋼組織である。

化学成分：化学成分は金属鉄について行った。分析結果を表６に示した。Ｃは0.09％で亜共析鋼の範囲にある。滓の分離が十分でないため，Siが0.19%，Alが0.51％含まれている。

以上の結果を総合すると，本試料は炭素が0.09％の亜共析鋼組成の鉄塊系遺物と思われる。鍛冶用素材であろう。

試料番号FB.OGD.008　鉄塊系遺物，着磁度：５，メタル反応：８㎜よりやや小

外観観察：長さ14.8㎜×幅11.5㎜×厚さ11.5㎜。試料の重量は3.2gである。外観写真を写真２に示す。不整菱形でほぼ全面が赤褐色の銹で覆われた小塊の鉄塊系遺物である。暗紫色の銹もみられ，銹化膨張による放射亀裂も観察される。下面の右端には１㎜程度の発泡気泡が１個観察される。メタル反応は８㎜よりやや小で，着磁度は５である。

切断面・マクロ組織：ねずみ鋳鉄組織で，銹化は表層で止まり，金属鉄は良好な状態にある。

顕微鏡組織：試料の大部分が灰黒色縞模様のパーライト組織に黒い繊維状の片状黒鉛が析出する過共晶鋳鉄組織であるが，部分的には灰黒色のパーライト組織に白色のセメンタイトが析出した白鋳鉄組織も観察される。

化学成分：化学成分は金属鉄について行った。分析結果を表６に示した。Ｃは4.83％で過共晶鋳鉄組織の範囲にある。

以上を総合すると本試料は，炭素が4.83％の過共晶鋳鉄組織の鉄塊系遺物と思われる。滓組織の混入はなく始発原料が砂鉄か否かは特定できない。

試料番号FB.OGD.009　鉄塊系遺物、着磁度：４～５，メタル反応：12㎜よりやや小

外観観察：長さ24.5㎜×幅21.2㎜×厚さ12.1㎜。試料の重量は8.9gである。外観写真を写真３に示す。不整菱形で中央がやや盛り上がった鉄塊系遺物である。ほぼ全面が茶褐色の錆で覆われ、周囲にはゴツゴツとした突起がみられる。下面の側面部には暗紫色の錆がみられ，小さな錆化膨張による放射亀裂が観察される。メタル反応は12㎜より小であり，着磁度は４～５である。

切断面・マクロ組織：気泡や空隙の多い錆化が進んだ鉄塊で，金属鉄はパーライト主体の組織で，粒界に少量のフェライトが観察される。

顕微鏡組織：パーライト主体の組織で，粒界に少量のフェライトが観察される。

化学成分：化学成分は金属鉄について行った。分析結果を表６に示した。Cは0.66％で亜共析鋼の範囲にある。滓の分離が十分でないため，Siが0.68％，Alが0.46％，Tiが0.02％含まれている。

以上を総合すると本試料は，炭素が0.66％の亜共析鋼組織の鉄塊系遺物と思われる。滓組織の混入はなく始発原料が砂鉄か否かは特定できない。

試料番号FB.OGD.0010　鉄滓，着磁度：１～２，メタル反応：２㎜大

外観観察：長さ79.3㎜×幅41.3㎜×厚さ21.6㎜。試料の重量は67.3gである。外観写真を写真３に示す。不整三角形で全面が茶褐色の錆で覆われた鍛冶滓の破片である。頂上部は角張った突起で構成された良く溶融した滓の面で，１～２㎝大の岩石の巻き込みや，多数の木炭痕跡も観察される。滓そのものは黒色で，破面は２である。破面でみると，気泡は少なくは緻密で重量感がある。メタル反応は２㎜大で，着磁度は１～２である。

顕微鏡組織：樹枝状ウスタイト（Wustite：FeO）組織，その背後にファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組織が観察される。メタル粒も散見される。

Ｘ線回折：結果を表10と図12に示す。ウスタイト（Wustite：FeO）の回折線，ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の回折線が中強度で，次いでマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の回折線が弱強度に認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄47.9%に対して金属鉄は0.22％とわずかである。FeOは48.0%，Fe_2O_3は14.8%，SiO_2は24.3%，Al_2O_3は6.28%，TiO_2は0.27％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。$FeOn\text{-}Fe_2O_3\text{-}SiO_2$の３成分系に換算するとFeOは55.1%，$Fe_2O_3$は17.0%，$SiO_2$は27.9％となり図２の$FeOn\text{-}Fe_2O_3\text{-}SiO_2$系の平衡状態図ではウスタイト，ファイヤライト，及びマグネタイトの境界領域にある。図４～６では造滓成分量は多いものの鍛錬鍛冶滓と判断される。

以上の結果を総合すると，本試料は鍛錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0011　鉄滓，着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ33.5㎜×幅22.2㎜×厚さ10.7㎜。試料の重量は7.3gである。外観写真を写真３に示す。破面から花崗岩が観察され，炉壁近傍の炉内滓の破片思われる。全体に黒いガラス質の滓で覆われて

いるが，下面側は赤紫色を呈しており，火炎であぶられ酸化変色したものと思われる。破面は３であり，全体に大きな気泡はないが，軽くポーラスな破片の感じである。メタル反応，着磁ともになし。

顕微鏡組織：ほぼ全面が粘土組織である。局部的に滓から晶出した微細なファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が観察される。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄は13.0%と極めて少なく，FeOは8.03%，Fe_2O_3は9.5%である。SiO_2が54.6%，Al_2O_3が15.2%，CaOが4.84%，MgOが1.87%をそれぞれ示しており，成分から炉壁に付着した炉内滓と思われる。図４～６では炉壁付着滓と位置づけられる。

以上の結果を総合すると，本試料は恐らく精錬系の滓が炉壁に付着したほぼガラス質の炉内滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0012　鉄滓、着磁度：１，メタル反応：２㎜大

外観観察：長さ37.8㎜×幅22.6㎜×厚さ22.6㎜。試料の重量は29.6gである。外観写真を写真３に示す。表面がゴツゴツとして全面が茶褐色の錆で覆われた小山の形をした鉄滓である。平坦部は唯一，上面側中央部の小さなすり鉢状の窪みである。下面側に砂礫と木炭の痕跡等が観察される。破面は２で，破面で見た気泡の印象からはガス質と思われる。メタル反応は中央部分のみで２㎜大，着磁度は１である。

顕微鏡組織：白色繭玉状の凝集ウスタイト（Wustite：FeO）が主たる組織で，背後にファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が観察される。

Ｘ線回折：結果を表10と図13に示す。ウスタイト（Wustite：FeO）の回折線が高強度で，次いでマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の回折線が弱強度に，ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の回折線もわずかに認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄60.7%に対して金属鉄は0.17%とわずかである。FeOは56.9%，Fe_2O_3は23.3%，SiO_2は9.15%，TiO_2は5.02%であり始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO_2-TiO_2の３成分系に換算するとFeOnは85.0%，SiO_2は9.7%，TiO_2は5.3%となる。図３のFeOn-SiO_2-TiO_2系の平衡状態図では，ウスタイトの領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察やＸ線回折結果と一致する。図４～６では精錬鍛冶滓の位置にある。

以上の結果を総合すると，本試料は始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0013　鉄滓，着磁度：１，メタル反応：２㎜大

外観観察：長さ41.0㎜×幅28.5㎜×厚さ26.0㎜。試料の重量は24.2gである。外観写真を写真４に示す。ゴツゴツとして凹凸が激しく，赤褐色の錆で覆われた不整台形の鉄滓である。破面は３である。暗紫色の錆からは錆化膨張による放射亀裂も観察される。砂礫が多数付着しており，ガラス質の滓が剥離した帯状の痕跡も観察される。メタル反応は３で着磁度は１である。

顕微鏡組織：ほぼ全面がガラス化した粘土組織であり炉壁近傍の炉内滓と思われる。微細なファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の晶出がわずかに観察される。

Ｘ線回折：結果を表５と図13に示す。ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の回折線，粘土成

分のアノーサイト（Anorthite ： $CaAl_2Si_2O_8$）の回折線，クリストバライト（Quartz ：SiO_2），マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の回折線などがいずれもわずかに認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄が28.8%と少なく，FeOは22.0%，Fe_2O_3は16.7%である。SiO_2は37.6%，Al_2O_3は12.8%，CaOは4.74%，MgOは1.50%を示している。図４～６から精錬系の滓が多量の炉壁と反応したと思われる。

以上の結果を総合すると，本試料は炉壁に付着した精錬系の炉内滓と推察される。

試料番号FB.OGD.0014　鉄滓，着磁度：１，メタル反応：３㎜大

外観観察：長さ41.0㎜×、幅28.5㎜×厚さ26.0㎜。試料の重量は24.2gである。外観写真を写真４に示す。全面が茶褐色の銹で覆われた緻密で重量感のある鉄滓である。上面は中央部に窪みがあるものの，砂礫の付着や目立った気泡はみられず平滑な印象であるが，下面側は対照的にゴツゴツとした感じで多数の気泡が観察される。茶褐色の銹がとれた部分からは黒色の滓がみられ，滓そのものは黒色である。側面の破面には，暗紫色の銹が見える。メタル反応はないが，わずかに着磁があることからマグネタイトが存在すると思われる。

顕微鏡組織：多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$），ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$），ウスタイト（Wustite：FeO）などの組織が観察される。

Ｘ線回折：Ｘ線回折結果を表10と図14に示す。ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の回折線が中強度に，ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の回折線が弱強度に，ウスタイト（Wustite：FeO）の回折線とハーシナイト（Hercynite-$FeO \cdot Al_2O_3$）の回折線もわずかに認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄47.7%に対して金属鉄は0.17%とわずかである。FeOは35.9%，Fe_2O_3は28.1%，SiO_2は20.9%，TiO_2は3.4%であり始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO_2-TiO_2の３成分系に換算するとFeOnは72.5%，SiO_2は23.7%，TiO_2は3.9%となり，図３のFeOn-SiO_2-TiO_2系の平衡状態図ではウスタイト，ウルボスピネル，ファイヤライトの境界領域にあり，顕微鏡観察やＸ線回折の結果と一致する。図４～６では精錬鍛冶滓と判断される。

以上の結果を総合すると，本試料は始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0015　鉄滓（椀形滓），着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ118.0㎜×幅100.5㎜×厚さ63.7㎜。試料の重量は623.1gである。外観写真を写真４に示す。ゴツゴツとして凹凸が激しく，全面が茶褐色の銹で覆われた重量感のある鉄滓である。良く溶融した滓で，上面では５㎜大の木炭，砂礫，花崗岩等の噛み込みが多数観察される。下面側も良く溶融した滓で右半分は，脳のシワのようにぶつぶつとした溶融物の表面で覆われている。中央部や下部に暗紫色の銹もみられる。メタル反応はわずかに試料の上下，左右の局部で検出されたのみで，それ以外の場所ではメタル反応，着磁ともにない。

顕微鏡組織：多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel： $2FeO \cdot TiO_2$），ウスタイト（Wustite：FeO），ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）などの組織が観察される。

Ｘ線回折：結果を表10と図14に示す。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の回折線，及び

ウスタイト（Wustite：FeO）の回折線が中強度に，ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）の回折線がわずかに認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄55.5%に対して金属鉄は0.24％とわずかである。FeOは34.4%，Fe_2O_3は40.8%，SiO_2は14.5%，TiO_2は2.18%であり始発原料は砂鉄である。FeOn-SiO_2-TiO_2の３成分系に換算するとFeOnは81.8%，SiO_2は15.8%，TiO_2は2.4%となり，図３のFeOn-SiO_2-TiO_2系の平衡状態図ではウスタイト（Wustite：FeO）の領域にあり平衡状態図上の位置は顕微鏡観察やＸ線回折結果と一致しない。試料の不均質さによるものと思われる。図４～６では精錬鍛冶滓の位置にある。

以上の結果を総合すると，本試料は始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0016　鉄滓，着磁度：３，メタル反応：２㎜大

外観観察：長さ62.4㎜×幅37.5㎜×厚さ18.5㎜。試料の重量は50.9gである。外観写真を写真４に示す。ゴツゴツとして凹凸があり，全面が茶褐色の錆で覆われた鉄滓である。上面左側には５㎜程度の段差があるが，それ以外はほぼ平坦である。下面側は比較的ゆるやかな曲面で構成され，中央部には丸い暗紫色の錆が盛上り，錆化膨張で破裂した欠損部もみられる。メタル反応は２㎜大，着磁度は３である。

顕微鏡組織：多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：2FeO・TiO_2），ウスタイト（Wustite：FeO），マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4），ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）などの組織が観察される。錆も観察される。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄47.8%に対して金属鉄は0.17％とわずかである。FeOは34.3%，Fe_2O_3は30.0%，SiO_2は22.1%，TiO_2は0.30%であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeOn-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算するとFeOは39.7%，Fe_2O_3は34.7%，SiO_2は25.6%となり図２のFeOn-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではマグネタイトの領域にある。ウスタイトマグネタイト混晶のためと思われる。図４～６では鍛錬鍛冶滓の位置にある。

以上の結果を総合すると，本試料は始発原料を砂鉄とする鍛錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0017　鉄滓，着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ72.9㎜×幅50.4㎜×厚さ18.0㎜。試料の重量は48.7gである。外観写真を写真５に示す。炉壁近傍の炉内滓の破片と思われる。良く溶融した滓で丸味を帯びている。灰白色にみえる部分には，小さな気泡が無数にみられ，砂礫や粘土などが多数混入し滓と粘土が反応していた可能性がある。炉壁の一部と思われるレンガ片の噛み込みも観察される。メタル反応，着磁ともになし。

顕微鏡組織：ウスタイト（Wustite：FeO），マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4），ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）などの組織が観察される。

Ｘ線回折：結果を表10と図15に示す。ウスタイト（Wustite：FeO）の回折線が高強度に，ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）の回折線が中強度に，マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の回折線やハーシナイト（Hercynite-FeO・Al_2O_3）の回折線もわずかに認められる。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄52.9%に対して金属鉄は0.22％とわずかである。FeOは47.2%，Fe_2O_3は22.9%，SiO_2は19.1％，TiO_2は0.35％であり始発原料は砂鉄か否かは判断できない。FeOn-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算するとFeOは52.9％，Fe_2O_3は25.6％，SiO_2は21.4％となり図２のFeOn-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではマグネタイトの領域にあり，ウスタイト，マグネタイト混晶のためと思われる。図４～６では造滓成分が多い精錬から鍛錬にかけての鍛冶滓と思われる。以上の結果を総合すると，鍛錬鍛冶滓と思われる。

試料番号FB.OGD.0018　鉄滓，着磁度：なし，メタル反応：なし

外観観察：長さ92.0㎜×幅82.7㎜×厚さ32.8㎜。試料の重量は183.5gである。外観写真を写真５に示す。ゴツゴツとした重量感のある鉄滓である。上面の窪んだ領域には黒いガラス質の滓が左右に流れるように覆っており，花崗岩らしい岩石粒が多数ガラス質滓に取込まれている。滓は良く溶融して丸味を帯び，発泡破裂なども数ヶ所にみられる。下面側はゴツゴツとしてカキガラを思わせる形状であり，発泡破裂も多数観察される。メタル反応・着磁ともになし。

顕微鏡組織：溶融して気孔が多いガラス化した粘土組織である。ファイヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）の晶出も観察される。

化学成分：分析結果を表５に示した。全鉄が3.32%と極めて少なく，FeOは0.21%，Fe_2O_3は4.47%である。SiO_2は69.8%，Al_2O_3は14.9%，CaOは1.99%，MgOは0.93％を示し，炉壁の成分に近い値で，図４・５でも炉壁付着滓の位置にある。

以上の結果を総合すると，本試料は炉壁が滓化した滓と思われる。

４　ま　と　め

(1) 遺跡の性格

本調査で得られた試料は，鉄滓が10試料，鉄塊系遺物が４試料，鉄製品が２試料，羽口が２試料の合計18試料である。鉄滓の工程別分類では，精錬鍛冶滓が３試料，鍛錬鍛冶滓が３試料，炉内滓が４試料で，製錬滓の該当はなく本遺跡では鍛冶炉による精錬から鍛錬が行われていたと考えられる。鉄素材は周辺の製鉄炉から供給された可能性が考えられ，今後の調査が期待される。なお，鉄塊は，過共晶鋳鉄組織が２試料，金属鉄が十分に溶融していない亜共析鋼組織が２試料であった。

(2) 始 発 原 料

本調査で得られた鉄滓10試料中の３試料から，TiO_2鉱物のウルボスピネルが観察されていることや他の７試料においてもTiO_2濃度が0.3～５％を示していること等から，本遺跡の始発原料は砂鉄と判断された。

図７・８に滓の成分的特徴を示すTiO_2，MnO，Vの関係をT.Feで規格化して示す。砂鉄中の代表的な成分であるTiO_2，MnO，Vの関係は，荻平遺跡に比較的近い南相馬市割田遺跡群のデータとは異なり，異質の砂鉄が使用された可能性がある。しかし，データ数が少ないのでさらにデータの蓄積を待って判断する必要がある。

(3) 羽口，及び鉄製品

羽口２試料は外面側が炉内還元炎に曝され先端部は溶融していた。いずれも成分的には通常の胎土と思われる成分で構成されており，耐火度は1120℃，及び1280℃と炉壁並みであった。鉄製品の鉄鏃と刀子はいずれも鍛打による加工を受けたていた亜共析鋼組織であった。メタル中に混入していた滓からTiO_2鉱物のウルボスピネルが観察されたことから，始発原料は砂鉄と思われた。

(4) 個 別 試 料

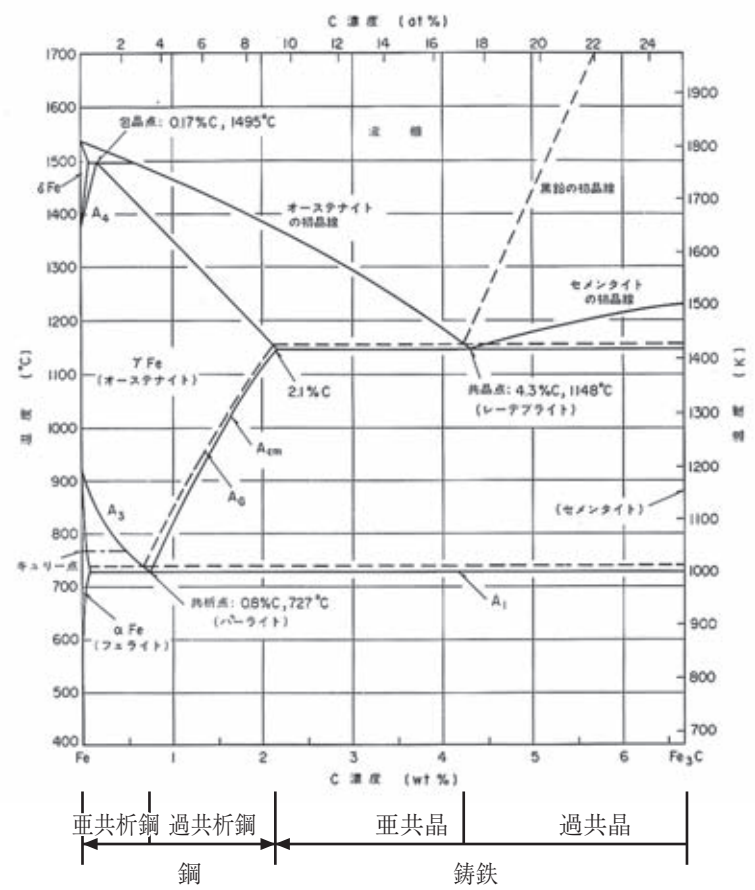
試料番号	出土位置	出土層位	試料種別	調査結果
FB. OGD. 001	19号居住跡	１層	鉄鏃	始発原料を砂鉄とする亜共析鋼組織の鉄鏃
FB. OGD. 002	20号居住跡	１層	刀子	始発原料を砂鉄とする亜共析鋼組織の刀子
FB. OGD. 003	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	羽口	耐火度1120℃の鍛冶炉羽口
FB. OGD. 004	13号炉跡	１層	羽口	耐火度1280℃の鍛冶炉羽口
FB. OGD. 005	19号居住跡	１層	鉄塊系遺物	亜共晶白鋳鉄組織の鉄塊系遺物
FB. OGD. 006	E5－D7グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	精錬末期から鍛錬初期にかけての滓が炉壁と反応した炉内滓
FB. OGD. 007	E5－F10グリッド	ＬⅡａ	鉄塊系遺物	亜共析鋼組成の鉄塊系遺物
FB. OGD. 008	E5－E7グリッド	ＬⅡａ	鉄塊系遺物	過共晶鋳鉄組織の鉄塊系遺物
FB. OGD. 009	19号居住跡	床面	鉄塊系遺物	亜共析鋼組織の鉄塊系遺物
FB. OGD. 010	20号居住跡	１層	鉄滓	鍛錬鍛冶滓
FB. OGD. 011	20号居住跡	１層	鉄滓	精錬系の滓が炉壁に付着したほぼガラス質の炉内滓
FB. OGD. 012	23号居住跡	床面	鉄滓	始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓
FB. OGD. 013	39号居住跡	１層	鉄滓	炉壁に付着した精錬系の炉内滓
FB. OGD. 014	48号居住跡	床面	鉄滓	始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓
FB. OGD. 015	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	始発原料を砂鉄とする精錬鍛冶滓
FB. OGD. 016	E5－F8グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	始発原料を砂鉄とする鍛錬鍛冶滓
FB. OGD. 017	E5－C5グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	鍛錬鍛冶滓
FB. OGD. 018	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	炉壁が滓化した滓

5　参　　考

鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には，一般的に表１のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe_2O_3，Fe_3O_4，FeO），二酸化ケイ素（シリカ：SiO_2），アルミナ（Al_2O_3）および二酸化チタン（TiO_2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く，これら鉱物結晶は含有量にも依存するが，Ｘ線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり，Ｘ線回折では検出されない。

表１　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha-Fe_2O_3$	赤褐色～赤紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO\cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO\cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO\cdot TiO_2$	白色、針状･棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$FeO\cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
ゲーサイト	Goethite	$\alpha-FeOOH$	白～黄色、リング状が多い。
石英（シリカ）	Silica	$\alpha-SiO_2$	白色～半透明



フェライト組織：炭素をほとんど含まないC＜0.02％以下の鉄で、柔らかく白色である。
パーライト：フェライトと鉄炭化物であるセメンタイトFe_3Cが交互に層状構造を形成した組織でC濃度が高いほどFe_3Cが増え黒く見えてくる。
Cが0.8％以下の亜共析鋼では特別な熱処理がなければファエライトとパーライトが基本的な構成組織となる
Cが0.8％～2.1％の範囲では過共析鋼でセメンタイト、パーライトが主要組織となる。
Cが2.1％～4.3％では亜共晶鋳鉄、Cが4.3％以上では過共晶鋳鉄となる。

図１　鉄－炭素系平衡状態図

表２　ゼーゲルコーン溶倒温度比較表

温度（℃）	コーン番号	温度（℃）	コーン番号	温度（℃）	コーン番号	温度（℃）	コーン番号
600	022	960	07a	1,280	9	1,650	29
650	021	980	06a	1,300	10	1,670	30
670	020	1,000	05a	1,320	11	1,690	31
690	019	1,020	04a	1,350	12	1,710	32
710	018	1,040	03a	1,380	13	1,730	33
730	017	1,060	02a	1,410	14	1,750	34
750	016	1,080	01a	1,435	15	1,770	35
790	015a	1,100	1a	1,460	16	1,790	36
815	014a	1,120	2a	1,480	17	1,825	37
835	013a	1,140	3a	1,500	18	1,850	38
855	012a	1,160	4a	1,520	19	1,880	39
880	011a	1,180	5a	1,530	20	1,920	40
900	010a	1,200	6a	1,580	26	1,960	41
920	09a	1,230	7	1,610	27	2,000	42
940	08a	1,250	8	1,630	28		

６　図表・写真

表３　調査試料と調査項目

試料番号	出土位置	出土層位	試料種別	化学成分分析	顕微鏡組織観察	X解回折測定	耐火度測定試験	着磁力調査	金属探知機反応	外観観察	マクロ写真	EPMA分析
FB. OGD. 001	19号居住跡	１層	鉄鏃（雁又式）		○			○	○	○	○	○
FB. OGD. 002	20号居住跡	１層	刀子		○			○	○	○	○	○
FB. OGD. 003	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	羽口	○	○		○	○	○	○		
FB. OGD. 004	13号炉跡	１層	羽口	○	○		○	○	○	○		
FB. OGD. 005	19号居住跡	１層	鉄塊系遺物	○	○			○	○	○	○	
FB. OGD. 006	E5－D7グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	○	○			○	○	○		
FB. OGD. 007	E5－F10グリッド	ＬⅡａ	鉄塊系遺物	○	○			○	○	○	○	
FB. OGD. 008	E5－E7グリッド	ＬⅡａ	鉄塊系遺物	○	○			○	○	○	○	
FB. OGD. 009	19号居住跡	床面	鉄塊系遺物	○	○			○	○	○	○	
FB. OGD. 010	20号居住跡	１層	鉄滓	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 011	20号居住跡	１層	鉄滓	○	○			○	○	○		
FB. OGD. 012	23号居住跡	床面	鉄滓	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 013	39号居住跡	１層	鉄滓	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 014	48号居住跡	床面	鉄滓	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 015	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	鉄滓（椀形滓）	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 016	E5－F8グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	○	○			○	○	○		
FB. OGD. 017	E5－C5グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	○	○	○		○	○	○		
FB. OGD. 018	E5－F9グリッド	ＬⅡａ	鉄滓	○	○			○	○	○		

表４　鉄滓の化学成分分析結果

(%)

試料番号	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	比率（%）	
											FeO	Fe_2O_3
FB. OGD. 006	35.0	0.16	29.4	17.1	37.3	9.00	1.62	0.44	1.91	2.16	63.2	36.8
FB. OGD. 010	47.9	0.22	48.0	14.8	24.3	6.28	2.07	0.66	1.38	1.00	76.4	23.6
FB. OGD. 011	13.0	0.11	8.03	9.50	54.6	15.2	4.84	1.87	2.62	2.00	45.8	54.2
FB. OGD. 012	60.7	0.17	56.9	23.3	9.15	2.12	0.99	0.65	0.32	0.20	70.9	29.1
FB. OGD. 013	28.8	0.04	22.0	16.7	37.6	12.8	4.74	1.50	1.36	1.38	56.9	43.1
FB. OGD. 014	47.7	0.17	35.9	28.1	20.9	5.89	1.79	1.07	1.27	0.65	56.1	43.9
FB. OGD. 015	55.5	0.24	34.4	40.8	14.5	3.89	0.61	0.52	0.91	0.28	45.8	54.2
FB. OGD. 016	47.8	0.17	34.3	30.0	22.1	6.31	2.34	0.65	1.22	0.63	53.4	46.6
FB. OGD. 017	52.9	0.22	47.2	22.9	19.1	5.76	1.21	0.64	0.78	0.74	67.4	32.6
FB. OGD. 018	3.32	0.03	0.21	4.47	69.8	14.9	1.99	0.93	3.97	2.86	4.5	95.5

表５　鉄滓の化学成分分析結果（つづき）

(%)

試料番号	TiO_2	MnO	P_2O_5	Zr	C.W.	C	V	Cu	TiO_2/T.Fe	MnO/TiO_2	造滓成分％
FB. OGD. 006	0.28	0.05	0.218	0.010	1.13	0.13	0.003	0.004	0.008	0.179	52.43
FB. OGD. 010	0.27	0.09	0.519	0.006	0.42	0.06	0.027	0.002	0.006	0.333	35.69
FB. OGD. 011	0.83	0.12	0.326	0.008	0.40	0.17	0.009	0.002	0.064	0.145	81.13
FB. OGD. 012	5.02	0.015	0.244	0.058	0.80	0.11	0.030	0.005	0.083	0.300	13.43
FB. OGD. 013	0.73	0.09	0.199	0.006	1.08	0.24	0.012	0.008	0.025	0.123	59.38
FB. OGD. 014	3.40	0.15	0.279	0.043	0.48	0.11	0.016	0.006	0.071	0.044	31.57
FB. OGD. 015	2.18	0.09	0.271	0.011	2.40	0.22	0.040	0.008	0.039	0.041	20.71
FB. OGD. 016	0.30	0.05	0.270	0.004	2.15	0.28	0.004	0.010	0.006	0.167	33.25
FB. OGD. 017	0.35	0.05	0.155	0.006	0.78	0.11	0.003	0.008	0.007	0.143	28.23
FB. OGD. 018	0.38	0.08	0.169	0.008	0.37	0.10	0.002	0.001	0.114	0.211	94.45

C.W.= 化合水、造滓成分 = SiO_2+ Al_2O_3+ CaO+ MgO+ Na_2O+ K_2O

表６　鉄製品の化学成分分析結果

(%)

試料番号	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
FB. OGD. 005	2.78	0.002	<0.001	0.23	0.058	0.005	0.006	0.035	<0.001	<0.001	<0.001	0.004	<0.001
FB. OGD. 007	0.09	0.19	0.23	0.012	0.11	0.003	<0.001	0.009	0.51	0.30	0.020	0.11	0.70
FB. OGD. 008	4.83	0.063	0.023	0.26	0.043	0.008	0.008	0.037	0.031	0.007	0.018	0.011	0.009
FB. OGD. 009	0.66	0.68	0.004	0.13	0.11	0.014	0.022	0.076	0.46	<0.001	0.021	0.14	0.039

表７　羽口の化学成分分析結果

(%)

試料番号	T. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O
FB. OGD. 003	5.11	0.21	7.06	65.1	19.8	1.07	1.32	2.65	2.06
FB. OGD. 004	4.29	0.14	5.96	68.4	18.3	0.32	0.66	3.56	0.84

表８　羽口の化学成分分析結果（つづき）（%）

試料番号	TiO_2	MnO	C.W	C	強熱減量
FB. OGD. 003	0.72	0.13	0.86	0.18	1.05
FB. OGD. 004	0.56	0.04	0.78	0.14	0.97

表９　耐火度試験結果

試料番号	耐火度（SK）	色調	膨張・収縮	試験錐の状況
FB. OGD. 003	2a　1120℃	茶	普通	普通
FB. OGD. 004	9　1280℃	茶黒	普通	普通

試験方法：耐火煉瓦の耐火度の試験方法（JIS　R2204）に準拠
試験条件：酸素プロパン炉法
耐火温度：ゼーゲルコーン溶倒温度比較表による

表10　Ｘ線回折結果

試料番号	同定鉱物種と回折強度
FB. OGD. 010	W中、F中、M弱
FB. OGD. 012	W強、M弱、F微
FB. OGD. 013	F微、An微、Q微、M微
FB. OGD. 014	F中、U弱、W微、Her微
FB. OGD. 015	U中、W中、F微
FB. OGD. 017	W強、F中、M微、Her微

鉱物記号：W（ウスタイト：Wustite-FeO），M（マグネタイト：Magnetite-Fe_3O_4），
F（ファイヤライト：Fayalite-Fe_2SiO_4），Go（ゲーサイト：Goethite-αFeOOH），
Q,Cb（シリカ、クリストバライト：Quartz-SiO_2），H（ヘマタイト：Hematite-Fe_2O_3），
U（ウルボスピネル：Ulvospinel-2FeO･TiO_2），An（アノーサイト：Anorthite-$CaAl_2Si_2O_8$）
Her（ハーシナイト：Hercynite-FeO･Al_2O_3），I（イルメナイト：Ilmenite-FeO･TiO_2）
Ps（シュードブルッカイト：Pseudobrookite-FeO･ $2TiO_2$）

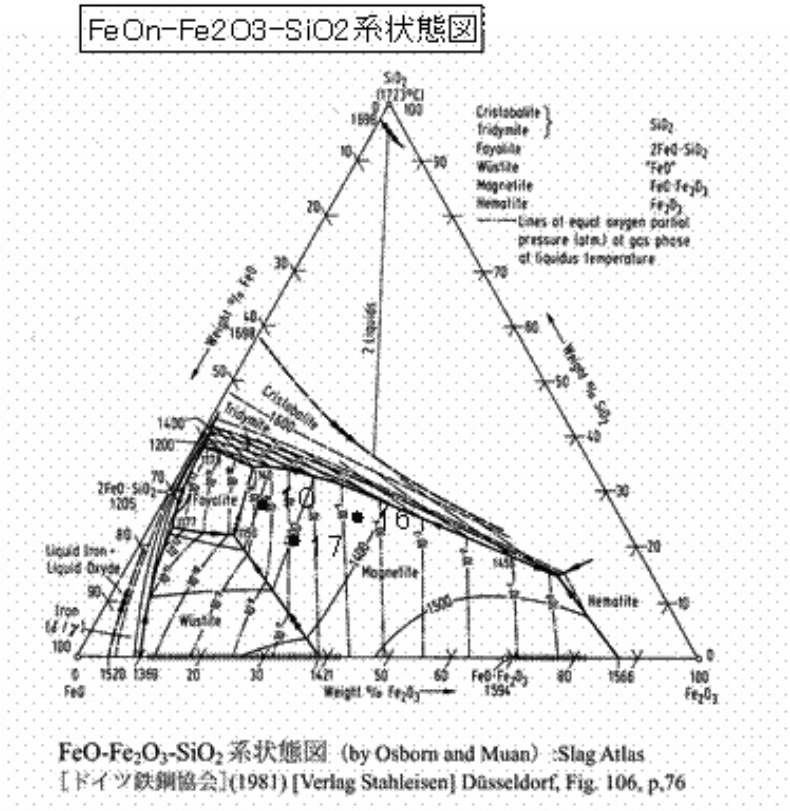


図２　FeOn-Fe_2O_3-SiO_2系鉄滓の平衡状態図

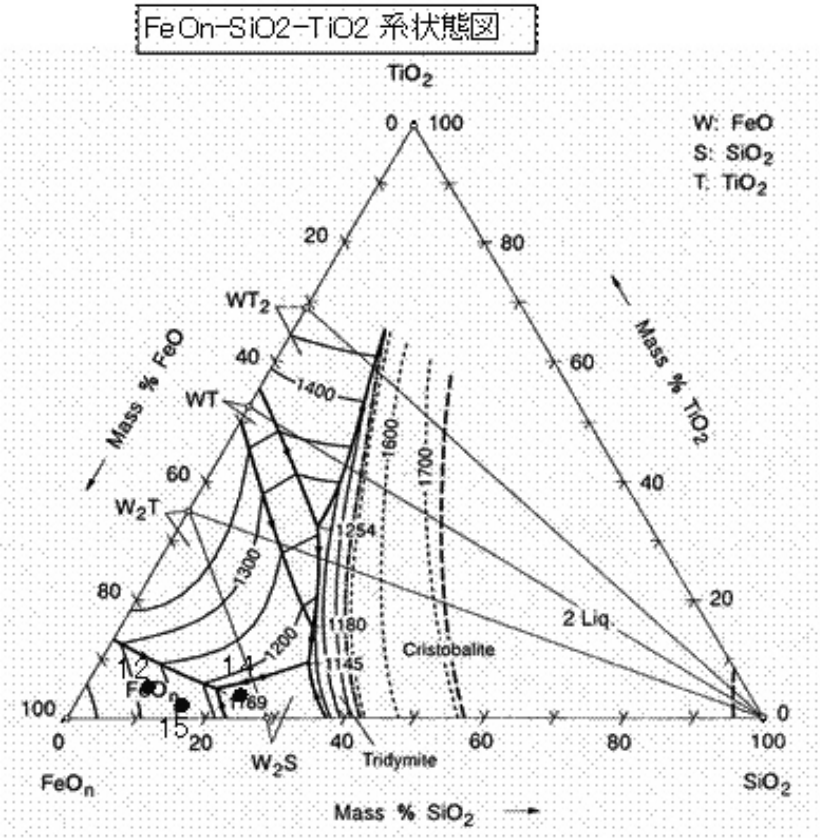


図３　FeOn-SiO_2-TiO_2系鉄滓の平衡状態図

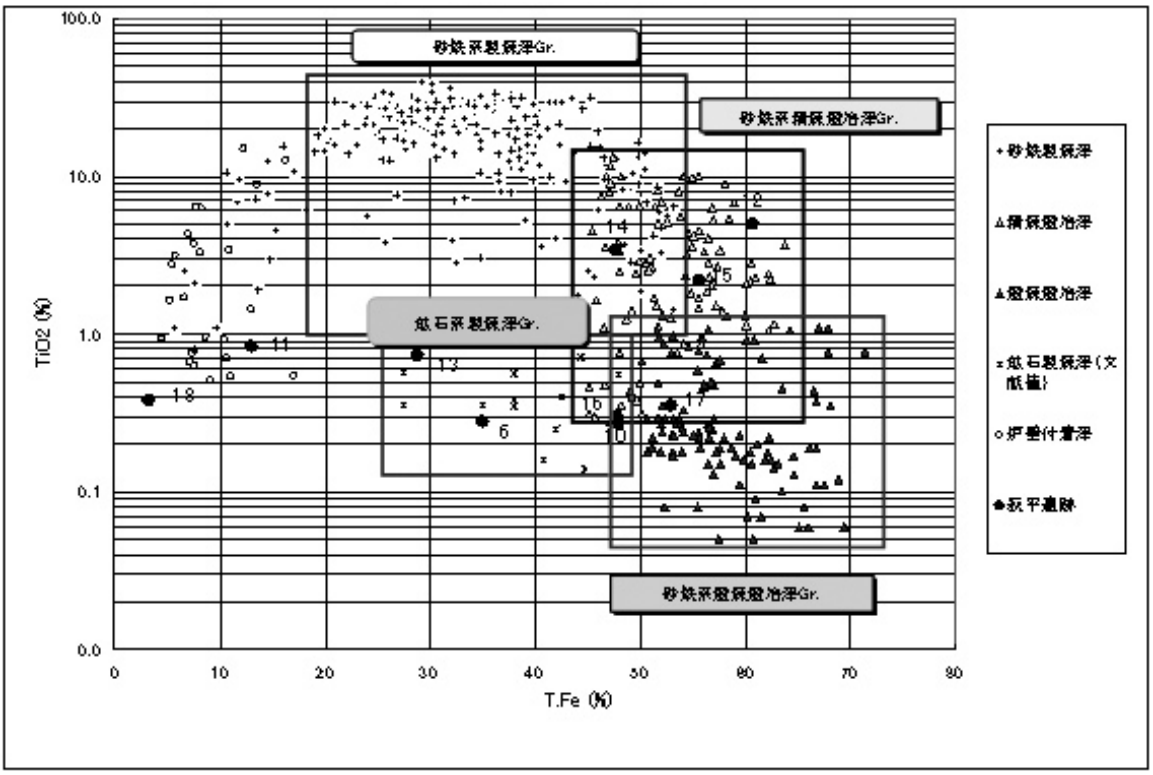


図４　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図

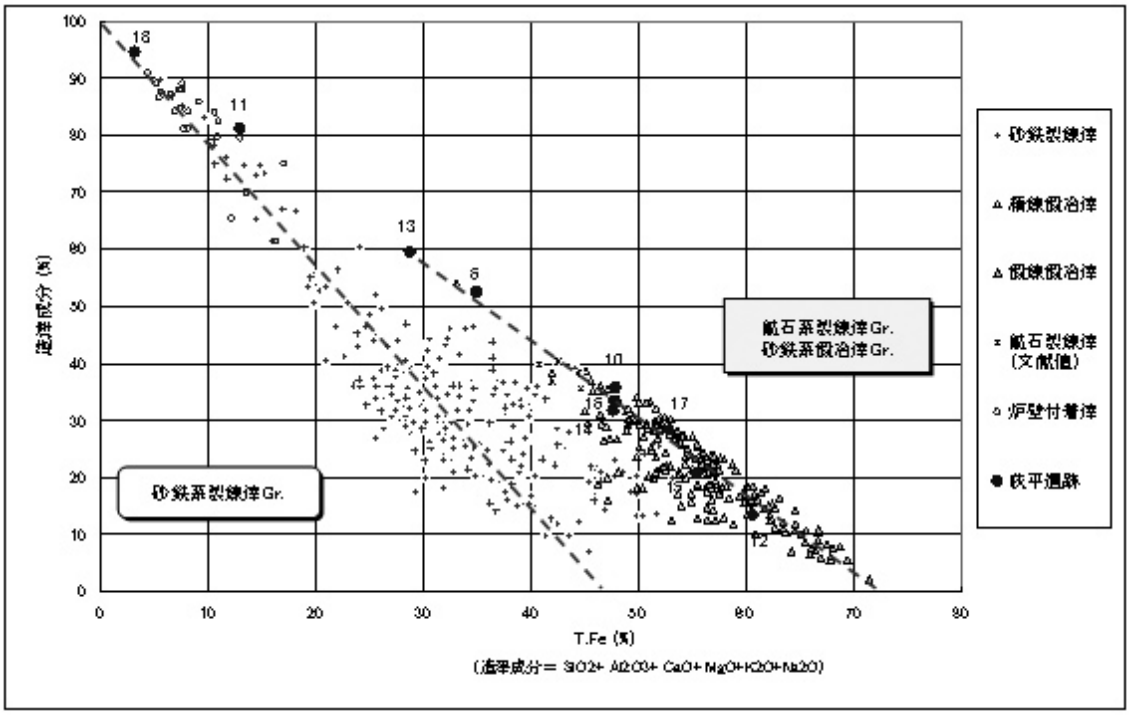


図５　製錬滓と鍛冶滓の分類

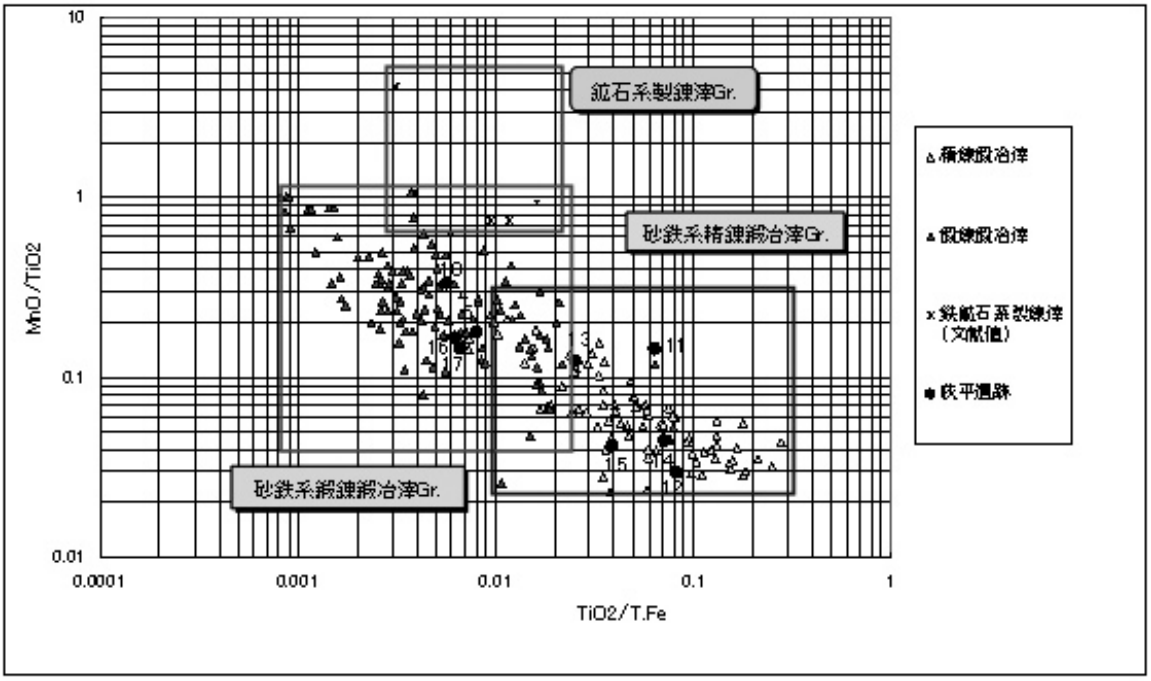


図６　鍛錬鍛冶滓と精錬鍛冶滓の分類

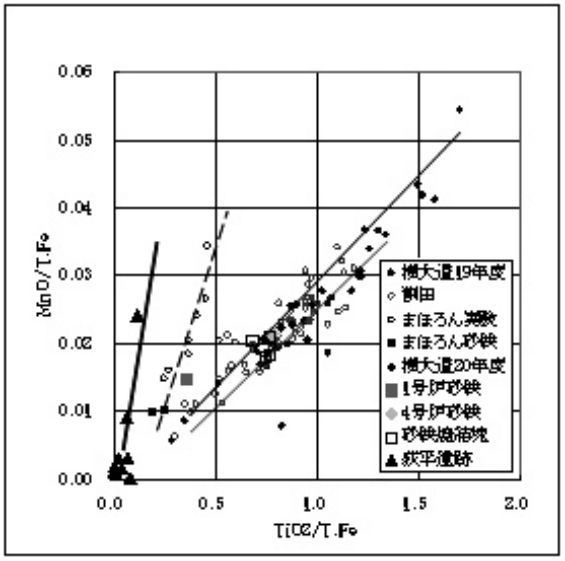


図７ 鉄滓におけるMnO/T.FeとTiO_2/T.Feの関係

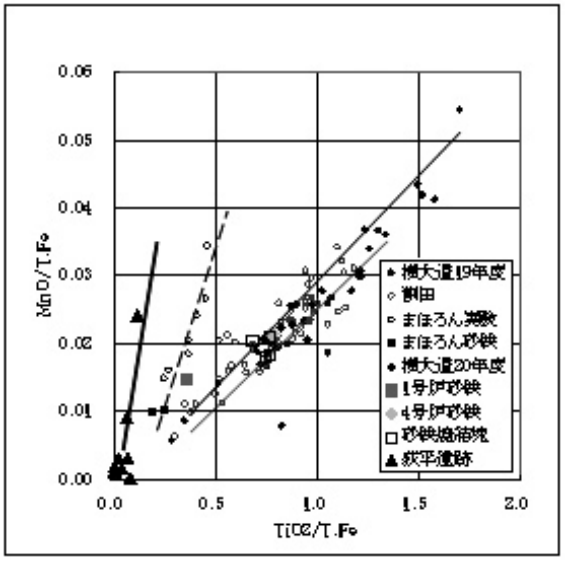
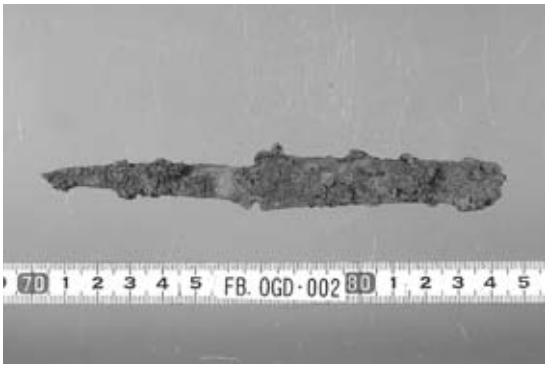
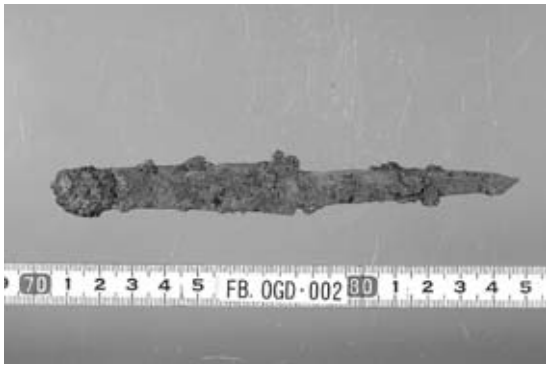


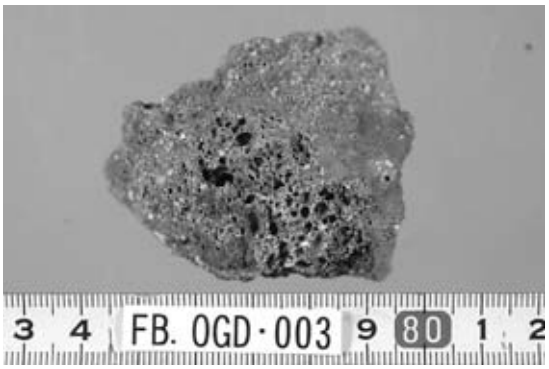
図８　鉄滓におけるV/T.FeとTiO_2/T.Feの関係

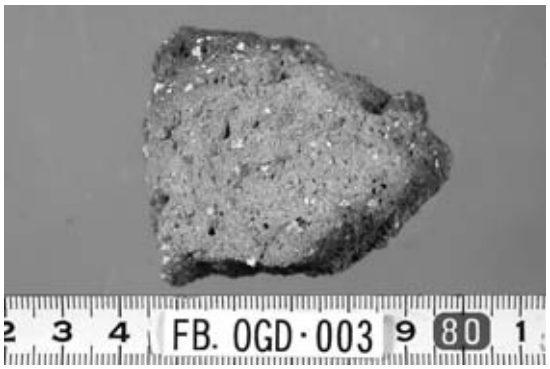
外観写真（FB.OGD.001）





外観写真（FB.OGD.002）

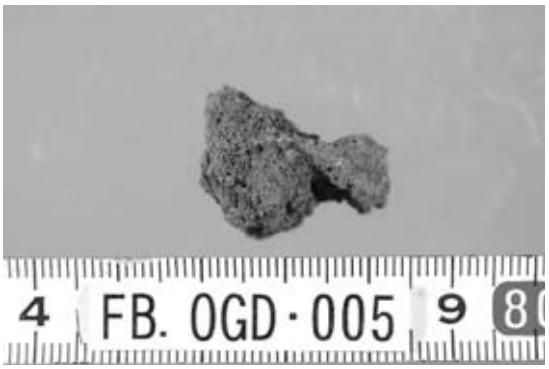




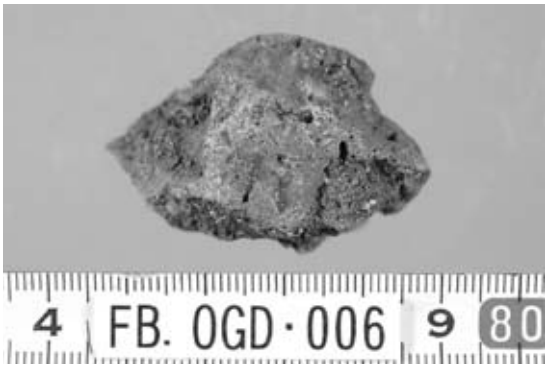
外観写真（FB.OGD.003）

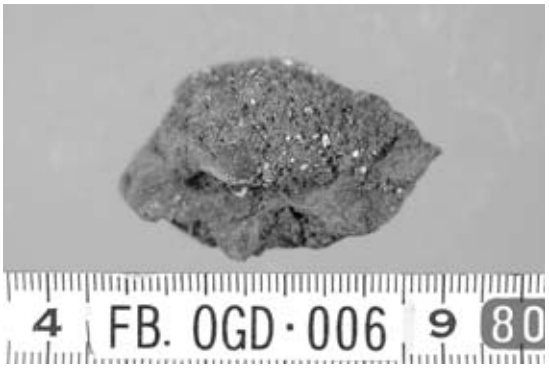
外観写真（FB.OGD.004）

写真１　外観写真１



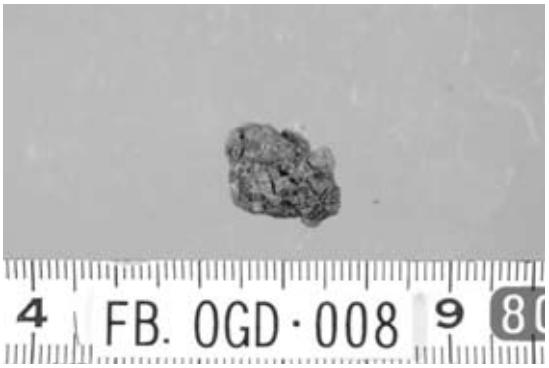
外観写真（FB.OGD.005）





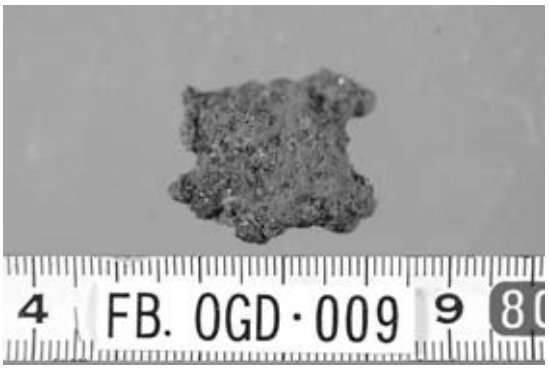
外観写真（FB.OGD.006）

外観写真（FB.OGD.007）

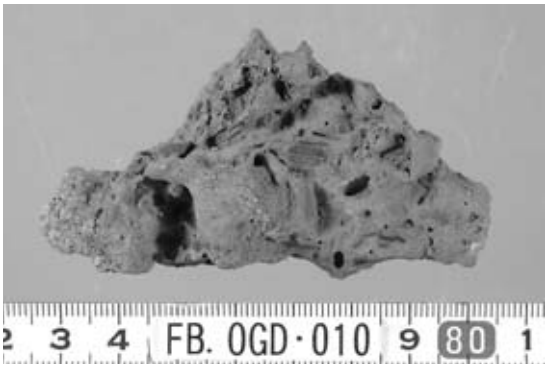


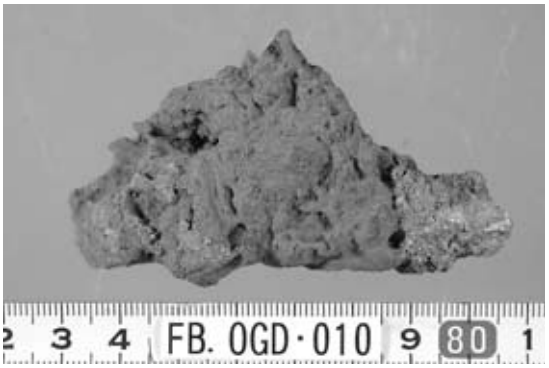
外観写真（FB.OGD.008）

写真２　外観写真２

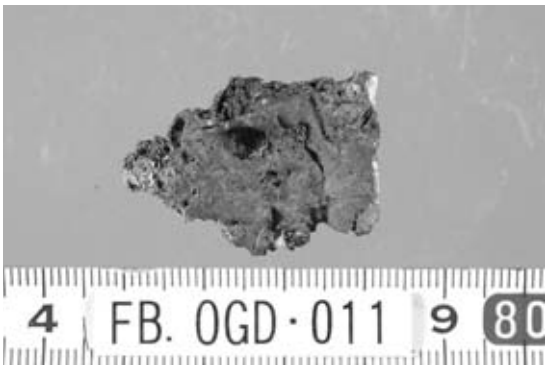


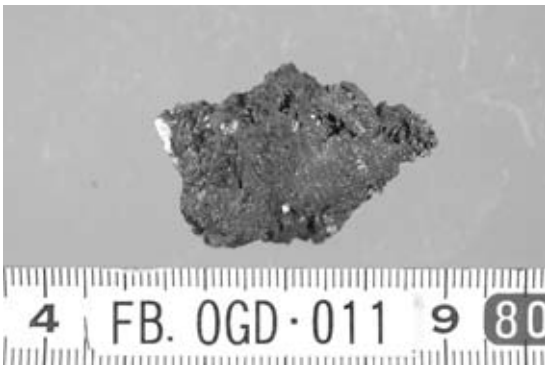
外観写真（FB.OGD.009）



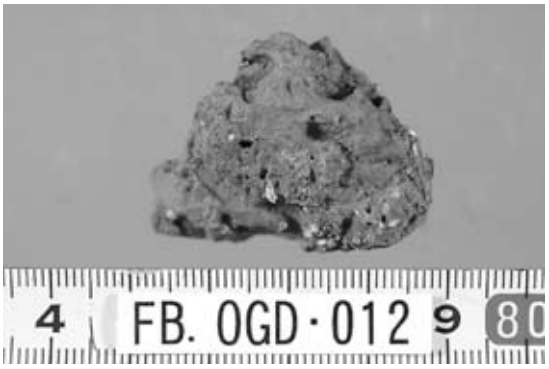


外観写真（FB.OGD.010）



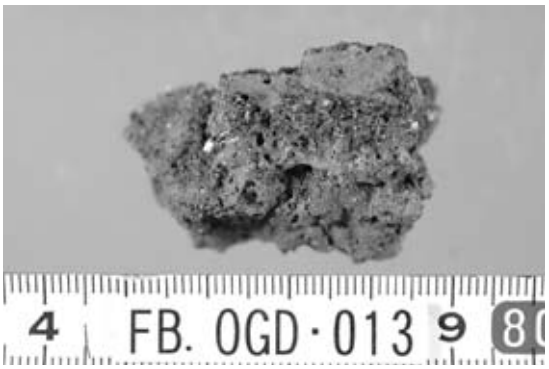


外観写真（FB.OGD.011）

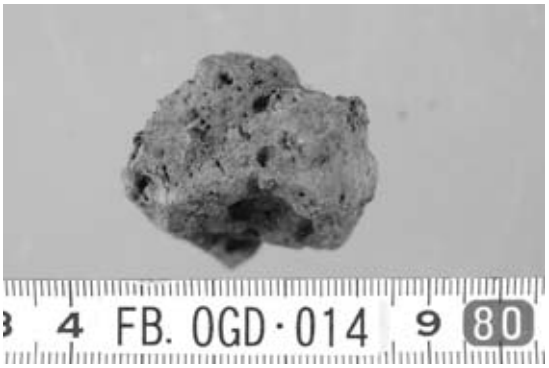


外観写真（FB.OGD.012）

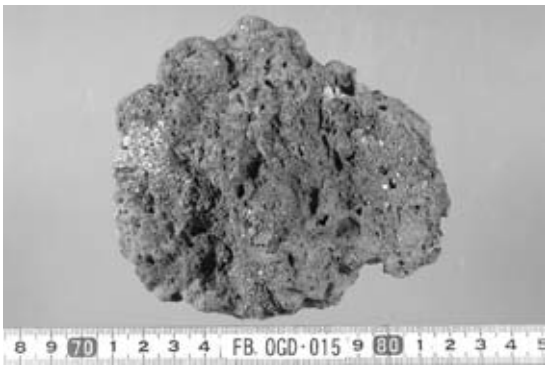
写真３　外観写真３



外観写真（FB.OGD.013）



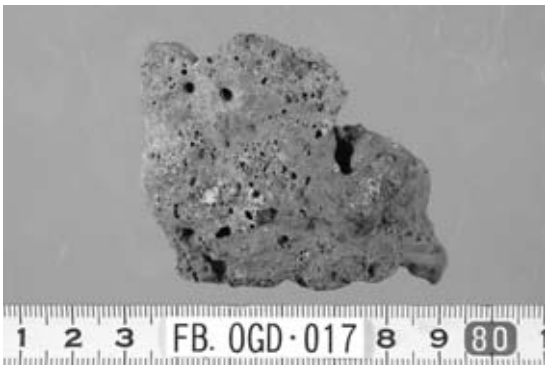
外観写真（FB.OGD.014）

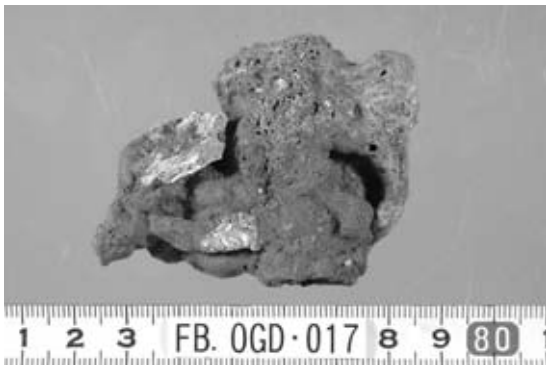


外観写真（FB.OGD.015）

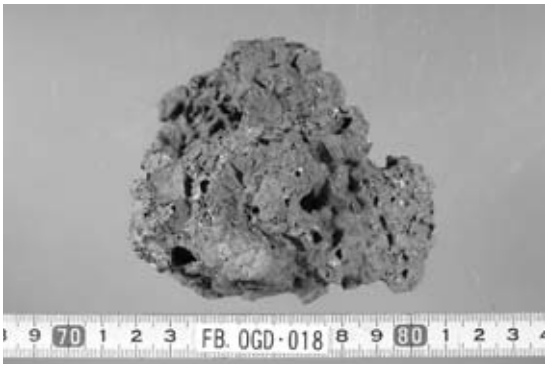
外観写真（FB.OGD.016）

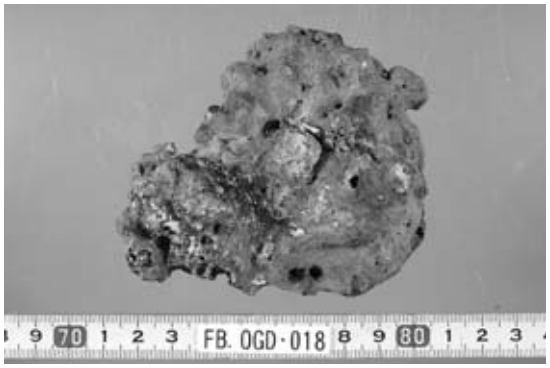
写真４　外観写真４





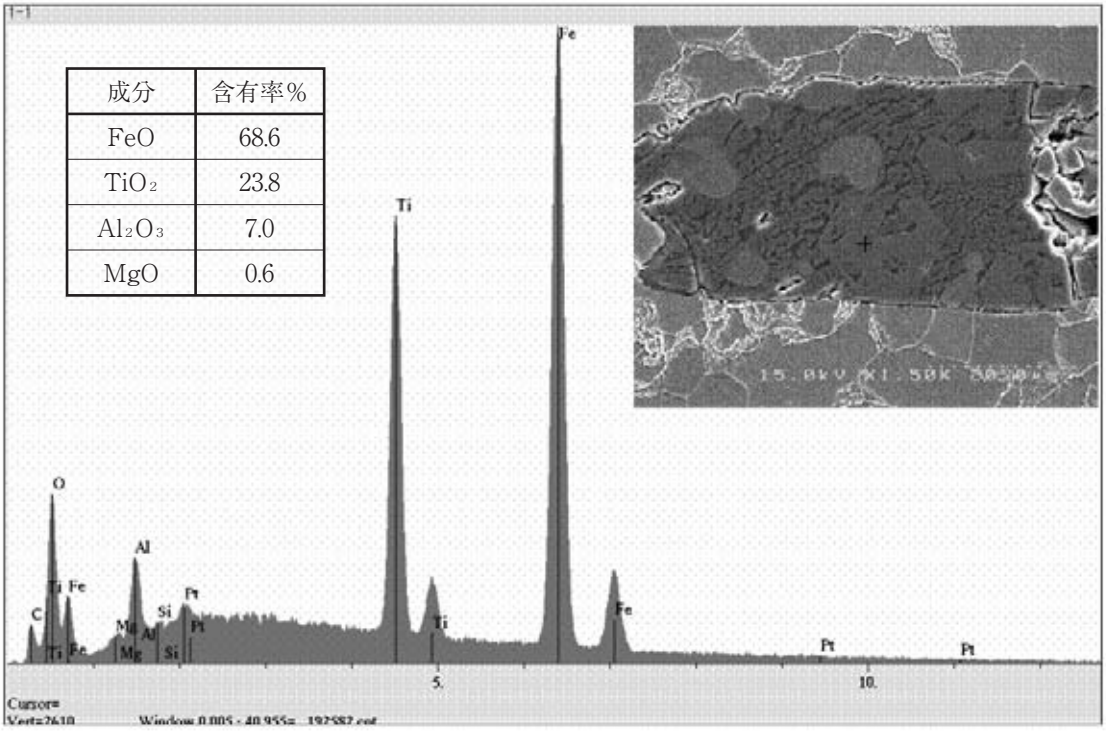
外観写真（FB.OGD.017）





外観写真（FB.OGD.018）

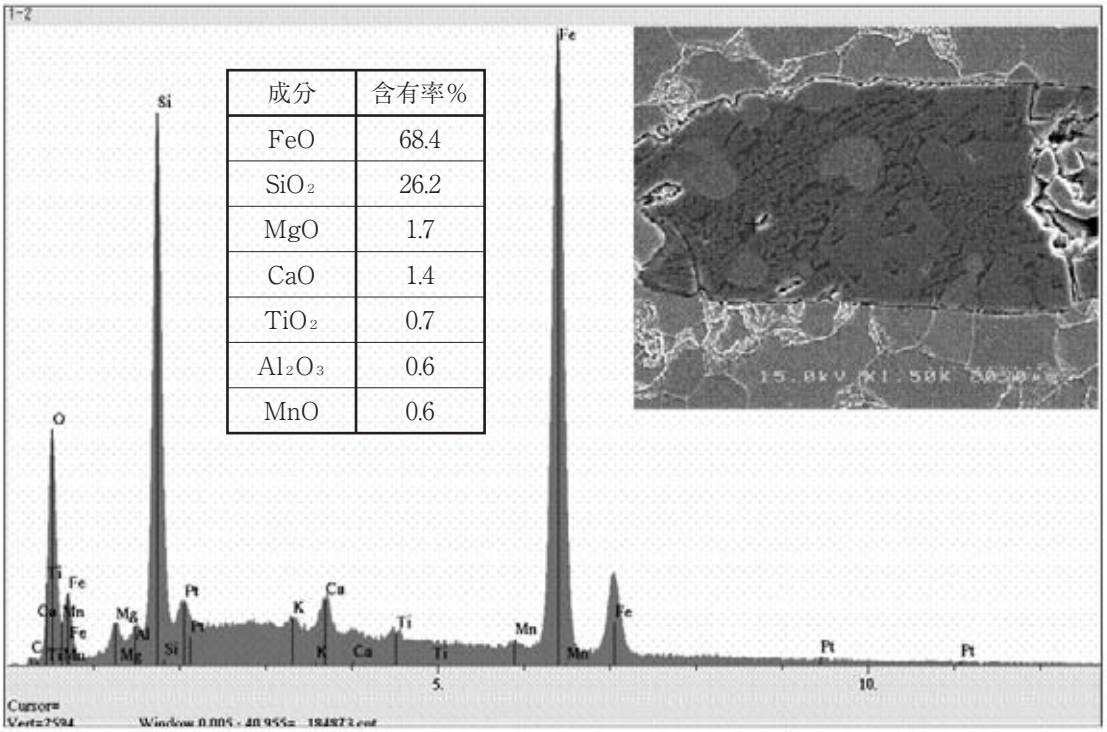
写真５　外観写真５



成分	含有率％
FeO	68.6
TiO_2	23.8
Al_2O_3	7.0
MgO	0.6

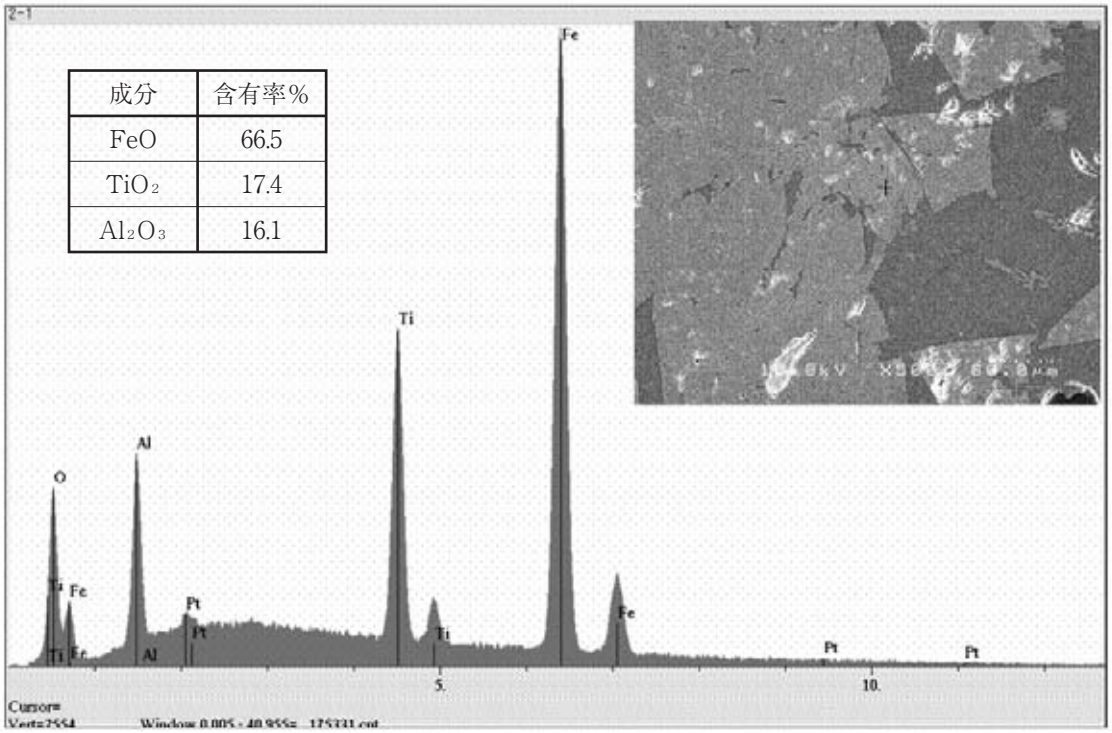
ポイント分析チャート１（FB.OGD.001－Ulvospinel）

図９　ポイント分析チャート図①



成分	含有率％
FeO	68.4
SiO_2	26.2
MgO	1.7
CaO	1.4
TiO_2	0.7
Al_2O_3	0.6
MnO	0.6

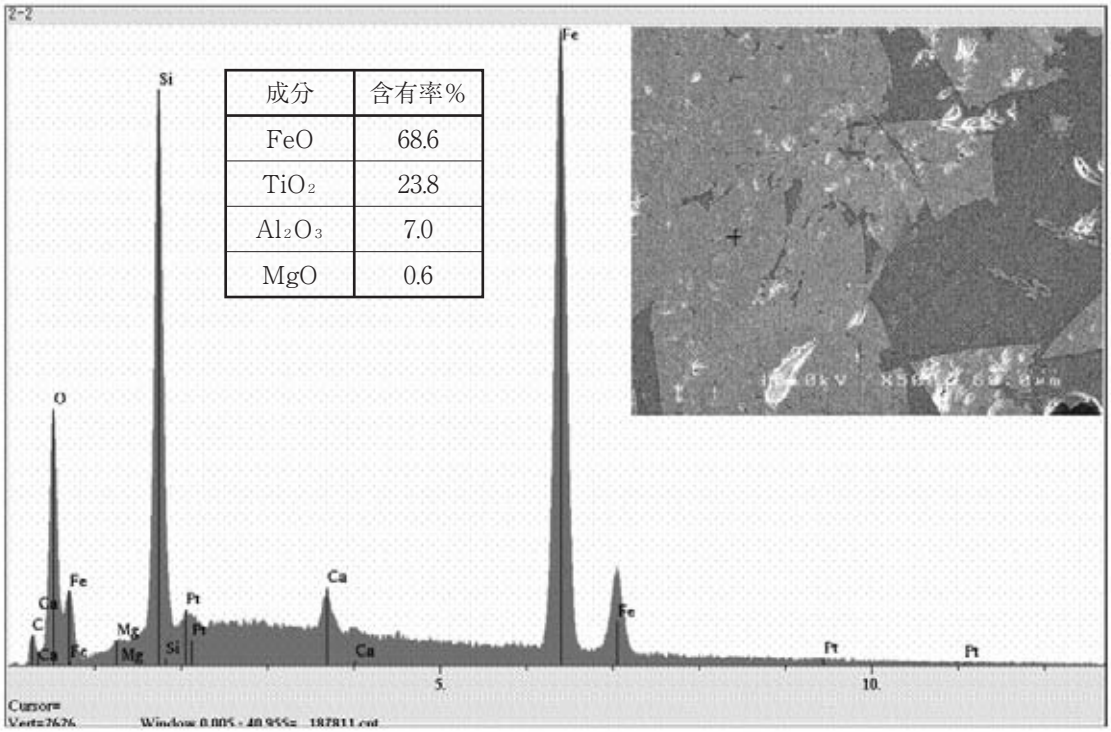
ポイント分析チャート２（FB.OGD.001ーFayalite）



成分	含有率％
FeO	66.5
TiO_2	17.4
Al_2O_3	16.1

ポイント分析チャート３（FB.OGD.002ーUlvospinel）

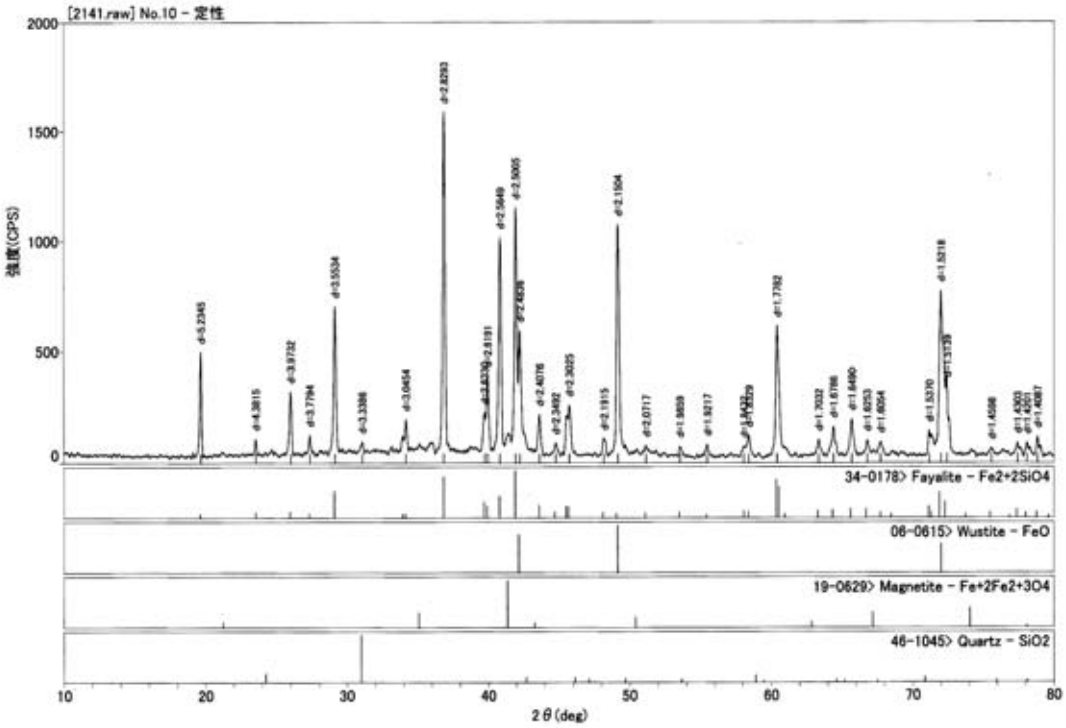
図10　ポイント分析チャート図②



成分	含有率％
FeO	68.6
TiO_2	23.8
Al_2O_3	7.0
MgO	0.6

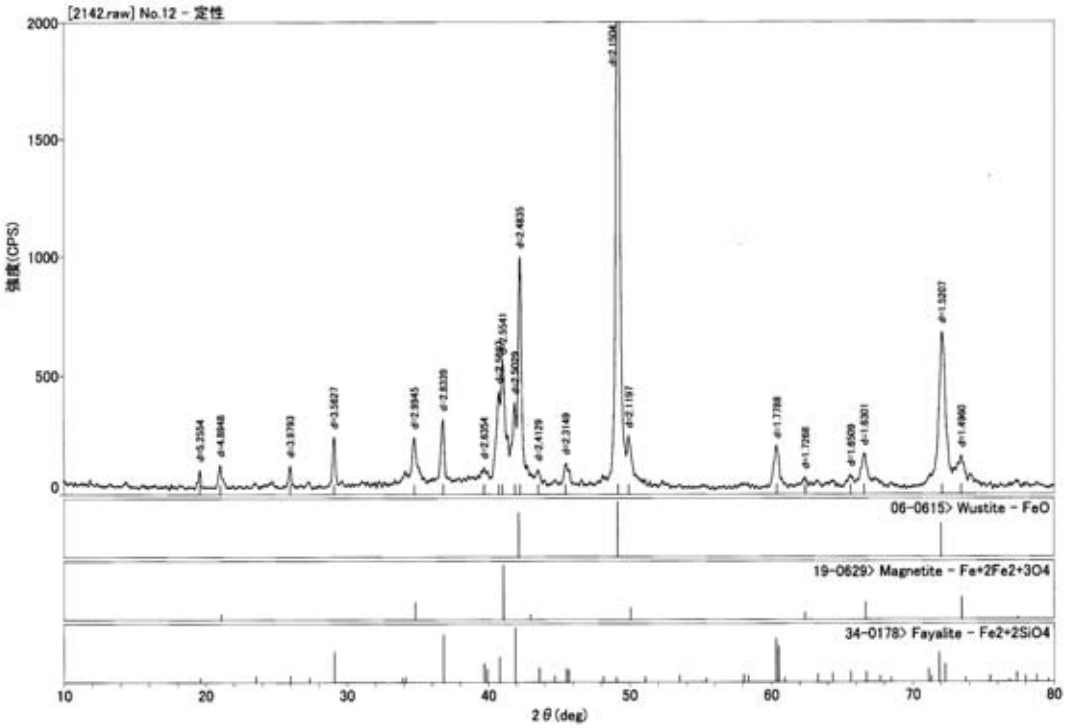
ポイント分析チャート４（FB.OGD.002ーFayalite）

図11　ポイント分析チャート図③

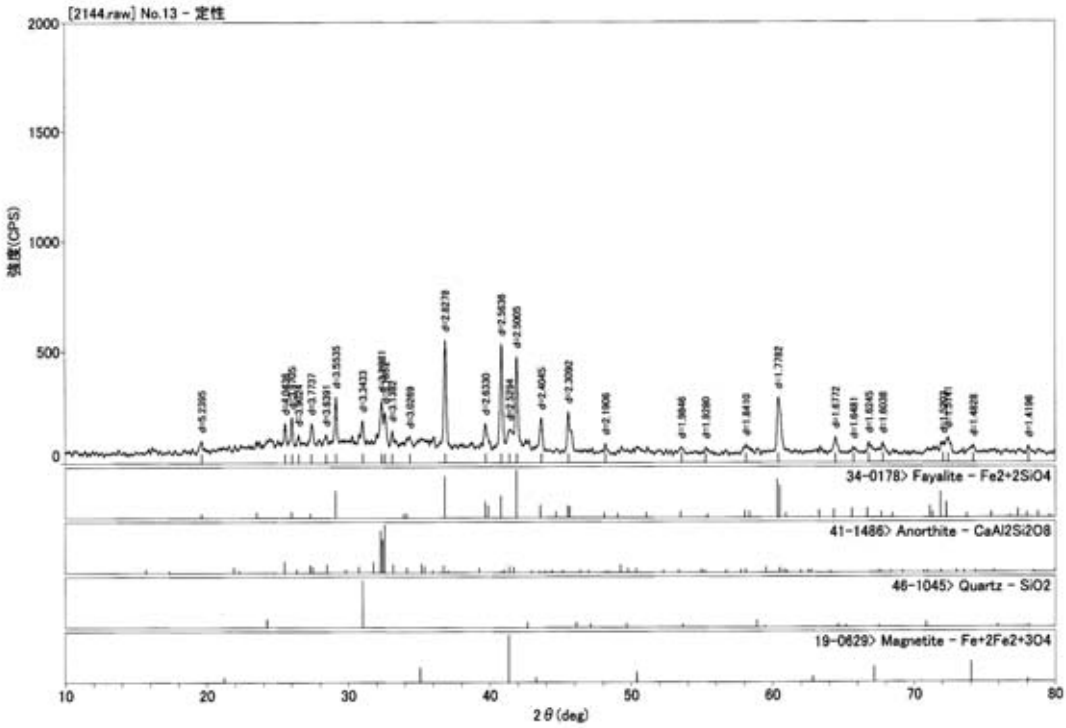


X線回折チャート１（EB.OGD.010）

図12　Ｘ線回析チャート図①

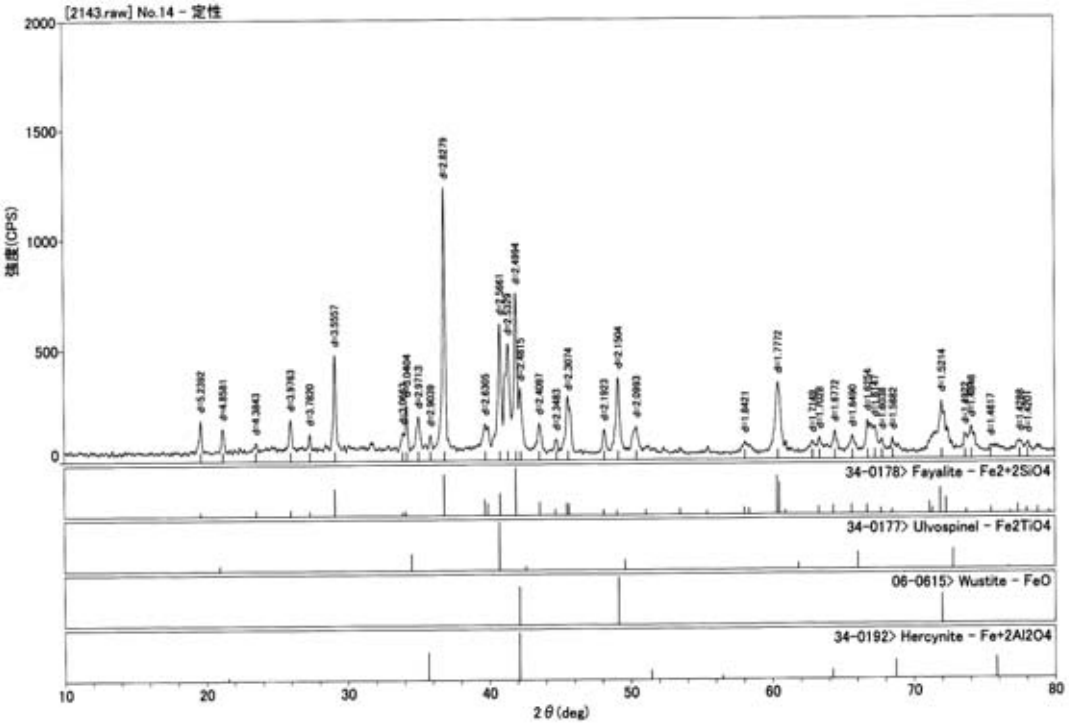


X線回折チャート２（EB.OGD.012）

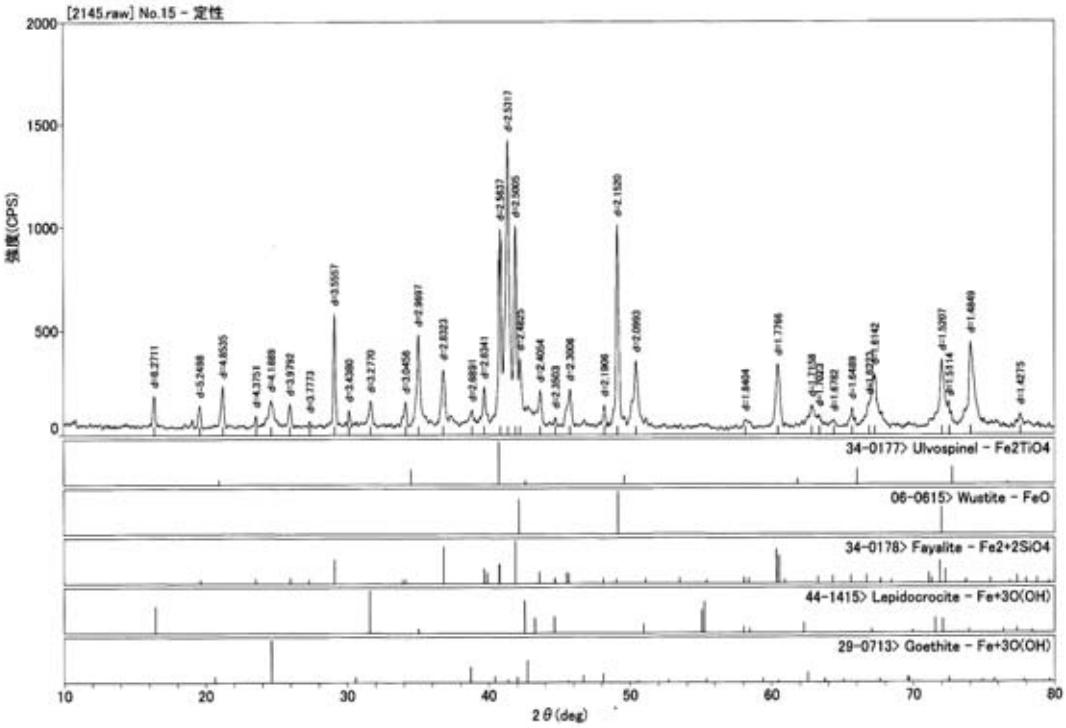


X線回折チャート３（EB.OGD.013）

図13　Ｘ線回析チャート図②

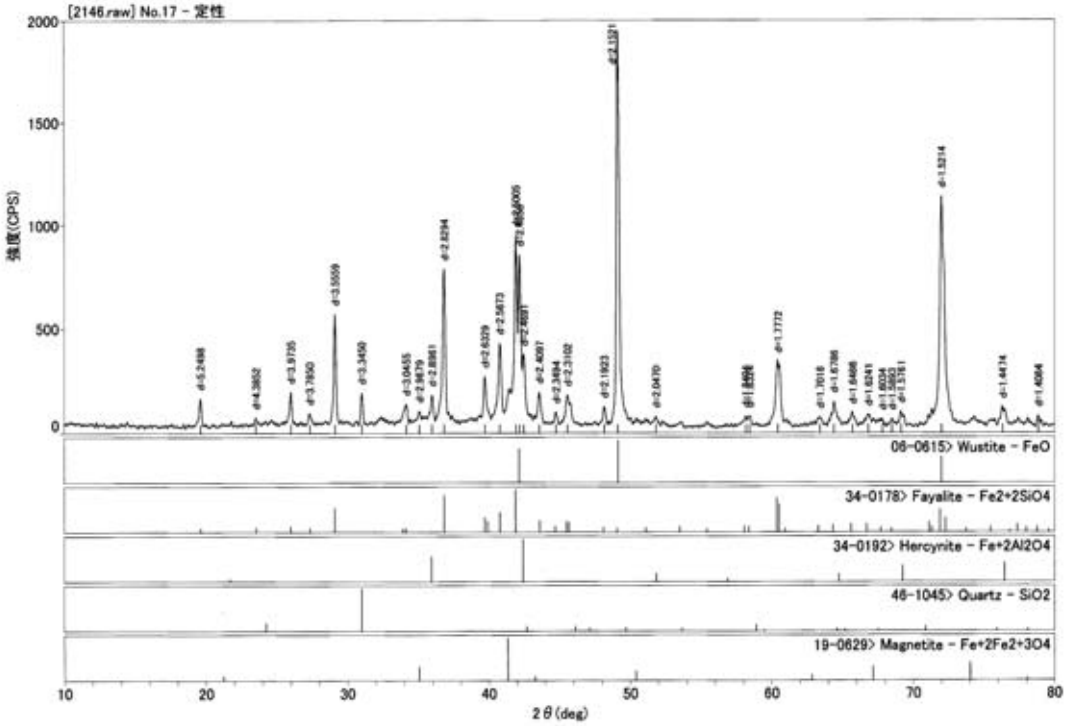


X線回折チャート４（EB.OGD.014）



X線回折チャート５（EB.OGD.015）

図14　Ｘ線回析チャート図③



X線回折チャート６（EB.OGD.017）

図15　Ｘ線回析チャート図④

報　告　書　抄　録

ふ り が な	あぶくまひがしどうろいせきはっくつちょうさほうこく２
書　　名	阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 463 集
編 著 者 名	香川　愼一　　宮田　安志　　福田　秀生　　稲村　圭一　　管野　和博　　大野　淳史　　小向　　良
編 集 機 関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8115　福島県福島市山下町１－25　TEL　024－534－2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL　024－521－1111
発行年月日	2009年11月30日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
荻　平（おぎだいら） （第２次）	福島県相馬市（ふくしまけんそうまし） 山上字荻平（やまかみあざおぎだいら）	209	00202	37°47′13″	140°47′31″	2008年４月７日 ～ 2009年２月６日	23,600㎡	道路（阿武隈東道路）建設に伴う事前調査
小豆畑（あずきばたけ）	福島県相馬市（ふくしまけんそうまし） 山上字小豆畑（やまかみあざあずきばたけ）	209	00203	37°12′1″	140°15′15″	2008年４月17日 ～ 2008年５月30日	800㎡	道路（阿武隈東道路）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主な遺物	特　記　事　項
荻　平（おぎだいら） （第２次）	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代	竪穴住居跡（41） 掘立柱建物跡（１） 土　　坑（54） 焼土遺構（16） ピ ッ ト（７）	縄文土器 石器・石製品 土 師 器 須 恵 器 鉄 製 品	調査区は西地区と東地区に分かれ，西地区は縄文時代早期末葉～前期中葉に属する竪穴住居跡が多数検出された。東地区では，縄文時代晩期，弥生時代，平安時代に属する竪穴住居跡が検出された。各時期ともに多くの遺物が出土した。
小豆畑（あずきばたけ）	生産遺跡	中世～ 近世	土　　坑（２） 溝　　跡（１）	縄文土器 土 師 器	遺構・遺物はともに稀薄であった。全体形が把握できた１号土坑は，堆積土中に多量の焼土・炭化物を含み，中世の大型木炭焼成土坑であることが明らかになった。

荻平遺跡要約

荻平遺跡は相馬市西部の山間部に所在し，宇多川上流域の河岸段丘上に位置する遺跡である。今回の２次調査では，大きく西地区と東地区に分かれて計23,600㎡の範囲について調査を実施した。調査の結果，西地区では縄文時代前期の大型竪穴住居跡が見つかり，小規模ながら集落が営まれていたことが確認された。東地区では平安時代を中心に豊富な鉄製品や，灰釉陶器などの出土が認められたほか，古代官人が着用していた腰帯の石製銙帯の出土が特筆される。石製銙帯の出土は当地域では初見であり，山間遺跡での出土という点でも貴重であり，当遺跡の性格を語るうえで非常に特筆されるものである。山間部集落におけるあり方の解明の一助となる貴重な事例である。

小豆畑遺跡要約

小豆遺跡は相馬市西部の山間部に所在し，宇多川流域の河岸段丘上に位置する遺跡である。遺跡の全域に当たる800㎡の範囲について調査を実施した。全体的に宅地造成のため削平が著しい。調査の結果，長方形状の大型土坑が見つかった。堆積土は炭化材を基調とする黒褐色土と，炭化物を多量に含む層からなり，焼土も多量に含まれる。こうした所見から，木炭を焼いた土坑で，天井部などの構築物はなく窯構造をとらない，半地下式の木炭焼成土坑と考えた。炭化材について放射性炭素の年代測定を行ったところ12世紀末～13世紀という年代が示されている。その例から勘案すると，中世の生産遺跡との関連が窺われる。

＊経緯度数値は世界測地系による

福島県文化財調査報告書第 463 集

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告２

荻平遺跡（第２次）
小豆畑遺跡

平成 21 年 11 月 30 日発行

編　集	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課	
発　行	福島県教育委員会	（〒960-8688）福島市杉妻町２－16
	財団法人福島県文化振興事業団	（〒960-8116）福島市春日町５－54
	国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所	（〒870-8026）いわき市平字五色町８－１
印　刷	陽光社印刷株式会社	（〒960-0112）福島市南矢野目字萩ノ目裏1-1